
魔法少女リリカルなのは 月村の魔女 ~ 転生者の宴 ~

久住祐治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 月村の魔女 ～転生者の宴～

【Nコード】

N1155N

【作者名】

久住祐治

【あらすじ】

注意！この作品は完全な不定期更新であり、作者の妄想の塊です！
！ガールズラブ、残虐な表現、二次創作がだめな方は、すぐさま戻るボタンをクリックしてください！
また、リボーンのカラが1人だけ出ますが、キャラとして出るだけで、中身は全くの別物です！リボーン要素皆無でキャラだけなので、リボーンの世界や知識などは全く出てきません！

あらすじ。

神様ミスって転生さ！というテンプレの星の元、転生した高校2年生の少女は、月村家の双子の姉妹、すずかの双子の姉として転生した！その能力と立場をフル活用し、恐るべき勢いで力をつけていく少女。【魔女】となった彼女は、果たして何を得るのか？

魔法少女リリカルなのは 月村の魔女、始まります。

プロローグ（前書き）

初めまして、もしくはこんにちは、こんばんは、おはようございます。

連載2本も3本も抱えてんのに何してんのこいつ？とか思った方もいらっしやるでしょうが、思いのたけを抑えきれませんでした。いや、ネギまももう少して終わりになるし、いっかなーと思って。ちなみに、これは作者の気分転換に書いている作品ですので、何度も申し上げますが不定期更新です。

それでも構わない方は、どうぞお進みください。

【魔女】の宴へようこそ……。

プロローグ

……Hello?なんで私ここにいんの?というか、

「ここはどこ!?!」

「お目覚めか、嬢ちゃん」

おおっ、なんかダンディーな声が。なんじゃ、どこにおるのだー!?

「ここだここ。嬢ちゃんの後ろ」

「あ、こつち。……スネエエエエク!?!」

「うるさい叫ぶな。それとお前は死んだ」

「エターナルフォーสบリザードの効果説明みたいにサラツと言わないで!?! てか死んだの!?! 私死んだの!?!」

くそう、まだなのはDVD集めきつてなかったのに……。

気になるあの子に想いを伝えてもいなかったのに!のにー!あ、気になるあの子て女の子ね?私も女の子。Girl。よく同性愛者きもいとか言う奴おるけどな?ああいうの死んだらええと思う。いや、死んだらうてのは言いすぎだけどさ。恋愛は個人の自由なんだし、私は女の子を好きになっただんじゃなくて、好きになったのが女の子だったの。まあ男にはときめかないんけどな!!

「脳内エキスが駄々漏れだぞ嬢ちゃん。それとまあ、正直すまんかった」

「えらく簡単に謝るね……」

「悪い事したら謝る。鉄則だぞ、嬢ちゃん」

意外といい人だ。

「で、私はこれからどうなの？」

「それなんだが、ちょっと転生して来い」

「……ぱーどうん？」

「それなんだが、ちよつと転生して来い」

「繰り返せつて言つてんじやないから！ どういうこと！？」

く、なんだかとても捉えづらい人だ。非常に相手にしづらい。

「俺は神で、お前をちよつとした手違いで殺してしまった。だからその償いのためにいくつか能力を持たせて転生させる。という設定だ」

「設定言つたよこの人！ まあいいけどさあ……。じゃ、一個やつてほしいことあるんだけど」

「なんだ？ 元いた世界を滅ぼせとか以外なら構わんぞ？」

「んな物騒な事頼みません。元の世界で私がいた形跡を全て消してほしいの。私が生まれたっていう記憶から、昨日使つた消しゴムまで全部。違和感が出ないように」

「……それで、いいのか？」

おっさん、スネークに聞かれる。

正直これはかなりつらいし、今も泣きそうだ。だけどね、私がいなくなつて誰かが悲しむなんていやなんだよ。それが私のエゴだとしても。

「……やつて」

「……わかつた。では、願いを3つまで書いてやるつ。それと、転生先の世界は決まってるからな」

「どい？」

「リリカルなの」「っしやああああー！」「お前、さっきまでのシリ

アスを完全にぶち壊したな……」

だってリリカルよ？なのはなのよ！？

いや、私はなのはは別にどうでもいいんだけど、すずかちゃんとかアリサちゃんとかその辺が美味しそ……、可愛くって！

「じゃ、3つの願いを言ってみる」

「うーん……、ちょっと考えさせて」

「わかった」

ということで、小一時間うんぐん唸ってようやく搾り出す。

「じゃあ1つ目。世界の全ての知識を吸収、実践できるようにして全部完璧にね」

「つまり、魔法も武術もということか」

「そゆこと。一々分けるより、統合しちゃったほうがいいでしょう？」

我ながら良く考えたと思う。だって、武術の才を最強にとか考えなくていいから。ただひたすら、貪欲に学んで実践し続けていればいいんだもの。

それを聞いて、スネークはにやりと笑う。

「ああ、構わない。では残り2つだ」

「2つ目は才能の限界をなくして。努力次第でどこまでも強くなれるように」

「わかった。最後の1つだ」

「……一度だけでいいわ。死者の蘇生の許可を頂戴」

これはアリシアのため。

最後の最後まであんな終わり方なんて、私は認めない。確かにフェイトはいいかもしれない。思いは残るだろうけど、吹っ切れているから。

だけどプレシアは？アリシアは？誰もプレシアの絶望をわかってほしい。ただ一方的にみて悪だと決め付けている。

ほんの少しでも、救おうとしたことなんてなかったから。フェイトは別だけれど。

アリシアもプレシアも、私は救いたいから。

「想いはわかった。たった一度、最後の1つをそれで潰すのだが、いいんだな？」

「いいわ。死者は本来蘇らない。それを覆して我儆言うんだし、むしろラッキーでしょう？」

「わかった。ならばそのときは願え。心の底から」

軽く頷き、私は一度だけ瞬きをする。

しかしま、死んだかあ……。

「…次の人生、楽しみましょうか」

「汝の次なる生に幸あれ」

その声と共に、私の意識は落ちていった。

「お前さんの見立ては正しかったみたいだな、アリス？」
「みたいねー。とうかなんでスネーク？」
「下界で見たときにはまってな。アレは漢だったぞ」
「へーへー。まあ、あの子もいずれ私達と同列の存在になる。歓迎の準備をしておきましょうか」
「やれやれ、いつになることやら」
「葉巻禁「冗談だ、ボス」よろしい」

「おめでとつございます、双子の女の子ですよ！」
「よかった……」

病院の中、2つの産声が上がる。
それを見た女性は、ほっと息を吐いてから笑いかけ、口を開いた。

「そうね……、あなたがすずか。そしてあなたが栞しおね」
「もう決めたんですか？ お子さんの名前」
「ええ。ずっと考えていたから……」

こうして転生者は、晴れて月村栞としての生を受けた。体に若干の障害のようなものを残して、だが。

プロローグ（後書き）

以上、プロローグでした。

これからよろしくお願い致します。

1話 転生者 月村栞

「すずかー、早くおいで！」

「待ってよ栞ー！」

きゃっきゃきゃっきゃと館の中を走る私達。

皆様おわかりでしょうか、私。月村家に生まれてしまいました。

しかも生まれて2、3日ぐらいには意識がはつきりしておりまして、正直女とわかっていても恥ずかしかったです。オムツとか。

で、私はすずかと一卵性双生児になっているらしいし、ついでに言うとな夜の一族設定もバリバリです。

確か原作だと異性の血液じゃないといけないはずなんですけど……。

「すずか、血いー」

「私も頂戴？」

「はい」

お互いの二の腕に噛み付く始末。

ええ、私とすずかは揃いも揃って突然変異種となりました。どうもね、私はすずかの、すずかは私の血液じゃないと受け付けないみたい。い。

しかもめっちゃくちゃ美味しく感じるから困る。血を飲んで酔うとか。最初に忍姉さんが気づいたときには大層驚いてたけどね。まあ私も離れたくないし、別にいいかな。なによりお婆ちゃんにならないじやん!?

「「ぷはあー」」

「2人して年寄りみたいな声上げないの。ホラ、ご飯よ？」

「はい」

「じはんー」

ぱすん、と忍姉さんに軽くハリセンではたかれた私達は、テクテクと忍姉さんの後を歩いていく。

ノエルとファリンもいるし、普通に猫屋敷。ま、猫は嫌いじゃないからいいけどね。黒猫とか大好き。

「いただきます」

「「いただきますーす！」」

忍姉さんに続いて元気よく挨拶し、すずかはゆっくりと、私は掻きこむようにご飯を食べていく。

生まれてから5年、来年にはもう小学校へ入学と、そんな時期になつてしまった。

はやいにゃー……。

「菜、ご飯粒ついてる」

「ん、あんがとー」

ほつぺたについてたご飯粒をすずかがとって、そのまま口にin。最初は顔真っ赤にしてたけど、最近じゃ当たり前になつてるから困る。

5歳が何言つてんだって思うけど、私すずかのこと好きだよね……。姉妹愛かもしれないし、家族愛かもしれない。だけど、確かに愛があるんだ。それはわかる。

食事を終えた後、私はすずかと一緒に戦闘訓練。すずかは体力作りだけど、私は本格的な格闘戦。

すずかの担当はファリンだけど、私の担当はノエルがやってくれてる。いや、強い強い。

「脇が甘い！ 隙を小さく！」
「ハイッ！！！」

くそう、普通に瞬動とか使わないでよう。まだ気だつて少ししか使えないんだぞ？

とはいえこの夜の一族の体は強い。検査したらリンカーコアもあつたし、魔力も溢れてる。体力もあるから、気だつて豊富だ。

「疾ッ！！！」

「つぶな！ このっ！」

「そこです！」

一気に距離を詰めてきたかと思つたら、目の前ギリギリまで手刀を突き出してきたからそれをマトリックス張りに回避、そのまま腕を絡めとろうとしたけど避けられて反撃される。

ノエル、戦闘になると人変わるなあ……。まあ楽しいからいいんだけど。

反撃を防いだ次の瞬間壁に叩きつけられ、激痛。この程度じゃくたばらないよ？

「オオオオオオオッ！！！」

距離を詰めて一撃。まっこと5歳の少女らしからぬ雄たけびと共に放った右腕は、綺麗にノエルに止められていた。

くそー、結構いい一撃だと思つただけだな。この体だと体重が乗らん……。

「はい、模擬戦終了。中々筋がいいですね。これでは、来年当たり追い抜かれてしまいそうです」

「じゃあ半年以内に抜いてみせる！」

「ふふ、楽しみにしていますね、栞お嬢様」

そんなことを話しつつ、ノエルに肩車してもらいながらファリンとすずかの元へ。

疲れたからであって、別にノエルがお母さんっぽいとかは思っ
てないぞ？母様は外国行ってるっぽいし。

父様？わからん。あの人どこで何やってんのか…。時々手紙が来て
いるから、生きてはいるみたいだけど。

ぼんやり考えながら庭に出ると、大きく息を吐きながらもランニン
グするすずかとファリンの姿が。

「ファリン、すずかお嬢様。こちらは終わりましたよ」

「あ、はい！じゃあ終わりにしましょうか、すずかちゃん」

「うん」

軽いキントレまがいなものが終わり、私達4人でバスルームへ。

存外ここは広いため、4人程度何の問題もない。まだあと数人はい
るぜ！ほんと、お金持ちって得だよな。

まあなんでこんな訓練してるのかって言うとね、誘拐とかされたと
きに返り討ちに出来るように。

仮にもバケモノなんで、力の扱い方も学ばないといけないしね。で
も悲しくはないよ？むしろ嬉しいでしょ。好きな人とられる時間
が長いんだから。

「ふー……、きもちい〜……」

「栞、疲れた……」

「お2人ともまだ5歳児ですからね。むしろ私相手にあそこまで拮
抗できる栞様の方がおかしいんですよ？」

「あっはっは〜……、まあそのぐらいできないとね」

「ずかを守れないじゃん、と言外に付け足すと、ノエルは普段では見られないようなやわらかい笑みを浮かべる。

家族にだけ向けてくれる、温かい笑顔。ああ、やっぱりこの人はお母さんみたいなものなんだな……。

忍姉さんは、ああ見えてちよつと抜けているところもあって。まあファリンほどじゃないんだけどね？

「ずかと私のどっちがお姉ちゃんかって言うと、まあ私かなあ？ずかはどこかぼわわつとしてるし。」

「気持ちいいですか？ずかちゃん」

「うん、気持ちいい」

向こうではファリンにわしゃわしゃと頭を洗ってもらっているずか。

「なんというセレブリティ。ああ、どっちかっていうとずかには本読める方が好きらしいんだけどね。」

「私も情報がいっぱい『食べられる』から読書は好きかな。神話系とかは反則的な力が作れたりするし。」

「あとは……、魔導書かな？あれはとつても『美味しい』から。」

「ああそうだ。栞様がおっしゃっていた魔導書、何冊か手に入りましたからお部屋の方に置いておきました。後でご確認ください」

「ありがとう。最近はある『食べて』なかったから、ちよつとお腹すいてたんだ」

「それは何よりです。いつか見てみたいものですね、お嬢様の空腹を満たす『知識』を」

「うん、見てみたいなあ……。きつと美味しいんだろなあ……。」

「会話からお察しの通り、私には食欲とは別にもう1つの『食欲』がある。俗に知識欲とか呼ばれるものがそれだ。」

私の最初の能力、名づけるなら『あらゆる物を知り、それを使いこなす力』とでも言っておく。その副作用のようなもので、私は知識欲が食欲のように『お腹が減る』ようになってしまった。

最初の頃は児童書とかで事足りていたんだけど、今ではそれなりの魔力を持つ魔導書とかでないとい満腹にならない。

けれど、私はなぜか『確信』していた。この世のどこかに、私の知識欲を満たす物があるはずだと。

「最後に『お食事』なされたのはいつでしたか？」

「大体一週間くらい前かな。少しは持つようになったかな」

昔はずっと知識を得続けないと空腹が襲ってきたけど、最近では頻度がかかり減ってきている。

空腹を満たさなくても持つようになったのはいいんだけど、やっぱり空腹を満たす知識はほしいなあ……。

「っと、茹だたないうちに上がりましょ」

「そうですね」

「はい！」

ファリンは元気だなあ……。

さて、じゃあバスローブ姿だけど自室に行きますか。

「『ネクロノミコン』に『水神クタート』……、ふふ、『美味しそ
う』……」

自室に戻って一目散に机にかじりつき、私はすぐさまその中の一冊
を開ける。

まさかクトゥルフ神話の魔導書の原典が手に入るとは思っても見な
かったけれど……、きつと今の私は5歳児には見えない雰囲気だろ
う。

それだけこの魔導書たちが魅力的で美味しそうなんだもの、仕方な
いわよね？

「すずか、いいというまで話しかけないでね？」

「うん。栞、こっちは読んでいい？」

「いいよ。じゃ、『頂きます』」

さて、今日の『ご馳走』はどんな味がするのかな？

1話 転生者 月村栞（後書き）

ついでに第1話も投稿。

愛が進りました。すずか可愛いよね。

2話 誘拐されてみる(前書き)

とりあえず連投。

2話 誘拐されてみる

ハロー、栞です。

時間は大分すつ飛んで、今は小学3年生！

最近誘拐される回数が多くなってるとは……。まあ小さい頃からすずかにも戦闘技術を仕込んでおいて正解でした。

大体血祭りに挙げて帰ってくるからね！携帯持ってて良かった。さすがに血濡れの小学生なんて見たくねーぜ。

でも血に濡れたすずかも可愛い……。

「栞、今変なこと考えたでしょ」

「別に考えてないよう。あ、アリサおはー」

「はよー栞、すずか」

えー、あのイベント、すずかとアリサの喧嘩イベントなかったです。はい。

正確にはあつたけどなのはの出番がなかったと。

カチューシャは私が誕生日プレゼントにあげただけど、盗られた時のすずかはこわかたよー？

いきなり地面に足の裏バンツ！！と叩きつけて、一言。

「返して？」

って言ったただけなんだけど。その返して、がめちゃくちや怖かった……。

ちよつとちびるかと思ったもん！あ、ちびってないよ？そう思っただけ！

で、それにアリサちゃんも反抗してね？結局私が仲裁に入って友達になった。なのは、フラグ折ってゴメン。

あ、私は誕生日に十字架入りの小さな金属製の髪留めもらったよ！
おろしてるとすずかで見分けつかないから、ポニーテールにして髪
留め使ってる。

「あ、アリサちゃん、すずかちゃん、栞ちゃん！ おはよう！」

「なのは！ おはよー」

「おはよう、なのはちゃん」

「おはよ、なのは」

まあ、いつの間にかなのはも友人になってたんですけどね？

このときほど修正力のことを信じようとしたときはなかったなあ…。
いや、実際にあるんだらうけどさ。

最近空腹になることもなくなってきたけど、やっぱり芯の部分が
なあ……。

「栞、またお腹？」

「んー、多分。図書館でもいって来ようかな……」

「小学生の問題は栞にはつまらないわよね。私も栞と一緒に行くこ
うかしら」

あ、アリサとすずかには私の『知識欲』のことは教えてある。

だからすぐ気づいてくれるし、アリサとは話が合うのだ。なのはは
「え、なにになに？」みたいな顔してるけど。

最近じゃアザトースとも友達になったし、クトウルフの連中は面白
い奴らが多い。

「とはいえ、学校サボるわけにも行かないし、かといって学校で『
食べ』たら当てられたときとかまずいし……」

「一生文献に埋もれて生きていたい？」

「なぜわかつたし」

「双子なんだからわかるよ、っていうのは冗談。顔に出てるよ」

にっこりと笑いかけてくる我が妹を危うく抱きしめそうになる。私の中じゃこの子は妹のような感覚なんだよね。出てくるのは私のほづがほんの少し早かったらいいし。何分って差だけだな！
まあそんな感じで。

「ほら、バカやってないでとっとと行きましょうよ。遅れるわよ！」
「「「はーい」「」」

こんな風に、毎日が過ぎていっています。

……えー、ただいまの状況をご説明いたしますと。

「へっへっへ、月村のガキを2人ともとっ捕まえられるなんてなあ！」

「全くだぜ！ バケモノつつつてもガキだな！」

誘拐されました。

まあ別にやろうと思えば発狂死とかも出来るし、縄で拘束された程度じゃどうってことないけど。

「あんたら、目的はなに？」

「ああ？ 金だよ金。俺たちやクライアントに依頼を受けて手前らを誘拐して、金をもらったらおさらばだぜ。どうせ実験に使うんだろ？」

「ふーん。思ったよりつまらない理由だね」

「んだとガキい！！ 舐めた口きいてるとぶっ殺すぞ！！」

数は3人、サブマシンガン系の銃器が2人、アサルトライフル系が1人。

後血の臭いが少しするな……、それに女の子の臭い？ここに私達以外の誰かがいる。

とすれば、とつとこの場を切り抜けるか。

「んー、じゃあそこのおっさん」

「ああ！？」

「『死ね』」

真つ直ぐ目を見るために呼ぶと、案の定こっちにガンをくれた。

はつきり聞こえるようにそう言ってあげたら、心臓の鼓動が止まってしまうたように動かなくなり、そのまま仰向けにボタンと倒れる。やっぱり言霊は便利だ。こういう素人は霊装も概念兵装もしていないから障害される障壁もない。

このまま後2人も殺してしまいたいけど、1人は生かしておいてやる。少女の臭いについて何か知っているかも。

「お、おい！？ なに寝てんだよ？ ……おい？ おい！？」

「ふふ、無駄無駄。もうその人死んじやってるよ？」

焦ってる焦ってる。

バケモノを誘拐するのに低級の概念兵装すら持っていないなんて、考えられないなあ。

私からすれば楽ちんだからいいんだけどね？あはは、人殺しがこんなにつきりするものだとは。あ、無差別にはしないよ？こういう世界にとって害悪になりうる存在だけ。

「くそ、くそお！」

「うるさい。『動くな』」

「ぐっ！？ か、体がうごかねえ！？」

うーん、もうちょっと言葉で遊びたいけど、さすがが眠そうにしてるからとつとと終わらせよう。

あの子の平穩は私にとって何よりも最優先事項だ。

「『縄よ、解けよ』」

そう言うと、染み込んだ言霊によって私とすずかを縛っていた縄が解ける。

こっちにも霊装加工を施していないのか。つくづく【魔術師】を舐めてるなあ…。まあ、私は【魔術師】でもないし、魔術使ってるけど半分以上我流だし。

「『彼の者を絞め殺せ』」

すると男に縄がはいより、そのまま全身を千切れんばかりに束縛する。

瞬く間に体の末端が青くなっていった男を見て、不意に縄を緩めてみると。

「ぎっ、ぎゃあああああああああああ！！！」

血液が逆流して「あべしっ！」みたいな感じになった。

男の血は嫌い。女の子の血の方が綺麗で美味しいもの。

「ふーっ。すずか、もうちょっと待っててね。すぐ終わるから」

「う…ん……」

おおっ、既に半分夢の中ですよ？

これはいけない。とっとと終わらせてファリンに迎えに来てもらわねば。

「ちくしょお……！ この、バケモノが…！」

「そのバケモノに自分から関わったんだから、文句言わないでよ。それと、ここに私達のほかに女の子はいるの？」

「ああ、前に拉致った奴が1人いるよ…。どうせ一族から勘当されたバケモノなんだ、別にどうしようもないだろうが…！」

「そう、『永久に悶え苦しめ』」

さすがにいらつときたから、4重ぐらいに認識障害結界と遮音結界張ってから言霊をぶつける。

これでこいつは永遠に苦しむ事になる。正気を失うことも出来ず、老いで死ぬ事も出来ない。文字通り永遠の苦しみを味わいなさい。さて、と。それじゃあ臭いをたどって見ますか。

「ん……、こっちか」

すずかは亜空間からベッドを引きずり出してそこに寝かせてある。

faeのギル ゲート・オブ・パレロウ メッシュの宝具の情報があつたときは歓喜したね。王の財宝はチート常習犯だと思っんだ。

ただね、大半の人が倉庫にしか使っていないのはかわいそうに思えたよ。私もそういう扱いだけ。

「ん、普通の人間の血の臭いじゃないなあ……。けど私たちとも違うか」

私が今までかいた事のない臭いだ。新種族発見か？

なんて事を考えつつ階段を上り、臭いの元になっている一室へ。言い忘れてたけどここ廃ビルね。

そういう設定でよろしく。

「ッ……?! 青い髪……?」

「……だれ……?」

中にいたのは、青い髪を長く垂らし、黒い布を体に巻いただけの少女。どっかでこの子の顔見たことあるな……。多分前世でだ。

とするとアニメか何かで見たことある顔だな。ま、いいや。今はこの子を助けよう。

「私は月村栞。あなたは?」

「……名前、ない。この世界に来る前はU D - Bって呼ばれてた……」

この世界? ってことは、別の世界から逃げてきた?

名前からすると実験されてたとか、どこかの組織に所属していたって所か。

「あなた、この世界で身よりはあるの?」

「……ない。なんにも。ロードもない……」

ロード?

もし、かしてこの子……。

「ねえ、もしかしてあなたはユニゾンデバイス?」

「……この世界でどうしてそれを知っているの？」

ビンゴだ。とすると、U.D.ってのはユニゾンデバイスの略なのかね。どっちにしても、保護するとなると本格的に争いごとに関わる事になるけど……。

「ちょっと情報網があるんだ。……ねえ、うちにこない？」

「……迷惑かかる」

「大丈夫だよ。一緒に行こう？」

さすがに放っておきたくない。

そんな私の思いが通じたのか、差し伸べた私の手に彼女はそっと触れてくれる。

すぐに手を握り返すと、彼女はビクツと体を震わせたけど、安心してように力を込めて握り返してきた。

「……わかった。お姉ちゃん」

……やっべー。鼻血でそうです、私。

「はい、」丁寧に鼻血でそう、という感想のところまで語ってくれたのはありがたいけど……。そーいうことかぁ……。」

で、今は車で迎えに来てもらって自宅。
成り行き上忍姉さんには私のことを話すしかなかったから、全部話
してるんだけどね、5年前に。
だからあの子のこともわかってるみたいだけど。

「まあいいわ。1人増えたぐらいで傾くほどうちはやわじゃないし
ね。未知のテクノロジーにも興味があるわ」

「わーい！ ありがとう忍姉さん！」

よし、オツケー約束取り付けたー！

これで魔法の『知識』も『食べ』られるから空腹になるってことは
ないだろうし、いざというときの引き出しが増えた。

「忍…、お姉ちゃん？」

「……栞、意外と破壊力あるわね……」

「でしょ？」

こてん？ と首をかしげる少女。

くそう、かわいいなあ……、つと。

「そういえば、名前決めないと」

「そうね……。栞、あなたが拾ったんだから、自分で付けなさいよ
？」

「はい」

うーん、どんな感じがいいだろう。

……ああ、そうだ！ この子が誰に似てるのかやっとなかった！

「ブルーベルは？」

「ブルー、ベル？」

「そう。月村ブルーベル！ ちょっと語呂は悪いけどね」

そう、前の世界でジャンプで連載してたりボーンリッの登場キャラ、真リア6弔花ルミの1人、ブルーベルにそっくりなんだ。

ちなみに、私にリボーンボックスの知識は殆どない。テレビでやってた分ぐらいはわかるけど。匣兵器ボックスも一応わかるし。

しかしあのネーミングは難しくてようわからん！ ブルーベルだけ可愛いから覚えてたけど。てかりボーンキャラの中で一番可愛いな
いですか？

こつちの世界にリボーンボックスはないらしくて、匣兵器の知識も得られてないから造れないんだけど。

ともかく、この子はブルーベルということで決定！

「…ありがとう、お姉ちゃん」

まだ感情は薄いけど、きつとすぐに治るよ。

私の妹だからね！ すぐかの妹になるのか…？ まあいいや、これからいろいろ考えないと！

そんな事を考えつつ、私の今日は終わっていった。

2話 誘拐されてみる（後書き）

次回、本格的に【魔女】が動く。

3話 【魔女】の宴（前書き）

連投してるけど、これはストックを投げ入れているだけなので更新は不定期です。

3話 【魔女】の宴

「怖い夢みたあ〜！」

……すずか？ あなたもう3年生でしょう。まあすずか離れできていない私もアレだけど。

そしてブルーベル。ご馳走様です。とりあえず泣きついてきた2人をベッドに招き入れてよしよしと背中を叩いてやる。全く……。

「どんな夢見たの？」

「あの、あのね？ お、おね、お姉ちゃんが、い、いなくなっちゃう、ひぐつ、ゆ、夢……、えっぐ……」

「わ、私も一緒……」

嗚咽しながら言うブルーベルと、涙をぼろぼろ流しながら同意するすずか。

ああもう、こんなに顔くしゃくしゃにして……。

「私はどこにも行かないから。ほら、今日は一緒に寝よう？」

「……うん」「」

こくりと頷き、もぞもぞと入ってくる2人。

あー、私も大分依存度が高くなってなあ……、気をつけよう。どこかでネギまの別荘みたいな物を見つけれれば、いくらでも修行できるんだけど。

ま、そのことは後で考えようか。今はこの2人の温もりを堪能しよう。

で、朝。

「暑い……」
「ん……」

私の呻く声で、自分で目が覚める。

右にブルーベル、左にすずかががっちりと抱きつかれているこの状況では、非常に暑い。

「はい、おきなさ、いっとー!」

「にゃふ!？」

「きゃ!」

ぐいっと腕を引き抜き、ごろごろと転がす。

ベッドはかなり広いから、早々落ちることはない。

「はいはい、起きた起きた! 日曜日だからってのんびりしない!」

「ふみゅ……、はね、お姉ひゃん……?」

舌足らずなブルーベルナイス。めっちゃ可愛いです。

とりあえずネグリジェの上に黒いローブを羽織って2人を起こす事に。

この黒いローブはお気に入りに。エロいでしょ?

「あほな妄想を繰り広げてないではやく起きなさいよ?」ご飯できてから「

「はい」

最近わかってきたけど、私はどうしても子供らしい振る舞いはできないらしい。……夜の一族の血と、転生者という立場のダブルブツキングが効いているのかね。

まあこの5、6年でずいぶん知り合いも増えたのだけれど。忍姉さんにも協力してもらってね？

「「「いただきます」「」」

今日は洋食か……。

っと、そういえばあれがあったっけ。行っておかないとね。

数時間後、私はとある孤島へ出向いていた。

孤島といってもちよつと離れた無人島というだけで、ここは誰の所有地というわけでもない。

自然が多く、人工物を建造するのが憚はばられる、ほんの少しオカルテイックな場所なだけだ。

その港へ到着した私の前には、1人の老齡の男性がいた。

名は知らない。知る由もないし、知る意味もない。知ろつとも思わない。

「お待ちしておりました、【奇学きかくの魔女】、月村栞様」

「お出迎えご苦労様。皆もう集まっているの？」

「道楽様がまだでございます」

本名を道楽秋水どうらくしゅうすい。24の男で、【魔女】の中では比較的軽い男だ。

嫌いではないけれど、あいつと話すのは疲れる。

ここはとつとと屋敷へ出向くのがいいだろうと考え、奥の車に乗り込んで屋敷へと向かう事にした。
ちなみに、ここにすずかやブルーベルは連れてきていない。ブルーベルはあと2年も経てば連れてこれるけど、すずかはまだまだ人間の残酷な面を知り、夜の一族の本能を律し支配しなければいけないから。

「はぁーい、栞ちゃん」

「こんにちは、【悲哀の魔女】」

車を降りたところで頭上から声がした。

ぱつと上を仰ぐと、逆さまになっているのにスカートがめくれている女性があった。

金髪に碧眼。背の高さは160センチ前後。

「呼ぶなら【魔名】じゃなくて本名で言ってよ、本名で！」

「はぁ……。こんにちは、ユリアレイ・トールス」

「フルネーム……。まあいいわ」

そのままグルンと半回転し着地。

そもそも人の頭上で何をしていたのかと問いたくなかったが、面倒なので却下。

ユリアと共に屋敷に入ると、一気に蠟燭で邸内がライトアップされる。

「ようこそ、【奇学の魔女】よ。魔女の集いによようこそ」

「【愉快の魔女】がまだ集まってないんでしょう？ 【獄熱】」

「そのようですね。しかし、また一段とお美しくなられましたな、栞嬢」

「ありがとう、ベンデル」

立ち上がってワイングラスを掲げた男性、ベンデル・マリステンに
そう一礼する。

ベンデルの【魔名】は【獄熱の魔女】。その名の通りあらゆる炎を
統べる【魔女】。ここでいう【魔女】は【魔術師】に置き換えても
らっても構わない。

あるいは【魔法使い】か。そもそも【魔女】は【魔法使い】の別称
として生まれたようなものなので、それでも合っているかもしれない
けれど。

年老いているというのに色あせない灰色の髪。1から10まで紳士
に揃えてみたという風な出で立ちの男だ。

「他の皆は？」

「【氷像】と【綾渦】は2階で休んでいますよ。【歪曲】と【終極】
は食堂で昼食をとっていましたぞ」

「お昼を取ってなかったのね…」

「【侮蔑】と【天秤】は厨房にいるようですが」

「まあいいわ、じゃあ、私も【愉快】がくるまでつまめるものを探
してくる」

「では、到着の折は霊脈を通してお知らせします」

「助かるわ、ベンデル」

「いえいえ」

それぞれの魔女の居場所を聞き、私も2人に混じってつまみを探す
べく歩き出す。

…なぜついてくるんですか、ユリ。

「いーじゃんいーじゃん。私もお腹すいたのよ」

「はいはい。はいるわよ」

「やあ、久しぶりだね榊ちゃん」

「本当に久しぶりね、栞。また大きくなった？」

「長命種が早々大きくなるもんですか。ワインある？」

「ずかずかと厨房に入っていくと、軽く挨拶してからワインセラーを開ける。」

中には『飲むな』と書かれた紙の張られたワインが数本と、『こっちは大丈夫』と書かれたワインが2本入っていた。

「イリアさん、暇なのかしら。」

「ごそごと大丈夫と書かれていたワインを引っ張り出すと、ユリに放り投げた。」

「わわっ!?!? ちょ、投げないでよ栞！」

「ごめん、わざと」

「ひどい!?!?」

「はは、相変わらずだね。丁度つまみができたから、食堂に行つて皆で食べようか」

「久しぶりの晩餐会ね。ちょっと早いけど」

「なら予行演習でいいじゃない。早く行きましょう」

【侮蔑】の名を持つ【魔女】、アディリア・シディル。

私達【魔女】や魔術師以外に嫌悪感を示してしまうほど人間が嫌いらしい。

で、朗らかに笑っているのが【天秤】の名を持つ【魔女】、ロイド・スイナード。元々司法試験を受けようとして強盗にあって、そこから狂っていったらしい。

まあ今はいいお兄さん役だ。苦労人とも言う。眼鏡が似合っているぞ。

「さ、栞はこっちをよろしく」

「アディ、魔術で何とかならない？」

「無理。大気圏突き破っていいならやるけど？」

「……遠慮しとく。『浮遊せよ』」

少しだけ溜め息を吐くと、ワインとつまみに向けて言霊を放つ。

染み込んだ言霊によって思うままに動くそれを動かしながら食堂へと向かっていく。

まあ便利よね。言霊。

「ボクも少しくらい勉強しようかな、言霊。日本はそつというのが凄
いよね」

「言葉にも意思がある、ね。確かに、八百万の神とかは凄い発想よ
ね」

日本を褒めるな。嬉しくてちぎれちゃうって。

確かに日本の発想は海外にはない特殊なものがある。だからここま
で呪術が栄えたんだらうか。

などとくだらんことを考えつつ、他の3人にワイングラスを持たせ
てテクテクと食堂へ到着。

ちなみに、厨房へ入るときは別ルートから行ったから食堂は通って
いない。

「ハロー、マリー、イリア」

「お久しぶりです、栞さん」

「久しぶり、栞。また一段と可愛くなつたね」

「ありがとう。つまみとワインもって来たよ」

言いながらつまみを全員が取りやすいところへ、ワイングラスを全
員の前へ配置する。

その後ワインの栓を言霊で抜くと、手を触れずにワインを並々と注
いでいく。

マリーは【歪曲】の名を持つ【魔女】で、イリアの弟子。で、そのイリアは【終極】の名を持つ【魔女】。2人ともふざけた魔術を使う実力者。

特にイリアの魔術は反則だ。あらゆる事象がいきなり消滅するから終わりの魔法。

さらに、イリアは別の世界の人間だということはこの場の全員が知っている。そしてその伝で世界各国首脳陣に異世界があることを知らせ、その対策を講じてあるため、もしそういった事態が起きた場合は【魔女連盟】が中心となって動く事になっている。なのは、あなたの出番はないかもね？

「なんだか、手を触れずにひとりでに動いているって壮観だね」

「すっごーい……。エルファイだったらできるかな？」

「あの子だったら切っちゃわないかしら」

とりあえず全員に注ぎ終わったので席につき、乾杯の音頭をとろうとしたとき。

『皆様、道楽様がいらっしやいましたよ』

ベンデルによる霊脈からの報告で一旦手を止める。

なんでこういうタイミングで来るかな。

はあ……。

「丁度いいから、皆呼んで食事しながら話しましょう。マリー、2階の2人を呼んできてくれる？」

「はい」

そう言ってマリーが席を立ってから数分後、道楽を伴って3人が入ってくる。

道楽秋水は【愉快の魔女】。人体操作系の魔術を得意としている。こいつは自分が楽しめればそれでいいけど、身内の【魔女】は大切に
する奴だ。

あとやると決めたら絶対やり通す。普段は馬鹿だけど。

で、後の2人は外川雅とエルフィ・ルナード。とかわみやび

雅の方は外見21歳でアイスブルーの髪を腰まで伸ばしている、【氷像】の名を持つ【魔女】だ。割合長身でカッコいい系だけど、この人が店先で可愛いぬいぐるみを見つめて頬を綻ばせているところを見たことがある。アレは可愛かった……。

エルフィは年齢は私より上だけど、私の妹分のようなもの。アメリカの高校に通っているらしい。

ひよんなことから魔導書を手に入れ、【魔女】となって雅に弟子入りしていたらしい。【十重理事会】に私の一つ前にはいつていた人だ。

【綾渦】の名を持つ【魔女】でもある。エルフィのトラップテクニクはメンバーの中で群を抜いている、と私は感じているのだ。

「じゃあ、全員揃ったわね。定例会、始めましょうか」

その声と共に、ワイングラスがぶつかり乾杯が行われる。

さて、それじゃあお話だ。

「最近、日本に21個の高エネルギー結晶体の落下を確認しました。確認したところ、次元の狭間からの落下物であると判明しましたので、日本の【魔女】に回収を依頼したいと思います」

「回収後の結晶体はどうするの？ イリア」

「各自お好きなように扱ってくれていいわ。ただし、弄くるときは結界張ってね」

「はい」

「うーっす」

「了解しました」

上から私、道楽、雅だ。

道楽、あんたそろそろやる気だしなさいな……。

「もし管理局が出張ってきた場合、相手の要望に応じて情報を渡して構いません。ただし、礼儀を知らない場合は【魔女】としてそれ相応の礼をして差し上げなさい」

そう言ったイリアの顔は笑みを形作っていたけど、とんでもなく空恐ろしかった。

ああ、覇者の風格だねえ……。

などと現実逃避している場合じゃない。まあやることはわかったけど。

「それと。落ちた場所は全て海鳴市と言う町です」

「あたしの地区ね。もしやばかったら連絡するわ」

「了解」

私の言葉に他の9人が頷き、その後は普通の食事会になった。

さて、それじゃあ早速お仕事と行きましようか。私達の海鳴市、好きにはさせないわよ。

3話 【魔女】の宴（後書き）

次回、【魔女】とブルーベルの紹介。

3・5話 【魔女】説明（前書き）

ということ、オリジナルキャラの説明。

作者も忘れっぽいので、もしこれからの話で間違っていたりしたらやんわりと指摘お願いします。心の芯は細いぞ！

3・5話 【魔女】説明

月村 栞 《ツキムラ シオリ》 女

月村家に生まれた夜の一族。

すずかとは双子の姉妹で、栞が姉役。

突然変異を起こしているため摂取する血は、すずかは栞の、栞はすずかのものでなければ拒絶反応を起こしてしまう。

【魔女連盟】の【十重理事会】所属。魔名は【奇学の魔女】。

転生前も女性だったが男性に興味がなく、女性に恋愛感情を抱いている。それは転生後も同じ。

転生後は敵対者に対する殺戮を甘美に感じているが、男性の血を毛嫌いするため、一般には【言霊】を使用し、血を流さず一言で【殺す】ことを信条とする。

【魔女】としての思考へと完全に移行すると、言葉遣いが『うみねこのなく頃に』のベアトリーチエにそっくりになる。通称【虐殺の魔女】状態。

身体能力も高く、常に訓練を続けているため通常時の戦闘能力だけで陸戦SSランク、空戦Sランク相当。

一定量の血を服用する事でブーストが掛かっているのと同様の効果を得られ、ランクが2ランク上がる。

リンカーコアがあり、リンカーコアを通しての魔力測定値はSSSランク。魔力光は黄金。

デバイスはユニゾンデバイスのブルーベル。ユニゾンすると髪の色が真っ青に、瞳が深紅に変わる。

転生時に得た3つの力と権利は以下の通り。

一つ。ありとあらゆる知識を吸収、実践する力を得る。

これは文字通り知識を読み解き、己の力とすることである。よって、

魔術行使の手順を読み解いた場合脳内でそれを処理、簡易的に使用することができる。ただしそれはあくまで簡易的な実行のため、完全な使用にはその魔道書と共に儀式を執り行う事が望ましい。また、デバイス作成の知識があつたとしてもその材料がなければ意味がない。ただし、ありとあらゆる知識を吸収、実践するということとはそれに耐えうるだけの精神力を兼ね備える事に他ならず、必然的にあらゆる魔術、魔法、奇跡の行使を可能としている。これには神代の魔法などの人知を超えたものも含まれ、それを理解する事が可能。また、ブルーベルとユニゾンすることで更なる効率化を図れる。

二つ。才能及び努力値の限界突破。

本来ならばあるはずの限界を超えた力を得ることができる力。これ単体では意味を為さないが、長寿の生命体がこれを得、日々鍛錬に打ち込んだ場合、究極的には惑星を拳で砕く事も可能になる。そればかりか、一切超常的な力である気や魔力を使わずに時空間を歪ませ、切断する事も可能となる。また、魔力値も努力しただいでは上がっていくため、夜の一族という長寿の一族に生まれたことが結果としていい方向へと傾いたといえるだろう。現に朶も、9歳時点で高層ビルを素手で崩壊させられるほどの力を持っている。

三つ。一度限りの死者蘇生特別権限。

朶となる前の主人公がアリシアのために手に入れた、一度限りの死者蘇生の能力とそれに伴なう権限である。

本来死者蘇生はありとあらゆる時間、空間において禁忌であり、パラドックスを生み出す原因と考えた神がそれを否定したためできなくなった。ゾンビとしての使役などは認められているものの、本来人間が元の世界に蘇るためには神の力添えが必要になってくる。ただし、反対する神も多いためそう多くは使用できない。

主人公は蘇生に対する責任として三つ与えられるはずだった可能性

の一つを消費しており、その姿勢を気に入った神が特別に蘇生権限を与えてある。

現在アリシアの魂はプレシアに取り付いている状態であり、朧となった主人公は魔術という神秘に接しているため彼女を【視る】ことができる。

以上3つが手に入れた力と権利であるが、それとは別に様々な力を転生後に身につけており、その一つが魔術である。

世界には様々な魔術師などが存在し、朧もその1人。中でも世界中に選りすぐられた【魔女】と呼ばれる存在になっている。

彼女の二つ名となっている奇学とは、奇跡、奇妙の頭文字である【奇】と、ひたすら学ぶというその姿勢からとった【学】を合わせている。この魔女の名、【魔名】はいつの間にか決められており、朧本人も言っていて妙なこの【魔名】を気に入っている。朧転生後に手に入れた力は以下の通り。

・ 原典の魔導書による魔術蒐集

・ ネクロノミコン

・ 水神クタアト

・ ナコト写本

・ エイボンの書

・ 無名祭祀書

・ ガルドラボーグ

・ レメゲドン（全5部からなり、ことさら第1部であるゴエデ
イアの影響力が強い）

・ アルス・ノトリア

・ 言霊行使

・ 古代ベルカ式魔法

所属している【魔女連盟】とは、その名の通り一晩で一国を滅ぼせるほどの力を持つ魔術師などを【魔女】として認定し、様々な保護、保障を行う代わりに弟子の育成などを請け負っている。

現状【魔女】は全世界中に20人と非常に少なく、そのなかでも栞は最年少にして準最強の【魔女】。

それ故最年少で【魔女連盟】を動かす【十重理事会】の1人となることができた。このときの栞は冷静沈着であらゆることに対して容赦がない。

忍もこのことは知っているが、自身は魔女連盟の支援者として登録されている。

地球に害を与える存在が現れた場合、全力を持って排除する任を追っている他、各国の信頼も厚い。

『うみねこのなく頃に』の煉獄七姉妹は栞によって召喚される事がある。

【十重理事会】にはいったのは一番最後。

月村 ブルーベル 《ツキムラ》 女

ユニゾンデバイス。

リポーンで出てきたブルーベルと瓜二つの姿で、最初は無口だったが今は明るい性格を取り戻している。

古代ベルカに造られた純正のユニゾンデバイスで、栞との適合率は98%と非常に高い。

水を利用した魔法を得意とし、圧殺や酸素欠如での殺害を得意とする。

戦闘センスも高く、単体での魔法行使も際立って上手い。素早く動き圧縮した5万トンの水の針を大量にばら撒く事で相手を殺す戦い方をする。

使用予定魔法は以下の通り。

・アクアサーチャー

水のあるところをモニタリングできる魔法。普通のサーチャーと違い、水があればそれをサーチャーとして利用できる反則魔法。いい子は覗きなんかに使っちゃ、メ！だぞ！

ちなみに使用可能範囲は半径10キロ。空気中の水素は無理だが、水分は可能。

・アクアバスター

大気中の水分と魔力を結合させ、更に加速、圧縮を掛ける事によって物理的破壊力を際限なく高める収束砲撃魔法。

最大時には町ひとつが軽々と吹き飛ばすほどの運動エネルギーが発生し、アルカンシエルを物理的に押し返すことができる。

収束砲なので魔力をそれほど食わずに使えるのが特徴。SSランク。

現状はこれだけだが、他にも様々な魔法を習得する予定。

イリア・ステイティフィル 女 ?? 歳

【終極】の名を持つ【魔女】。【十重理事会】総括長。

全ての事象を強制的に【終わらせる】という概念レベルの魔術を得意とし、あらゆる【魔女】の頂点に立っている。対抗できるのは朧ぐらいだが、それでも勝つことはない。

他の人間に迫害されていた時期があり、同じ【魔女】やそれに属するもの以外は信じなくなっている。

無口だが同胞に対しては優しく、朧も時々膝枕をしてもらっている。

よきお姉ちゃん。

長い銀髪ですらつとした長身。背丈は【十重理事会】の中で一番高い。更に銀色の瞳を持つ。

基本的にTシャツとスカートで過ごしている。

魔導書である【終末】^{アルマゲドン}を持っており、【魔女連盟】の設立者でもある。実は別の次元世界の人間で、【十重理事会】や各国首脳は次元世界の概念や存在を知っている。

ベンデル・マリステン 男 38歳

【獄熱】の名を持つ【魔女】。【十重理事会】統括副長。

統括副長は臨時での指揮系統を託されており、他の理事より少しだけ権限が上。

大陸全てを1万度を超える灼熱の炎で包むほどの腕を持つ火炎系統の魔術を得意としている。

黒髪で全てにおいて紳士であり、栞のことは「栞嬢」と呼ぶ。栞が気楽に話をできる男。

魔導書である【紅蓮の書】を所持する。元々は普通の魔術師であったが、【紅蓮の書】の所持者として書に認められたことによって紅蓮の魔術の全てを引き継ぎ、【魔女】となった。

【十重理事会】にはいった時期は2番目。
紅茶とクッキーの腕前は世界レベル。

アデイリア・シディル 女 22歳

【侮蔑】の名を持つ【魔女】。【十重理事会】所属。

存在の上下関係を操る魔術などの、概念操作魔術を得意としている。ただ、直接それで殺すことはできないため、酸素の存在を相手より

も上にする事で酸素に触れる、すなわち呼吸する事ができなくなるようにして殺すなどの上げつないやり方が目立つ。最悪の場合は血液の存在を上にする事で、血液は人体をずたずたに引き裂く事になる。

本音では【魔女】や魔術師以外の人間を見下し、忌み嫌っているが、猫被っているときには全くわからない。

虐殺が趣味という危ない人だが、同胞の【魔女】、特に年下同姓の【魔女】に対しては甘甘で、資産家である事が災いして時々たかられている。

本人は楽しそうにしているからいいのだろうか。イリアに対しては半ば崇拜といってもいい気持ちを抱いている。

魔導書である【悪夢の書】を所持し、昔魔女と違っていじめられた経験から【悪夢の書】の所持者となり、その魔術を引き継ぎ【魔女】となる。

【十重理事会】には3番目の加入。

ロイド・スイナード 男 25歳

【天秤】の名を持つ【魔女】。【十重理事会】所属。相手の罪を計り天罰を与えたり、比重比率を変更し相手に自分の魔術を通しやすくするなどの特殊な魔術を使う。

元々は裁判官を目指す青年だったが、司法試験に行った折遭遇した強盗事件で右目を負傷、司法試験にも遅れてしまい受ける事ができなかった。

失意の淵にいたとき古本屋で見つけた魔導書、【裁きの書】と巡りあい、魔術師として大成していく。ある意味で一番まっとうに【魔女】になった男。

悪を憎む気持ちは残っているが、それ以上に【魔女】としてこの世界を守りたいという思いが強く、何かとクッション役になることが

多い。

時空管理局についても不自然な点が多すぎるとして疑問を投げかけている。

余談だが、司法試験のときの強盗は魔術師であつたらしく、彼が【魔女】となつた数年後に謎の死を遂げた。死因は、誰かによって口内に拳銃を突き入れられ、そのまま10回以上引き金を引かれ頭を完全に吹き飛ばされていたという。ちなみに、そこにはそのとき誰もいなかった。

近所その強盗の悪評を知っていた人たちは、口をそろえて天罰が下つたんだと言い張っていた。

【十重理事会】には4番目の加入。

道楽 秋水 《ドウラク シュウスイ》 男 24歳

【愉快】の名を持つ【魔女】。【十重理事会】所属。体の間接、内臓を遠隔的に操る魔術など、人形系統の魔術を得意とする。

全ては自身が楽しむための舞台であり、同じ【魔女】との戦いを望むが、それ以外では【魔女】同士は仲良くするべきだと考えている。何かと軽い男だが義理は通し、一度決めたことは絶対に曲げない芯の強さを持つ。常に和服でロン毛。

自作の魔導書、【人形劇】を所持しており、ありとあらゆる遠隔操作、人形系統の魔術が記されている他、どの間接をどうやって曲げれば外せるか、壊せるかということなども記されている。究極的には天体操作も行えるほどの補足距離が特徴。

【十重理事会】にはいった時期は割りと早く、5番目の加入。

マリー・エルメラティ 女 22歳

【歪曲】の名を持つ【魔女】。【十重理事会】所属。攻撃、防御、空間から時間、概念まであらゆるものを歪め、壊す歪曲魔術を得意とする。

とある新興宗教に嵌まってしまっていたが、ある日神への生贄として自身の家族が殺された事をきっかけにその宗教にいた者をあらゆる方法で惨殺していく。

最後の1人を殺したとき、教祖の部屋にあった【歪められた者】という魔導書を手に入れ、書の所有者として認められて【魔女】となる。

その後イリアに目を掛けられ弟子となり、【魔女連盟】設立から数年後に所属した。

【十重理事会】には6番目の加入。

外川 雅 《トカワ ミヤビ》 女 21歳

【氷像】の名を持つ【魔女】。【十重理事会】所属。

対象の温度を低下させ氷漬けにしたり、指定範囲を絶対零度にするなどの氷結系統の魔術を得意としている。

常に冷静沈着だが可愛い物好きで、時々店頭で1人類を綻ばせている事がある。栞は一度だけ目撃した。

長身で、戦うときは残酷だが優しく、できるだけ傷つかず一瞬で死に至るような殺し方をする。

戦闘時のベンデルとの連携は凄まじく、ベンデルによって数万度まで高められた物質を一瞬で凍結、破壊するというえげつない連携を見せる。

自作の魔導書、【氷河の書】アイスエイジを所持しており、題名と同じアイスエ

イジという名の完全凍結破壊魔術も記されている。この魔導書の執筆途中に魔術が暴走したせいで、雅の腰まである髪はアイスブルー

に変わっている。

【十重理事会】にはいった時期は7番目。

ユリアレイ・トールレス 女 23歳

【悲哀】の名を持つ【魔女】。【十重理事会】所属。

人心を操る魔術やじわじわと苦しめる魔術などの広範囲に適応できる拷問系統の魔術を得意とし、その明るい性格とは裏腹に相手を悲しませ、哀しませることを至上の喜びとする。

金髪碧眼というわかりやすい姿をしていて、ことさら朶とは仲がよい。

自作の魔導書である【阿鼻叫喚指南書】を所持する。幼少時に完全な趣味で作成したものだ、ユリア以外の普通の人間が触れば一瞬で精神を破壊されるほどの魔術が記されている。

【十重理事会】にはいったのは8番目。

エルフィ・ルナード 女 17歳

【綾渦】の名を持つ【魔女】。【十重理事会】所属。

罫を張り巡らせ渦の中に引きずり込んだり、一気に敵を切り刻むような、鋼糸などを使用した奏弦魔術を得意とする。

現役女子高生であり、朶とは姉妹のように仲がいいが、立場的に朶の方が年上のようになってしまうている。

金髪のショートカットに、セーラー服とミニスカート、中に鋼糸を備えたショートパンツを履いている。

一国に張り巡らせられるだけの糸さえあれば、どんな糸であろうと国ごと引き裂けると豪語し、実際に小さな国を一つ、人知れず潰して見せた。

魔導書である【糸屑の書】を拾った事から所持者と認定され、奏弦魔術師として名を馳せる事になり、【糸屑の書】の名が【禁糸の書】に変わった時に【魔女】としての殺人衝動と共に魔女の名を得た。本来の【魔女】であれば殺人衝動に飲まれることはないが、エルフイーの場合は少し魔術を齧っただけの中学生だったため飲まれ、その後【氷像の魔女】に拾われ弟子として修行をし、晴れて【魔女連盟】に名を連ねる事になった。

【十重理事会】に入った時期は遅く、9番目。

なお、【魔女】は【魔導書】に所有者として認められたときに契約しており、寿命がかなり引き伸ばされているため全員が歳の前に外見年齢と付くことになる。

3・5話 【魔女】説明（後書き）

以上です。

我ながらよく10人も【魔女】考えたな……。

ちなみに、うみねこは聞きかじりの知識とニコニコ動画で使われたプレイ画像、アニメーションを少しみたぐらいなので、ベアトリーチエ、煉獄の七杭の口調がおかしかったら言うてください。うみねこ、やりてえなあ……。

最初は絵がだめな人多いと思うんですけど、ずっとみてるとうみねこやひぐらしはああいう絵じゃないとだめになってくるから不思議だ。

4話 魔法少女、爆誕（前書き）

原作とは大きく違っていく“これから”。
ストックが余ってるので2話更新します。

4話 魔法少女、爆誕

翌日。

あのクソ忌々しいフレットからの念話がかつり届いた。おかげで寝不足じゃ。

「はあ……」

「菜、溜め息をつくと幸せが逃げるわよ」

「鎖つけて繋いであるから逃げないよ」

「バイオレンスね」

「どうも。よし、ごちそうさま！」

忍姉さんとアホな会話をしつつ食事を終え、自室へ。

ずずかは先に食事を終えてバッグをとりに行っている。

昨日はずずか用の概念兵装を考えてたから寝るの遅かったのに……。学校で寝よう。

きっと今日くらいはサボっても悪くは言われない、はずだ。魔女だって眠いときは眠い。

「お姉ちゃん、ずずか、行ってらっしゃい！」

「行ってきまーす！」

ブルーベルの見送りを受けて私たち2人はバスへ。

さて、ゴウンゴウン、と。

「昨日はどんなお話したの？」

「んー、こっちに爆弾みたいなのが落ちてきてるから、危ないよーって話」

「爆弾？随分物騒だね……」

「青い宝石みたいな形してるから、見つけたら私のところに持ってきてね。処理しちゃうから」

「魔女さんの得意技？」

「そ」

んー、すずかはかわいいなあ……。

とりあえず軽くジュエルシードについて注意を促した後、アリサが乗ってくるのを待つ。

「おはよ、すずか、朶」

「おはよう、アリサちゃん」

「おはよー」

しばらくするとアリサが乗り込んでくる。

相変わらずの金髪ですね。

「奇妙ね、その突っ込みは」

「地の文に突っ込むあなたのほうがよっぽど奇妙です。あ、すずかにも言っただけど」

で、とりあえずアリサにも同じ注意を。

あんまり巻き込みたくはないからね。まあ私と関わってる時点で無理だけど。

封印、という力づくで叩き潰すことはできるけどな。
で、まあ一日が終わりました。

「そして……」

現在夜。

忍姉さんからオツケーもらって外に出てきてるんだけど……、なの

はの魔法少女化を阻止できなかったかあ……。
まあ仕方ない。魔女のお姉さんがなんとかしてあげましょう！

「不屈の心は、この胸に！」

てか、相手がそこにいるのにスルーか。
ジュエルシードも知能ないなあ。

「この手に魔法を！」

おーおー、どんどん進行して行っている。
仕方ない、こうなったらあの子にはまず恐怖を感じてもらおうか。
戸惑っているのはに向け、モフモフ見たいな黒いのが突っ込み、
プロテクションで防がれる。
さて、じゃあそろそろ行きましようか。

『うん、お姉ちゃん！』

私の中で言うブルーベルに少しだけ笑いかけ、そのまま電柱の上からもふもふへ踵落とし。
おおう、ぐにっといっただね。

「にゃ、だ、誰!？」

「ハロー、なのは」

「し、栞ちゃん!？ でも、髪の色とか!？」

「その辺は後。さて、とっとと片付けましようか、ブルーベル」

『うん！アクアバスター、セット！』

ふらふらしているもふもふに向けて右手を突き出し、魔力を集中。
魔力と水分を結合していき、どんどん加速、圧縮。凄まじい勢いで

私の右手のひらの前に水と魔力の塊が出来上がっていく。

「あなたも、魔道師……！」

「アクア、バスター……！」

『ドーン……！』

超超至近距離で放たれたそれは、圧倒的な物理破壊力も伴ってもふもふを削っていく。

ああ、私のもふもふがああ……。……。

などと感傷に浸っている間に、もふもふはジュエルシールドへと戻ってしまった。

後でモフモフできるのなにか作ろうかなあ……。ブルーベルはさらさらなんだよね……。

『お姉ちゃん、私じゃいや？』

「いえ、むしろ美味しいです」

『わーい……！』

この会話が日常になっているのが怖いね、うん。
と、なのはとかが置いてけぼりなので会話に参加させてあげましょ
う。

「で、なのは。とりあえずいろいろご家族とお話しようか？」

「……ふえ……！」

「なのはが魔法少女になったこととか、そのフェレットもどきの
事とかね？」

「え、えーと……」

「そ、それは待ってください……！」

「なんじゃいフェレットもどき」

まったく、いいところで遮らないでよ。

私だって昨日から寝不足なんだよ？授業全部潰して寝たけど。なんて思っていると、フェレットがいきなりわめきだす。

「本当は魔法をこの世界の人に教えちゃいけないんです！ これ以上増えてしまつたら…」

「ならなのはに1人で戦えと？ 9歳のガキがそんなに自由に動けるわけではないでしょうが」

「それは……」

「大丈夫だよ、ユーノ君。多分…」

とりあえずジュエルシールドは回収して、と。

というか、よくなのは私だって気づいたなあ。髪の毛青いのに。

「んで、ユニゾンアウト」

『はい』

次の瞬間、私の姿はTシャツスカートの上にローブという姿に。しかも全部黒。

そして私の横にはTシャツジーンズのブルーベルが現れる。とりあえず抱きついておこう。

「あ、パトカー」

「え、嘘!？」

「に、逃げなきゃ!…」

なぜに？

とりあえず逃げようとしているなのはの襟をがしつと掴み、その場へ留める。

へっへっへ、にがしやしないぜお嬢ちゃん。

などとアホな事を考えつつ、パトカーの到着を待つ。多分アイツだろっし。

しばらくして到着したパトカーから降りてきたのは、中年のナイスガイ。よく刑事ドラマとかに出てきそうな、ね？

「なんだ、栞さんですか…」

「なんだとはご挨拶ね。やったのは別のよ？この子関係者」

「【魔女】関連ですか？」

「ちよつと違うけど、上から話はきてる？」

「ええ、まあ」

ふむ、来てるのか……。

まあとりあえずジュエルシールドは私が保管しておいたほうがいいわね。

いざというときにも使えるし。

「あ、あのー……、お知り合い？」

「ああ、紹介してなかったわね。ここ担当の警察官で、魔術課の後藤巡查」

「どうも、後藤です」

「あ、高町なのはです！」

魔術課ってなーに？って方に説明。

魔術課は私達【魔女】や【魔術師】によって引き起こされた事件、ないしそれに関連する事象事物を管轄とする警察所属の【魔術師】専門集団。

随分前からできていたみたいだけど、イリアの指示で強化されてからは一個大隊とも戦闘できるらしい。

ま、私には関係ないけどね？

「えー…、これ始末書物ですよ？ 栞さん」

「知らんがな。というのは余りにかわいそうなので、こっちから話し通すわ。無線貸して」

「了解です」

まあ、この惨状だしね…。さすがに始末書は可愛そうでしょう？協力者には優しいの。私はね？

で、無線を受け取って。

「よーっすー！」

「……」

「あーあー、まった切るなって栞い！」

「ったく、何してんの道楽」

なんであいつ警察の無線に出てくんの。
そんなに暇なのかしら。

「いや、俺一応警察にコネあるし」

「じゃあそっちに伝えといて。海鳴市のあれ」

「あー、了解。つかもう見つけたのかよ」

「私がもらうから。そっちはちゃんと処理して」

「わーったよ。後藤さんによろしくな」

「了解。とっととくたばれ」

「まだまだ生きるぜ」

そんなやり取りの後無線が切れてしまったので、元の位置に戻す。
後藤さんとは結構長い付き合いで、【魔女】になった当時の付き合い合いなのさ。

だからまあ、結構無茶も聞いてもらえるしね。

「じゃ、後は応援呼んでもらうからよろしく。指揮はそっちがとってね」

「了解です。まあ、今回は事情聴取は省いときますね」

「助かるわ。じゃ、事態の收拾はよろしく」

ん、なんかなのはとフェレットもどきが空気だけど気にしないで。どうせこれからも空気になり続けるから。

アツハハハハハ、私を差し置いて主役張ろうなんて1000年早い
のよ！

「さ、じゃあ行きましょうか」

「ふえ？」

「ふえじゃないわ。お家に帰らないと、怒られるんじゃない？」

指摘してみると、途端に焦ったような表情になるのは。全く、すこしは考えて行動しなさいって……。

とりあえず私も一緒にについて行って、事情を説明しないとね。絶対この子達はぐらかすし。

しばらく無言のまま歩き続け、高町家に到着。

「おかえり」

「お、お兄ちゃん……」

「こんな時間に、どこにお出かけだ？それに栞も」

「あの、その、えっと、えっと……」

「夜分遅くすみません、恭也さん」

高町家に到着すると、横から恭也が顔を出す。

外で待ってたのか、シスコンめ。私も否定できないけどね！
すずかかわいいでしょ？可愛いよね！？

「あらかわいい！」

「お、お姉ちゃん？」

「あら、なんか元気ないね。なのはは、この子のことが心配で様子を見に行ったのね？」

後ろから出てきた美由希がフェレットもどきを見つけて声を上げる。

「ええっと、その、あの……」

「気持ちはわからなくてもないが、だからといって内緒でというのはいただけない」

「まあまあ、いいじゃない！ こうして無事で戻ってきてるんだし。それに、なのははいい子だから、もうこんなことしないもんね？」

ふう……、またいい子が。

小さい頃はこのぐらいが普通でしょう？ま、この目線は転生者としての目線だけどね。

「その『いい子』ってのやめませんか？ まあ他人ですからいいですが……、とりあえず士郎さんや桃子さんとも話があるので、上がらせていただいていいでしょうか？」

「忍に連絡はしてあるのか？」

「ちゃんと言っているので大丈夫です」

「なら、まあいいか。なのはも、とりあえず中で話そう」

「う、はい……」

美由希さんスルーですかと中へ入っていく。

とりあえず結界を張って、と。

「こんばんわ、でいいかな？ 高町士郎？」

意識を、【奇学の魔女】へと変えていく。
声音は少女から女性へと変わり、嘲りの色が浮かんでいるのが自分でもわかる。

まあ、私は【魔女】だから。

「っ！栞ちゃんか……。いや、今は【奇学】と言った方がいいかい？」
「そうしてくれるかア？ くくっ、こっちで話すのは久しぶりだよなア、剣士ィ？」

さて、【魔女】の舞台の始まりですわ。

4話 魔法少女、爆誕（後書き）

今回は大半ベアトの口調です。

うわ、おまえなにこれ……、とかなったら指摘お願いします。

ベアトむずいよ……。

5話 未熟な剣士 【魔女】の力（前書き）

主人公が「おま、つよすぎね?」となります。
苦手な方は飛ばし読みどうぞ。

5話 未熟な剣士 【魔女】の力

なのはと共に高町家に入っていった私。
さてさて、ちよいとお話だ。

「……………子供もいる。そちらの話かい？」

「安心するがよい、今宵はその話ではない。が、下手をすればそうなるやもしれぬ、口には気をつける？くっくくく…」

完全に【魔女】になるところという口調になってしまふ。

なぜかなっちゃんだけど、多分前世でうみねこ見てたからかなあ……………。

ほら、魔女っていうと黄金のあの人が出て来るんだよ、私。つつても聞きかじりの知識しかないんだけどね。

「さて、では今宵の主役だ。高町なのは、フェレットもどきを出してみる？」

「ふえ！？ は、はい！」

【魔女】に飲まれたのか、なのはが拳動不審気味にフェレットもどきを出す。

さて、キリキリ吐いてもらおうか？

「喋れ」

「キュッ！？」

「キュッ、ではないぞ？ 小動物ではありえぬ生命力が透けて見えておるわ。そあら、早くせんと尻尾を引きちぎってしまうぞ？ それとブルーベル、結界を張っておけ」

「はいー！」

ブルーベルに結界を張らせた後、脅してはいないとばかりに尻尾をむんずと掴み、胴体を押さえつけて引っ張っていく。しばらく黙っていたけど、ギリギリのところですがにヤバイと思っただのか、フェレットもどきが声を出した。

「まった、わかった、わかりました！ 喋るから千切らないで！！」「くっくっく……、初めからそうしておればよいのだ。一から十まで起こったことを話してもらおうぞ？」

「わ、わかりました……」

【魔女】の威光に完全に竦んでいるらしく、戦々恐々と言った様子でフェレットは自分の名前、出身、目的、なのはを巻き込んだこと、そしてなのはには大きな才能があることを告げていく。士郎は黙っていたが、美由紀、桃子はやや不快気に眉を潜め、恭也に至っては怒りの表情を隠そうともしていない。だが、それではいけないんだよ。

「貴様……、それでなのはを巻き込んだのか！？」

「ご、ごめんなさい！ でも、それ以外に方法がなくて……」

「ふざけるな！ この場で叩きつてやる！」

「やめる戯け！！ そなたは落ち着いて話を聞く事すら満足にできるのか！」

激昂し詰め寄っていた恭也を一喝し、それと同時に威圧する。全力の5%も出していなかったが、恭也はそれで動きを止めた。やはりまだまだ見習いだな。士郎ならば未熟とはいえ【魔女】であった妾と互角に渡り合ったというのに。

しかし……、フェレットに詰め寄る大学生、というのは中々稀有な光景ではないか？

「くっ…、すまん」

「このことは後ほど話すことにするが…、ジュエルシードとやらの高エネルギー結晶体は我ら【魔女】の管轄。不用意に手を出すなよ？既に【魔女連盟】は結晶体の確保に向けて動き出しておる。貴様ら異世界の人間が誠意ある対応を見せれば、情報、及び戦力の共有も吝かではないがな」

このユーノ・スクライアもなのはと同じ、無駄に責任感のある性質なのである。

だから馬鹿同士話が合う。全く、厄介な事よ。

「ですが、ジュエルシードは元はといえば僕の責任なんです！だから、僕が集めないと…」

「貴様一人の自己満足のためにこの海鳴を危険に晒すなど、妾が許すと思うか？それと、貴様が発掘者ではあるが輸送の責任は持つておらぬだろう。責任は輸送されていたそれを受け取るはずだった者達にある」

「で、でも！」

「黙れ小動物。ともかく、これ以後ジュエルシードに関する全権は国家の下我ら【魔女連盟】が受け持つ。そなたはおとなく愛玩用動物として一生を過ごすが良い。くっくっくっく……」

そう宣言すると、とうとうユーノは何も言わなくなった。

何か反論を考えているのか、それともただ何もいえなくなっただけなのか。

どちらにしろ、今はもう興味はない。次に移るとするか。

「高町士郎、高町なのはとユーノ・スクライアを下がらせよ。これ以後の話には不要だ」

「…わかった。なのは、ユーノ君を連れて自分の部屋へ行っ
てなさい」

「で、でも！」

「話は後で聞くから。今は行っていなさい、いいね？」

「……はい……」

若干尾を引いているものの、なのはは素直に自室へと戻っていく。
さて、ここからは本当の問い詰めだな？

「さて、では話の続きと行くか。随分前、高町士郎がしくじって
大怪我した事があったな？」

「あ、ああ」

「そのとき、貴様の家族が何をしていたか知っているか？」

「……いや、知らない」

やはりそうか。

親であれば気づいているはずなのはの歪み。それに気づけんとは
…。

せつかく親である時間を増やしたとしても、意味がないであろう？

「高町桃子、そなたはそのとき何をしていた？」

「私？ 私は、土郎さんの看護と、お店を」

「では高町美由紀、そなたは何をしていた？」

「えっと、大体お母さんとおんなじ、かな……」

この2人は、まあ仕方あるまい。タダでさえ少ない従業員が減った
のだ、そうなってしまうのは仕方ない。

それに、その程度で歪むほどアレは弱くはなからう。

問題は、こやつだ。

「ふむ。高町恭也、そなたは何をしていた？」

「俺は、二度とそういうことがないように特訓をしていた」

「くく、鬼気迫る気迫で、妹にも敵意を漏らして、か？」

「なっ、そんなことはない!!」

「随分と歪んだものだな、高町士郎。そなたほどのニンゲンならば、この歪みに気づけたはずだがなあ？」

そこでようやく妾の言う事に気づいたのか、やや頭を抱えていた。さすが、裏の人間だけあって察しがいいな。会話が楽で助かる。

「恭也……、まさかなのはを相手にしていなかったのかい？」

「ち、違う!ちゃんと説明した!」

「よわい齡6つの娘むすめ子がそなたの言う事をきちんと理解できたとても言うつもりか? くくくつ、なのはは毎日毎日、公園で独りぼっちだったぞ?」

「そんな、こと……」

「そうか……。物分りがよすぎる、とは思っていたが……。そういうことが」

「なのはは家族の中に自身の居場所を見つけれられず、せめていい子でいなければいけないと思いきむようになった。そして、それが今回の事態を引き起こしたとしてもおかしくはない」

元々責任感の強かったなのはが、幼き日の影響でよりひどくなったというわけだ。

くくつ、家族の事を想っていた者が、その家族から居場所を奪っていたとは、なんとも皮肉なものよ。

「まあ、これは貴様ら家族間で片付けるべき問題だ。せいぜい足掻けよ、無様な見習い剣士?」

「……菜、俺と勝負しろ」

「お兄ちゃん!？」

「恭也、何を言い出すの!? 栞ちゃんはまだ9歳なのよ!？」

突然の申し出に、女性陣が困惑する。

が、高町士郎だけは顔を蒼白に染めていた。くくつ、あやつも面白い反応を見せてくれるものよ。

「俺が勝つたら、今の言葉を撤回しろ。俺は御神流の見習いじゃない!」

「くくくつ、アツハツハツハツハ!!! 何かと思えばてめえのことかよバアカ! いいのかあ? てめえ、このままじゃ死ぬぜえええええ…?」

「このつ……! 道場にこい!」

「くつくくくく…、面白い。なら相手をしてやろう? そなたが【魔女】という存在を見くびっていた事を後悔させてやろう!」

さて、では分からず屋に喝を入れてやるとするか。

ポッコポコにしてやるよ。

道場に入ると、恭也はすぐに壁に掛かっていた木刀を手にする。得意の小太刀二刀か。随分と頭に来ているらしいな?

「【奇学】、できれば……」

「くく、わかつておるわ。わざわざ殺すような無粋な真似はせぬ。存分にいたぶってくれようぞ」

薄ら笑いを浮かべ、無手のまま恭也の前へ立つ。

この威圧感、まるで鬼か。くくくっ、随分と歪んでおるものよ。

まあ、この程度ではまだまだニンゲンの域か。土郎の息子であるからもう少しできるものかと思っていたが……、どうやら違っらしいな。

「さつさと武器を取れ」

「そなた相手に武器など要らぬ。言葉と腕さえあれば容易に叩き潰せるわ」

「なんだと……、舐めているのか！」

「そなたのような相手には、慢心の上に慢心を重ねても足りぬわ。もう一つハンデとして、妾は目を瞑ってやろう。どうだ、破格の条件だろう？」

「この……！」

その場から一切動かず、目を瞑ったまま待機する。

直後、気配で突きを放ってきた事がわかった。

「甘い」

「なっ!？」

それをあっさり回避すると、カウンター気味に首下へ腕を打ち込む。いい音がしたからしっかり入っているだろう。

「避けた……」

「ハアッ！」

「無駄だと言っておるだろう?」

美由希の言葉を聴き、更に頭に血が上った恭也が猪のように突っ込んでくる。

こやつ、御神流が守りに主を置いた構えであるという事を忘れておらぬか？

一撃一撃を確実に回避していき、後ろに回りこんで打ち下ろすように上から腕を振り下ろす。

肩の部分に当たった瞬間、ゴキツと嫌な音をさせて右肩が外れた。

「くくつ、すまんすまん。力加減を間違えてしまった」

「ぐうつ……」

「ほれ、どうした？ そなたは見習いではないのだろうか？ ならば力を示してみせよ、【魔女】にその力を見せ付けてみせよ！」

「もう止めてくれ、【奇学の魔女】！」

妾が焚きつけていると、土郎が途中でわって入ってくる。

ふむ、まあよからう。十分目的は果たせた。

「くくつ、この無能によく言い聞かせておけ。我らの存在と、力の意味をな？」

「……ああ、すまない。今日はいろいろと世話になってしまった」

「構わぬ。魔法についてはよく話し合っておけよ？ あのフェレットが非協力的であれば即刻殺す用意はあるのだからな？」

「……肝に銘じておこつ」

それを聞いて、妾は【魔女】から元の思考へと戻る。

ふう、久しぶりに使ったけどすつきりした。

「この後片付けもよろしくお願いしますね。行きましようか、ブルーベル」

「うーん、なんだか私すごい空気だった気がしたよ？」
「気にしない気にしない。それでは皆さん、御機嫌よう」

それを最後に私とブルーベルは影へと溶け消え去る。
この魔術便利なのよね。術式組むのに苦労したけど。
さて、寝るか。

思わず激昂し、栞につっかかったことを、対峙した瞬間に後悔した。
あいつの全身から発せられていたのは、明らかなニンゲンでない何かの気配。

栞の秘密は知っている。そう、体の秘密、体質は知っていた。
だが……、これは全く違う。【魔女】とは、なんだ？
俺はどこで間違えたんだ？力を、求めすぎたのか？

結局、俺はそのまま意識を落とし、翌朝まで目覚めなかった。

5話 未熟な剣士 【魔女】の力（後書き）

恭也は勝手に復活するのでケアとかは考えてないです。

士郎が潰された頃のことを細かく知っている人、できれば教えてもらいたい……。

これでも頑張つて調べた。Wikiとか使つて。

6話 災厄の芽は出る前に種を潰す（前書き）

ストック消費で更新。

ストックが切れれば不定期更新になります。あしからず。

6話 災厄の芽は出る前に種を潰す

なのは達へ介入の禁止を言い渡した数日後。

ひつさびさに風邪を引いた私は、ブルーベルの看病の下学校を休む事になった。

体が重いし、ボーっとする。今日はゆっくり休むか……。

「大丈夫？ お姉ちゃん」

「だいじょーぶ。ちよつと疲れがきたただけだからさ」

あの翌日はなのははなんだか私と話しづらそうにしていたし、ユーノもあれだった。

なんというか、うん。あれだった。

恭也の方は、忍姉さんが思いつき怒っていた。

まあ私も【魔女】の方で相手したって言ったら、やりすぎだと怒られたけど。

で、原作にあった神社のジュエルシールドも発動前に回収できた。ラッキーラッキー。

「お姉ちゃん、通信だよ？」

「ん、出るわ」

『おはよう、元気そう、じゃないわね…』

通信相手は雅だった。

この真昼間から何しているのやら。とっていると、その手に握られているものに気がつく。

「結晶体、集めたの？」

『私が2個、道楽が3個』

「く、負けた……」

『そういうことじゃないでしょう。ともあれ、これで残りの結晶体は14個。魔道師の介入は？』

「私の友達がいきなり魔道師になってたわ。一応介入は止めるよう言っただけど、頑固な子だから……」

そこで言葉を切ると、雅が困ったように笑う。

なのはも面倒な環境で育った子だからね……。世が世なら凄まじい【魔女】に歪んでいてもおかしくないのに。

下手に魔法なんて手に入れたから、多分止まれなくなってしまふ。

『そつだ、こつちにも協力者ができたわ。異世界の魔道師だけど、協力的よ』

「珍しいわね、雅に協力者なんて」

『フェイト・テストロッサって子よ。アルフって使い魔もいる。実力は確かね』

すでに雅はフェイトと接触していたか……。

となると、私も向こうと接触しないとイケないな。

「その子の母親とは会った？」

『ええ、一応。あれは……、魂が歪んでいたわ。私は適正が薄いからうつすらとしか見えなかったけど、あのままでは……』

「そつ……」

『心の奥ではフェイトを愛したいと思っただけでも、クローンである彼女を娘と認めてしまえば本当の娘がいなくなってしまう。そう思っているみたい。私の前で泣き出してしまったし』

「フェイト・テストロッサはクローン。本人はそれを知らず、母親もどうすればいいかわからない、か」

やはり、彼女も悩んでいるのか……。
全ての鍵はアリシアね。それを助けられれば、きっと事態は好転する。

『今度会ってみてくれないかしら？ うっすらアリシアという子の魂もいるみたいだし、適正のあるあなたならより正確に見れるでしょう？』

「言われずともそのつもりよ。ケホッ……」
『風邪？』

「ええ……」

『ふふ、吸血鬼とも呼ばれる長命種が風邪だなんて』

「笑い事じゃないわ。結構きついなのよ？」

『ごめんなさい。さて、じゃあそっちも頑張って』

「ええ、そっちもね。通信終わり」

モニターが閉じた後、ふと我ながら技術レベルがインフレしているなあ、と試してみたり。

普通ならパソコンぐらいだろうに。

さて、と。それじゃあとつと風邪を治そうか。

「栞ちゃん、入りまへくちゅっ！」

「……ファリン、今日は休みなさい」

風邪がうつっているだと思っわよ。

翌日の夜。すっかり元気になった私は、ちょこつと抜け出す事に。学校から奇妙な魔力が感じられたから、それを確かめにね。と、

「リリカル！マジカル！ ジュエルシード、シリアル??！ 封印！」

あの馬鹿……、またか。

「なのは！」

「ふえ、栞ちゃん!？」

「あなた、干渉するなといっておいたでしょう?」

「だ、だって！ 私にだって、何かできることが「素人がでしゃばる事じゃないのよ。もし何かあったらどうする気!？」うっ……」

あれだけ【魔女】として威圧したというのに……。というか、家族は何をしてるんだ。

「このことは恭也や士郎さんに伝えます。いいわね?」

「は、はい……」

「それと、ジュエルシードを渡しなさい。これは私個人の意思ではなく、国として、【魔女】としての対応です」

そういうと、なのはが答える前にレイジングハートがコアの部分からジュエルシードを排出する。

力の差を感じたか。いいAIだ。ともあれ、これで3つ。

「レイジングハート、何を!？」

『言動に合理性が認められます。彼女の力を考えると、そちらに預ける方が安全です』

「いい判断ね。ありがとう」

「そんなあ……」

「……なのは。私はあなたの事が嫌いでごういうことをしてるんじゃないの。あなたに傷ついてほしくないから。力を持てば、いずれ争いがおこる。あなたの年でそんな記憶を経験してほしくないのよ」

【魔女】となるまでに、私は多くの血を見てきた。

この身は既に血に汚れ、到底人ではありえない長さの生命を得ている。

それこそ、1000年という長い月日を生きななければならないかもしれない。だけれど、それに後悔はしない。

私は自ら、【魔女】となることを選んだのだから。

「でも、栞ちゃんも私と同じ年じゃ……」

「いろいろ事情があるのよ。さて、じゃあ今日もお叱りを受けに行きなさい？」

「うひええええ……!？」

全く……。

翌朝、すずかに引つ張られて私はサッカーの応援に行く事に。

めんどくさいけど……、ジュエルシードの気配がするわね。一応交渉で回収してみますか。

「そこ行けー!」

まあ、応援終わってからだけど。

日曜日はゴロゴロしたいんだけどなあ……。とりあえずこのお仕事終わったらね。

というか、どう考えてもこれは小学生のレベルじゃない。なんでボールがギョルギョルいつてんの？

「試合終了！ 2対0で、翠屋JFCの勝ち！」

「よし！」

「やったー！」

「うわーい！」

さて、舞台は移って翠屋。

もきゅもきゅと食していると、サッカー少年達が出てくる。

「ありがとうございますー！」

よし、行くか。

「3人とも、ちょっと出てくるね」

「あ、行ってらっしゃい」

「はい」

「う、うん」

3人(と一匹)から離れると、2人で歩いているマネージャーとキーパーに近寄っていく。

恋人、か？ ちょっと初々しいなあ。私はただけだな！

「ちょっといいかな？」

「え、なに？」

「なんですか？」

声を掛けると、揃ってこっちへ顔を向ける。

キーパー、小学生の癖に顔整ってるなあ……。

スーパー小学生、に入るのかこの場合？

「キーパーさん、さつき青い石持ってたよね？ ちよっと気になることがあるから、見せてもらってもいいかな？」

「あ、うん。どうぞ」

「ごめんね、ちよっと失礼」

いきなりで驚きつつ、石を受け取ってまじまじと見つめる。

あ、決定です。ジュエルシードですわ。

んじゃ、交渉と行きますか。

「やっぱりか……」

「それが、どうかしたの？」

「この前、動物病院にトラックが何か突っ込んだって事件、知ってる？」

「あ、うん。聞いたことは」

「それ、実はこれが爆発したせいなんだ。こう見えてかなり危険な爆発物で、ちよっとの衝撃で爆発しちゃうことがあるの」

「そ、そうなの!？」

おーおー、驚いてる驚いてる。

女の子の方もキーパー君の手をぎゅっと握っている。得点UPを狙っているんですか？などと無粋なことは聞かない。普通怖いだろっしね。

「私の知り合いにこれを処理できる人がいるから、できればこれを貰いたいんだけど……、だめかな？いくらかならお礼金も出せるし」

「いえ、お金は要りませんから、それをお願いします……」

「ありがと、こっちも助かります。今後これと同じものを見つけたら、ここまで来てください。私が預かりますから」

先に紙に書いておいた住所を手渡すと、少年はそれを受け取ってポケットへ。

よっし、事前に防げた。後は見えないように簡易封印を掛けて、とちゃんとした封印は帰ってからやればいいかな。

私の魔力に当てられて、なんてこともないし。普段は漏らしてないからね。

「ありがとう、君が教えてくれなかったら、とんでもないものを彼女に渡してたところだったよ……」

「いえいえ。それじゃあ、私はこれで」

「あの、ありがとうございました！」

そう言つて頭を下げる2人。いい子たちやなあ……。

軽く会釈すると、2人のことを見送つてから席に戻る。ふう、これで4つ目、と。

あれを回収できてなかったら、あの2人も被害に遭つてたね……。

「なにしてたの？ 栞」

「ちよつと危険物処理」

戻つたらアリサに聞かれたので、そう答えてやる。

「あの爆弾？」

「そ。2人は見つけてないよね？」

「大丈夫！」

「私もないよ」

ふむ、まあ早々見つかる事もないだろう。これで残りは13個。フ
イトがどれだけ集めてくれるか、かな。

私もプレシアに会いに行かないとまずいし……。管理局の動向も気になる。原作どおりになるなら、まだまだ先だけ……。まあともあれ、なのは。あんまり怪我してほしくないんだよ？あなたにはさ。

6話 災厄の芽は出る前に種を潰す（後書き）

もう一話あります。

7話 運命との邂逅（前書き）

次回更新で原作がつつり変える予定。

7話 運命との邂逅

「ふわぁ……………」

「おはよう、栞」

「はい、2人ともおはよう。早く顔洗ってきなさい？」

「はぁーい……………」

今日はなのはやアリサ達がお茶会に来るらしい。

こういうとき、家ってすごいんだなぁ……………と実感できる。

「おはよう、忍姉さん」

「はいおはよう。ジュエルシード探しは順調？」

「まあまあ。4つしか集まってないけど、他の連中も動いてるからなんとかなるでしょ」

「【魔女】も大変ね……………。ああそうそう、『ご飯』は足りてる？」

「今のところはね。後1年は問題ないから、大丈夫だよ」

忍姉さんの心配にそう返すと、忍姉さんは安心したように笑う。

まあ仕方ないといえば仕方ないけど。あ、ちなみに忍姉さんにはジュエルシードのことは教えてあるから問題なし。

このまま行くと、私はいずれ身動きできないほどの『飢え』に襲われるんじゃないかとびくびくしている。

だけど、まあそれは無限書庫に顔を出すぐらいで解消できると思うんだ。無限ってついていていくくらいだから、私が死ぬぐらいまでなら持ってくれるさ。

「さて、じゃあ私はお茶会の支度をしてくるね」

「栞お嬢様、それは私が……………」

「そうだよ栞ちゃん！私達が」

「いいからいいから。クッキーくらい焼かせてって！」

これが、私の日常です。

さて、クッキーを焼き終え、そのクッキーを軽く盛り付けるといつのまにかいたブルーベルに渡す。

ノエルとファリンは、私がやっておくからと言って出迎えとかに回ってもらった。

「少しは出番貰わないと忘れられちゃうからね！ ふふん」

ちよつと電波を受け取っているけど、とりあえず一緒にお茶を運ぶ事に。

つて、もうなのはとアリサ来てるじゃん。

結構長い間お菓子作ってたのか……。料理本は殆ど『食べた』しなあ……。

「よつす、なのは、アリサ」

「あ、栞ちゃん」

「あんたが作ったの？クッキー」

「そ。はいどうぞ」

カタン、とテーブルに皿を置いて、窓側の椅子に座る。

あ、私が代わったからファリンの転倒未遂は起きないぜ。

「あ、じゃあ外いこっか」

私、ずっと移動しっぱなしだなあ……。

所変わってお外。

ここでジュエルシードが発動するんだよね。ずずっと淹れて来たココアを飲みつつ歓談することに。他の皆は紅茶だぜ。私とブルーベルだけ。

「そつえば、ブルーベルは学校行かないの？」

「私は大学ぐらいまでの知識は詰め込んであるから、行く意味ないんだ」

アリスが聞くと、ブルーベルがそう答える。

冗談ではなく、本当に大学レベルだから困る。

しかも最近簡単な魔導書にも手を出し始めていて、既に簡単な魔術なら行使できるようになってきた。

【魔術師】のユニゾンデバイスか……。いずれ私と肩を並べる【魔女】になれるのかな？

ああそうそう。ブルーベルとユニゾンしているときは魔力光は青だけど、私本来のは黄金色なので。

リンカーコア通しても黄金だったから驚いた。魔力光ってリンカーコア通してるからその色が移るとばかり思っていたけど、私は違うらしい。

魔力光が変わるなんて聞いたこともないしね？

「でも、学校も楽しいよ？」

「お姉ちゃんと一緒の方が好き！」

「いい子に育って……」

思わず抱きしめてしまった私は悪くない。

……いや、きつとあれは気のせいだ。なんかドリル縦ロールとかどつかでみた制服みたいな服装とかのやつが猫を追い回してるなんて

「待てー!」

「ニヤー!」

あれ、そういえば少し前に実験で描いた魔法陣消したっけ?あれー、処理後でいつかーとか思ってたまま放置しちゃった気が。

ああそうかー、それってもしかしたらもしかしなくてもあの子じゃね?

「何やってんのベルゼエエエエ!」

「にゃー!」

「ニヤー!」

一瞬でベルゼブブの後ろに回り頭をはたき、こっちへ連れてくる。全く、なんでこの子出てきてんの?私呼び出してないよね?多分あの魔法陣だろうなあ…、勝手に出てくるなっつての。

「あ、お嬢様あー! お久しぶりですー! お腹すきました!」

「……とりあえず、言うべき事があるでしょう」

んー?と口に手を当てて数十秒。

もくもくと考えて、ベルが口を開く。

「あ! 暴食のベルゼブブ、ここに」

「違あああうー!!! そうじゃないでしょ、勝手に出てきちゃったことを謝るんですよこはー!」

「え、お腹すきました！」

「ちが、おま、てかなんでさつき猫追っかけてたの!? 食べようとしてた!?!」

「違いますよー。まさか生物なまものを食べるわけじゃないですよー」
「字だけ同じにすりゃいいってもんじゃないからね!? 私それじやすまさないよ!?!」

「ただ、お腹すいたから猫の餌ってどんな味かなーって見てみたら、威嚇されちゃってー」

「より悪いわアアアア! とりあえず一刻も早く戻んなさい! つか他の子もなんで止めなかつたんだ……!?!」

「あ、お土産よろしくって言ってましたよ?」

……あの子達、なにしてんの?

ええ、お察しの方もいらつしやると思いますが、『煉獄の七姉妹』の1人、暴食のベルゼブブです。

なんで出てきちゃったかなあ……。

「うん、とりあえずご飯はしたくしてあげるから猫追っかけまわしたり、餌をとろうとするのは止めなさい。オーケー?」

「お嬢様がそう申されるなら……。まあ」

「ええっと、勝手に出てきちゃったの?」

「そうみたいね……。ほら、クッキー」

「やったー!」

すずかの問いに呆れつつ答える。けど。……こいつ、全部食いやがった!

いいや、強制送還ね。

「あ、ちょ、待ってくださいとお嬢様?! その手に持った、というより掲げてる椅子は、なんのために「殴るためよ」誰を!?!」

「あなたに決まっているでしょうベルゼブ。せつかく皆で食べるはずだったクッキー、どうして1人で食べちゃうのかな？ ねえ？」
「えーと、それはすっごく美味しそうに見えたので、ついつい手が」「手が、でなくて両手が、でしょうか？」

「あー……、いや、その……、すいませんでしたあー！」

「問答無用！！」

「ぎゃふん！」

椅子一閃。綺麗に決まったわ。

とりあえず即席で魔法陣をガガツと書き終わると、気絶しているベルゼブを無造作に放り投げて向こうへ送り返した。
よし、後は自室の方を消せばいいわね。ったく……。

「……なんだか、いろいろと見ちゃいけないものを見た気がするの
は気のせい？」

「あれ、私話してなかったっけ？ アリサとなのはに」

「話してないからこういう反応なんじゃないかな……？」

「あーあー、オーケーわかった。じゃ、まあその辺はまた後ほど解説いたしますのでごゆるりとお待ちござらん遊ばせ？」

「はあ……、まあいいわ。そんなときまで待つ。それでいいのよね？」

「オーケーオーケー、上出来だよアリサ。じゃ、私はちょっと出てくるわ」

「あ、私も！」

どうもジュエルシードが発動してる。とつとつといって収めねば。

ちよい投げやりな返答になってしまったアリサに心で謝罪しつつ、私はココアを一気に飲み干してその場から駆け出す。

すずかは私の事がわかってるし、アリサは「またか」みたいな感じで見送ってる。

なのはは……、ああ、多分またくるなあ……。とりあえず、と。

「でけえ……。おいおいおいおい、こいつあちよつとばかしばかに
しすぎじゃねえかあああああ？」

「なんで魔女に入ってるのよ、栞」

「ああ、雅かよ？　なんでつてそりゃ、用心に決まってるんだろお？」

ついつい驚いて【魔女】に変わってしまったけど、落ち着いて、チ
エンジ。

よし、戻った。というか雅、なんでいるのよ。

「で、これを封印すればいいの？」

「ユニゾンはあるかな？」

「そちらのお嬢さんが誰なのか聞きたいのは山々だけど、まあ封印
でいいわ。そうすれば勝手に出てくる」

よし、大体わかった。

とりあえずユニゾンして、と。

「姿が変わるのね……」

「アクアシーリング、準備」

『はあい、お姉ちゃんッ！』

うむ、どこぞの煉獄の姉妹臭がするがいいだろう。

アクアシーリング、まあ簡単に言えば水で相手を押しつぶして、魔
力ダメージだけを与えて封印を施す魔法。

水を使用するアクアシリーズの中で中々使う機会のない魔法だけど、
これ一つでロストログアすら叩き潰せる圧倒的な魔法です。

『アクアシーリング、セット！』

「対象、ジュエルシード。融合している原生物への攻撃は禁止」

『アクアシーリング、発動!』

直後、バシュツ!という音と共に巨大な猫が水に覆われ、ぐぐつと水の膜が薄くなつていく。

位相の違う、猫の体内のジュエルシードを封印するために中へと入り込んでいるのだ。

完全に水が消え去った直後、猫が縮んでいくその上空にジュエルシードが水に覆われて現れていく。

「ふう…。封印完了。そちらの協力者は?」

「もうそろそろ来るわ。凍結しても?」

「ええ」

言った直後にパキンツと音がして、ジュエルシードごと水が凍る。相変わらず雅の凍結魔術は凄い威力ね……。

私も魔術のバリエーションは広いけど、雅は凍結のみを突き詰めた魔術だから、その威力は比じゃない。

ここからでも周囲の大气ごと完全に凍り付いているのがよく見える。向こうの風景が歪んでいるもの。

少しすると、風を切る音とともに私と同じぐらいの少女が来た。

「…っ! 私と同じ探索者!?!」

「安心なさいな。私は雅の友人、月村栞」

「そう、ですか……。あの、ジュエルシードは」

「雅が確保したわ。というかあいつ、とっとと消えたわね……」

いつの間にか消え去っていた雅に代わって、金髪の少女が口を開く。

「ジュエルシード、持っていませんか?」

「持ってるけど、渡せないわよ? 私も【魔女】だから」

「そう、ですか……」

「ねえ、あなたのお母さんに会わせてもらえない？　もしかしたら何か協力できるかもしれないから」

「…後で、そちらに転移座標を送ります」

「ありがと、フェイトちゃん？」

私が名前を呼ぶと、フェイトは驚いたように目を見開いた。

いや、普通驚くか。私が雅に教えてもらったことを伝えると、納得した様子で頷いた。

「でも、そんなに簡単に信用してしまっているの？」

「【魔女】は決して身内を裏切らない。雅さんが言っていました…。だから、大丈夫だと思いました」

「そう……。じゃあ、改めて自己紹介としましょうか？　【奇学の魔女】、【魔女連盟】【十重理事会】所属、月村栞よ」

「あ、フェイト・テストロッサです」

うーん、それにしてもあのデバイス改造したいなあ…。

ほら、私知識はあるから実践したいのよ。一から作るにしても材料ないし？

だから、プレシアと接触すればその材料もあるかなーと思って。

一番はアリシアを直し、プレシアの根底を引きずり出す事だけだね。

「じゃあフェイト、このあとすぐに女の子が来るはずだけど、その子がジュエルシードを持つてる。お互いのを賭けて勝負にしようときなさい？」

「でも、ジュエルシードは…」

不安げに言うフェイトの目の前で、体内からジュエルシードを一つ取り出す。

既に完全に封印してあるから、魔力に当てられることはない。それをフェイトの目の前で安定させると、少しだけ上昇する。

「それを賭けなさい。あなたが勝てば賭けた一つ分増え、少女が勝てば少女の物になる。一応勝ってね？」

「……もちろん」

ふふ、中々いい子ね…。

こりゃ雅が肩入れしたくなるのもわかるわね…。

「それと」

『はい。ヒーリングブルーライト』

「あ、これ……」

フェイトの近くまで移動し、新しく魔法を発動させる。

これは全身の傷や疲れを癒す事のできる、私の新構築した魔法。

ブルーベルの特性をフル活用しているから、私達以外には使用できないんだけどね。

「これで楽になるはずよ。それじゃ、頑張って」

「……はい、栞、さん」

「同い年だろうし、ちゃん付けか呼び捨てでいいわよ」

「じゃ、じゃあ…、栞」

顔を真っ赤にしながら呼ぶフェイトの頭を撫でてから、私はその場から立ち去った。

さて、それじゃあ戻って魔法陣消すついでにココア淹れてこよう。

そんで、その後は座標を貰ってご対面ね…。

7話 運命との邂逅（後書き）

以上。

煉獄の七姉妹については、全員が出たときに紹介ページをつくりま
す。

原作とは違う点もあるので。

8話 対談と蘇生（前書き）

ストックがたまってるので更新。

2話分＋七姉妹の独自設定説明の3本です。

8話 対談と蘇生

あの後、随分ポッコボコにやられたらしく、なのははフェイトのことを考えているらしかった。

とりあえずこれで顔見知りにはできた。というか、これで隠し持っている2つのジュエルシードのうち、1つは雅が手に入れたと考えていいね。

さて、それじゃあフェイトから座標も貰ったし、いくとするか。原作ぶつ壊すぜええええ！

「ブルーベル、緊急障壁の準備はオツケー？」

「うん、問題なしだよ！」

よし。それじゃユニゾンして、と。

「転送術式解凍。転送準備開始」

『転送！』

バシユツ！とまあ、そんな感じの青い光に包まれ、私はとユニゾンしたブルーベルプレシアの根城である時の庭園へ。

そしてささつとユニゾンを解除すると、目の前の扉を押し開ける。念のために【魔女】で行くか。

「はじめましてだな、プレシア・テストロツサ？」

「ッ！？ 誰！」

「くくく、そう怖い顔をするな。妾は【奇学の魔女】月村栞」

「そして、そのユニゾンデバイス、月村ブルーベル」

我らの紹介を聞き、ふっと警戒を消す。

どうやらすぐに【氷像】と同じ【魔女】だと気づいたらしい。聡明だな？

「プレシア・テストロツサよ。どうやってここを？」

「なに、妾が少し調べてみただけの事。……そなたは、なぜフェイトを愛せぬ？」

「……あれは人形よ。私が目的を果たすまでの」

くくく、やはりこやつは面白い。

ニンゲンとして綺麗な歪み方をしておる。さて、少し見ただけでもアリシアの魂が色濃く残っておる。

というか、これはとり憑いておるのか……。面白い。

「アリシアのことを忘れてしまいそうになるから愛せぬ、と？」

「ッ！ なぜあの子のことを！」

「言ったであろう、調べた、と。つまり、アリシアがそこにいるならばフェイトを娘として愛せるという事だな？」

「……それならば、どれほどよかったか。あの子達が一緒にいられたら、どんなに幸せだったか……！！！」

少しつついただけで、あっという間に瓦解するか。

まあ、フェイトがこの場にいないのだから仕方ないともいえるが。

ではこの心優しき母親のために、少しばかり力を振るってやるとするか。

「妾がアリシアを蘇らせる事ができる、といったら？」

「……嘘よ。出来るわけない。それは、私が一番よく知ってる。だからこんな茶番を打ったのよ……」

「妾は【魔女】であるぞ？ くく、一度きりの大技ではあるが、確実に呼び戻せる」

そう言ったとき、間違いなくプレシアはこちらをみた。
くく、やはり母の愛は偉大であるか……。麗しきはその母子の愛とい
った所か？

「ほん、とうに……？」

「ああ。だが、その前にアリシアの霊と話をする必要があるのではな
少し待て？」

「え！？ え、ええ……」

どうやらいたことには気づいていなかったらしい。

まあ普通、霊視などできる人間はそれ相応の鍛錬を積むものだから
な、【魔女】でも妾やイリアなど高位の存在にしかできん。

その証拠に、霊などに遠い凍結を操る雅はその適正が薄い。尤も、
それでもうつすら存在を感じることもくらいはできるのでがな？

「さて、話は聞いていたであろう？ アリシア・テストロッサ」

「ええ、聞いてましたとも。蘇れるの？ 私」

「ああ、蘇れるとも。だがしかし、そなたの意思も必要だぞ？ 本
当に蘇りたいと願うその心こそ、その奇跡を実現する鍵なのだから
な」

体が透けて裸になっているアリシアに声をかけると、そのまま続け
る。

しかし……、随分とくたびれておるのは妾の気のせいかな？

「気のせいじゃないわよ。私が5歳で死んでから26年間、私は幽
霊としてずっとお母さんにとり憑いてたんだから。そりゃ疲れもす
るってーの」

「くく、そなたも中と外が一致せぬ者か。妾も同じだが……、まあこ

れはもどつてからにするか。ともかく、そなたの意思が必要だといふ事だ」

「りょーかい。ふ、ふふふ、ようやく我が5歳児ボデーに戻れるときが来たわ！ フフ、ウフフ、アーッハッハッハッハッハ！！！」

どうもアリシアがぶっ壊れているが、まあよからう。それほど退屈は人を殺す。

「さて、プレシアよ。準備は整った。体の下へと案内してもらおうか？」

「え、ええ。こっちよ、ついてきて」

そういったプレシアの後に続き、秘密の隠し部屋へ。ほほう、また随分と趣味の悪い部屋だな？

「結構凄い光景だね…。見慣れてるけど」

「さて、体を外へ出せ。力を使うのに遮蔽物はいらぬ」
「わかつたわ」

そうして中から出されたアリシアの体を丁寧にタオルで拭い、綺麗になったところで目を閉じる。

「アリシアよ、願え。己が魂と信念に賭けて、たった1度の奇跡を起こして見せよ！」

「ええ、もっちゃん！ 若くてぴちぴちの体に戻るんだもの！ 5歳児ぴちぴちボデーに！」

「若干邪な考えもあるが、聞き届けろ、神！」

承知した。叶えるぞ！

次の瞬間、アリシアの体に光が叩きつけられるようにして吸い込まれていき、同時に魂となっていたアリシアも中へ入っていく。

「こ、これは!?!」

「案ずるでない」

一言いい、光が収まるのを待つ。

やがて光が収まっていき、最後には完全に元の明るさに戻った。

よし、これで成功したはずだぞ? 一度きりだから失敗できないのだがな。

「も、戻ったあああああ!!!」

「ふむ、成功か。よかったなあプレシア・テストロツサ?」

「ええ。これで……、あの子を否定しなくても済む……! 2人とも、愛してあげられる……!!!」

妾の隣で、プレシアはポロポロと涙まで流しだした。

くく、やはり人の子か。

しかしアリシア……。

「そなた、もう立ち上がれるのか」

「どうも神様がちよっとおまけしてくれたらしくて、身体能力だけは少し上がってるみたい。鈍りもない」

「ほほう……。あやつも粋な事をするものよ。さて、妾はそろそろ終わるか」

言って頭を切り替える。あー疲れた。

なんで【魔女】になった後ってこんな疲れるんだろうか。

「…随分さつきと雰囲気違わない?」

「こつちが素だ。プレシア、そろそろ泣くの止めてくれないかな？
いろいろ話もあるし」

「わ、わかつたわ……」

それから数時間に渡って、私はアリシアとプレシアに質問責めにあ
った。

プレシアの持病は私が以前試しに作ったエリクシールで治した。あ
の程度なら余裕よ。あとエリクシール飲ませたら若干若返ったし。
で、こつちがぐったりするぐらいになってようやくすっきりした顔
の2人。

「アリシア、服着たら？」

「ないじゃん？ それに裸に慣れた！」

「慣れちゃだめ」

ふむ、しかしほんの数時間で原作が終わったぞ？

後はジュエルシードを回収すれば万事解決。なのだが……。

「プレシア、それにアリシア。あんたたち私のとこに来ない？」

「え、でも……」

「今度フェイトが来たときに私も一緒に来るから、そのとき答えて
いいからさ」

「わ、わかつたわ」

「私はいいと思うよ？ぶつちゃけるとお母さんのやってたことって
管理局にとってばれたらまずいことだし」

伊達に年食ってねーぜ。と威張るアリシア。

まあ境遇としては一緒みたいなもんなんで、ちよつとしたシンパシ
ー感じるんだよね。

さて、なにはともあれ、これで権利は使い果たした。だからどうし

たっつて感じだけど。

「でさ、お母さん？」

「な、なに？ アリシア」

「とりあえず、次フェイトが帰ってきたら全力で謝りなさい、アルフにも」

「そ、それはわかってるわ…。私も、もうあんなの嫌だから…」

よし、とりあえずこっちは大丈夫みたいだね？

雅に連絡をいれておかねば。

「じゃあ、私は今日はこれで帰るわ」

「ええ、ありがとう菜。本当に世話になって……」

「もしかしたらこれからも、だけどね。じゃねー、しおりん！」

「ふふ、じゃあね」

奇妙なあだ名とともに、私はブルーベルとユニゾン、座標を特定して転移する。

しおりん、か。可愛いかもしれん。いや、呼ばれたいかって言っただけだ。

『八口八口、雅？』

「菜、どうしたの？」

次のジュエルシードのために町内を探っているところへ、通信が入る。

モニターには我が友人の顔が映されていた。

『プレシアの歪み矯正とアリシアの蘇生成功。もう蘇生は使えないけど、これでフェイトへの虐待も止むわ』

「相変わらず凄い仕事の速さと正確性ね…。ありがとう、招待でもした？」

『ええ。我が家に住まないかって。もしかしたら弟子ができるかも』
「ふふ、それは素敵。じゃあそろそろ切るわ。次に報告に行くのが楽しみにってきたわね」

『ええ、楽しみにしてなさいな』

それだけを交わし、モニターを閉じる。

そうか、やってのけたか。

相変わらず彼女は規格外だと思いつい苦笑してしまう。

何を今更な事を。彼女が規格外なのは今に始まった事じゃあない。

ともあれ、今はこの事態を收拾する事。そうしなければ、こっちにかけてもフェイトだって満足に寝れやしない。

「さて、もう一頑張り行きましょか」

私も、寝るのはもう少し遅くなりそうだ。

8話 対談と蘇生（後書き）

ということ、すでにジュエルシートを『集める』意味はなくなりました。

後は回収するだけです。

9話 いざ温泉へ。(前書き)

誤字等ございましたらご指摘お願いいただけるとありがたいです。

9話 いざ温泉へ。

さてさて、今日は連休。

高町家のお誘いで、私達月村家は小旅行へのお誘いを受けてそれに乗る事になったのです。

「んー、いい景色。ね、ブルーベル」

「うん！」

「本当にいい景色ですね、お嬢様」

「あー、アスモそれ私のー！」

「なんでよ、ベルゼはそっちがあるでしょー!?!」

「ねーねーお嬢様、行く旅館ってどれくらい大きいの？」

「そうね、まあ家よりは小さいだろうけど、旅館としては立派な方じゃない？」

「へー！」

「ねむいよー……」

「お嬢様、あまり身を乗り出すと落ちてしまわれますよ」

「わかってるわ、ベルフェ。ありがとうね」

「い、いえそんな！ もったいないお言葉、ありがとうございます」

「ベルフェ顔赤ーい！ 照れてるー！」

「うっ、ぎぼちわる……」

「ぎゃー!! ちよっとレヴィア姉、吐かないでよ!?!」

……なんで、こいつらいんのかなあ……。

いや、すっかり魔法陣閉じるの忘れてただけど、なんか旅行行く前日になって出てきちゃってさあ。

まあ貯蓄はあるから別にいいんだけど。

「あんたたち、車の中で騒ぐんじやなあああい!!」
「……………は、はい!」「……………」

「………」

えー、お察しの通り、煉獄の七姉妹です。ノエルさんに頼んで、大き目のレンタカーを借りてそっちに乗っています。

運転手がノエルさん、その横の助手席で本を読んでいるのがルシファアー。

2列目は、ノエルの後ろが私、真ん中がベルフェゴール、ルシファアの後ろがサタン。

3列目は眠そうにしているマモンが私の後ろ、その隣がレヴィアタン、ベルゼブブ、アスモデウスの順。

ブルーベルはちっさくなって私の肩に乗っている。服はずすがもついていた人形から拝借した。

しかし……、レヴィアの奴、マモンの方に吐こうとしたわね。レヴィアは鬼太郎袋、と。

「もうすぐ着きますから、我慢してくださいねレヴィア」

「ノエルう……、気分が………」

あーあー、もうレヴィアは車だめね。密閉空間だと気持ち悪くなるのかしら。

「レヴィア、私と場所代わる?」

「うう………、いいですかあ………?」

「いいわよ。ほら」

ちょっと動きづらいくけど移動して、レヴィアを私のところ、窓際へ移動させると、私が後ろへ回る。

と、次の瞬間。

「うつ、おぶええええええ……!!」

「ちよ、レヴィア!?」

「マモン、そつちにティツシユあるからとつて!」

「これ?! ベルフエ姉!」

「そうそれ! ほら、大丈夫!? レヴィア姉!」

……あはは……、大丈夫かしら、こんなんで。

「それ私のだよベルゼ姉えー!」

「ベルゼ、車の中でクツキーぼろぼろ落とさないの!」

「ぶおふえんふあふああい!(ごめんなさあい!)」

ベルフエ、苦勞をかけるね……。そしてルシファーは全く我聞せず
で本読むな。なんか私虚しくなるから。
早くつかないかなあ……。

つ、ついた……。

あれからもいろいろと騒動があつたけども、とりあえず一段落だな。
ああ、それと。到着したら七人全員に移動、出現、帰還の許可をだ
したから原作張りに消えたり出てきたりできる。

杭にもなれるとおもつよ? そもそも、あの七人は私のオリジナルだ
からね。

杭と七大罪をブレンドした七姉妹だから、最初の頃はうみねことはちがって自由が効かなかった。

その割りに結構普通にできてるんだけど。ああ、ちなみに7人も消えるときとかは黄金の蝶です。なんで蝶かはわからないけど、黄金なのは私の魔力光が影響してるんだろ。

「すみません士郎さん、いきなり人数が増えてしまっ

「いや、構わないよ。人が多い方が楽しいからね」

「七姉妹、礼は？」

「「「「「「「「「「「心配り感謝します、高町士郎」「「「「「」

横一列に並び、揃って礼をする七人。

既にうみねなこと同じだけの力、頭脳を持ち合わせているが、性格は違う。

私が【魔女】となればその性格も完全に変貌するものの、今はそこまで強烈な性格でないことは断っておこう。

「さて、そんじゃまずは温泉よね」

ということで、女性陣皆で女湯へ。

「皆発育いいのね……」

「お嬢様？それはお嬢様も同じかと思えますが」

「……ねえ、お嬢様？ どーして9歳児が私よりお胸がおりになられるのであらせられますか？」

「言語がおかしくなってるわよレヴィア」

ルシファーに突っ込まれたけど、まあいいか。

ささっと服脱いで、……レヴィア？ちょ、乳揉むんじゃないわよ。

「ほら、どう考えても9歳児の乳じゃないですよー！嫉妬しますー！」

「レヴィア姉、他の方の目もあるんだからそういつことはひゃあ！？」

突然の媚声。何事かと声の主を見ると、ベルフェが襲われていた。ベルゼとアスモに。

「わあー、ベルフェ姉おっばいおっきいー！」

「おっきいー！」

「栞、ほんとに私と同じ年だよね？」

「すずかまでそう言う……」

すずかにまで歳を疑われた……。
ぐすん……。死のう……。

「わー、わー！！ ちょ、お嬢様助けてくださいあああいい！」

「あれ、アスモも大きいわよね？」

「……サタン姉？ そのジト目は……？」

「マモン、ここは襲うべきよね」

「そうね、サタン姉」

「あ、ごめ、お嬢様、助けてえー！？」

お風呂入ろう……。ぐすん……。

失意の中ガラガラと温泉へ。なぜ助けられないですか、他の面々。

「大丈夫ですか？ お嬢様」

「あ、ルシファー……。体、洗って」

「はい、仰せのままに」

皆がそれぞれくつろぐ中、私はルシファーに体を洗ってもらった事にした。

私の創った(?)七姉妹は、どうも乳にはらつきがあつてね…。

巨乳 ベルフェ アスモ ベルゼ ルシファー レヴィア サタン
マモン ひんぬー。という感じ。

左からでかい順ね。私は……、まあベルゼと同じぐらい？

ベルフェはもう、形いいし大きいし……。Eはあるわ。ありえねえ。アスモは、Dくらい？ベルゼからはまあ皆同じくらい。とりあえずベルフェとアスモだけおかしい。アスモは色欲だし、まあわからなくもないけど……。

ベルフェはなんでだろう。まあいいお嫁さんになれることだけは確かだ。渡さんけどな。

「いかがですか、お嬢様？」

「ええ、いい気持ち」

「ふふ、おくつろぎくださいませ」

嬉しそうな笑みを浮かべて、ルシファーが私の体を洗う。

しかし、あの6人はまだ脱衣所で騒いでるのかしら？

にしても、ルシファーうまいわね……。今度からルシファーに頼もうかしら。

「あー、ルシ姉ずるーい！」

「やっときたの？」

「私も洗うー！」

「これは私が仰せつかったんだ！」

「そうよレヴィア。あなたたちは体を流したらちゃんとお湯に浸かりなさい？」

「……はーい、お嬢様」

全く……。どうせなら、家事を1人一個割り当ててみるとか？
……ベルゼはどう考えても厨房に入り浸るわね。なしなし。

「はい、これでおしまいです、お嬢様」

「ありがとう。これからもルシファーに頼もつかしら。やってくれる？」

「は、はい！！喜んで！」

あら、いつもなら「仰せのままに」なのに……。
嬉しいものね。

「じゃあ、入りましょうか」

「はい！」

ちやぷん、とさしたる抵抗もなく温泉の中へ。
んー、やっぱり心地いいわね……。温泉はいいものだわ。
と、するとアスモが擦り寄ってくる。

「お嬢様、すべてすべだあ……」

「ありがとう、アスモ。あなたもね？」

「えへへえー、お嬢様だーいすき！」

「私も抱きつくー！」

「私もー！」

「あらあら」

アスモが右腕にいたので、ベルゼが左腕に、マモンが背中にくっついてくる。

ルシファーはなんかこっちを見て微笑んでるし、他の3人はどうくつつこうかと思案している。

愛されているのはわかるんだけど……。この子たち可愛いし？襲

「つちやわらない自信がないともかぎらん。

「あ、栞ずるーい。私もー!」

「すずか様?でしたらこちらに」

「ありがとう、ベルフェ」

私がくつつかれていている事に嫉妬したのか、すずかも声を上げると、ベルフェがわざわざすずかを招く。

ベルフェはほんとにいい子ねえ……。あ、サタンとレヴィアもくつついた。

「わあー……。ベルフェって胸おっきいんだねー」

「そ、それは……」

「そうですね?そう思いますよね!?すずか様!」

「う、うん」

サタンがここぞとばかりに詰め寄る。

レヴィアはどうやらくつついていらればいらしい。小動物みたいな子だね?

ブルーベルは、ちっちゃくなったまんまで桶にお湯を入れてそこに入ってる。

「うはあー、気持ちいいー……」

「ふふ。よかった」

それからしばらく、茹で上がるぐらいずーつと入っていたけど、ようやくなのはとすずかがでて、アリサがでたところで私も出ることにした。

「えーっと、ベルフェゴール、さん?」

「なんですか？アリサさん」

「皆さんって、どんな……」

「それを話すのは少しばかり長くなってしまいますから、今夜落ち着いた頃ではいかがでしょうか？お嬢様もご同席願いますので」

「あ、わかりました……」

ん、この前のベルゼ帰還をみてから、アリサは時々魔術について聞いてくるようになった。

これだけ特徴的な人がいれば、その中で尤もまともな人に聞きたくなるのはわからなくもないが。

まさか当事者に聞きにいくとは……、すごいね。度胸があるどころじゃない。

「ということなのですが……、申し訳ありません、勝手なことをしてしまいました」

「構わないわ。遅かれ早かれ話さなければ動けなくなる。それに、彼女の父親とも【魔女】として面識があるのだから、教えておかないとね」

「さようでございますか……」

「そゆこと。さ、お土産でも買いに行きましょうか」

「はい、お嬢様」

他の面々も人の迷惑にならない程度でなら好きにしていると許可を出しておいたし、まあ大丈夫だろう。

なにかあれば、ふふ……。

9話 いざ温泉へ。(後書き)

ということ、アリスに七姉妹の正体と【魔女】についてを話す事になった筈。

書いてて「9歳じゃないよな…」と思ってしまうのはどうしてなのだろう。

9・5話 煉獄の七姉妹独自設定紹介& (前書き)

小説に入るとちょっとエッチい表現があるかもなので、お気をつけて。

前半は七姉妹の紹介です。

9・5話 煉獄の七姉妹独自設定紹介&

煉獄の七姉妹

能力を受け取ったのではなく、自分で魔術を発展、作成したため原作の『うみねこ』とは性格が違っている事がある。

召喚する主人によって性格が変わるということもあり、原作とは大きく違っている点にご留意ください。

長女 傲慢のルシファー

偉そうな割に弱い。姉妹中最弱ながら姉なので言うことは聞いてくれる。この辺までは原作と同じ。黒髪ロング。

ドジっ子で柔至上主義の中でも一番の人で、柔に敵対するものは確実に葬り去ると公言できるほど。

一番弱いとは言っても、魔道師では手も足も出ない。シグナムが強い勝負できるぐらい。

柔の周りの友好的な人間や柔の弟子にはちゃんと礼儀を持って話せるので、いい人ではある。だがドジっ子。何も無いところで転んだりする。

胸は平均的で、大きいのも小さいのも嫌な人。最近は柔の体を洗う許可を貰えてご満悦。

次女 嫉妬のレヴィアタン

普段は気が弱く泣き虫。ことあるごとに他人に嫉妬する。緑髪ウエ

ーブ。緑髪と打ち込んで翠神と出た。

車が苦手で、長時間乗っていると必ず吐いてしまうほど。柔至上主義は3番目くらい。

なにかをとられることに強い抵抗を示し、仮にベルゼが食事を横取りしようとしても蹴り飛ばしてでも阻止しようとする。
割と頑固。

胸はルシファーよりやや小さめ。

三女 憤怒のサタン

怒りっぽいが実は怒りたいM気質な子。白髪で縦ロール。

初めて栞に怒られたときに、今まで誰も叱ってくれなかったためにうれし泣きしてしまい、それ以後栞と2人きりになったときには別人のように甘えるようになった。

胸が小さく、度々アスモに襲い掛かることも。まな板と言われると怒りを通り越して必ず泣き出してしまふ。

四女 怠惰のベルフェゴール

全てにおいて主である栞をサポートしていくことを生きがいとしている。が、案外栞がしっかりしているため、中々その機会がない。黒髪で短めのポニーテールで、律儀に貸し借り、恩義を気にする性格。

レヴィアを泣き止ませ、ルシファーが転ぶのを防止し、サタンを慰め、マモンを諫め、ベルゼを止め、アスモを諭す良きおねえさん。時折疲れたように溜め息をつくときがあるが、それを栞に見せることは絶対にならない。はずなのだが、実は見られているということに気づかない。

実はクツキーとココアが大好物。

胸が七姉妹中一番大きく、ベルゼやレヴィアに弄られている。

五女 強欲のマモン

一目見て栞を欲しいと思い、誠心誠意尽くす事にした子。茶髪ロング。
あっけなく手玉に取られるが、それも悪くないと若干M嗜好が入ってきつつある。

自分の目の前で他の誰かを構っていることが嫌いで、何とか気を引こうとまとわりつくことがある。

かなりボディータッチが多いが、本人はそれに気づくと顔を真っ赤にして消えるので、栞は面白がって諷めない事も。

胸は姉妹中最貧で、サタンよりも引っ込んでいる。本人もやや気にしているが、サタンへのまな板発言が一番多い子でもある。

六女 暴食のベルゼブブ

美味しいものが大好きで、美味しいものを作ってくれる人も好き。まごうことなき金髪ドリル縦ロール。

実は未知の食材、食事にも興味深々で、猫の餌に手を出してしまうほど。

彼女が出てきてから、月村家の家訓に『ベルゼは厨房に入れるな』の一文が増えた。

栞と、料理の上手いノエルの言う事をよく聞き、ひたすら食の道を極めるべく精進する。その精進はただ食すだけだが。

常にニコニコしており、何をしても楽しいらしい。

胸は姉妹中3番目に大きく、極まれにマモンに弄られる。寝ぼけているとベルフェの胸が美味しそうなのかに見えるらしく、甘噛みして驚かせることもしばしば。

もちろんその後はどっつかれる。

七女 色欲のアスモデウス

愛さえあれば命すら捨てられる金髪ツインテール。

その髪型の宿命に背き、全くツンデレではない。アリサがいるからツンデレ成分はいらな（ry。素直でいい子。

未っ子であるがため姉たちからの愛情を深く注がれ育つ。のだが、その愛情は胸に回り、結局嫉妬の視線を受ける事になる。

本人は胸の大きさは愛の大きさだと思っっているものの、実際はよく食べ、よく遊び、規則正しく就寝しているだけである。

栞に一番懐いており、許可を貰ってから暇さえあれば出てきて栞の傍に寄り添っている。

風呂場では大体サタンとマモンにせっつかれており、胸の大きさは姉妹中二番目にでかい。

以上が煉獄の七姉妹の設定です。

彼女達は普段はギャグキャラですが、締めるところは締めますよ？これだけでは短いので、七姉妹の召喚をござらんあれ。ちよいエチいかもですよ！注意！注意ちゅういチュウイ！！

明け方、1人の少女が佇んでいた。

見方によっては妙齡の美人にも見えるであろう少女は、その実齡よわい九つの少女であった。

「これで完璧、かな？」

名を月村栞と言った少女は、不安げな言葉とは裏腹に自信に満ちた笑みを浮かべると、自分の人差し指を、右手に持った儀礼用の短剣で少しだけ傷つけた。

途端にじわり、と真つ赤な血が浮かび出て、徐々に重力に従って滴へと変わっていく。

やがて完全に重力に逆らえなくなった血液は、栞の元を離れその下、白く大きな画用紙に真つ赤なマジックペンで描かれた魔法陣へと落ちていく。

ピチャ、と。

水滴が地面に落ちるのと同じ音を立てて、赤々とした血は若干明るすぎる赤の魔法陣へと染み込んでいった。その、直後。

「ザッ、とテレビにノイズが走るような音と共に、目の前の空間、太陽の7の魔法陣の上の空間が歪む。そして、それが納まったと思つた次の瞬間、キンッ！ という高い音と共に黄金の蝶が、そして7人の同じ服を着た女性たちが姿を現した。

「我ら煉獄の七姉妹、ここに」

先頭の、黒髪を伸ばした女性が言う。

その目はしっかりと閉じられ、片膝を着きながら右腕は胸の前に。顔は下へ俯き、その表情をうかがい知ることは出来そうにない。

他の6人も同様の状況だったが、これを見た栞は遮音結界を張っておいて良かった、とややの違いなことに安堵しつつも歓喜する。

ようやくだ。召喚、鑄造に必要なだけの霊格を持つ杭を7本も手に入れ、更に各々の性格、容姿を設定するのは骨が折れる。ましてや召喚するのは七大罪をモチーフにしたものだ、はんぱな準備は許されない。

もちろん暴走されてこちらに被害が出ることも考慮していたが、それ以上に、栞の、彼女の【魔女】としてのプライドが召喚を失敗さ

せる事を拒否していたのだ。

「ご主人様、ご命令を」

「私のお嬢様、でいいわ。ルシファー」

「はっ、仰せのままに」

高鳴る興奮を抑え、栞はあくまで【魔女】の名を持つ者として言った。

高圧的ではない。むしろ友好的ですらあるその言葉に、ルシファーは、自身ですらも驚くべきことに恐怖を超えた感情を抱いてしまった。

傲慢の名を持つあのルシファーが！ であろうことか種族的にはまだギリギリ人間であるはずの栞に対して、恐怖ではない感情、畏怖を感じてしまったのだ！

若干全身に震えが走っていることを自覚したルシファーは、相手が人間であることを必死に自分に言い聞かせながらそう答えた。そうでもしなければ、今まで感じたことのないこの感情に身を任せ、みっともなく泣き喚き、許しを請いながらこの少女の足元に縋りつき、光沢のある革靴に必死に舌を這わせながら無様に媚びる笑みを浮かべてしまうであろうことはわかりきったことだったから。

その様子を肌で感じながら、後ろに同じ姿で並んでいる妹達も同じ感情を感じていた。

たった一言言い放っただけで感じた、まるで自分が強大な雄に対する無力な雌犬にでもなってしまったような、強烈な感覚。名を呼ばれたのがルシファーでなければ、今頃は失禁するか濡らすかして他の姉妹に無様な姿を晒していただろう。せいぜい、ベルフェゴールがかろうじて耐えられる程度。

「全員楽にしていいわよ。姿勢も崩していいわ」

「はい、お嬢様」

少女の言葉で、7人はぎこちなく体を動かし、傍目には違和感なく立ち上がる。だが、既に嫉妬の名を持つレヴィアタンの瞳には、今すぐにでも少女の手をとって縋りつき泣き喚きたい、自分が自分である事を放棄してしまいたいという欲求がありありと浮かんでいた。嫉妬など生ぬるい。今のレヴィアタンの中では、嫉妬などという選択肢が浮かんでくる事自体おこがましい事だという理論が構築されていた。

瞳は震え、肌は鳥肌が立ち、全身の末端がすうっ、と冷たくなっていくような感覚。気づけば、呼吸する事すらも忘れている事に気づき、慌てて肺に酸素を取り入れようと呼吸を再開するが、突然の体の急変に喉が耐えられず、思わずむせてしまう。

「大丈夫!？」

それを見た栞は、ためらうことなく魔法陣の中へと入っていき、レヴィアタンの喉に手を当て、もう片方の手を背中をさするようにしてゆっくりと魔力を送り出す。

元々栞の魔力によって形成が始まった体だ。まだ慣れていなかった体に栞の魔力が馴染んでいき、レヴィアタンはなんとか落ち着いた呼吸を取り戻した。

だが、呼吸が整ったレヴィアタンの目に入ってきたのは、氣遣わしげにこちらの顔を覗き込む主の顔。一瞬で先ほどの理論が解へと導かれ、

「あつ、ひいつー!! た、たすけつ、助けてっ!! 助けてく、く
ださいっ、おね、お願いいっ!!」

他の姉妹の目があることも忘れ、命乞いを始めてしまう。それも裏返ってしまうような悲痛な叫び声となって。

ぼろぼろと見開いた瞳から大粒の涙を零し、自分を相手よりも小さく、弱く見せようとして、その庇護を得ようと少女の足元へと跪き、あろうことが自身の『存在』としての本能に従って革靴へと舌を這わせた。

思わぬ行動に面食らった栞は若干の間思考停止に陥っていたものの、なんとか持ち直してレヴィアタンの目をまっすぐに見つめる。

「ストップ。落ち着きなさいレヴィアタン。いい？」

「あ、あ……っ！」

既に相手に、自分は庇護を求める存在だと、それほどまでに無様で弱々しい矮小な存在なのだと感じさせることしか頭がないレヴィアタンは、栞の言葉が聞こえてないかのように瞳を震えさせてただ息のように声を漏らす。

その様子を見た栞は、そつとレヴィアタンを、抱きしめた。

「大丈夫、落ち着いて……。怖くない、怖くないよ……」

赤ん坊をあやすようにしながらレヴィアタンの背中に手を回し、ぽんぽんと軽く叩きながら言う栞。

ゆったりと時間の流れがこだけ遅くなってしまったような錯覚に陥る中、レヴィアタンの発作とも取れるそれがゆっくりと収まっていく。

そして、ルシファーが気づいた。気づいてしまったのだ。

栞が、自らが仕えるべき主が、どんな存在も足元にすら及ばない、圧倒的な強者であることを。

魔法陣の中に自ら入るといふ暴挙をしでかしたこの少女が、自らが認めたもの全てを包み込み、己のものとして魅了してしまう、どこまでも巨大な存在であることを。

「ひ、あぐつ……、お、お嬢様あ……！！」
「いい子いい子……」

まだ涙が目の端に残るレヴィアタンの髪をそつと撫でつけながら、
栞は繰り返し繰り返しその言葉を囁く。
そうしているうちに徐々に涙は収まっていった。

「……申し訳ありません、お嬢様。身内が不愉快な思いを」
「不愉快なんかじゃないわよ。これから家族になるんですからね」
「家族、ですか？」

今まで口を開く事のなかった妹の一人、サタンが言う。
普段は怒りっぽい彼女も、今だけは怒りという感情がどういったものかを思いだせずにいる。
若干の恐怖と服従の意思を目に灯しながら聞いたサタンに、栞がそつと笑いかけた。それだけで、サタンは胸が苦しく、しかし決して不快ではない感情に襲われる。

「そう。私達は、これからずっと家族。いついかなることがあっても互いを敬い、決して見捨てない。それが約束できる？」

きつと、さつきまでならばこの問いに迷わず首を縦に振っていただろう。

言葉を真に受けたのではなく、ただ己という存在を保つためだけに、だが、今は違った。

ほんの数分。時間にすれば経ったそれだけの間に、ルシファアの心は彼女に捕らわれていた。

否、ルシファアだけではない。ついさつきまで涙を見せ命乞いをしてきたレヴィアタンまでもが、彼女に心奪われていたのだ。

そのほんの僅かな仕草にすら、愛おしさを感じる。そんな少女に否

定の言葉を返し、悲しませるのは、ルシファーにはできなかった。

「…はい。長女たる役目を全うし、お嬢様と、妹達を護ることを誓います」

「お姉様……」

傲慢の名を持ったルシファーが、己の意思で契約に従った。

そのことは、姉妹一のしっかり者でもあるベルフェゴールの興味を大きく引いた。

しかも、今の言葉は単純ゆえに裏がない。小難しい言い方をして穴をつくこともできるであろうに、彼女はそれをしなかった。

ただ、その理由はわかる。単純に、この少女が、自分達の主が愛しいのだ。だからこそ真摯にそれに向き合い、そう言い切れる。

「……怠惰のベルフェゴール、この命尽きるまで御身をお守り致します」

そう言いいきり、そして。

「だめよ」

「……え？」

否定された。

なぜ否定されたのか、それすらわからずにベルフェゴールはうつろたえながらもなんとか声を出した。

すると、少女は笑う。ただ単純に、愛しい者を見るように。

「私だけじゃない。皆を、あなたを含めた家族全員を護るの。皆を、皆で。そうでしょう？」

「お嬢様……」

簡単な事だ。

ついさつき、少女は互いを決して見捨てないといった。つまり、自身を見捨ててもそれは意味がない。

自己犠牲の元に成り立つ物語は確かに気高く、美しいだろう。

だがしかし、そこに本当の幸せはない。他者の幸せを願うならば、己の全てを持って己とその者の幸せを掴み取るべきなのだ。

そのことを暗に仄めかした少女の言葉は、ベルフェゴールに忠誠の念を抱かせるには十分なものだった。

「……はい。お任せください、お嬢様」

「ええ、お任せするわ？」

「サタン姉もレヴィア姉も、皆もいいな？」

それは質問ではなく確認。

確定事項という事実の元に行われた確認は、全員が首を縦に振ることによって立証された。

それを見たルシファーが再び跪くと、他の6人もほぼ同時に同じように跪く。

「我ら煉獄の七姉妹、たとえ冥府に落とされようとお嬢様と共に歩みましよう。我らの魂は、お嬢様と共にあります」

「……………親愛なる稜卿に永久の忠誠と普遍の愛を！」

「」

ルシファーの声に続き、心の命ずるまま7人が同じ言葉を言い放つ。それを聞いた稜は、やわらかく微笑むと口を開いた。

「Welcome to our home. 愛すべき我が家族

に、揺るがぬ絆と尽き果てぬ愛情を」

直後、8人の少女達は誰からともなく抱き合う。

それぞれがどんな気持ちであったのかはわからない。ただこの瞬間、後々に至るまで語り継がれる煉獄の七姉妹とその主との絆は、確かに紡がれた。

9・5話 煉獄の七姉妹独自設定紹介& (後書き)

あーあ、やっちゃった。

いえ、これ(後半の小説)書いてるときテンション上がったって
やばかった。

きつと引つかからないはず……だよな？

10話 アリサへの暴露 フラゲウ？なあんのことだよあ？（前書き）

先に言っておく！なのはの活躍はねえ！！

なのはファンの人、すんません。

10話 アリサへの暴露 フラゲウ？なあんのことだよあ？

「さて、と」

ベルフェに指示してから私は服を調える。ここは七姉妹と一緒に寝られるようにきちんととっておいた部屋。

少しすると、金色の蝶と共にベルフェに連れられてアリサが転移してきた。

「すごい……」

「これが、あなたの望む真実の一端。いずれ関わることになる、正常な異常よ」

「……教えて。ベルフェゴールさん達のこと、アンタの事。あんたたちが、一体何をしてるのか」

静かに、しかしまごうことなき気迫と共に迫るアリサ。

くくく、これなら教えても問題なさそうだな。

意識と思考回路の全てを【魔女】に切り替え、何十にも認識阻害、遮音結界と空間遮断結界を張っておく。

む、今アリサがびくりと反応したな。なるほど、リンカーコアはななくとも素質はあるか……。

「これから妾が話すことに一切の嘘はない。それを先に宣言しよう」
「……わかったわ」

こくりと頷き、体を強張らせるアリサ。

「では、まず妾のことから話すでしょう。妾は【魔女連盟】【十重理事会】所属、【奇学の魔女】月村琴。【十重理事会】の最後の1

人にして、世界に20人いる【魔女】の称号を持つ1人」

「【魔女】ってなに？」

「【魔女】とは、魔術と呼ばれる力を用いてある一定以上の国力を持つ国を一晩のうちに完全に地図上から消し去る力を持つ魔術師に与えられる称号だ。無論、妾として例外ではない」

「じゃ、あんたが本気出せば日本は一瞬で海の藻屑に消えるって訳？」

「くくくつ、ああ、全く持ってそのとおりだぞ？ アリサ・バニンクス」

【魔女】相手にこのような口を聞ける人間は稀有だからなあ？

こういったニンゲンはニンゲンにしておくには惜しい……。

「まあ、いいわ。じゃあ、【魔女連盟】はなに？」

「全世界に存在する【魔女】同士が連絡を取るために、唯一異世界のニンゲンで【魔女】でもある女性が立ち上げた、一世紀以上前から続く集まりのことだ。現在は20人の【魔女】が所属してある」

「それと、私とどんな関係があるわけ？」

「話の途中だ、少し落ち着け。その【魔女連盟】の長たる【魔女】は言った。『世界は無数に存在する。そして、愚かにもその無数の世界の全てを管理しようとする組織がある。我々は外の世界の存在に対抗できる力がある。ニンゲンさえいいのならば、我らの力を貸しこの世界を護って見せよう』と」

「異世界の人間であるその人が言った事で、信じやすく、そして様々な事に介入しやすくなった……？」

くくつ、やはり子供としておくには惜しい才だ。

あれだけの情報できちんと道筋を立てられている。

尤も、ここまで話したら自身が無関係ではいられないことくらいはわかるだろう。

「でもちよつとまっつて、いくらなんでもなんの証拠もなしに信じるわけ……」

「そう、そこで魔法が出てくる。我ら【魔女】が使う力とは違う、管理局が妄信する使い勝手の悪い力だ。彼女はそれを見せる事で納得させ、着々と世界の頭に準備を整えてきた」

「……つまり、うちみたいなかい会社だと【魔女】と会うことがある？」

「回転が速いな？ そうだ。今や【魔女】は警察機関にもある程度浸透してきておるわ」

ふむ、特に悩む様子がない、か。というより、最近【魔女】になる頻度が高い気がするのだが？

まあともかく、【魔女】についてはわかったようだ。わからねば後でまた説明してやっても構わぬがな。

「【十重理事会】ってのはなんなの？」

「【魔女連盟】の中でも際立って強い10人の【魔女】が集まって構成された、【魔女連盟】の理事会だ。妾はその中の1人に入っておる」

「へえ……」

「で、他に聞きたいことはあるか？」

「特にないわね……」

【十重理事会】のことは今一理解できていないようだが、まあいい。あとはベルフェたちのことか。

「では、次でラストにするとしよう。来れ、煉獄の七姉妹」

「「「「「「「「「「煉獄の七姉妹、ここに……」」」」」」」」」」

ベルフェと同じように黄金の蝶を舞わせて現れる6人。
ぽかんと口を開けているアリサだったが、元に戻ると途端に疑問を
投げかける。

「えっと、皆も【魔女】なの!？」

「くくつ、七姉妹は【魔女】ではない。妾が呼び出し、使役する存
在でな。お互いがお互いを護る存在だ。いくなれば家族だな」

「家族、ね……」

しばらく考え込んでいたものの、少しするとすつきりしたような顔
で立ち上がる。

「まあ、いろいろわかんないこともあるけど、あんたが敵じゃない
ってことはわかったわ!」

「くく、アツハツハツハ！ 全く、これだからニンゲンは退屈
せん…。よかろう、現時点を持ってアリサ・バニングスを【奇学の
魔女】の客人として認めようぞ！ 何かあればいつでも相談するが
いい」

「お認め頂き恐悦至極、とでも言えばいいのかしら？ 【魔女】さん
?」

「ふっ……。ああ、それと。高町なのはをよく見張っておけ。あれ
は魔法とやらに傾倒する危険性があるのでな?」

「……もう関わってるの?」
「間違いはない。高町なのはは【魔女】である妾の忠告を無視し魔法
を使い続けておる。このままいけばこの世界には見向きもしなくな
るぞ?」

「とりあえず、後で喝いれとくわ」

「くくつ、よろしく頼んだぞ? 『友人』」

「頼まれたわ、『友人』」

不敵な笑みを浮かべると、アリサは何の抵抗もなく扉を開け、部屋から去った。

……まさか、そんなアホな？

「私の張った空間遮断結界に気づきもせず簡単に出て行くなんて……」

「それで、お嬢様。ナゼ我々は……？」

「あ、気にしないでいいわよ」

「は、はあ……」

アリサ……。【魔女】の素質あり、と。

「七姉妹、一度戻りなさい」

「……………はあい、お嬢様……………」

夜。

私の本領が発揮できる今、ジュエルシードの気配を感じてそう指示する。

どうやら道楽と雅も来ている様だし、……ん!?

「どこかで感じた魔力……、まさか、ね」

そう願いたいけど……。

とりあえず七姉妹を戻した後、土郎さんに状況を伝えて宿を出る。

随分近くだな……。

「ブルーベル、ユニゾン」

「はあい、お姉ちゃん！」

「ユニゾンイン！」

パシユツ！と微妙な音とともに青い光が溢れ、走る私の髪の色と気配が変わる。

道楽と雅はフェイトと合流しているみたいね……。

割と速い速度で飛ぶと、既に全員が揃っていた。勢ぞろいねえ……。

「よー、お久しぶりー！」

「ほんとに久しぶりね、道楽。雅とフェイトもお疲れ様」

「ええ、そっちもね」

「何日か振り、栞。あ、こっちはアルフ。よろしくね？」

フェイトの紹介で、隣にいた女性が軽く手を上げる。

額に宝石みたいなのがあるね、使い魔？って、アルフってあのアルフか。

「よろしく、アルフ。私は【奇学の魔女】月村栞よ」

「私はフェイトの使い魔のアルフ。まあ、よろしく」

若干警戒しつつも握手を交わす。

さて、役者は揃った、けど……。

「雅、もしかしてプレシアとアリシア来てる？」

「ご名答。魔力を憶えてみたいね？」

「はあ……。フェイトには？」

「まだよ。プレシアとは、これが終わったらきちんと話させるつも

』り

『そのときは私も同席するわ。一応アリスアの蘇生とプレシアの病の治癒したの私だし』

こくつと頷く雅。よし、これでオツケー。

とつととジュエルシードを封印して回収しますかね。

「フエイト、ジュエルシードはいくつある？」

「今は3つです」

「オツケー、ありがと」

で、私が3つで、雅が4つ。

「道楽は？」

「見つかってねーから3つのままだな」

「じゃあ合計で13個ね。知り合いが1つ持っているから、これ回収したら残っているのは7個ね」

「陸地は大体みたし……、もう少ししたら海に足のばすか」

「海の方は任せるわよ？ 彗」

「了解」

さて、それじゃあいきますか。

適当に術式組もうか？

『適当なら組まないほうが楽だよ？ アクアシーリングでいいよね？』

「そうね。お願い」

『了解！ アクアシーリングセット！』

キュイイイイ、と音がして準備が完了し、次の瞬間。

川の水も使用して、ジュエルシードが封印されていく。

数秒経てばジュエルシードは完全に封印され、私はそれを手に取る
とそのまま飲み込んだ。
ごっつぁんです。

「相変わらず強烈な封印方法ね……」
「デバイスならこつちの方が楽。魔術ならこれ壊せるんだけど」
「ま、いいんじゃないの？んじゃあちゃっちやと戻ろっぜ？俺も宿
とってるし」

どうやら原作とは違ってフェイトも宿に泊まっているらしい。
回収はちゃんと進んでいるし、雅もいるからかな？
なのは？ああ、多分そのうち来るんじゃないかなあ……。

「じゃ、撤収ー」
『「「「「はい」「」「」』』

うん、緊迫感なさすぎる。

「じゃ、心の準備はいい？フェイト」
「う、うん……」

少し時間が経って、戻ってきた私達はフェイトとプレシア、アリシ
アの対談に参加する事になった。

プレシアは人格も元に戻ってるし、問題ない。アリシアもだから、フェイトが受け入れて先に進めるかどうかな。

「じゃ、行くか」

こういうとき、道楽はありがたい。

重たい空気の中で率先して動いてくれるからね。まあ私も雅も動けないわけじゃないけど、ほら。先頭は面倒でしょ？

なんともいえない襖の開く音とともに、私達は中へ入る。

中には、浴衣姿で座布団に座ってテレビを見る2人がいた。

……き、緊迫感。緊張感？

「か、母さん……？」

「ッ！！ ……おかえりなさい、はおかしいかしら？ フェイト」

「母さん、どうしてここに？」

「頑張ってる娘の顔を見に来る事が、いけない事かしら？ それに、伝えたい事もあるし……」

おお、いい繋げ方だ。頑張れ。

「えっと、そっちの子は……？」

「私はアリシア・テストロツサ。26年間幽霊をやっていた、あなたの元になった人間、お姉さんよ！」

ババアーン！とテロップが入りそうな感じで胸を張るアリシア。

………雰囲気無しね。

「元？」

「…フェイト。落ち着いてよく聞いてね。あなたは、アリシアのクローンなの」

それから、プレシアの独白が始まった。
中盤まではフェイトはこの世の終わりのような顔をしていただけ、
終盤になってすっかり変わった。

最後の方は、フェイトもアリシアも両方自分の娘で、もうジュエル
シードを集める必要なんてありはしないんだという事。

そして、これからはアルフも一緒に4人で暮らして行きたいと伝え
た。

…フェイト、泣いてんじゃん。

「私はね、妹ができて嬉しいんだ。だから、クローンだろうがなん
だろうが、フェイトはフェイト。私の可愛い妹のフェイト・テスト
ロツサ！ それでいいでしょ！」

「そ、そうだよフェイト！ 私のご主人様はアリシアじゃなくてフ
ェイトなんだ！ だったらフェイトは1人の人間としてここにいる
じゃないか！」

「うん……、うん……！！！」

「…今までつらい思いをさせてごめんなさい、フェイト。私は、も
うあんなことにはならないから。絶対2人とも、守って見せるから
……！！！」

……やば、もらい泣きしそう。

あらかじめ遮音結界を張っておいたから、4人は揃ってワンワン泣
き出していた。

雅はもらい泣きしているし、道楽にいたっては号泣している。

しばらくしてなんとか私と、ユニゾンしているブルーベルを除く全
員が平静を取り戻すと、話はジュエルシードの事へ。

「私達【魔女】については以前話した通りよ。その上で、現在のジ
ュエルシード回収に力を貸してくれないかしら」

「ええ、私も引越し先の危険物撤去ぐらいお手伝いするわ。フェイト、少しだけ頑張ってもらえるかしら？私も頑張るから」
「うん、大丈夫！母さんも、姉さんもアルフもいるから」
「フェイトはあたしが絶対守ってあげるからね！」

また号泣の気配がしたので、雅に目配せして進行を早める。
それを受けて、雅がすっと目を細めた。

「では、以後テストロッサ家を【魔女】の身内とみなし、全幅の信頼を寄せ、絶対それを裏切らないと誓えますか？」

「ええ、誓うわ」

「誓います」

「誓うよ」

「もつちろん！誓うよ！」

「では、【魔女】の名に誓い、この場にいる我ら3名の【魔女】はテストロッサに危機が迫った場合、その命を賭して助ける事を誓います、以上！」

これで宣誓は終わり。

晴れて【魔女】の身内となったテストロッサに祝杯を挙げたかったけど、さすがに今夜も遅い。

軽く別れを告げて、私は高町家のとった部屋へ、雅とフェイト、アルフはそこに残り、道楽は1人部屋へと戻っていく。
さて、と。

「さあさ、おいでなさいな。煉獄の七姉妹」

「「「「「「「「「「煉獄の七姉妹、ここに「「「「「「」」

部屋は普通に広く、私たち8人でも普通に寝られるだけの広さがある。

どうせ旅行なんだし、普段と違っていいじゃないというところで、ちよっとずずか離れしてみました。

「じゃ、全員帰還命令を下すまで自由にしてよし！ といってももう寝るけどね」

「私も一緒に寝ます！」

「いいなあー、私もー！」

いの一番に声を上げたのはアスモ。次いでレヴィアが声を上げる。その後、結局全員でくっついて寝ることになって、さあ布団を敷こうと思ったときには既に布団が敷かれていた。

ベルフェ……。怠惰なことには努力を惜しまないのね……。

「ま、いいか。じゃあ皆、お休みなさい」

「ooooooooooooお休みなさい、お嬢様」oooooooooooo

さあ、明日から大変ね……。

そんな思いとともに、私の意識はまどろみに落ちていった……。

10話 アリサへの暴露 フラゲウ？なんのことだよあ？（後書き）

あー、お話作りやすくっていいわあ……。

栞のお弟子さん候補は1期終了時点で2人います。誰かは言わないが。

きっと勘のいい人ならわかるはず！

11話 お師匠様、ですか…。(前書き)

今回弟子ができます。注意。

アリスのキャラ崩壊とか見たくない人回れ右！

11話 お師匠様、ですか…。

「いい加減にしなさいよ!!」

「バアン!となのはの机を叩いてそう叫んだのは、アリサ。」

「原作のあのシーンです。どうやらなのはあの時行ったらしくて、結局回収できずに落ち込んでいた。」

「知らんけどね!私の知ったことではないし。怪我はないし、ケアは後でする。」

「こないだっから何話しても上の空でボーっとして!!」

「あ、ご、ごめんね、アリサちゃん…」

「ごめんじゃない! 私達と話してるのがそんなに退屈なら、1人でいくらでもボーっとしてなさいよ!! いくよ、すずか、栞!」

「アリサちゃん!」

とうとうぶちぎれたアリサが、盛大に啖呵切って教室から出て行く。目を配っておいてほしいとはいったものの、さすがにこれはひどいねえ……。

大方フェイトのことでも考えてたのかな? 今もお手伝い気分だらうし……。

「な、なのはちゃん……」

「いいよ、すずかちゃん。今のはなのはが悪かったから」

「そんな事ないと思うけど……。とりあえずアリサちゃんも言いますぎだよ。少し話してくるね」

「うん、ごめんね……」

「私も行きますかね……」

なのはのケアは後だ後。

帰って家族がケアできなければ私がすればいい。というか、多分家族がいるから大丈夫だとは思っただけだね。

潰れさえしなければ、なのはは復帰できる。ガキの頃から見てきているから、そのぐらいはわかるとも。

教室を出て、階段のところへ。

「アリサちゃん！　アリサちゃん！」

「アリサ」

「はあ……、ごめん、2人とも。ちよつと熱くなつたわ」

丁度追いつくと、アリサは階段に座り込んで眉間の辺りを揉み解していた。

原作とは大分違って、随分と大人だね？まあ、その方が話しやすいんだけど。

「あの馬鹿、悩んで溜め込んで、それで解決できると思ってんのかしら……」

「……正直、あれは手に余るわ。悪い子じゃない。けどまつすぐすぎて歪んでるのよね……」

そう、そこだ。

歪みさえしていなければ非常に扱いやす、もといやりやすい子なのに。

「2人ともずばずば言うね……。でも、知らぬは当人ばかりなり、つて奴かな」

「魔法少女、ねえ……」

「……キュラーン、みたいな」

「「ぶふうっ」「

くそ、アリサそれはなしだよ!?

双子揃って嘖いちやっただじゃんか!! キュラーンって……。

しっかし、私が口添えして見逃してもらってるからいいけど、なのは下手すれば自分が魔術課のご厄介になることわかってんのかしら?

基本的に世界中で、街、村などの多くの人間が集まり、生活を営んでいる場所では戦闘行為に属する魔術、及びそれに類する魔術の使用が禁止されている。

例外的に【魔女】とその身内、そして緊急事態に陥った場合のみ魔術の全力行使が許されるが、それも認識阻害と空間隔離結界を張った後でだ。

つまり、今のなのは非常に危うい状況という事。逆に、フェイトは私達【魔女】の身内として魔術課に申請してあるから、緊急時には魔法、魔術の全力行使が認められる。

あー、もう原作の欠片もないな。別にいいけどさ。

「ああ、アリサ。1つ質問」

「ん、なに?」

ふと思いついたことを口にしてみる。

いやはや、まさかこんな事態に陥るとは思ってもみなかったがね?

「【魔女】を目指す気は、ないかな?」

つい、ね?

「……えー、それで？　アリサちゃんまでこっち側に引きずり込んだ、と」

「そーゆーことね」

「…魔人だけは勘弁してよ？」

「大切な友達だからね、そんなへましない」

えー、皆さんこんにちは。アリサ・バニングスです。

ちが、バニングじゃないわよ！　燃えたりしないっての！！

今日の放課後、『友人』である栞に言われた一言に、私は即答した。

「ある」、と。

「泊り込み？」

「あ、はい！　できればその方が」

「じゃあ栞の向かいの部屋を自由に使っていいわ。ただし、何か実験をするときは栞の部屋で。少なくとも空間隔離結界が使えるようになるまではね」

おおう、いきなり意味わからない言葉が。

とりあえず学習が必要ね……。あ、そういえば栞の事なんて呼ぼうかしら……。。

私、魔術のまの字も知らなかったし、師匠とか呼んだ方がいいのかしらね？

「じゃあ、行きましようかアリサ」

「あ、うん！」

忍さんに礼を1つしてから部屋を出て行く栞に続いて部屋を出る。鮫島にはもうこっちに泊まる、というか半ば住む旨は言っているから、向こうの家の世話は任せてある。

もちろん週何回かは帰るつもりよ？　じゃないと鮫島に悪いし、犬達も寂しいでしょうし？

べ、別に私が寂しいとかそんなつもりじゃないんだからね！？

「……どうしたの？　アリサ。考え込んでしまった」

「あー…、ねえ栞。これからはお師匠様、って呼んだ方がいい？」

「ぶっ、どうしたの急に？」

「ちよつと、笑わないでよ！　これでもちゃんと考えたんだから！

一応これからは弟子って立場になるわけだしさ」

「そうねー、じゃあ学校以外でならそつちでお願いするわ」

「はい、お師匠様」

ん、こういうのも悪くないかもしれないわね。

…やっぱちよつと恥ずかしいけど、うん。慣れる私。

しっかし、すずかはどこに「お、落ちるうううううう！」「お姉

ちゃんヘルプミイイイ！」「へえあ！？」

ちよ、なんですすかとブルーベルはシャンデリアに上ってるの！？

というかどうやって上ったの！？

「まったく……。あんなとこに上ってなにやってんだか。アスモ、

助けてやって」

「はあい、お嬢様　ほつとー！」

お師匠様が言うと、いきなり目の前にアスモデウスさんが出てきて
跳躍する。

凄、5メートル以上上にあるシャンデリアのところまで飛んで、
2人を脇に抱えて降りてきた…。

身体能力がばかげてるわ……。
ストン、と降りてきたアスモデウスさんに駆け寄る私とお師匠様。
てか、お師匠様って呼んでるけど全く違和感がない……。
まあ精神年齢高いみたいだしね、栞は。

「まったく、またあんなことして……」

「だってだって、浮遊魔術を組み立ててたらいきなり暴発して、降りれなくなっちゃって……」

「ブルーベルは？」

「……助けに入ろうとして、一緒に」

「すずかも【魔女】を目指してるのかしら？ それとも、魔術師なの？ あ、栞が【魔女】だから魔術を勉強してるのかな？ ぬー、どっちにしてもすずかの方が一日の長があるわね。」

「とりあえず魔力処理を済ませること。オーケー？」

「はい」

「すずかはポケットからピンを取り出すと、コルクを外して何かを振りまく。」

「中から何かが出てるのはわかるけど、それが何かまではわからない。少なくとも液体じゃないみたいだけど。」

「アレが何かわかる？」

「……わかんない。てか、わかって方が無理」

「あれは、魔術を使った後に残留してしまった魔力によって周囲に悪影響を及ぼさないように、残留している微量の魔力を変質させて吸収できるようにしているの」

「そんなことできるの？」

「ええ。ただし、本人と魔力を合わせないといけないから、個人個

人で作らないといけない薬だけだね。ついでに気化してるから見えないわよ」

魔力って聞くと、やっぱりゲームの方に行くわね…。

一般的なRPGだと、魔力を回復させる薬は高価だったりお店だと売ってなかったりするから、中々使えないのよねー。

残った魔力の回収ってことでいいのかしら？

「大方それで合ってるわよ」

「頭の中読んだ!?!」

「想像してる事を想像しただけ。さて、じゃあ部屋に行きましょう?」

「りょーかい」

アニメや漫画みたいに、魔法使ってさようなら、なんてことはないのね。

そりゃそうか、ちゃんと後処理までこなさないといけないもの。自分のやったことに責任を持たないといけないってことね。

お師匠様に連れられてやってきたのは、結構広めの1人部屋。

ベッドは普通に大きいし、竈に大鍋、フラスコにビーカー、アルコールランプやらなんやら、実験に使えそうな道具がひとしきり揃っている。

なんか、魔術師っていうよりも理科の実験室みたいね。

「ここにある道具は全部自由に使っていていいけど、まずは座学ね。基礎を学ぶ事から始めましょう」

「服とかは持ってきていいわよね?」

「ええ。そっちのタンスとかクローゼットを使うといいわ」

「はい」

返事をした後、棚にランドセルを置く。

あー、今までランドセル背負ってたから肩こったわ……。
魔術かぁ……。早く見てみたいものね……。

「さて、と。じゃあ私は部屋に戻るから。向かいにいるから何かあれば言ってみてね」

「わかったわ。勉強はいつから？」

「そうね……。じゃあ今日お風呂に入ったらにしましょう。鮫島さんに衣類とか必要なもの頼んでおいたら？」

「そうするわ。じゃあ、また後で」

「ええ。ご飯時になったら呼ぶわね」

そう言っつて、お師匠様が部屋から出て行く。

私はそれを見送った後立派な装飾の施されたベッドに腰掛ける。全く軋まず、とてもやわらかいベッドだった。

ポケットから携帯を取り出すと、電話帳の一番上に登録されている人物のところで発信ボタンを押す。

初めての授業が楽しみで、私は胸の鼓動が高鳴るのを感じていた。それはあたかも、小学校に初めて足を踏み入れた、あの時と同じような感じだった。

「もしもし」

「はい、鮫島ですが」

「栞です。ご無沙汰しています」

「ああ、栞様でしたか。どうも、お嬢様のことはご本人からお伺い致しました」

私が電話をかけた相手は、アリサの執事であり専属運転手の鮫島。彼にはアリサの父親が私の存在を知っているという事もあって、アリサの安全上私の正体を知らせておいてある。

その私の弟子になるということを知り、電話の向こうからはなんともしえない空気が伝わってきた。

「できれば、一生裏のことを知らずに生きてほしい、というのは老いぼれの高望みだったのでしょいかね」

「それは無理というものよ。この世界で勝者になろうとすれば、必ず裏との関わりができる。だからこそその【魔女連盟】だもの。ならばアリサが関わってしまうのは必然よ」

「そう、でございますね……。【奇学の魔女】様、どうかお嬢様をお願い致します」

「わかってるわ。任せておきなさい。下賤なニンゲン共の齒牙に掛からぬよう、全力で護ってあげるわ」

そう誓い、そつと通話を切る。

誓いは護る。護られる。護られなければならない。それが【魔女】の掟。

一度結んだ約定はそれが果たされるまでの間決して破ってはならない。それは信条のようなもの。

それが【魔女】の名を使った誓いならば、その誓いは強制力すら持つ事になる。

私は、その誓いを結んだ。

「護るのよ……。絶対にね」

悲しい結末など、必要ない。

【魔女】は友の、家族の涙を好まないのだから。

「お嬢様、今日は一緒に寝てもいい？」

「いいわ、2人を助けたご褒美ね？」

「わーい！！ お嬢様大好き！」

ぎゅっとアスモに抱きしめられながら、そんな事を思う。

アスモ？あなた私の事マスコットか何かと思っ
てないかな？

11話 お師匠様、ですか…。(後書き)

次回はなのはファンを最高に怒らせます。フェレット?どーでもい
いわそんなん。

で、それ終わったらKYです。いろいろ考えてますが、多分どっち
にしてもぼこられる。原作でもアレはねーよ。どうかんがえても。

12話 NANOHAフルボツコタイム アリサの決意(前書き)

ちよつと微グロ表現あります。

あとルシファー姉様壊れてますがお気になさらず。

なのはスキーの人は退避お願いします！

追記：c a i l i の文字間違ってるよ、といつご指摘を戴いたので修正しました。

12話 NANOHAフルボッコタイム アリサの決意

「 ということよ。憶えた? 」

「 えーと、魔術は体内魔力を消費する事で発動できて、神話に出てくるような魔法を使うためには拷問にも屈しない程の精神力と、それ相応の生命エネルギー、史実に沿った術式構築が必要ってことね! 」

「 概ね正解。中々優秀じゃない 」

夕飯と風呂を終えた後、私はアリサの部屋で魔術の基礎についての授業を行っていた。

アリサは中々覚えが良くて、教えたことはすぐに吸収していく。こりゃ小学校なんて簡単なわけね。

すずかも今頃は部屋でブルーベルと浮遊魔術の臨床実験と改良中だろうし。

「 逆に、小さな魔術なら日常の動作に組み込んだり、名を与えてそれを呼ぶことをトリガーにして発動できるってことも憶えておいてね 」

「 はい、お師匠様 」

「 じゃあ今日はここまで。明日からは帰ってきたらファリンと組み手してもらおうから 」

「 組み手、って私腕っ節は素人よ? 」

「 それを補うのよ。体力づくりも兼ねるから、それほどハードにはならないわ 」

はーい、というアリサの素直な声。

こういうときは物分りいいと楽だわあ…なんて考えていると、青いモニターが空中に開き、装飾されたC a r e e rの文字が浮かぶ。

プレシアからの通信なんて珍しいね、こんな時間に。
Callボタンに指先で触れて通信回線を開いた。

『こんな時間にごめんなさい、ジュエルシードを見つけたわ』

「つてことは、もう現場に行つたみたいね？」

『ええ。今フェイトが向かつてるわ。後藤さんにはこちらから連絡を入れたから、今フェイトが結界の展開を準備してると思うわ』

「オーケー、じゃあ私も向かうわ。最悪破壊するから、なるべく近づかないようにしてと伝えて」

『わかつたわ。頼むわね』

通信が終わると、アリサがこちらをまっすぐに見つめていた。
ふむ……。

「一緒に来る？」

「…行かせて、ください。お師匠様。現実を見たいから」

「わかつたわ。サタン、アリサを護ってあげて」

「はっ、仰せのままに！」

アリサに40秒で支度するように言うと、私は一通りの道具をコートに仕込んですずかとブルーベルの部屋へ回線を開く。

おお、飛んでる飛んでる。

「2人とも、これからジュエルシード関連で出かけてくる。留守は頼むわよ」

『あ、はい』

『了解だよ、お姉ちゃん』

もうこの対応が当たり前になってきてる件について。

なんてことはどうでもいいので、40秒びったりで支度を終えたア

リサを連れて大広間へ。
さて、それじゃあ行きますかね。

「アリサ、しっかり捕まってるなさい」
「う、うん！」

その言葉を最後に、私とアリサ、そしてサタンは現場へと転移した。

「フェイト、アルフ！」

「栞…！」

「栞、来てくれたのかい！」

ビルの屋上へ到着すると、フェイトが既に結界を展開していた。
後藤さん達魔術課は周りで待機、実行はフェイトとアルフだけみ
た
いな。

「私達と、同い年？」

「えっと……、実質2歳ちょっと、だけど」

「色々事情があんのよ。こっちはアリサ。今日付けで私の弟子にな
った子よ。で、こちらフェイトとアルフ。協力してくれている異世
界の魔導師とその使い魔」

「あの使い勝手の悪い魔法ってのを使ってる？」

あれ憶えてたのか…。
でも、魔法なんて、使うのにデバイスの補助がないと大きな力が振るえない欠陥品でしょ？
非殺傷設定なんてくだらないものもついでに。拷問にはうってつけだけど。

「まあ、そうね。挨拶」

「ええ、よろしく。アリサ・バニングスよ」

「フェイト・テストロツサです。封印を担当します、よろしく」

「使い魔のアルフだよ」

「ん、なんだか聞いたことあるような声……」

…あー、そうか、旅館で会ってたね！！

そうかそうか、そーいやそーだ。

アルフもばつが悪そうな表情で（といつても獣状態だからよくわからんが）謝る。

「あー、旅館で突っかった女の人の人いただろ？ オレンジの髪の毛の。

あれ私の人間のときの姿なんだよ。ゴメンね、あの時は」

「ああ、あの人！ いいわよ、別に気にしてないし！」

ふむ、お互い理解もあるようだし、いいか。

さてさて、お話をっかししてる場合じゃないかな。

「ということ、お互い事情を知ったところで。ジュエルシードはまだ暴走してないのね？」

「うん。あの白い魔導師が出てこなければこのまま封印処理を施して回収、棊に渡す予定だった」

「オツケ、じゃあとつと始めようか」

私の合図で、フェイトとアルフが飛び立つ。

「サタン、アリサを頼んだわ。アリサも、よく見ておきなさい。これがこの世界において力あるものの仕事よ」

「お任せください！」

「わかったわ、お師匠様」

オツケイ、んじゃ行きますか。

とん、とビルの縁を蹴って、直後。

空気の壁をぶち破って一気にジュエルシードまで近づぐ。

すでに封印処理は施したらしい、仕事が速い子ね。

「後は回収だけ、ツ！？」

咄嗟に魔力障壁を展開、飛んできた魔力の鎖を防御し、そのまま打ち砕く。

この緑色の魔力光…、あのフェレットか！

ここで戦闘を行えばジュエルシードの暴走をわざわざ誘発してしまう…。

「栞ちゃん！」

「……高町なのは、邪魔をするなどいつているだろう…！」

「でも！ 私にもお手伝いくらい！」

「なら言い方を変えてあげるわ！ あんたはいたほうが邪魔になるの！ お家に帰って布団に入ってなさい…！」

「で、でもッ…！」

「くどいッ！！ 最終勧告、これ以上私達の邪魔をするなら、公務執行妨害、無許可魔術使用、並びに残存魔力放置の現行犯で拘束させてもらっわ！」

空中から話しかけてきたなのはにそう強い口調で言い放つ。

この餓鬼…、いい加減にうざくなって来たぞ？

殺してしまおうか……。

「菜！」

「フェイト、とつと回収して離脱して。あの馬鹿に教育してやらないといけないみたいだからね」

「わかった。アルフ！」

「はいよお！」

割と速い速度でジュエルシールドを掠め取ったフェイトが、そのままビルの向こうへと消えていく。

それを追おうとしたフェレットへ向けて腕を振るうと、真空の刃が飛んでいく。魔力で底上げたし、威力高いよ？

「くっ！」

お、防いだ。

といつても、3枚くらい多重展開したシールドでようやく感じてだけど。

うざいな、ハラワタ引きずり出してなのはの枕元においておいてやるのか？いい感じに2人とも行動不能になると思うけど。

いやいや、さすがにだめだな。半身ぶった切りぐらいで済ませてやるう。

「どうして邪魔をするんだ！」

「それはこっちの台詞だ戯け。そもそも、勝手にこっちに来て勝手に責任感丸出しなのはそなたの方だろう？それがなにをぬけぬけと…。すでにこちらの組織では回収を行うと対応が決まっておる！

それを邪魔しておるのは他でもないそなたらではないか！！！」

「あれは魔法文化のないここでは危険なものなんだ！！ 早く僕たちを回収して封印しないと」

「……だまれ小動物。つまりそなたは己を優れた種だとも申すつもりか？ この薄汚いニンゲンの分際でッ！！」

ああ、切れる。

いつの間にか【魔女】の思考に入っても仕方のないことなんだ。

「要は手柄を上げたいだけであろう？ 貴様の私利私欲に付き合わされる義理はないと何度言えばわかるッ！！」

「違うよ！ユーノ君はそんな人じゃない！ ユーノ君はこの世界が危なくないようにッ！」

「ならばなぜ我らに任せぬ？ おおいおいまさかボランティアでやってるんですー！ なぁんて言うんじゃねえだろうなあああああ

あああ！？ キャーハハハハハ！ そうだったらマジで笑えるぜえ小動物ウー！！ そもそもこれはためえの仕事じゃねーだろバアアアカア！！ 結局ためえは自分のやってることが間違ってるってねえって

保証がほしただけなんだろオオオオオオオ！？ だからそのため成人もしてねえしょんべんくせえガキを引つ張り込んで正義の味方

ごっこに興じてるって訳だア！ ひいひいはははははははあっははあーッ！！」

くくく、なんだ絶望したような顔をして。

貴様はいつも言っていたらどう？ 自分を責めていたじゃないか。他人に扱られる事すら忌避する自己批判など……くだらぬわ……。

「ほらほら、悔しかったら言ってみるよオ！ いつつもいつつも言ってたじゃねえか、僕が、僕が僕が僕が、つてよオオオオオ！？」

今更被害者面したっておせえんだよオ、こんだけ回りに迷惑かけてるつてのに、ためえは結局自分の保身にしか興味がねえ臆病者の屑

野郎だつてことだよオ！ ああん？ なんだ、反論があるってんなら聞いてやるぜえ？ 尤もオ、そんなもん聞いたところで私はてめえのことを許すなんて御伽噺じみたハッピーエンドは存在しねえけどなア！ キヤーツハツハハハヒヤアアツハアツハツハアア
ーッツッ！ー！」

さて、さてさてさて、下らぬ余興はおしまいだ。
どうせあんな下賤な小動物に構っている暇などない。

「さあさおいでなさい、残酷で美しい我が愛しの煉獄の七姉妹よッ
ー！！」

「コッコッコッはあい、お嬢様ッ！！」「コッコッ」
「ルシファーは白いアレを、他は眺めていて構わぬ。ルシファー、
殺すなよ？」

「はっ、仰せのままに！！」

「がんばってねー、ルシ姉」

「あれ、サタン姉はー？」

「アリサちゃんの警護だつて。アスモ、チョコパイ食べる？」

「あ、食べるー」

「お嬢様、こちらへ」

ルシファーを除き、私達6人はいつの間にもやらベルフェの敷いたレ
ジャーシートの上へ。

全員分の椅子を出して全員が座る。

さあ、楽しませてくれよオオオオオオオ……？

「あなたは……」

「貴様のようなニンゲンの小娘相手に戦えとは……、殺すなどという方が無茶ね。尤も、お嬢様のご命令は必ず遂げて見せるけど」

静かに闘志を燃やし、右腕を胸の前に掲げる。

そこに現れたのは紫がかった青い剣。我が主より与えられた絶対の剣。

杭ではなく人としての姿を持っているときに与えられる、力のカタチ。

「ま、待つてください！ お話を」

「……黙れ、ニンゲン。実のところ貴様を殺したいほど殺したいが、それはお嬢様に許可されていない。だから」

姿を消す。それとともにお嬢様の魔力の色である黄金の蝶が舞う。そして少女の背後へ回り、剣を振り上げた。

「4分の3殺しで勘弁してやるよオツ!!」

「きゃっ!!」

一気に振り下ろすが、魔力障壁で阻まれる。

それごと叩き落とすと、地面へと衝突させる。踏ん張りが弱すぎるし、そもそも私は戦闘技能自体高くない。

だというのにこれは……、まあいいわ。

「ほらほら、どーしたのよオ!」

「待って、話を聞いて!!」

「ふっざけたこと言ってんじゃ、ねえエエエエッ！！！！」

パリンツ！と。あっけなく障壁が割れ、私の剣が腹部に突き刺さる。せいぜい2センチってとこだけだ。

「っあああああー！！」

「うるっさいわねえ……。あんたみたいなニンゲンの悲鳴聞いたって楽しくもなんともないのよッ！！ この、死ね、死ねッ！！」

イライラが募って、思わず抜けた傷口を蹴りつける。

ああうざい、イライラする、何で私がこんな声を聞かなくちゃいけないのかしら。

お嬢様のためならなんだってできるけど……。

「ああそうだ、喉を切っちゃえば声は出ないわよねエ！？ お嬢様お嬢様お嬢様！」

「駄目だ、殺してはならぬ。声を奪う事も禁ずる。その代わりに、傷口を広げるのならば許そうぞ？ くっくっくく……！！」

ああ、お嬢様があんなに楽しそうに笑ってくださいっている！
体が火照る。気持ちが高ぶる！ あんなに耳障りだった雑音が、酷く甘美なオーケストラのように聞こえてくる……！

「ああ、気持ちいい……。ほら、もうちょっと広がるわよねえ？ もっと私を楽しませてよオ……！！」

「い、たい……。痛……いよお……。助……。けてえ……。！！」

ぐちゃぐちゃぐちゃぶちつぶぐちゃ。

体の芯が燃え上がるように熱い。興奮して息が荒くなる。

お嬢様の視線を感じる。私の体を舐め回すように、視姦するように

お嬢様が私を見てくださっている……！

その事実が私を酷く興奮させる。もっと見られたい。残虐な私を、いたぶっている私を見て頂きたい！

もっと。

もっと！

もっとー！！

「あは、は、あははははは！！　ねえ、もっと鳴いて！　もっともつといい声でえー！！」

「い……たい……」

「……ねえ、ちょっと！　くそ、くそくそ、気絶しやがった！　どーしてよ、やっと気持ちよくなってきたのに！」

「ルシファー、それをこちらへ持って来るのだ」

「…はい、お嬢様」

火照ったまま発散する事もできない体を持て余しながら、私はお嬢様のお言葉通りニンゲンの襟の部分をつかんで引きずって持っている。

傷自体は小さいし、ただ抉った痛みで気絶しただけだからすぐに修復できる。

だけどつまらない。これじゃあ私は生殺しよあ……。

「修復完了、と」

「あれえー？　ルシファーお姉様、何泣いてるの？」

気がつくくと涙を流し、それをアスモに見つかる。

あくまでアスモは小さな声で私に尋ねた。

「……体が、火照って、な。どうしようもない。もういく方法もないからな……」

「なーんだ。ならお嬢様に可愛^いが^つてもらえばいいじゃない」

「アスモ……。でも、今日はアスモと一緒に寝るんだろう?」

「一緒にやればいいじゃない!」

……恥ずかしい。が、これには代えられないか……。

ふと見ると、あのニンゲンの傷口を塞ぎ、記憶操作を施し終えたお嬢様が、何か呪いをかけていた。

「お嬢様、それは?」

「ああ、魔力を行使しようとしたらその量に応じて痛みが走る呪いだ。これで馬鹿な真似もしないだろう」

記憶を改ざんして、これを悪夢だと思い込ませ、魔力を使えば痛みが走るようにする。

お嬢様の手際にはさすがに感心する。なにせ現実には被害を出していないのだから。

「さて、では帰るとするか」

餓鬼を担ぎ上げ、お嬢様がそう言って席を立つ。

いつの間にか片付けられていたレジャーシートは気にしないことにしよう。

「ああ、それとルシファー」

「は、はい」

「よくやったわ。今日はたっぷり弄んで可愛がってあげるから」

「は、はい! あ、ありがとうございます!」

ああ、ありがとございますお嬢様。

うきうきした気分で、私はお嬢様の後に続いてその場から去ってい

った。

「うわぁ……」

宙に浮く青いモニターに映し出されているなのはの惨状に、思わずそんな声を上げる。

けど目を背けてはならない。私はこの境地に至らなければいけないんだから。

「これが、【魔女】」

「そうよ。あなたも琴様の弟子でありたいと願うなら、これを目に焼き付け、耐えなさい」

「……わかってるわ。それに、なのも少しはこういう目にあわないと力を手放さない。頑固だからね。あの子」

自分の友達があんなになってるのは心苦しいけど……。

止めてほしいけど！ それを止めちゃいけないことぐらい私でもわかる！

私に力があれば、意思があれば、こうなる前に止められたんだから。だからこれを心に刻め。そして力へ変えるんだ。

「……ふっ。その意思があれば、あなたはきっとなれるでしょう。アリサ・バニングス」

「そのつもりよ。いえ、そうなるわ。そうしてみせる。そうでなければ、お師匠様の顔に泥を塗る事になるでしょう?」

いろんな思いがあるけれど。

それを全部ひっくるめて【魔女】を目指すと。

私はこの日、誓いました。

12話 NANOHAフルボッコタイム アリサの決意（後書き）

ふ、やっちゃまった……。でもこれぐらいはやっていいよね？

【魔女】間で連絡を取るときは、テクノロジーが進んでいるので、近未来的なモニターとかが出ます。SFみたいな。

13話 KY発見。(前書き)

えー、最初の方はちょっとエッチいので注意してください。
おま、これやばくね？とかあったらおっしやっていたらオツケ
ーです。

背景の詳しい説明などは次回に回すので、今回は余り突っ込まない
でいただけるとありがたいです。それでは、ドゾー。

追記：一部改定&誤字訂正しました。

追記の追記：色々矛盾点や不足な点を指摘していただきましたので、
その部分を改訂、付け足しさせていたいただきました。指摘してくださ
った方、ありがとうございます。改訂の文字直しました。

13話 KY発見。

翌朝。

むくりとおきだした私の横には、赤い首輪を嵌められてベッドの柱に鎖で手首と首輪を繋がれたまま恍惚とした表情で眠るルシファアの姿が。

うん、盛り上がって思いつきりやったけど、この子ずっと悦びっぱなしだった。

アスモも面白がって耳の中に舌入れたり、とかね。とりあえずぐちよぐちよのドロドロした行為を一晚中やっていた、とだけ言っておこう。

あ、アスモはいつの間にか帰った。なぜだろう？

「ううん……」

「あら、起きたの」

「はう……、おはようございます、ご主人様あ……」

……私も少し昨日の余韻が残ってるわね。体も火照ってるし。

軽くルシファアの喉を締め付け気味に撫でつけ、唇を貪るようにキスをする。

「お師匠様、起きて……、失礼しました」

「ん！？ んー、んーんー！！」

アリサが突然扉を開き、硬直したかと思えば一礼して扉を閉める。ルシファアが慌てたようにもがきだした。

「ぶはあ……、ふふ、何、恥ずかしいの？ 私の犬の分際で生意気ねえ……。たつぷり濡らしてるくせに。見られて興奮したんでしょ

「？」

「ち、ちが……」

「へえ？」

嘲るように笑うと、顎を摘むようにして持ち上げ、頬を舐める。ソクソク、とルシファアの体が震えて、そつと口を開いた。

「……は、い……。み、見られて、興奮してました……」

「そんなことをするいけない子にはお仕置きねえ……？」

「は、はい……。お仕置き、してください……」

潤んだ瞳で何かを期待するように言うルシファア。そこに私の影が重なり。おおつと、ここから先は入場規制だ！

……結局、ベルフェが止めに来るまでやってたので、学校に付いたのは結構ギリギリでした。危ない危ない。学校で顔を合わせると、なのはどこか避けるようなそぶりを見せていた。

ふむ、いくら夢と加工してもやはり苦手意識は残るか。別に問題はないけども。

「お師匠様、割とえげつないことしてたもんね」

「外じゃ言わないんじゃないの？」

「誰も聞いてないし、いいでしょ？」

ぐてーつと机に突っ伏しているアリサの頭をぼんぼんと叩きながらそんなことをぼやきあう。

なんかもう、同年代に見えないほど顔垂れてるぞー？なんかこう、目が横線で書かれて、口からよだれが垂れているような、そんな感じ。

「ああ、そつだ。宿題はできた？」

「一応。基礎魔術理論の分解と再構築はやったけど、陣にして発動するかは……」

「卓上でできただけいいわ。てか、あれって普通なら1ヶ月は学ばないといけないのに、たった1日見ただけでそれって……」

全く、ちよつと理不尽すぎる。

まあ私もおなじようなもんだけど、アリサの場合はナチュラルに私と同レベルだから困るよ。

さて、と。そう言えば今日はKY介入だったっけ？めんどくさ……。

「ねえ、魔術って個人の体質に合ったものを発展させていくのよね？」

「まあ、そつね」

「じゃあ私に合った魔術って、どんなものかわかる？」

「そつね……」

そつ問われて少し考え込んでしまう。

順当なところで行けば火炎系統の発展系なんかだし……。

「アリサ、RPGでどんな職業使う？ 戦士とか、魔法使いとか」

「戦士」

「即答ね……」

「遠くからちまちなんてやってらんないわ。直接ぶん殴った方が早いじゃない」

そついう考え方だと……。戦闘訓練に重点を置いて、魔術はアシストにしたほうがいいかな？

身体強化系、感覚強化系を重点的に教えて、衝撃増幅とかもいるか。そこに火炎系統を混ぜていくと……。

「あの、お師匠様？」

「あ、ああ、ごめんごめん。そうね、アリサは前線向きだから、身体強化や感覚強化を極めて、火炎システムをアシストで入れていくって方向でいいんじゃない？」

「完全に【魔女】からかけ離れたわね」

「でも、極めれば衝撃波で町を崩壊させる事だって容易よ？」

「……それはそれは」

「考えられないわ」と頭を振るアリサがなんだかとても可愛らしく見えて、つい頭を撫でてしまう。^{かぶり}

すると、アリサは真っ赤になりながら俯き加減に呟く。

「……一応教室なんだけど」

「あら、ごめんなさい？ 不愉快だった？」

「ちがつ、わ、わかってるくせに……！！」

「はいはい」

「栞、私は？」

「あはは、すずかにもやっただげるわよ」

んー、片手でアリサ、もう片手ですずかの頭を撫でる図を想像して見なさい。すごく奇妙よ？

とりあえず2、3分ほど撫でてから手を離す。

さて、と。それじゃあ行きますか。

時間は過ぎて放課後。

ジュエルシードの発動を確認したというフェイトからの知らせによって、私と道楽が現場に向かう事になった。

今回は後藤さんにも連絡して、魔術課の機動部隊を動かしてもらっている。

一応隠れているけど、上空からみれば確実にばれる配置だ。まあ、それで構わない。

「フェイト!」

「栞、道楽さん!」

「嬢ちゃん、どうなってる?」

「高町、という魔導師も来てます。けど、障壁があるので私達では難しいです」

「そうか……」。

ブルーベルには、念話で待機するようにいつてある。
なにより、あの子を管理局と合わせればなにが起こるか……。

「んじゃ、俺が…、っと!」

木の枝に腰掛けた道楽がさういうと、突然木のバケモノが苦しみます。

バケモノに繋がっている全ての枝や根っこがバキバキと折れだしていく。

「あいつかわらさげつない魔術ね、アンタのそれ」

「うるへー。そろそろ終わらせんぞ。嬢ちゃん、封印準備よろしく」

「あ、はい」

フェイトがデバイスをシーリングフォームに変化させたのを見て、道楽が左手を開いたまま突き出し、そのまま握りつぶす。直後、バギンツ！と凄まじい音とともに木のバケモノは粉々に砕け散った。

「よし、やれ！」

「はい。ジュエルシード、シリアル？、封印！」

『Sealing』

光とともに、放出されていたエネルギーが納まっていき、光が消えたときにはただの宝石となったジュエルシードが浮かんでいた。私は即座に枝を蹴り、そこまで到達するとフェイト、道楽とともにジュエルシードへ手を伸ばし。

「待って！」

その声とともに、デバイスを構えこちらを見るのは。どうやらあのお仕置きと呪いにも耐えてここに来ているらしい。はあ、もう底いきれないなあ…。

「まだやるの？ そろそろ限界なんだけど」

「お願い、私にも何かできることが…！」

「あのよお嬢ちゃん。これはおままごとじゃねーんだ。素人がでしやばるなって、栞にも言われたる？」

「だ、だけど……」

ああイライラする。

クソめんどくさいな、ボコして捕まえるか。

「なのは」

「ふえ！？ な、なに！？」

「もう限界だから」

「ストップだぐえあ！？」

思いつき真空波をぶつけようとしたら、その間にKY登場。

見事にKYにヒットし、勢いを殺せないままなのはへぶつかる。

うわ、障壁モロ。雑魚過ぎる……。

「くつ、なにをするんだ！ 公務執行妨害で逮捕するぞ！」

「公務を行っているのは私なのだけど？ それと、今のはあなたが勝手に入ってきたからくらっただけ。前方不注意ね」

「このっ……！ ともかく、今すぐ全員武装を解除しろ！ 詳しい事情を聞かせてもらおうか！」

ふむ、どうもこの餓鬼は魔法至上主義者臭いわね。いえ、決め付けるのはよくないのだけど。

一応上空から来たみたいだから、部隊が配備されているのには気づいているはずだし、これだけの人数相手にあの啖呵切るなんて……。まさか、アサルトライフルを知らない、なんてことはないでしょうし、形状を見ただけで銃だっってことぐらい分かるはず。分かる、わよね？

話している間に頭蓋骨が吹き飛ばされるかもしれないという懸念すらしていない。

まあ餓鬼だし、仕方ないか。

「なあ栞、これぶつ殺していいんか？」

「駄目。逮捕が優先よ」

「へーへー」

フエイトも原作と違って落ち着き払っている。アルフ？ブルーベルと一緒に屋敷の警護。もしかしたら別働隊が来ちゃう可能性もあるからね。

で、肝心のKYは。

「無視するな！ 聞こえているのか！」

「黙りなさい、犯罪者」

「は、犯罪者だと!？」

「ええそうよ。無許可での魔術行使に公務執行妨害、その他諸々、いろいろと聞きたい事もあるし、拘束させてもらっわ」

「ふざけるな！ 僕は時空管理局執務官だぞ！」

あーうざい。何この餓鬼。

ぶつ殺したい。ほんとぶつ殺したい。

とりあえず抑えて対応せねば。

「時空管理局なんて組織がこの地球上のどこに存在しているというの？ あ、もしかしてあなた火星人とか」

「魔導師とともに行動している人間が、管理局を知らないなんてあるか！ それと僕は火星人じゃない！」

「……あー、もういいや。できれば穩便に済ませてやりたかったけどよオ。いいぜ、なら【魔女】として対応してやるよ」

「やべっ？ おい嬢ちゃん、一旦引くぞ」

「は、はい！」

ブチぎれちゃったけどいいよね？

決め付けて信じないなら、それなりの行動をとらせてもらおう。

道楽がフエイトとともに下に下りるのを確認してから、完全に【魔女】へと思考を移す。

「【魔女連盟】【十重理事会】所属、【奇学の魔女】月村栞だ、憶えなくていいからボコされる」

「なんだその組織は！？聞いたこともない！」

「ハッ、当たり前だろお？ 言つとくが、この世界の各国首脳、そして【魔女】や魔術師は全員、手前から時空管理局とやらの存在を知ってるぜえ？ ついでに言つとくと、だ。この管理外世界においてめえの執務官って肩書きは何の意味ももたねえんだよオオオオオオオオ！」

やけに驚いているけど、どうやら下調べもせずに来たらしいな？

まあいいや、面倒だから風穴開けてとっ捕まえるか。どうせ戸籍もないし。

「なんだと！？ ……どうやら、いろいろと事情を聞かなきゃいけないらしいな。拘束させてもらう！」

「だからよオ、めえはここじゃ犯罪者何だつってんだろおがよおおおおおおお！！！」

さて、そろそろ頃合か？

にやりと笑うと、即座に右腕を上げて吼える。

「道楽ウウウウウウウウウウ！！！」

「おっけい！ 後藤さん、よろしく！！！」

「撃てえええ！！！」

「なにっ！？」

直後、KYに殺到する弾丸の嵐。公園には既に十数人の、銃を装備した魔術師部隊が配備されている。

咄嗟に障壁を展開したらしいが、むだだぜえええええええ？

なにせ、あの弾丸は全部障壁貫通弾。人1人ごときのちやちな障壁じゃあ防ぐ事なんざ無理に決まってるだろオ？

「ぐ、っあああああああ！！」

「ふむ、耳に痛い声だ。撃ちかたやめる！」

十数人の人間が構えたアサルトライフルから吐き出された数百の弾丸が、ガリガリと障壁やバリアジャケットを削っていく。貫通する際に削り取られた魔力が煙となって周囲を覆い隠していく。あれは残留魔力なのだが、さすがに多いな。

妾の声によつて、射撃が止み、煙が晴れたところにはずたばろになったKYが浮いていた。

バリアジャケットのおかげでいい感じにダメージが入っているようだな。

飛んでいき襟首を掴むと、そのまま地面へ叩きつける。

「くっ、質量兵器を使うとは……！ 犯罪者め……！」

「おやおや、ここは管理外世界であろう？ そなたらの法は適応されぬわ。では」

「あいよ。後藤さん、拘束よろしく」

「了解です」

言つて、後藤がKYの両手に特殊な文様の刻まれた手錠を嵌める。

これが嵌められると、周囲では魔力結合ができなくなるという対魔術師用の装備。

嵌められる前に抜け出そうと蠢いているKYを蹴りつけて大人しくさせる。

「ぐっ……」

『待ってください』

「…何者だ？」

突然魔法陣が出現し、そこに人の、リンディ・ハラオウンの顔が映し出される。

息子の危機に慌てて出てきたといったところか？

『時空管理局所属、次元航行艦アースラの艦長、リンディ・ハラオウンです。連行をとりやめていただけませんか？』

「くつくく、笑わせてくれるなあ管理局の狗。法を犯しているのはそなたの放った尖兵だぞ？ 戸籍も国籍もないニンゲンがどうされようと、知ったことではあるまい？ もちろんそちらも、こういう結果は予想して送り込んだのだろう？」

『…今回の件については不問とします。ですから』

「だあかああ！ てめえ本当に思考回路動かしてんのかあ？ こうなっている時点でこれに人権なんざねえんだよ！ そもそも不問って言葉を使えんのはてめえじゃなくこっちだバアーカ！」

ああ、イライラするなあ。

そもそも、現在進行形で犯罪してるってわっかんねえかなア？

「ああもういいや……。明日の同じ時間にここに来い？ そうすればそなたらが聞きたいことに答えてやるかも知れぬからな？」

『……わかりました。クロノは…』

「くく、安心しろ。満足いく答えが返ってくるまでは独房に監禁くらいで済ませてやろう」

『…はい』

それを最後にモニターが閉じる。

まあそれなりに話がわかってもらえてよかった。これで『平和的に』話し合いができるか。

さて、それじゃあ残った問題を片付けるか。

「高町なのは」

「ふえっ!？」

「そなたも逮捕だ」

「な、なんで!？」

「度重なる公務執行妨害に無許可での魔術行使、残存魔力の放置が主だった罪状だ。言い逃れはできまい?これ見よがしに魔法を使っていたのだからな。既に放置された魔力によって少なからず植物の成長に支障が出てきているのだ。罪は償ってもらわねばな?」

「そ、そんな……」

9歳児には重たい現実であろうが、それを選んだのは他ならぬのはだ。

ならば、責任を果たさねば子供のわがままになってしまっからな。それに、だ。魔術師に属する人間であれば年齢は関係なく処罰が下される。放置しているだけでいずれ核弾頭よりも恐ろしい力を得てしまうかも知れぬのだ、野放しにされている者はそう多くない。

その一つが、人格と力を認められ【魔女】となることだが……、まあいまはいいか。

【魔女】から普通に戻り、少しだけ伸びをしてからなのはに手錠をかける。後は。

「ユーノ・スクライア。無許可での世界侵入、魔術行使、その他諸々の罪状は貴様にもある。ともに来てもらっわよ」

「……はい」

首輪型のものを、出てきたユーノに取り付けてなのはに渡す。

このような魔術関連の事象は表には出てこない。そのため就職などにも響くわけではないし、学校を辞めさせられるということもない

が、裏の人間にマークされることは多い。20歳まで生きられればいいのだが、まあ大丈夫だろう。さて、全ては明日。なのはが魔法を捨て、ユーノは故郷に帰り、管理局はここから手を引く。それが一番ベストな解なのだけど…。そう上手くは行きそうもないわね。明日のことを思い、私はそっと溜め息をついた。

「そうだったの。そんなことが……」

夜。

私、アリサはサタンとともにベッドに入り、夕方にあつたことを聞いた。

七姉妹も遠くから見えていたらしく、ルシファーが飛び出そうとするのをベルフェゴールが必死に抑えていたんだとか。

何でサタンと一緒に寝てるかって？ ん、何でだろ？ なんか波長があつたって言うか……。

ほんとになんてかわからないけど、一緒にいると心地いいのよね。

「なのは、大丈夫かな……」

「9歳だし、そこまで重い罰はくだらないわよ。多分」

「でも……。自分でやったことの責任はとらなきゃいけない。でしよ？」

「…そうね」

いきなり、サタンが私を抱きしめる。

…気のせいかな、私の頬を熱いものが伝っている気がした。

「アリサ、今は我慢しなくてもいい。辛いんでしょ、泣きたいんでしょ。今は、泣いてもいいから」

「…うっ、ば、ばか！ べ、別に、そんな……、ひっぐ、うわああああん！ ああああああ！」

辛い。辛くて、悲しい。

友達を助けてあげられなかったこと。黙ってみてる事しかできないこと。

自分が無力だったことを、見ていた世界はまざまざと見せ付けてくれた。

だからこそ、私は自分が恨めしい。もっともっと勉強して、魔術を憶えて。体を鍛えて、もっと上を目指す。

そうすれば、きっとまた誰かが無茶しようとしたとき、私が止めてあげられるから。

それからしばらくしてようやく泣き止んだ私は、サタンにそっと微笑む。

「ありがとう…。サタン、優しいわね」

「か、勘違いしないでよ！？ 私は、アリサが落ち込んでたらお嬢様との勉強のときに支障が出ると思っただけで、あ、アンタのこともなんか気にしてないんだからね！」

「ふふ、はいはい」

きつと、このときからだっただろう。

サタンが、とても愛しく思えてしまったのは。

つと、このお話はまた後ほど。今日はもう寝ます、お休みなさい。

13話 KY発見。(後書き)

あーあ、やっちゃった。最初の方大丈夫、だよね？

結構普通にそういうシーンばかり書いてる人いるし。

……うん、そういうことにはしておきます。

それでは、シーユアゲイン。

結構誤字や間違った意味で使っている言葉が多い事に驚いた。

これからは気をつけて書かなければ。指摘してくださった方、改めて感謝いたします。

それでは改めて、シーユアゲイン。

14話 独房にて（前書き）

お待たせしました！ といってもリンディとの決戦には入っていませんが。

高町家の描写とかマジ鬼畜。わけわからん。

最後に調書（的なメモ書き）が入っているので、参考にどうぞ。

あともものっ凄い長いです。反動で次回が短くなる可能性あり。

追記：前回に引き続き伸様に誤字や文脈の乱れを指摘していただいたので、その部分を修正しました。伸様、いつもお手数をおかけいたします。いつも助かっております。

14話 独房にて

「この……、ここから出せ！」

「はあ、またかよ？」

「道楽さん、ありやイカれた宗教家か何かですか？」

「いんや、別の世界の公務員」

道楽さんの返答に、思わず溜め息をつく。あれが公務員とは……、どうみたって子供じゃないか。

いや、柔さんみたいなのは別として、こりやまた……。善悪の判断がつかない子供に公務を任せるなんて、頭がおかしいと思えない。

「おい！ 聞いてるのか！？」

「うっせーな、少し黙ってるよ……」

道楽さんが盛大に溜め息をつく。

ここは魔術課所有の特殊独房。一切の魔術的加工ができず、決められた場所以外からでも入ることは容易でも出るとは困難を極める。もちろん転移系の魔術は移送をずらされるから使用できない。ある意味最強の砦と言える。

清潔に保たれているから、感染症などの心配もない。

尤も、【魔女】達はそんなことおかまいなしに転移で出たり入ったりするが。

「今晚、でしたっけ？」

「おう。とつとと帰ってくれりゃあいいものを……」

「まあ仕方ないでしょう。とりあえずこっちに損のある取引にはならないでしょうし」

「つか、イリアの話だとこっつて管理外なんだよな。なんでそんな連中が出てくんだつての」

確かに、道楽さんの言うとおりだ。

管理外、つまり自分達の手が及ばない場所、自分達とは関係のない場所に、事件が起きたからといって出てくるのはおかしい。

しかも我々のような魔術師、それに【魔女】の事も知らずに来るなど……。

まさに無謀としか言いようがない。

「……まあでも、琴さんなら」

「なんとかなるだろうな。あいつ、人をおちよくる事に関しては最強だからな」

「おちよくるつて……」

苦笑いしながらも言って隣を見ると、ソファーに座ってコーヒーを飲んでいた道楽さんの顔は、温かい笑みに変わっていた。さて、どうなる事やら……。

「おはよう、お師匠様」

「おはよう。ブルーベルとすずかもね」

「うん、おはようお姉ちゃん！」

「おはよう琴」

朝方、丁度廊下で3人と会い、食堂へ歩いていく。
今晚が管理局の甘党の筆頭とも言えるリンディ・ハラウンとの戦いな訳だ。

それに備える、なんてことはしない。というか、これは全面的に向こうに非があるわけで、それを認めさせればこちらの勝ち。

そして私達の負けは有り得ない。だって負ける条件がないもの。

魔法技術の無断行使？ そんなのユーノに言つてよね。ちゃんとロストロギア輸送を完遂できなかった向こうの落ち度で、こっちは善意で協力してあげてるんだから。

で、ロストロギアの違法所持？ ここでそんなことを言われる筋合いないんでない。もってかれれば強盗容疑でパクれるのだし、そうでもなくても管理外世界ではその法とやらは無効になる。

「お師匠様、笑ってるけど怖いわ」

「あ、ごめん」

ふむ、どうやら自然と笑っていたらしい。いけないいけない。

アリサは顔引きつってるし。他の2人はそうでもないけど。

「あ、おはほうほはいはふ、おひょうはは」

「なーに言ってるかわっかんないからとりあえず飲み込んでから喋んなさい、ベルゼ」

「ん、ごくつ。おはようございます、お嬢様！」

「はい、おはよう」

食堂で既に朝食をとっていたベルゼと挨拶を交わし、私達も席に着く。

にしても、家族が多くなったもんだ……。

続々と食堂に人が集まってきて、七姉妹に私、すずか、ブルーベル、

アリサ、忍姉さん、ノエル、ファリンと。
うん、多い。家が豪邸でよかった。

「じゃ、食べましょうか」

「ベルゼは先に食べてるけどね」

「ベルゼ、その食欲を少し抑えたらどうだ？」

「だってお腹空くんだもん！」

「まあいいわよ。じゃあいただきますしょうか」

全員で合掌し、いただきますのコールのあと一斉に食事を始める。
さながら部活合宿の晩御飯のような騒がしさだが、不思議と嫌じゃない。まあ、部活の合宿なんていったこともないけど。

【魔女】同士の会食とはまた違った楽しさね。

朝食を食べ終えた後は、それぞれやることやりに移動を開始。
ベルゼは意外と料理に精通しているので、献立の改善や改良に入り浸っている。りんご片手に。どこの死神かと。

ベルフェは庭師のようなことをしていて、時々マモンも手伝っている。

アスモは基本的にファリンと一緒にいるし、そのファリンはメイドの仕事があるからアスモもメイドの仕事に励んでいる。メイド服でルシファーはテラスで読書、休日は忍姉さんと何か話をしている事もある。

レヴィアはノエルの手伝いで掃除や洗濯。サタンはなぜかアリサの部屋の掃除をしたり、ブルーベルと手合わせをしたりして。結構充実してるな、この子たちも。

「じゃ、行きますか」

「うん」

「オッケー」

すずかとアリサが頷いたのをみて、私もランドセル？を背負って家を出る。

ここからはいつも通りの風景なので、特に気にしないでくださいませ。

だって特筆すべき案件が何もないもの。平凡な毎日が一番書きにく……。

「ハツ……！ なにやら奇妙な電波を受信していた……」

「……お師匠様、早退したら？」

「大丈夫大丈夫。多分」

放課後。

自宅のチャイムが鳴ったから誰かと思えば、見知った顔が立っていた。

茶色いショートカットに緑と白のセーラー服。珍しいのよね、セーラー服なんて。

最近はブレザーのが多いのに。

「あいつかわらでつか……」

「お久しぶりね、エルフィ」

「うお、栞！ ひっさしぶりー！」

この子は高校生なのに私より幼く感じる。

いや、しっかりしてはいるんだけど……、なんかほっとけないのよね。

向こうもそれでいいやとか言ってくるし。

「って、なんでこっち来たの？」

「師匠からお誘いがあつて。観光ついでに寄ってみたの。なんか魔導師とやらが来てるみたいじゃん？」

「ええ。今は魔術課所有の特殊独房に監禁中。あと知り合いの女の子が魔導師になっちゃつてて、その元凶の魔導師も両方拘束中」

「うわー。まあ処刑にまではならんでぞ？」

「まあね。今日交渉だし、一緒に来る？　って、雅もそのつもりだらうけど」

「うん、行く！　ついでに今日泊めて！」

……威勢がいいのはいいけど、この子ほんとに大丈夫かしら。

とりあえず中へ招き入れる事にする。部屋は……、手前の方じゃないとこの子迷うわね。

「あれ、お師匠様、そちらは？」

「【綾渦あやうずの魔女】、エルフィ・ルナードよ。エルフィ、こっちは私の弟子のアリサ・バニングス」

「初めまして、アリサ・バニングスです。以後お見知りおきを、【綾渦の魔女】様」

おい、なんだその猫被り。さすが社長令嬢、そつがないな。

いや、私も令嬢っちゃ令嬢だけど、もっぱらそれはさすがの方だしなあ……。

「あはは、栞つてば弟子持ったんだ！　初めまして、【綾渦の魔女】エルフィ・ルナードです！　どうぞよろしく！」

「は、はいっ！」

「アリサ、呼吸楽にして。ゆっくりでいいから」

「ハッ…、ハアッ…！！ ケホッ」

どうやらエルフィの魔力に圧倒されていたらしい。

顔を真っ青にして徐々に目を見開いていくアリサを見て、すぐに胸に片手を、背中にもう片方の手をやって軽く叩く。

なまじ魔術師としていい才を持つてるから、抑えてないエルフィの魔力に魅入られかけたみたいね。

「エルフィ、あんたもここは日本なんだから、少し魔力抑えなさい。アンタと目を合わせただけでぶっ倒れる人間が何人いると思ってるの」

「あ、ごめんごめん！ 普段師匠としか目を合わせないから忘れてたよ」

【魔女】の中でも【十重理事会】に入れる人間はかなり決められている。

私達【十重理事会】所属の【魔女】は全員、魔力放出状態で相手と視線を合わせれば、ほんの数分で相手が魔力に魅入られるほどの魔力を持つている。

尤も、それもド素人や魔術を覚え始めた人間だけにしか通用しないけど、相手が魔術師かどうかすぐに見極めたい場合はこの方法がとられることもある。

だからこそ私は普段魔力を抑えているんだけど、エルフィは基本的に魔力を抑えない。だから魅入られかけたのだろう。

「い、今の……」

「大丈夫、大丈夫よ。一旦部屋に戻りましょう」

「う、うん……」

短い間だけど、魅入られかけた人間は精神的に衰弱してしまう事が多い。

アリサも同じような状態になって、普段は見せないような弱々しい姿で私にもたれかかってくる。結構きつかったみたいね、まだ呼吸が荒いもの。

「日本にいる間、雅の指示があるまで魔力開放禁止ね」

「えー！？」

「えー、じゃない。少しは抑えなさい。私より年上なんだから」

「でも、栞って私より年上えっ！？」

「ん、何か言いましたかしらエルフィさん？」

「な、何にも言っていないですごめんなさいすいませんでしたあ！」

「よろしい」

年上とかほざきそうになったので、ガガツと顔面をアイアンクローで捕獲して締め上げながら、満面の笑みで聞いてあげる。

ちゃんと謝ってくれたので、最後に1回だけ思いつきり力を込めた後解放してあげた。全く……。

と、そこで目の前にモニターが開く。通信先は道楽だった。館内だとどこでも開くのよね、このモニター。

『うーい、今大丈夫か栞？』

「いきなりかけてきて何言ってる。別に平気だけど」

『今晚だよな、ちよっと【魔女】大集合ポチたまやるから、特殊部屋まで来てくんね？』

「お前のそのつまらん洒落がやめば行ってやらないこともない。そしてなぜお前がそれを知ってる」

『あ、ちよ、ごめん！ すんません謝るから来てくださいお願いします！ いや、マジで来てくれないと俺が雅に殺されるって！』

「師匠いるの!？」

なにやら既に片手が凍り始めている道楽を冷たい目で見てみると、突然エルフィが乱入してくる。

あ、髪の毛いい匂い。シャンプーどんなの使ってるんだろ。

『お、エルフィか。いるぞーって待って待ってストップ！ これ以上やられたらどーちゃん死んじゃうよ!？』

『そんなつまらないあだ名をつけるお前は次の氷河期まで冷凍睡眠だ。感謝しなさい、きつとマンモスが見られるわ。肉食のね』

『あ、ちよ、ヘループ！ 今すぐ来………』

切れた。何の前触れもなく。

とりあえず道楽が命の危機で雅が暇してるってことは分かった。あれはきつと暇つぶしだ。

そしてエルフィも行く気だ。別にいいけどね。

「じゃ、行きますか。アリサ、動けるようになってからでいいから、他の皆に伝えておいて。【魔女】の用事で出かけたって」

「わ、わかった………」

「ブルーベル、行くわよ」

「はい!」

弱々しく頷くアリサの頭を何度か撫でると、小さくなったブルーベルを胸のポケットに入れてから家を出て、転移魔法を発動させる。ブルーベルも一応デバイスに属しているから、記憶領域に映像を残しておきたい。いざというときの切り札になるし、少しは【魔女】に慣れてもらわないと。

このぐらいは日常茶飯事だからね。座標は……、特別独房入り口、つと。

目を開けると、丁度でかい門が目の前に現れる。

ここが特別独房入り口。ちなみに海鳴支部。この特別独房は日本各地にあつて、それぞれ霊脈レイラインの上に立っている。

そうすることで魔力や霊力といったエネルギーを無理なく引き上げ、余剰エネルギーを還元できるからだ。

門を指紋、網膜、声紋認証で開けると、エルフィと共に中へ入る。

「1日ぶりですね、栞さん」

「ええ、そういえばそうね。後藤さん。こちらエルフィ・ルナード。で、エルフィ、こっちが警察の後藤さん。表向きはね」

「初めまして、後藤といいます。表では海鳴の交番詰めを、裏では海鳴全般を預かる魔術課の課長を勤めさせてもらってます」

「課長さんなんだー。私は【綾渦の魔女】、エルフィ・ルナード！以後よろしくね、後藤さん！」

「こちらこそ」

軽く握手を交わした後、後藤さんを前にして奥へと進んでいく。

ここで軽く、後藤さんの紹介をしておこう。海鳴市の海鳴署の巡査部長であり、魔術課と略して呼ばれる対策班を指揮する立場にある。本名は後藤慶介けいすけ。意外とカッコいい名前だ。

で、次に魔術課だ。正式名称は、特秘魔術部の中の課の一つ、魔術事件対策課という。ちなみにこの下は基本的でない。ここが普通の

警察とは違つところ。

警察ではあるが警察よりも魔術的な面のみで権利が突出している代わり、警察自体での昇進は余り望めない、と。そういう場所。加えて命の危険も多いが、その分給料もいいし、魔術師の中には腕を磨きたくてここに入るものもいるらしい。ま、役に立ってくれるなら何でもいいけど。

特秘魔術部は基本的に警察の暗部として知られており、割と黒い事や血なまぐさい事もやる。

まあ、それが平和につながっていることは確実なので文句は言わないうし、言う必要もない。警察がやらなければ私達【魔女】がこなすんだし。

ま、とりあえず今は魔術事件対策課所属の巡查部長だつてことを憶えてくれればいい。この人について警察の階級やらなんやら言うのは野暮だ。

あ、あともう一つ説明があるか。なんで魔術課の機動部隊があるかつてーと、まためんどくさいのよね。

基本的には出勤しないんだけど、巡查部長以上から魔術関連で出勤要請が来れば出てくる。軍のカリキュラムをこなしたりしてる魔術師達とか裏の人間とかが殆どだし、これが出てくれば大体事件が解決するといわれているくらいすごい。

普段の出勤では一般と同じ『SIG SAUER P230』とか、『S&W M3913』を使っていて、今回はコネのある道楽の要請で『89式 5.56mm小銃』が採用された。

ぶっちゃけるとこれが一番流用しやすかつたらしくて、ついでに5.56サイズしか弾を持ってこれなかつたらしい。

普段はSIGにもS&Wにも障壁貫通弾はいれてあるけど、連射性や威圧感といったものを考えてこれにしたとか。89式の装弾数は多めの30発。

あそこにいたのはざつと数えて10人以上だから、300発以上の障壁貫通弾があそこに叩き込まれたのか。よく生きてたなKY。

まあんなこたあどうでもいい。今はこっちの仕事だ。

中は大きめのグラウンド程度の大きさがあって、中々広い。歩くのも骨だが、この際仕方ないか。

しばらく歩いていくと、割と大き目の独房に突き当たる。魔力を霧散させる術式が組み込んである独房だから、【魔女】レベルでもない限りは魔術を使うことなんてできやしない。

「ハロー、いい夢見れた？」

「……ふん」

「うっわー、すげー糞ガキじゃん。いくつ？」

「14らしいわよ？」

「えっ、1個下!?! ……ちっちゃくない？」

独房を覗き込むようにしてクロノを見つけたエルフィが言うと、クロノの雰囲気が暗くなる。

あ、気にしてるんだっけ、背が低いの。

しかし普通に清潔にされてるな。手錠以外は普通の子供じゃないか。ま、そっちの方が正しいんだけど。

「僕だつて気にしてるんだ……。で、何しに来たんだ？」

「あんた、自分が囚人兼捕虜だつて自覚ある？」

「……こんなことをして、許されると思ってるのか」

「許されるわ。あんたには自らを証明する方法は何一つないのだからね」

うん、本当にこの子は自分の立場が分かってないなあ……。めんどくさい。本当にめんどくさい。

「よう、やっときたか」

「エコーナイト2で最初に話しかけてくる大学の友人みたいな話し

掛け方やめて。体験版やってマジで悲鳴上げたんだから
「コアなところ突いてくんなあ……」

影からぬつと現れた道楽に軽くチョップをかまして言う。
あれほんと怖いから。楽しいんだけどね、怖い。
バイオハザードとかは大丈夫なんだけど。あれってもう殲滅ゲーと化してるし。

「あら、栞の弱点発見かしら」

「師匠！」

「久しぶり、って訳でもないけど久しぶりね、エルフィ」

ほんと、こいつら人の影から出てくるの大好きなんだね。

思わずエルフィにエルポーを喰らわせてしまったよ、H A H A H A。
つか、横にいたはずなのにいつの間後に後ろに回ってた？

「はいいれふ、ひおいはん（痛いですが、栞さん）」

「なら後ろに立つな。で、4人も【魔女】が揃ったんだけど。どうするの？」

「とりあえずまあ、ここで深夜まで待機だな。色々煮詰めないといけない案件もあるし」

「りょーかいです。じゃ、私奥の仮眠室で寝てきますー」

「私はコーヒー淹れてくるわ。後藤さんはブラック？」

「ええ、お願いします」

もう拘置所とは思えない和み方してるな……。

別にいいのだけど。ついでに、雅の淹れるコーヒーは上手い。ほん
とに。

私はミルクとガムシロップを入れるけどね。入れないとさすがに子供
の舌には苦すぎる。

さて、と。じゃあもう1人の元へ行きますか。

クロノから離れたところに、やや小さめの独房がある。その隣にも同じくらいの独房。

隣り合っている独房にはそれぞれ、不安げな表情を浮かべた高町なのはと、変身魔法を解除されたフェレット、ユーノ・スクライアの姿があった。

「おとなしくは、してるみたいね」

「栞ちゃん……」

「残存魔力放置に無許可魔術行使。さらに公務執行妨害、と。これだけ集まれば、簡単にしょっ引けるのだけど？」

「その……」

「まあいいわ。あなたに関しては今夜同伴してもらおうから。それと、魔法を棄てる気は？」

……これもだんまり。

罪状の詳細は既以後藤さんから説明を受けていて、自身がそれほどのことをしたのだということは分かっているはず。

ということは、魔法に執着するしかないという事か。……家族は何をしているのやら。

残存魔力放置罪は、その名の通り魔力を使用して何がしかの現象を引き起こした際に発生する残存魔力、それを放置してしまった罪。

魔力はただでさえ慣れていない人間に悪影響を及ぼすのに、それを放置されては、生態系や環境に大きな影響を与えてしまう危険性がある。だから罪に問わなければならない。

もちろん、それに対してそこまで重い罰は下らない。せいぜい罰金40万程度だろう。

問題は無許可魔術行使罪。これはまずい。

本来魔術師に属している者達は、皆その土地での魔術使用の許可を特秘魔術部派生の課から貰い、その上魔術行使の際には立会いか許

可が必要なのだ。

だが今回のなのははそれがない。【魔女】ならば特例として自由行動が許されており、その【魔女】の協力者として、テストロツサー家は特例で魔術行使が認められているわけだが、それがなければあつという間に捕まってしまう。フェイトたちにもそれは話した。

しかし、なのはに話さなかったのにも理由はある。それはあのフェレットだ。

ユーノ・スクライアはおそらくなのはが駄目になったら1人でジユエルシードを捜索に出るだろう。それはまずい。

探知が面倒だし、なにより一般人に見つかる可能性が上がる。だからこそ、首輪をつけやすいなのはを放置しておいたのだが……。再三に渡る忠告も聞き入れず、ひたすら魔法を使い続けた。夢でみたという認識があったとしても、あれも記憶としては残っているはずだ。

本人にとっては初めて優れているといわれた事なのだろう。このあたりがなのはの歪んでいるところか。

と、話がそれた。無許可魔術行使罪は、本来それだけで1年以上の懲役が確定する重い罪だが、これからのやり方でいくらかでも罰を減らすことは出来る。あとはこちらで首輪をつければいいだけの話だからな。

そんなことで、ようするになのはは殆ど無罪放免に近いことになる。こうして独房に入っているだけで、多少は参るだろうし。

「……です」

「なに？」

「魔法を棄てるのは……、いやです」

と、本人もこの調子だ。

お手上げかなあ。面倒だ。

「まあいいわ、あとでゆっくりお話聞かせてもらおうし」

言って隣の独房へ。そこには、囚人服に身を包んだ普通の少年がいた。知つての通りユーノ・スクライアだ。

ここに入った時点で変身魔法が解けてなのはとひと悶着あったらしい。見事淫獣の称号を手に入れたな。

「栞さん……」

「ユーノ、あんたも無許可魔術行使幫助や残留魔力放置の罪に問われる事になるわ。あとは本来の報告義務を怠ったという点だけ……、まあこれは異世界の人間で通せるわ」

「すみません、迷惑ばかり……」

「自分だけで済まそうとするからこうなる。調べる術がなかったから仕方ないとは言え、私が出てきた段階でなのは止めるべきだったわね」

そうすれば、とりあえず嚴重注意だけで済んだ。

私が言っても聞かないであろうことは分かっていたから、あらかじめジュエルシードで怖い目に遭ってもらったのだけ……。

やっぱり、駄目だったみたいね。

ユーノも悪い奴ではない。だけど罪は罪。

無許可魔術行使幫助罪は、まあようするに無許可魔術行使をやりやすいようにして手を貸したことを言う。

実行犯よりも罪は軽いけど、半年は豚箱行きね。それをすると面倒だから、とつととお帰り願うという事もあるけれど。

「はい……」

「ともあれ、あんたはきちんと反省しているし協力意識もある。問題はないわ」

「あの！　なのはどうなるんですか!？」

「とりあえずデバイスを没収した後普通の生活に戻すか、私達の訓練を受けて国専属として働くか、ね。働くといってもボランティアだし、せいぜい調査に出されるくらいよ」

「じゃあ、痛い目にあったりとかはないんですね？ よかった……」

どうやらこれも相当責任を感じていたらしい。

この分ならすぐに保釈されるだろう。自身の持っている魔法や技術を提供するかわり、自身となのはの安全を確保するという契約がなされているから、刑があっても刑期は短い。さてさて、これからどうなることやら……。

少し前。高町家は急遽翠屋を休みにする羽目になっていた。というのも。

「なのはが捕まった！？ なんでだ!?!」

「魔法の使いすぎに、さすがに栞ちゃんも見逃す事ができなくなつた。他にも色々と問題が起きていると言っていた……」

「なのはの奴、まだそんなことを……」

一家の大黒柱、高町士郎が告げた言葉に、桃子、恭也、美由希がやや驚いたような反応を返す。

というのも、栞が【魔女】として高町家に出向き、たっぷりと魔術に係する事柄について言い含めた翌日、なのはとユーノは高町家

の全員から自分達の知らないところで魔法を使うことは止めるように言っていた。

恭也と士郎は御神流の奥義である『神速』が使えるし、桃子ならばなのは言葉を止められる。美由希もある程度腕は立つから危険はないと考えていたからだ。

しかし、なのはは初めてわがままを通した。それは家族に心配をかけまいとする歪んだわがまままで、結局なのはは家族に知られないようこっそりと魔法を使っていた。

結果としてそれは家族間での和解が成立していない事を意味している。そのため、一番この事態を危惧していた士郎も自身の不甲斐なさに怒る事すらできない。

「……父親失格、だな」

「父さんのせいじゃない。俺たち全員が悪いんだ。なのはが寂しがつてるつて栞にも言われたのに、それを分かった気でいた……」

「そうね……。注意すれば確かに行動は直る。だけど、なのはにとつて魔法はどうしても棄てたくないものだったのね……」

「はあ……。落ち込んだんじゃうな。お姉ちゃんなのに、なのはは何にもしてあげられないなんて」

基本的に高町家の人間は良心的だ。それも過剰なほどに。

だからこそ、身内であるなのはの逮捕という急報には己の責任を人一倍感じていた。

「ああ、そういうことか……。栞が、俺が弱いといったわけが分かったような気がする……」

「どうしたの？ お兄ちゃん」

「俺は分かった気でいたのさ。自分が剣士である事にかまけて、人の気持ちを察するということを、人であることを忘れていた」

悔しげな表情で唇を噛み締める恭也。それを、他の面々もただ眺める事しかできない。

この日、高町家には一日中陰鬱とした雰囲気立ち込めていた。

・被疑者 高町 なのは ・年齢 九歳

・職業 学生

・罪状 無許可魔術行使罪 公務執行妨害 残留魔力放置罪

・備考 後述のユーノ・スクライアによって魔法技術の手ほどきを受け、上記の罪状を重ねた模様。

義務教育課程を修了していないため責任能力は問わないが、保護責任者の監督責任を追及する方針。

なお、本人は海鳴市に放置されていた高エネルギー結晶体を1つ保有していたため、証拠物として押収した。

本人の意識によっては然るべき教育過程を経て魔術師として海鳴市へ配属するという案もある。

・被疑者 ユーノ・スクライア ・年齢 不明

・職業 自称考古学者

・罪状 無許可魔術行使幫助罪 公務執行妨害 残存魔力放置罪

・備考 本人によれば、高町なのはは自衛のために魔法技術を会得したのであり、本人に非はないとのこと。

また、当人も地球への魔法技術の提供には協力的。

・被疑者 クロノ・ハラウン ・年齢 一四歳

・職業 自称時空管理局執務官

・罪状 無許可魔術行使罪 公務執行妨害

・備考 自身は時空管理局執務官と名乗っているものの、地球とはなんら関係がないため無視する。

14話 独房にて（後書き）

調書ってわかんなかったから適当ですが、こんなんでもよければ。クロノの備考は思いつかんかった。あとユーノ君は基本的いい人です。これからどんどん真人間として成長していく事でしょう。なのはは……ね。うん。

誤字とかおかしなところあったら指摘お願いします。

15話 交渉。そして（前書き）

先に注意しておきます。かなりの駄文です。

非常に難産でした。なあにこれえ？みたいなことになってます。

交渉物ムズカシス……。あと、リンデイさんがあんまりにもあれなので、ちょっと優しくしてみました。栞がツンからちょっとデレになった感じ。別にデレてないけど。

そんな感じで、厳しいご指摘は見逃してほしいです。ほんと、ほんとだめだわ……。

15話 交渉。そして

深夜零時。

どこその霧が立ち込めそうな街ならば大きな鐘が12回鳴っているような時間。

クロノを捕らえた公園にいる私達の前には、緑色という人間的にありえない色素を含んだ髪を持った女性が、6人の武装隊員と共に立っていた。

「よくきたわね。随分とお連れ様がいるみたいだけど……」

「これぐらいは大目にみてください。クロノは……」

「真っ先に捕虜の心配なんて、お優しい母上様なこと。でも上官としては失格ね」

「……」

まずはジャブ。軽く1発つてところね。

さてさて、それではこちらの現実というものを突きつけて差し上げましょうか。

こちらの戦力は【魔女】が4名、魔術課の機動部隊が5名。これは、捕虜や周囲の被害のことを考えた場合の人員。

まあ簡単に言えば護衛ね。

そしてフェイトと見学者であるユーノとなのは。捕虜であるクロノの合計13名。

更に遠くには七姉妹とアリサ、すずか、ブルーベルにアルフとプレシア、アリシアが待機しているし、乱入者にはそれで対処できる。対して向こうの戦力はリンディと武装隊員が6名。たったそれだけ舐めているのかと。

「改めまして、初めまして。この場合地球側の【魔女】の代表、で

いいのかしらね。【魔女連盟】【十重理事会】所属の月村栞よ」

「次元管理局所属、次元潜行艦アースラの艦長、リンディ・ハラオウン提督です」

お互い簡単に自己紹介をしてから早速本題へ。

「さて、ではお話といきましょう、まずはこちらの用件から。この世界への不法侵入とクロノ・ハラオウンの犯罪行為。軽くこれから行きましょうか」

「……この世界には昨日初めて来たわ。あなたたちのような人がいることも、現地政府が私達を知っていることも知らなかった」

「ふうん……。まあいいわ、それでクロノ・ハラオウンの罪がなくなるわけじゃないわよ。そもそも、ここへ何をしに来たのかしら」

「ロストロギア、ジュエルシードの回収」

ほほう、まあ常套句だな。

さてさて、では穿り返していきましょうか。なにも敵対したいわけじゃないけど、突っつけるところは突っつくから。

「なぜこの世界にそれがあるの？」

「……黙秘します」

「そう。まあ、こちららも管理局と敵対する必要はないの。むしろ仲良くしたいとすら思っているわ。一番いいのは相互不干渉だけど……、見逃すつもりはないでしょう？　こんなに魔導師向きの人間が多い世界は」

この地球には、リンカーコアを持つ人間自体が稀ではあれ生まれている。

そして、生まれた人間は少なからず強い魔力と魔導師への適性を持っていることが、ちょっととした調査で判明していた。

だからこそ管理局とはあまり関わりたくない。下手をすれば『連続失踪事件！ 止まらぬ怪異！』とかいう大見出しが踊る事になりかねないから。

今までは、こちらとも干渉がなかったからいいものの、これからはそうもいかない。

おそらく、なのはとフェイトの魔力は計測されているから、まず勧誘がくると考えて間違いないだろう。

「そんなことはありませんよ。皆さんの協力には感謝していますし、お礼も考えています。しかし、ここから先のジュエルシード回収は我々時空管理局が全権を持ちます」

「そんな横暴は認められないわね。そもそも、ジュエルシードがこちらの所有物であると言う確証はない。いわば落し物よ？ しかもここは管理外世界。そちらの自由にできる管理世界ではないの」

「しかし、あなた方は民間人です。こういったことはプロに任せるべきでは？」

プロ、ね。そのプロがこうして捕まっているのに、どうして任せられる？

「ノン、ノン、ノン。こちらからすれば、そちらは無粋な乱入者に過ぎません。既に我々はジュエルシードの回収、封印を決定していますので、そちらの意思は反映できません。あしからず」

「しかし、我々管理局は次元世界を守る義務があります。私はこの世界の事を思つて」

「この世界の事を思つて？ ナンセンスですねリンディさん？ 現状あなた方は不法侵入をかました上に犯罪行為に走っている。まあ、少々こちらの対応が甘かった事もありましょう、それは認めめます。ですが、だからといってあなた方の言いなりになると思ったら、大間違いですよ？」

切るカードがいきなり無くなってきたのか、同じ事の繰り返しになってきている。早いけど詰めるか。

「ああ、それと。あなた達、昨日のあの公園でのジュエルシードの暴走時、既に転移準備はできていたの？」

「え？ ええ、それはもちろん。どんな事態にも対応できるようになるほどなるほど、つまり……。あなたたちは地球が滅んでもよかったです。そういうわけですね」

「なっ!？」

突然の私の言葉に驚愕した表情を浮かべるリンディ。いやいや、だってそうでしょう？

少なくとも、あの段階で封印はされているわけだから、まずクロノが注意を引き付けている間に他の局員がジュエルシードを奪取するとか。

方法はあつたはずなのに。

「まず、その準備ができていたならすぐにクロノを飛ばして、事態の收拾を図るべきだった。義務感があるのなら現地人に任せずに、プロであるあなたたちが出てくるべきでしょう？ でもあなたたちはそうしなかった。戦力がほしいから。でしょう？」

「……私達、は」

「確かに、なのはとフェイトには魔法の才がある。それも飛び切りのね。あんたたちがほしがるのも無理はない。けど、残念ながら両方とも渡すわけにはいかないの」

「私達は、そのようなことではありません。どうか、ジュエルシードを渡していただけませんか？」

すげえ、直接言いに来た……。

「口先だけのプロに任せる気はない。今後も地球は私達が守って行きますので、管理局とやらの手は必要ありません。それではさようなら。クロノ・ハラオウンは無条件で引き渡します、と言うかもつて帰ってくださいませ」

「……」

とうとう口も開かなくなったリンディ。

というかね、私もうこれどうでもよくなってきた。だってほんとうでもいいんだもん。

攻めてきたらどうせイリアが全部終わらせるしさ、ぶっちゃけると私が出る幕ないんだよね……。

とん、とクロノの拘束を解除して押し出すと、おぼつかない足取りでクロノはリンディの元へと歩いていく。

あー、だる。ほんとだる。だるだる。いきなりやる気失せた……。お話でもないじゃん、これ。

「ではそういうことで。大人しく元の世界へお戻りくださいませ」

「……わかりました。ですが、次にこの世界で何かが起きたときには、私達にも調査権を与えていただけませんか？」

「それは他の連中と話し合ってみなきゃな。俺たちだけで決められる問題じゃない。オーケー？」

「それで構いません。……この度は、申し訳ありませんでした」

今まで黙っていた道楽が言って、リンディが頭を下げた。

あらまあ、ちゃんと謝れるんじゃない。というか道楽、喋る気あったのか……。

そういうわけで、たいした進展もなくお話は終了。そもそも私達のこと聞いてこなかったし。

……私達のご丁寧に「【魔女連盟】ってのはですねー」などと言う
とでも思ってたのだろうか。冗談じゃない。聞きたければ自分で調
べればいい。それだけのテクノロジーはあるんだから。
結局その後、私達は何の変哲もなく自宅に帰った。……あー、海の
ジュエルシードどうしよう。もうアレしか残ってないんだけど。

「かあ…、艦長！ なぜ彼らを……」

「クロノ……。私達は、少し傲慢だったのよ」

魔女達が立ち去った後、私はクロノの抗議の声を遮って言う。

それは、控えていた武装隊員にもしつかりと聞こえた。

「侮っていたのね、彼女達を……」

それは、間違いなく私の本音だった。

クロノを落としたのがどれほどの相手かと思えば、あんなに小さな
少女。まだ右も左も分からない小童かと侮ってしまった。

それがいけなかったのだ。

蓋を開けてみれば、まるで威圧感の塊。後ろに控えていた他の3人
も見劣りせず凄まじい技量の持ち主だという事が分かってしまった。
結局ロクに交渉もできず、まともに話を持ちかけることもできな
かった。彼女達が立ち去って、ようやく私は自分がその威に飲まれて
いたのだと分かる。

「艦長……」

「さあ、艦に戻りましょう。本局に戻ってきちんと報告書を書いて、それから……」

「一から、己を鍛えなおそう。

肉体的にはなく、精神的に。

そして、次にここにくるようなことがあれば、そのときには【魔女】たちに認めてもらえるように。」

「それから、お茶を飲みましょう」

「艦長、それは勘弁してください」

甘党には甘党の楽しみがある。

けれど少しは、砂糖を控えようかと思った今日この頃だった。

翌朝。

私が目を覚ますと、両サイドにすずかとブルーベルがしがみついていた。

うん、暑いんですが。

「お師匠様、そろそろ起きないと」

「ならずかを引っぺがして」

「はあ……。ほら、すずか起きて！朝よ！」

ぺしぺしと、アリサに頬を叩かれるすずかを横目に、ブルーベルをぐいっと引き剥がす。

はあ……。とりあえずユーノは地球の軍隊張りに鍛えてもらうとして、なのはがなあ……。

とりあえず、家族を引っ張ってきて今後どうするか決めさせるか。魔法を持ったまま国に協力するか、魔法を棄てて普通に生きるか。でも多分、あの子棄てないよねえ……。

「うにゆう……」

「のんびり寝おって……」

「昨日はお疲れ様。で、私達はまだばらしちゃいけないのよね？」

「ええ。なのはが決断を下すまでは。その後は、自由にばらしていわ」

結局はあの子の決断次第。

【魔女】を指すアリサと魔術師であるすずか。ユニゾンデバイスであるブルーベル。身内だけでこれだけの人数を抱えているのだ。バラすのなら覚悟しなければいけない。

「ともかく、まずはご飯ね！」

「うゆ……」

すずか、そろそろ朝に強くなってくれないかなあ……。で、時間が飛んで学校。

『あの、栞さん。聞こえていますか？』

『どったのフレット』

『できれば名前でお願ひします……』

授業中に淫獣、もといフェレット、もといユーノからの念話が来て、並列思考に切り替える。

昨日の事なんてもう気にかけてすらない。必要なのはこれからだし。後は他の人が何とかするでしょ。昨日は大分いろんな人が空気だったけどさ。

『で、なに？ ユーノ』

『その、昨日一晩色々考えたんですけど……。魔術を学ばせてもらえませんか？』

『おおう、唐突だね』

本当に唐突だ。まあ適正を見なきゃなんとも言えんが……。

ともかく、どういった趣旨で学びたいのかを聞かねば。

ああそうそう、なのはもう普通に学校に通っていて、家にも帰ってる。いわば釈放だ。

尤も一応魔術課の監視は付く。そのうち終わると思うけど。

そんで、ユーノの人間スタイルは既に高町家にもきちんとして浸透したらしく、今日から翠屋のスタッフとして働くんだとか。

まあ自宅の手伝いみたいなものだからね。

『理由は？』

『魔法だけでは、僕にできることは限られている。そう感じたんです。少しでも見聞を広めたいのと、可能性を広げたいので……』

学者的な考えなのかね。知識を得たいってのは。

まあ誠実っぽいし、私に損があるわけでもないからいいか。

あ、でも師匠はどうするか。……よし、決めた。

『なら、道楽を紹介するわ』

『道楽さん、ですか？ 確か、あの【魔女】の？』
『そ。そいつの下で修行しなさい。ただし、決して音を上げない事。いいわね？』

まあ要するに、しごかれてこいと。そういうことだ。

あいつの修行はまず肉体を鍛えるところから始まって、暗殺術に入
って、そしてようやく魔術の勉強に入る。

体の構造を覚えて何ぼの魔術だからね、アイツのは。

『わ、わかりました。それで、その人とは』

『帰りに念話するから、私の家に寄りなさい。それと、なのはのこ
とは頼むわよ』

『……はい。責任は取ります』

うむ、よろしい。

中々好青年みたいで安心したよ。これならまあ、中々の戦力にはな
るか。

しかし……、冬に間に合うかね？

「じゃあ、ここを栞ちゃん、答えてください」

「はい」

そして授業が退屈だ。

とつととジュエルシードを回収してきたいな……。

ああそうだ、プレシアとアリシアの受け入れ準備もしないと。やる
ことは一杯。

さ、今日ももうちょい頑張るかあ！

15話 交渉。そして（後書き）

ということ、ちょっとした交渉が終わりました。

交渉ってかクローノ引渡しだけじゃんみたいな感じですが。

一応突っつきましたが、ここで突っつきまくと後のネタがなくなるので自重しました。

一応ユーノ君魔改造計画進行中。もしかしたらUNO君になるかも
しれません。

ちなみに、ユーノ君の頭文字ってYですか、Uですか？

それと、これ一応StSまで続ける予定なので、それを見越して書いてます。あと管理局をそこまで敵視してるわけでもないです。干渉してこなければ別にというスタンスで。殴られれば砲撃で返しませんがね？

まあそんな感じで、できればきついご指摘は控えていただきたいです。この解だけでいいので！これはあまりに難産だったので、せつつかれるとさすがにきついです……。勝手に申し訳ないですがお願いします。

16話 一時の休息（前書き）

次話かその次で第1期、ジュエルシード事件は終了です。

そこからは空白の半年間を描いていくので、かなりオリジナル色が強くなりますがご了承くださいませ。

それではお待たせいたしました。

追記：ご指摘のあった文脈の乱れ等を修正しました。

16話 一時の休息

数日が経ち、ユーノとなのははやたらと仲良くなっていた。まあ原因としては。

「……右腕が動かないんですが」

「ま、昨日あんだだけ肩動かしたからな。動かなくて当然だろ」

「はあ……」

夜ということもあってやや客足が少なくなった翠屋の店内で、ユーノが動かない右腕をさすりながら、道楽と話していた。

さっそく開始された修行だったが、まずユーノの基礎体力が足りていないことが分かり、ひたすら体力増強するべく鍛錬に励んでいるらしい。

毎晩遅くになって帰ってくるユーノは毎度毎度ボロボロになっているわけで、その手当をなのはがすると申し出たため、2人は色々と話し合う機会も多くなったとか。

「まあでも、あと1ヶ月もすればまともな修行に入れんだろ」

「それまで、生きていらねえればいいですけどね……」

「大丈夫、人間って案外頑丈だから」

ちよつと物騒な会話はスルーすることにする。

今日来たのはこいつらを見に来たわけじゃないからな？ 違う理由だから。

「栞ちゃん、お待たせしたね」

「ああ、土郎さん。構いませんよ」

店の奥から、タオルで手を拭きながら出てきた土郎さんに軽く会釈する。

今日来た理由は、なのはがこれからどうするのかを聞くため。そして家族同士で話し合った結果を、土郎さんから聞き出すためだ。個人的にはなのはがどうなるかと、それが自分がしつかり考えて選んだ末の結末なら文句はない。

けど、今のなのははただ状況に流されてしまっている。それじゃないから。

店の奥に案内され、ちよつとした個室に入ると扉に鍵をかけてから、土郎さんに相対する形で席に着く。

「さて。話し合いはしました？」

「ああ。なのはは、これからも魔法を使いたい、と言っていたけどね。せめて中学を出るまでは遠ざけておきたいというのが本音だよ」

「そのお気持ちもわかりますが……。デバイスをいまだ所持している以上こちらでも対応せざるを得ません」

「なのはには、御神流の稽古をつけようかと思っているんだが」

「また突然ですね。それに、彼女は運動音痴だったはずじゃ？」

「それを補う意味でもね。精神を鍛えるのに剣の道は向いていると思う」

まあ、確かに……。

日本の武術はまず精神を鍛え、錬磨することを念頭に置いてあることが多い。といっても、私は武術なんて学んだことはないから、個人の主観なわけだけれど。

土郎さんや恭也の使う御神流もその1つで、肉体的に弱いなのははうってつけかもしれない。

まだ幼いから、というの是最早意味がない。それでは誤魔化せないところに来ているから。

「いいわ。土郎さんのしたい様にしていたで。ただし、こちらからお呼び立てした時には必ず出向いていただけますか？」

「ああ、それはもちろん。それで、魔法はどうするんだい？」

「当面は保護観察。魔法技術が錬磨できる環境を整えば、そちらも鍛える方針で。ただし、力の意味をしつかりわかった上でなければいけません」

「わかった。温情ある措置、感謝するよ」

「私とて鬼ではありません。あの場はバタついていましたからあいつた対応になりましたが、有用性を鑑みても、もしかするとなのははいずれ管理局に行くことになるかもしれませぬね」

これは本音だ。

直観的なものだが、おそらくなのはは管理局に行くことになる。それも自分から。

まだ先の話ではあると思うけれど……、やはりあの子の理想は歪だ。それゆえにつけ込まれるかもしれない。

それに、まだ冬にはあれがあるのだから。どうなるか分かったものではない。

なにも管理局が悪いと言っているわけじゃない。小学3年生で勤めるということがあり得ないのだ。

せめて中学を出てから通ってもらいたいのだが……、闇の書事件がどうなるか、よね。

「ともあれ、後は彼女次第。どの道を選ぶのかは彼女が決める事よ」

「……ああ。私達にできるのは、見守り、そして正す事だけだからね」

「さて、暗い話はおしまい。ケーキはまだある？」

「あるよ。今持ってこよう」

さて、どうするかしら？

高町なのは……。

……わからない。

わからないわからないわからないー！

「どうしましたか？」

「あのう……、このプリント、全部やらないといけなんでしょうか？」

「ええ。今日中にお願いしますね？」

「……ガクッ」

「効果音を口で言い表そうとしても無理ですよ」

私、高町なのはの心の叫びすら見通したようにばっさり切ったメイドさん。

メイド服を着た、きれいな黒髪の女の人に促されて、私は渋谷山積みされたプリントの天辺から一枚を手にとってみる。

さっきから数十枚は見ているけど……、わけがわからない。

ここはとっても豪華な屋敷の中。といっても、認識障害？ という効果がある魔術が掛かっていて、普通の人は入ってこないし気付きもしないんだとか。

魔術って、魔法とは違うのかな……。

この人は【魔女連盟】という組織に所属している人で、そのうちでも力はあまりない人なんだって。

「えーと……」

あのお話の後、私は家族と魔法のことについてしっかり話し合った。その結果、きちんと学校で上位の成績を収め、しっかりと人付き合いができるなら、魔法を使ってもいいというところまで譲ってもらえたんだけど。

今度は【魔女連盟】の人が来て、みっちり勉強を仕込むそうです。今書いているプリントは、全部【魔女連盟】の約束事について、きちんと覚えられるようにと作られたものなんだとか。

「あうう、わからないー！」

「ほらほら、なのはちゃん。少しずつでもやっていきましょう。魔法を使いたいなら、試験をパスしなければいけないんですから」

そう。

今私がやっているこれは、全部そのため。

私の持っている『魔法』は地球ではやっぱり異質なもので、使うためには【魔女連盟】にちゃんと認められないといけないんだって。栞ちゃんが裏から手を回してくれたらしいんだけど……、すっごく大変です。

でも、ユーノ君だって修行を頑張ってるんだから、私だってやるもん！

はあ……、にしてもこれ、すごい量だなあ……。

机いっぱい山積みになされたプリントを見てひっそりため息をつきながら、私はついそんな事を思ってしまった。

翌日。日本にいる3人の【魔女】とテストロッサ家、そして我が家の居候を招いた晩餐会が開かれた。

主催は我が姉君^{あねぎみ}、忍姉さん。なんでも、面倒事が1つ片付いたお祝いだとか。

「この度は、お招きいただきありがとうございます」

「いえいえ、いずれ家に来るのですから、遠慮は要りませんよ」

「部屋だけは有り余っているからね。忍姉さん、私ちよつと厨房の方見てくる」

忍姉さんに深々とお辞儀をしているプレシアに声をかけると、忍姉さんにも一言断って厨房へ。

厨房ではノエルとファリンがフル稼働している頃だろう。この晩餐会、数時間前に忍姉さんが言い出したことだから。

コツコツと廊下を歩いていき、割と重い扉を押し開けて厨房へ。

中では、ノエルとファリンに加えて、ベルゼとルシファーまでもが食事の支度をしていた。

しかも皆額に汗を浮かべての高速作業である。さすが、非人間組は違うな。私もだけど。

「ルシ姉、お皿！」

「ほら！」

「ルシファーちゃん、こつち盛り付けよろしく！」

「わかった！」

「戦場ね……。皆、私も手伝っわ」

「お、お嬢様！？ いえ、ここは私達だけでも」

「いや、そうは見えないから。ほら、盛り付けは私がやるから、ルシファーは他を手伝ってあげて」

「は、はい!」

ルシファーの仕事を半ば強引に奪うと、精神を集中させて盛り付け始める。

それはもう、明鏡止水とかいけちゃいそうなくらいに。

ものの数分で盛り付けを終わらせると、すぐにそれをノエルに渡して配膳してもらおう。

ファリン? あの子に任せると色々大変なことになりそうだから……。

「はっ! 今何かとても酷い事を思われた気がしますよ!」

「気のせい気のせい」

適当にファリンを宥め、とっとと料理を仕上げる事にした。

ご飯は皆一緒に食べるべし。

そして。

「出来たー……」

「ベルゼ、向こう行ってきていいわよー……」

「あーいい……」

ようやく食事を全て作り終わり、ファリンとルシファーはイスに腰掛けて放心状態。

ベルゼは重い足を引きずりながら会場へと戻っていった。

修羅場だったわ……。最後なんて両手で違う料理作ってたから。

ほんとはちよっと手伝って抜ける予定だったんだけど、予想以上に料理の数がね、多くてね。

抜けられなくなっちゃって、結局最後まで手伝う事になった。

ちなみに、ノエルは会場で給仕。よくそんな元気があるわね……。

「さて、それじゃあ私達もご飯食べに行きましょう。ファリンも、シヤンとする！」

「ふあ〜い……」

「うう、申し訳ありません、お嬢様……」

ぼんぼんとルシファアの背中を軽く叩き、2人の後に続いて厨房を出る。

あー、ほんと疲れた。お腹もぺこぺこよ。

先に行く2人の背中を眺めつつ会場へ着くと、すずかが皿を片手に持って歩いてくる。

くっ、美味しそうに食べおって。厨房で修羅場ってた時に……！
まあいいけど。

「栞、まさかずっと厨房にいたの？」

「そうだけど」

「ご飯、なくなっちゃうよ？」

「たった今その危機を感じたから、とつとと胃袋に収めてくるわ。
すずかも楽しみなさいね」

「うん」

すずかの頭を撫でてから食事の並ぶテーブルへ。

まあその豪華なこと。前世では考えられない食事の数々だけど、こ
つちに来てからは慣れたもの。

「んー、美味しいよう栞！」

「はしゃぐのはいいから、落ち着いて食べなさい」

満面の笑みで食事の手を進めるエルフィに言って、私も手近にあっ

た料理を皿に取る。

そろそろ、海の方の回収も進めないといけないわね。これで暴走させても困っちゃうし。

そんなことを考えていると、突然肩を叩かれた。ふっ、と振り返ると、突然右の頬に違和感が。

丁度右側に振り返った所で、突き出した人差し指に右の頬をむにとやられていた。

「なんて懐かしい悪戯してるのよ、雅」

「いいじゃない、ちよつとやってみたくなったの。今日はありがとう、こんなパーティーに呼んでくれて」

「いいのよ、別に。エルフィがこっちにいるうちにやっておこうと思っただけ」

エルフィはもう数日もすればまた海外へ旅立つ。

というか彼女も学生なわけで、さすがに長期欠席はまずい。

そんなわけで、エルフィは数日後に自国へと戻ることになっているのだ。

なので、エルフィがいる今のうちにちよつとしたパーティーを開こう、と忍姉さんが言い出して今に至る。

「本人はご満悦みたいだし、よかったわ。それで、残りのジュエルシードの事だけ」

「ええ。明日か明後日にでも回収予定よ。魔術課には届出を出してあるから、後は私達で処理できるわ」

「オーケー。それと、知り合いから連絡。なのはちゃん、しっかり勉強してるみたい」

その言葉に少しだけ微笑む。

これでまあ、なのはも少しは裏の世界の事を知ってくれるといいの

だけど。

まあ、いまはとりあえず。

「ならいいわ。さ、今日は楽しんで頂戴な」

「ええ、そうするわね」

雅と別れて少しすると、料理に舌鼓したつみを打っているアリシアを発見した。

背丈の関係で手が届かないにも関わらず食事が取れているのは、アリシアが浮いているから。

今のアリシアの姿は、まあぶっちゃければロリータだ。白ロリータ。それがあっているから困る。

で、なぜアリシアが浮いているかということ、私が浮遊魔術を教えたから。

今朝プレシアと共にこの館に来たアリシアは、いの1番に私の元へ来て浮遊魔術を教えてくれるよう頼んできた。

やはり背が低いというのは面倒らしく、せめて家の中だけでも飛んでいたいんだとか。

「まさか、1日でマスターするとはね」

「私も信じがたいわよ……」

「アリサ？」

「私だってコントロールに苦戦するのに、何で1日練習して飛べるようになるのよ……」

隣で皿を持ったアリサが項垂れる。

確かに、アリサの言葉は尤もだ。普通、浮遊魔術は1日修練しただけで会得できるものじゃない。

これは私の推論だけど、アリシアは長い間霊体だったから、浮くイメーჯや魔力の親和性がずば抜けているのかもしれない。

とはいえ、だからなにといい事なんだけども。そもそも長い間霊体になっている人間なんて早々いないし。ともかく彼女も、魔術師の資質は十分だったことね。

「……負けないわ、絶対」

妙に燃えているアリサを微笑ましく思って、私も食事に専念する事にした。

お腹はすっからかんなんです。

16話 一時の休息（後書き）

という事で、ひと時の休息でした。

最後のジユエルシードはかなり詰め込むかもしれないので、今回以上に更新が遅れます。

それと、14日から17日まで修学旅行で北海道に行ってしまうので、更新が出来ません！ 申し訳ありませんが、更新は20日以降となる可能性が高いです。

なるべく書きだめはしますが、もしかすると北海道編とか書くかもしれないし、書かないかもしれません。すべてノリです。

それでは、シーユアゲイン。

17話 最後のジュエルシード 始（前書き）

お待たせしました、ジュエルシード編ラストの開幕です。

今回は序章なので割りと短めなのです、すいません。

かなり見直したかもしましたが、またおかしな点が出てくるかも知れん……。

指摘にビクビクしつつ、修学旅行からの帰還宣言と共にドゾー！

追記：ご指摘の箇所、文脈の修正を行いました。

17話 最後のジュエルシード 始

「ねえ、しおりん」

「なに？」

それに最初に気付いたのはアリシアだった。

時刻は午後6時。あの晩餐会から数日が経っている。

既にテストロツサ家は月村家へ移住しており、忍姉さんの権りよ…

…、力で戸籍も作ったから、本格的に【魔女連盟】やこの世界の技術発展に協力してくれるらしい。

急な発展ではなく、限りなく緩やかに、自然に発展できるよう努力するとか。

不快そうに眉をひそめ、心なしか額にうっすらと汗をかいているアリシアを見て、何事かと声をかける。

「どうしたの？」

「変な感じ、しない？」

「変な感じ？」

アリシアのそんな訴えに首をかしげながらも、感覚を街全体に広げ、更に広域探査を掛けていく。

すると、ある一点で複数の魔力反応が暴走しかけているのが確認できた。

こんな遠くの異常を感知できるなんて、相当探知に優れてるのね…

…。いや、というよりは魂自体が魔力に馴染んでいるから、異変に気付きやすいのか？

どちらにしろ、放っておけばまずいことになる。早急に手を打つとしよう。

「アリシア、すぐに全員を集めて」
「わ、わかった」

戸惑いながらも頷き、他の住人を呼ぶために飛んでいくアリシア。それを見ながら念話でブルーベルを呼ぶと、すぐに青いウィンドウを開いて2人の魔女に連絡をつける。

「ハロー。ご機嫌いかがかしら、雅、道楽」

「すこぶる好調よ。どうしたの？」

「俺たち2人共に連絡ってことは、いろいろめんどくせーことになつてんだろ？」

「ええ、お察しの通り。ジュエルシードの暴走兆候が出てるわ。場所は海鳴市近海、数は5」

広域探査で得られた情報を伝えると、2人は軽く息を吐き出す。こちら側にあるジュエルシードは16個。残りのすべてが見つかったのは僥倖だったが、それ以上に被害が心配だ。

陸上、民間に被害は出ないだろうが、海洋生物や海流にどんな影響を与えるかわからない。

早急に片付けてしまったほうが楽な問題だろう。

そう思案していると、戦力になりうる人間、アリサ、すずか、フェイト、アルフ、アリシア、プレシアが全員揃う。

ルシファーたちは私が直接呼べるから問題ない。さて、と。

「全員すぐに戦闘準備。すずかとアリシアはサポートに回って頂戴」
「お師匠様、何があったの？」

「海鳴市近海で、ラスト5つのジュエルシードの暴走兆候が確認されたわ」

不安げに尋ねるアリサにそう告げ、そつと頭を撫でてやる。

ジュエルシールドの暴走具合にもよるけれど、現状の戦力で足りないということはないだろう。

すずかは既に魔法薬の準備を終わらせているし、プレシアなんてちよっと発光している。この2人はどうも好戦思考らしい。

「雅、道楽。現場で集合しましょう。30分後にね」

「わかったわ」

「りょーかいだ。魔術課にはこっちから話し通しとくぜ」

ウィンドウが閉じると、小さなバッグを手に持ったブルーベルが部屋へ入ってくる。

バッグ、いるのかしら。

「じゃあ、行きましようか。ブルーベル、行くわよ」

「皆、私の周りに集まって。扉を開くから」

ブルーベルの言うとおりにできるだけ小さく固まると、小さく呪文の詠唱を始める。

数秒後、そこから私たちの姿は完全に消えていた。

荒れ始めた波が打ちつける海岸に、突如として光が溢れる。

その光が収まった後には、先ほどまで海岸から随分と離れた位置にある月村の館にいた者達が立っていた。

ちなみにきちんと靴を履いている。そもそも月村家は洋館なわけで、靴はいつも履いているのだが。

「うわ、荒れてるわね……」

「魔力もすごい。確かにこれは……」

普段とは明らかに違う海の様子を見てアリサが、そしてそこに荒れ狂う魔力の流れを感じてフェイトが呟くと、突然後ろで何かの倒れる音がした。

驚いたように栞が振り向くと、そこには荒い息を吐き出しながら苦しそうに胸の辺りを抑えるアリシアが倒れていた。

「アリシア！」

「姉さん!？」

「ちよつとアリシア!？」

その姿を見て、突然のことに動揺する暇もなくプレシアとフェイト、そしてその使い魔であるアルフが駆け寄る。

プレシアがアリシアを抱き上げると、アリシアはきつく目を閉じて必死に呼吸をしていた。

「まずい……、魔力の過負荷よ。結界を張るからプレシアは傍に、それ以外はこちらへ来て」

栞が告げると、駆け寄っていた3人のうちプレシアを除いた2人がその場から離れる。

それを確認した栞が軽く指を動かし、二、三言呟くと薄い青色の結界がプレシアとアリシアの周りに形成される。

一見すれば触れただけで割れてしまいそうな薄い結界だが、その場にいる全員がその結界自体にあの暴れているジュエルシードと同レ

ベルの魔力が込められている事を感じ取った。

「プレシアはアリシアの事を見てて頂戴」

「わかったわ」

結界に阻まれて魔力が薄くなり、なんとか顔色がよくなったアリシアを膝に乗せてプレシアが頷く。

「じゃあ、アリサ、すずかが1つ。フェイト、アルフが1つを担当。他の3つは私達が行くわ」

「了解！」

「わかった」

「うん」

「わかったよ！」

4人が頷いたのを確認し、ブルーベルと軽く手を繋ぐ。

これがとりあえず最後の仕事か。

現在、浜辺の陸地側には結界に包まれたアリシアとプレシアが。波打ち際には私達6人が。そして少し離れた海上に雅と道楽、そしてなぜか灰色のコート姿のユーノ。

「道楽、なんでユーノが？」

「ああ、一応ジュエルシードは自分の責任でもあるから、連れて行ってほしいって頼まれてな。壁にはなるだろ？」

開かれた青いウィンドウの向こうで悪戯が成功したときのように笑う道楽。

それをみてやや苦笑する栞だったが、顔の筋肉を元に戻して口を開く。

「結界魔法とかが得意らしいし、十分でしょう。ユーノ、いけるわね？」

「問題ありません！」

「なら念のためにアリシアとプレシアのカバーをよろしく。何かあれば言いなさい」

「はい、わかりました！」

はきはきと答えるユーノにオーケーを出すと、突然地面が振動し始める。それは海面と同調しているように見えた。

何かと全員が海の方を見ると、魔力の膨張は更に加速していた。それどころか、海の表面自体が盛り上がってきている。

徐々に盛り上がる海の水が臨界点に達した瞬間、海底からそれ等が姿を現した。

「わああ……」

「こいつぁ……」

思わず雅と道楽の口から声が漏れる。

姿を現したのは、巨大化したタコとイカ、そして蠍さそりのようになったエビと巨大な魚人。

そして、それらとは一線を画す大きさの竜だった。

「大王イカに巨大タコ、蠍エビとインスマウスって所かしら」

「なんでインスマウスなんだよ？ ダゴンでいいんじゃないの？」

「じゃあダゴン（偽）で」

「あの竜は……、竜でいいわね」

栞の軽口に道楽が突っ込み、更に雅が名称を決定する。

曲がりなりにも邪神の名を持ったアレでも、栞の目には余り強そうには見えなかった。

最後に栞が竜の仮称を決定し、【魔女】の戦闘準備が整う。

「じゃあ、いくわよブルーベル」

「ひさしぶりの出番だけど……、煉獄は？」

「すぐに呼ぶわ。じゃ、ユニゾン！」

「「イン！」」

光と共に、随分と久しぶりなユニゾン姿の栞が姿を現す。

まるで脱皮でもしたかのように首を回し、バキボキと骨を鳴らした。

「とても女子とは思えない仕草だよな……」

「次言ったら背骨へし折るわよ」

「スマン」

両手をぐにぐにと開いたり閉じたりする栞に、空中で土下座すると
言う器用な真似をして謝る道楽。

その様子を見て小さく溜め息をつく、雅が口を開いた。

「じゃあ、私はイカに行くわね」

「んじゃ俺はタコだな」

「じゃあ私は蠍エビか。お互いとりあえず頑張りましょうか」

ここに、【魔女】対軟体生物&蠍エビの戦いの火蓋が切って落とされた。

「きもっ……」

海の上で踊り狂うそいつ等を見た私達の感想は、全員一致でそれだった。

いや、だって、ねえ……？

ということでごんにちは、アリサよ。

「フェイト、どっちやる？」

「じゃあ……、魚みたいな、あれ」

「魚人ねえ……。まあいいわ、そんじゃ、健闘を祈りましょ」

こつん、とフェイトと拳を軽くぶつけ合ってから魔力を循環させる。これは私にとって大きな試験だ。

クリアできて当たり前前の試験だけど、実力が足りているかどうか……。

「ともかく、やるしかないわね」

「アリサちゃん、準備はオツケーだよ」

「よし、それじゃあ行きますか！ 『エアハイク』発動！」

キンッ、と空気が張り詰める。

エアハイクは、足の裏に特殊な魔力力場まりよくりきはを形成して、大気を踏みつけることの出来る魔術。

アリシアはこれの元になった『エアフロート』を1日でマスターした。

このエアハイクは、お師匠様が私のために考案してくれた魔術ではあるけど、実のところまだ完全には操れない。

けど、飛んで跳ねてくらいならできるし、これだけの魔力があれば

いくらだつて供給は効く。

「補助魔術陣形成、プロセス実行、魔力の循環を確認」

少しだけ宙に浮いている私の後ろで、さすがが私のサポート用の魔術陣を動かし始める。

魔術陣は、まあ手っ取り早く言えば魔法陣だ。魔術陣は魔法陣の簡易版であり、私達が普段使用しているものでもある。

というか、魔法陣は複雑すぎてまだ私達じゃ書けない。

前から魔術の勉強をしてるすずかだつて難しいんだから、私なんてまだまだだ。

「全効果の効率的作用を確認、魔術陣『妖精たちの踊り場』、始動」

すずかの合図と同時に、私の中に次々に魔力が取り込まれていく。瞬く間にエアハイクで消費されていた魔力が補充され、全身に魔力障壁と身体強化が施された。

これは、すずか特製の魔術陣、『妖精たちの踊り場』の効力。

周囲の魔力を対象に取り込み、自動的に最適な魔力障壁と身体強化を施す補助用魔術陣。

これのおかげで、私も全力を出せる。

「次、行くわよ。紅蓮拳！」

私ももう一つの魔術を展開し、四肢に炎は纏わせる。

私の魔力によって形成されたこの炎は、まだまだ未完成ながらも凄まじい威力を有している。

よし、準備オツケーね。

「いくつか魔術陣のストックはあるから、派手にやって大丈夫だよ」

「りょーかいよ。んじゃ、行きますか！」

こうして、私と竜の一騎打ちが始まった。

17話 最後のジュエルシード 始（後書き）

と言う事で、17話でした。

今回は本格的な戦いに入りますので、描写や文脈が乱れに乱れるかも。

ついでに更新が遅れる危険性が大です。なんか疲れちゃっていませんね。

それでは、シーユアゲイン。

18話 最後のジュエルシード 終（前書き）

今回はちょっと張り切りました。

が、誤字脱字誤用があるかも。というか多分ある。

見直しはいつもしてますが、どうも見はぐってしまふ事が多いみたいです。

それと、今回はほぼ初となる、インテリジェントデバイスのバルディッシュさんが登場します。なので、バルディッシュの念話以外での発言は「」で表させていただきました。

リリなのでございますから、デバイスの出番はこれから増えますので、以後はデバイスこれで行こうと思います。

そんな拙作ではございますが、のんびりとお楽しみくださいませ。

18話 最後のジュエルシード 終

「イカって、外国だとカトルフィッシュユって呼ばれるのよね」

ぼそつと豆知識を呟いて確かめると、雅の眼前に数本の触手が迫る。それ自体が本来のイカではありえない、自身の体を武器として扱うという行動。

思考自体が別のものに変わっていると考えつつ、ノーモーションで真横に跳び触手を回避する。

「アイシング
凍結」

雅の真横を通り過ぎた触手へ向けてそう呟くと、一瞬で1本の触手が凍りつき、そのまま砕け散る。

氷結系魔術の基礎とも言える、対象の凍結。本来ならば、せいぜいが5センチ四方のサイコロを凍結させられればいい方という魔術のはずだが、彼女はその基礎をあらゆる存在を凍結させるという『魔法』にまで昇華させていた。

冷たい瞳で9本足になった大王イカモドキを見据えると、そつとその右手を開き目の前にかざす。

「瞬間冷凍だと鮮度が落ちないって言うけど」

つい、とその右手を真横へ動かす。瞬間、彼女の周りの大気が凍りついた。

否、周りだけではない。彼女からイカに至るまでの大気が、まるで一本の道のように凍りついていた。

「あなたで試してみてもいいかしら」

言葉が終わると同時、開いていた右手をぐっと握りこむ。たったそれだけの動作で、凍てついていた大気の全てが完全に砕け散った。砕け散った後のそこには何も残らず、ただ真空となつた虚空が浮かぶだけ。

無論、大王イカもその凍てついた体を粉々に砕かれ、まるでダイヤモンドのようにその姿を粒子に変えていた。

「あら、ごめんなさいね。冷たすぎたかしら」

微笑みを浮かべて言う雅。

その手には、いつの間に収めたのか、凍りついた青い宝石ジュエルシードが握られていた。

「あいつのもえげつねえなー……」

ほぼ一瞬で決着がついた雅の方を眺めながら、道楽はそうぼやく。道楽からすれば、関節のない軟体生物は少々苦手な部類に入るのだが、その程度で弱音を吐いてしまうほど【魔女】というものは弱い。

1つだけため息を吐くと、ぐっと伸びをしてから獰猛な笑みをその顔に張り付ける。

「ま、おれも人のことは言えねえか」

すっと目を細め、大ダコの内部を探るように魔力を操っていく。さすがにタコの内臓を見たことはなかったが、徐々に脳内にタコの中身が映し出されていく。

「さて、じゃあこっちもとっと終わらせっか」

ぼそつと呟き、何かを握りつぶすようにして開いた左手をぐつと握りこむ。

次の瞬間、タコの口から黒い液体が思い切り吹き出し、それが落ちた海水は蒸発していった。

「……潰すとこ間違えたな」

したり顔でそんなことを言いつつ、今度は右手を握りこむ。

すると、今度は寸分狂わずタコの頭がぶしつ、と潰される。

あっさり息の根が止められた大ダコの体が光りだし、青い宝石がジュエルシート虚空へ放り出される。

それをキャッチすると、そのまま魔力で封印を施した。

「これで2つ目しゅーりよーつと」

ややつまらなそうに言い、道楽は別の場所へとその目を向けた。

「で、私はこつち？ おつと」

宙に浮いた私が、すれすれで相手の尻尾を避ける。

エビっばいけど、背中にあたる部分から蠍オオムシのような尻尾が生えている。少し丸まればハート型になりそうだ。

どうやら、攻撃方法は肉弾戦と、尻尾から溶液を出すぐらいらしい。

「ゲリルツ？ リゲ、ケギリリリリ」

「どういふ鳴き声よ」

『エビって鳴けるの？』

こちらが動かない事をいぶかしんだのか、とても表現できない声で蠍エビが鳴く。

というか、本体はエビなのにどうして発声できるのか、理解に苦しむ。あれって発声器官はなかった気がしたけど。

ブルーベルも同様の疑問を抱いているようだったが、すぐに考える事を放棄したらしい。

と、いつまでも考え込んでいても仕方がないため、とっとと片付けて弟子の第一関門を見る事にしよう。

「っと、まずはそのお邪魔な尻尾をぶった切らないとね」

さつきから、ぶんぶん私の周りをつつとおしく動き回っているそれを見て、少しだけ意識を集中させる。

そして、少しだけ周りが遅く感じられるようになったところで口を開く。

「『千切れる』」

私とブルーベルの言葉が見事に重なり、その音が大気を伝うよりも早く、宿った言霊はその力を解き放つ。

蠍の尾はさしたる抵抗も出来ぬまま、一瞬のうちに大きな何かによって引きちぎられた。

痛覚は通じているのか、ぶちぶちと筋肉や神経が引きちぎられる瞬間にあの不可解な声が騒音となって吐き散らされる。

全く、耳障りもいいところだ。尤も、耳障りなだけで【魔女】になる必要もないが。

「ベルフェ」

「お呼びでしょうか、お嬢様」

最早^{もはや}ただの巨大エビと成り果てた”元”蠍エビを一瞥し、とりあえずベルフェを呼び出す。

目を伏せ、整ったおなじみの制服姿で召喚に応じたベルフェは、目の端で”元”蠍エビを見て面白そうに笑った。

「お嬢様、これは？」

「ジュエルシードの暴走体よ。何を思っただけで蠍の尻尾を付けようだなんて思ったのか知らないけれど。とりあえず尻尾の方は何かに使えるかもしれないから、回収して持ち帰っておいて頂戴」

「承知致しました」

あの尻尾を構成している物質を調べてみたいという欲求が、私の中に生まれていた。

まあそんなことはさておき。ベルフェが尻尾と共に消え去ったのを確認すると、世にも奇妙な巨大エビへ向けて一気に加速する。

なにやら耳元でバンツ！ と珍妙な音がしたが、空気の壁でも越えたのだらうか。

そんなことを思いつつ一気に近づき、攻撃手段である尻尾を失ったエビは大人しくやられて、くれるわけもなかった。

「うおっと」

ブオン、と唸るような音を立て、巨大エビはあろうことかその立派なお髭のような触覚を振り回してきたのだ。

無論、それもがつつり巨大化してしまっているため、【魔女】ほど堅牢な守備を誇っているものでなければあっさりお陀仏できる威力を有しているだろうことは分かる。

「それもうつとおしいわね。『切り落とせ』」

いい加減面倒になってきたので、言霊ではっさりとそのお髭を切り落とす。

見た限りでは普通のエビの髭と変わらないらしいので、これはそのまま海に沈める。きつと魚達のいい餌になるだろう。

すると、切り落とされた傷口から青い体液が凄まじい勢いで噴出してくる。これは汚い。というか酷い腐臭がする。

「もういいわ、そろそろおつ死ね」

『魔法展開、いつでもいけるよ』

「アクアバスター、術式展開。発展形で行こうか」

『じゃあネーミングはお姉ちゃんがよろしくね？』

ブルーベルと軽口を叩きあい、収束砲であるアクアバスターの術式を弄くり始める。

さすがにここまで大質量だと、アクアバスターじゃ細い。もうちょっとと太くせねば。

ちなみに、巨大エビは大体私の視界の半分ほどを占めている。いくらなんでも巨大化しすぎだろう。

脳内で展開される様々な術式を憶え、比較し、そして再構成していく。必要なはただただ威力のみ。

「水分と魔力の結合状態をもう少し頑強にして、と」

『魔力配分を多めに振っても問題なさそうだね。じゃ、こっちでいい？』

「ならこれでよし、と。新生アクアバスター、完成ね」

全ての工程を終了し、いまだに痛みでのたうち回っている巨大エビへ向けて左手を上げる。

頭の中には新しく組み上げた魔法の術式が保存されている。とはいえまだ出来はいまいちで、ただ威力だけを追求したものだが。

「新生アクアバスター改め、シュトゥルムバスター、砲撃準備！」
『りょーかい！ 発射スタンバイ！』

スペースシャトルの発射さながらに声をあげ、魔力と水分を結合していく。

無論、その圧縮率はアクアバスターの比ではない。大体20倍から30倍といったところか。

若干やり過ぎ感も否めないが、まあいいだろう。どうせ後で改造するのだから、今回はただの試運転^{テスト}だ。

『よし、撃てるよ』
「オツケー、シュトゥルムバスター、発射！」

上げられた左手の先で溜め込まれた青色の魔力が、圧倒的な暴力となって巨大エビへと放たれる。

一瞬だけ何かに阻害されるような感じを受けたものの、あっさりと巨大エビはその巨躯を静止させる。

青い魔力と水の塊に飲み込まれたエビは、既に息の根が止まっていた。

ほぼ一瞬で即死に追い込まれた巨大エビの死骸が光を放ち、私の目の前に青い宝石のように見えるジュエルシードを解き放った。

「よし、これで完了ね」

3つ目を確保し、一息つく。後はアリサ達が頑張る番だ。ちなみに、死骸はなぜか普通の生きたエビに戻っていた。意味が分からん。そしてよく消し飛ばなかったものだ。原形を留めているのが驚きだから。

すずかのサポートを受けて、私は体中に魔力を漲らせながら、宙に浮く竜を睨みつけていた。

西洋のドラゴンではなく、東洋の龍と言いついたほうが的確な姿だけど……。敵意むき出しなのがマイナスだ。

「すずか、サーチできる？」

「ちよつと待ってね。えつと……」

すずかは補助系の魔術を中心に学んでいるから、相手の弱点を探ったり、魔力の流れを見たりするのはお手の物らしい。

らしい、というのは、その情報をお師匠様から聞いただけで、本人はしょっちゅう悪戯用の魔術をブルーベルと組んでいるからなんだけど。

普段は笑っておっとりしているようなすずかも、今は全く雰囲気が違う。

射るような視線を竜へと投げかけ、小声で素早く何かを詠唱してい

くすずか。それが十数秒で終わると、術式を切って口を開く。

「一番柔らかいのは腹全部だけど、ジュエルシールドは頭に埋まっている。それと、結構硬い障壁を張ってるみたいだから、気をつけて」「オツケー、そんだけ分かれば十分よ」

軽くウインクスし、四肢の炎を更に滾たぎらせる。私が教えてもらった唯一の、攻撃性を持った魔術、『紅蓮拳』。拳と言っているのに足にも炎が出ているのはご愛嬌だ。

エアハイクで一気に大気を蹴りつけると、空中に鎮座している竜へ向けて一直線に跳んでいく。

その勢いを利用して思いきり殴りつけるが、それはあっさりと障壁で受け止められる。確かに、これはかなり硬いらしい。

現に、殴りつけた私の腕が痺れている。痛みはないにしろ、これじや攻撃が通らない。

一瞬で思案し、すぐさまその場から飛び退いた。

直後、ゴウツ！ と風が唸る。飛び退いたその場所を、竜が尻尾で薙ぎ払っていた。

「危ないわね？」

「アリサちゃん、左右から来るよ！」

「オーライ、見えてるわっ」

すずかへの返答が尻切れになりながら、辛くも左右からの魔力弾の攻撃を回避する。

どうやらこいつの前足はただのお飾りらしく、自分の意思では動かせないらしい。だから魔力弾を撃ってきたのか。

その魔力弾も中々のスピードで、対応が遅れていけばあっさり吹き飛ばされ、あまつさえ防御できないなんてことになれば、ミンチは必至だ。

さすがに私もミンチにされる趣味はないし、そもそも当たりたくない。魔力の絶対量はこれからの成長で増えるという希望はあっても、現状ではあまり多い方ではないのだ。

「貫通するには、捻ればいいかしら」

ドリル的な発想でそう考えてみる。

うん、一点突破ならそれで十分いけそうだし、あの障壁も硬いだけで柔軟ってわけじゃない。

ただ、どうすればドリル的な魔術に変更できるか、ね。

「……えーい、うだうだ考えてたって埒が明かない！　まずはやってみる！」

言い切って、再度空中へ。

こちらを見る竜の瞳は、何を映しているのか分からないように濁っている。

すぐにでもその眼に私の炎を映し出してやるわよ。

「せえ……のおっ！」

ガギンツ、とやや高い音を立てて阻まれる私の拳。けど、ここから！

「んのおおおお！」

ぐりつと拳を回し、更に力を込めていく。が、一向に割れる気配がない。それどころかふざけた硬度でこちらを押し返してくる。

と、突然腹部への衝撃。ふと我に帰ると、魔力の残滓が煙となって私の懐から立ち上っていた。

「く、そつ……」

呻くようにこぼれたその言葉を最後に、私の体が浮力を失い落ちていく。

それを受け止めたのは、ほかならぬすずかだった。

「大丈夫!? アリサちゃん!」

「へーきよ、へーき。ちよつとへマしただけだから」

とは言うものの、それは心配そうなすずかを安心させるための嘘。確かに簡易障壁で咄嗟に緩和したはいいものの、超至近距離で放たれた魔力弾は結構な威力だった。

終わったからお師匠様に見てもらわないと。骨にヒビでも入ってればことだ。

ぐつと体を起こし、浜辺の砂を再度踏みしめる。さすがに痛い。今でもじくじくと腹部が疼いている。

けれど、これが戦い。これこそが、私の踏み入れた世界だ。

自覚して、血が煮えたぎるような錯覚に陥る。戦闘の高揚感だろうか、どうしようもなく心が昂る。

「すずか。もう一発、行ってくるわね」

「……気をつけて」

「わかってるわよ」

なんか、突っ込んで玉砕ってパターンしか見ていない気がするけれど、まあいいわ。

ぐつと安定しない砂浜を踏ん張り、一気に跳躍。そのまま燃え盛る右を思い切り、叩きつける!

「ま、わ、れエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!」

私の意志を乗せた右の炎が、声に応えてゆっくりと動き出す。ゆっくり、ゆっくり。徐々にその回転が速くなっていく。脳裏に浮かべるのはドリル。障壁を打ち破り、その向こうへ行く魔術。

「はあああああああああ！！！！」

のろのろとした回転は、あつという間に凄まじい速度に変わり、甲高い音を立てるようになった。

その炎のドリルを思い切り押し込んでいく。

1ミリ、また1ミリと障壁に食い込んでいき、やがて完全に障壁に穴を空ける　！

「これで、どつっ!？」

ばぎっ、とやや嫌な音を立て、物理的に干渉できるようになった炎のドリルが竜の頭を抉り取った。

そこに間髪入れずに左手の炎を叩き込む。

一瞬で炎が竜の全身を包み、さっきまでの抵抗が嘘のようにあっさり燃え尽きてしまった。

「ハアツ……、ハアツ……!」

魔力をこっそりと持っていかれたようで、随分と息を切らせながらもそこに浮いているジュエルシードを手にする。

すでに半分封印されかかっているおかげで、それほどの抵抗もなく手中に収めることができた。

どうやら、私の魔力残量は全くと言っていいほど残っていないようで、半ば飛んできたような格好のすずかに受け止められ、私は荒い

息の中ですずかの声を聞く。

「アリサちゃん！」

「す、すずか……。ふふ、やったわよ……。！」

「それはいいから、一旦降りなきゃ！ 魔力を補充しないと！」

すずかの言葉に従って地面に足をつけると、がっくりと膝を折る。
あれ、膝が笑ってるわ……。ちょっとやりすぎたみたいね。

「はい、これ飲んで。少しだけ補充できるから」

「あ、ありがとう……」

「じゃあ、私は残留魔力を処理しちゃうね」

そう言って飛んでいくすずか。とりあえず、これで私の分は終わり
ね……。

後は頼んだわよ、フェイト。

そう心の中で呟き、私はぐっと魔力補充薬を飲み干した後、しばし
の間大地に体を預ける事にした。
目の端に見えた『リュウグウノツカイ』を見なかったことにして。

もう皆終わったみたい。

そう思いながら、私は静かにバルディッシュに念話で指示を送る。

『サイズフォーム、行ける？』

『問題ありません』

すぐに返事が返ってきて、頼もしい相棒は機械音を響かせて魔力刃を持った大鎌へと姿を変える。

「アルフ、サポートお願いね」

「わかった。フェイトも、気をつけて」

人間の姿のアルフと少しだけ言葉を交わす。必要なことはこれですべて終わった。

バリアジャケットはすでに展開してある。後は、戦って勝つだけ。

「じゃあ、行こうか」

「Yes, sir」

「おう！」

一気に飛び立ち、左手を上げる。それだけで、10発あまりの魔力弾が周囲に形成される。

まずは様子見だ。

「行つて！」

振るようにして指示を出す。途端に、全ての魔力弾が最高速で巨大な魚人？へと殺到した。

けれど、それだけ。

ほんの少し前へ進むだけでその肉体へ傷をつけられたはずなのに、放たれた魔力弾はその悉くが障壁（しやうへき）によって打ち消された。

歯噛みしながらも頭は冷静に。

確かにジユエルシードの暴走体には魔力障壁を持っている個体がい
た。それもかなり強力なもの。

今回はそれよりも強い可能性が高い。なら、こっちももつと強い攻
撃をすればいい。

「アルフ、チェーンバインド試してみて」

「あんまり得意じゃないんだけどねえ……」

ぼやきながらも、アルフがすぐにチェーンバインドを発動させる。
作り出された魔力の鎖が魚人へと殺到し、そして弾かれた。

「うーん、やっぱり硬いねえ……。生半可な一撃じゃあ抜けないよ
？」

「わかってる。なんとか壊して一撃入れよう」

出し惜しみなんてしている場合じゃない。全力で行く。

後ろには母さんと姉さんもいる。いくらユーノって人が守っていると
は言っても、1人じゃ限界がある。

絶対、守ろう。

「アルフ、一点突破で穴を空けよう。そこからバインドで動きを止
めて。私が決める」

「わかったけど……、どうやって空けるのさ？」

「それは……、力技で何とかする！」

やや乱暴だけど、それ以外には方法がない。今はひたすら攻撃する！
狙うのは一点突破。なら、それ相応の戦い方をするだけだ。

「フォトンスフィア、展開……！」

「バルディッシュ、フォトンランサーは私が撃つ。バルディッシュはアークセイバーを準備して」

「いけますか？ マスター」

「大丈夫」

バルディッシュに指示したのは、私とは違う魔法の行使。インテリジェントデバイスでなければ出来ない事。

「フォトンランサー、ファイア！」

4基のフォトンスフィアから作り出された32発の弾丸が、空を切り裂いて疾駆する。

だが、向こうもただやられっぱなしではない様で、その巨大な腕を振るってフォトンランサーが何発か消されてしまう。

けれど、それも計算のうちだ。

生き残った十数発は確実に障壁へ到達、その強度を高めるよう誘導する。

本来障壁は、常にフルパワーで展開するのではなく、攻撃された箇所に魔力を注ぐことで破壊されるのを防いでいる。

ならば、それを上回る全力を注ぎ込めば、障壁は割れる。

「まだッ！ バルディッシュ！」

「Sir！ アークセイバー！」

言うとはほぼ同時、大鎌を思いきり振り下ろし、そこについていた魔力刃を撃ち放つ。

デバイスという枷から解放された魔力刃は、ブーメランのように高速で回転しながら、フォトンランサーが着弾した障壁部分へと激突した。

やや耳障りな音を立てながら、消えずに食い込んでいく魔力刃。

これで準備は出来た。

「アルフは障壁の一点に集中砲火！ バルディツシュ、シーリングフォーム！」

「Yes, sir」

槍のような姿のシーリングフォームに変形したバルディツシュを持ち直し、静かに詠唱を始める。障壁はもう少しで割れる。あと少しだ。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。フォトンランサー・ファランクスシフト！」

後は最後のワードだけ。

そう思った瞬間、目の端に魔力弾が見えた。

向きはまっすぐ私の後方へ。まずい、母さんと姉さんが！

「させないっ！ ラウンドシールド！」

その声と共に、翡翠色の盾が形成される。

魔力弾はあっけなく弾かれ、そのまま霧散していった。そこに立っていたのは、少し前まで敵対していた少年。

「ユーノ……」

「あなた……」

「こっちは僕に任せて！ 2人はジュエルシードを！」

「……わかった、ありがとう」

ありったけの礼を込めてそう呟き、私は意識をジュエルシードの方

へと集中させる。

許さない。母さんと姉さんを狙うなんて。

「撃ち碎け、ファイアーツ!!」

「フォトンランサー、ファイア」

掛け声と共に、38基と先ほど展開した4基、合わせて42基のフォトンスフィアから、毎秒7発の魔力弾が吐き出されていく。

たった4秒。しかし、その4秒間の間に射出された魔力弾の数は、総じて1176発。

1秒で294発。その1秒で障壁が割れ、残りの882発が纏めて魚人の体へと叩き込まれる。

本当ならば、私はこれほど多くのスフィアは扱えない。けれど、今なら出来る気がした。

アルフの撃ったものと合わせて900強の弾丸が撃ち込まれた魚人は、耐え切れずにその体を光に包んでいく。

「やった、のかい……?」

「うん。けどまだだ。バルディッシュ」

「シーリング」

光の中から出てきたジュエルシードに、シーリングをかけて封印する。

……終わった。

これで、全てのジュエルシードの回収が終わった。

「お疲れ様、フェイト」

「栞……。うん、お疲れ様」

いつの間にか傍に来ていた栞にジュエルシードを渡す。

今の母さんには必要のないものだから。そして、私ももうこれは要らない。

「いよっし、これで終わったな！」

「色々あつたけれど……、お疲れ様」

ふよふよと浮かんでこちらに来た雅さんと道楽さんがそう声をかけてくれる。

そう、やっと終わったんだ。

奇妙な脱力感に襲われ、ふっと力が抜けてしまう。

「フエ、フエイト!?!」

「あ、ゴメンね、アルフ……」

すぐに、狼状態になったアルフの背中に受け止められ、毛皮を撫でながら少し謝る。

なんだかんだ言っただけで疲れていたんだろう。それがここで一気に来たらしい。

「さて、それじゃあとつとと帰りましょうか。お腹ぺこぺこよ」

「賛成。で、その前に下に下りねえか？」

「それは私も賛成ね」

3人の【魔女】の掛け合いを見つめながら、私はふと、今までのことを、まるで走馬灯のように思い返してみる。

ひょんなことから雅と出会って、【魔女】と知り合って。

自分の出自は少しだけシヨックだったが、それでも私はプレシア母さんの娘で、アリシア姉さんの妹だ。

だから、それを誇りに思おう。

そう、思えるようになっていた。

18話 最後のジュエルシード 終（後書き）

ということ、とりあえず第1期終了です。

フェイトがいやに大人ですが、察してください。

とりあえずここからはオリジナルですが、大体2、3話ぐらいで終わるかもです。

もしかすると5話とかいくかもしれません。

ついでに、投稿のペースを落とします。なぜかって？ まだA's編のプロットも出来てないからさ！

そんなこともあるので、もしかすると北海道編とか書くかもしれないませんし、書かないかもしれません。次回更新は来週を過ぎないよう頑張りたいと思います！

……ユーノ、出番少ないなあ。

19話 平穩 そして新たな事件（前書き）

……一言だけ言わせてほしい。

どうしてこうなった。

いや、ほんとならほほんとしたのを書くつもりだったんだけどなあ……。

今回はアリサファンに非常に批判を喰らう可能性もありますが、それを覚悟で。

それではどうぞ。

19話 平穩 そして新たな事件

時刻は午前0時。要するに真夜中。
こんばんは、栞です。

「……すずか、吸いすぎ」

「んう……」

一緒に眠っているすずかが、30分も前から寝ぼけて私に噛みついてきていた。

しかも延々血を吸い続けているから、こぼれた血でベッドが真っ赤に染まってきている。

正直に言っただけかなり気持ちいい。けどこれ以上はちょっとヤバい。

「あむ」

「ひゃう!?! す、すずか!?!」

「ん……、ぴちや」

一瞬本当に達しそうになったけれど、なんとか口を押さえて堪える。まずい。非常にまずい。このままでは、双子の妹に延々血を吸われて達し続けるということにもなりかねない……!

ぶつちやけると下も大洪水になっているわけで。私、こんなにアレだったかな……。

「うひゃあ!?!」

「ん、く……」

……夜は長い。

それから更に20分ほどしてようやく解放された私は、結局朝5時

に起床することに。

……ええ、やりましたとも。一人でしましたとも！

だって仕方無いでしょう、昂たかぶって仕方なかったんだから。

お返しとばかりにすずかの血を吸ってみたら、ビクンツ！ と跳ねていた。寝ながらだったけど。

「はあ……」

ともあれ、あのジュエルシード事件から2週間と少し。

平穩を取り戻したこの海鳴で、私たちは日々を過ごしていた。

なのはは試験を突破して学業と魔法の両立を目指し頑張っているし、ユーノも日々道楽に鍛えられている。

高町家と道楽の自宅にポータルを置いて長距離転移を可能にしているから、ユーノは今も高町家にお世話になっている。

ちなみに、ポータルは転移魔法を使用するときの目印、住所のようなもの。これがあると、道が開いているポータル間を自由に行き来できる。

私たちは自分で転移できるからいいけど、ユーノはまだ魔法の使用許可が下りてないからこれでいくしかない。

「ほら、起きてすずか。ご飯よ」

「ん……」

胸元が露わになる少し手前までパジャマをはだけさせて、寝苦しそうに唸るすずか。

凄くそそられるけど、一応今日休みだから。日曜日の朝から行為に及ぶほど、私お盛んじゃないです。

ぐいつ、と無理やりすずかの掛け布団をはいで、すずかに起床を促うながす。

「お師匠様、さすが、起きてる？」

「ああ、おはようアリサ。ブルーベルも」

「おはよ、お姉ちゃん」

ノックもそこそこに部屋に入ってきたアリサとブルーベルに挨拶して、軽く伸びをする。

「いやあ、平和だね……。呼び出しも何も無いって最高。」

「ったく、まだ寝てるのね……。ほらさすが、朝よ！」

「ふあ……。あ、おはようアリサちゃん」

「はい、とりあえず洗面所行ってきなさい」

「うん……」

アリサもすっかり我が家の一員らしくなってきた。

さすがは朝に弱いので、それを起こすのはほとんどアリサの役目になっている。

ブルーベルはと言えば、割とフリーダムにみんなの部屋を渡り歩いて泊っていたりする。

テストロッサー一家も我が家に馴染んできて、アリシアが私に弟子入りしたりということもあったけど、まあ概ね平穏だ。

手早く服装を整えた後、我が家の子供陣営は朝食を求めて食堂へ。

ちなみに、子供陣営はアリサ、さすが、ブルーベル、私だったりする。

食堂に着くと、フェイト達テストロッサー家が勢揃いしていた。忍姉さんは、まだ研究室かな。

「おはよう、皆」

「おはよー」

「おはよう、栞、アリサ、さすが。ブルーベルも」

「ご飯はできてるから、早く食べなさいってさ」

4人が口々に挨拶を済ませ、テーブルについて手を合わせる。これも馴染みの光景になった。食事を始めて暫く、プレシアが話しかけてくる。

「忍さんはまだ中なの？」

「そうみたい。あの尻尾にかかりつきりになってて、滅多なことじゃ出てこないわ」

あの尻尾というのはつまり、以前に私が蠍エビからもぎ取ってきたあの蠍の尻尾のことだ。

忍姉さんに見せたら何かを直感したらしく、すっかり部屋に閉じこもってほとんど出てこなくなってしまった。

大分経つから、もうそろそろ出てくると思うけれど。

「栞はもう解析終わったのよね」

「ええ。でも、私が使ったより忍姉さんに任せた方がいい結果が出ると思うわよ。研究者としては向こうの方がキャリアがあるから」

「あら、妬げちゃっわね」

そう言ったプレシアがどう考えても40過ぎには見えず、思わずドキッとしてしまった。

本当に、この世界の母親は化け物しかいないんだろうか。主に容姿の若さ的な意味で。

まあ、プレシアの言葉も解らないでもない。彼女も研究者、そのプライドがあるのだろう。

その後も軽口を叩き合いながら食事を進めていく。これも日常茶飯事だから、周りも何も言っていないけど。

「ふう、」
「うちそうさま」

「お粗末さまでした」

「美味しかったわ、ノエル」

食事を終え、いつの間にかそばに控えていたノエルに言う。

忍姉さんが研究に没頭しているときは、ノエルは私お付きのメイドのようなことになっている。まあ、戦闘技術は相変わらず高いし、組み手の相手としても十分だから不満はない。

食後に一息ついていると、不意にアリサが話しかけてくる。

「ねえ、お師匠様」

「なに？」

「簡単な魔導書とかつて見せてもらえないの？」

「そうね……初歩の魔導書辺りなら大丈夫だろうし、いいわよ。後で私の部屋にいらっしやい」

「ほんと！？ やった！」

ぐつと拳を引いてガッツポーズをしているアリサ。本当に、感情表現が素直になったわね。

食事が終わった後、私が部屋で休んでいると、部屋の戸がノックされる。

「お師匠様、いる？」

「入っていいわよ」

普段とは違う白いロープ、私が特殊な魔術処理を施した物を身に纏い、そつと私の部屋に入ってくるアリサ。

ロープには耐衝撃、耐魔術加工を施しており、魔法薬程度では傷も付かないし、燃えもしない。

私の後に続き、アリサは久しぶりに入った私の部屋の一角、通称『工房』に足を踏み入れる。

「相変わらずの重圧ね……」

「ふふ、まだ慣れない？」

「まあ、ね」

苦笑しつつ、アリサは工房の中を見渡す。といつても、部屋の一角である以上そこまで見るものはないと思うのだけど。

思いながらイスに腰掛けると、引き出しの中にしまわれて埃を被っていた魔導書を引っ張り出す。

昔私が『食べ』てそのまま放置してしまったものだけど、初心者には十分。まして、アリサのように才能のある子ならば、書かれてい
る以上のことを吸収してくれるはずだから。

「これ？」

「そう。ただし、最初は読みすぎないこと。どれだけ初歩だと言つても、精神を捕らえられる危険性がないわけじゃないからね。特に、アリサのように才能のある魔術師はこの段階で躓く事が多いの。だから気をつけて」

「わかってるわ。へまはしない」

私の言葉を飲み込むようにして頷き、アリサは私から手渡された本を大切そうに抱え込んだ。

それから数日。

学校帰りのアリサとすずかは、2人きりで通学路を歩いていた。なのははまだまだ憶えることが山積みのため、全速力で自宅へ。栞は学校でやることがあると言って学校へ残った。

久しぶりに2人になったことで、アリサもやや気が緩む。

なんだかんだ言っても、栞の前ではやはり緊張してしまうのだ。

「なんか、平和っていいわねー」

「あはは……。まあ、色々あったからね」

2人してそんな話をしながら、坂道を下っていく。と、突然後ろから声をかけられた。

振り向くと、優男風な顔が目に入る。

「なんですか？」

「実は、道に迷ってしまって……。商店街ってどっちでしょうか？」

「ああ、それならこの道をまっすぐ行って、突き当たりを左ですよ」

「そうですか、ありがとうございます！」

そう言っつて男がすずかへと会釈をする。

次の瞬間、すずかはどさつとその場へ崩れ落ちた。

いきなりの事に気が動転しつつも、アリサはすぐにすずかに声をかける。

「ちょ、すずか！？ どうしたの!？」

「無駄ですよ、お嬢さん。鳩尾に入った上、意識混濁の魔術も入っていますから」

「あ、あんた、一体なんなのよ!！」

気丈にもそう叫ぶように言ったが、その声はいまだ知らぬ恐怖によ

って震えている。

その様子を見て取ったのか、男は口の端を吊り上げるようにして笑う。

「しがない傭兵ですよ……。素人魔術師専門、ですがね？」

「なっ、にを……！」

言葉は最後まで続かず、アリサの腹部には男の拳がめり込んでいた。肺の中に入っていた酸素が全て抜け、アリサはその場に崩れ落ちる。2人が静かになった後、男はアリサだけを担ぎ上げるようにして拾い上げ、黒いバンに乗せて走り去った。

それから5分ほどして、ようやく目を覚ましたはずかは、すぐに携帯を取り出すと焦りと不安を隠すようにして自宅へと電話をかけた。

「っ、ここは……？」

「ようやくお目覚めかい、お嬢ちゃん」

「だ、誰よあんたたち！」

目を覚まし、突然視界にいた男達に向かって叫ぶ。

見ただけで背筋に冷や水が流れたような悪寒を感じたけれど、そんなことには構っていられなかった。

もっとそれ以上に嫌な予感がしていたから。

「おいドーン、説明しなかったのか？」

「自己紹介はしましたよ。と、紳士として名乗らないのはいけませんでしたね。私はドーン、以後お見知りおきを、【奇学の魔女】のお弟子さん？」

髪をぼさぼさにして黒いサングラスを掛けた男が、少し前に見た優男風の男性に言う。

優男風のドーンと呼ばれた男は、そう言っただけで綺麗に礼をして見せたけれど、私はそれが無性に気味悪く感じて、何も答えずに視線を逸らす。

「ありゃ、嫌われちゃったかな」

「ケツ、てめえのむかつく面みてりゃ、嫌いにもなんだから。俺はギルドだ、まあよろしく頼むぜ、嬢ちゃん？」

「……私を誘拐して、どうしようって言うのよ」

「無視かよ」

心なしかしょんぼりしたギルドと言う男は、溜め息をつきつつ錆び付いたドラム缶に腰を下ろす。

周囲を軽く見た限り、ここは廃ビル。それもかなり前から廃棄されているらしく、使用できそうなものは余りない。

逃げるのは厳しそうね……。

「まあ、とりあえずお嬢さんを餌に【魔女】を誘き出せば最上ですが……、あなたをバラしてしまってもよさそうですね」

「おれはパスだぞー？　なんでメンドクせえことせにやならんのだ。依頼主に引き渡して、金もらっておさらばでいいだろうが」

「いやいや、しかしここはですね」

「当人抜きで勝手に話を　ひっ……！」

なにやら恐ろしい口論をしていたので何とか遮ろうとしたけれど、喉元にやたらとでかい刃物を突きつけられて思わず黙る。ちよ、待ってよ、なんなのよこいつら……！

「んー、じゃあ斬っちゃいましょっか」

「なっ……！？」

「腹捌くのは無しだぞ。掃除すんのは俺なんだからな」

「わかってますよう。右腕落とすくらいです」

そう言つてドーンが笑つた直後、ぶつっと言つ音が自分の右側から聞こえてきた。

「……え」

なんだか、とても体の右側が寒い。床に、何かが落ちる音が聞こえる。

何が起きたのか分からず、ぼんやりとした瞳で右腕のあるはずだった場所をみる。

果たしてそこには、赤い、とても紅いナニカがあつた。

「……っああアアああアアああアア！？」

「んー、やはりいいですねえ」

「相変わらずキチガイ染みてんな、てめえは」

「そういうこと言わんで下さいよ。僕だつてもしかしたらサラリーマンになってたかもしれないんですし」

「ifだろうが」

なんだ、なにがどうなつて、え、あ……？

目の前が赤い。寒くてたまらない。

な形をしてギルへと向かっていく。
なんとかギルはそれを日本刀で斬り払ったけど、その目の前にはすでにワタシが迫っていた。

「くそつ、素質は大アリってことか！」
「殺すにも殺せませんねえ……。ギル、どうします？」

それから何度かのぶつかり合いの後、ギルとドーンはそんなことを言い出す。

それに引き換え、私はすでにボロボロだった。ワタシの方は依然として笑っているけど。

あんなものを自分と認めたくはない。認めたくはないが、あれは間違いなく私の体だ。

私、なんだ……。

「どうもこうもねえ、逃げるしか！」

「させると思う？」

目の前の出来事は私にはどうしようもない。そう思ったとき、そんな声が聞こえた。

ずっと昔から聞いていた、親友の声。

「【奇学の魔女】……!!」

「チツ、これ以上は無理だな。嬢ちゃんの手当てしてやった方がいいぜ？」

そう言って、男たちは突然消える。

突然現れた栞は、すぐにワタシの前に立ちはだかった。

「……止まちなさい、アリサ」

「お、お師匠さまあ……？ あ、あぎ、い、痛い、痛い痛いいたいタイ！」

「アリサ！」

ワタシが痛がると、私にも激痛が戻ってくる。

燃えるような痛み。私が体に戻った瞬間、私は絶叫して意識を失った。

精神に傷を残して。

事件後、アリサはすぐに右腕を縫合され、月村家の一室に運ばれた。2人組の目的は分からなかったが、少なくともアリサの生命の危機であったことは事実。

そのことを悔やんでいた栞だったが、もぞもぞと動いたアリサを見ると、そつと手を握り締める。

少しして目を覚ましたアリサは傍にいた栞を見つけると、途端に笑みを浮かべて言う。

「えへへえ、お師匠さまだあ……」

「あ、アリサ？」

普段とは明らかに違う言葉遣い、雰囲気戸惑いつつも、栞は冷静に頭の中でなぜこうなっているのか、理論を組み立てていく。

「アリサ、私の目を見て」
「え？」

アリサの返事も聞かず、覗き込むようにしてアリサの目を見つめる。そこには、本来のアリサの光は宿っていなかった。その代わりにあったのは、怯えと安堵。そして執着。

「やっぱり……」

「お師匠さま、一緒にいて……」

「……ええ、私はここにいるわ」

明日は学校だが、この状態のアリサを連れて行くわけにも行くまい。そう考え、栞は仕方なく欠席する事にした。無論、アリサの付き添いのためだ。

「すう……すう……」

「……眠ったのね」

アリサの顔にかかっていた前髪を手で払い、不甲斐ない自分に齒噛みした。

ようやく街が落ち着いたと思ったらこれだ。もう少しきちんとしていれば、アリサをこんな風にする事もなかったはずなのに。

そう心の中で自分を責め立てつつ、しっかりとこれからのことも考える。

おそらく、あの痛みで精神が乖離してしまったのだろう。そして、現実から逃げるために本当の自分を中に閉じ込めた。

いわば、新しい仮面ヘルメットを作り出した状態。それが今のアリサだ。栞が頭の中で考えていると、控えめにドアがノックされる。

「開いてるわ」

「……アリサちゃん、どう？」

中に入ってきたはずかは、控えめにそう聞く。
だが、返ってきたのは無常な答えだった。

「……精神が少し、ね。治るまでには時間が掛かるかもしれないわ」
「そんな……」

思わず絶句するはずか。

しかし、その隣では血が出るほど拳を握りこんだ栞が、静かに震えていた。

19話 平穩 そして新たな事件（後書き）

なんとも中途半端な幕切れですが、次回しっかりフォローはいりません。

んー、一応見直しはしたけど、誤字誤用がありそうで怖いぜ……。

20話 調査開始(前書き)

今回は道楽視点多いです。

ユ一ノ、出番増えたよ！　なのはと半々になったかもしれない。

20話 調査開始

翌日。

私はアリサのベッドの傍で目を覚ました。どうやらあの後寝入ってしまったていらしい。

ふと、手に温もりを感じてそちらを見る。寝ている間も、アリサは私の手を放していなかった。

時折微かにアリサの手が震え、それが私にまで伝わってくる。

「……………早く、何とかしてあげたいけど」

ぼつりと呟いて、けれどそれが出来ないことは自分自身がよく分かっている。

これはアリサ自身が解決しなければいけない問題。そこに私が入る余地はない。

しかし、学校にはしばらく行けそうにないな。ちょちょっと圧力でもかけようかと思ってしまう。

さすがにアリサの分はやっておかないとまずいだろうけど、私は特に問題ない。現在進行形で仕事してるし。

「……………ん」

「起きた？ アリサ」

「うん。おはよう、お師匠さま」

無邪気な笑顔で言って、ぎゅっと私の手を握り返してくる。

無性に胸が痛くなった。アリサのその笑顔には、普段の覇気のようなものが無かったから。

私はそっと微笑みを返すと、手を放そうとする。すると、突然アリサが私の手をきつく握ってきた。

「アリサ？」

「や、やだ、行っちゃやだ……」

「アリサ、少しでいいから手を放して？」

「や、やだあ！」

突然泣き出し、私にしがみついてくるアリサ。

その姿はまるで年端もいかない子供のようで、思わず私は強く手を握り返す。

確かに、アリサはまだ9歳だ。けれど、これは違う。

見ていると痛々しくなるほど必死にしがみつくアリサの頭を、そっと撫でる。

思ったよりも、これは難儀しそうだ。

「わかったわ、一緒にいるから」

「ほ、ほんと……？」

「ええ、本当よ」

アリサの潤んだ瞳から零れ落ちそうになっていた涙を指で拭くと、軽く頭を撫でる。

そうしていると、まるで別人を相手にしているような錯覚に陥りそうになる。

そう思っていると、不意に扉がノックされた。

「お姉ちゃん、起きてる？」

「ブルーベル、どうしたの？」

「もうそろそろご飯だつて。アリサも一緒に」

「わかったわ。先に行つててくれる？」

「はい」

扉越しに会話を済ませ、私は近くにあったダンスから割と簡素な動きやすい服を選ぶ。

それを机の上に置くと、アリサに声をかける。

「アリサ、服を着替えて。ご飯を食べないと」

「んう……」

もぞもぞと着替えだしたアリサ。

その様子を眺めながら、私は青色のウィンドウを呼び出した。

「あいあい？」

ウィンドウにせっつかれて、俺こと秋水は仕方なくCallボタンを指先で触れる。

今「秋水って誰だっけ」とか思った奴、その場で逆立ちな。

次の瞬間には、そこに栞の顔が映し出された。

『八口八口、修行は順調？ 道楽』

「あー、今山ん中走ってるぜ。で、なによ？」

『ちよつと調べてほしいことがあるの。アリサが標的にされてね』

「へえ？」

話を聞いてみれば、どうやらそれは組織だっで行われた犯行らしい。

もつとも、行き当たりばつたりな可能性も考えられるが、それならば身代金目的の誘拐にしろなんにしろ、さすが嬢もさらった方が安全だし効率がいい。その方が通報される危険性も減るわけで。それをしなかったということは、よっぽどのバカか、あらかじめ決められていたという事だろう。

「りょーかい、こつちでも調べてみるわ」
『よろしくね』

通信が切れた後、少ししてユーノが戻ってきた。数週間しか特訓していないと言うのに、既に体力は平均値を大きく超え始めている。タフネス、というか守りに関しては確かに天才的ってワケだな。

「おーし、んじゃあ今日は趣向を変えて、裏方のお仕事やってみっか」

「裏方、ですか？」

不思議そうにこちらをみるユーノ。野郎に見つめられても嬉しくねえぞ。

「ああ、アリサ嬢が被害に遭った。まずは情報収集だ」

「アリサさんが！？」

「お前にも手伝ってもらうからな。もちろん魔法も使っている」

「わかりました、準備は？」

「とりあえず遠出の支度だけしとけ。下手すりゃ長引くかも知れねえ」

ユーノに魔法の使用許可を出した後、俺も自分の支度をするために使っている小屋へ戻る。

基本的に、俺は地方の山奥にいる。どこの地方かって？ それは聞かないでくれ。

ともかく、そんな理由で俺は家に帰ることは殆どない。まあ、そもそも日本各地を転々としてるからな、戻る必要もない。

そんな俺に、最強を張れる栞、そして雅がいるこの日本で白昼堂々と、しかも栞の弟子兼友人を誘拐し、危害を加える。

それほど度胸のある奴らは、そうはいない。俺の勘が大当たりなら、間違いなく長丁場になるだろう。

「とりあえず、こんなもんか」

栞によれば、犯行を行ったのはどこの国の人間とも分からない男二人組。

とりあえず、手っ取り早く検索かけるにはイギリスが一番だろう。

あそこはやたらと魔術が発達してるからな。

「秋水さん、準備できました」

「おし、ンじゃいきますか」

一路、ロンドンへ。

さて、やってきましたロンドン！

あ？ 道中がない？ ハッハッハ、そんな細かいことは気にすんな。

「1人でなにしているんですか。それにしても、まさかファーストクラスを使うなんて……。僕、飛行機乗ったの初めてだったんですけど」

「ならいい経験だったじゃねえの？ さて、んじゃあ会いに行くかね」

「誰にです？」

「【天秤の魔女】さ」

そう言つて、俺はユーノを先導するように歩き出す。

目指すは時計塔の最上階。

受付にアイコンタクトで許可を貰い、特徴的なエレベーターに乗り込む。

ちなみに、受付の嬢ちゃんはかなりツボだった。金髪でウェーブ掛かってて、ちょっとツン気味。ナイスだ。

あ、決してMじゃない。むしろ攻める方だな、俺は。

「言葉に出てますよ」

「気にすんな。そろそろ着くぜ」

ゴウンゴウンとやたら古めかしい音を響かせながら上がっていくエレベーター。

落ちるんじゃないかという俺の心配をよそに、数分してから無事最上階へと到着した。

「よっ」

「やあ、久しぶりだね。といつても、1ヶ月も経ってないけど」

ソファアに座つて紅茶を飲んでいたのは、眼鏡をかけたスーツ姿の男。

【天秤の魔女】、ロイド・スイナード。

今はイギリスでの魔術の中樞、ロンドンの時計塔に住んでいる男だしっかし、こんな交通も不便で上り下りに5分以上かかる場所に、よく住もうなんて思えるな。

俺は無理だね、めんどくさいし。

「それで、今日は何の用だい？ まさか、何の用事もなく日本から飛んできたわけでもないだろう？」

「ちよつと調べてほしいことがある。なに、紅茶にミルクを放り込むのと同レベルで簡単な事だぜ」

「僕は紅茶はストレートで飲む派なんだけどね。それで、誰を？」

「知らん！」

「……は？」

ロイドが掛けていた眼鏡をずり落としながら、そう返す。

言った俺も、聞いた立場ならそうなるだろうな。

「依頼してきたのは栞なんだけどよ、顔は分かってても名前がわからねえんだ。顔写真は記憶念写で送られてきているから、それで検索できねえか？」

「はあ……、わかった。なんとかやってみよう。で、その魔術師達はどうしたんだい？」

「栞の弟子に手を出して、その弟子は現在精神崩壊中だつてよ」

「……ああ、その魔術師には同情しよう」

それには俺も同感だ。その言葉を声に出さず、心の奥で呟く。

栞の奴は、家族に敵対するものには容赦しない。その家族ともいえる弟子を、精神崩壊、幼児退行状態まで追い込んだのだから、もう無事では済まされなйдらう。

「資料を渡してくれ、ちょっとやってみる」
「あいよ」

すぐに青いウィンドウが開き、そこからファイルを転送する。
この技術はイリアが持ち込んだものらしい。らしいってのは、まあ俺も直に見たわけじゃないからだ。
それでも、異世界人だったのはわかってるし、使えるからいいじゃんってことらしい。
誰だって、テレビは見るけどその仕組みまでは分かるうとしないだろ？ それとおんなじだ。

「っと、出たよ」

「マジか!？」

「ざっと500名ほど」

「おいおい……」

思わず落胆してしまうが、まあそれも仕方ないか。
容姿しか情報がない上に、イギリスに住んでいる魔術師はかなりの数に上る。下手すれば全魔術師の4割がいてもおかしくないってレベルだ。

いや、さすがにそれは言いすぎか？ まあいいや。
などと考えていると、突然ユーノが口を開いた。

「そのファイル、送ってもらっていいですか？ 調べ物にはちょっと自信があるんです」

「ああ、そういやそんな部族出身だっけか？」

「わかった、試してみてくれ」

そう言って、ロイドがウィンドウをタッチしてユーノへ資料を送る。資料を受信したユーノは、ここ最近マスターした技能をフル活用し

て検索を掛け始めた。

……おい、タイピングの指見えねえぞー。
そうして待つ事数分。

「ふう……、何とか12人ほどまで絞り込みました。一応、それなりの組織力があるか、強力な魔術師だけに絞り込みましたけど」

「これは……、上出来だよ、ユーノ君」

「どれどれ？ おー、こりやすげえ」

見ると、確かにしっかりと絞り込まれている。

たった数分でここまで絞り込むとは……、やはりユーノはサポートタイプだな。

ゲームで言うなら、序盤から中盤にかけてパーティーに欠かせない存在だ。後半は空気になるが。

「うし、んじゃあ後は、と。もすもすー？」

ウィンドウを広げ、栞へ通信を繋ぐ。この通信は全世界共通だからかなり便利だ。

何回目かのコールの後、プツツと音がして栞の顔が映し出される。

「こつちでそれっぽい奴は絞り込めたぞ。もっばらユーノのおかげだけだな」

『役に立ってるみたいね、小動物。小動物（偽）に改めておくわ。それと、ありがとう』

「それは、喜んでいいんでしょうか……。とりあえず、ありがとうございます。ごさい、ます？」

ユーノの、疑問の少し残る声を見捨て、栞はそのまま通信を切った。

またなんかあつたら通信くるだろ。

「で、他に何か用事は？」

「んー、とりあえず今んとこは無いな。向こうからの通信待ちだ」

「なら、一杯どうです？ ユーノ君とやらも」

小麦色の液体が入ったボトルとコップを棚から出し、ロイドが言う。
いいねえ、ウイスキーか。そういや、最近は日本酒しか飲んでねえ
しな……。

「いいんですか、一応未成年ですけど……」

「イギリスでは、5歳以上であれば家庭で飲むことは許されていますから、問題ありません。仮にダメでも、ここにいる者が言わなければいいんですから」

「は、はあ……」

「あ、俺クラッシュユナ」

「ユーノ君はあまり飲んだ事もなさそうですし、水多めの水割りでもいいですね」

手早く自分のグラスに氷を放り込み、その中にウイスキーを注いでいく。

んー、やっぱりこれだよな。

ロイドは、俺から渡ったウイスキーを自分のコップにそのまま注いでいた。あいつ、ストレートかよ……。
さすがにきついんじゃないかねえのか？

「私は基本的に飲み物はストレートです。それが例えスピリタスウ
オツカでもね」

「さいですか」

そのくせちつとも酔いやがらねんだから、すげえ奴だ。

というか、こいつがそれをショットグラスで飲んでるところを見た事が無い。全部普通のグラスだ。

しかも水も用意せず、ちびちびと。俺には一生わからないだろうな。やろつとも思えん。

結局、俺たちは真昼間から酒をカツ喰らい、通信してきた栞に呆れられつつ叱られる事になった。

20話 調査開始（後書き）

Q・時計塔に受付ってあるの？

A・知りません。というか、そもそも時計塔ってはいれるのか！？
魔術ならイギリス、イギリスの本部なら時計塔だろ、という安易な
判断でこうなった。これからも何度か出るかもしれない。

21話　そして、事態は一旦の終焉を迎える　前編（前書き）

大変遅れました！　難産。なんとか書けましたが、色々かさばったりスランプだったりで厳しかったです。また短いし。

終焉とか言ってますが、次回まで延びます。

事件自体はA'sに入っても終わったことにはならないので、その辺の突っ込みはなしでお願いします。

21話 そして、事態は一旦の終焉を迎える 前編

「……まずいねえ」

「ナニがだよ、ベルン」

「【魔女】が2人、こっちを嗅ぎ回ってる」

暗がりの中、ベルンと呼ばれた40前後の男がぼやく。

その表情は周りの暗さも相まって窺い知れないが、声音だけは陽気だった。

「チツ、面割れただけでこれかよ」

ギルは1つ舌打ちすると、手に持っていたコップを呷り、中の水を一気に飲み干す。

そのままガラス製のコップを握り締めると、パキッと音がした直後、コップは冗談のように砕け散る。

コップの破片は、全てテーブルの上へと落ちていった。

「おい、備品を壊すな」

「るっせー、いいだろ。どうせ百均のなんだしよ」

更に闇の深まっている場所から聞こえてきた、不機嫌そうな女性の声。

鈴を鳴らしたような声音は、不思議と粗雑な口調にも合っていた。

「ともかくだ。俺たちがばれるのは時間の問題だ。まだ拠点の準備も終わってねえ」

「そうだな、そんなことはわかってる。姉御はまだ帰ってきてないんだぜ」

「なら、僕らでなんとかするしかないねえ。ギル君、次の渡航はいつだい？」

「3日後。それまでに辿り着かれたら、ケツまくってトンスラしかねえな」

ため息を吐くようにギルが言う。

だがその声音とは裏腹に、ギルの表情は愉悦に満ち満ちていた。

女性の声の主はそんなギルを呆れたような目で一瞥し、砕けたコップの破片を一つ残らず回収する。

それをぐっと握りこみ、そして開く。すると、破片は全てが元の形にくっ付いていく。まるでビデオの逆再生か何かを見ているように。

「便利だな、それ」

「特異体質を便利と言われるのは、あまり気分のいいものじゃないよしてくれ」

「そうだよ、ギル君。それを言ったら、君のだってそうじゃないか」

「『刃』がかあ？ あんなん、使い道なんて人体切断マジックくらいだぜ」

言いながら、机の上に置かれた、元に戻ったコップを垂直に切り裂く。

今度は割れることもなく左右に分かれてそのまま倒れた。

「ともかく、各自警戒を怠らないようにね。一人でも欠けることを、

【女神】は望んでいない」

そう締めくくり、ベルンがその場から姿を消す。

扉から出て行った訳ではない。まるで初めからそこに存在していなかったように、その姿がかき消えていた。

それを合図にするかのように、他の2人も姿を消す。

後には、暗闇と静寂だけが残された。

あの事件から、1週間が経とうとしている。
皆さん、お久しぶりです。すずかです。

アリサちゃんが正気を失ってから早1週間。栞が傍に付きつきりだったおかげか、アリサちゃんもようやく本来の自分を取り戻しつつある。

とはいえ、今でも1日に数回は錯乱してしまったりするが、それでも徐々に自立的な行動をとることができるようになってきた。

「すずか、どうしたの？」

「あ、ブルーベル。ちよつとね」

紅茶とお茶請けを持ってきたブルーベルにそう返すと、私は小さく身じろぎしてテラスにある椅子に座り直す。

お茶請けは美味しそうなプレーンクッキーだった。

ブルーベルもカップとポット、そしてクッキーの入ったバスケットをテーブルに置くと、向かいの椅子に座る。

「これ、ベルゼが作ったんだって」

「ベルゼが？ 食べるだけじゃなかったんだ」

軽口を叩きながら、クッキーを一口。さくつとした軽い食感の割に

味はすっかりしていて、主張すぎない甘さが心地いい。

ノエルにみっちり叩き込まれたのもあるのだろうが、ベルゼ自身の食に対する情熱と愛情も凄まじいものがあるから、きっとそういったものがこの味を出させたんだろう。

なんだかとても私らしくないことを考えて、少し苦笑する。

アリサちゃんの事件のせいで、なんだか言って私も参っていたらしい。

少しの間、何も喋らずにお茶を楽しんでいると、アリサちゃんがテラスへやってきた。それと一緒に、栞も。

「いい匂いね？」

「へへん、私が淹れたんだよ」

「また腕を上げたのね」

栞に頭を撫でられて、ブルーベルが目を細めて笑う。その様子を、アリサが頬を少し膨らませてみていた。

ああ、羨ましいのかな。

「アリサちゃん」

「ん、なに？　すずか」

「こっちこっち」

口調こそ元に戻っているものの、アリサちゃんは前よりも少し気弱だ。

それも可愛らしいんだけど、やっぱり昔の強気なアリサちゃんの方がいい。

そんな事を思いつつ、私は近寄ってきたアリサちゃんの頭を撫でてみた。何をされているのか気付いたアリサちゃんは、途端に顔を真っ赤にする。

うわぁ、可愛い。

「な、なな、なにしてるによよ!？」

「撫でてる」

「そ、そんなことはわかってるわよ! だからなんで!？」

「なんだか、羨ましそうにしてたから。嫌だった?」

「い、嫌じゃない、けど……、その……」

倒れるんじゃないかと思うほど真っ赤になって、今にも頭から煙を噴出しそうになって俯いているアリサちゃん。

思わずくすりと笑うと、アリサちゃんは目の端に涙を浮かべてはつと顔を上げ、こちらを精一杯睨みつけてくる。

残念ながら、その顔は怖いというよりも可愛らしいという感情が優先されてしまったせいで、ちつとも脅えられなかったけれど。

つと、この状態は、ちよつとまずい?

「す、すずかちゃんの、ばかあ!」

「アリサちゃん!？ ちよ、ちよつとまって!」

「うわああああん!」

なぜか泣きながら走り去っていくアリサちゃん。時折、精神が追い詰められるとああなってしまうらしい。

アリサちゃん曰く、「私の中にもう1人自分がいるみたいな感じよ。弱虫が固まったような自分がね」みたいな感じらしい。

うん、とっても可愛らしいんだけど……、さすがに追いかけないとまずいよね?

そう思っていると、突然私の前にサタンが現れる。

「すずかお嬢様、ここは私にお任せくださいませ」

「サタン? ……じゃあ、お願いしてもいいかな。私じゃ無理かもしれないから」

「心得ました」

サタンは、事件の前までアリサちゃんが一番仲のよかった子。事件の後、栞がどうしてもいられないときは、いつもアリサちゃんの傍にいてくれていた。

だからだろうか、アリサちゃんはサタンに心を許している。サタンも、それは同じらしい。

私はサタンに少し会釈すると、サタンは深くお辞儀をしてその場から消えた。

「……アリサちゃん、ゴメンね」

「全く、あの子ったら」

廊下を怒られない程度に駆けながら、そう愚痴を零して私、サタンはアリサの後を追っていた。

アリサは、今でこそ躁鬱激しいながらも元の人格を取り戻しているけれど、最初の頃は酷かった。

お嬢様が居なければすぐに泣き出し、壁を引き裂いて拳句の果てに炎を垂れ流す始末。

途中からは、なぜか私が傍にいたときでも安定していたみただけど……、やはり不安だ。

あの子は、まだ完全に元に戻ったわけじゃない。憤怒のサタンがこ

んな事を考えるなんて、馬鹿馬鹿しいにも程があるけど……。しばらく早歩きで廊下を進むと、アリサの部屋の扉が開いているのが見える。扉を押し開けると、中でアリサがベッドの上に座っていた。

「やっぱり、ここにいたのね」

「サタン……。その、ごめん……」

「謝るのは私じゃないでしょ。それに、まだ安定してないんだから、仕方ないわ」

「……うん」

やっぱり辛そうだ。

返事はするものの、顔は俯いていて表情が伺えない。

タオルケットをローブのようにして体を覆っていて、両手でそれをぎゅっと掴んでいる。

その手は少し震えていた。

「今はゆっくり休んで、ね」

「ええ……」

軽く肩を叩いてそう声をかけ、丁度背中合わせになるようにベッドに腰掛ける。

自分でも躁鬱そううつを制御できていない現状を、この子自身が辛く感じているのは私にも分かる。

だけど私に出来るのは、ただ見守る事だけ。

それしか出来ない自分が悔しくて、そう思っている自分に驚いて。結局、私はいつものしかめっ面を浮かべていた。

「……ねえ、サタン」

「なに？」

その声は、少し冷たく聞こえてしまったかもしれない。自分でもビツクリするほど、感情が籠っていなかった。

普段のような、怒った風な声さえ出せていない自分が、恨めしい。

「ありがとう」

「……らしくないじゃない」

「そうかも。まだ私、おかしいから」

その一言も、私の中には嫌に重く響く。

自嘲したようなアリサの声は、やはり沈んでいて。

その直後には、アリサが私の事を背中から抱きしめていた。

「ごめん、少しだけこうさせて……」

「アリサ……」

震えているのが、背中からでも伝わってくる。

寒さからではなく、恐れからだと言っことは何となく分かった。

少しすると、アリサはそのままの状態でゆっくりと話した。

「……私、怖いよ。このままならまだいい。だけど、”私”が消えちゃったらどうしようって考えると……」

「アリサ……」

「今の私が、弱虫の私に飲み込まれちゃったら、私……ずっとおかしくなつたまんまなんだよ……！？　そんなの、そんなの……！」

ぼたぼたと、水滴が私の膝の上に垂れてくる。

それと一緒に私の耳に入ってきたのは、小さな嗚咽。

「怖い、怖いよ……！」

「……大丈夫、アリサは強いから」

それは、私の素直な言葉だった。

アリサは強い。それは、心の中で確かに思っていたこと。

精神の壊れた人間が1週間で元の形に戻るなんて、私は見たことがない。

お嬢様のこなしてきた仕事の中には、相手が精神を壊すような仕事もあった。だけど、その相手は決して元には戻らなかった。

けれど、アリサは戻ったのだ。行われたことは違えど、確かに壊れたと言っのに。

だからきつと、大丈夫だと思った。

「大丈夫」

もう一度言っつて、少し無理矢理ながらもアリサの頭を撫ぜる。

……大丈夫だと、信じたかった。

21話 そして、事態は一旦の終焉を迎える 前編（後書き）

えらく短い上に主人公が殆ど出ていないという。

次回で一旦この事件が終わり、少し時間を置いてA・Sに入る予定です。

とりあえずプロットと誤字脱字の見直しだ。

22話 そして、事態は一旦の終焉を迎える 後編(前書き)

ちよいと遅れましたが、更新です。

この話で一旦区切り、次回からはA・S編となります。

A・S編ということで、また更新が遅れる可能性もありますが、ご容赦くださいませ。

22話 そして、事態は一旦の終焉を迎える 後編

7月に入り、世間一般で言う初夏も過ぎた頃。

私、月村栞は、今日もアリサと空調の効いた部屋で勉学に励んでいた。

学校の方にはバニングスグループと月村家、両方から話を通してあるから、進学にも不都合は起きない。

まあ、このままなら普通に付属中学に進学だろうけど。

まだアリサは完全な状態じゃない。いつ戻るかは分からないけれど、それでも快方へ向かってはいる。

「さて、じゃあこの辺で休憩にしましょうか」

「はい」

ぐぐつと背伸びをするアリサ。

ふと、今までの学習内容をまとめたノートを見る。

……あれ。これって……。

「アリサ？」

「ん、なに？ お師匠様」

「えーと、ちょっと言いづらいのだけど……」

普段通りのサバサバした返答に、ついそう返してしまう。

あー、やけに小学校じゃ難しい内容だと思っていたら。

「なによ、お師匠様らしくもない」

「履修範囲、小学校の部分終わってたわ」

「……はあ!？」

素っ頓狂なアリサの声が響いた、とある夏の日だった。

「ハアツ！」

「攻撃が大振りよ、もっと抑えて！」

「んぬぬぬ！」

「ほらほら、どこを狙ってるの！」

フェイトの攻撃を捌き、アリシアの気弾を軽々と避けながら、反撃する事も忘れない。

私達一家がお世話になっている、ここ月村邸には、大きな地下室もいくつかある。

そのうちの2つほどを突貫工事で繋ぎ、たった一晩で訓練スペースとして使えるまでに改良した棊には全くもって頭が下がる。

「よし、そこまで！」

「ハア……、ハア……」

「ゼエ、ゼエ……」

フェイトの方は息が荒くなっているものの、額に薄っすらと汗を掻いている程度。

対してアリシアは完全に肩で息をしていた。明らかな体力不足に加え、タダでさえ体力を喰う“気”を扱っているのだから、仕方ないといえは仕方がないけど。

ちなみに、2人とも身体強化魔法は使っていない。地の体力を上げないと、戦闘に耐えられないからね。

私は端の方の壁に埋め込まれた冷蔵庫を開けると、冷えたスポーツドリンクの缶を2つ取って2人の方へ歩いていく。

「はい、2人とも」

「あ、ありがとう。母さん」

「ありがとう、お母さん」

2人に缶を渡すと、そのまま私も壁を背に地べたに座り込む。

アリサが被害に遭ったときの姿は、それはもう怖かったわ。

姿形こそ普段と同じであれ、その雰囲気は殺し屋なんてレベルじゃない。近くにいるだけで、すぐに自殺したくなるようなものだったもの。

今はもうそんなこともないけれど、ね。

そんなことを考えながら、とりあえず口を開く。

「とりあえず、アリシアはペース配分を考えなさい。模擬戦だからいいとして、実戦であんなに考えなしに戦えばすぐ殺されるわよ」

「はあい……」

「フェイトは、さっきも言ったとおり攻撃が大振りすぎるわね。魔法を過信しすぎず、小振りな攻撃で隙を埋めていくのも考えてみたら？」

「そう、ですね。考えてみます」

うう、フェイトの敬語が取れない……。

確かに私もぶっ壊れててああいう仕打ちをしてしまったけど、今は反省してるわ。

というか、あの子の私を自分の手でボコボコにしたいくらいよ。出来ないけど。

「さて、とりあえず今日の訓練はこれで終わりね。ちゃんと汗を流すように。いいわね」

「はい！」

「はい、母さん」

訓練が終わった後、私は自分の研究室へと戻る。

普段は自分で研究を重ねているから、この世界の『魔法』とミッドチルダ発祥の『魔法』の違いも大体は分かっていた。

こっちの魔法を知ってしまうと、明らかにアレは『魔法』なんて呼べる代物じゃないってことが分かる。

まあ、他に呼び方がないからあれだけど。

ちなみに私は、『魔法』に使用するエネルギーを『コア・エネルギー』、大気中に存在してリンカーコアに取り込まれるものを『リンカー・エネルギー』と仮称している。

『リンカー・エネルギー』をリンカーコアに取り込み、『コア・エネルギー』に変換して『魔法』を使用する、という感じね。

全部仮説で、エネルギーの名前もリンカーコアからとって付けたよ
うなものだけど。

「まあでも、あれは魔法じゃないわよね……」

むしろ、奇跡の体言という意味合いでは『魔術』の方がよほど魔法らしいんじゃないだろうか。

リンカーコアを使用した『魔法』は超科学の意味合いが強いと思う。
この地球の文化が発展して行った先には、きっとああいったものが
生まれるんでしょうね。

「っと、1人語りなんて柄でもないか」

眩き、心中で考える事をパツタリと止める。

研究室に戻ったのはいいけれど、もう研究するものなんてないのよね。残りは全部実戦で調整しないといけないものだし、どうしようかしら。

ぼんやりと考えつつ、先日忍から支給されたノートPCの電源を入れる。PCの低い起動音が部屋に響く。

忍のことは、彼女自身が呼び捨てでいいと言っていたので、遠慮なく呼び捨てにしている。

考えてみれば、私がこの家で一番年長なのよね。なんだかなあ……。

「あら、メール」

メールが来たことを知らせる、色鮮やかな着信アイコンをダブルクリックして、リンクを開く。

まだメールアドレスを持つている人間は少ないけれど、その中でも最近知り合った人からのメールだった。

From: dummy | neet@mail.com

To: おいつす (^o^) /

本文:

頼まれてた論文、拾えたから添付するぜー

にしても、次元移動に関する魔力消費の過程なんて、今更何に使うんさ？

最近じゃ次元移動自体、生身でやればグチャグチャのペシャンコって言われてるのに

ま、今の研究が成功したら教えてケロー。wktkして待ってるか

らww

あ、でもグロ画像なんて添付すんなよなー、俺そゆの苦手だもんww
てか、ペルシアのそれはやだしw
ほいじゃね〜ノシ

「毎回助かるわね」

眩き、添付ファイルを展開する。

デスクトップにそのファイルを保存すると、『ダミー』と名乗った、
顔も知らない彼から送られてきたメールへの返信を書く事にした。

From: persia@mail.com

To: ありがとう

本文:

論文を送ってくれて感謝するわ。いつもいつも悪いわね。
まあ、研究が成功したら、ね。きっと成功させて見せるわ。

「これでよし、と」

カタカタとキーボードを叩き、エンターキーを押す。

返信と書かれたボタンをクリックすると、ディスプレイがメールの
送信画面に切り替わった。

送信の終わった画面を消すと、デスクトップだけになった画面を見てから立ち上がり、部屋から出る。

7月に入ったからといってそこまで暑くなる訳でもなく、邸内には涼しい空気が満ちていた。

その廊下を歩いていると、目の前の部屋からアリサが出てくる。

アリサとはフェイトを通じて知り合って、それからは友人というか、家族というか。そんなような関係だ。

「あ、プレシアさん。おはよ」

「おはよう、アリサ。と言っても、もうお昼過ぎだけれど」

アリサは大きく1つ伸びをすると、小さく欠伸をしてから肩を竦める。

その様子が妙に大人びて見えてしまって、思わず苦笑してしまう。

「それで？ 今まで何してたの？」

「それがね、聞いてよ！ 栞ったら、小学校の分野が終わってることに気づかなくて、中学の範囲までやらせてたのよ！？」

「あらあら、それは災難だったわね。けど、これでゆっくり出来るんじゃない？」

「まあ、それはそうなんだけどね……」

乾いた笑みを浮かべて言うアリサ。

栞も、意外とドジな部分があるのかしらね。

そう考えていると、後ろから声を掛けられた。

「プレシア、アリサ。丁度ベルゼが菓子を焼いたらしいんだが、食べるか？」

「こんにちは、ベルフェ。ええ、頂くわ」

「ベルフェ！ ひっさしぶり、どこか行ってたの？」

「ああ、ちよつとな。レヴィア姉と一緒に錬金術に使う素材探しだ」
「錬金術ねえ……。まだ私には手が出せないわね」

「やれやれと頭かぶりを振るアリサ。

にしても、錬金術か。今度はそつちも見てみましょうか。

「で、どこで食べるの？」

「こつちだ」

ベルフェの後を追って歩いていく私とアリサ。

玄関を出て前庭へ行くと、既にルシファーがお茶の仕度を終えていた。

今日は紅茶ではなく普通の麦茶。さすがに少しばかり汗ばんでくるこの陽気で、暖かい紅茶を飲む気にはなれない。

先に席に着いていたすずかとブルーベル、そしてフェイトとアリシアを見て少し微笑むと、ちょうどフェイトの真向かいに座る。

そして、その横にアリサ。すずかがアリサとブルーベルに、フェイトはアリシアとブルーベルに挟まれるような形ね。

「へえ、美味しそうじゃない」

「よく焼けてるわね」

「えへへ、頑張ったんですよお〜！」

胸を反らしてそう言うベルゼ。

確かによく焼けている。香りもいいし、プレーンクッキーだから甘みもしつこくない。

「ん、また腕を上げたよね、ベルゼ」

「でも、まだまだノエルには追いつけないんだよねー」

「仕方ないわよ。ここでいちばん料理が上手いのはノエルなんだし」

ルシファーが、口の中に残ったクッキーのカスを麦茶で流し込んでから言う。
その後も、私たちはしばらくのゆっくりとした時間を楽しんだ。
今年最後に待つであろう、大きな事件のことなど露ほども知らず。

「ふーっ……」

「お疲れ、クロノ君」

軽く息を抜いたところで、エイミーに声を掛けられる。
手には乾いたタオルとスポーツドリンクを持っていた。それを受け取ると、大きく一口呷ってからタオルで汗を拭う。

「エイミーか。仕事はどうした？」

「もう終わったよ。艦長から、クロノ君がまたトレーニングルームにいるって聞いて」

また母さ、艦長か。まあ、別にいいんだけどな。

……なんだ、僕がこんなことしているのがそんなに疑問か？

まあそうだろうな、以前の僕ならそんなことせずに、ひたすらデバイスで魔法の訓練をしていただろうから。

「それで、成果はどうなの？」

「今更だが、体力の無さを痛感したよ。僕もまだまだだな」

あの事件以来、僕は自分の肉体自身を強化している。

いくら空が飛べても、地面を満足に走れなければ意味がない。それと同じだ。

確かに魔法は便利だが、それに頼りすぎればダメになる。

「艦長も甘味を我慢してるみたいだからな、僕も少しは頑張らないと」

「艦長のアレは、私もちよつとどうかと思ってたから、いいと思うけど？」

「それ、本人の前で言わない方がいいぞ」

今は艦長も甘い物、とりわけリンディ茶と呼ばれる、緑茶に角砂糖をいくつか放り込んだ物を我慢している。

僕も、さすがにあのお茶はどうかと思うが。というか、アレはダメだろう。

別に低血糖な訳でもないんだから……。

「あ、そうそう。地球の責任者の人から、キチンとした手順を踏めば入界を許可するってお返事が来てたよ！」

「そうか、それはよかった。彼女には、一度会って謝らないといけないからな」

「彼女？」

「まあ、色々あるんだよ」

エイミイの追及を適当に避けて、もう一度スポーツドリンクで喉を潤す。

喉を通る飲料の味が、心地よかった。

22話 そして、事態は一旦の終焉を迎える 後編（後書き）

ということ、黒スケ成長する、の巻でした。

あんまり書く事もないので、この辺で。

それでは！

23話 そして第2期へ (前書き)

お待たせしました、A・S編開始でございます！

追記：違和感あるような場所を修正しました。

23話 そして第2期へ……………

「おはよう、いい朝ね」

「…………お姉ちゃん、もうお昼だよ」

10月末。こんにちは、栞です。

朝っぱらに起きたと思ったたらもう昼だった。びっくりしたわあ。

「いいじゃない、日曜日だし」

「そうだけどさあ、もうちょっと早起きしようという気には」

「ならないわね」

「うう…………」

ブルーベルの言葉を一刀両断し、ベッドからのそのそと這い出る。いくら遅く起きたとはいえ、ベッドの誘惑に打ち勝てるかと言えばNOだ。むしろ率先して負けたい。

何が言いたいかって言えば、まあ二度寝っていいよねって話。ぐぐつと背伸びをして、溜め息。よし、今日も1日頑張ろう。もう半日しかないけど。

「ふい…………。皆は？」

「フェイトとすずか、アリサは学校に行ったよ。委員会の仕事があるからって。アルフとプレシアとアリシア、それと忍さんは合同でなんかやってるから、私はお姉ちゃんと添い寝」

「七姉妹は？」

「ベルフェは庭の手入れ、ベルゼはノエルと料理研究、サタンはアリサの部屋の掃除、アスモはレヴィアとファリンとお洗濯、ルシフアーは読書、マモンは…………、布団の中！」

「は!?!?」

ブルーベルががばつと布団を剥がすと、そこには体を丸くしてぐっすりと眠っているマモンの姿が。

……いつからいたのよ。そしてそこは私の足と足の間だったんだけど？

いや、可愛いけど。可愛いけどあなたね……。

「おゝ、ぶにぶにだ〜」

「突っつかないの。布団被せときなさい」

「え〜？」

言いながら元に戻すブルーベル。私は何も見なかった。そういうことにする。

とりあえず部屋から出ようと思ったとき、ノックが聞こえた。

「誰？」

「ノエルです。栞お嬢様、後藤課長からお電話です」

「こっちのモニターに回して頂戴」

「かしこまりました」

数秒後、青く透き通ったモニターが宙に開き、魔術課課長である後藤さんの顔が浮かぶ。

目の下に薄っすらと隈が見える。徹夜続きなのかしら。

『どうも、お久しぶりです』

「どうしたの、何かあった？」

『あんまり嬉しくないお知らせですが……、先日、市内で奇妙な魔力反応をキャッチしたんですよ』

「それで、どうしたの？」

うわあ、凄い嫌な予感する。

『それで、課の人間を何人かやっただんですが、尻尾も掴めませんでした。どうも転移系の魔術を使ってるみたいですよ』

「魔導師の可能性は？」

『ありますね。似た魔力反応が6月にも検知されてますし、ちよいときな臭いですよ』

嫌そうな顔をして言う後藤さん。

まあ、私も嫌よ。

こんだけ生きてると、ちょっと原作知識おぼろげになってきているのよね……。

「こつちも何かあつたら連絡入れるわ」

『助かります。それじゃ、この辺で』

「ええ、少しは眠らないとダメよ」

『そうしたいんですけどねえ、他のところから書類が来るわ来るわ』

「あはは……。まあ、頑張ってる」

軽く合掌してからモニターを閉じ、溜め息。さて、じゃあ私もお仕事としましょうか。

ブルーベルと一緒に部屋を出ると、そのまま忍姉さんの部屋へ。軽くノックしてからドアを開ける。

「姉さん、事件です」

「振り？」

「もしかするとそうなるかもという暗示」

冷静に返された。ちょっと悲しい。

中にはブルーベルが言っていた通りのメンバーが揃っていて、全員

が灰色の液体の入ったフラスコを見つめていた。

プレシアはタートルネックのクリーム色のセーターに白衣、忍姉さんは普通のTシャツに白衣。

アリシアはこの寒い気候の中でワンピースにスカート。アルフは狼モード。

「もふもふー」

「アリシア、寒いんだっいたら着替えればいいんじゃないかい？」

「やだー。長いの嫌いだし」

どうもアリシアは、体を覆う服が嫌いらしい。

あわよくば素っ裸になろうとしないだけましと考えるか、矯正すべきと考えるか。

「で、何してるの？」

「ちょっとした研究よ。プレシアの伝つてでなんとか進展しそうなもの」

「私1人じゃ無理なんだけれどね。あ、その辺のフラスコには触れないほうがいいわよ、融けるかもしれないから」

融けるって……。万能溶解液でも作ったの？

少し前から、プレシアは錬金術に興味を持って、色々やっているらしい。

時折、原子配列がめちゃくちゃになっても形を保っている鉄とか持ってきたりする。あくまで形を保っているだけで、綺麗な訳じゃない。むしろフジツボ的な気色悪さがあった。

あんなものを食事時に持ってくるなんて……。まあ、アリシアとフエイトに怒られていたけど。

私もあの時は食欲失ったわ。ほんと、あれはだめね。

まあそんな失敗もあったりして、今ではそれなりに腕のいい錬金術師になってきた。

……テストロツサ一家は天才家系なのかしら。プレシアは魔術が一级レベルに近づいてるし。
アリシアも魔術の腕はいいから、そのうち魔女レベルまでランクアップできそうだし。
フェイトも、魔術の才はないけどある程度は使えるから、魔法と絡めて色々やってるし。

「うん、やっぱり凄い一家ね」

「何がだい？」

「テストロツサ家は天才家系だな、と思ったただけよ」

しかも、これがナチュラルだから困る。

私だって、ちよつとチートでここまで来てるのにね。

まあ、落ち込んだってしょうがないし、今の私はこれなんだから別にいいけど。

「何か手伝えることはある？」

「ありがとう。でも、今は特にないわね」

「そっか。じゃあ、私は図書館にでも行ってくるわ」

「あ、私も行くー！」

「私も！」

そんなこんなで、ブルーベルとアリシアを連れて図書館へ行くことになった。

まあ、なにもなければいいけどね。

ということ、図書館に到着。
相変わらず大きい図書館よね。蔵書がどれだけあるのかわからない
ほどだから。

「さて、暇を潰すわよー」
「おー」

とは言ったものの、中に入って何を讀もうか迷ってしまう。
私たち3人とも、外見年齢と精神年齢が一致してない組だから、さ
すがに幼児向けとか児童向けは讀む気にならない。
というか恥ずかしい。ほんとに恥ずかしいから。

「はやてちゃん、これですか？」
「あ、うん。それや。ありがとうな、シャマル」
「いえいえ」

……やだなあもう、なんでいるのさ。
私の視界に入ったのは、金色の髪的女性が茶色の少女の乗った車椅
子を押ししている光景。
ついでに言うと、そこで交わされた会話。
あの容姿にシャマルという名前。ほぼ間違いないです。確定です。

「……お姉ちゃん、あれ人間じゃないよ」
「ええ、そうみたいね」

はい、ブルーベルからも証言いただきました。
どうやら本物らしい。すごいエンカウント率だね……。

アリシアは気付いてないみたいだけど、まあ今はいいか。

「ねえねえ、その本好きなの？」

「うん、好きやけど。あ、貴女も好きなんか？」

「うん！ 特に3巻辺りがね」

「って言うと、いきなりネタばらしされたあの辺？」

「そうそう、あの辺！ まさかあそこからああなるとは思わなかったけどさ」

「あー、同感やな。もうちょっと引き延ばすかと思っと思ったけど」

おいしい、アリシア？ なにサクツと話しかけてるの？

しかもかなりお話弾んでるじゃん。シヤマルさん、あなたなんで「あらあらまあまあ」みたいな顔して眺めてるの？

「話が合うね」

「そやね、他人と本のことでは話すなんてなかったから、なんや新鮮や」

「本が好きな人、周りにいないの？」

「私、足が悪いから。前はあんまり外に出られなかったんよ」

「そっかー。大変なんだねー」

のほほんと身の上話に興じる2人。

仕方ない、ちよつと早いけど関わりに行きますか。

それに、あの子に友達ができるのは嫌じゃないしね。

「アリシア、話すんだったら椅子のところに行ったら？ そこだと

他の方に迷惑でしょう」

「あ、そだね。えーっと」

そこでアリシアが、茶色の髪の子の名前を知らないことに気づく。

「はやて。八神はやてや。貴女は？」

それに気付いたのか、茶色の髪の子が自分から名乗る。

まあ、気づいてたけどね。うん。やっぱり八神さん家のはやてちゃんでした。

「アリシアだよ、アリシア・テストロッサ。はやてちゃん、向こうで話さない？」

「ええよ、アリシアちゃん。シャマル、うちちょっと向こう行ってくるわ」

「はい、はやてちゃん。転ばないようにしてくださいね」

「わかるとるよー。私はそんなアホの子やないって」

カラカラと笑いながら、2人はガラス張りの壁の傍に備え付けられているソファアの元へ。

アリシアは小学校低学年くらいの身長があるから、あんまり違和感はないみたい。

2人がソファアの方まで行くのを見届けた後、私とブルーベルはシヤマルさんと3人きりになった。

途端に空気が重くなる。

「ごめんなさい、アリシアが無理やり」

「いえいえ、はやてちゃんも喜んでましたし」

「奥でお話しませんか？ 飲み物もありますし」

「あ、はい」

こくりと頷くシャマルさん。ブルーベルは気取られないように周囲を警戒している。

この図書館は、利用者がくつろげるように奥の方にいくつかの部屋

がある。

コーヒーやお茶が無償で提供されていて、持ち込みで食事もできるけど、当たり前のように書物の持ち込みは厳禁。

ただ、無線LANとかが付いているから、お昼に食事しながらPCで仕事ができる、中々便利な場所だ。

私たちはそのうちの1つに入ると、中の椅子に腰掛けた。

「はやてちゃんとシヤマルさんは、ご親戚か何かなんですか？」

「え、ええ。遠戚なんですけど、ちょっとした事情ではやてちゃんの家に住んでるんです」

「そうだったんですか……。アリシアも少し家庭事情が複雑なので、いいお友達になれると思います。精神年齢は同じくらいなようですし」

むしろアリシアの方が上なんだけど、それは言わない。

ふむ、何も話すことがないな。さっさと本題に入るか。ここで海鳴を荒らし回られても困る。

「あーあー、聞こえてますか？」

「っ！？ 念話！？」

「あ、聞こえてますね。よかった」

念話のチャンネル違ったらどうしようかと思っただけど、どうやらあってたらしい。

目の前にいれば、そりゃ念話くらいできるようになるけど。

全く違う人に入っちゃったら、その人が恥を掻くかもしれないからね。いきなり声上げちゃったりして。

「……とりあえず、そのあからさまな警戒はやめてもらえませんか？ 危害を加えるつもりは一切ないので」

『……わかりました』

なんとか痛々しいまでの殺気は抑えてくれた。
相変わらずこつちを睨んでるけど、まあ十分かな。

「あなたは、管理局の人間ですか？」

「いいえ？ 私はこの海鳴に住まう【魔女】です。お尋ねしますが、先日、海鳴市内で魔力を行使したことはありますか？」
「……数日前に、少し」

やっぱりそれか。あとで案内してもらって回収しないと。

さすがに、無自覚の罪でしょっ引くのは嫌だし。
なのはは……、ちゃんと説明したしね。

「とすると、やはり処置はしていませんか……」

「処置？ 何の話ですか？」

「いえ、ここで魔法を使う分にはなんら問題ないんですけど。こつちに許可とってもらえれば」

「え、ちょ、どういうことですか？」

いい感じに混乱してきたシャマルさん。

まあそうだよな、突然こんなこと言われればパニくるよね。

「海鳴市に限らず、この世界の殆どの場所では、魔術の行使は許可制になってます。それで、今回はそれに違反してしまっているので一応注意しておこうかと思いましたが」

「こ、この世界に魔法文化があるんですか！？」

「魔法ではなく魔術ですね。それと、大声出すならせめて認識阻害結界張ってください。漏れます」

「あ、す、すいません！」

謝った後、「あれ、なんで私謝ってるの？」って顔をしているシャルさん。
仕方ないので、一通り【魔女】や私たちのことを話すと、思いっきり謝ってきた。

「すみませんでした！ ただ、こちらも事情があつて……！」
「まあ、深くは聞きません。今後許可を取っていただければ構いませんから。差し支えなければ聞かせていただきたいというのが本音ですけど」

実は知ってます、なんて言えない手前、こうして控えめに言うしかない。

ブルーベルはいまだに警戒を崩さないけど、まあ大丈夫だろう。

「えっと、その……。はやてちゃんは全く関係ないので、その……」
「わかってます。そのはやてちゃんに関する事なんですか？」

「お話したいのは、山々なんです。おいそれと人に話せることではないので……」

「……わかりました。それじゃあ、もし話してくれる気になったら言ってください。いつでも聞きますから」

……あれ、なんで私カウンセラーみたいな事してるの？

少なくとも会話がそんな感じだぞ。私小学生なのに。

まあでも、はやてちゃんのリンカーコアが未発達にも関わらず、そこから魔力を吸い上げているから身体に影響が出てるってことは確実らしい。

確定情報ではないけど、その辺を予想しておくべきだろう。

確か、原作では蒐集を始めたのは症状が悪化し始めてからだから、ちよつとまずいかも。

「それと、何も無いときでも皆で遊びに来てください。うちの連中も喜ぶでしょうから」

「あ、はい。それは是非。はやてちゃんも、アリシアちゃんと一緒にだとしても生き生きしてますし」

その後、割と色々世間話に花を咲かせて、ついでに携帯のメールアドレスを交換してから別れることに。

はやてちゃんも楽しかったらしいし、よかったよかった。

……話すときははやて、の方がいいのかな？ わからん。

あと、空いている日にも魔力回収薬の調合法を教える約束をした。ついでに許可の申請もね。

「帰ったでー、皆ー」

「おかえりはやて、シャマル！」

家に帰ると、いの一番に出迎えるのはヴィータ。

私はそこで車椅子を押す役目をヴィータに代わり、帰り道に買ったきた食材を冷蔵庫に入れるために厨房へ。

冷蔵庫へ食材を入れている途中、思い出していたのは昼間会った女の子のことだった。

「もし話してくれる気になったら、か……」

呟いて、キャベツを一番下の冷蔵庫へ入れる。
もし話せるのであれば、とっくに話している。私自身、はやてちゃん
の体調の変化には何かおかしなものを感じているのだから。
けれど、今はダメだ。
だけど、だけど、もし頼れるとしたら……。

「……はあ、こんな事考えるなんて」

「どうかしたか、シヤマル？」

「え！？ う、ううん、なんでもないの。なんでも……」

突然聞こえた声に、上ずった声でそう返す。

不審そうにこちらを見ていたシグナムは、やがて視線を外すと居間
へ戻っていった。

「とにかく、少しでもはやく魔力を集めないと……」

それきり、口を開く事もなく黙々と食材を冷蔵庫へ収めていく。
年の暮れに、あんなことが起こるなんて知りもせず。

23話 そして第2期へ……………(後書き)

『闇の書』の異常についてずっとすら感じているのは、ヴェータではなくシヤマルさんになりました。
シヤマルさん魔術師計画……………？

24話 シャマルさん、講義の時間です(前書き)

パソコンが入れ替わったり、内容が思いつかなかつたりしたせいで結構かかった。

次回から本格的にA's編が始動します。ニート侍とかゲボ子とか出てくるかもしれない。多分きつとおそらく。

ザッフィー？　べ、別に忘れてたとかそういうんじゃないんだからね！？

24話 シャマルさん、講義の時間です

11月に入り、寒さが一層厳しくなってくる頃。

皆が暇になる土曜日の10時頃に、はやてを連れてシャマルさんが我が家にやってきた。

「いらつしゃい、シャマルさん。はやてちゃんも」

「お邪魔します、栞ちゃん」

「お邪魔しまーす」

ふわりと微笑むシャマルさんと、元気よく手を振るはやて。

2人を招き入れ、とつと扉を閉める。暖房が効いてるから、余計に外が寒く感じてしまう。

「お、はやてちゃん！ おひさー！」

「アリシアちゃん、おひさー！」

へーい、とハイタッチする2人。随分仲がいいみたいね。

「あらあら、お友達？」

「あ、お母さん！ うん、前に話した子！」

「あなたが……。アリシアの母の、プレシア・テストロッサです」

「あ、八神はやてです。こんにちは、プレシアさん」

器用に座ったままお辞儀をするはやてを見て、プレシアも礼儀正しい子だと微笑む。

うん、いい印象だ。というか、ここまで落ち着いた小3は見たことないんだけど。

周りの精神年齢がおかしいから、早熟しちゃったのかもしれない。

とりあえず、はやてはアリシアに連れられて別の部屋へ。すずかやアリサとも、友達になってくれるだろう。

「じゃ、行きましようか」

「え、ええ」

シヤマルさんを先導し、自室へ戻る。

今日の目的の1つに、シヤマルさん用の魔力回収薬を作成するといふものがある。

魔力回収薬は魔術師が最初に作る魔法薬の1つでもあり、これが作れないなら魔術師やめると言われるほどの物だ。

ちなみに、魔法薬免許という許可証を持っていると魔力回収薬の販売が許されるけど、免許取得の試験が厳しい。

その中の1つに、他人の魔力の特徴を掴んで、それに合った魔力回収薬を作成できるかどうか、ということがある。

魔女の中でもその免許を持っているものは少ないし、大雑把な性格の道楽や細かい作業の苦手なエルフィなんかは免許を取れていない。あ、もちろん私は持つてるわよ。じゃないとアリサやアリシアが特訓できないから。

アリサは大分まともな回収薬が作れるようになってきているから、もうひと頑張りでしょうね。

「ここよ、どうぞ入って」

「お邪魔します」

「はいどうぞ。ちょっと散らかってるけどね」

シヤマルさんを自室へと招き入れ、扉を閉める。

シヤマルさんに椅子へ座るよう促すと、座ったのを見てから私もベツドへ腰かける。

さてと、それじゃあ講義の時間か。

「じゃあ、シヤマルさん。とりあえず最初からやっつけていきましょ
うか」

「あ、はい。よろしくお願いします」

「じゃあ最初に、魔法と魔術の違いからやりましょうか。まず、魔
法はデバイスを経由して発動するのが一般的だけど、本来はリンカ
ーコアさえあれば発動できるわ。大気中のナニカを吸収して、魔力
に変換しているってところまではわかっているわね」

「魔力を吸収して、蓄積しているんじゃないんですか？ 少なくとも
も私たちはそう認識してますけど」

「ちよつと違うわ。そうね、言わば魔力素とでも言った物をリンカ
ーコアに吸収、蓄積し、それを変換して魔力に変えるというプロセ
スを踏んでいるわ。だから、空気中にある魔力自体は吸収できない
わね」

これはプレシアの研究でわかったことだ。

ついでに言うと、便宜上魔力と言っているだけで、中身は酷似して
いても細部が違うらしい。

1・00と1・01の規格の違いみたいなものかしら。互換性があ
るみたい。

ただ、原作にあったような集束系の魔法は、デバイス自体に魔力を
魔力素に分解して取り込む機構が付いていないと使えないこともわ
かった。普通のデバイスには大体取り付けられているみたいだけど、
やはりランクによって分解の効率は違うらしい。

また、ユニゾンデバイスであるブルーベルには、生体機構の1つと
して組み込まれているらしいから、ユニゾンすればデバイスいらす
で集束系魔法が撃てる。

といっても、その辺は深く考えなくても問題ないわね。

「なるほど……」

「それで、対する魔術の方は、まず体内に存在する魔力を使用するわ。使用する魔力はすべて自分の精神力が作り出すから、大きな規模の魔術を使用するにはそれ相応の精神力が必要ね。そして、魔術の簡単な定義を言うと『現実の理を捻じ曲げる術』といった所かしら」

「現実の理を、捻じ曲げる？」

シヤマルさんは首を傾げて言う。

まあ、こんなこといきなり言われてもわからないわよね。

「ええ。わかりやすい例を挙げましょうか。Aという地点からBという地点に移動するとき、魔法ならどうする？」

「座標を特定して転移魔法を使うか……、あとは加速系の魔法で時間を短縮するわ」

「でしようね。一方、魔術で移動する場合はその2つに追加して、空間を捻じ曲げて無理やりAという地点とBという地点を繋げるという方法もあるわ。これは、魔術師の発想力がカギになるわね」

「捻じ曲げて無理やり繋げる？」

「転移魔法の場合は自分が移動しているけど、無理やり繋げる場合はBという地点を移動させているの。これが違いね」

実際にそんなことのできる魔術師はほとんどいないけれど。

それに、魔術師自体がそんなに他の国に出たりとかしないし。とりあえず、ざっと魔術と魔法についての違いは話したわね。

「じゃ、簡単に違いがわかったところで、次は自分の魔力の質を確認してもらいましょうか。少し、魔力を放出してもらえるかしら？」

「え、ええ」

すぐに軽く、シヤマルから魔力が放出される。

薄つすらと緑色の魔力光が見えてきたところで声をかける。

「じゃ、その状態のままこれ飲んでみて。あ、安心していいわよ、毒薬じゃなくて検査薬だから」

「は、はあ……」

そう言いつつ、シャマルは一息で試験管に入っていた白っぽい液体を飲み干す。

「あ、言い忘れてたけどそれ苦」

「げほっ、けほっ！ あにこえ……！？」

「いわよって遅かったか」

うん、効能第一だから、味は度外視してたのよね。

案の定思いつきり咳き込むシャマルさん。すいません、言うの忘れてました。

「今飲んでもらった薬は、簡単に言えば大気中の魔力と自分の魔力の差を感じられるようになる補助薬よ。今日1日みっちり大気中の魔力に干渉してもらって、自分の魔力と波長を合わせられれば上出来ね。その現象を、揮発性の高い液体にしたのが魔力回収薬だから、早めに行けるようにならないとまだまだ飲むことになるわよー」

「た、大変そうですね……」

「そうでもないわ。時間さえあれば、よっぽどでない限りできるところだもの。さ、始めるわよ」

そう言つて、まずは私が空の試験管を手にとって魔力を込めていく。この魔力は大気中の魔力との親和性を高く設定したもので、発現させるとドロツとした液体状に変化し、大気中の魔力と反応して、自身の魔力に変えることのできるもの。

大気中の魔力が油だとすれば、自身の魔力は水。この薬で油を水に
る過して吸収する。そんな感じね。

もちろん、る過した際のゴミが出ないとかの違いはあるけど。

精製方法は、ただ設定を変更した魔力を真空上の何かの中に発現さ
せればいいだけだから簡単だけど。

シヤマルさんも最初は苦労していたけど、1時間もすれば周囲の魔
力を緑色に発光させられるようになっていた。

まあ、ここまでではできるわよね。

「えっと、ここからどうすればいいんですか？」

「自分の魔力が大気中の魔力を自分のものに変えるっていう感覚は
わかったわよね。じゃあ次は液体を想像して、その液体のかかった
魔力がそうなるっていう風にやってみてくれないかしら」

ここからはいわゆる想像力の世界。

このレベルのものが発現できなければ、魔術師としてはやっていけ
ない。

この辺が、出来なければ魔術師を辞めるといわれる所以だ。大体の
人は出来ちゃうんだけどね。

それから、2時間ほどして。

「こんな感じですか？」

そう言ったシヤマルさんの手には、薄い緑色にぼんやりと光る液体
の入った試験管が握られていた。

まだ少し淀みがあるみたいだけど、まあ3時間でここまでいければ
上等ね。

「これなら、生態系に影響のないレベルにまで魔力を回収できるで
しょう。魔術初心者とは思えない出来ね」

「よかった……。でも、なかなか難しいんですね」

「いきなり違う魔術体系に移って、ここまでやれる人はそういないわ。誇っていいわよ」

「あ、ありがとうございます」

「後は、その薬の効き目がなくても回収薬が作れるようになることね。頑張って」

もう数日も練習すれば、完璧な回収薬が出来上がるでしょうね。すずかと同レベルの才能つてのは、ちょっと驚きだけど。

考えてみれば、シヤマルもサポート系が得意なんだから当たり前か。と、ずつとやっていたからお腹が減ったな……。

「シヤマルさん、お腹減ってない？ 子供部屋の皆も誘って食事にしようと思うんだけど」

「え？ いや、でも、ご飯までご馳走になるのは……」

「気にしないで」

シヤマルさんを先導するように部屋を出ると、後ろからついて来ていることを確認しながら子供部屋へ。

私の部屋から子供部屋へは結構距離があるのよね。まあ、普段使わないから別にいいんだけど。

「皆ー、ご飯食べるー？」

「あ、また借金！？」

「アリサちゃん、もう8億だよ……？？」

「いや、これはルーレットが！？」

「フェイトすごーい、もうすぐゴールだー！」

「姉さんこそ、もうちょっとだよね」

「ちょ、待て待てなんなんやこれ！？ 借金が雪だるま式にいー！？」

……なにこれ。

ああ、人生ゲームやってるのか。私自作の。

暇に飽かしてつい作ってしまったアレは、100個あるマス目の内、半分以上が何らかのイベントで借金を背負うという糞ゲーだったはずだけど。

えーと、状況を見るに参加してるのはアリサとフェイト、アリシアとはやてみたいね。

すずかはルーレット係みたい。誰かがズルしないようにってことか。

「あ、おししょ……、栞！」

今お師匠様って呼ぼうとしたわね、アリサ。

なんとかはやての前だということ踏み止まったけど。

「あ、フェイト、ゴールした」

「やった……！」

フェイト、ゴール。総資産6億ちよつと。稼いだね……。

このゲーム、馬鹿みたいに金が消し飛ぶからつまらないって理由で、速攻で子供部屋に放り込んだのに。

「って、違う違う。皆、ご飯まだでしょ？」

「あ、そういえばそうだね。皆ずっとこれやってたから」

「でしょ？ だから、今日ははやてちゃんとシャルさんも一緒に、お昼ご飯どうかと思って」

「せやけど、ご迷惑とちゃう？」

「大丈夫よ、遠慮しなくても。どうせベルゼとノエルが作り始めるわ」

突然の忍姉さん登場。気配を消して私の後ろに立たないでください。って、もう作り始めてるのか。なら仕方ないな。

「皆がご飯のこと言わないから、私たちまで忘れちゃってたじゃない。プレシアとアルフには研究室の片付けをお願いしてるから、ご飯が出来る頃には食堂に来るわよ」

「じゃ、全員食堂に集まってこいでいい？」

「そうね。はやてちゃんにシャマルさん、それでいいかしら？」

「うーん……、今日は皆も出かけとるし、ええか。それじゃ忍さん、お言葉に甘えてご馳走にならせて頂きます」

話も纏まり、全員揃って食堂の方へ移動することに。

今日のご飯は何かな。などと思いつつテクテク移動。きちんと子供部屋は片付けてから来た。けじめはきちんとな。

ちなみに、ブルーベルはベルゼ以外の6姉妹とお買い物に行ってます。何を買っているのかは知らないけど。

食堂に入ると、既にアルフとプレシアが席に着いていた。

アルフとプレシアの仲も、もうすっかりよくなっただみいで、アルフはアリシアも一緒に守りたいと考えているらしい。

この辺は良い変化ってことかしらね。

そんなことを考えていると、大きなワゴンを押してノエルとベルゼがやってきた。

「皆さん、お食事の用意が出来ました」

「今回はお客さんもいるから、自信作だよ！」

そう言って、いつの間にか現れたファリンと共に3人で配膳してく。

皆の目の前にずらっと並べられたのは、なぜかオムライスだった。

うん、まあチョイスはいいわ。私も好きだし。

「けど、ちょっと量が多くない?」

「材料が少し余ってしまいますので、多めに作らせていただきました。余るようでしたら、後ほど別の物に作り直しますので、はやて様とシャマル様も遠慮なく仰って下さい」

私の疑問にノエルがそう答える。

まあ、残すことはしたくないけどね。食材に失礼だし。

「そう、わかったわ。じゃあ皆、いただきましょつか」

忍姉さんの音頭で全員が合掌して、いつせいに食べ始める。

うん、チキンライスもいい感じにパラパラだし、味もそこまで濃くない。

卵も半熟で、チキンライスとしっかり絡む。

「うん、美味しいわ。また腕を上げたのね、ベルゼ」

「へへん、毎日頑張ってるんだもん!」

「ベルゼだったら、毎日毎日あでもないこうでもないと厨房に籠りっぱなしで……。その分、腕はぐんぐん伸びてますけど」

胸を反らして誇るベルゼを見ながら、ノエルが苦笑いしつつ言う。

その苦笑いの中に暖かい何かを見つけられたのは、なんだかいい発見をした気分。

結局全員が完食した後、子供組は普通にゲームで遊ぶために子供部屋に戻っていった。

ついでに、私もシャマルさんを連れて自室へ戻る。聞いておきたいこともあるし。

「さて、シャマルさん。一つ、質問したいことがあるのだけれど」

「……何ですか？」

私の言葉に、シヤマルさんの雰囲気が変わる。
きつと、私の雰囲気も違うものになっているんだろう。

「はやてちゃん、普通の身体障害じゃないわね。魔力の巡りがおかしかった」

「わかり、ますか」

声だけで、雰囲気暗くなっているのがわかる。

わたしがはやてちゃんを見たとき、チラッと見ただけではわからなかったけど、ずっと見ているとよくわかった。

行くべきところにいくはずの魔力が、まったく別の所へ流れている。そのせいで体の麻痺が起こっているらしい。

「こんなところで私ができることじゃないとは思っけど……、何かあれば頼って頂戴。何か方法を見つけれられるかもしれないから」

「………すみません、心配をおかけして。でも、どうしてそこまでしてくれるんですか？」

「放っておけないのよ。もちろん、自分の住んでいる町に爆弾みたいな危険物を置いておくわけにはいかないっていうのもあるけどね」
「そう、ですか」

どちらにしても、今の私たちに出ることはそう多くない。
事が起こるまで待つしかないというのも、嫌なものね。

「ともかく、あまり騒ぎは起こさないように。あんまりやられると私でも庇えなくなるからね」

「あ、はい。それはもちろん」

その後にくいつか忠告をしてから、その日はお開きとなった。本当に、何もなければいいのだけれどね。

それから数日。

私たちは崩壊寸前となっていた時の庭園へやってきていた。

メンバーは私こと菜と、テストロツサ家全員。

既に次元移動の許可は取ってあるから、特に問題はない。

「で、持っていきたいものってというのは何？」

「私の研究室にあるの。研究資料もそうだけど、一番大事な物」

そう言ったプレシアの先導で、テクテクと歩いていく私たち。

やがて崩壊を免れている一室へ辿り着くと、プレシアは躊躇いなくその扉を開け放つ。

そこには、キャビネットに整頓された数々の青いファイルが、壁一面を埋めていた。

それも片側だけでなく、机のある壁以外のすべての面を埋め尽くしている。これ、全部研究資料なの……？

そう思っていると、プレシアはそれ等には目もくれずに机に歩み寄り、中から古い革張りの本を取り出した。

「それは？」

「アルバムよ。生前、というとおかしいけど、昔のアリシアの。今

度はフェイトとアルフも一緒に写ることになるわね」

「母さん……」

「プレシア、あんたそのために……」

なるほどね。

普段は研究三昧のプレシアが、突然「時の庭園へ行きましょう」なんて言い出すから何かと思ったら。

要するに、ふと思いついてアルバムを取りに来たかったらしい。

「栞、そのAからBの2番辺りまでは全部デバイス関係だから、持って帰りたければどうぞ」

「そう？　じゃあ遠慮なくいただくわ」

元家主のお許しが出たので、そそくさと王の財宝ゲート・オブ・パレロンに仕舞い込む。

皆、私がこれ使えること忘れてたでしょう。多分。

あ、そういえば最近は、アザトースのところとかに遊びに行っていないな。

まあ忙しかったし、連中からすればほんの数秒みたいなもんだからいいか。

「でも、ここが崩れるのは惜しいわね」

「でしょ？　綺麗な所も多いのに」

「なにか、残す方法はないのかい？」

私の言葉に同調して、アリシアが答える。

それを聞いたアルフが、ふとそんなことを言い出した。

残す方法か……。

「いえ、残せるわよ？　最近メンテナンスしてなかったから、動力炉が不調なだけで」

普通に動かせた。なんだそれは。

結局、これからちよくちよく来てはメンテナンスをしていくという方向で決まった。

練習場も作れそうだし、動く幅が広がりそうだ。

……フェイト、あんまり喋ってないわね？

24話 シャマルさん、講義の時間です（後書き）

こんな感じ。

魔力回収薬、言葉にするととても面倒なものだというのがよくわかった。

25話 それぞれの動き(前書き)

遅くなりました。

なにやらバトンがいつぱい来てるんですが、結構回答者指名型が多いorz

ちゃんと出来上がり次第バトンはうりますので、しばしお待ちを。

25話 それぞれの動き

「レヴァンティン」

「Ja」

目の前の竜種を、私のデバイスである『レヴァンティン』が斬り裂いていく。

随分と弱っていたことが幸いして、本来は鋼鉄の強度を誇るその鱗もあっさりと斬り裂けた。

「闇の書よ、蒐集を」

手の内にあるそれを掲げると、赤い鱗を持った竜のリンカーコアから魔力を吸い出していく。

全長6メートル程もある巨躯にも関わらず、そこに宿った魔力はそう多くはない。

相手が獣だからこそ、こうして躊躇いもなく全ての魔力を奪い尽くしているが、主の思いを裏切っていることはずっと心に重く押し掛かっている。

人様に迷惑をかけるなという言葉は、この竜にも通じるのかとつい考えてしまった。

「シグナム、調子はどう？」

「シヤマルか。なんとからページだ。今日はこれ以上の収穫は見込めないな」

「そう。あ、怪我してるじゃない」

そう言って私の頬に触れるシヤマル。

ピリツとした痛みが走り、右の頬に切り傷が付いているのに気づい

た。戦闘時に付いたのだろう。

シヤマルがその切り傷に指を這わせると、傷が消えるようにして治っていく。

シヤマルのデバイス、『クラールヴィント』の魔法だろうか。

「うん、これでよし」

「すまないな。魔術師とかいう連中の相手も任せてしまつて」

「気にしないで。栞ちゃんと話すのは楽しいし、講義もタメになるもの。今度一緒に行きましようよ」

「随分と好いているんだな」

「……そうかもね。私たちのことを知ったら、嫌いになられちゃうかしら」

痛々しいシヤマルのその姿を見て、思わず私の胸の奥も痛くなる。

少しとはいえ、親しくなった者に嫌われるのは嫌なものだ。もう何度その経験をしたかもしれないが。

今まで共に戦ってきた戦友、そして今は家族の1人として、悲しむ姿は見たくない。

「だが、こうする以外に方法はないのだ。闇の書さえ完成すれば、きつと……」

「……そう、よね」

どこか煮え切らない答えのシヤマルに少し疑問を抱いたが、気にするほどでもないと考え直す。

「さあ、戻るか」

「そうね。はやてちゃんも待つてるだろうし」

地球へと戻るための転移魔法を起動させ、その魔法陣の中に入る。

次の瞬間、私たちの姿はその世界から消えていた。

「久しぶりの学校です」

「……………栞、誰に言ってるの?」
「さあ?」

隣にいるはずかにそう返して、再度前を向く。

今は2限目の休み時間。ほんとに久しぶりに学校にきたなあ…………。当たり前だけど、クラスの顔触れに変化はない。いや、フェイトが増えたか。

それと、なのはも念話でポーっとしている様子もない。キチンと勉強に励んでいるようだ。

この分なら、それほど悪くはならないだろう。そう願う。

「にしても、フェイトはアイドルだねえ」

「ファンクラブまで出来てるみたいよ。名前は確か……………」

「【フェイト・テストロッサを温かく見守る会】と、【フェイト・テストロッサを愛でる会】だったよね」

思い出そうとしたアリサに続けてさすがが言う。
というか、なぜ知っているんだすずか。

話によると、【見守る会】の方は男衆が中心で、フェイトの天然さによるハプニングをそれとなく助けたりするらしい。

いい仕事するじゃない。

一方の【愛でる会】は女子中心で、下級生からはお姉様なんて言われて、上級生からは可愛い妹として可愛がられているらしい。

ここ、一応共学ですが？ まあいいけどさ。

それにしてもすごい人気だ。金髪だからか？ いや、金髪ならアリスがいるか。

うーん……、性格か。

「なんにしても、ちゃんと仲良くやれてるみたいで良かった」

「……なんか、歳行っちゃってる人みたいよ？」

「なっ？！ 私はまだぴちぴちの肉体年齢9歳だぞ！」

アリスの言葉がガラスのハートに突き刺さります。

銃弾も通さない強化ガラスだけど。

「肉体年齢ってことは、精神年齢は行ってるんだね」

「すずか、あんたはどっちの味方なの……」

歳取ってるみたいと言われて若干精神に傷がついた私。

まあ、すぐ治るけど。

「いやあ、にしても平和ねえ……」

ぽつりと、アリスが呟く。

まあ、結構色々あったしね。アリスも今年だけで随分変わったよ。

結局、その日は大して授業を真面目に受けることもなく1日が終わった。

まあ仕方ないよね。

決して、平和を堪能するという名目でぼけーっとしてて、先生に当てられたのにそれに気づかないという失態を犯したわけじゃない。

わけじゃないぞ。

そうして、その日の夜。

私が丁度、忍姉さんの研究室の前を通りかかると、中から声が聞こえた。

普段研究しているときはそこまで話声が上がらない部屋だけに、奇妙にハイテンションな声音にちよつとビビってしまう。

「で、出来た……」

「サンプルが沢山あって助かったわ。アルフ、アリシア、お疲れ様」

「やつと完成かい……。でも、これで少しは楽になるんだね」

「いよっしゃー！ 私、ベルゼ達に頼んでお祝いのお料理作ってもらってくる！」

話が終わったと思ったら、その直後にアリシアが飛び出してきた。

予想通りというべきか、扉の近くにいた私にぶつかるアリシア。痛くないけど、妙に興奮してるなあ……。

「アリシア、どうしたの？」

「あ、彗！ ちょっと皆を食堂に集めて！」

「なんで？」

「いいから早く！ 私は食堂に行って料理を注文してくるから！
じゃーね！」

言いたいことだけ言うと風を切って走り去るアリシア。

……えーと？ とりあえず、皆を呼べばいいのかしら。

ウィンドウを呼び出し、邸内で人がいる部屋や廊下にモニターを映し出す。

「あーあー、テストス。アリシアが食堂に集まってほしいってことだから、全員食堂に集合ね」

言うことだけ言ってウィンドウを閉じると、私も食堂へ向かう。食堂では既に、ノエルとファリン、そしてベルゼの3人が作ったやたらと豪華な料理を、他の6姉妹が全員でテーブルに置いていた所だった。

普段は見栄えなんかも気にする6人だけど、今回はかりはその量の多さに舌を巻き、とりあえず片っ端から詰めていけとばかりに置いていつている。

巨大なテーブルの上は既にこった煮状態。けれど、料理1つ1つが美味しそうだから、見た目も悪くはない。

しばらく皆の働きを見て感心していると、そのうちに他の皆も食堂に揃ってきた。

「何々、何の騒ぎ?」

「お腹空いたなあ……」

ブルーベルとすずかが皆の心を代表するようにぼやくと、突然食堂の電気が落ちる。

停電かと思ったら、またも唐突にアリシアのいる位置にライトが向けられた。

「全員集まったかなー? じゃあ、まずは席についてください!」

「アリシア、一体どうしたのよ」

「ぬふふー、いいからいいから」

テンション高いな。

ともかく話が進まないの、全員いつもの席に座ることになった。うん、いい匂いだし早く食べたいんだけど。

「さて、今回集まってもらったのはなぜか!」と言つとー!」

「アリシア、気が早いわよ。私たちも来ていないじゃない」

「そうだよアリシア。って、なんだいこの料理の数は？ 随分力入れて作ったんだねえ」

「あら、いい匂い。お腹ペコペコなのよねー」

アリシアがテンションが上がってマイクを振り回していると、まだ研究室に閉じこもっていたらしい3人が入ってくる。

アルフは相変わらず狼モードだけど、なんだか魔力が上がっている気が？

忍姉さんとプレシアはお揃いの白衣を身に纏い、髪の毛も同じくボサボサ。

何徹すればそうなるのよ。

「じゃ、今度こそ全員集まったからいいよね？」

「いいわよ、どうぞ？」

忍姉さんがゴーサインを出すと、アリシアは満面の笑みを浮かべて口を開いた。

「なんと、今回私たちは、『コア・エネルギー回復薬』の開発に成功しました！」

その言葉を聞いて、研究室組の3人がにやつと笑う。

凄いわね、そんなものまで作り出したの？

「と言っても、この中でリンカーコアがあるのは私、フェイト、アルフ、ブルーベル、菜の5人だけだから、あまり使う機会はないでしょうけどね」

「それでも大きな進歩よ？ プレシア」

訂正するようにプレシアが言うけれど、それを忍姉さんがつつく。姉妹やずか、アリサなんかはよくわかってないみたいだけど、ブルーベルは驚いているし、フェイトに至っては口をぽかんと開いてしまっている。

「凄いね……。私の記録にだって、そんなものは残ってないのに」「それってつまり、リンカーコアの魔力を薬で回復させられるってこと?」

「そうなるわ。魔導師にとっては大きいアドバンテージね」

しかし、そういう意味でこのパーティーか。

確かにこの発明は凄いものだ。多分私も理論を考えるためには相当時間がかかるだろうし。

出来ないわけじゃないけど、メリットがない。だからやらなかったんだけど……。

「それでねそれでね、アルフもちよつと強くなったんだよ!」

「フェイトに無断で悪いと思ったけど、リンカーコアに手を加えて魔力の出力を増やしたんだよ。結界や捕縛系だけじゃなく、大き目の攻撃魔法も撃てるように」

「アルフ……。ううん、いいよ」

ふわつとした笑みを浮かべてフェイトが言う。

姉妹揃ってアルフを撫で始めると、いつの間にか来ていたファリンがパンパンと手を叩いた。

「はいはい! 発明の発表もいいですけど、せつかくのご飯が冷めちゃいますよ?」

「ふふつ、そうね。それじゃあ皆、いただきますしょうか」

いつぞやと同じように、忍姉さんの音頭で食事が始まる。ふむ。しかしあの薬ならばやての病状を和らげられるんじゃないだろうか。

けどどうやって渡そう。今はまだ私たちは病状を知らないわけだし。

「お悩みみたいね、栞？」

「忍姉さん……。ちよつとね」

「私じゃ頼りにならないかもしれないけど、何かあれば言っているんだからね？」

頼りにならないなんて、とんでもない。

私たちは忍姉さんがいてくれたから、こうして生活できているんだから。

いなかったら、今の私たちはいない。ちゃんと感謝してるんだもの。

「うん……。ところで、アルフの魔力値をどうやって上げたの？」

「ふふっ、聞きたい？ と言っても、私はよくわからないんだけど、プレシアによると、回復薬の製作過程で発見したことの応用らしいわよ？」

なんじゃそら。わけがわからないわ。

とりあえずその辺は後でプレシアに聞こう。何かの役に立つかもしれない。

しばらく食事を堪能し、その日はつつがなく終わりを迎えた。

特に騒動もなかったわ。こういう平和はありがたいものね。

「よつと」

「ここが新しい家兼本部かぁー。綺麗な所ですね、艦長」

「そうねー。それと、ここではリンディさんと呼ぶよつと」

「りょーかいです、リンディさん」

ここは、とあるマンションの一室。

それなりに広い部屋を取れた僕らは、こうして着々と仮本部の設置を進めていた。

久しぶりだな、クロノだ。

数日前に許可申請をして、ようやく許可が下りたため、こうして地球へ入ることが出来た。

もちろん、ただ休暇を楽しみに来たという訳ではない。立派な任務としてここへ来ている。

もうあんな目に遭うのはこりこりだから、キッチンと魔術師の上層部に話は通してあるぞ？

「わつ、ちゃんとテレビ繋がってる！」

「エイミィ、一応契約してるんだから当たり前だろう……」

「冷蔵庫が大きいわねー、助かつちゃう」

「かんちよ、母さん。開け閉めしないでください」

この2人は、仕事をしにきたという自覚があるのだろうか。

ちなみに、ここは海鳴市だ。後で『彼女たち』にも挨拶に出向かないとな。

で、その任務と言うのが、ここ最近この地球から管理外世界への転移反応が多数感知されているとのこと。

次元犯罪者が入ってきたとしても、ここ地球ならば間違いなく瞬殺

できるだろう。断言できる。

前回のジューエルシード事件の際、僕は随分と色々せっつかれた。なぜ管理外世界からの回収1つ満足に出来ないのか、とか。

魔導師が魔術師のような存在に劣るはずがない、職務怠慢だ、とか。正直、とつとあの座から降りてほしい。あんな戯言を言っているのだからとつとに耄碌しているだろうに。現場に出ずに口出しするだけなら簡単だ。

「まったく……」

思わずため息と共にそんな声が漏れてしまう。

こんな考え方が出来るようになったのも、怪我の功名と言えるのだろうか。

ともあれ、その理不尽な汚名を返上するため、その転移反応の調査にアースラー向が出向いたということだ。

「ともあれ、まずは情報整理と収集だな」

端末を立ち上げ、まだ騒いでいる2人を放置して仕事にかかる。

確かに時間はあるだろうが、あまり樂觀視してまた怒られるようなことはしたくない。

正直、降格よりも『彼女』にぶん殴られるほうが危機感がある。

それに、人材不足の管理局がせっかくの魔導師を手放すわけも無し。この辺はまだ信頼できる部分か。給料もいいしな。まあ、何に使うわけでもないけど。

『ああ、繋がりましたね』

「やあグリフィス。そっちはどうだ？」

『問題無しです、クロノ執務官』

「そうか。以後、通信回線はこの周波数で固定する。緊急用は非常

時のみ使用するように」

『了解です』

用件を済ませると、すぐに通信を遮断する。
まずは何から手をつけるかな。

25話 それぞれの動き（後書き）

ということ、なぜかグリフィス君登場。

いや、Stetsでもできるし、ここで出しちゃえと思って。

そして、クロノ君はどんどん真っ当になっていきます。どうした黒スケ、君はプロットの時点ではそんなに大人じゃなかったはずだ。

とりあえず、今日はこの辺で。アデュー

26話 嵐の始まり(前書き)

遅くなりました。

今回はあまり彙がでてきません。他の人って書きづらい……。息抜きにネギまのネギアンチ書いてたのも原因のひとつですが。

26話 嵐の始まり

『コア・エネルギー回復薬』の開発に成功してから数日。夜風に当たっていた私の目の前に、突然モニターが開いた。

『栞さん、いますか？』

「お風呂中だったらどうするつもりだったの、後藤さん」

『これは失礼。少々急ぎです』

青いモニターの中で苦笑いを浮かべる後藤さんに、私も苦笑いを返す。

雰囲気から察して、少しまずいことが起きたらしい。

「どうしたの？」

『海鳴市内で不審な魔力反応がありましたね。微量ですがどうも気になったので、うちのを向かわせてます』

「不審な魔力反応？ シャマルのものじゃないの？」

『ええ、登録されているシャマルさんの魔力とは明らかに違うものが』

どうやら厄介事らしい。

不審な魔力反応というものは、要するに魔術課に登録されていない魔力の波長のことだ。

ここ最近で言うと、登録前のシャマルさんがそれに嵌る。

時々無自覚で魔力を流してしまっている人もいるけど、そういう人は魔術課が人知れず魔力を隠ぺいし、外側から魔力を抑え込んで安定させている。

「わかったわ、ちょっと出てみる」

『お願いします。何もないとはい思っんですがね』

通信を切り、一旦部屋に戻る。

ネグリジエから動きやすい服に着替えると、とりあえず魔力回収薬をベルトに差し込む。

大事にはならないと思うけど、最低限の装備はしていこう。

「お姉ちゃん、どこか行くの？」

「ああ、ブルーベル。ちょっとお仕事よ。一緒に来る？」

「うん！ 支度してくるね！」

廊下を早歩きして部屋に戻るブルーベルを見送り、その場で待つこと5分。

あっという間に民族衣装のような幻想的な服に着替えてきたブルーベルは、私の左腕に抱きつくようにして飛びついてきた。

「ブルーベル、どうしたの？ その服」

「ルシ姉と買い物行ったときに買ってもらったんだ！ 可愛いでしょー」

「ええ、似合ってるわ」

ルシファーがねえ……。

意外と姉バカなところがあるし、ブルーベルよりも精神的に年上だからかもしれないわね。

ちなみにブルーベルは、ルシファーとベルフェは姉と。それ以外の姉妹は愛称で呼んでいる。

「それじゃあ行きましようか」

「りょーかーい！」

その言葉とともに、私とブルーベルはその場から姿を消した。

「どうしてこんなことするの!? どちらの子!?!」

「うるせええええ!!」

咄嗟に張ったシールドに、大きな金槌? みたいなデバイスが叩きつけられる。

なにこの子、強い!

いつものように魔術師の法律の勉強を終わらせて、【魔女】のお姉さんのお屋敷から帰ろうとしたとき、突然レイジングハートが私に注意を促した。

それでふと見上げた次の瞬間に、凄い勢いで迫ってくる魔力弾を何とか避けて、今こうして対峙している。

もう、なんなの!?!

「うう、レイジングハート!」

「Yes, my master」

「やっぱり魔導師か……」

小学校の制服をイメージしたバリアジャケットを身に纏い、視界上方にいる少女を見る。

真っ赤なバリアジャケットと、奇妙なウサギをあしらった、同じく赤い帽子。

手には、長い柄の先にとんかち位の鉄の塊らしきものが握られている。それがおそらくデバイスだ。

「あんたに恨みはないけど、魔力はもらっていくぞ！」

「ちよ、ここで戦つたらまずいつてば！」

「うるせえ！ 結界張つてあんだ、つべこべ言わずに潰されるオ！」

気性が荒いのが手に取るようにわかる言動と共に、大きく振りかぶつたデバイスの先を叩きつけてくる。

〔Flier fin〕

「ッ！ あ、ありがとう、レイジングハート！」

辛うじてレイジングハートが機転を利かせ、飛行魔法を発動させて攻撃から逃れる。

直後、私のすぐ横をハンマーが通り過ぎていった。勢いあまって、整備された道路のコンクリートを砕いていた。

ぞつとする。あれほどの力を、何の緩衝も無しに受ければ。

「レイジングハート、近くに一般人は？」

「探索中……。一般人の反応はありません。私達とあの魔導師、魔術課の方の反応だけです」

それを聞いて、思わず安堵する。

今までは魔法に恐怖心を抱いたことなんてなかった。

全部が全部初めてのことで、期待や好奇心の方が強かった。だけど、今は違う。

安堵していた。助けられると、そう思ってた。

「……その魔術課の人たち、こっちに来てくれそう？」

「はい。ですが、到着まで数分かかります」

レイジングハートの言葉に、心を持ち直す。

目の前にあるのは、圧倒的な暴力。ただそれだけだった。ついこの間まで、自分もこんな風に力を振り回していたのかと考えると、背筋が冷たくなる。

魔術師の勉強をしてから、特にそういう考え方をするようになった。魔法は好きだ。だけど、暴力は嫌いだ。

「ごちゃごちゃ言っていないで、魔力を寄越せ！」

「レイジングハート！」

「Yes」

短い返答と共に、レイジングハートがその魔術課の人へヘルプコールを送る。

これで、少しすれば魔術課の人が助けに来てくれるはず。それまで粘らないと。

すぐにシールドを張って突撃を食い止めようとして、駄目だった。

「きゃあっ！」

強烈過ぎるその打撃を抑えきれず、破られる寸前のところでシールドをパージ。その反動で何とか後方へ脱出する。

体勢を立て直さないと、まともにぶつかってもこの手のタイプでは勝ち目がない。

まだシールドの強度も十分じゃないし。

「仕方ない、少し暴れるよ！」

「Ok, my master」

軽く呟いて、魔力を集中させる。
赤い子はすぐにでも突っ込んでこようとしている。なんとか時間を稼がないと！

「デイバイン……！」

〔Buster〕

直射型の魔法、デイバインバスターを放って、当たったかどうかを確認する前に後退する。

煙が立ち込めていて、赤い子に当たったかどうかはわからないけど、その前に私は誘導弾を3発放っていた。

煙の中央とその左右に1発ずつ。殺傷能力はないけど、威嚇にはなるはず。

「どう、レイジングハート！」

〔駄目です、反応が検知できません〕

そう答えられ、ちょっと落胆する。

けれど、そんな余裕はなかった。すぐに身構えて突進を警戒する。

「……？」

こない。

いつまで経っても、煙の中を突っ切って、赤い子が出てこない。

おかしい。長すぎる。いくらなんでも、こんなに長く出てこないのは。

「ま、まさか……！」

〔Master？〕

嫌な予感が心の中にちらついて、思わず煙の方へと飛ぶ。
直後。

「ラケーテンハンマーッ！」

「ッ！！！」

[Protection]

とてつもない勢いで飛び出してきたハンマーを受け止めきれず、咄嗟に発動させたプロテクションが破られる。

それだけじゃない。レイジングハートにまで達した鋭いそれは、嫌な音を立ててレイジングハートの一部を破損させ、私ごと吹き飛ばした。

どこかの会社のビルの窓ガラスを突き破って、その中に突っ込んでしまう。

盛大に埃が舞い上がって、思わず咳き込んでしまった。

「ケホ、ケホッ！」

何とか震える足に力を込めて立ち上がると、周囲を見渡してみる。

あ、この部屋は物置なのかな。埃の溜まり方から言って、随分長い間使われてないみたい。

開かずの間、って奴かな。

「おらあああああ！！！」

「わっ！」

考えてる場合じゃなかった！

咄嗟にレイジングハートを構えて、プロテクションで身を守ろうとする。

だけど、やっぱり力は向こうの方が強くて、あっさり弾き飛ばされ

てしまう。

それと一緒に、聞こえた。

大切な相棒の、欠けてしまう音が。

「レ、レイジングハート……?」

「大ザツ夫でs s s、言語きn o うに障g g いがありmすが、戦闘ぞk k kはかnおうdえs」

えーと、喋れないけど戦えるってこと?

つて、駄目だよ! ちゃんと修理しなきゃ!

でも、いったいどこで!? 修理できる場所なんてあるの!?

そんな風にくるたえていて、目の前のことを忘れていた。

「魔力は、もらっていくぞ」

「え……」

そう言つて、赤い子が脇に抱えた本を掲げる。

それから放たれた光は、とっても重苦しくて。見ているだけで悲しくなつてきて。

「そこまでだ! 話を聞かせてもらうぞ!」

間に入ってきたのは2人組の男の人たち。

この人たちは、見たことがある。名前は聞いてないけど、時々勉強に言っているお屋敷に出入りしていた人たちだ。

「なんだ、お前ら」

「なんだとはご挨拶だな。一応警察のもんだ。嬢ちゃん、もうすぐ助けが来るから、待つてるな」

「あ、はい!」

実際に縫い付けられてるわけじゃないけど、それぐらい凄かった。神岡って呼ばれたイケメンっぽい人がデバイスの柄を抑えて、強面の人から頭から地面に叩きつけていた。本当に一瞬。まるで、子供の遊びみたいに。

「うし、これでいいな」

「高町君、大丈夫かい？」

「あ、はい！ でも、レイジングハートが……」

「デバイス、だったか。その辺は栞さんに任せとけ。俺らは無理だからな」

強面の人がくしゃくしゃと頭を撫でてくる。

手の平はごつごつしていたけど、不思議と痛くなかった。

それにしても、一体この子は誰なの……？

26話 嵐の始まり（後書き）

ということ、ヴィータちゃん違法行為、の巻でした。
細かいことは次回に持ち越されます。別名説明回。

27話 鉄槌の騎士、捕縛（前書き）

遅くなりました。

ふむ、思ったよりも話が進まなかったなあ……。

次回で本編終わりの気配が強いです。あくまで、原作の本編であつて、こっちの本編は終わりませんよ？

27話 鉄槌の騎士、捕縛

飛んでいる途中、なぜか緊急回線で神岡から連絡があり、とりあえず指示されたビルへと向かう。

向かうのはいいのだけど、随分大きな結界を張ったのね……。

「ベルカ式の結界だね。誰だろ？」

「やっぱりベルカ式なのね」

ブルーベルから情報を貰い、とりあえず守護騎士勢だろうと当たりをつける。

少し飛ぶと、ビルの壁が崩壊しているのが見えた。魔力反応は中からね。

「到着、と」

「し、栞ちゃん！」

「なのは、怪我はないかしら」

中にいたのは、レイジングハートを抱えたなのはと、神岡^{モブ1}さんと、伊豪^{モブ2}さん。

それと赤毛でロリータな服装で捕縛されている少女。近くには銀色のハンマーらしき物体が落ちている。

……なんか、犯罪現場みたいね。いけない方の。

「わ、私は大丈夫だけど、レイジングハートが……！」

「……すぐに手配するわ。伊豪さん、彼女を私の自宅まで送って。

プレシアに、私からデバイスの修理を頼みたいと言えばいいから」

「ういっす。んじゃ、行くぞ高町」

「は、はい……」

そう言つて、なのは連れて伊豪さんがビルから出て行く。
一応、私の立場的には彼らの上司相当なわけで、彼らも一応警護で接している。
さて、後は。

「ブルーベル、サーチ」

「はいはい」

ブルーベルが赤毛の少女に探知魔法を掛ける。

青白い魔力が赤毛の少女を覆つてから数秒して、ブルーベルが魔力を散らした。

「あ、やっぱりあるね。リンカーコアが構成体の核も代用してる。確か、バンクに似たようなのが載つてたはずだけど……」

そつと目を閉じ、頭の中の知識を漁っていくブルーベル。

しばらくして、閉じたときと同じように目を開けると、軽く頬を吊り上げて笑う。

「うん、見つけた。ベルカが健在だった頃に作成されたストレージデバイス、『夜天の書』の守護騎士、鉄槌の騎士ヴィータだね」

「さつすが。今日は一緒に寝ましようか」

「ほんと！？ やつた！」

真空波が出そうな勢いでガッツポーズするブルーベルが微笑ましく、つついっ笑つてしまふ。

つと、今は笑っている場合じゃなかったか。

なんか、ヴィータがすごいい睨んでくるんだけど。

「どうして、私の名前を知ってたんだ!」

「どうしてって、そりゃ私があなたよりも昔に作られたからだよ。」

『夜天の書』の守護騎士さん?」

「はあ? 私は『闇の書』の守護騎士だ! 『夜天の書』なんかじゃねえ!」

ふむ、やはり記憶は改ざんされているのか。

ブルーベルも困った顔で笑っている。まあ、やることは変わらないんだけど。

そう思いつつヴィータを無理やり立たせる。

「ブルーベル、他に守護騎士は?」

「剣の騎士シグナム、湖の騎士シヤマル、盾の守護獣ザフィーラだよ。って、この前来たシヤマルさんってもしかして守護騎士?」

「多分ね。今から連絡するわ」

懐から携帯を取り出して、シヤマルさんの番号をプッシュ。

ちなみに、この携帯は特別仕様で、いかなる結界の内外においても電波状況が一定以下にならないという凄い一品。

製作は忍姉さんです。

何度かの呼び出し音の後に、シヤマルさんが電話に出た。

『はい、シヤマルです』

「もしもし、栞よ。今、時間いいかしら」

『あ、はい。どうしたんですか?』

「お宅に、ヴィータちゃんって赤毛の女の子がいるわよね?」

若干困惑気味だったシヤマルさんが、電話の向こうで息を呑む。

あら、ピンゴだったみたい。

『いますけど、それがどうしたんですか？』

「……今から、私の家に来てもらえるかしら。少し見過ごせない事態が起きてしまったの」

『……それは、まずいことなんでしょっか』

「ええ。一度来てもらえないかしら」

『わかりました。仕度してすぐに行きます』

「待つてるわ」

そう言つて、とりあえず電話を切る。

はあーっ……。また面倒事か。

そりゃ、ここは海鳴だし、リリカルな世界だから仕方ないとはいえ、だ。

やっぱり面倒事はないほうがいい。平穩が一番だ。

「神岡さん、戻つて報告お願いします。細かいことはこちらで報告しておくので、私から報告が行くと後藤さんに言っておいてもらえますか？」

「了解しました。それでは、身柄の引渡しを」

「はい、確かに。お疲れ様です」

「いえいえ」

一礼して、崩壊したビルの壁から飛び降りて行く神岡さん。

まあ、とりあえずヴィータは勾留ね。

他は後々相談するとして……。

「それじゃ、とつとと戻りましょうか」

「はいー！」

一度ヴィータを抱えてビルの屋上まで跳ぶと、先に結界を破壊する。邪魔だったからね。

「な、結果が!？」

驚いているヴィータをよそに、魔力回収薬を撒いて魔力を回収。すぐに転移魔術を発動させて私たち3人は月村邸へと戻ることになつた。

え、最初から何で転移しなかったのかつて? ほら、風情とかあるじゃない? 間、とか。

そして、月村邸。

「あ、栞ちゃんにブルーベルちゃん! と、あの赤い子!？」

中に戻ると、そこにはなのはが丁度通りがかった。

「レイジングハートはどんな感じ?」

「えっと、2日もあれば直るって。それで、何がどうなってるの?」

「それをこれから聞くつもり。ファリン、なのはをゲストルームへ。ココアでも出してあげて」

「はい、栞ちゃん。さ、なのはちゃん」

ファリンの案内でゲストルームへ向かうのは。

なのはがいなくなるのと入れ違いで、玄関が叩かれた。

「はい」

若干軋ませながら扉を開けると、そこにはしっかりと着込んで顔が赤く上気しているシャマルさんが。走ってきたらしく、ちよつと色つぽかった。

「お疲れ様、シャマルさん」

「はあっ、はあっ……」

「さて、と。ノエル、私たちにもココアをお願い。4人分、私の部屋に持ってきて頂戴」

「かしこまりました」

いつの間にか傍にいたノエルにそう頼んで、シャマルさんが息を整えた後、私の部屋へ。

グイータはブルーベルが担いで運んでる。なんか騒いでるけど放置だ。

さて、色々ごたごたしているけど、まずはシャマルさんに事情を説明しないかね。

「さ、座って。ブルーベル、その子はベッドの上に放って頂戴」

「えー？ 床でいいでしょ？」

「ま、それもそうね」

ゴトン、とかなり痛そうな音と共に床に落とされるグイータ。

ちゃんとカーペットは敷いてあるから、そこまで痛くないとは思っただ。

「っ！！」

痛かったらしい。

それはともかく、いまだに困惑気味なシャマルさんに説明することに。

「えつとね、この子はあなたのところの子？」

「はい……。ヴィータちゃんが、何かしたんでしょうか？」

「魔術課に所属している見習いちゃんを襲ったのよ。リンカーコアを持っていたから」

「ヴィータちゃん、それ本当なの!？」

「……………うん」

「っ……………」

表情を暗くしたシャマルさんは、すぐにこちらへ向き直ると頭を下げてくる。

ヴィータはといえば、まったくこっちを見ずに顔を俯かせていた。まあ、縄でぐるぐる巻きになっているから俯くも何もないけどね。

「ご迷惑をおかけして、すいませんでした……………!」

「……………まあ、いいわ。ただ、あなた達が何をしているのかは話してもらおうよ。こちらとしても、本来ならヴィータは法律で裁くところなのだし」

「……………はい、お話します」

「シャマル!？」

「大丈夫。はやてちゃんも栞ちゃんとはお友達だから」

そう言っつてシャマルさんが話し出したのは、原作と相違ない『闇の書』事件の全貌。

夜天の主、八神はやての体が『闇の書』となった『夜天の書』によつて蝕まれていること。

それを治し、力を解き放つために守護騎士が秘密裏に魔力を集めて

いることなど。

それを聞いて、1つ言えるのは。

「それで、なのはに手を出していいってことにはならないわよ」

「……すみません」

「……」

「まあ、その辺は後で本人に謝つてきなさい。それで、はやてちゃんが進めないのはリンカーコアから無理に魔力を吸い取っているからなのよね？」

「は、はい、それは間違いないと思います」

ふむ、このタイミングなら大丈夫か。

丁度ノエルもココアを持ってきたところだし。

「なら、多分それは解決できるわ。明日にでも改めてきて頂戴。ただ、ヴィータはこつちで預らせてほしいんだけど」

「それは、私の方からははやてちゃんに言っておきます。それと……、はやてちゃんは、何にも関係ないので……」

「わかってるわ。今回はヴィータの独断専行で、魔力の蒐集も民間人に危害を加える気はないのよね？」

「はい。それと、できればヴィータちゃんにも酷いことは……」

「一応、事情聴取はさせてもらうけど、そこまではしないわ」

不安げなシャマルさんを安心させるように、そう言う。

ちなみに、今頃なのは始末書を書いている頃だろう。

巻き込まれたとはいえ、警官で言えば勝手に発砲したようなものだし。

まあ、自分の身を守るためだったというのもあるから、始末書1枚程度で済まされるでしょう。

「さて、それじゃあそう言うことだから。今日は一旦帰ってもらおうけど……」

「はい。その、ヴィータちゃんをよろしくお願いします……」

「……シャル、ごめん」

部屋から出て行くこととしたシャルに向けて、ヴィータがその言葉を投げかけた。

その言葉は、痛々しいくらいにか細くて。

シャルは、それに言葉を返すことなく、部屋を去った。

「さて、ヴィータ。とりあえずあなたは今日一晩ここに泊まってもらうことになるけど」

「……どうとでもしろよ」

「喧嘩腰ね」

まあ、それも仕方ないと言えば仕方ないか。

後は後藤さんに連絡入れて、なのはを家に帰して。

事情聴取はその後かしらね。

「とりあえず、サタン」

「憤怒のサタン、ここに」

「この子を仮眠室へ案内してあげて。それと、この子の監視を七姉妹全員で。1時間毎に交代でね」

「かしこまりました。こい」

「ぐっ……」

黄金の蝶を舞わせて現れたサタンに指示を出すと、サタンはやや乱暴にヴィータを引きずって部屋を出る。

うーん、相変わらずサタンは私以外にはきついわね。

いや、家族にはツンデレだし、そんなことはないか。

「さ、お仕事お仕事っと」

まだまだ、夜は更けない。

「まったく、なぜお嬢様はこんな小娘を……」

「小娘じゃねえ、ヴィータだ」

私、サタンの後ろからついて来る小娘がそんなことをのたまう。
うざりたい。どうしてお嬢様はこんな小娘を……。

「私にとって、覚える価値のない存在だと言うことに変わりはない。
ほら、ここが今日のお前の部屋だ」

「……これが、仮眠室？　なんか豪華すぎねえか……？」

「嫌なのか？　なら物置小屋でも、外に放り出してもいいんだぞ？」
「だ、誰もそんなこと言つてねえよ！」

怒っているような様子で仮眠室へ入っていく小娘。

ふん。お嬢様のお言葉でなければこんな小娘は外に放りだしてやる
というのに。

そもそも、お嬢様は何かと甘すぎる。

もちろん、その甘さもいとおしいのであり、私たちはお嬢様の全て
を受け入れるほどの想いを持っているが。

私だけじゃない。ルシ姉もレヴィア姉も、ベルフェモマモンもベルゼモアスモも、全員がお嬢様に親愛以上の感情を抱いている。

「明日の朝までは私たちが交代で監視する。妙な素振りを見せれば
磔はりつけにしてやるからそう思え」

「……わかつたよ」

不服そうな口調だが、きちんと従って中のベッドに腰掛ける。

この仮眠室も十分持て成し用の部屋として通用するほどの設備だが、基本的にここは誰にも使われていない。

たまにプレシアや忍が簡単に睡眠を取るために使っているらしいが、それならば自分の部屋で寝ればいいのに……。

「じゃあな」

扉を閉め、内部で魔術の発動を封じる鍵を発動させる。

これは例の独房にも使用されている技術の劣化版で、外とのレイラインを絶つことは出来ない。

ただし、新たに魔力を発現させたり、単体で魔力を発している物は封じられるから、実質動きを封じることが出来る。

さて、と。あと1時間か。

私はその場に座り込むと、周囲の音に耳を済ませることにした。

27話 鉄槌の騎士、捕縛（後書き）

グイータの口調とか、どうだったでしょうか？
おかしかったら報告してくださいとありがたいです。

28話 終わりの前夜（前書き）

はい、ガッツリ遅れました。しかも本編はまだ終わってないです。次回で本当に原作は終わるかもですね。既に今回でほぼ終わりみたいなもんですし。

次回かその次でA・S編が終了となるかもです。

そして誤字脱字、誤用も多めかもしれませんが。修正はバイトから帰ってきた後で。

これが今年最後の更新となります。

皆様、よいお年を！

28話 終わりの前夜

さて。

一夜明けた月村邸では、私が朝っぱらから唸っていた。

「むう〜……」

「なにやってるの、お姉ちゃん？」

「あ、ブルーベル」

部屋に入ってきたブルーベルは、私の隣に座ると腕にぎゅっとしがみついてくる。

ああもう、相変わらずくあわいいでございますね。

つて、そうじゃないな。

なに悩んでるかと言うとだね、ヴィータの処遇をどうするかを悩んでたんだよ。

だって、知りたいことは全部知ってるし、あのレベルならどうとでもごまかせる。一般人に被害は出てないみたいだから、別にどうでもいっっちゃいいんだけど。

「まあ、なるようになるか」

それに、必要なものは揃ってる。

「ブルーベル、昨日頼んだものは？」

「準備できてるよ」

「よし。それじゃ、ちょっと行ってくるね」

「うん」

寝巻き姿のまま、私は部屋から出る。そのまま仮眠室へ。

そこには、床に座り込んで大欠伸をかましているアスモの姿があった。

「アスモ、ご苦労様」

「あ、お嬢様！ ねね、寝てないですよ！？」

「わかってるわ。不寝番は終わりにしていいわよ」

「は、はい！ それじゃあ、お部屋行って寝てきまあふっ……」

「ふふ、おやすみなさい」

眠気のあまり足取りもおぼつかないアスモを見送って、仮眠室の封印を解く。

さて、あんまりゆっくりしていられないわね。

仮眠室の扉を開けると、そこには。

「……………ぐっすりじゃない」

髪を解き、普通の姿になってぐっすりと眠っているヴィータがいた。暖かい布団に包まって眠る姿は、普通の少女そのものだ。昨日とは似ても似つかない。

なんだか気が抜けるなあ……………。

まあ、お昼過ぎにははやてが来るらしいし、とととと終わらせませるか。

「ヴィータ、起きなさい」

「んう……………、んあ？」

「んあ？ じゃないわよ。ほら、とととと目を覚ます」

軽く頬をはたいて、目を覚まさせる。

結構寝ぼすけさんなのね。

「あ、て、てめえ!」

「起きた? 早速尋問、の前に。とりあえず髪を梳かして身支度整えなさい。凄いことになってるわよ」

「は? ……み、見るなあ!」

すぐさま布団をかぶって、目から上だけをひょっこり出すヴィータ。あ、なんか癒される。

というか、ヴィータってこんな子だったっけ。

まあ、それはともかく。きちんと身支度の整った状態のヴィータを連れて、空いている部屋へ。

「この辺でいいかしらね。さ、適当に腰掛けて」

「お、おう」

促されるままに椅子に座るヴィータ。なんだか落ち着いた雰囲気だけど……、何かあったのかしら。

「で、昨日のことについてだけ。目的と、反省の意思があるかだけ教えてもらえるかしら」

「……はやてが、死んじゃうんだ。魔力が集まらないと、はやての体が!」

「はいストップ。それは昨日シャルマルさんから聞いたわ。というか、あなたもそこにいたでしょうに。反省はしているの?」

「……一応」

一応かあ……。

まあ、ここでははやてからガツンと言っておいてもらえば、とりあえず動きはしないでしょうし。

後はまあ……、後で考える。いい加減だな、私。

「まあいいわ、お昼過ぎたらはやてちゃんが来るから、そのとききつちり怒ってもらうわね」

「うっ……わ、わかった……」

しょんぼりしているヴィータ。とりあえずはこれでよし。

報告書は……、まあいいか。後で考えよう。

さて、お腹が空いたな。まだ朝ご飯食べてないし、済ませちゃうか。

「ねえ、ヴィータ。お腹減ってない？」

「べ、別に減ってなんか」

言葉を遮る様に、部屋にヴィータの腹の虫の嘶いななきが響き渡る。途端にヴィータの顔が赤みを帯び、すっと視線を下に向けた。

「……ちげえからな」

「はいはい。食堂に行くわよ」

顔を真っ赤にしているヴィータの前を歩いて、食堂へ。この時間なら朝ごはん残ってるわね。ちなみに、今は10時半。はい、寝すぎですね。

食堂へ入ると、なのはが食事を取っていた。あ、そういえば泊まったんだっけ。

「なのは、おはよう」

「あ、栞ちゃん！と、昨日の子！」

「ほら、ヴィータ。謝って」

「な、なんであたしが！」

「あの子のデバイスを壊したから。罰がないだけありがたいと思いなさい」

「……悪かった」

不服そうながらも、そう言って小さく頭を下げるヴィータ。うん、まあこれでよし。

「ううん、いいよ別に！ レイジングハートも直ったから！」

「じゃ、早く食べましょうか。ベルゼ」

「はいはい、ただ今お持ち致します！」

呼び出したベルゼは、なぜかコック姿だった。下にはあの制服を着ているみただけで、動きづらくないのかしら。

数秒で、席についた私達の前に料理が並べられ、早速食べ始める。量は多めに見えるけど、食べていると意外とそうでもないのよね。カロリー計算もされているから安心だし。

……えー、まあ。食事中は特に変わったこともなかったし、お昼過ぎまで時間を飛ばしましょうか。

「こんにちは。シャマルさん、はやてちゃん。それと、そちらは？」

食事を終えて少しした頃、エントランスで呼び鈴が鳴ったので玄関の扉を開けてみると、はやてとシャマルさん、そしてピンク色という人間にあるまじき髪色の女性が立っていた。

まあ、確かに赤も凄いとは思っけど、まだ原色だから。それ言ったら家の紫とかどうなん？ ってなるけど。

「あ、私の親戚で、シグナム言います」

「シグナムです」

「こんにちは。月村栞です」

軽く会釈しただけだけど、結構警戒されてるなあ。まあいいや。

「それで、ヴィータは？」

「いるわよ。どうぞ、中に入って」

「お邪魔します」

「お邪魔します」

「お邪魔します」

はやてはシグナムに車椅子を押されて中へ。さて、と。先に結界張っておこうか。

軽く手を動かすと、いつもより強めの結界が形成される。この結界の魔力は私のものだから、特にいちゃもんつけられることもない。

霊脈から持ってくるのが一番なんだけどね。楽だし。

3人を連れてやってきたのは、全員が入れる応接間。中にいるのは、忍姉さん、プレシア、アリシア、アルフ、フェイト、なのは、ブルーベル、そしてヴィータ。アリサやすずか、7姉妹には、別の部屋でモニター越しに参加してもらおうことになってる。

にしても、留守番とはいえザフィーラが不憫だ。実は私も少し忘れていた。

まあ、それも後でいいや。まずは目の前のことに対処するべし。

「全員集まってるね」

「現物は持ってきてきてあるわ。キチンと形にするには、もう一時間いるけど」

「十分よ。調整は後でしっかりやってもらえればいいわ。さて、と。

シヤマルさん、説明は？」

「いえ、まだですけど……」

「じゃあ、ここでパパツと説明させてもらっけど、デバイスは起動させないこと。いいわね」

そう前置きをして、ざっと説明を済ませる。

話した内容は、私達の正体とか、闇の書、もとい夜天の書のこと。夜天の書の内容は、ブルーベルの記録を引き出してモニターに写したから、シグナムたちも驚いていた。さて、と。じゃあ本題に入ろうか。

「それで、はやてちゃん……、めんどいから呼び捨てでいい？」

「あ、うん。ええよ」

「じゃあ、はやての体を治す方法だけど。簡単に言えば、あるわ」「なにつ！？」

ガタツとソファァーから立ち上がるシグナム。

「とりあえず座んなさい。説明するから」

「あ、ああ、すまない」

全く……。

まあ、助ける方法はいくつもあるけど、最も簡単なものはリンカーコア自体を抽出すること。

ただし、この場合リンカーコアが生命維持に関わっていないことが最低条件になるため、リスクが高すぎるので却下。それに、はやての胸に傷跡が残ることになるし。

一番簡単なのは、原作通りの方法だけど……。ま、他にもやり方はあるってこと。

そのために、わざわざブルーベルに記録を掘り返してもらったんだ

し。

「まず、『夜天の書』のことからね。夜天の書は元々、様々な魔法を蒐集するための大容量ストレージデバイスに過ぎなかった。もちろん、それを保護し、持ち主を守るための守護騎士や、蒐集した魔法を管理するための管制人格、最終防衛ラインとも言える防衛プログラムなども存在しているけど、基本的には無害なものだったの」「それが『夜天の魔導書』と呼ばれるようになったのが、この辺りよ」

そうやってプレシアが指し示したのは、モニターに映し出されていた年表の一部。旧暦1年から462年の間をなぞっていた。

「この450年余りの間、ベルカの人々は内乱や他の世界との戦争に明け暮れていたの。夜天の書が作成された当初の目的は主と共に旅をして、各地の偉大な魔導師の技術を収集し、研究するためのものだった。その頃には戦禍も無かったようだからね。だけど、あまりに性能がよかったせいで、戦争が始まってしばらく経った頃、勝利を望んだ一部の上層部の人間によって、最初の改変が加えられた。それが、蒐集した魔法を使用できるようにすること」

プレシアがそこで言葉を区切る。

「それから、夜天の書は夜天の魔導書と呼ばれ続け、主になった者は次々に改変を加えていったわ。尤も、ベルカの者達はそれなりに倫理観もあったから、それほど気味の悪い改変は加えなかったよ。うだけど。せいぜい性能を上げるためにチューンしていたってレベルよ」

「本当に危険な代物になったのは、ベルカが崩壊する寸前。魔法の情報を維持するための再生機能を取り付けられていた夜天の魔道書

が、偶然他の世界の手に落ちてしまったの。そこでベルカに最後の抵抗をしようとして、滅茶苦茶な改悪が施され、現在の『闇の書』と呼ばれる物の原型が出来上がってしまったと言っわけ」

つまり、最後の最後で敵の手に渡ってしまい、そこで闇の書に改悪されてしまった、と。

まあ、ほんとに酷いことになるのはこの後なんだけど……、まあその辺は後で話すか。

プレシアとブルーベルが一通り説明を終えると、シグナムとシャマル、そしてヴィータは表情を曇らせて俯いていた。

「だけど、古代ベルカの間人が再生機能を取り付けたとき、それを消去するためのバックアップデータも取っておいた。毒を造るなら解毒剤も一緒に造るように」

「私の内部に保存されている夜天の書の原典。それを使用して、闇の書のバグを修復することができる」

そう言つて、ブルーベルは自分の胸を指差す。

それを聞いたシグナムは、俯かせていた顔を上げてブルーベルを睨み付けた。

「……有り得ない。ならば、なぜ貴様は何百年と言う年月の間、私達の前に姿を現さなかった!? 　なぜ何度もあの苦しみを味あわせた!？」

「そんなの知らないよ。私だって、お姉ちゃんと会う前の記憶なんてないんだから。あなた達が苦しむことを見ず知らずの私が望んだとでも思つたの?」

「しかし……!」

「……シグナム、もう止め。ここで怒つてもしゃあないやろ。シグナム達がどれだけ苦しんだかは私にもわからん。せやけど、今そん

なこと言っただって何にもできひんやん」

そう言っつて、シグナムの肩を抱くはやて。なんか、その年にして悟っっちゃってる感じが出てるんだけど。まあいいか。

「で、話を戻すけど。その修復を行うためには、まず管制人格を叩き起こして貰わないといけないの。管制人格はバグにも近い位置にいるみたいだし、内部に干渉するためにも必要なのよ」

「管制人格の起動には400頁分の魔力と、主であるはやてちゃんの承認が必要ですけど、まだそこまで魔力が集まっていないんです」「それも問題ないわ。とりあえず、はやてはこっちで身体検査を受けてもらって、その間に蒐集を済ませてしまいましょうか。その間の負担の軽減も考えてあるわ」

そう言っつと、ヴォルケンリッターの3人はぽかんと口を開けてこちらを見る。

ま、ちよっとね。

……忍姉さん、全然喋らなかつたな。

それから5時間ほどがたち、日も暮れた頃。はやては苦い顔をして食堂のテーブルに突っ伏していた。

「はやてちゃん、どうしたんですか？ そんな顔して」

「あ、シャマル。いや、お薬飲まされたんやけどな……、むつちや苦くて」

「それって、栞ちゃんの作った物ですか？」

「ううん、プレシアさんの作った奴やって。なんか、青く透き通ってて綺麗やったんやけど、味と見た目は反比例するんやな」

そう言っつて、水を口に含む。

はやてが飲んだのは、と言うより飲まされたのは、コア・エネルギー回復薬。大分痛めつけられていたリンカーコアを修復するために飲まされたのだが、飲まされた側から言えばあんなもの2度と飲みたくないレベルの代物だ。

しかし、はやて自身アレを飲んでから体の調子がいい。それも今までより遥かにだ。

「でも、こつちも算段がつかしましたよ。後は明日に持ち越したそうですけど」

管制人格を起動するのに必要な400頁分の魔力。まだ200頁余りしか集まっていないのに一体どうするのか。その答えは、数ヶ月前に月村家が手に入れたロストロギアだった。

ロストロギア、ジュエルシード。何万分の一という魔力の開放だけで軽い次元震が起きるほどに高濃度の魔力を溜め込んでいるそれから魔力を蒐集すれば、残りの頁は一瞬で埋まるだろう。問題は、66頁全てを埋めてしまうと、作業時間が暴走までのわずかな時間に著しく限定されてしまうこと。

その微調整も含め、残りの作業は明日へ持ち越されることになった。

「……終わるのね、やっと」

ちなみに、ヴィータはキッチンとはやてにも怒られ、割りわきと和気藹々あいあい

とした空気を醸し出していた。

「……どうする」

「あの月村という小娘、人とは違う感じがする」

「私達と同じなのか？」

「いや、違うだろう。汚らわしいバケモノめ、ことごとく邪魔してくれる」

「父さまと私達の悲願達成は目前だ。これ以上邪魔をされて溜まるものか」

煌々と月の輝く晩、使い魔は哀れなほどに無知であり。

全てが終わる日の前夜、静かに悲しい命が芽吹いていた。

28話 終わりの前夜（後書き）

さて、色々フラグ立てましたが、次回で回収しきれるかどうか。
前書きにも書きましたが、連作の更新は今年はこれで終わりです。
来年度からも頑張っていきますので、どうぞよろしく！
それでは来年まで、シーユーアゲイン！

29話 佳境へ(前書き)

皆さん、あけましておめでとございます！

といつても、既に一週間以上経ってるんですけどね。

で、この話は実際繋ぎです。短いです。

あと2、3話ぐらいでA's編終了だと思つので、もうちょっとお付き合いくださいます。

誤字脱字のご指摘があった場合は、修正できるときに修正します。

眠い……。

29話 佳境へ

翌日。

うちにしては珍しく、朝早くに珍しく訪問者が来た。

「はいはい、どなたです、か……?」

「あー、その、久しぶりだな」

「……なんでいんの?」

「仕事だ。ちゃんとそつちの上から許可はもらってるぞ」

そう言つて苦笑いを浮かべたのは、クロノ・ハラオウン。8ヶ月ほど前、私達がフルボッコにした管理局の執務官だった。

ただ、今の彼からあのとときの高圧的な態度は感じられない。どころなく、好青年な雰囲気が出てくる。

「一応、近所に越してきたから、引つ越しの挨拶にと思ってな。本当はもう少し早く来るつもりだったんだが、よくよく考えれば君の家も知らないって事に気付いて、魔術課に問い合わせるまで少し掛かってしまったんだ」

「そうだったの。まあ、立ち話もなんだから上がんなさいよ。お茶ぐらいは出すわ。いい具合に話もあるのよ」

「……君の言い方だと、とても嫌な予感しかしないんだがな。お邪魔させてもらうよ」

苦笑いを強めながらも、その声は暖かい。本当にあの偉ぶっていた執務官なのか、少しだけ疑ってしまいそうになるほどだ。

中に招き入れると、その足で食堂へ。今日はなぜか私が早起きしてしまつたから、今の食堂にはベルゼの姿もない。その代わりに、ついさっき淹れたばかりのコーヒーの匂いが漂っている。

長い食卓の端の方の席に座るよう促すと、その足でコーヒーメーカーからサーバーを取り出して、棚に入っていた自分用とゲスト用のコーヒーカップに注ぐ。

「はい、コーヒー。何か入れる？」

「じゃあ、ガムシロップはあるか？」

「はい、どうぞ」

「ああ、すまない」

手馴れた手つきで袋からガムシロップを2つ掴むと片方を渡す。ついでに隣にあったミルクの袋からも1つ取り出し、自分のコーヒーにその両方を注いだ。じわあっと、あるいはぼやあっという効果音が付きそうな具合に、ミルクとガムシロップがマドラーで攪拌されていく。やっているのは私だけだね。

丁度、中央に渦が出来たところでマドラーを取り出し、空になっているサーバーの中に入れておく。両方洗い物だし。

「美味しいな」

「ありがと。自分で淹れたのは1年ぶりだったんだけどね」

純粹な称賛にそう返し、1口飲んで喉を潤す。

最近忙しくて、あまりコーヒーを淹れる機会もなかった。と言っても、私はあまりコーヒーを淹れるのが得意じゃないんだけど。

「さて、と。それじゃ、話といきましょうか。闇の書というロストロギア、執務官なら知ってるわよね」

「……どこでそれを？」

闇の書の名前を出した途端に、クロノの空気が変わる。

今までの穏やかで暖かいものから、執務官としての張り詰めたもの

へ。そして、その中には個人としての感情が混じっているように感じた。

「私達の知り合いが、その主に選ばれてしまったわ。幸い、助ける方法を確立することは出来たわ。けれど、そちらにも色々頼みたいことがあるの。……クロノ？」

「あ、な、なんだ？」

「顔色が悪いわよ。どうしたの？」

「……いや、ちょっとな。闇の書には、個人的に因縁があるんだよ」

そう言ったクロノは、コーヒーで喉を潤してからため息を吐く。もちろん、私はその内容も知っている。だけど、こうしてクロノを見ていると、やはり実際にあるその重みは計り知れないものなのだろう。少なくとも、クロノ・ハラオウンと言う少年にとっては。

「……そうだな。君には話しておこう。僕と、そして母さんにも繋がる、11年前からの因縁を」

「無理して話すことはないのよ？」

「いや、話させてくれ。もし闇の書の主を救えるのなら、これも1つの大切な情報でもある」

そう言つて、クロノは残ったコーヒーを、熱さを感じさせないほど勢いよく飲み干すと、口を開いた。

「11年前。とある管理外世界でロストロギア反応が感知された。それが、何度も次元世界の崩壊を招いているロストロギアである闇の書であることが確認され、僕の父親であるクライド・ハラオウン含むクルーの搭乗した次元潜行艦隊がそこへ向かったんだ。結局、闇の書は暴走してしまったものの、艦隊によってそれは鎮圧され、闇の書は無事回収された、かに見えた」

そこで言葉を切り、クロノは1度大きく息を吐く。予想以上に昔話に疲れを感じているのだろうか、軽く首を回してから再度口を開いた。

「だが、沈黙していた闇の書は突如として息を吹き返し、そのまま闇の書を積んでいた艦、『エステリア』の全機能を奪取、挙句の果てにアルカンシエルのコントロールまで奪われてしまった」
「アルカンシエル？」

「大型観戦に搭載される魔導砲だ。エステリアは、指揮していた艦以外に唯一、艦隊の中でアルカンシエルを搭載していた艦だったんだが、それが裏目に出た。アルカンシエルの発射する弾自体に攻撃性能は皆無だが、着弾から一定時間経過後、その着弾地点から百数十キロを空間歪曲と反応消滅で殲滅させる。その砲身が他の艦隊へと向けられ、何とかそれを抑えていた僕の父は、他のクルーが艦を脱出した後も状況を指揮官の乗った艦へと伝え続け、そして、その艦の放ったアルカンシエルによって、消滅した……」

言い終えたクロノは、軽く目を閉じると、ぐつと歯を噛み締める。彼にとつて、これはそれほど大きなことなんだろう。家族の死は、私は未だ体験したことがない。他者を死に追いやったことと、自身の死は体験したが。

「……恨みが、あるのね」

「そう、だな。ああ。僕の中の感情を表現するなら、それが尤も適しているだろう。最近になって君に会っていないければ、すぐに破壊プランを立てていたところだっただろうな」

「でも、その恨みももう終わりにして欲しいの。身勝手な話で、あなたからすれば納得いかないでしょうけど、これで全て終わるの。お願い」

その言葉に、クロノは小さく呻く。

「それは、少し難しいな。僕自身、どうするべきなのか見当もつかないことだ。だが、被害なく闇の書の事件が終末を迎えられるというのなら、協力は惜しまない」

「そう。……私のプランでは、そちらとの協力も間違いない必要よ。実際に動くのはこちらだけど、後々を考えてそちらとの交友も、とりあえずあったほうがいいかもしれないし」

とはいえ、うちのトップは管理局嫌いだからなあ。私もそんなに好きじゃないし。

けど、短いけどこうして話してみて、人は変わるものだ実感もした。一応、ラインだけは保持していた方がいいか。それに、否応なくこれから関わることになるかもしれないんだから。

「わかった。とりあえず、僕は一旦戻るが……。会議か何か、開ければいいんだが」

「それなら、私達の島へ招待するわ。ちょっと季節外れだけどね。午後にも招待状が届くと思うから、自宅で待機していてくれる？」

明日の朝方には出発するから」

「ああ、わかった」

私達の島、つまりは【魔女】が会合の地に使っているあの島。

あそこの所有者はいない。一般人は入れないように意識を誘導する結界が張られているけど、私達のような【魔女】ならば特に問題はない。

「それじゃあ、また明日」

「ああ。それと、以前は、すまなかった」

そう言つて頭を下げ、それからがしがしと頭を掻きながら去つていくクロノ。

形式ばつたものではなく、ああいった彼なりの謝罪はそんなにしたことがないんだろうか。妙に気恥ずかしそうだった。

まあ、許すも何も、別にそこまで根に持っているわけじゃないんだけど。それを伝える前に、クロノは急ぎ足で去つていった。

今の時間は、7時過ぎか。もうそろそろ皆起きだしてくるかな。

そう考えながら、私は小さく伸びをする。今日も、やることはたくさんありそうだ。

「た……け、て」

声が、聞こえる。

か細く、酷く臆病そうな、それでいて何かを憎んでいるような、矛盾を孕んだ声。

「たす、け……、お……が、い……」

それは、徐々に大きくなっていく。

それと共に、視界を覆っていた霧もやが晴れていく。そうやって初めて、自分の視界が白く染まっていたことに気付いた。

「たす、けて……」

視界が開けたそこには、巨大な本があった。それを本と形容してもいいものか、それすら疑問になってしまふほど巨大で、同時に異質なモノ。

その本だけかといえ、そうでもない。本その他には空間だけしかないが、その本自体にふと違和感を覚えた。

(……あれ?)

声が出ないことも気にならない。

心の中で感じた違和感は膨れ上がっていき、そこになかったはずの足を創り出していった。

創り出された素足で白い大地を踏みしめる。ひんやりとした感覚すら、そこにはない。触れているのかどうかさえあやふやな大地を歩き、少女は一步、また一步と本へ近づいていく。

「……来て、くれた」

視界いっぱいの本が広がるほど至近距離に近づいたところで声が聞こえ、少女は半ば自動的に動かしていた足を止める。明るめの長く青い髪が、ぱさつと背中打ち付けられてばらける。

巨大な、とてつもなく巨大な本のその最下。そこに、一人の女性が貼り付けにされていた。

十字架にも見えるその姿は、細部を見れば酷く残酷なもの。

両の手は、その手の平の中心に打ち込まれた太い杭によって打ち止められ、白いはずの大地を、その足元だけ深紅に染めている。

両足は、踝の真下の位置で鈍色にびになった環わによって強固に留められ、その環自体も両隣にぴったりと打ち込まれた杭に固定されているため、身動きが取れないようになっていいる。しかも、その位置は大地

よりもほんの少し上、力を抜いた途端に踝くるぶしが環に引っかかり、鈍い痛みが走るようになっていた。

更に、両手に打ち込まれた杭に自重分が加わってしまい、両手が裂けるかのような痛みが走る。

しかし、踝の痛み自体は耐えられぬほどではない。それにより、無意識のうちに踝の痛みを選択してしまい、両手の痛みを避けるようになっていた。

髪の色は白い大地にあって漆黒をしつかりと主張しており、透けるような白い体と相まって恐ろしいほどに美しさを増していた。

外気に素肌を晒している、というよりも完全に何も身に纏っていない彼女の顔は、痛みに呻くことも忘れたような無表情を晒していた。

「……ぬしの、名は？」

そんな彼女のカサついた唇が動き、青い髪の少女にそう尋ねる。

「えっと、ブルーベル。ブルーベルだよ」

少女は一瞬動揺したものの、すぐに軽く息を吐いて言葉を発した。その言葉を聞いた女性は、唐突にその伏せた瞳から涙を流しだす。もちろん、なぜ涙を流すのかわからない少女は、何を言うでもなくただ困惑してしまふ。

「ようやく、この長い呪縛が消えるのか。蒼の記憶の者よ、ぬしの主に伝えてくりやれ……。わっちを、助けて欲しい、と」

「あの、貴女は……」

そこまで声を出して、少女の、あるはずのない記憶の水底から何かが浮かび上がってくる。

ぬしの名は、アクエス。覚えずともよい、ただ、感情だけは忘れなくてくれ。

それは、いつのことか。

漆黒の長髪を持った白衣の女性は、自身の白衣を小柄な少女に被せてそう言った。

それを思い出すと同時に、今度は少女の動きが止まる。自分の意志で体が動かなくなっていた。

それと同時に、巨大な本がぐんぐんと遠ざかっていく。

「あ、ま、待って！」

その声を上げて、加速は止まらず。

いつしか、その視界は最初と同じように白く染められてしまっていた。

「ッ！？ ……夢？」

がばつと布団を押し上げるようにして跳ね起きたブルーベルは、水玉模様の青いパジャマが自身の汗をたっぷりと吸い込んで肌に密着していることに気付き、胸の中心辺りを摘まんでパタパタと風を送り込む。

あの夢はなんだったのか。

そもそも、本当に夢だったのか。

ぐるぐると頭の中でそんな疑問が回っている。

ただ、自身の記憶の底に、アクエスという名前が残っていることだけは確かだった。

「助けて、か……」

そう呟き、ブルーベルはベッドから降りる。

その目はどこか遠くを見つめているようにも見えた。

物語は加速する。

終焉を齎^{もたら}してきた書に宿るものは、そこに何を見出したのか。

29話 佳境へ（後書き）

はい、ということではいかがだったでしょうか。

クロノと闇の書との因縁は、きつとすぐに切れるものではないと思います。私自身がこういったものをもっていないので、なんとも言い難いですが。

話の流れに違和感があるかもしれませんが、こうした方がいいなどのご指摘があれば是非お願い致します。

最近はお話作りから遠ざかってたので、ちょっと不安です……。

30話 小さな波乱(前書き)

きっかり1週間です、はい。

そしてまだ終わっていないと言う。

ともかく、どうぞ。今回は【魔女】も少し出ます。

あ、今回から最初の一文字開ける様にしました。

本当なら行間も詰めるべきなんです、横書きで読む人たちは空いているほうが読みやすいでしょうし、そこはそのままです。

30話 小さな波乱

「ここで、合っているんだよな……」

呟いて、僕は足を止める。

あの翌日、僕は母さんとエイミィに彼女から聞いた話を伝えた。その上で、僕個人としては彼女に協力したい、とも伝えた。

母さんは少し悩んでいたようだけど、エイミィは「クロノ君がしたいなら、そうすればいいじゃん!」とのこと。まあ、あの明るさに助けられたことも多いから、なんとも言えないんだが。

とにかく、そういう経緯で僕は今ここにいます。んだが……。

「これが、迎えか?」

「お、クロ助。もういたのか」

「奇妙なあだ名で呼ぶな。それで、なんだこの馬鹿でかいクルーザーは?」

「月村家所有の個人財産ですが」

「要するに君の物つて訳か。相変わらずだな」

「いいから乗りんしゃいな」

彼女、栞に促されてクルーザーに乗り込む。外で見るよりも中は広いんだな。

などと感想を考えると、突然体のバランスが崩れる。な、なんだこのスピードは!? 明らかにクルーザーの限界を超えているだろう!?

「ああ、加速系魔術のちょっとした応用だよ」

目を輝かせて言わないでくれ!

つと、なんだか気分が悪い……。いきなり船酔いか？ だが、この程度は潜行艦で慣れている筈なんだが……。
いや、だがこれほどのスピードはさすがに出ないぞ？ というか出さない。出せば各部位に負担が掛かりすぎるからな。

「……おい、さすがに少し気持ち悪いんだが」

「あと4、5分で着くから我慢してねー」

そう言われ、とりあえず座り込む。結構きついな……。

ちなみに、デバイスは持つてきてある。招待状にデバイスを持つてくるようにと記載があったからな。

僕のデバイスか？ S2Uというストレージだ。インテリジェントも作ってみたいんだが、時間もなし、仕事をするにはこちらの方が楽なんだ。インテリジェントは使いこなすまでに時間がかかるだろうし、僕にはその練習時間もあまりないからな。

しばらくポーっとしていると、クルーザーが走り始めたときと同じように速度を落とす。何とか無様な姿は見せずに済んだか？ いや、無理か。

「さ、降りて。着いたわよ」

「あ、ああ」

少しだけぐらぐらするのを堪えて船から降りると、彼女の後に歩いて歩いていく。

島は随分と自然が豊富なようだったが、一応道路くらいは整備されているらしい。その道路もアスファルトではなく、土を均ならしたもののようだったが。

少し歩くと、妙に長い車が見えた。確か、アレはリムジンだったか。ミッドにもああ言ったタイプの車は無いこともないが、僕等はほとんど見かけないな。まだメジャーではないのだろうか。

「屋敷までお願い」
「承知致しました」

彼女と共に車に乗り込むと、彼女が言った。その言葉に応じるように車が動き出す。今度はクルーザーのようにむちゃくちゃな加速もなく、10分ほどで止まる。

車から降りると、車は元来た道を戻っていった。

「ここが、そうなのか？」

「ええ。いいところでしょう？」

目の前にあるのは、巨大な屋敷。所々に微細な彫刻が施され、奇妙な魔力が点在しているように感じられる。これは……、彫刻自体に魔力があるのか？

「貴方達の魔法文化とはまた違った文化、知っておいて損はないわよ」

「そうらしいな。どれもこれも興味深い……。以前の僕なら、気にも留めなかっただろうが」

「さて、中に入りましょうか。もう待っている筈だから」

「待っている？」

「ええ。今回の協力者よ」

ということとは、同じ【魔女】である可能性があるか。妙に緊張するな。

中に入ると、暗い室内に次々と蝋燭の炎が灯る。これは、凄いな……。

「これは……」

「この程度で驚いていたら限がないわよ。さ、こつちよ」

僕と栞、2人分の靴の裏が石の床を叩く音が響く。廊下だけでも随分と広いんだな……。

しばらく歩くと、目の前にまた大きな扉が現れる。それを栞が軽々と片腕で押し開けると、そのまま中へと入っていく。

中は随分と広い。目に焼きつくほどに赤い絨毯と、その中央に乗っているテーブル。椅子は左右に4つずつ、両端に1つずつ配置されている。

疑い深くなっているのだろうか、ちよつとでも動かせば畏が発動しそうな感じだ。疑心暗鬼はよくないな。

「あ、両端の椅子には触れないでね。それは特別だから、登録している人間以外が触れると、触れた人間から全ての酸素を奪い去るわよ」

「それを早く言ってくれ」

危うく触れる所だったとは言わずに、ちよつとだけ伸ばし掛けた右手を引っ込める。

「というか、なぜ酸素を抜くことなんだ？ 確かに殺せるだろうが……。片付けるのに邪魔じゃないのだろうか。」

そんな僕の思考を放置して、彼女は左側の一番奥の席に座った。

「前に座って頂戴」

「あ、ああ」

とりあえず示された椅子に座る。どうやら命の危険はないらしい。さっきあんなことを言われたばかりだから流石に恐怖心があるんだが、これでビビっていると思われても癪だ。

そう言ったことを表情には出さずに椅子に座り、横を向いて驚嘆

する羽目になった。

「こんにちは、執務官」

「なっ、いつから!？」

「イリアに常識を求めちゃ駄目よ。イリア、紹介するわ。今回の件で事後処理に協力してもらおう予定の、クロノ・ハラオウン執務官」

「【魔女連盟】の長、イリア・ステイティフィルです。よろしく」

突然現れた長い銀髪の女性がそう言って会釈する。

一体どこから出てきたんだ……。この部屋に入ってから、ほとんど端の椅子は視界に入っていたのに。

「クロノ・ハラオウンです。今回は対等の協力と言うことで力をお貸しします。そういうことでよろしいのでしょうか？」

「ええ。栞からある程度の話は聞いています。ただし、お互いの領分を侵すことなく仕事を済ませましょう。お互い、嫌な思いはしたくないでしょう?」

「……まあ、そうですね」

間違いない。この女性は僕のことを嫌っている。いや、忌避していると言うべきか。

過去に何か嫌なことがあったのか、それとも僕が知らないだけで何か失礼なことをしているのか。可能性なんて、挙げ始めれば限がないのだがな。

「イリア、そう喧嘩腰にならないであげて。彼も1度やられて懲りているから」

「栞……。でも、私が人を嫌いなのは知っているでしょう?」

「そうだけど……。まあ、とりあえず協力は出来るってことでいいのね?」

「ええ。そこは問題ないわ」

同じ組織内でも親密な関係なのか、栞とイリアさんはそう言葉を交わしている。

……なんだか、本当の姉妹のようだな。いや、普段の彼女を知っているわけじゃないから、僕の勝手な想像なんだが。

結局、その後は特に話をすることもなく解散になった。僕としてもあのギスギスした雰囲気は苦手だからな。

ともかく、後は仕事に専念するだけか……。どうなることやら。

「ごめんなさい、嫌いなものを知っていたのに」

「いいのよ、栞。地球を守るためだもの」

クロノを送り届けた後、栞はもう1度島に戻っていた。

栞の表情は優れない。元々【魔女】としても仲間としてもイリアとは仲がよかったため、その彼女の嫌なことをしてしまったことに罪悪感を感じていた。

人を傷つけて罪悪感を感じることはないが、身内の嫌がることをしてしまうと罪悪感に苛まれる。それが栞の歪んでいるところだとも言えるだろう。

2人が寄り添ってお互いの熱を感じている、と。

「ちょっと待ってえー!」

「きゃっ!?!」
「おっと?」

突然声が響き、栞とイリアの間に割って入るように床から女性が出てくる。金色の髪と修道服が目立つが、本来修道女が身に着けているべきロザリオは無残にも折り曲げられ球状になっていた。

「マリー?」

「あ、ご、ごめんなさい栞ちゃん! なんだかお姉様といい雰囲気だったから、つい……」
「ついつて……」

慌ててマリーはその場から退くと、わたわたと栞に頭を下げる。その様子を微笑ましそうに見ていたイリアは、ふっ、と小さく笑みを零した。

「……少しくらい、頑張ってみましょうか。私も、いつまでも子供ではられないものね」

2人には聞こえないほど小さく。けれど、そこに込められた意味は、きつと誰にも理解できないだろう。

彼女の昔語りは、まだ先の話。

一方その頃。

「襲撃よ！ 数は不明、魔術師と魔法生物の混成部隊よ！」

「7姉妹は各所に散って。私はアリサ、すずかと迎撃に出るから」

「「「「「「承知しました」「」「」「」

栞が出かけた後の月村邸は、謎の集団からの攻撃を受けていた。

戦闘用に思考を切り替えたブルーベルは、すぐさま指示を飛ばす。その姿は、どこか栞にも似ていた。

そこへ、テストタロツサ一家もやってくる。服装からして丁度着替えたところだったらしく、魔術兵装はアリシアが申し訳程度にしているぐらいだった。

「ブルーベル、これは一体？」

「襲撃だよ。どこかの馬鹿がここにね。プレシアは忍お姉ちゃんと管制をお願い。アルフとフェイトは遊撃、アリシアは私と来て」

「わかったわ。皆、気をつけるのよ」

「わかってるさ。フェイトには指一本触れさせない」

「うん。行つて来ます、母さん」

「心配するなら襲撃してきた連中をした方がいいんじゃないかなー？」

口々にそう言つて、プレシアは忍がいる監視モニター室へと短距離転移で移動する。邸内であればマーカ―はそこかしこに存在するため、魔力を通すだけで移動できる。もちろん、これは非常時にのみ使用可能で普段は封印処理が施されているため使えないが。

栞曰く「歩くのも立派な運動」らしい。

「バルディッシュ、起きて」

「Yes・ma・am」

フェイトの声ですぐさまバルディッシュがセットアップを終える。その服装は、以前までの薄着とマントではなく、各関節に流線型の装甲が取り付けられた軽装の騎士のようなものだった。

これは、プレシアの思案した新しいバリアジャケット。装甲を薄くするのではなく、あえて取り付けることによって加速させる形。流線型の装甲は、1つ1つが風を受けて加速装置の役割を果たすように計算された形状を取っており、飛べば飛ぶほどその速度は上がる。

更に、バルディッシュは進化していた。

「カートリッジシステム、起動」

「Yes, ma'am」

バルディッシュのその声と共に、バルディッシュの形状も変化する。

何もなかった黒いパーツが1度取り外され、そこに回転式のシリンドラーが収められる。

「アサルトモードへの全移行工程、完了」

「不具合は？」

「現状確認されません」

「よかった……」

軽く2、3度手元で回すと、満足そうに微笑む。

ブルーベルが情報を提供し、プレシアが機構作成に携わったカートリッジシステム。その第1号機がバルディッシュだった。

「上手く出来たみたいだね」

「うん。ありがとう、ブルーベル」

「作ったのはプレシアだから。それじゃあ、気をつけて」

「うん。行こう、アルフ」

「おう！」

新型のバルディッシュ、バルディッシュ・アサルトを手にして、アルフと共に姿を消すフェイト。後には、アリシアとブルーベルだけが残される。

「それで、ブルーベル。私はどうするの？」

「私と一緒に迎撃。すずかとアリサの2人と合流するよ」

「りょーかい！　じゃ、魔術は必要だよね」

そう言っつて、アリシアが左腕を大きく振るう。それだけで、アリシアの纏う気配は常人のそれを超えていた。

獰猛な笑みを浮かべながら、アリシアは更に横に伸ばした左腕を、何かを抱きしめるように体へ寄せる。その瞬間、アリシアを中心として部屋全体にくすんだ金色の風が吹き荒れる。

フェアリー・ロウ
「妖精の法、倍速スリーカウント」

「早過ぎない？」

「このぐらいが一番楽なのー！」

妖精の法は、アリシアの作り出した加速魔術だ。触れたものの速度を奪い、自分に加算する。さらに、加算した速度は設定によって何倍にも膨れ上がるため、触れれば触れるほどに加速することになる。

風を纏うようにして浮かぶアリシアを見て、ブルーベルも魔力を循環させ始める。

「2人と合流しよう。忍お姉ちゃん、大まかな位置はわかる？」

『2人とも、すずかの部屋で様子を見ているみたいね。今、回線を繋ぐわ』

言い忘れていたが、ここはブルーベルの部屋。流石に姉離れぐらいはしているのだ。

青いウィンドウに接続中の文字が現れたと思ったら一瞬で消え、そこにすずかの顔が映し出される。すずかの後ろで屈伸しているアリサを見て、ブルーベルもやや苦笑気味だ。

「すずか、アリサ。状況はわかってるよね？」

『うん。人数はかなり多いみたいだよ』

「分担していこう。潰したら封印処置してエントランスに送っておいて」

『了解。それじゃあ、後で』

すぐにウィンドウが閉じられ、その直後に爆音が響く。どうやらアリサの攻撃らしい。

あまり破壊して欲しくはないが、仕方ないと自己完結したブルーベルは周囲への警戒を張り巡らせる。

「よし、行こう」

扉を開け、直後。廊下の端の方に数人の人影を確認する。簡単な魔術兵装は身に着けているようだが、その程度ではブルーベルたちの魔術を防ぐことは叶わないだろう。

「一番手もーらいつ！」

言うが早いか、駆け出したアリシアが一気に音速を突破する。その直後、男達は一瞬で木っ端微塵に吹き飛んだ。明らかに生きては

いないだろうと言うほどに粉微塵にされた男達を見て、ブルーベルは小さく溜め息をつく。

アリシアは、ただ跳んだだけだ。だが、速度が音の壁を突き破り、一瞬で極超音速を容易に超えた速度にまで達した物体が自分の皮膚すれすれを通過して無事でいられるわけがない。

その証拠に生じた衝撃波、ソニックブームによって微細な振動を全身に受けた男達は、それに耐え切れずに粉微塵に吹き飛んだ。それだけの話だった。

ちなみに、極超音速はスペースシャトルが再突入するときの速度だそう。むしろ月村邸自体にそれほど被害を出していない辺り、まだ制限しているのだろう。

「私は掃除屋じゃないんだけどな」

「ごめん、やりすぎちゃった？」

「ちゃった？　じゃなくてやりすぎだと思っよ。お姉ちゃんに見つかったらまず怒られるね」

げんなりした様子のアリシアだが、その前にある血溜りがなければ大層可愛らしい様子だっただろう。

そんなことを思案しつつ、ブルーベルは大気中の水分を集めて血を洗い流していった。

12月5日。

本来の時軸では有り得ない事象も、この世界では起こり得る。

【魔女】の不在を突いた襲撃は、襲撃者にとって尤も最悪の方向へと向かっていくだろう。

終末へ向かう道は、集束を始める。

30話 小さな波乱(後書き)

ということ、アリシア音速を超える、の回でした。

え、違う？ まあまあ、そんなことおっしやらず。

この騒動の主犯は、まあわかりますよね。ええ。

次回はほぼ戦闘になるかもです。なると断言は出来ませんが。

ネギアンチ、構想固まってきました。

まあ、魔法使いアンチになるだろうと思いますが。

31話 邸内戦(前書き)

最近一週間更新になりつつあります。

こんにちは、久住です。

今回は一本丸々戦闘です。まあ、色々ありますがとりあえず本編をどうぞ。

31話 邸内戦

頬を銃声が掠めていく。

喜悦を吊り下げて笑う私は次々にステップを踏み、まるで銃声と共に踊っているかのように前進する。

「猛れ　ッ！」

その笑みのまま、私は言葉を吐き出す。眩きほどの言霊は廊下の隅の消えかけていた火種に灯り、再燃の喜びのままに近くにいた男を飲み込んだ。

「大当たりい」

「次、来るよ！」

「おーけー！」

一瞬で黒焦げになった男には目もくれず、私は獰猛な笑みを浮かべて廊下の先を見やる。

襲撃から既に二〇分が経過していた。先ほどの黒焦げ男はさすがに邸内の転移魔術を使用して、エントランスへと送り飛ばしている。

「紅蓮拳、二式！」

その言葉に、青白いほど高熱の炎が虚空から現われる。

舐めるように床を這って私の手足へと纏わりつくが、廊下に敷き詰められた絨毯には焦げ後1つ付かない。もちろん、私の手足も同様だ。数ヶ月にも渡る魔力のコントロールと自主鍛錬の賜物だと、私は知らず知らずのうちに微笑んでいた。

ただ、その鍛錬も満足に出来たわけじゃない。

私の中のもう1人の『ワタシ』は依然として存在していて、まだどことなく自分の存在自体がぎこちないことは感じているのだ。

それでも、こんなときに怖いだなんて、言ってもらえるもんですか。

それが私の思いだ。それに、私個人の面子と言うものだって存在するのだし、今更実戦が怖いなんて言っていていられなかった。

「おいおい、ホントに餓鬼ばつかな？ こいつらぶつ殺すだけで報酬が出るんだから、美味しい仕事だぜ」

炎を手足に馴染ませていると、下卑た声が耳に飛び込んできた。

視線を上げるとそこには、黒いローブを身に纏ってはいるものの欲に塗れた下劣な笑みを顔に貼り付けた、三下臭漂う男がいた。

さっきの台詞を自分に言ったのだと理解した途端、思わず頬が引き攣る。

「すずか、サーチ」

「もう済んでるよ。魔力加工物無し、障壁無し」

後ろから聞こえてくる情報を頭の中で整理しようかとも思ったが、どうせ無駄なので止めておく。どうもここに襲撃をかけた連中のほとんどは、ろくに装備もしていない。

殲滅する立場からすれば楽だからいいのだが、それでも少し妙に感じてしまう。

「おら、行くぜ！」

「遅い」

魔術を使うために振り上げたであろう腕をハイキックで蹴り飛ばし、肩を外してから鳩尾につま先を沈ませる。男は肩の激痛と鳩尾からの衝撃だけで容易に意識を手放した。

これならば二式を発動させることもなかったかと思いつつ、さすがが半ば作業気味に崩れ落ちている男を転送する様を眺める。

『紅蓮拳二式』。名の通り『紅蓮拳』の発展型で、対人戦、ことさら一対一の戦闘に特化した魔術だ。まあ、紅蓮拳の上位互換だと思ってくれば構わない。

この屋敷で全開にすれば廊下は黒焦げになること請け合いなほど術の強度は高いが、その分構築には時間を要した。欲を言えばもう少し術式を弄りたいくらいだ。

「……さて、どうしましょうか」

「他のところも見て回るうか？」

「そう、ね。そうしましょ」

短く言葉を交わした私とすずかは、戦いの痕も残っていない廊下を背にして歩き出す。

お師匠様が帰ってくる前に、片を付けないとね。

一方その頃、私とアリシアは廊下を駆け巡っていた。

もう大半を捕らえたとは思うが、それでも気は抜けない。相手を

見ずに油断してやられるのは最悪だ。三下にもなれない。

「アリシア、何か変なところはない？」

「うーん、特にないと思うよ。知らない魔力は皆小さいし、大きいのは知ってるのばかりだから」

「そっか」

アリシアのその言葉は信用できるし信頼できる。魔力の探知に一番長けているのはアリシアだし。

でも、一体何が目的でここに襲撃をかけたんだろうか。少なくとも、普通の魔術師ならここに襲撃をかけようなんて思わないはずなのに。

そう考えていると、血に塗れた廊下に突然背の高い男性が現れる。何かの制服を身に纏った上に趣味の悪い仮面まで着けていた。

「新手かな」

「例のユニゾンデバイスか。排除対象には入っていないが、お前も生きていられると困る」

……こいつ、私のことを知ってる？

ますます目的がわからない。というかこいつは誰よ。

「死んでもらうぞ」

そう言った直後、仮面の男は大量の魔力弾を展開して撃ち出してくる。

即座に障壁で自分の前のものだけを防ぐが、その代わりに視界は煙で見えなくなってしまう。まあ、別に魔力探知すればいいだけだけ。

「……あつけないな。ユニゾンしていなければこんなものか」

そんなことを言っただけに背を向ける仮面の男。うわ、こいつ馬鹿だ。相手の死体を確認せずに背中を見せるなんて。

「へえ、そうなんだ」

「っ!? なんだとっ」

「遅いよ」

私の声が聞こえて驚いて振り向こうとした仮面の男の胸を、私の手刀が貫く。素肌へばりつくはずの血液は、私の操る水によって弾かれていた。

ずるつと胸から手を引き抜くと、男は支えを失ってうつ伏せに倒れ伏す。どうやらそこまで体を鍛えていたわけではないらしい。

「ぐっ!? つあああああ!!」

念のために倒れた男の手足の骨を踏み潰すと、そんな悲鳴を上げる。こいつ、やっぱり魔術師じゃない。魔術師だとしても、相当程度の低い奴だ。

そんなことを考えていると、男の体が光で包まれていく。何事かと身構えそうになった直後に光は収まり、そこには手足の骨を砕かれて腹部から出血した長髪の女性がいた。

「変身魔法ね……」

とすると、こいつは魔術師じゃなくて魔導師か。色々考えることが出来てしまった。

「アリシア、大丈夫？」

「へーきへーき、このぐらい!」

後ろで腕を振り回して無事をアピールするアリシア。プレシアが鼻血出して倒れるかもしれないよ?

そんなことはともかくとして、とりあえずこれは死なれたら困るな。腹部の傷、というか穴だけは塞いでおこう。

「これは……、なーんだかきな臭いね」

お姉ちゃんの判断を仰がないと何とも言えないけど、とりあえずまずは館の防衛かな。

そう決めた後、無造作に女性の前髪を無造作に掴み上げて顔を上げさせる。苦痛で酷く醜く歪んでいるけど、どうでもいいや。

「ねえ、まだ生きてるでしょ。名前は?」

「……アンタに教える義理は、ないわよ……」

「へえ、まだそんなに強気になれるんだ」

一丁前に信念でもあるのかな。どうでもいいけど、とつと吐いてもらわないと次にいけないんだよね。

さっき踏み潰した場所は腕と脛の辺りだったから、今度は右手でいつか。

「ぎいっ!? つぐああああああ!」

「痛いのが嫌だったら、早く吐いた方がいいよー」

髪の毛から手を離して地面に突っ伏した女性の右手目掛けて、私の左足が落ちる。

ベキボキ、ゴシャ! という音と共に、私の左足が彼女の右手を完全に踏み潰した。あまりにも気色の悪い肉塊になった右手を見て、

アリシアは「うえー」と舌を出してげんなりしている。

「はっ、はっはっはっ……！」

一方の女性はと言うと、なにやら呼吸音が怪しくなりかけていた。あまりの痛みに精神が捻じ曲がりかけてるのかな。

「ねえ、言わない？ 貴方も五体不満足になるのは嫌でしょ？」

「が、はっ……、だ、れがっ」

「そっか」

どうやらまだやられ足りないらしいので、今度は左手を踏み潰す。今度は奇妙な音もせずに一瞬で左手がミンチになった。意外と力が入ってしまったらしい。

「っ！？ ツうあああああああああ！？ あ、が、ひいっ！」

女性は悲痛そのものと言った叫び声を上げて肩を蠢かせる。かと思えば、時折痙攣するようにしてビクビクと跳ねる。身を仰け反らせようとしているのだろうか。尤も、両腕から先は全て潰れているから、身動きなんて取れるわけないけれど。

「ほら、痛いのが嫌だね。だからさ、言っちゃおう？ ね？」

さっきとは打って変わって、彼女の耳元で猫撫で声でそう呟く。

その私の言葉に、女性はピクツと体を振るわせた。

既に表情は苦痛を感じることすら表せないほどになっていた。苦痛を感じすぎて、痛いという感情まで消えてしまったらしい。だが、痛みを受ければそれだけその瞬間には激痛が走り、後からじわりじ

わりとまた痛みが忍び寄ってくる。

「も、やだっ……！ 助け、て……！」

「うん、痛かったね。ごめんね」

とうとう涙を流して助けを請いだした女性の頭をそっと抱き、私はそう言って頭を撫ぜる。全身が小刻みに震えているのは、おそらくジクジクと四肢を苛む痛み of のせいだろう。

（堕ちたかな）

肩越しに薄く笑うと、私はそっと自分の潰した両腕に触れる。回復系の魔術を発動させて、ゆっくりと腕から指先までを撫でていく。彼女の腕は、今頃ぬるま湯に浸されるような心地よさだろう。

私自身が水を扱うこともあって、私は水に縁のある回復魔術が得意だ。流石にここまでぐちゃぐちゃになっているとすぐに全て元通りにはならないが、痛み止めと軽く動かせるようにするくらいはできる。

「あ……」

「これで痛くないよ」

「あ、あり、がとう……」

既に瞳は曇り、吐き出す息は荒い。

両腕からの痛みは止まったものの、いまだ両足からは激痛が伝えられている。だが、女性はそれを口にはしなかった。

「ねえ、名前は？」

「な、まえ？」

「そう、名前。あなたのお名前」

「リーゼ、アリア」
「リーゼアリア。アリアね」

たどたどしく名を告げた女性、リーゼアリアの背中を軽く叩いてから、両足に触れる。触れた場所の神経を麻痺させる医療用の魔術だけど、あんまり使われないんだよね。麻酔で十分だし。だけど、今は役に立った。

その後、アリアを引きずるようにして仰向けに変えると、転送魔術でエントランスに送ることを教えてから魔術を発動させる。

「それじゃあ、また後で会おうね」
「は、はいっ」

震えながらも頷いたアリアに微笑んで、アリアの姿が消えるのを見送る。

ま、こんなもんかな。

「あ、終わったんだ」
「うん、終わったよ。案外あっさり堕ちたから」
「あれだけやられれば、普通ああなると思うよ。ショック死しないだけ凄いなと思うけど」
「まあね」

既に飽きてバチバチと光を出していたアリシアが苦笑いしながら言ったことにそう返すと、小さく欠伸してから探査魔術を館全体にかける。

あと少しかな、とつとと済ませよう。

「で、あのアリアって人どうするの？ 使い魔っばかったけど」
「ん、殺すよ？ 何言ってるの？」
「でも、さっきは優しそうにしてたでしょ？」
「お姉ちゃんに敵対したんだよ？ たっぷり絶望してもらわなきゃ」
「うわぁ」

えげつない。ものっ凄いえげつないぞこの人。

こんにちは、アロシアだよ。

やっぱりブルーベルは悪女だ。しかもしおりん、あ、栞のことね。しおりんのことになると見境無しだから。

まあ、私もフェイトやアルフ、お母さんを守るためだったら何だっつてするけどさ。

さてと。それじゃああと少しか。頑張っつていっつ。

31話 邸内戦（後書き）

うん、ほんとはもうちょっと猫はまともにするつもりだったんだけどね。

こうというのが私は本当に好きらしいです。やばいなあ。

誤字脱字、誤用があれば連絡お願いします。

P.S.

アンチネギ物のネギま次回作は、ディソードが出てくるかもしれませんが。

カオスヘッドの設定のみクロス。

なので、物語は大きく改変されます。とりあえず出せる情報はここまでかな。

それでは、次回まで。

シーユアゲイン。

32話 あっけない終幕(前書き)

邸内戦終了です。が、かなり最後の方グロイですのでご注意ください。
これからは一週間に最低一回は投稿したいです。希望として。

32話 あっけない終幕

「これで、4人目かな」

「なんだ、魔術師って言っても下っ端連中かい」

呆れたようにアルフが言う。その視線の先には縄でグルグル巻きにされた男の人がいた。尤も、意識は既に刈り取ってあるけど。

それにしても、やっぱりこの魔術師達はそれほど実力があるわけじゃないらしい。というか、目的が全く見えてこない。

「アルフ、他に気配は？」

「今のところはないけど、警戒はしておいた方がいいかも。アタシとおんなじ臭いがするからね」

「それって、使い魔がいるってこと？」

「多分」

アルフはミッドチルダ式の魔法で創られた使い魔だ。しかも、今のアルフは母さんと忍さん、そして姉さんの共同研究の成果によって更に強くなっている。そのアルフが、同じ臭いがすると言うことは、おそらくミッドチルダ式の魔法で創られた使い魔がここに紛れ込んでいるということだろう。

でも、一体誰が？ この世界に魔導師は存在していないはずなのに。

思索しながら、バリアジャケットに取り付けられているホルダーからスピードローダーを取り出し、露出したシリンダーへと魔力を充填したカートリッジを装填する。

「いたぞ！」

「っ、来たよ、フェイト！」

「うん。バルディッシュ、臨戦態勢。ハーケンフォームへ」
「Yes, ma'am. Haken Form」

バルディッシュをハーケンフォームへと変更すると、物々しい機械音と共に魔力刃が形成される。

ハーケンフォームは、アサルトになる前のバルディッシュで言うサイズフォームだ。性能が格段に跳ね上がっている上に、扱いやすさも向上しているのだけだ。

「チェーンバインドオ！」

「な、んだこりゃ!？」

出会い頭にチェーンバインドを巻きつけられた男は、当惑の声を上げる。

「いきなりですが、さようなら。バルディッシュ」

「Scythe Slash」

魔力刃にカートリッジ分の魔力を上乗せし、更に魔力刃の強度を増強させる。そして、振り切るようにして魔力刃を投擲する。

円を描くように歪に回転する魔力刃は容易にチェーンバインドを破壊し、そのまま男の肉体に食い込んでいく。と言っても、それほど威力を出せるわけじゃない。出しすぎれば真つ二つになってしまうし。

もの見事に吹き飛ばされ、魔力刃と壁の板ばさみにされた男はあっさりと意識を失う。

「うーん、全然歯ごたえがないな……。模擬戦の方が命の危険を感じただけだ。」

母さんは強いし、姉さんは速いし。私は魔術はあまり得意じゃないみたいだし、あんまり戦闘能力は高くないはずだ。

「転送、つと」

近くにあったマーカーを利用して転移魔術を起動させ、エントラ
ンスへ気絶した男を転送する。

それから少しして、突然目の前に青いウィンドウが開いた。そこ
に写っているのは、母さんと忍さんだった。

「どうしたの？」

『確保はほとんど終了したわ。後は、フェイトたちの近くにいる奴
だけよ』

「わかりました。確保し次第転送します」

『ねえ、フェイト？ 敬語はまだ取れそうにない？』

「す、すいません……。癖みたいになつて」

『う、ううん、いいのよ。ゆっくりでいいから』

私の敬語は半年以上経った今でも直らない。直そうと頑張っては
いるんだけど、なかなか取れてくれないんだ。

アルフは仕方ないと言ってくれているけど、私だって母さんと普
通に話したい。だから、もうちょっと頑張ってみる。

話を終えてウィンドウを閉じると、アルフと自分で魔力探知を掛
ける。確かに、母さんの言う通り魔力反応があった。それもアルフ
の掛けたリンカーコアの探知の方に。

「これ、使い魔のだ。しかもミッド式だよ」

「ってことは、魔導師がいるのかな。ともかく、捕縛しようか」

バルディッシュを構え、アルフのナビゲートで廊下を進む。

さっきの母さんの話だと、他の人はほとんど捕まえられたみたい
だから遭う心配はないかな。そう思いながら進んでいくと、目の

前に人影が見えた。

「フェイト、あいつだ！」

「……」project fate」の成功体か。残念だが、死んでもらう」

アルフの声に気付いてこちらを振り向いた男が言う。

私は、気味の悪い仮面を着けて声も定かではない男を思わず睨みつけてしまう。

「っ……！ なぜそれを……」

あの計画のことを知っているの？ なぜ？

他の次元世界からやってきたことは、これではつきりした。少なくともこの世界の人間じゃない。ましてや人間でもないらしい。使い魔ということは主人がいるはず。それを吐かせなければ。

「project fate」のことを、なぜ知っているの」

「これから死ぬお前には、関係のないことだ」

言葉も少なく、一気にこちらへ近づいてくる。だけど、その程度の速度なら目が慣れてる！

「はっ！」

「っ！？」

ガギンツ！ と高い音がして男の手に嵌められていた手甲とバルディッシュの魔力刃が拮抗する。

ぶつかる前には手甲は嵌められていなかったから、魔法で創り出したのだらう。外から転移させる魔法は、既に新しく調整された結

界が張られているせいで行えないはずだから。

バルディツシュの勢いに圧されて、仮面の男は一步後ろへ下がる。そこへ、アルフが一気に突撃を仕掛けるが、バルディツシュをいなす形の体捌きで避けられてしまう。

でも、この人何か変な感じがする……。何か、違和感みたいな

「逃がすか」

「それはこっちの台詞です」

「チェーンバインドッ！」

アルフに合わせて一気に仕掛けるッ！

一瞬の目配せの後に駆け出した私は、チェーンバインドを狭い廊下で器用に避けた男に向けてバルディツシュで薙ぎ払う。

ガクン、と倒れこむ形でそれを避けられてしまうが、バルディツシュは囷だ。現に、チェーンバインドはまだ消えていない！

『アルフ！』

『オツケー！』

短い念話での呼びかけを捉え、アルフが一切の挙動を見せずにチェーンバインドを方向転換させる。その行き先は、男の背後。

風を切り裂いて突き進むチェーンバインドが男の足元へと命中し、男の手足を完全に捕らえる。

「何！？」

「捕まえたよ、これで逃げられない」

「この程度……！」

「無駄だよ。今のあたしのバインドは、あんた程度の魔導師じゃ絶対に壊せないからね」

以前までのアルフのバインドでは、おそらく縛れなかっただろう。アルフは止めるより破る方が得意だから。だけど、今のアルフのバインドは普通の使い魔に破られるほど柔じゃない。

「さて、と。その仮面を取らせてもらおうか」

そう言っつて、人型になったアルフが雁字搦めになった男の顔に手を掛け、仮面を外す。その直後、男の体が光だし、それが収まるとそこには耳と尻尾の生えた短髪の女性がいた。

そうか、変装してたんだ。それが違和感の正体だ。

使い魔には大体あるはずの耳や尻尾と言った、元の動物を象徴するものが何一つなかった。だからおかしく感じたんだ。

「くっ……」

「話は後で聞かせてもらいます。転送開始」

齒噛みながらこちらを睨みつける女性にそう告げ、私は一番近いマーカーで転移魔術を起動させる。

後は、母さんがやってくれるかな。

それから少しして、エントランスには五体不満足の者が数名と重軽傷を負いながらも五体満足の者が十数名、そして魔導師の使い魔

と思しき女性が2名捕らわれていた。

「ねえ、今回の主犯は貴女達だよね？ アリア」

「は、はい……。ごめんなさい……。！」

「うっん、貴女を責めているわけじゃないの。ほら、涙を拭いて」

それは、一見すれば優しい言葉だった。しかし、普段から接しているアリサ達に見えたのはどこまでも冷酷な笑みだった。

しかし、アリアは縋りつく様にそのブルーベルの足元まで這いついていく。その虚ろな目にはブルーベル以外は見えていないのだから。

彼女はわかっているのだらう。ブルーベルにとって、彼女は塵芥ほどの価値もないことに。

「それで、ロツテさんだったかしら。なぜここを狙ったの？ 魔術師はどうでもいいけど」

ここを襲撃するという無謀を犯したことに呆れ返りつつも、忍はロツテを見つめてそう問う。もとより、魔術師達は生かして帰すつもりはない。

確かに生きるために汚い仕事をしなければならぬ者達もいるが、それを考慮する必要性を忍は一切感じなかった。

よく言えば冷静で、悪く言えば冷酷。忍もまた、今まで【魔女】と関わってきた中でそう言った成長を遂げていた。

「……お前達のせいで、闇の書を封印する手筈が狂ったんだ。お前達なんかに、闇の書をどうこう出来る訳がない！」

「うるさいな、何かを知りもしないくせにほざかないでよ。雌猫風情が」

「ぐあっ……！」

憎々しげに忍を睨みつけていたロツテの頭部を蹴りつけ、そのまま踏み躪るようにしてロツテの上に立ったブルーベルは、まるでゴミか何かを見るような目でロツテを眺めた。

「既に状況は私達の手の中。じゃ、お前達の主人を見せてもらうね」
ロツテを蹴り飛ばしてアリアの方に近づいていったブルーベルは、そう言つとアリアの前でしゃがみこむ。

そこでアリアの頭を固定するように掴むと、右手の中指からアリアの側頭部へと沈めていく。

「あ、ああああ……！」

「ほら、痛くない痛くない」

「がくっ、ぎいっ」

三日月のように唇を歪めながらそんなことを言い、ブルーベルは尚も痛がるアリアの頭に指を沈めていく。

「何、してるの……」

信じられないような目で、ロツテがそれを見つめる。その顔は血の気も失せて蒼白に変わっており、すぐにじわりと両目に涙が浮かび上がる。

「止めて、止めてえ！！ アリアに酷いことしないで！ 嫌！ アリア、アリアあー！！」

泣き叫ぶロツテを余所に、まるで遊ぶように右手を完全に頭蓋骨の外まで沈めたブルーベルは、更に左手も同じようにして逆側から

突き刺していく。

右手と同じようにゆっくりと、苦痛を逃がしてしまわないように。

「うっ……」

ブルーベルの後ろでそんな声が聞こえた。耐え切れなくなったフ
イトが、思わず吐きそうになったのだらう。その割にはアリシア
は平気そうな目で見ているのだが、20年以上あの研究を見続けた
身としては特に感慨も湧かないらしい。

「ア、アア」

「ふふ、いい子」

最早痛みでまともな言葉も喋れなくなったアリアにそう言つと、
まるで聖母の如き微笑を浮かべる。

「ア、リア……？　ねえ、嘘だよ……？　嘘だ、嘘だああアア
ああああアアア！」

「無駄だよ。もうこの子に声は届かない。全ての神経をシャットダ
ウンさせてるから」

人は想像を絶する痛みがもたらされたとき、心を守る手段として
気絶や神経の一時的な不通を起こす。それと同じことが、アリアに
は起こっていた。尤も、アリアの場合は二度と元には戻らないであ
ろうが。

「邪魔だね、これ」

その一言で、ブルーベルの両手が埋まっていたアリアの頭が割れ
た。

頭蓋骨ごと砕かれたその頭部からブルーベルがそつと手を抜き出すと、そこには皺がびっしりと刻まれた脳が乗せられていた。

「や、嫌あ……！　アリア、アリア……！」

「……むごいわね」

「これが魔術師の世界だよ。一寸先は死。皆お姉ちゃんに守られていて気付かないこともあるかもしれないけど」

後ろで呟いたアリサに背を向けたまま、ブルーベルはそう答える。真つ赤な柘榴となったアリアから視線を外し、ブルーベルは脳から情報を引き出すために魔術を発動させる。脳に直接干渉して記憶を読み取る魔術だが、頭蓋骨やその上の肉が邪魔をして生身ではあまり使えない魔術のはずだった。少なくとも、このように脳が露出している場合以外は。

脳から記憶を引き出したブルーベルは、その情報を得て薄い笑みを浮かべる。

「これは……、使えるね」

蹂躪は終わり、集束も終わる。

全ては、【魔女】の掌の上に。

32話 あっけない終幕（後書き）

アリア、死亡。

ロツテは生贄に選ばれました。

グレアムもいい死に方はしないとだけ言っておこうか。

あ、ツイッター始めました。

よかったら眩き見ていつてね。

活動報告にアドレス載せてあります。

33話 忍び寄る死期（前書き）

遅れました、申し訳ない。

新しいPCがきたりとか、検定にいけるいけないで色々ありました。
て。

ついでにちょっとスランプ入っちゃったので、申し訳ないです。
そろそろスカツとする少年漫画的なのも書きたいなあ……。。

33話 忍び寄る死期

「それで、この状況なわけ？」

私が帰ってきたとき、館に特に変わったところはなかった。

しかし、私も設置に1枚噛んでいる結果が作りかえられているとあれば、気になりもする。それをブルーベルに尋ねたところ、曰く有り気な笑みを浮かべて地下室へ連れて行かれた。

そこにいたのは、全身を余すところなく鎖で拘束されて天井から吊るされた、1人の女性。自然治癒を促進する魔法陣の上に吊るされているせいで、常に食い込んだ鎖によって負った傷が回復していく。

鎖自体もだいぶ荒めに作ってあるらしく、擦れるだけで肌には傷を負ってしまうだろう。

「お姉ちゃんがない間に入ってこようとしたから、1人は頭捌いて、もう1人はこうして監禁してるの。魔術師達は後藤さんに引き渡したけどね」

「ふーん……。今度から、もうちょっと攻撃性を強めておこうかな」

こんな風に家族に危害を加える輩が中には入れてしまうのだから、それぐらいしても問題ないだろう。

思考の海に身を委ねていると、ブルーベルが聞き捨てならない言葉を発した。

「で、管理局のギル・グレアムって奴が闇の書を狙ってるみたいだよ」

「……へえ。ここで出てくるか、管理局」

名を聞いた途端に、私の記憶の奥深くに眠っていたものが蘇って

くる。

そうだ、あの事件は連中の不用意な干渉によって面倒な終わり方になったんだ。けど、今回はそうは行かない。

デバック用のデータもあるし、被害も抑えられる。連中が出る幕なんてないんだから、ちよっかい出されたら困るわね。

既に完成人格起動に必要な魔力はジュエルシードで賄ってあるし、後はデバックを済ませるだけだ。

「どうするの？お姉ちゃん」

「そうね……、まずはクロノに連絡かな。向こうと連携して犯罪者の確保に努めるってことで」

「クロノ……？ アンタ、クロノを、ぐうっ!？」

「ねえ、誰が喋っていいって言ったの？ 誰も言っていないよね？」

吊るされている女性が呻くように言った直後、ブルーベルは能面のように感情のない顔で女性の顔を殴りつける。平手じゃなく拳で。対する女性は既に何度も殴られていたのか、数発殴られただけで黙り込んでしまった。

「ふう……。ごめんね、お姉ちゃん。ゴミムシがうるさくて」

「いいのよ、別に。それよりも、その名前はわかるの？」

「えっとね、リーゼロットだったかな。頭捌いた方はリーゼアリアだった気がする」

なるほど、猫姉妹か。理解した。

しかし、よくこいつらがこの結界を敗れたな……。普通の魔術師はもちろん、魔導師が破れるような結界じゃないのに。

誰かがバックにいるのか、それともこいつらが破る専門の魔法を持っていたのか。どっちにしても、グラム提督さんに会ってみないとまずいみたいね。

罪状は……、魔術関係だけでも無許可入界罪と無許可魔術使用かな。

「あんまり痛めつけちゃだめよ、後で使うんだから」
「はい」

ブルーベルにそう言って頭を撫でてから、地下室を出る。
さて、と。まずは家にいるであろうクロノに連絡か。
中空にウィンドウを呼び出し、クロノ達が住んでいるという場所へと通信を繋いだ。向こうは電話だけだ。

『ん、はいもしもし。ハラオウンです』

「もしもし、月村栞と申します。クロノさんはいらっしやいますでしょうか」

『あ、栞ちゃん！？ わ、生声だよ生声。あ、ちょっと待っててくださいね、すぐ呼んできますから』

3 程度のコールの後、受話器から聞こえてきたのは若い女性の声だった。

リンディさんとも違うみたいだし、誰だっけ。名前が出てこないな。

なんて自分の脳と格闘していると、よくわからないメロディーが途切れてクロノの声が聞こえてくる。

『もしもし、クロノだ。どうした？』

「ちょっと厄介ごとよ。闇の書を封印しようとしている者がいるわ」
『なに？ それは本当か？』

「ええ。それも、管理局の重職よ」
『なんだと？』

「ギル・グレアム。それが本星の名前みたいよ？」

その言葉を伝えた瞬間、電話の向こうの雰囲気が変わった。

『……そう、か。それは、信頼できる情報か?』

「ええ。ブルーベルが侵入者の脳から抜き取った情報よ。侵入者の名はリーゼアリアとリーゼロツテ」

『なっ!? そ、それは本当なのか!?!』

「そうだけど、どうかしたの?」

もちろん、私だってそれは知っている。このぐらいの情報なら劣化せずに記憶できているし。

だからこそ、クロノには知らせておかないといけない。私達だって、友好的にできるならしたいんだから。

『……それで、彼女達をどうした?』

「リーゼアリアはブルーベルが頭を裁いて脳を取り出したわ。情報もそこから。リーゼロツテは大分甚振られてるけど拘束中よ」

『そう、か……』

「クロノ、どうかした?」

『……彼女達は、グレアム提督の使い魔だ。そして、僕の師匠でもある』

クロノは、悲痛な声でそう呟いた。

師匠の片割れが自分の知らぬ間に殺されていたことがこんな形で知らされれば、それもそうだろうが。

『……グレアム提督に、会う必要があるな』

「それじゃあ、3時間後にそちらへ向かうわね」

『場所はわかるか?』

「後藤さんに連絡入れるついでに教えてもらおうわよ」

『そうか』

そう言ったのを確認して、私は通話を終える。クロノと連絡を取ってから数時間後、クロノ達の借りている部屋には数人の人影があった。

私こと栞とブルーベル、はやてに守護騎士4名の計7人。こんな非常時じゃ無ければなのは達も連れて行ってあげたかったんだけどね。デバイスの本場だし。

けれど、今回はそうじゃない。確実に詰めていかないといけないから。

後藤さんには今回の事件の黒幕としてグレアムの名前を挙げておいた。どうせはやても保護観察で済むでしょうけどね。念には念を入れないと。

あ、そう言えばリーゼアリアは死んじやってるのよね。グレアムはそのことわかってるのかな？

「これで全員か？」

「ええ、問題ないわ。転送よろしく」

「わかった。それと、不用意に周囲の物に触れないでくれよ」

そんな注意を受けつつ、私たちは魔力光に包まれて地球から姿を消す。

さて、とつとと終わらせに行きますか。

光が収まると、そこには近未来的な設備が盛りだくさん、という訳ではなかった。

なんというか、滑らかな曲線を使ったデザインが多い感じを受ける。次元潜行艦の中なんて初めて入るわね。ちよつと楽しみかも。

ちなみに、リーゼロッテはあの状態のまま黒い縦長の箱に納め、それを王の財宝ゲート・オブ・パレロンに放り込んである。リーゼアリアはとつくに処分したみたいだね。

「ここが、次元潜行艦アースラだ。本局にはすぐに着くから、少しでも準備をしておいてくれ」

「リンデイさんたちは？」

「艦長とエイミイはブリッジにいるだろう。しかし、まさかグレアム提督が……」

「それも、私の生まれる前から地球に干渉していたみたいよ。イリアは地球に危害も加えていないからぎりぎり見逃していたみたいだけど、私たちに手を出してきたからには、その分も含めてたっぷりお返ししてあげないと」

それにしても、提督さんが犯罪行為に走るとは、世も末ね。

しばらく話した後、クロノは仕事をこなすためにブリッジへ歩いていった。例のジュエルシードの一件によって人員も削減されてしまい、運航するにも人を余らせるほど余裕がないらしい。まあ、自業自得だと思つて諦めてちょうだいな。

クロノがいなくなった私たちは、全員で割り当てられた広めの部屋へと入る。中は無機質ながらも目に痛くはない色彩で、それなりに落ち着けそうだ。

手近な椅子に座ると、壁に表示されている時計に目をやる。……ミッド語かしら。読めないんだけど。

「まさか、主はやてを暗殺しようなどという輩がいるとは……。それもすぐ近くにいたのに気付かなかった……！」

「まあまあ、シグナム。そこまで自分を責めなくても」

「だが！」

「シグナム、シャマルの言う通りや。私は別になんかされたわけもないし、怖い思いもしてへん。せやけど……」

そう言っつてシグナムを諫めたはやてだったが、今度は落ち込んだように視線を落とす。

まあ、無理もないわね。自分を養ってくれていたはずの父親の友人とやらが、実は自分を生贄にしようとしていたなんて聞かされれば。

グレアムの方は「ロストロギアという危険な物体を消滅させるために仕方なく行ったこと」という言葉で自分を正当化するのかしらね。関係のない少女を救おうともせず、犠牲にして確実性のないプランの一部に組み込んでいるのに。

「……うん、きちんと話して、なんでこないなことをするのか聞かなあかん。私かて生きとるんや。誰かの身勝手に私を否定してほしくない」

「はやて……」

「ん、私はブリッジの方に行ってみるわ。到着までどれくらいか聞かないといけないし」

「じゃあ、私達はこの部屋を探索してるねー」

ブルーベルは言うが早いか近くの棚を片っ端から開け始める。御茶菓子とか入ってるのかしら。

そんな感想を抱きつつ、私はその部屋から出てさつきクロノが消えた方向へと向かう。魔力の流れ的にこっちで合っているみたい。

しばらく道なりに進んでいくと、丁度大きな扉へと突き当たる。

大きさにこれがブリッジに繋がる扉らしい。

「そう、グラム提督が……」

「はい。それと、アリアはもう……」

「……こっちの仕事はいいから、少し休みなさい。栞さんに当たってしまいそうなんですよう」

「しかし艦長、こちらの仕事はこれでも人員がぎりぎりなんじゃ」

「大丈夫よ、傷心を癒やす時間くらいは作れるわ」

扉を開けると、そこではクロノとリンディさんがそんな話をしていた。扉の開閉音も聞こえていなかったのか、こちらへ注意を向けることもない。

やっぱり、クロノも落ち込んでいるみたいね。もう少し聞いてみようかとも思ったけど、さすがに人が悪いかと思っただけ声をかけることにした。

「こんにちは、リンディさん」

「あら、栞さん。こんにちは。アースラはどう？」

「中々興味深いわね。こちらにはない技術もあるみたいだし」

「ふふ、そう言ってもらえると嬉しいわね。さ、クロノ」

「は、はい……。それじゃあ、また後でな」

「ええ、また後で」

クロノは軽く会釈すると、あまり足音も立てずにブリッジから出て行った。

後には、仕事に励むアースラの乗組員と私だけが残される。

「……ごめんなさいね、リンディさん」

「長く生きていると、誰かを恨みたくなくなるようなことの一つや二つあるものよ。私は慣れているけれどクロノはまだ、ね」

憂いを隠しているつもりなのだろうが、やはりそれは隠しきれものではない。

世界が違って人も人は人であり、親は親であるのだろう。

(まあ、私に親の気持ちはまだ分からないけれど)

心中でそんな事をぼやきながら、私は手近な出っ張りに腰掛けて一息吐く。

「ええ、わかってるわ。とっても」

「そう……」

もう一度ため息を吐き、私はリンディさんの近くに設置された時計に目をやる。

やはりそれもミッド語らしく、理解できそうになかった。

「……くそっ！」

ガツンッ、とクロノは自室の壁を殴りつける。無機質な部屋の壁は音を拡散させることもなくただただそこにあるだけ。

「何故なんだ、グレーム提督……。ロツテ、アリア……」

眩くように、あるいは吐き出すようにして、クロノはずるずるとその場にへたり込む。

家族にも、その姿は見られなくなかった。自分の汚い部分を見られてしまうような気がしたから。

なんとか体を起こすと、少し溜息を零して近くの椅子に座り込む。クロノの部屋はどこまでも簡素だった。

収納用のクローゼットと簡易キッチン、ベッドに執務用のテーブル。他には大した娯楽もない、良く言えば質素な、悪く言えば何もない部屋。

ぼーっと部屋の壁を見つめていると、不意に扉がノックされる。

「……クロノ君、いる？」

「エイミー、か？」

「うん。入っていいかな」

「……ああ」

扉を開けて入ってきたエイミーは、キッチンの戸棚から緑茶の茶葉を取り出すと急須きゅうすに移し、器用にお茶を注いでいく。

2人分の湯呑ゆのみを持って戻ってきたエイミーは、それを机に置くと壁に寄りかかるようにして立つ。

「……栞ちゃんと、少し話したよ」

「……そうか」

「いい子だったよ、すごく」

ぼつりぼつりと、エイミーはしっかりと言葉を紡いでいく。

クロノを慰めようということではなく、ただ事実を伝えようとして。

「私も、悲しいよ。アリアが死んで、悲しいし辛い。だけど、それを菜ちゃんや他の人のせいにしちゃいけないんだと思う」

「わかってるさ。わかってる……」

堪えるようにクロノはそう吐き出す。

その場にいただれが悪いわけでもない。責任を負うべきは、ここにはいない人間なのだから。

その時が来て、自分は執務官として振る舞えるのか。それだけが気がかりだった。

「来ましたね」

「おう。って、何で【魔女】を3人も呼んだんだ？」

朶たちがアースラに乗り込んで本局へ向かっている頃、魔女達が集まる館には、イリアを筆頭に4人の【魔女】が揃っていた。1名ほど【魔女】でない者もいるが。

集まっているのは、【愉快】の【魔女】道楽秋水どうらくしゅうすい、【歪曲】の【

魔女】マリー・エルメラティ。それに、【悲哀】の【魔女】ユリアレイ・トーレス、そして【終極】の【魔女】イリア・ステイティブイル。

【魔女】でない者は、現在道楽の弟子であるユーノ・スクライアのみだが、幸いユーノもある程度鍛えられていたことと、【魔女】が自身で魔力を抑えていたこともあり、魔力に中てられるようなこ

とはなかった。

ちなみに、テーブルには白ワインの入ったグラスが置かれていたが、ユーノだけはオレンジジュースが入れられていた。

「栞から連絡があつたの。地球に使い魔を忍び込ませていた別の世界の人間がいるから、それをひっ捕らえて来るそうよ」

「それって、何やったの？」

「栞さんの家に襲撃かけたらしいです。ついさっき回線で連絡が来たときに聞きました」

「うわっ……。終わつたな、そいつ」

ユリアレイの何気ない質問の答えに、道楽は嫌そうな顔をしてそう零す。

逆に、顔を輝かせているのはユリアレイだった。

「ってことは、拷問してオツケー!？」

「ええ。好きなだけやりなさい。と言つても、まずは栞がやってからだけど」

「ううー、ちゃんと残してもらわないと!」

わくわくしながら言うユリアレイ。その言葉の端々からは待ちきれないと言わんばかりに喜びが滲み出していた。

その様子を見ながら、ユーノは1つだけ心に決める。

この人たちを敵に回すことだけは止めよう。

役者は揃った。

断頭台はすぐそこまで迫っている。

死刑囚がどの最後を迎えるのかは、審判者によってのみ明かされ

るだるじ。

33話 忍び寄る死期（後書き）

はい、次回皆さん心待ちにしております、グラム断罪編です。

クロノにはたっぷり悩んでもらうとして、【魔女】は【魔女】で好き勝手やります。

それでは、シーユアゲイン！

34話 思わぬ横槍（前書き）

まずは読んでもらいたいです。
全てはそれから。

8 / 2 誤字修正。

34話 思わぬ横槍

「ここが本局ねえ。ちよつとシケてないかしら」

「機能美つてわけでもないし、近未来感を詰め込みましたって感じ？」

「言いたい放題だな君達はっ。まあ、僕も少し思っていたりするんだが」

「えーっ？ 私はこっちの方がかっこええと思うんやけど。宇宙船っぽいじゃん」

「さっき乗ってきたじゃない。宇宙も進める船」

がやがやと話しつつ、私達は廊下を進んでいく。

ここは時空管理局本局。目指しているのは、ギル・グレラムの執務室だ。にしても、はやては結構あっけらかんとしている。実は結構な大物だったりするのかしらね？

しばらく歩いていくと、1つの扉へと突き当たった。扉の横に設置されているプレートには、あいも変わらずミッド語で何かが記されていた。

「ここだ」

そう言つて、クロノは2度扉をノックすると、「失礼します」と扉を開ける。

中には、顎鬚を蓄えたおっさんとしか形容しようのない男性がソファーに座っていた。

「クロノ、久しぶりだな」

「ご無沙汰しています、グレラム提督」

「それで、そちらは？」

「月村栞よ。こっちはブルーベル。それと……、八神はやてとその守護騎士達」

そう言った直後、グレアムの表情がぎこちなく変わる。素人には分からない変化だが、私達相手にそれは何かあると知らせているようなものだ。

まあ、とつくに情報は得ているんだけどね。

「久しぶりだな、はやて君」

「え、あの」

「ああ、すまない。私が最後に会ったのはご両親がご健在の頃に1度だけだったから、覚えていないか」

白々しくもそう言って、朗らかに笑う。その様子にはやては眉を顰め、ヴィータに至ってはあからさまに敵意を向けている。

素晴らしい位のピエロね。まったく。

「改めて、ギル・グレアムだ。よろしく」

「……自己紹介はええんです。私を使って何するつもりなんですか？」

「……なんのことかな」

鋭く斬り込むように言い放ったはやての言葉に、思い当たる節がない様子で返すグレアム。しかし、その顔には明らかに動揺が表れていた。

「とぼけても無駄よ。こちらはあなたのやろつとしていることは全て分かっているのだから」

「ほう、どうということかね」

「あなたがやろつとしているのは、11年前の復讐。はやて1人を

犠牲に、他の世界を救うという建前を果たそうとしている」

「残念ながら、心当たりがないな」

「そう。でも、これを見てもそう言えるかしら」

指を鳴らし、王の財宝から黒く長い箱を取り出す。
ゲイト・オブ・パピロン

虚空から物を取り出した私に驚いた様子のグレアムを尻目に、私はもう一度指を鳴らす。すると、箱だけが消滅し中に入っていたものが露になる。

「リーゼロッテ。あなたの使い魔よ」

「な……！？」

「ふふっ、いい顔ね。さて、釈明はいいからついてきてもらいましょうか。重罪人、ギル・グレアム」

「父、様……」

リーゼロッテの服は申し訳程度にしか布がなく、ほとんど千切れている。辛うじて局部は隠せているものの、酷い有様だった。

「使い魔の罪は主人の罪。密入界罪に無許可魔術行使罪、暴行罪に殺人未遂と、更に諸々。たっぷり絞らせてもらっわね」

もちろん、今回は警察の手は煩わせない。邪魔なものは排除するだけだ。

「や、めろ……、父様に、手を出すな……!!」

「うるさいわ。暗闇に戻りなさい」

使い魔の猫がうるさくなってきたので、もう一度箱に詰めて王の財宝に放り込む。

これでよし、と。

「クロノ。今回は目を瞑りなさい。むしろ、これを使って上に上がることもできるかもよ」

「……ああ」

やはり、クロノは精神的に辛いらしい。

まあ無理もないか。恩師であり、信頼の置ける人物であった者が犯罪者に成り下がっていたのだから。

復讐を否定する気はないけれど、そのことで私たちに干渉することとは許さない。断じて、ね。

「ここで、君に捕まる訳には行かない。私にはやらなければならぬいことがあるのでな」

「復讐ならやめて頂戴ね。この子、アリシアの友達なのよ」

「……はやて君には済まないと思っている。だが、もう時間がないのだ……！」

そう言った直後、グレアムの体は白い光に包まれていく。

ちよつと待て、何だこの魔力！？ リンカーエネルギーじゃない、純粹な魔力！？

『契約を果たすために、力を貸しましょう』

どんどんと膨れ上がるその光と魔力から、女性の声が聞こえた。どこか懐かしい、しかしおぞましいほどに美しい声。

「ちよ、何するんや！？」

直後、横からその声が聞こえ、そちらからも白い光が溢れ出てくる。それと共に、目の前のグレアムを包む魔力と同質の魔力も。

「っ!? 待ちなさい!」

「何、この魔術!?!」

私とブルーベルの声も届かず、光から発せられた声と共にグレアムとはやては姿を消す。

魔術の逆探知も間に合わない程素早く、痕跡が消去されている。少なくとも、ただの魔術師ではない。

「ちっ、逃げられた!?!」

「主はやても連れ去られたのか!?!」

「そうみたいね。4人とも、パス通じて居場所特定できる?」

「ちよつと待つてください、えつと……。あ、大丈夫です! おぼるげに残ってます!」

シヤマルがそう声を上げる。他の3人は察知できなかつたみたいだけど、シヤマルだけは魔術の勉強も少しはしておいたおかげで魔術と魔力の両方からパスにアプローチできたらしい。

いくら私だつて、術式の分からない魔法のパスを魔術で探知するなんてできっこないからね。

知っていることは、知っていることだけなんだよ。

「で、シヤマル。場所は?」

「地球、南極です!」

「なんで、そんな場所にいんのさ……」

南極? いや、それはいい。どうせすぐに行けるんだし。

問題はグレアムとはやてを連れ去つた魔術師だ。

口ぶりからして、グレアムと手を組んでいる魔術師ということになる。しかし、ねえ……。

「まったく、めんどくさそうね……。クロノ、こっちの連中も一枚噛んでるみたい」

「そうらしいな。しかし、なぜグレアム提督が魔術師と手を組んだんだ……？」

「南極まで行って、本人に聞いてみるしかないでしょ。アースラは出られる？」

「もう少し待ってくれ、すぐに連絡して急ピッチで整備を終わらせてもらうように行っておく」

「わかったわ。じゃあ、守護騎士の皆はすぐに戦闘体勢に移行できるようにしておいて」

手早く指示を出し、あらかじめ持ってきておいた通信機を王の財宝から取り出す。

イリアの頭脳により設計され、世界中のありとあらゆる最新鋭の技術を駆使して作成されたこの通信機ならば、多少の間程度は問題ない。

「ハローハロー、聞こえるかしら」

『ああ、彗。どうしたの？』

向こうの通信機を取ったのはイリアだった。

美しい声色が聞こえ、少しだけ心が安らぐ。

「夜天の書の主が、それを狙っていた者に連れ去られたわ。協力者に魔術師がいるみたいだけど、不意打ちとはいえ私の探知が間に合わないほどの技量よ」

『……ちよつと嫌な予感しかしないわね。どれくらいで戻ってこれるのかしら』

「2、3時間で戻れるわ」

『そう。じゃあ、こっちは戦闘態勢を整えておくわね。通信機は繋げっ放しにしておいて』
「了解」

通信機の電源を入れたまま別れを告げ、手の平大の大きさの通信機を持ったまま近くの椅子に座り込む。

後には、静けさだけが残された。

場所は南極。

本来ならば何層にも渡る防寒具を着込んで尚寒さに打ち震える場所だが、そこにいる3人の男女は全くその素振りを見せなかった。

「……寒いかしら、はやてちゃん」

「寒くあらへんよ、誘拐犯さん」

「ふふっ、面白い子ね。こんなおじさんなんかよりよっぽど好きよ」

「そらどーも」

ため息を吐きながら車椅子に座っている少女、はやてはそう答える。

すでにこのやり取りも何度か行われているのだが、その女性はその度にうっとりとはやての頬を撫でてそう囁くのだ。

「そんな貴女にプレゼント……」

「え？」

言つと、女性ははやての右手を取り、その薬指へ歪ながらも吸い込まれるような美しさを持った宝石のあしらわれた指輪を嵌める。

それはまるで婚姻の儀の時のように恭しく、熱に浮かされたようにゆっくりとした挙動だったが、その異様な雰囲気に呑まれたのか、はやては身動き一つとれずに指輪を嵌められるのを黙って見ているしかなかった。

「うん、似合うわ。とつても」

「……なんや、これ」

「ああっ、そんなに睨まないで！ 可愛い顔が台無しじゃない。でも、怒っている顔も可愛いいわ……」

バリアジャケットを纏つて寒さを凌いでいるグレアムのことなど全く考えていないような様子で、女性はうっとりとはやての顔を見つめる。

その眼差しはどんよりとした熱で曇っていて、思わず腰が引けてしまうほどに不気味だった。

「うふふ、愛おしいわぁ……可愛いわ……、食べちゃいたいくらい」
「ひっ……！」

「怯えてる顔もかわいい……。もつとあなたのいろんな顔を見せて……？ ふ、ふふ、ふふふふふふ……」

がっしりとはやての両腕を両手で掴み身動きも取れないようにした女性は、顔面同士が接する程近くに寄つて言う。

目を剥いて三日月よりも鋭く口角を吊り上げた笑みは、恐ろしいながらも不思議な淫靡さすら醸し出していた。

「……ぎ、んぎひいいいいっ！　がつ、ぐいひひひひひっ！
「ひいっ!？」」

突然黙ったかと思うと、唐突に奇怪な悲鳴を上げた女性に、思わずはやてはそんな悲鳴を上げて仰け反ってしまう。

「あ、がつ、ご、ごめんなさいねえ、し、しよウぎをう、ジナビゾうになっただから、ねっ」

「な、なんなんやアンタっ!？」

「はっ、ふっ、ふっう……、ああ、ごめんね、ごめんなさい、あなたを傷つけてしま、いそうにな、ったのっ」

「あんた、大丈夫なんか……。そない震えて……」

はやての言うとおり、おかしな口調になった女性の体は小刻みに震えていた。

全身の熱を瞳に灯したような視線ではやてを舐めるように見る女性性は、すがりつくようにはやての太ももの上に頬を乗せる。

「た、魂が足りないの……っ、は、やく、契約を済ませないと……
ね……」

浅い呼吸を繰り返しながら、女性は震えを抑えつけるように頬を太ももに押し付ける。

その様子を、はやてはどこか奇妙に感じながら眺めていた。

決戦は近い。

34話 思わぬ横槍（後書き）

はい、ということとでグレアムフルボッコは次回にお流れです。いや、ほんとはすんなりボッコボッコにして終わろうかと思ってたんです。ですけどね、私のラクダ色の脳細胞が「それじゃあなあ」と駄目だししやがったので、こういう展開になりました。

次回こそ決着。そしてA・S編も5話以内には終わるかな？

いろいろ伏線回収も必要ですしね。

それでは、シーユアゲイン！

35話 南極の戦い 前編(前書き)

はい、前後編です。すいません。

ほんとはこれでA・S編終わるはずだったんだ！

しかし、今回出てくる奴の資料が少なすぎて……！

いろいろ突っ込みどころ満載でしょうが、今回は突っ込んでやらんでください。

それではどうぞ！

35話 南極の戦い 前編

大気を凍てつく吹雪が染め、視界が白に覆われる。

その中を、私達はゆっくりと進んでいた。先頭を進んでいるのはブルーベルとユニゾンしている栞と、はやてとのパスを辿れるシャマルの二人。

その後ろでは守護騎士が魔力の壁に守られている。周囲の寒さから身を守るのならば騎士甲冑を纏うだけでいいが、それだけでは確実に気を失う原因が他にあった。

守護騎士の周囲を歩いているのは三人の【魔女】、道楽秋水、マリー・エルメラティ、ユリアレイ・トールレス。その三人が魔力と殺気を放出しているせいで、守護騎士は栞の張った障壁が必要になっていた。

「御三方とも、もう少しさつきと魔力を抑えていただいても……？」

「……無理」「」

「ですよねえ……」

苦笑いしながら言ったのは、ユーノ・スクライア。全体の最後尾、殿を務める形で歩いているが、全体を奇襲から守るために常に魔力障壁を展開し、さらに魔力を放出することで三人分の魔力と殺気を中和していた。尤も、守りや補助に長けたユーノの力をもってしても、自分に向かうものを中和するだけで精いっぱいなのだ。

地球に来て道楽を師としてから随分と経ち、ユーノの能力も相当向上してきた。まだまだ魔術師としては新米もいいところだが、デバイスを経由せずに魔法を展開する技術を磨いたおかげで、リンカーエネルギーの操作技術は並みの魔導師など足元にも及ばないレベルにまで達していた。

「もう少しです。ユーノ君、もうちょっと頑張って」
「は、はい」

シャマルに励まされ、極寒の地で汗を垂らしていたユーノが応える。

あらかじめアクアサーチャーで場所は特定しているが、シャマルの案内がなければまともに進むこともできない。アクアサーチャーを使用した時点でこちらの存在は知られているのだから、堂々と進むことができるのはありがたいが。

魔術師同士の戦いにおいて相手を侮ることは死に直結する。どれだけ格下の相手だとしても、こちらに通じる一打を持っている可能性が無いと言い切れない以上は全神経を警戒に当たらせることが重要視されるのだ。

ともかく、極寒の地である南極を普段着で進む奇妙な集団は、しばらくの間会話もなく歩き続けた。

「こんにちは」

辿りついた時、そこには奇妙としか思えない服装の女性と、バリアジャケットを纏ったグラム、そして普段と変わらない様子のはやてがいた。

「はやてちゃんっ」

「シャマル、こっち来たらあかんっ」

思わず走り出そうとしたシャマルの腕を、はやての鋭い言葉を聞いた槌が掴む。体格差もあってシャマルは後ろに倒れこみそうになったが、何とか踏み留まる。

次の瞬間、はやては胸の辺りを抑えるようにしてうずくまる。いつの間にかグラムの手にしていた夜天の書が、黒い光を放っている。

た。

「逃げるんや、皆っ！」

「体が、消える!？」

はやての悲痛な叫びも空しく、朶の後ろでシグナム達の姿が薄れていき、夜天の書の中へと中心核であるリンカーコアが吸い込まれていく。

「あ、ぐうっ……！」

「これで、全て終わる……！」

苦しむはやての横で、グラムはそう呟きながら一振りの杖を呼び出す。

正史ではクロノに譲り渡されたデュランダル。それを手にし、グラムは静かに魔法陣を展開した。

だが、しかし。

物語は、愚者に罰を与える。

「な、なんだっ、この揺れはっ!？」

突如として南極の大地が震えだす。

そして見えてくるのだ。狂気そのものを形作る山々、その尾根が南極の大地を割ってせり上がってきたそれは、あまりに歪にして異質。暗黒に満ち、視線が触れれば最後、気までもが触れるほど狂気に満ち満ちたもの。

てけり・り

「おいおいおい、やばいだろうこれ……！」

聞こえてきた謎の声に、道楽が珍しく動揺を表わす。他の二人の【魔女】は動揺していないようだったが、それでも嫌悪感を隠そうともしていない。

唯一ユーノだけはそれが何かを察することができずに当惑しているが、直感的に何かを感じたようだった。

てけり・り、テケリ・リ！

「ユーノ、目え閉じとけ。お前にゃ早い。魔力探知だけで動けるな？」

「は、はいっ」

言われたとおり目を閉じ、魔力探知に精神を注ぐユーノ。

それと同時にせり上がり切ったそれは、まるで巨大な壁だった。神話に言われるものと同じであれば優に一万メートルを超える高さを持つ地層であり、無数の出入り口、地下に存在する大空洞があるはずだ。

それが、完全にせりあがり朶たちの視界を塞いでいる。その事実にも、さしもの朶ですらも苦笑いを零してしまふ。

「えーと、どれがどういう地理になってるのかさっぱりね」

「この場においてそれを言及するのは野暮ってものじゃないかなー」
「見れば見るほど薄気味悪い場所ですね、これは……。早く終わらせましょう」

朶の言葉にユリアレイ　ユリアとマリーがそつ返し、道楽も溜息混じりに頷く。

その直後、四人はその場から姿を消す。

「……僕は置き去りですか。まあ、いいですけどね」

目を瞑ったままそうぼやいたユーノも、ため息を一つ吐くと魔力を大きく放出し始めた。

まさか狂気山脈がそのまま出てくるとは思わなかったわね……。

内心そんなことを思いつつ、ブルーベルとユニゾンしている私は三人の【魔女】と共に、常識が蚊帳の外に放り出された場所を駆けていく。

シャマルはいないが、これほど濃密な殺気や魔力が駄々漏れになっているのならそこに向かえばいいだけだ。

と言つても、正直私もこんな事態は初めてなんだけど。

「ユーノは置いてきてよかったの？」

「あいつにはあいつの役割があんだよ」

走りながら道楽に聞くと、そんな答えが返ってくる。まあ、私が気にすることでもないか。

アースラで地球に戻ってきてから南極に来るまでは約半日。その間にロイドやその伝手で世界中の魔術師を洗ってもらったけど、該当しそうな人間はいなかった。

となれば私たちの把握できていない新出か、それとも今まで裏に潜んでいた奴なのか……。どちらにしてもいい状況ではない。

アースラは衛星軌道上で待機しているから、あとはグレアムを捕え、はやてを奪還するだけだ。若干南極の地形が変わるかもしれないけど、イリアのゴーサインはもらってるから気にしないことにしよう。

「いた」

「うわっ、キモ」

しばらく走り続けてようやく見えた其処は、円形のコロシアムのように大地が削り取られていた。

そして、その中央に立っているのは、漆黒の何かに包まれた人型。グレアムに手を貸しているらしき女性だと分かったのは、その人型を挟んで向こう側ではやてとグレアムがこちらを見ていたから。

と言つてもはやては既に気を失っており、夜天の書は闇の書として起動を開始している。急がないとまずそうね。

テケリ・リ！ テケリ・リ！

「うる 、さいツツ！！」

轟ッ！ と耳にへばりつく鳴き声を吹き飛ばすように、人型目掛けカマイタチを起こす。魔術など必要なく、ただ魔力に任せるだけだ。

見えない刃で一瞬切り裂かれた人型は、しかし瞬く間もなく体を元に戻す。やはり、物理的な攻撃では分断できないのか。

見ているだけで頭が痛くなりそうなほどに気味の悪い動きをする黒い人型。と、突然人型の表面が波打つように震えだす。それとともに鳴き声がずれていき、途切れずに繋がっていく。

薄気味悪いと思う間もなく、人型の背中が突き破られんばかりにポコポコと押し上げられていく。まるで、中から何かが出てこよう

とするように。

次の瞬間、人型の背中は文字通り突き破られ、そこから無数の触手らしきものが次々と抜け出すように飛び出してくる。中には青白い眼球のようなものが中に入った触手も存在しており、私たちのように魔術を学んでいたとしても、生半可な意志では意識を食い破られるほどの威圧感を醸し出していた。

しかも、触手は既にどう考えてもおかしい量にまで増加している。明らかにあの人間の中には入っていられない量なのだけれど、今更そんな事を言っても野暮だから指摘はしない。

「おーおー、増える増える。っつーか、完全な軟体動物だから俺の魔術は効かないぜ？」

「私もこれ苦手だなー。悲鳴も何もありませんいじゃない」

「私の魔術なら数は減らせますけど、どこまで魔術抵抗があるかにもよりますね……」

上から順に道楽、ユリア、マリーだ。確かに、道楽の魔術は間接に対して作用するものだから、それが無ければ意味がない。ユリアも人を壊すのは向いているものの、こういった原初的な存在には弱い。対抗できるのは半分だけ。とすれば、一人が足止めして、もう一人がほかの二人と一緒にはやての奪還とグレアムの捕縛に向かう方がいいか。

にしても数が多すぎる。それに、情報が足りない。

狂気山脈でわらわら出てくるって言ったらシヨゴスぐらいしかないけれど。古のものはとくに海底遺跡に移動しているし。

なんて考えていると、向こうはすっかり臨戦態勢になっている。仕方ない、蹴散らして進むしかないか。

「攻撃には気をつけて。相手は正真正銘の化け物よ」

「わあってるって」

「そんなへまはしないよん」
「触れなければ問題ありません。やりましょう」

頼もしい限りな言葉を受け、私たち四人は一気にスライム状の化物、シヨゴスへと突進する。

詠唱も必要ない簡単な発火魔法に魔力を注ぎ込み、目の前にいるシヨゴス達を焼き払う。いや、この場合は単数形なのか複数形なのかわからないけど。

しかし、シヨゴス達はその炎を受けて一旦は身を縮めるものの、またすぐに肉体が再生される。文献にあるシヨゴスとは少し違った性質なのかと思案しながら、近寄ってくる数体を魔力だけで吹き飛ばす。

ふと、視界の隅に見えたのは分厚い本。

「あ、それは……！」

夜天の書は、いつの間にかシヨゴスの中に取り込まれていた。そうか、この再生力はその力か……！

しかし、シヨゴスって意外とチートなのね。ちょっと欲しいわ。

「ぬああああ！ 埒があかねえええええええ！」

「これ、はっ、ちよっと数がっ、多すぎっ、だってっ」

「お二人とも、がんばって！」

既に周囲はシヨゴスによって囲まれ、三人は声しか聞こえない。マリー以外は苦戦してるみたいね、急がないと……。

「お姉ちゃん、ちよっといい？」

「ん、どうしたの？」

魔力の壁を自分の周囲に張り巡らせ、こちらに入ってこれないようにする。これでよし。

『こいつらは夜天の書を取り込んで、つまりリンクしてるんだよね？』

「そうね、多分そう」

『じゃあ、私が逆に中に入り込んで、修正パッチを当てることってできないかな？』

「……やる価値はあるでしょうけど、難しいわよ」

『それでも、やらないよりマシ。時間稼げる？』

「ちよつと待つてなさい」

言つて障壁を解除し、両腕を交差させる。そこへ魔力を充填し、両側へ振り抜くようにして解き放つ！

強引に発生させた強力な竜巻で、周囲で触手をうねらせていたシヨゴスをズタズタに引き裂いていく。その内の一体に素早く手を触れさせると、脳内のリソースを夜天の書へのハッキングへ割り振つていく。

「よし、行きなさいブルーベル！」

『オツケー、速攻で片つけて来る！』

声が聞こえた直後、ユニゾンが強制的に解除される。ブルーベルの精神自体が別の場所に移動したせいで、ユニゾンを保っていたいなかったのだろう。

さて、と。ブルーベルが終わらせるまで、こっちも守っておかないとね。

はあ……。本当はもっと簡単に終わる予定だったのに、余計なこととしてくれやがって……。

「捕まえたたらたっぷり絞らせてもらっわ……！」

さて、お姉ちゃんも頑張りますか っ！

こっ、は。

ブルーベルは目を覚まし、体を起こす。

周囲は暗く深い闇に包まれ、生命の息吹などかけらも感じられない。

「……このどこかに、管制人格プログラムがある」

呟いて、ブルーベルは静かにその身に鎧を纏う。

鎧というよりは、薄い蒼で彩られたイブニングドレスだった。

自身のバリアジャケットをその身に纏うと、ブルーベルは静かに歩を進めていった。

35話 南極の戦い 前編（後書き）

ということ、前編でした。

ブルーベルのバリアジャケットも何気に初です。

他の人たちは日本でがんばってます。その辺も後編で。

それでは、遅くなって申し訳ありませんでした。次回間に合うか分かりませんが、がんばってみます！

それでは、シーユアゲイン！

36話 南極の戦い 中編(前書き)

誰だ前後編とか言った奴。がつつり中編まで食い込んでんじゃねえか。

はい、すいません。まだ南極での戦いは続くのです。

いや、今回は南極メンバーは碌に出てきてないかもですね。いろいろありますが、どうぞ！

追記：脱字を修正しました。

36話 南極の戦い 中編

闇を駆ける。

振り払うように、駆ける。

向かってくる闇を叩き潰し、斬り崩し、払い飛ばして、駆ける。

その度にイブニングドレスの一部に切れ目が入り、また一部が千切れ飛ぶ。

「守護騎士たちは、一体どこに……？」

夜天の書内部は、まるで明かりのない洞窟の中のように暗く、冷え切っていた。

バリアジャケットであるイブニングドレスのおかげで寒さは感じないにしても、視界が利かないのは考え物だ。

今はセンサーと感覚の両方で敵意のあるものを見分けているが、早めに守護騎士の目を覚まし、バグ部分を消去しなければいけない。

「くっ、数が多い……！」

向かってくる闇は、まるで無尽蔵に湧いて出てきているかのようで、どんな手を使って消そうとも、一向に減っている気がしない。

守護騎士の気配を探ろうにも闇が邪魔でまともを探れないし、正直一手目から手詰まり感が否めないのだ。

「……それに、助けてあげなきゃ」

いつかブルーベルが夢で見た女性。彼女は、助けてと言っていた。あの夢の中の場所は、ことごとくよく似た雰囲気だった。もしかしたら、いるのかもしれない。

確信しているわけじゃないけど、なんとなくそんな気がする。

「もう、うっとおしい！」

魔力で作り出した青色の波で、一気に闇を押し流す。これです少しはマシになるだろう。

もう一度集中し、周囲に探知を掛ける。守護騎士がいればここで動くのも少しは楽になるはずだ。多分。

数秒で、先ほどまでの不調が嘘のように守護騎士の反応があった。まるで誘っているように。

畏かもしれないが、それでも行ってみるしかない。ブルーベルは、原型は持っけていても今の夜天の書の内部構造など知るわけがないのだから。

探知の網に引つかかったそれを目指し、ブルーベルは一気に歩を早めて駆けて行く。その先には、グレーで満たされた小さな部屋があった。

どこからが闇でどこからがその部屋なのか、その区切りすらもはっきりしない場所だったが、ブルーベルは確かな足取りで中へと進んでいく。その中には、四つのリンカーコアが浮かんでいた。

「まったく、いつまで寝てるつもり？ 早く起きてよね！」

そのリンカーコア全てに魔力を流し、元の状態まで戻していく。復元自体は大して難しいことではない。不具合が出ないとも限らないが、この状態では仕方ないだろう。

リンカーコアと同じ色の淡い光を放ちながら、守護騎士たちは体の再構成を終え、そして周囲を見渡す。

「ここは……」

「やっとお目覚め？ 起き掛けて悪いけど、もう一仕事あるから付

「いてきて」

シグナムの疑問を無視して、ブルーベルは四人にその声を掛ける。

「管制プログラムと、中にいるはやてを開放するために、書き換えを始めるから」

「なるほど、所属不明の魔術師が、ですか」

「僕らの目の前で連れ去られました。どうやって侵入したのか……」

時間は少し戻る。

【魔女】の集まる館には、【獄熱】ベンデル・マリステンとクロノ・ハラオウンの二人がいた。

その周囲には複数の青いウィンドウが開き、そこには様々な顔が映し出されている。

「それで、今衆達は南極にいるんですね？」

「そのようです。心配ですか？」

「私も人の子ですもの。家族の心配くらい致します」

ウィンドウを隔てて顔を合わせているイリアと忍。忍は自宅の月村邸から、イリアも自宅から通信で会話に参加していた。尤も、イリアの自宅は二つ名持ちの【魔女】にしか知られていないのだが。

今この会議に参加しているのは、栞の支援者でもある月村忍。【魔女連盟】からはベンデルとイリアの責任者二名。管理局側からはクロノが赴いていた。

「ベンデル氏、何か心当たりは？」

「いえ、こちらには全く……」

「そうですか……」

二人して溜め息を吐いてしまうが、それでもお互いを射抜くような眼差しは変わらない。それほどまでに、今回の事件が重大だと言うことを表していた。

「栞嬢や他の【魔女】達とも現在連絡はつかない状態です。何か特殊な結界が張られているようで」

「それは、やはり魔術的な？」

「そうかもしれませんが、もしくは別の何かかもしれません。我々が知り及ぶものではない可能性が、南極には多く眠っている」

それを聞いて、思わずクロノは顔を顰める。

魔術師ですら以前のクロノたちでは想像も出来ないような相手だと言っのに、その魔術師ですら知り及ぶところでない何かがあると言う可能性。

しかし、それでも「怖いのでやめます」とはとても言い出せない。それ以前に、そんなことをすればクロノは自分自身を許せないだろう。

「連絡が取れ次第アースラで向かいます。そちらは、この人物の照会をお願いできますか？」

「これは……」

クロノがベンデルに手渡したのは、プリントアウトされたギル・グレアムのパーソナルデータと、その入ったメモリチップ。

五〇年前に失踪しているイギリスの青年とまで入れれば、さずがに出てくるだろう。もちろん、何百人何千人という数が来る可能性も無きにしも非ずだが、それでも【魔女】の手にかかれれば一瞬で割り出しは終わる。何しろ、パーソナルデータのほぼ全てが検索材料なのだから。

「なるほど、すぐにやらせましょう。こう見えてもコネはありますのでね」

手渡されたベンデルは、にやりと口角を吊り上げてそう言い放つ。頼もしいやら恐ろしいやらで、クロノは苦笑いを浮かべるしかなかった。

『こちらはこちらで動いてみます。何か動きがあればすぐに知らせてください』

「分かりました、忍嬢」
『それでは』

一つ会釈してから、忍の映っていたウィンドウが閉じる。ウィンドウが閉じたのを確認した後、ベンデルも炎に包まれてその場から姿を消す。

残されたのは、やや気まずそうな表情のクロノと、歪な笑いを浮かべたイリアの映ったウィンドウだけだった。

「アリシア、そっちは二番に入れておいて！」

「はい！」

「フェイト、三番のを少し見ておいて頂戴」

「は、はい、母さん」

一方その頃、月村邸の地下室ではテストロッサー一家が慌ただしく動いていた。

超突貫作業で増築された地下室はすっかり研究室の様相を呈していて、そこかしこで白い蒸気が吹きあがっていた。

研究室というよりはファンタジーでよくみる鍛冶屋のような場所だったが、壁に取り付けられている巨大な機械はまるでSF映画のコールドスリープ装置を縦にしたようなデザインだった。

中には、目や鼻、口などと言った、人間に必要な部位がほとんど欠如した人型が入っている。

「ふう……。二人とも、お疲れ様。少しお休みしましょう」

「はい」

「はい」

冷蔵庫から冷えた飲み物を取り出すと、アリシアとフェイトにも手渡してから近くの椅子に腰掛ける。一口呷った後、アリシアは穏やかな眼差しで人型を見つめていた。

「まったく、菜も無茶な要求するわね」

「ホームンクルス四体なんて、錬金術駆け出しに頼むことじゃないって」

「でも、なんとか形になってきたし……。やっぱり、母さんはすごいです」

「ふふ、ありがとうフェイト」

軽くフェイトの頭を撫で、アリシアは実験機材で埋め尽くされているテーブルの上を眺める。

錬金術を始めたのはそこまで早くはないが、その天才的な手腕が発揮され、ホームンクルスを不完全ながら生み出すまでに腕を上げて

いた。

と言つても、まだこのホムンクルスには魂が込められていないため、人間にとつて必要不可欠な部分も欠如しているのだが。しかも、体の維持には特殊な薬を一週間に一度摂取しなければならぬのだ。しかし、それだとしてもホムンクルスを作り出したということは、上位の魔術師の領域に達していることの証明になる。僅か一ヶ月余りでこれなのだから、栞が「テストアロツサ家は天才家系だ」と言つたのも頷けるだろう。

「あとは、栞頼みね」

薄く笑い、プレシアは静かにそう零した。

「見つけた……！」

暗闇を駆ける五人の先頭、ブルーベルはそう呟いて目を輝かせる。どれほど走ったのか、周りはいつの間にか白んできていた。

その中を更に速度を上げて疾駆する五人は、ようやく辿り着く。

この夜天の書の心臓部に。

そこには、いつかブルーベルが夢に見た女性と、もう二人がいた。管制人格と思しき銀髪の女性と、八神はやてだった。

巨大な本に杭と鉄の輪によって縫い止められている女性を助けようと、車椅子ながらあちこち探っているはやてを、銀髪の女性はた

だ見ていただけだった。

その目は、まるで何もかもを諦めたような目で。
ブルーベルは、思わず奥歯を噛み締めた。

「はやて、そっちの銀髪は管制人格でいいんだよね」

「ぶ、ブルーベルちゃん！　せや、リインフォースっちゅうんや。
うちがついさつき名前付けたんよ」

「それで、まだ沈んでるのはどうしてなの？」

「なんや、ここから出た頃には、もう元の世界は残っていないーと
か言つとつてな……」

「はやて、そっちは任せた。守護騎士もそっちをよろしく。あの分
からず屋の管制人格をどうにかして動かしなさい」

答えも聞かず、ブルーベルは縫い付けられた黒髪の女性へと歩いていく。

丁度目の前までやってきたブルーベルは、そつと両手の杭に触れ、それを消し去る。夜天の書の原型に備わっているデバック機能ならば、この程度は造作もなかった。

「遅れてごめんなさい。すぐに助けてあげるから」

「……本当に、来てくれたのじゃな。たった一度、おうただけだと
言うのに」

「助けてって、ちゃんと聞こえたよ。これで、よしっ」

足を拘束していた鉄の輪を消し去ると、女性はぐったりとブルーベルの方へともたれかかってくる。

幼い体からは想像できないほどの力でしっかりと女性を支えると、ブルーベルは静かに床へ女性を横たえた。

「お主、何を……？」

「これから夜天の書を元に戻す。管制人格は起こした？」
「オツケーや。そっちの人も、大丈夫みたいやな」

この短期間で色々ありすぎたせいだろう、はやては随分とたくましく成長しているらしい。

はやての返事に小さく頷いて答えると、すつと両手を巨大な本へと翳す。

女性と触れあった時、女性が何であるのかはなんとなく理解できていた。だから、自分に訴えてきたのだろう。

そう考えて、更に続く思考を言葉に出す。

「私が、助けるよ。お母さん」

「アクエス、お主……!？」

脳内を駆け巡ったのは、とてもとても古い記憶。ユニゾンデバイスとしてこの世に生まれ、そして大戦が終わってからのこと。

ブルーベルを生み出したのは、この女性の元になった女性。魔導師としてもとても優秀な女性で、ブルーベルにとっては生みの親と同じ存在だった。

だからこそ、彼女のことを助けたい。

「今は、ブルーベルだから。いくよ……!」

言うてから、ブルーベルは夜天の書のプログラムを一気に書き換えていく。

防衛プログラムと守護騎士プログラムは現在のまま維持して隔離、バグのある箇所だけを消去、修正していく。

「二万八四一七……二万六〇四三……」

次々と改悪部分を削除していく。

「二万四七二二……、二万二五六三……」

慎重に、迅速に、大胆に。

「二万一三……、一万八〇五四……」

氾濫を許さず、流れを作り。

「一万四七六八……、一万二二九五……」

決して油断せず、最後の一点まで追い詰め。

「九七四八……、五〇一九……」

そして。

「三〇〇二……、一四六三……」

災厄の息の根は、

「六〇八、二〇〇」

ここに、終わりを迎える。

「五四……、ゼロ！」

36話 南極の戦い 中編（後書き）

はい、ということであっさり闇の書終了です。

後はシヨゴス潰して、グレアム捕縛だけですな。

後編では「これなんぞ」という点は出来る限り解説していくつもりです。

例によって一週間では収まりませんでした、すいません。次回も一週間では多分無理です。明日からテストってのもあるんですがね。

ほんと、色々謝ることがありますが、これはこれで楽しんでくれると幸いです。

それでは！

IS、面白。二次創作とか書きたいかも。まだ書かねーですが。

37話 南極の戦い 後編(前書き)

遅れた上に説明会じゃないって言うね。本当に事件が終わった、だけ。事後処理はまだまだです。

今回の顛末については軽く触れています。詳しいことは後々、皆知りたいであろう黒幕さんの結末は次のお話で。

今回はグロ注意はないよ！

37話 南極の戦い 後編

ブルーベルがバグの消去を完了した直後、現実世界では見渡す限りを埋め尽くしていたシヨゴスが突如として消滅し始めていた。

突然のことに驚いていた道楽、マリー、ユリアだったが、考えるよりも先にグレアムの確保のために消え逝くシヨゴスの群れの中を突っ切っていく。

既に動きを止めているシヨゴスたちは、身を振る間もなく三人によってすれ違い様に次々と消されていく。まるで、シャボン玉が破裂していくように。

「やったのね、ブルーベル」

呟き、近くに申し訳程度に残っていたシヨゴスを魔力で薙ぎ払う。呆気なく吹き飛んだシヨゴスは、あっさり蒸発する。……シヨゴス、随分もろいのね。

とにかく、シヨゴスはこれで片付いた。次は……。

「うっし、確保だな。もう動けんぜ？」

「ぐっ……!!」

ああ、グレアムの方も拘束されてるみたいね。関節を全て外されているみたいけど、そんなの私たちには関係ないし。

その隣を見ると、夜天の書から脱出したはやとブルーベル、守護騎士と管制人格らしき銀髪の女性、そして血にまみれた黒髪の女性が出た。……あれ、あの人まじじゃないかしら。

「ブルーベル、無事？」

「お姉ちゃん、私はいいいからお母さんを！」

「お母さんって、この人が？」

倒れている黒髪の女性を指して言うと、ブルーベルは千切れんばかりに首を縦に振る。

なら、助けないわけには行かないわね。女性の傍に屈み込むと、出血箇所を確認。魔力を流して回復を促していく。……あれ、回復されない？ 仕方ない、応急処置だけでもしておこう。

「よし、後は日本に戻ってからね。応急処置はしたけど、はやく治療しないと」

「う、うん！」

「はやて、起きなさい。とっとと日本に戻るわよ。いつまでもこんな糞寒い場所にいたくないわ」

「んんっ……、あ、おはよう栞ちゃん」

「おはようじゃないわ。全員、とっとと撤収準備！ 道楽、ユーノに連絡して。全員集まり次第日本へ転移するわ」

手早く指示を飛ばし、シヨゴスを体内に飼っていたらしき女性を見やる。が、女性と呼べるものは既にそこにはなく、辛うじて人型があつたらしき痕跡を見つけられるだけだった。

それを魔力で隠蔽しようとした、その直後。凄まじい地響きと共に地面が下がりだす。

「あ、やば。全員すぐに降りなさい！ 呑まれるわよ！」

地響きは、おそらく狂気山脈が地下に戻ろうとしているせいだろう。このままだとその上にいる私たちまで地下に引っ張られることになる。

なぜ狂気山脈が出てきたのかを知りたいところだけど、それはまた後になりそうね。

怪我をしている女性をブルーベルに、はやてとぐったりしている
管制人格を守護騎士に任せてそこから一気に跳び降りる。

「主はやて、御免！」

「ひ、ひゃあああああああ！？」

なにやら可愛らしい悲鳴が聞こえたようだけど、スルーしよう。
ストツと着地すると、すぐ横に全員が着地してくる。なぜ団体で
来たのか。そして道楽、グレアムの持ち方はもう少しどうにかなら
なかったのかしら。いくら関節を外してあるとはいえ、どう見ても
人間では有り得ない角度に腕やら足やらが捻じ曲がっているのだけ
ど。

「気にすんな。ユーノ、もう目開けていいぞ」

「あ、はい」

いつの間にか近くに来ていたユーノが、言われて目を開ける。さ
て、と。

「それじゃあ戻るわよ。全員私の周りに集まって」

全員がまわりに集まったことを確認し、自宅へ戻る転移術式を起
動。周囲の人間と共に私たちは日本へと消え去った。

その私たちが最後に見たのは、再び安息の眠りへと還っていく狂
気山脈の姿だった。

「……到着、みたいね」

「お姉ちゃん、はやくお母さんを！」

「分かってるわ。道楽、ユリア、マリィ。グラムを刑務所までお願い。後藤さんへの連絡もお願いできる？」

「あいよ。ベンデルのとつつぁんにも連絡入れとくぜ」

月村邸の庭に戻ってきた私たちは、すぐに二手に分かれる。ユリノは道楽と一緒に行くみたいね。

四人＋主犯を見送った後、すぐに血まみれの女性を地下室へと運ぶことに。管制人格とやらも一緒に動かすことにした。

「ただいま、プレシア。治療用ポッドは空いてる？」

「おかえりなさい、大丈夫よ。随分酷い怪我ね……、こっちに入れて頂戴」

「助かるわ。さ、ここへ入って」

「うぐっ、済まぬ……」

女性の様子を見たプレシアは、すぐに近くにあった治療用ポッドを開くと女性をそこへ横たえる。上部ハッチが閉じられると、アクリル板にも似た透明な素材で出来たそれに奇妙な紋様が浮かび上がった。

それは、錬金術の技術を応用した細胞の自己再生を促進させる技術。しかも、促進させた分だけ後から寿命を補填しているため、寿命は減らない。凄いいもんよね。

「これでこっちは大丈夫、と。そっちの管制人格（仮）はどうしたの？」

「……あなたが、その融合騎の主か。長く続いた輪廻を止めてくれて、ありがとう……。感謝している」

「別に、私がしたわけじゃないわ。それに、あなた達にはこれからしっかり働いてもらわないとね。そのために助けたんだから」

ま、どうなるかはともかくとして。

とりあえずはやてたちをずっと地球に置いておく訳には行かないわよね。というかイリアは絶対許さないでしょうし。

危険が無いと分かってはいるけど、それを口実に一々こちらに介入させては困る。グレアムの口封じのためにも、はやてには『悲劇のヒロイン』となってもらわなければならぬと言っ事情もある。くれれば皆殺しにする程度は簡単だけど、一々そんなことをしていてもアレだし。出来るなら適度に刺激し合える関係が一番なのよ。

「はやて、あなたはこれから管理局に行くことになるわ。夜天の書のバグがあなたのリンカーコアに何か影響を及ぼしていないとも限らないし、ここでの検査では限りがある。だから、本局に行ってもらうわ。細かい説明は後で知り合いからしてもらって頂戴」

「う、うん……」

「その五人もいいわね。くれぐれも、はやてに怪しい奴を近づかせないこと」

「わかつている。今回は、その……。迷惑をかけた」

深刻そうな顔でシグナムが言い、それに続くように全員が頭を下げる。まあ、義理堅いことで。

でも、まあ。

「気にしない方がいいわよ。あなた達にはその分たっぷり働いてもらっ予定だから」

「うん、ええよ。皆に随分迷惑かけてもうたみたいやし、私にやれ

ることやったらなんでもするわ」

「あら、いい心がけね」

気前よく言い切ったはやての頭を撫で、それから思案する。

まず夜天の書の預かりは管理局になるだろう。クロノたちにはうまくごまかしてもらって、はやて達も多分管理局行き。ここだけでは調べ切れないこともたくさんあるし、デバイスに関しては向こうの方が上だ。

取り込もうとしたり暗殺しようとしたりってのもあるだろうけど、その辺は守護騎士に頑張ってもらおうしかない。

グレアムはこちらで罪を計算した後、全財産を正式にはやてに相續して、リンカーコアを摘出。後はまだ使える臓器を抜き取った後延命措置を施して、ユリアの玩具おもちゃでしようね。別にどうとも思わないし、むしろざまあ見ろって感じなんだけど。あ、後でリーゼロツテも渡しておこう。

で、問題はこのブルーベルが「母親」と言った女性だ。ブルーベルの身内らしい以上、管理局に預ける気はない。

まあともかく、まずはグレアムの話から片付けないといけないみたいね。私の知らない間に片付いてそうだけど。

「まあ、なるようにしかならないわよね」

日付、一二月一三日。年末前の出来事でした。

「それで、どうなったの？」

それから二日して私、栞はイリアに通信を繋いでいた。

『ギル・グレアムは正式に死亡認定が出されて、全遺産は八神はやてが相続することになったわ。他も大体あなたの想像通りよ』

「ふーん。使い魔は？」

『目の前で引き裂いたわ』

それはそれは。どういう風にとは聞かないでおこう。『ご自由に』想像ください。

とりあえず、あの事件については『一人の少女を巻き込んだ不幸な事故』ということで片付いた。要するに、グレアムなんかは初めからいなかった、という扱いを受けたわけだ。

その代わりとして取り付けた約束が、当事者であるその少女を、目に余らない範囲での好待遇で管理局に迎え入れることだったらしい。つまり、はやては才能ある少女として管理局入りしたわけだ。まあ、犯罪者として目の敵にされるよりましか。

それに、これはイリアの望んだ結果でもある。出来る限り、こちらに管理局が介入してきてほしくない。そのためにはスケープゴートが必要になる。それがはやてだったというだけのこと。

と言っても、今のところははやては囑託魔導師として迎え入れられ、リハビリをしつつ管理局についての勉強をしているらしいから、まだ地球在住ではある。

一応良いお友達として、これからもお付き合いはあるってことだ。

「で、まあそんなことはぶっちゃけるとどうでもいいわ。なぜ狂気山脈が隆起したのかわかった？」

『そっちは全然よ。片っ端から当たっても、当たりに掠りもしない』

ふむ……。それはそれで不自然だ。
どこかでニヤルラトホテプでも動いてるのか？ だとすれば誰が
為っている？

……疑心暗鬼になっても仕方ないか。それに、アレとは一応協定
も結んでいるし。

「そう……。ありがとうイリア、後はこっちだけで問題ないわ」
『こつちこそ、あまり役に立てなくてごめんなさいね。制圧するだ
けならすぐに済むのだけど』

確かに、イリアの魔術なら制圧どころか殲滅だって一瞬で終わる。
だけど、それが強力すぎるから、イリアは表舞台にはほとんど出
てこない。強すぎる力は争いの素になってしまふことだってあるの
だ。

「それじゃあ通信を切るわよ」

『ええ。それじゃあね』

プツン、と通信が切れて部屋が暗くなる。
さて、と。私もやることやないと。

自室を出て地下室へ入ると、せわしなく動くプレシアの姿があっ
た。その近くには、椅子にちょこんと座る黒髪の女性。

「怪我は完治したみたいね」

「ああ、ブルーベルの主か。助けていただいて感謝する」

「気にしないで。それよりも……、あなた。魂が定着していないの
？」

女性を見たときに、ふと違和感を覚えた。言葉にしてみても、それ

はようやく形になる。

存在感がないのだ。どことなくふよふよしているというか、揺らいでいると言うか。治癒がなかなか効かなかったのもそのせいかもしれない。

「うむ、この体は借り物じゃからな。あの黒いぶよぶよの」

「……え？」

「わっちらが現実世界に出たときにいた黒いぶよぶよを取り込んで、体を形成しておったのじゃ。それももう限界に近いようじゃがな」

……そりゃあ魂定着なんてするわけないわよね。体を構成しているのがシヨゴスだもの。

ってことは、魂を別の場所に移してやればいいのか。

「プレシア、魂を引っぺがして移すわ。準備して」

「突然ね。了解」

「……気のせいか、わっちを置いてきぼりで話が進んでおるように思っただけじゃが？」

だっけ置いてきぼりだもの。

それはさておき、現状この女性の生命を維持するには魂をホムンクルスに移して定着させるしかない。だけど、魂と言う拘束具が外れたシヨゴスが暴れだす危険性はある。一瞬で殲滅できるんだけどね？

まあ、やるしかないか。

「準備完了よ」

「ナイス。あなた、こっちに来て」

「う、うむ……」

いまだ釈然としていないような女性も、私の後に続いて部屋の中央へ。そこには、ポッドから出された木偶人形のようなものが置かれていた。

それを見た女性は、思わず引き攣った笑みを浮かべてしまう。

「今から魂を引き剥がして、これに移すわ。口とか目とかのパーツは、魂が定着すればきちんと生まれるから心配しなくてもいいわよ。もちろん髪もね」

「そ、そうか。いや、話が全く見えてこない上に滅茶苦茶なことになっていることについては突っ込んではいかんのかの？」

「ダメ」

ちよつと弱腰で聞いてきた女性に、私とプレシアは異口同音にそう返す。

本当はきちんと説明するべきなんだけど、ぶつちやけ時間がない。今すぐにも魂が昇天しそうな感じだから。むしろよく今まで持ったものだ。

指示された通りに床に寝た女性の上で、プレシアは両手を重ねるようにして右胸部へかざす。直後、白い何かがプレシアの両手に導かれるように浮かび上がってくる。あれが魂だ。誘導しないとそのままふらふらとお空へ昇天しかねない危うさだけだ。

「よし、これで……」

その魂をそつと両手で包むと、のっぺり顔のホムンクルスへと落ちていく。

すつと入っていった直後、ホムンクルスの体は凄まじい音を立てて人体としての形を形成していった。それも、ものの数秒で。

「維持にはまだ問題があるけど、活動データがあればもっと改良で

きるはずよ。魂の定着にはしばらく掛かるから、少し待っていてみようだよ」

そう言われ、私はそつと椅子へ座り込む。

それからしばらくして、さっきの女性と瓜二つになったホムンクルスは、目を開くとこちらを見つけた。

「ん……。ここは……」

「こつちのこと、覚えてるかしら？」

「うむ、覚えておる。わつちの魂も大分この肉体に馴染んだようじやが……。わつちが生きておった頃にはなかった技術じやの」

興味深そうに自分の体をまじまじと見つめる全裸の女性。めっちゃめっちゃシユールだ。

けれどまあ、これでブルーベルが悲しむこともないわね。

「その辺は後で教えてあげるわ。あなた、名前はあるの？」

「いや……。とうに忘れてしまった。のう、わつちに名をくれんか？」

「私が？」

「ブルーベルの主じゃろう？ 頼む」

そこがそれとどう繋がるのかは分からなかったけど、じゃあといつことと考えることにした。

そして、数分後。

「……アルマ。アルマはどうかしら」

「それでよい。礼を言つぞ、主」

「それはどうも。それじゃあ、聞かせてもらいましょうか」

あなたのことを。

夜天の書事件はほぼ片付いた。けれど、私たちのゴタゴタはこれから始まるらしい。

本当の事件が開幕するまでのタイマーのスイッチは、既に押されている。

37話 南極の戦い 後編(後書き)

アルマの名の由来が分かる人はいるだろうか。
ヒントはゲームだ。

次回は

- ・ グレームおじさんの最期
- ・ 新しい家族
- ・ 管理局に行きませんか

の三本です！

来週(予定)もまた見てくださいね。ジャン、ケン、ポン！
うふふふふふ。

38話 終わりを告げる雪（前書き）

やっと、ですよ。

最初はちょいグロいかもしれないので、苦手な方は目を閉じて読んでください。

次回からは空白期に入ります。長い長い空白期に。

38話 終わりを告げる雪

「うっしょ、うっしょ」

壁も床も天井も、全てが純白に塗りつぶされた部屋の中で、女性は笑っていた。

いや、女性と言うにはいささか幼い顔立ちか。少女の美しい金色の髪は、濃すぎて黒にすら見える赤が半分以上を占めていた。

その少女が引きずっているのは、箱。一人が容易に入れる程度の大きさのそれの中には、頭部以外は骨になった女性が入っている。顔立ちで女性と判別しているが、その体は正真正銘骨のみ。ピクリとも動かない。紛れもない骸だった。

「あー、ちかれたあ。今度誰かに助手でも貰おうかな？ 私のストレス発散も出来るロリッ子」

明らかにおかしな発言も、ここでは咎める者はいない。

ここは少女、ユリアレイ・トーレスの屋敷の一室。ユリアが『お楽しみ部屋』と名づけたうちの二室だった。

事件発生から数日が経ち、別の部屋に監禁されているグラムも大分衰弱してきてはいた。だがしかし、死んではいない。死なせてもらえないのだ。ユリアによって。

栄養補給と体力の回復は随時薬と魔法陣で行われ、精神も発狂することのないよう枷を嵌められている。その状態で、グラムはこの三日間ユリアが今いる部屋の隣の部屋に監禁され続けていた。

目の前で嬉々とした様子のユリアによって自分の使い魔が八つ裂きにされたとあっては、拷問^{遊び}に支障が出ると踏んだユリアは、わざわざそのためだけにグラムを閉じ込めている。

尤も、三日間も全く変調のない部屋に閉じ込められれば気の二つ

や二つふれてもおかしくはないだろうが、そのための枷だ。

「美味しくなるかなあ？ 出来るだけ違和感ないようにしないと」

そう言いながら、ユリアが手にしているのはボウルだった。銀色に光るその器の中には、挽き肉が無造作に放り込まれている。

それを躊躇うことなく素手でこねていくと、やがてそれを二つ三つに分けて楕円形に整えていく。

「よし、と」

なぜユリアが得意でない料理にまで手を出しているのか。

その答えはただ一つ、楽しみのためだと答えるだろう。グレアムが絶望のその先を見てしまえるように、ユリアは丹念に下ごしらえを続けていた。

そうして料理を続けること、三時間余り。ユリアはその瞳を爛々と輝かせて白い皿を彩る、外見だけは美しい料理を見つめていた。

味は最高。見た目も最高。そうでなければいけないのだ。

ユリアの望む色を導き出すためには、その二つは必要不可欠。

ユリアは緩む頬を気にも留めず、扉を押し開けて隣の部屋へ。そこには、衰弱し頬も痩せこけたグレアムが座っていた。

しかし、衰弱しきつていっているといてもその瞳に宿る光は失われていなかった。そのことに、ユリアは歓喜する。

「じゃっじゃーん！ 君のために私手ずから料理を作っただげたよん！ 残さず食べなさい！」

「……ふん。君が他者に施しを与えるとはな」

そういいながら、グレアムはデバイスもなしに魔法を発動させ、ユリアが手に持っている食べ物を検査する。脳内に蓄えられた毒物

や化学薬品などの、自分を害するであろう知識に反応はなかった。

これでも元執務官であるグレアムは、それなりに医薬品に対しての知識も深かった。それがなければ調査のときに一々調査班を超越さなければならなかったりするため、割と必須な技能であったりする。

しかし、今回はそれが裏目に出た。

「……大丈夫そうだな」

そう言って、グレアムはフォークを手によく火の通ったハンバーグを一口、口に運ぶ。そして、咀嚼。じんわりと肉の味が口内に染み渡る。

「んっふっふ、美味しいでしょう？」

「確かに、いい味だ。何の肉だ？」

「猫」

「……なに？」

言い放ったユリアを、信じられないといった顔で、もしくは何を言っているのか理解できないといった顔で見るグレアム。

ユリアは、そのグレアムにもう一度言う。残酷なまでに、軽々しく。

「猫だつて。あんたの使い魔の死肉だよ？ 下ごしらえ、したよね。三日前に」

言ったユリアの頬が、ゆっくりと吊り上っていく。

「あーあ、食べちゃった。自分のご主人様に気づいてもらえないなんて、可哀想な使い魔さん。どう？ 使い魔のお味は」

「ふ、ざけるな……」

「ん？」

「私を拷問するのではないのか?! こんな、こんな、命を弄ぶよ
うな……?!」

「それさあ、あんたが言える事じゃないよね」

愕然として捲くし立てたグラムに、くすりと笑ってユリアが言
う。事実だけを並べ立てるのではなく、何処までも心を抉ろうと、
嬉々として、言葉という刃を逆手に持って。

「幼い女の子を、自分の復讐の為に丹念に育てて利用したのに比べ
れば、可愛いものでしょ? まあ、その復讐も遂げられなかったみ
たいだけださ。それに、私はあんたを拷問するためにわざわざ準備
してあげたんだよ? 感謝してほしいくらい」

コロコロと変わる口調が、ユリアが如何ほど興奮しているのかを
示していた。

グラムは、理解できないという風に見開き、そして何かを
言おうとして口を開いたり閉じたりさせていた。

これより数週間の間、彼は死線を彷徨うことになる。その間、安
息は訪れないだろう。

「ただいまー。うー、さむさむっ……」

重厚な扉を押し開け、アリサは金色の髪に付いた雪を軽く振り払って中に入る。

タイミング悪く、自身の執事である鮫島には別の仕事を申し付けていたため、たまにはということ一人で歩いて帰ってきたアリサだったが、途中でたつぷりの雪に降られてしまった。

防寒対策は出来ていたとはいえ、それでも冬は寒い。一二月も中頃ならば尚更だろう。

「お帰りなさいませ、アリサお嬢様。湯船の支度は出来ております」
「あ、ありがとうノエル。お湯、頂いちゃうわね」

今ではもう当たり前となった、『友人宅』のメイドとの会話。既に、ここ月村邸はアリサの第二の家と言っても差し支えない。

ノエルに、背負っていたランドセルと羽織っていたコートを渡すと、そそくさと暖房の効いた邸内を早足で歩いていく。向かうのはもちろん浴場。

脱衣所ですぐに衣服を洗濯籠へと放り込み、一糸纏わぬ姿となったアリサはそのまま浴場へと入っていく。

扉を開けた途端に押し迫る、暖められた大気を心地よく感じながら、アリサは感じ慣れた魔力が浴場内にあることを感じて声を掛けた。

「サタン？ いるんでしょ？」

「アリサ？ もう帰ったのか」

「なによ、人を邪魔者みたいに」

「そんなこと言ってないだろう。ほら、入るなら早く入らないと、体が冷えるぞ」

湯に浸かっていたのは、ロールした髪がストレートに直っているサタンだった。

姿を確認したアリサは、湯に波を立てないようにそっと体を入れる。

「ふう……。温かい」

「外はどうだ？」

「無茶苦茶寒いわよ。今年は冷えるわね」

「火を扱っお前にとっては余計だろう？」

くつくつと笑うサタンに、アリサはそっと肩を寄せる。じんわりと、触れたところから人の温もりが伝わってきて、心なしかアリサの表情も柔らかくなっていった。

「ねえ、アルマの様子は怎なの？」

「今のところ安定しているらしい。もうしばらくすれば更に安定した個体に移れるらしいぞ」

「そうすれば、ようやく治療ポッドともおさらばってわけ？」

「だろうな。次の個体は錠剤の摂取だけで副作用を完璧に打ち消せるらしいからな」

そりやすごい、とアリサは笑う。

また家族が増えるのだ。アルマという、不幸を打ち破って奇跡を自分の下に引き寄せた、幸運の黒猫が。

それからしばらくわいわいと雑談を楽しんだ二人は、のぼせてしまっ前に上がることにした。

湯船、と言うには些ちかか広いそこから出た二人は、揃って広めの脱衣所で体を拭いていく。絹のような美しい肌に付いた水滴を柔らかかなバスタオルで拭き取ると、アリサは柔軟剤の効いたバスローブを素肌に、サタンはいつもどおりの制服をワイシャツの上から身に纏

う。

「それじゃあ、私は部屋に戻る」

「うん、それじゃあ。また晩御飯のときにね」

アリサはそうサタンに言葉を掛けると、サタンとは別の方向へ歩いていく。その先にあるのは、地下室に繋がる大きな扉。

研究室と銘打たれでかどと掲げられた看板の下のそれを押し開けると、空調の効いた階段をトントンと下りていく。さすがに暖房設備もなしに地下室になんて入れば、寒くていられない。

「ただいま、皆」

「あら、アリサ。お帰りなさい」

「お帰り、アリサ！」

作業に勤んでいたプレシアとアリシアが、入ってきたアリサの方を向いて言う。あいも変わらずその作業の手は止まることもなく治療ポッドの調整を行っている。

その中にいるのは、休眠状態のアルマ。現在は肉体の調整中らしく、会話をすることは出来ないようだった。

あの日以降、アルマはこうして度々治療用ポッドに入っては肉体の調整を行っている。そうしなければ、未完成のホムンクルス体が人外魔境とも言える月村邸の空気に馴染めないのだ。

もう少しでデータ収集が終わり、新しい肉体の調整も終わるため、年末までにはきちんとした肉体で出てこられるらしい。ちなみに、その隣に二つ三つ並んでいる治療用ポッドに入っているホムンクルス体は、アルマの調整が終わり次第入魂するだけで動くように調整されるらしい。

「フェイトは委員会で遅くなるって」

「頑張ってるわねえ」

「それで、どうするの？ あの話」

手近な椅子を引っ張り出すと、どさつと無造作に座り込む。とてもお嬢様らしからぬ座り方だが、会食の席でもないのに一々礼儀作法を気にする方が野暮と言つものだろう。

話を振られたプレシアは、やや疲れたように溜め息をついて口を開く。

「私個人としては行かせてあげたいわ。あの子の初めての我が俣なんだもの。だけど、ねえ……」

「確か、中学校あがったら、だっけ？」

「フェイトはそう言ってるのだけど、やっぱり心配なのよ……」

「アルフもいるし、大丈夫だと思うんだけど。向こうで部屋借りるなりなんなりして、許可とってこっちと繋ぐこととかできないのかしら？」

二人が話しているのは、つい先日フェイトが言い出したことについてだった。

『私、管理局で母さんの無実を証明したいんです！』

突然言われたプレシアは驚き、あたふたと考えを纏めることできずにその場を右往左往していたため、結局その場は丁度居合わせた忍が納めたのだが。

ともかく、そんなフェイトの言い分では「プレシアは無実なのだから、自分が管理局の執務官になって証明する」というものだ。

プレシアはいたくそのことに感動した、のだが。そこはやはり母親としての思いもあり、プレシアとしては高校卒業までは待つてほしいらしい。

フェイトとは言えば、それに譲歩し、せめて中学に入ったら行かせてほしいとも言ってきている。結局のところ、お互いがお互いを思うからこそ、譲り合えていないのだろう。

「どっちにしても、色々と工面しないといけないわよね。お師匠様はどう言ってるの？」

「栞は『好きなようにやらせたらいい』と言っているのだけど……。やっぱり心配なのよ」

どちらにしても、やはり進路の問題がある。

魔導師の適正としてはフェイトはかなり優秀だろう。魔術の勉強も初歩とはいえこなせている。しかし、それと人付き合いは違う。まして中学にあがった直後など心的な負荷が大きい時期だ。なおさら悩んでしまう。

「まあ、結局は親子の話し合いしかないんじゃない？ 私たちがなんと言おうとせ」

「そう、なのかしらね」

「そういうことよ。それじゃあ、私は戻るわね」

「ええ。忍がおやつ用意してるって言ってたわよ」

「ほんとに？ やった」

軽くガッツポーズしつつ、アリサは部屋から出て行く。

「……まあ、さあ。フェイトには少し好きなことやらせてあげればいいと思うよ。まして、フェイトは魔導師としては一級品以上の能力を持つことだって夢じゃない。なら、社会勉強も兼ねて本場に出してみるって言うのも手じゃないかな」

「はあ……。娘に諭されるって、なんだか複雑よ」

精神年齢三十路越え、肉体年齢五歳の娘に妹の教育方針を提案される。

なんだかなあ、な気分になったプレシアであった。

「こんなものか」

軽く息を吐き出し、背を伸ばす。パキパキと背骨が鳴った。

書類仕事もこれで終了、大分無理を通してしまったが、闇の書が消え去ったことに比べれば些細なことだ。

自分をそう慰めながら、僕、クロノ・ハラウンはアースラで仕事に励んでいた。

「クロノ君、調書終わったよ。リインフォースさん、なんか凄い丁寧な人だった」

「僕は、まず管制人格とこうして話が出来たことが驚きだよ。調書はいつものところに上げておいてくれ」

「はい」

ひよこひよここと去って行くエイミイを見送りながら、これからのことを思案する。

まず、高町なのはと八神はやて、そして夜天の書の守護騎士一同。彼女たちは、四月で時空管理局に入局してもらうことになっている。その前に三カ月間学校に通って、基本的なものをしっかり学んでも

らうことになっているが。

闇の書が夜天の書に改修されたことについては、なんとかごまかした。というか、夜天の書自体が別のものとして存在して八神はやての元にあり、同時に八神はやての所持していた闇の書の改修を行った、という筋書きだ。

このことについて随分質問を受けたが、逆にロストロギアのことを一から十まで説明できれば、それはロストロギア指定されていないだろうと返すと、すっかりだんまりを決め込んでしまったのだ。

ともかく、これで闇の書に関してはある程度解決だ。地球の裏世界代表とも言える【魔女】、イリアとの対談で八神はやてとその家族の身柄を引き渡したいと言われたときには驚いたが、スケープゴートの扱いも兼ねたその扱いについては彼女達本人も分かっているらしいから何も言わなかった。

高町なのはについては、これ以上地球においておくべきではないとの判断から、ミッドチルダでしっかりと魔法の勉強に励み、なおかつ地球での勉強、友人関係もおろそかにしない条件で、高町なのは個人の願いである「魔法をもっと勉強したい」という願いが果たされることになった。

尤も、それも表向きは八神はやての護衛兼管理外世界で発見された魔術師のスカウトということになるのだが。

「とにかく、これで片はついたか。思ったより無茶でなくて良かった」

全く持って、僕は自分の言葉に諸手を挙げて賛同したい。

今回の優秀な人材発掘で先の不名誉は帳消しになったらしく、それどころかある程度昇格も視野に入れられているらしい。嫌な仕事場だ。

ともかく、これから彼女達にはどのような仕事場が向いているのかの適正を見て、それから勉強、その後管理局に就職という形になる。まだ地球では義務教育期間のはずだが、その辺は魔術師の分野が絡んできているのだろう。

溜め息を一つつき、コーヒーを一口。

グレアム提督のことは、まだしばらく吹っ切れそうにない。

だが、彼も自らの業に飲まれたのだと、そう考えて無理やり吹っ切るしかなさそうだった。

38話 終わりを告げる雪（後書き）

今回はクリスマスか、それとも元旦か？

分かりませんが、その辺のお話書くと思います。

追記：アルマの生い立ちは次回。素で忘れてました。好きなキャラなのに。

39話 クリスマスパーティー そのいち（前書き）

なんか、すっごい早くできた。
なんぞこれ。

アリスのキャラ崩壊警報発令です。お気をつけあそばせ？

39話 クリスマスパティー そのいち

深々と降り積もる雪。我が月村家にも、それは平等に積もっている。

二〇〇五年、一月二十五日。そう、この日はクリスマスである。

「ということ、アルマの『ようこそ月村家へ！ 記念パーティー』と、クリスマス会をいっぺんに行いたいと思いまーす！ はい、アルマちゃん一言！」

壇上にいるアリシアが、さも当然のように隣にいた黒髪で和服姿の女性へとマイクを渡す。

渡された女性、アルマは当惑したように目を白黒させながらも、何とかマイクを受け取って口を開いた。

「あー、その、今宵はこの世界で言うクリスマス、とやらだそうだが、ともかく楽しんでほしい。それと、わっちを家族として迎え入れてくれた月村の者たちに、無上の愛と感謝を捧げたい」

若干頬が高潮しているのは、緊張からだだろうか。アルマは言葉を終えるとそそくさとマイクをアリシアへ返し、あらかじめ用意されていた席へと戻る。

会場は月村家の食堂。とは言っても、今はちょっとした式場の様相を呈しているのだが。

このクリスマスパーティー自体は開くつもりだったけれど、アリシアの発案でアルマの記念パーティーにもなってしまった。まあ、アルマも喜んでいるからいいのだろうけれど。

参加者は月村家とテストロツサ家、バニングス家に高町家、そして八神家、と。随分豪勢だ。ちなみに、今日ぐらいは両親も帰って

きていて、各家の保護者も集合している。

ちなみに、椅子は疲れた人が座れるように多めに用意されているけど、基本的に立食会だ。そして、こんな日だからワインなんかもチヨロつと飲めたりする。飲むのは、飲酒になれてる人間だけだ。なのはとかはやてには飲ませられないのでオレンジジュースやサイダー、ジンジャエールなんかでお茶を濁す。

「どう？ アルマ。前に出た感想は」

会食が始まってしばらくして、私はまだ椅子で息を整えているアルマにそう声を掛けた。

「ああ、ぬし様かや。やはり人前で話すと言うのはなかなか緊張するものじゃの。昔はこうではなかつたんじゃが」

「ずっと一人だったんだもの、仕方ないわ。それより、今を楽しまなきゃ」

アルマの正体は少し複雑だ。

人格と記憶は夜天の書の作成に携わった科学者のもので、その科学者が生前作り上げたユニゾンデバイスがブルーベル。

防衛プログラムが暴走したときにそれを抑えるストッパーの役割を与えられて、人格と記憶がコピーされたAIがそこに埋め込まれていたんだけど、残念ながらバグで身動きがとれず、それどころか長い時間の中でAIも侵食されかけていたらしい。

私の渡したコア・エネルギー回復薬がおかしな作用をして、一時的にバグの動きを止めたおかげで、ブルーベルの夢に介入して助けを求められたんだとか。この辺は私にも良く分らないわ。

で、後はその人格と記憶のデータを魂に変換、抽出してホムンクルスに押し込んだ、と。その前の体はシヨゴスで出来ていたから、アレは焼き払った。研究よりもその場の対処が優先。

今はもうすっかり元気になって、ホームクルス体もこの力場に順応できるほど丈夫になっている。この分なら、週一回の錠剤投与で問題ないだろう。将来的には薬を使わずに自身で維持できるようにしたいと、プレシアが息巻いていたけど。

「……ぬし様、一つ相談なんじゃが、よいかや？」

「なあに？」

「わうちの中には、まだ防衛プログラムの残滓が残っておる。それを外に出してやりたいのじゃが……」

「ええっと、どういうこと？」

「防衛プログラムには、核となる部分が存在しておるのじゃ。その部分だけは、データがまだ残っておってな。しかも、この体に移った影響なのか、自我が芽生え始めておるのじゃ」

なぜそれをこの子はこの場で言うんだろう。もうちょっと早めに言うてほしかった。

「むう……。それ、後どれぐらい待てる？」

「そうじゃな……。年明けの少し後くらいまでじゃろうか。わうちの体がどうこうというわけではありませんが、わうちにとっては娘のようなものじゃ。出来るなら早はやう出してやりたいのじゃ」

「そう……。わかった、後でプレシアと相談しましょうか」

「本当かや！？ ありがとう、ぬし様！」

そのままぎゅっ、と私を抱きしめるアルマ。ちょっと、あの、苦しいんだけど。

どんなことをしていようと、私の身長はまだまだ子供なわけで、胸に顔が挟まれて苦しい。

「んっ、アルマ、苦しっ」

「あ、ああ、すまぬぬし様！ 苦しかったかや？」

「え、ええ、大丈夫よアルマ。それじゃあ、パーティーを楽しんでね」

「うむ、そうさせてもらおうとするかのっ」

眩しい位の笑顔でそう言ったアルマは、私を解放するとひよこひよこ料理をつまみ食いしに歩いていった。もうすっかり体の調子はいいみたいね。

ちなみに、アルマが私を「ぬし様」と呼ぶのは、ブルーベルの主なら自分の主だという謎理論かららしい。悪い気はしないけど、なんだかなあ。

アルマの後ろ姿を見送った後、私は久しぶりに会う両親の元へと向かった。

「お久しぶりです、父様、母様」

「おお、大きくなったな、栞」

「本当に、元気にしてた？」

「はい。父様も母様もお変わりないようで」

「はっはっは、こんな爺さんがまた変わったら、それこそ事だろう」「事業の方はどうなっているのですか？」

「なに、順調に進んでいるさ。もう少しすれば、私がいなくともきちんと動くようになる」

両親は、今は海外で事業を起こしているらしい。

日本には既に月村工業って自分の会社があるけど、それと連携できるようにまた一から起業して、今は大分いいところまで来ているんだとか。まあ、例え潰れても問題ないレベルで蓄えはあるけど、やっぱり潰れてほしくはない。親が毎日職探すところなんて見たくないから。

「父様、母様、魔法のことは聞いてますか？」

「ああ、忍からメールと電話でな。ここも随分凄いことになってきたじゃないか」

「私たちも凄いことになってますけどね。私達がない間に、ここもにぎやかになりましたね」

アリサやテストロッサー一家、アルマなんかを住まわせることについては、特に何も言われなかった。やや放任主義的な部分もあるし、いいんだらうけど。

「それじゃあ、私は他の人のところへ挨拶に行ってきます。楽しんでいってくださいね」

「……すっごいよそよそしい口調で言われた気がしたのだが」

「だって、うちにいないじゃないですか」

にっこりと微笑んで言うと、父様は四つん這いで「うぐああああ……」なんて呻いてた。

「ごめんなさい、父様。私にも、少しは父親の温もりとか欲しくなる時はあるんです。今はもうないですが。」

「こらっ栞？ あんまりお父さんをいじめないの」

「はあい。すいません母様」

こつん、と軽く頭を小突いたのは、私の母。昔に見た顔から全く変わっていないお美しい美貌です。ほんと、夜の一族ってチートもいいとこですよ。美肌チート。

いたずらに笑った私は、そのまま他のテーブルへと歩いていく。

「こんばんは、デビットさん」

「ああ、栞ちゃん。娘がお世話になっているよ」

「いえいえ、こちらこそ。本日はご臨席いただきありがとうございます。」

「せっかくのクリスマスパーティーだ、さすがに父親としては出なければまずいだろう?」

朗らかに笑うデビット・バニングスさん。初老の紳士と言うようなゆったりとした雰囲気を持った男性で、バニングスグループのトップでもある。

四〇を過ぎていまだ衰えを見せないその気概には、私も舌を巻くばかりだ。私に衰えはないけれど。少なくとも一〇〇年はね。

「そういうものなのですか?」

「そういうものなんだよ、父親と言うのは。アリサの様子はどうかい? 本人は大丈夫だと言っているが、師匠から見た感想は?」

「そうですね……、非常に勤勉で優秀、模範的で師としても誇らしい限りです。若干危なっかしいところも現在はありますが、それも時間の問題でしょうね」

「そうか、それはよかった。アリサの腕が飛んだと聞いた時には、引き裂かれる思いだったよ……。忙しさで日本に戻れない自分を、殺してやりたくなった」

「申し訳ありません、私がかかりと守っていれば、ああいったことは起こらなかつたかもしれませぬ」

苦々しげに自分を責めるデビットさんに、そう返す。

あの時のことを悔やんでも仕方ないとは言え、今のアリサの中に若干の違和感を残しているのは事実だ。一重に私のネームバリユールの大きさを図り違えた自分が許せない。

けれど、だ。この海鳴で、二つ名持ちの【魔女】が睨みを効かせてこの町で、何処の馬鹿がその【魔女】の弟子を襲撃しようなんて思うものか。

「いや、栞ちゃんはよくやってくれているよ。相手の素性は割れていないんだろ？」

「ええ。世界中のデータを探しても、影すら見当たりませんでした」「君達【魔女】がそこまでして見つからないのなら、それ相応の相手と言っことじゃないか。今こうしてアリサが元に戻って生きていてくれるだけで、私は満足だよ」

その後、イギリスの時計塔で絞り込んだはいいものの、そこからは結局世界中データを飛ばしまくらなければならぬはめになったのだ。

しかも、結局犯人は見つからずじまい。思い返すとまたムカムカしてくる。

「ほら、シロウ達にも挨拶してくるといい。私はここで楽しませてもらうから」

「あ、はい。それではどうぞ、今宵をお楽しみくださいませ」

ドレスの裾をつい、と持ち上げ一礼。言い忘れていたけど、今の私はドレス姿。なんていうかな、典型的なお姫様ドレス。但し黒だ。私は黒や紫が好きだ。嫌いな色はあんまりないけど。

デビットさんから離れ、視界の隅にいた土郎さんへ声を掛ける。

「こんばんは、土郎さん。お変わりないようで」

「ああ、栞ちゃん。お招きありがとう」

「いえいえ、日ごろお世話になってますから。たまには、自分で作ったもの以外のケーキも、召し上がってみてはいかがですか？」

「ははは、そうさせてもらうよ。ところで、なのはのことなんだが……」

柔らかな笑みから一転、真面目な表情に変わった土郎さんに、軽く頷いてから手近な椅子に座るよう促す。

柔らかな椅子に腰を落ち着けると、私の方から口火を切ることにした。

「新学期が始まる前に、訓練学校に通ってもらって向こうの常識と規則を身につけてもらい、その後囑託魔導師として現在の生活との二重生活を行ってもらおう、と。大体このような感じになってますが」「少なくとも、地球から追い出されることはないんだね?」

「今のところは。しかし、中学を出た時点でミッドチルダへの移住を促される可能性があります」「

「そうか……」

囑託魔導師と言えど、厳しい試験があり、それにパスしなければいけないのが実情だが、少なくともその筆記だけはなのにも問題ないだろう。なんだかんだ言って頭はいいから。

どうせ魔法のことになると周りが見えない魔法バカなんだから、このぐらいは取っておいて貰いたいものだ。その方が、今のなのにはいい筈だから。

「だが、少なくとも中学卒業までは大丈夫と言うことか」

「そういうことです。悪い結果にはならないと思いますが」

「なってみないと分からない、か。なのも前向きなようだし、好きにやらせてみるとしようか」

そう言って、また柔らかな笑みを作る土郎さん。全く、強い人だ。

「では、私はこれで。また色々考えなければいけないこともありますので」

「ああ。楽しませてもらうよ」

「それでは、良い夜を」

デビットさんと同じように一礼すると、音を立てずに絨毯の上を歩いていく。

そう言えば、ユーノもそろそろミッドチルダに戻っておきたいって言ってたか。

会場の青いウィンドウを開くと、すぐにユーノを呼び出す。今の時間ならどこかの隠れ家にいるだろう。

『あ、はい、もしもし』

「はるー、ユーノ」

『栞さん、どうしたんですか？ こんな時間に』

「そういうあんたはなぜエプロン姿なのよ、無駄に似合ってるわね」
『師匠の夕食作りです。最近レシピが増えまして』

いやあ、なんて言いながら照れるユーノ。こいつ、弟子の生活が板についてやがる……?!

まあ、んなことは置いといて。

「主夫かお前は。まあいいわ、前にあなた、ミッドに戻りたいって言ってたわよね？」

『あ、はい。それが、どうかしましたか？』

「それって、なんで？」

『あの、以前この世界にくる前、本局にある無限書庫の噂を聞いたんです。それで、出来ればそこに行ってみたいと思ひまして』

無限書庫か。そう言えばそんなのもあったな。

『話では、なのはもミッドで魔法を学ぶみたいだし……。無限書庫を使えば少しでもサポートできるかと思って』

「なるほどね。惚れてるの?」

「へっ!? い、いや、そういうわけじゃ!?!?」

「いいっていいって、隠すな隠すな。じゃあ、今聞いてみましょうか。人材不足の管理局さんに」

そう言って、もう一枚ウィンドウを開く。

繋げる場所は、まだこっちに留まっているアースラの船内。

「よ、つと。クロノ、見えてる?」

「君はまたそうやって、予告もなしに顔を出すな。それで、今度は何だ?」

「さっすがクロノ、話が早いわ。無限書庫って、今どんな感じなの?」

「無限書庫? なぜ君がそのことを?」

「ユーノがそこを見たがってるのよ」

「珍しいな、君が男の願いを聞き入れるなんて」

「気まぐれよ。それに、この際だから問題はいつぺんに解決したいじゃない?」

「まったたく……」

画面の向こうでコーヒを飲んでいたクロノが、そう言って呆れ返る。ほんと、人間らしくなっただわよね。

「まあ、現状としては深刻な人手不足だな。補助系の魔法、特に検索魔法なんか得意な奴がいらない上に、いたとしても仕事量と給料が見合わないって事でやりたがる奴なんかいやしない」

「へえー……。ユーノ、あんたできそう?」

「中を見てみないとどうともいえませんが、多分大丈夫だと思えます。命の危険があるわけじゃないんですね?」

「それはない。あくまで書庫だからな。というか、久しぶりに君の

顔を見たぞ』

苦笑いしながら言ったクロノだったけど、そこからの仕事は速かった。

ユーノはなんとかして道楽を説得すると息巻き、クロノはそれが出来次第、本局の無限書庫へ迎える手はずを整える。本来なら色々書かないといけない書類もあつたらしいけど、その辺は執務官権限で後回しにしたらしい。さっすが。

結局、来週にでも無限書庫へ言ってみるという話で纏まり、通信は終わった。

私がおぼろげに覚えてる原作知識でも、ユーノは確か無限書庫にいたはずだし。というか、いないと回ってなかったよね、あそこ。とりあえず、これで一通り根回しは終わったか。疲れた。

「おししょーさまー！」

「わっ！？ ど、どうしたのアリサ!？」

「えへへー、ひっく、なーんかふわふわひてうよおー？」

「あ、やばいこの子酔ってる。うわ酒臭っ!？」

突然寄りかかってきたアリサがやたら明るいと思つたら、ものつ淒い酒臭い。恐ろしく酒臭い。この子お酒慣れしてると思ってたけど、意外と弱かったんだ。修行中には良く飲むのに。ワインには弱いのかしら？

「彘、大丈夫？」

「大丈夫じゃないわ。助けて」

「う、うん。ほら、アリサちゃん」

「やーだあー！ おししょーさまといっしょにいるー！」

「……はあ。仕方がないわね、アリサの面倒は私が見るわ。すずかは他に年少組で飲んでる人がいないかチェックしてもらえる？」

通りがかつたすずかに助けを求めるも、がっしりと私を掴んで放さないアリサを見て仕方なくそういう私。

「うん、わかった」

苦笑気味に答えたすずかは、テストロッサ家の方へと向かった。まあ、向こうならプレシアが何とかするでしょう。

すっかり、アリサって酔うと結構可愛いのね。目がとろんとして

「ほら、アリサ。ちゃんと立って」

「んう、眠い……」

「仕方ないわねえ……。ほら、負ぶさって」

「んー……」

既に目を擦っているアリサに溜め息を吐きつつ、背中に乗るように言つと、案外素直によじ登ってくる。なんだか庇護欲をそそられるわね。

そのままぐいっと立つと、開きっ放しの扉を抜けてアリサの自室へ。私の身長は結構高い方だから、アリサの足が下についてしまうこともない。

「ねー、おししょーさま……?」

「ん、なあにアリサ?」

「……だあいすき」

「ふふっ、ありがとう。私も好きよ」

まるで猫のように目を細め、私の頬に頬ずりするアリサ。……願わくば、この子の平穏が続くことを。

翌朝。

「……え、ちよ、んぎゃあああああああああああ！？」

自分の記憶に悶絶し、麗しき少女の朝一番の叫び声が邸内に響き渡ったのは、余談である。

39話 クリスマスパーティー そのいち（後書き）

ふ、ふふふ、そのいちだってよ。

まだ続くんだ。うん。

いや、今日じゃないぞ？ 出来上がり次第上げます。クリスマスパーティー、栞の回はちよつとした紹介に終わってしまいました。

次回は、誰を主軸に据えようか。

この人が見たい、なんてのがあつたらリクエストどうぞ。表記されている一家は全員出てます。

40話 クリスマスパーティー そのに

「乾杯はせえへんのかな」

「まあいいんじゃないかな」

「そかそか」

隣でのほほんとしていている車椅子少女と一緒に、首を縦に振ってみる。

「こんにちは、すずかです。今日は、最近随分と仲良くなったはやてちゃんと一緒にいます。クリスマスパーティーだけど。」

「にしてもすずかちゃん、きれーやなー」

「え？ あ、ありがとう」

今の私の服装は、栞と同じような、でも若干デザインの違いの違う白いドレス。

栞の黒は汚れが目立つけど、白は尚更だ。でも綺麗だからいいかと納得してしまう辺り、私も大分いい加減だと思う。

はやてちゃんは、普段と変わらない服装。というか、ドレスとかスーツ着てるのはアリサちゃん家とうち、あとフェイトちゃん達くらいだと思う。なのはちゃんも普段着だし。でも、土郎さんはスーツだよ。ビシッと決まってるって言うか、率直に言うとかっこいい。

「……今年は、ホントにいろんなことがあったなー」

「はやてちゃんにとっては、特にそうだね」

「ほんまや。私となのはちゃんはこっちと向こう行き来せなあかんけど、まあ。それぐらい許してもろたと思わなあかな」

「向こうに行っても、元気でね……！」

「今生の別れみたいに言うなー！ 向こうに移り住むわけやないんやから！」

「がー、と後ろにライオンの振りをした小動物が見えそうなくらいの勢いで言うはやてちゃん。」

「そう言えば、他の皆は？」

「なんや忍さんに連れてかれたで？」

「……まあいつか」

「多分ドレスとかスーツとかだろう。さすがのお姉ちゃんだって、こんな真昼間からマッドの血を騒がせるようなことはしまい。多分しない、と信じている。」

「それはともかくとして、この料理の量は凄まじい。だって、よくテレビに出るホテルの式場で出てくる料理、あれぐらいすごい。ノエルとファリン、それとベルゼの三人だけでこれを作っていると言うのだから、つくづくうちは滅茶苦茶だと実感する。」

「はやてちゃん、向こうに行って何かしたいことってあるの？」

「ん？ せやな、誰かの役に立ちたいな。私、こんな体やる？ せやから、リハビリ終わってちゃんと歩けるようになったら、まずは守護騎士の皆にお礼言っつて、それからいろんなことしたい」

「そっか。それじゃあ、頑張つてリハビリしないとね」

「うん！」

「普段は大人びた、と言うかどこか一步先にいるようなはやてちゃんが、今だけは私よりも小さな女の子に見えて、なんだかとても得した気分になった。」

「それから少しの間はちびちびと白ワインを、はやてちゃんはオレソングジューズを飲みながらわいわいと話していると、視界の隅にこ

そこそとこちらへ近づいてくる五人組が見えた。

「あ、皆さん。どうしたんですか？」

「っ！？ ずずか、もう少し声を……」

「ほんまや、そないなとこでどうしたんや二人とも？」

「主はやてまで……！」

「……仕方ない。行くぞ」

「いや、しかしだな……」

「何してるのよ、二人とも……」

「これ、騎士甲冑でよかつたんじゃねーか……？」

なにやら物陰でごそごそやっていた五人だったけど、結局諦めたのかリインフォースさんからこちらへ戻ってきた。

そのリインフォースさんの姿は、一言で言えば本物のお姫様。

肩の辺りは紐で、そこから下を覆い隠すようなワンピースタイプ、くすんだ白のようなイブニングドレスを纏ったリインフォースさん。その綺麗な長い銀髪が白を美しく映えさせていて、とっても似合っている。

そして、その首には小さな小さなダイヤをパラパラと散りばめた様なネックレス。装飾品つて意外と安いものから、予想外に高いものまでまちまちなんだって。私はその辺は良く分からない。アリサちゃんの方が詳しいんじゃないかな。

よく見ると、顔にも違和感がない程度に薄くお化粧がされていて、それがまたリインフォースさんの白い肌に似合っている。

「綺麗ですね、リインフォースさん」

「そ、そうか？ 私は、綺麗なのか？」

「うんうん、よう似合っとるで。どこのお嬢さんかと思ってしまうた」

「い、いえ、そんなっ」

私とはやてちゃんが口々に褒めると、リインフォースさんの頬はかあつとリンゴの様に真っ赤に火照る。あ、可愛いな。

「あっはっはっは、なーにを赤くなっておるのじゃ？ おぼこい娘じゃの」

「なっ、お、お母様!？」

「…………へ？」

「おお、そう言えばぬしを組んだのもわっちじゃったか。そうじゃな、そういうことであればわっちはぬしの母と言っことになるかや？」

突然出てきたアルマさんが笑って言ったかと思うと、リインフォースさんは慌てたようにシグナムさんの後ろに隠れる。

「なんだか、小さな子が親の背中に隠れるみたいで可愛い。」

「な、なにを隠れておるのかや？」

「あ、す、すいません……。つい」

「ついで隠れるんかい。って、シグナムもえらい男前になったなー」「はっ、しまった！ リインフォース、謀ったな!？」

こっちも顔を真っ赤にして、リインフォースさんにがーっと怒る、振りをする。ほんとは怒っていないけど、恥ずかしいからそのポーズだけでもしておきたい。そんな感じだ。

そんなシグナムさんは、逆に男装の麗人と言った感じ。長い髪はそのままだけど、胸はさらしか何かで抑えているんだろう。士郎さんのように動きやすい服装じゃなくて、文字通りの礼服みたいなものを着ている。

「なんだか、シグナムさんとリインフォースさんって、お姫様と執事みたい。ちょっといいかも。」

「……すずか？ なぜ私の方をみて赤くなっているのだ？」
「え？ あ、ううん。ちょっと」

しまった、気づかれたか。さっきまでならお互いにわたわたするシグナムさんとリインフォースさんが見られたのに。

シグナムさんは、最初は私のことを月村って呼んでいたんだけど、それだともんどくさいからって私から頼んで名前に変えてもらった。フェイトちゃんもおんなじかな。アリシアちゃんとかプレシアさんと分けられないからって。

「なあ、あたしにはなんもなしかよ？」

「うんうん、ヴィータも似合っとするで！」

「ほ、ほんとか？！」

「うん、ほんと。とっても可愛いよ」

ヴィータちゃんは、大分赤くなってはいるけどそれもまた可愛い。可愛いじゃなくて、可愛らしい。

「不思議の国のアリス」の赤ヴァージョンみたいな格好で、あれの青い部分が赤くなったようなエプロンドレスを纏っている。ヘッドドレスはないけど、それはそれで。

その後ろでただ笑っているだけのシャマルさんは、緑色を基調としたイブニングドレス。リインフォースさんのよりも、なんと言うか、セクシーだ。

そして、その隣にいるザフィーラさんには、耳と尻尾はない。あれは自由に消したり出したり出来るらしい。便利なんだね。

しかも、ザフィーラさんもスーツ姿。多分お姉ちゃんが暴走したんだろう。ご愁傷様。

「しかし、このような時間が来るとは思わなかった……。【魔女】
たちには感謝しきれないな……」

「せや、その恩を返すためにも、バリバリ勉強してバリバリ働くんや！」

「無理はしないでね？ 無茶は、止めないけど」

無理と無茶は、似ているようでぜんぜん違う。

体に疲れをためて無理するのと、ここぞって時に無茶するのの違いだ。言葉だけじゃ分かりづらいかもしれないけど、そんな感じ。

まあ、それはともかくとして。

「改めて。八神一家の皆様方、今宵は月村家主催の宴にご臨席くださり、ありがとうございます。今宵は浮世のしがらみを忘れ、一夜の夢に興じてくださいませ」

「な、なんやすずかちゃん、急に!？」

「え？ はやてちゃん達にやっておくの忘れてたと思って。多分他の皆のところには栞が行ってるだろうから」

これは、パーティーホストとしての礼の印。

栞は何かと略したりすることもあるけど、友人にぐらいはきちんとやらないとね。

「では、わっちも見て回るとするかの」

「うん、それじゃあ、アルマさん」

お互いに手を振り合って、その場から離れるアルマさん。もう体の調子は大分いいみたい。

それからしばらくの間、私は八神家御一同と親睦を深めてたわけだけど。ちらつと栞の方を見ると、何故かアリサに抱きつかれていた。ん、どうしたのかな。

「はやてちゃん、ちょっと栞のところ行ってくるね」

「あ、はい」

ひらひらと片手を振り、ほろ酔い気味の軽い歩調で栞の方へ。最近飲んでなかったから、酔いが早いかな……。

「栞、大丈夫？」

「大丈夫じゃないわ。助けて」

「う、うん。ほら、アリサちゃん」

「やーだあー！ おししょーさまといっしょにいるー！」

うわあ、幼児退行？ とはまたちょっと違う感じかな。普段甘えない分、酔っ払って甘え上戸になってるのかも。それにしても、お酒に慣れてるアリサちゃんがこんなに酔うなんて、どれだけ飲んだんだろう？

後でちゃんとお薬渡しておこう。私たちの体の調子を整える薬も用意してあるから。

私は、人一倍薬や補助魔術なんかに長けているらしい。だから、そう言った健康維持用の薬を用意するのはもっぱら私の仕事になっている。じゃあ飲まなければいいとは思っただけだね。雰囲気って大事でしょ？

「……はあ。仕方ないわね、アリサの面倒は私が見るわ。すずかは他に年少組で飲んでる人がいないかチェックしてもらえる？」

「うん、わかった」

苦笑いしつつもそう答える。多分アリサちゃん、後で真っ赤になるんだろうなあ……。

そんなことを考えつつ、視界に入ったフェイトちゃん達のところへ。

フェイトちゃんとアリシアは私と同じようなお姫様ドレス。二人

はおそろいの黒と金色だけ。

「皆、楽しんでる?」

「あ、すずか」

「お酒は……、飲んでないよね?」

「飲んでるのは母さんだけだよ?」

「うん、わかった。プレシアさんも、あまり飲みすぎないでくださいね?」

「分かってるわよ」

少しばかり上気した顔で頷くプレシアさん。今日はプレシアさんもドレスで着飾っているんだけど、紫色のドレスが凄く似合ってる。いや、若干えっちなとも思うけど。

「あ、そうだ。フェイトちゃん、ちょっとちょっと」

「え?」

フェイトちゃんの手を取って、たっただと場内の一角、比較的人気のない場所へ移動する。

「この辺でいいかな……」

「あ、あの、どうしたの?」

「この前言ってたじゃない、ミッドチルダに行きたいって。結局どうなったのかなって」

大喧嘩ってわけじゃないけど、そのことでフェイトちゃんとプレシアさんはそれなりに揉めていた。まあ、揉めていたとは言っても喧嘩したわけじゃなくて、何処となくぎくしゃくしてる感じだった。でも、今日のを見る限りそんなことはないみたい。ということは、何らかの形で片がついたって事だろうけど。

「あ、うん。とりあえず中学入学と一緒に、ミッドチルダの陸士訓練校に入ろうと思うんだ。母さんも許可してくれたし、お金の問題もないって言うてたから。かかったお金は、将来働いて返すけど」「そっか。でも、無理はしちゃだめだよ？ 体は大切に」「うん、わかってる」「それと……、ついでにいい人引っ掛けてくれば？」「んぐっ！？ っけほ、けほっ！」

にやっと笑って言ったその言葉に、オレンジジュースを両手で慎重に飲んでいたフェイトちゃんが思わず噴出す。

反射的に障壁を張ってそれを全部防御、四角形に結界を作って絨毯の上に零れないようにする。私、こういう小技ばかり上手くなってる気がする。

栞は「それも立派な魔術よ。誇っていいわ」なんて言うてるけど。痛いのは嫌だけど、やっぱり私も魔術師の端くれだから。何か別のことが出来るようになりたいな。

「で、大丈夫？」

「す、すずか、いきなりなに!？」

「この前ドラマでやってたから、ちょっと言うてみたかっただけー」「……もうっ！」

ちょっと起こった風なフェイトちゃんだったけど、顔は笑っていた。とりあえず形だけでも起こっておこうって事なのか。

「すずかは、将来どうするの？」

「んー、とりあえず月村工業を継ぐのかな。お姉ちゃんが継がなかったらだけど」

「じゃあ、忍さんが継いだら？」

「栞の補助、かな。一応魔術師だし」

どちらかというところ、栞の補助の方がいい。その方が栞と一緒にいられるし、何かあった時守れるから。

栞は強いし、私なんかじゃ役に立てないかもしれないけど。それでも、私は栞の傍にいたい。

「そっか。私は、執務官になっていつか母さんたちとミッドで暮らしたい。母さんの故郷だから」

「じゃあ、お互い夢があるんだね。頑張ろう?」

「うん!」

えへへ、と笑って、私は手に持っていた白ワインを一口。

「それじゃあ、はやてちゃんのところに戻るね」

「うん。それじゃ」

フエイトちゃんと別れて、はやてちゃんのところへ。

それからパーティーが終わるまでの間、私ははやてちゃんやその守護騎士達と、色々な話で盛り上がっていた。

この幸せは永遠に続くものではないかもしれないけど、私は幸せを目指して進んでいくんだ。

40話 クリスマスパティー そのに（後書き）

今回はさすが視点。ちょっと独白も入ってました。
もうすこし続くよ。

空白期の中で、栞たちのコメディー回を何度か作るつもりです。
その中で見たい、こんなのはどうか、と言ったご意見ございましたら、どしどし感想にお書きくださいませ。
それでは、シーユーアゲイン！

41話 クリスマスパーティー そのさん そして……？（前書き）

大変遅れました、クリスマスパーティー編ラストです！

といっても、今回は半分以上が別のお話なのですが。ついでにいつもより短いんですが。

それではどうぞ！

P.S.

サブタイトルの話数が間違っていたので、修正しました。

41話 クリスマスパーティー そのさん そして……？

「みんな元気だなあー。この体じゃ持たないよ」

パーティーが始まってしばらくした頃、すずかちゃんを見送った私はどかと椅子に座り込んでジンジャエールをぐいっと飲む。やっぱり炭酸はいいよね。

ちなみに、ジンジャエールなのは気分。ほら、私って中身三十路だから、お酒飲んでる気分にはなりたいわけよ。体は五歳児だから、絶対飲めないんだけど。飲んだらヤバイし。

「アリシア、疲れたのかや？」

「あ、アルマ。うん、ちよっとね」

「ふむ、まだ体は幼子じゃ、仕方あるまい。隣いいかや？」

「どうぞ？」

失礼して、とアルマは私の横にあった椅子へ腰掛ける。手には白ワインの入ったグラスを持っていた。

ちなみに、私はフェイトとお揃いのドレス。私は髪を下ろして、フェイトはツインに縛っているからそれで見分けられる。

「アルマは、これからどうするつもり？」

「そうじゃな、色々したいことはあるのう。まずは、ぬし様の重荷にならぬように強くならねばならん」

「そっか。私も、もっともっと強くならないといけないんだよね。

一応栞の弟子なんだし」

「お互い、やることは山積みじゃな」

にやっと笑ってアルマが言う。

「やほー、楽しんでる？ 二人とも」

「忍お姉ちゃん！ それに、恭也さん？」

「どうしたのじゃ？ 二人して」

「いや、忍が皆のところを回ると言い出したからな」

「いいじゃない、もっと家族間交流を深めるべきだと思わない？」

「うわあ、忍お姉ちゃんだだ甘だ……。隣に座ってるアルマも苦笑いしてるし。」

忍お姉ちゃんと恭也さんはお付き合い中。特に恭也さんには、時々稽古をつけてもらっている。いやー、まだ一回も勝った事ないんだよねえ……。

まあ、肉体スペック的にダンチだし、仕方ないとは思っただけです。主観的に見て年下なわけです。なんだか複雑なんだよね。

「ねえ、忍お姉ちゃん。お姉ちゃんは、フェイトの進路のことどう思ってる？」

「ん？ そうね、あの子はあの子の好きにさせてあげたらいいんじゃないかしら？ 最後に決めるのはフェイトちゃんだけだよ」

「んー、やっぱりそうだよねえ……」

ちよつと忍お姉ちゃんに聞いてみると、この通り。こればかりは私達が口出しできる問題じゃないんだけど……、やっぱり姉としては心配なわけよ。

「しかし、プレシアさんの心配も分かる。外国に行くのだってそれなりに家族との相談もいるだろうに、まして別の国だからな」

そう言ったのは恭也さん。ああ、なのはが向こうの学校にも通わないといけないからか。向こうとこっちじゃ時差あるし、特別に栞

が転移用の魔法陣敷くって言ってたから、それほど心配することでもないと思うけどな。

私が一回目に死んでから、ミッドの話はぜんぜん聞いてないから良く分からないんだけど。

「まあ、私達は結局見守ることしか出来ないんだよねえ」

呟いて、溜め息を押し込める。とりあえず、背を伸ばすことからだ。

姉より優れた妹などいないのだ！ 身長的な意味で！

飛来する銃弾を避け、爆ぜる火花の中を突っ切って手にした剣を振り払う。何かに当たる感触は一瞬、辺りに立ち込めていた粉塵が吹き抜ける突風によって吹き飛ばされる。

その直後。

試験終了。受験者は試験準備室まで移動してください

そんなアナウンスと共に、室内が一気にライトアップされる。突然のことに、思わず暗順応していた両目をぎゅっと瞑ってしまう。

何とか薄目を開けながら後ろを向くと、すでにデバイスを解除した相棒が入り口へ歩いていっていた。

「ちょ、クリス！ ちょっとは待ってよ!？」

「遅いあなたが悪いんです。怪我はありませんね？」

「ないけどさー。なんだかとてもアレな感じだよ？」

「意味不明なことを口走らないでください」

がーっ！ と捲くし立てたい気分になったが、この無愛想な相棒相手にそんなことをしても全くの無意味だということはこの数ヶ月の付き合いで良く分かっている。残念ながら。

急ぎ足で試験室のドアをくぐると、白銀の髪を揺らして歩くクリスの横まで軽くダッシュ。そんなに距離は離れていなかったから、すぐに追いついた。

そこから試験準備室までは無言。クリスは余りお喋りが好きな性質じゃないし、私も無理やり話そうとは思わない。

無言のまま準備室に着いた私とクリスは、一礼してから開いている扉を通る。

「グレイ・ファン三等空士、並びにクリス・ヴァーミリオン三等空士、到着しました！」

「ご苦労。二人とも、とりあえず掛けてくれ」

「失礼します！」

「失礼します」

中にいたのは、私達の上司であるオディアス・グレイス一等空尉。渋いおじさんで、格闘戦も魔法戦もずば抜けて強い。だけど、老いを理由にこうして裏に回っているんだとか。私達にとっては良き上司だ。

オディアス隊長は資料から目を離して息を吐くと、ずっとこちらを見据える。その眼力に、思わずたじろぎそうになるのを何とか堪えた。

「さて、二人とも。質量兵器対策資格試験、ご苦労だった。合否判定は後日追って知らせる」

「了解です！」

「了解」

「それで、だ。他に二人に、いい知らせがある」

厳粛な表情から一転、いたずらを企む子供のような顔になったオディアス隊長がそう言ってくる。

いい知らせって、給料アップとか？

あ、ちなみに質量兵器対策資格というのは、文字通り質量兵器に對しての知識、及び物理面での対策が行えるかどうかを証明するものだ。これはその二級試験。

資格は三級から準二級、二級、準一級、一級がある。つまり、私達二人はさつきまで三番目に難しい試験を受けていたわけだ。そして、二級の試験からは魔力加工によってバリアジャケットにのみダメージが入り、実体には衝撃しか入らない状態になった実弾の雨を掻い潜って行かなければならない。

しかも、銃弾だけではなく銃口も向けられるため、メンタルが弱ければそれだけで動きが鈍る。幸い私達は地上部隊との合同での事件も取り扱ったことがあるため、実弾が飛んできたことも銃口を向けられたこともしょっちゅう、というわけではないけどそれなりにある。

「現時点を持って、グレイ・ファン三等空士、クリス・ヴァーミリオン三等空士兩名の昇格を言い渡す」

「……へっ!？」

「なに間抜けな声出してんだ。昇格だよ、しょーかく。てめえら二人とも、晴れて二等空士の仲間入りだ」

「ま、マジですか!？」

「ったく今度はうるっせえな。マジもマジ、大マジだ。だが、給料

も上がるが、責任も重くなる。まだまだ下っ端だがな」

昇給。その二文字が私の中を駆け巡っていた。

いや、昇給だよ?! お世辞にも下っ端の給料っていいとは言えないんだよ!? 確かに高いのかもしれないけど、それでも下っ端だと普通に実銃とご対面することがざらだから、命の危険がマツハで危ないわけ。まあ、これで少しは命の価格と釣り合うかな。少しは。本当に少しは。

でも、地上部隊の人たちから聞いた話だと、地上はもっと酷いらしい。確かに私もミッド育ちでも治安が悪い方の地区で育ったからそれはわかる。光と闇がはっきりしすぎているんだ、あそこは。

「まあ、部署は変わらんから、これからも今までどおりここで働いてもらうことになる。返事は!」

「りよ、了解しました! 一等空尉!」

「了解です、一等空尉」

「よし。それじゃ解散だ。二人とも、今日は帰ってよく休むように」

はっ! と威勢よく返事をする、頭を下げてから退室する。さて、どうしようかな?

なんて思っていたら、向かいから一人の女性が歩いてきた。

「ありゃ、騎士メルフィ? どうしたんですか?」

「ああ、愛しいグレイ。少し私用で。あなたはいつも可愛らしいですわね……」

ウツトリとした声で出会い頭にそんなことを言い出したのは、とても薄い金色の髪を持った女性。白い明かりが強い本局の廊下だと、廊下は青白く反射するけど、この人の髪だと金ではなく白銀にしか見えない。クリスほどじゃないけど。

で、この女性の名はメルフィ・アーグ。聖王教会の騎士で、それなりに名のある女性、何だけど……。

「それにしてもグレイ？ どうしてそんなに煤けているのです？

美しい栗色の髪が台無しではありませんか？！ いえ、もちろんクールな女性と言う面ではそれもいいかもしれませんが……」

「あ、あの、メルフィ？」

「ああ、すいませんグレイ。少し考え込んでしまったようです。しかし、本当にそれはどうしたのですか？」

「えっと、質量兵器対策資格の二級試験受けたから、それでかな」

直後、目を疑うような速度で私の手を両手で包むメルフィ。うわっ、手柔らかい……。

「そうでしたか！ よかった、どこかお怪我をしたのかと……！」

「う、ううん、大丈夫だよ。ね、クリス？」

「ええ」

一言そう答えるだけのクリス。あれ、ちょっと怒ってる？

ちなみに、メルフィとは訓練校にいた頃からの付き合いで、特別に古代ベルカ式との模擬戦を行ったときの相手だった。それが終わってからはプライベートでよく付き合うようになって、こうして友達関係が続いている。

よく私のことを「愛しいグレイ」とか呼ぶんだけど、どういう意味なんだろ。

「そ、それじゃあ、メルフィ。また今度！」

「ええ。それではお二人とも、お気をつけて」

「騎士メルフィも」

三人で互いに礼をすると、私達二人はメルフィが来た方向へ歩いていく。

このときはまだ、何も知らなかった。

相棒の抱える痛みも、世界が不条理で不合理で、何処までも醜いことも。何も。

41話 クリスマスパティー そのさん そして……？（後書き）

ということ、またなにやらきな臭いことになりそうな予感。

次回からはA's編からStS編までの空白期に入ります。さて、どれくらい長くなるか……。書きたいことが一杯です。

42話 三年後の物語（前書き）

さて、ここからは三年後のお話。
どうぞ楽しんで行ってくださいませ。

42話 三年後の物語

「……それじゃあ、母さん。姉さん。それに皆、行ってきます」
「中学の勉強もちゃんとするのよ？ 体に気をつけて、食事はバランスよくね？ それと、夜道には気をつけて」
「うん、わかってるよ母さん」

母さんは、最近凄く心配性になった。それも、きっと私の出発が近かったからだろう。

今日、私はこの地球を出てミッドへ向かう。そして、向こうの陸士訓練校に入学する。

執務官試験は陸士でも受けられるし、陸士訓練校の方が安いから、菜のお手伝いで受け取った給金で十分学費は払える。三ヶ月間の短期入学だけど、その分訓練は厳しい。

ついでに、私は向こうでアルフと二人で部屋を借りて生活することになっている。少し早いけど自立の第一段階だ。

今は一月の頭だから、ギリギリ中学校には間に合う。と思う。

「アルフ、フェイトになんかあったら承知しないからね！」

「わかってるよ。怪我なんてさせるもんかい」

「フェイト、無理だけはしないこと。おかしいと感じたら素直に医者にかかりなさいね」

「うん、ありがとう菜」

「次に会うときは、もっと強くなってなさいよ！」

「楽しみにしてるね」

「アリサ、すずか……。うん、きっと……。……ううん、必ず」

別れを惜しむのも、この辺でおしまい。じゃないと、私はきっと行けなくなってしまうから。

光を放っている魔法陣の上に立ち、そつと目を閉じた。

「それじゃ……、行つてきます！」

直後、瞼を閉じていてもわかるほどの光が溢れ、一瞬の浮遊感と共に光が収まる。

目を開いた其処には、随分と近未来的な建造物。

私と、付いてきてくれたアルフがぼーっと周囲を眺めていると、突然栗色の綺麗な髪をショートカットにした女性が近づいてきた。

「ミッドチルダへようこそ！ フェイト・テストロッサさんですね！」

「へっ！？ あ、はいっ」

「フェイト、知り合いかい？」

「う、ううん、知らない人」

突然話しかけられ、右往左往しながらも何とか答える。けど、この人誰？

「あ、すいません！ 私はグレイ・ファン空曹、クロノ・ハラオウン執務官たつてのお願いで今日一日、テストロッサ訓練生にミッドを案内するよう言われてます！」

「え、えつと、空曹って、結構な役職の方じゃ……？ そんな方が！？」

「ぶっちゃけると、私の方からも願ったり叶ったりだったんですよ。明日にはお休みがもらえる約束ですし、手早く仕事を片付ければ午後はオフ！ と言う感じですよ」

……なんだか、面白い人だな。ブルーベルに感覚近いかも？

ともかく、私は何故か空曹さんに案内されてミッドを巡ることに

なった。まあ、必要な場所だけ紹介してもらえればそれでいいし。それにしてもクロノってば、案内はいらないうって言ったのに……。

「まあ、助かったよ。フェイトはこう見えて方向音痴だからねえ」
「ちよ、アルフ!？」

「あ、気にしないでいいですよー。私も方向音痴なんで！」

……大丈夫だろうか、この人。

そんなことを思いつつ、私は先導する空曹の後ろについてキャスタール付きの旅行バッグを引いて歩く。アルフは子犬スタイルでバッグの上だ。

「さて、と。それじゃあ第四訓練校がある北部中心に回っていきましようか！ えーっと、デバイスのメンテはできます？」

「自分のデバイスですし、設備が借りられれば」

「うわっ、すげー。確かインテリジェンスなんですよね？」

「そ、そうですね……、何故それを？」

「クロノ執務官が言ってたんですよ、」アレほど信頼関係の厚いデバイスと魔導師は久しぶりに見た」って」

クロノが、そんなことを……。

最近は何クロノも忙しいのか、メールを送ってもなかなか返事は返ってこない。お互い忙しい身だし、仕方ないとは思うけど。

「っと、話がずれちゃいますね。えーっと、この辺はデバイスの部品とか本体とかメンテ屋とかがごった返してる、通称デバイストリートです。あ、下らない洒落だとか思っちゃダメですよ？ ここの人たちは気に入ってるみたいですから」

「は、はあ」

デバイスストリート。凄くどうでもいい洒落だ。だけど、何処か一軒、設備を貸してくれる店でも見つけておかないとまずいかな。普段のメンテは簡易にしか出来ないし。

それに、ここをずっと巡るのも楽しそう。すずかとか母さんは喜ぶんじゃないかな。あ、忍姉さんもか。

ざっと見回すと、職人氣質でごつごつとした体つきの人から、一見するとモデルさんのように綺麗な女性の人までいるんな人がいる。あれが皆デバイスマスターなんだ……。

とりあえず、最初はマイスターの資格とっておこう。バルディッシュの改造も自分でやりたいし。

カートリッジ・システムも改良に改良が重ねられて、今では反動はほとんど無い。と言っても、二〇、三〇発をガコンガコンロードしたら、そりゃあ負担も掛かるけど。

そう言えば、最近なのはやはやてたちとは連絡とって無いな……。後でとってみよう。

「それじゃ、次行くよー」

「あ、はい」

空曹さんの後に続いてテクテクと歩いて行く私。

それにしても、空気は割りと澄んでるから、その辺はしつかりしているみたい。リンカー・エネルギーも地球よりかなり多い。魔法は結構使いやすいかな。

次に着いたのは、あんまり人が多くない住宅街。マンションも多いみたい。

「ここが、ミッドの中でも家賃が安いと評判の住宅街。私も昔はここに住んでたんだー、環境もいいし」

「私の住むところもこの辺なんですよ」

「へー、そうなんだ！　じゃ、あとでお邪魔させてもらっかな。そ

れじゃあ次は訓練校にあいさつに行こうか!」

は、早い!? 本当にサクツと済ませるつもりだ……。

まあ、ここからも住むマンションは見えたし、問題はないかな。最悪、ネットに接続してマップを落とせばいいし。

でも、ミッド北部から出ることはそうそうないか。基本的に学校と家の往復だし、ご飯は地球から送られてくるものと、スーパーで買ったもので足りる。うん、大丈夫かな。

そんなことを考えているうちに、私が行くことになる訓練校に着いていた。はやい……。

「さて、ここが北部でも特に大きな訓練校だよ。ついでに言うと、私の出身校でもあります」

「そうなんですか?」

「そうなんです。ということ、以後私のことは先輩と呼ぶように!」

「え、ええっ!?!」

「突然だねえ……」

本当に突然だ。でも、こういう風に遠慮せずに接してきてくれるのは、なんだかとても楽しかった。

訓練校は、校舎も運動場もかなり広い。……ときどき爆音が響くのは、スルーしてもいいのかな。

「うーん、派手にやってるなあ……。テストロッサ訓練生は、短期で入るんだっけ?」

「あ、はい」

「短期で入る人の中には、訓練が厳しすぎて潰れる子も結構いるんだよ。その分、最後まで耐えた子は大体それなりの実力を身につけられる」

訓練が厳しい、か。まあ、死と隣り合わせの訓練はないと仮定しても、それなりの質は期待できそうだ。
つと、そうだ。

「あの、ここでデバイスマスターの資格って取れますか？」

「マスター資格？ 三級は結構簡単だけど、改造となると二級がいるよ？ まあ、いきなり二級に挑むのも、できなくはないけどさ。体を大事にするならやめておいたほうがいいと思うよ、三か月だし」「いえ、一年ぐらいならかかってもいいんです。できるだけ早く、バルディッシュを強化してあげられるようになりたくて」

「そっかー。君のデバイスも、そこまで思われて幸せものだー」
「光栄です」

一言だけ、バルディッシュはそう告げてまた黙り込む。もともと寡黙だし、あんまりお喋りなわけじゃじゃないから、そう気になるわけじゃない。

でも、とりあえず在学中に三級は取ろう。後はお仕事をこなしながら頑張って二級試験に合格する。よし、また一つ目標ができた。

「よし、じゃあこれで大体見たかな。他にどこか行きたいところはある？」

「えっと、特には……」

「じゃあ、ここで解散でいいかな。それじゃあ後輩ちゃん、これから頑張つてね！」

「あ、はい！」

空曹にそう返し、手を振りながら何処かへと歩いて行く空曹を見送る。なんだか、凄いテンションが高い人だったけど、悪い人じゃないみたい。

「……じゃ、帰るっか」

アルフを頭の上に乗せ、私も新しい家へ向けて歩き出す。
さあ、頑張ろう。

「目標発見、どうする?」

『私が裏から追い込みます。表口から潰してください』
「りょーかい」

通信機から流れていた音声途切れ、途端に静寂が訪れる。

水色の髪を持った少女は、禍々しい気配を漂わせる大鎌を担ぎ上げると、眼下にある屋敷を見下ろした。

屋敷は随分と広く、プールやテニスコートなど、典型的な金持ちの家をそのまま形にしたような印象を受けた。

既に意識外誘導と認識疎外の結界は張ってあるため、後は仕事をこなすだけである。

「まあ、罪には罰を、ってね」

にやりと口角を吊り上げて笑うと、少女は途端に降下していく。

その直後、一筋の光明が屋敷よりも離れた場所から裏口目掛けて放たれる。

朱色のレーザーとも形容できるそれは見事に屋敷の裏口を悉く吹き飛ばし、一気に警備システムすらダウンさせた。じきに表口から人が出てくるだろう。だがしかし、それを待ってやる理由など少女には無かった。

「開放術式『参』、起動」

ぼそりと呟いた音だけが虚空へと消え、言霊は少女の担ぐ大鎌へと溶け込んでいく。

その直後。いまだ宙に浮かんでいた少女の周囲が何処からともなく現れた闇に包まれ、一瞬にして晴れる。霧散するのではなく、膨張した玉が中からの力に耐え切れなくなったようにして。

闇よりは薄明るい夜闇を切り裂くようにして鎌を振るい、宙を蹴って一気に加速をつける。

自動車など目ではない速度で表口の大きなドアに突っ込み、そのまま玄関部分を吹き飛ばす。

盛大な破壊音とその後を訪れた数秒の静寂の後、ゴミと化した元玄関の中からもそつと起き上がった少女は、軽く体をはたくと埃や汚れを落としていく。

「よし、と。そんじゃ、処刑タイムッ！」

苛烈な笑みを顔に貼り付けた少女は、大きく振りかぶった鎌を全力で床に叩きつける。

普通なら、幾ら強靱と言えど一度くらいは激突では弾かれるのがオチだが、それはいともたやすく屋敷の床を両断してみせる。それと共に発せられる、ガラスが割れたような音。

途端に、周囲からの魔力反応が目に見えて感じられるようになる。緊急時に発動する隠蔽型魔法陣だったのだろう。

不穏な気配を感じて切り裂いておいて正解だった、と少女は嬉し

そつに微笑んだ。

「くそつ、どうして私が……っ！」

そんな声が聞こえ、少女は視線を二階へ続く中央階段へと向ける。其処には、煤に塗れて随分と肥え太った男がいた。少女は、汚物でも見るような目で男を見ると、無言で鎌を構える。刃は自分よりも後ろに、大きく振りぬく形をとれるようにして。

その少女に気づいたのか、男はその醜い面を驚愕と恐怖で歪める。覚束ない足取りでふらふらと一步、二歩と後ろに下がるものの、直ぐに壁へと突き当たった。

「はい、逃げないでね！。せつかくステーキが目の前だったのに、急な呼び出し食らってイライラしてるんだ」

「くっ、死ね！」

「ん？」

苦し紛れに放たれたのは、矢の形に整えられた複数の炎だった。普通ならば避けるべきそれを、あるうことか少女は素手で握り潰す。無論、火傷など負うはずも無く。

「あのさ、僕言ったよね？ イライラしてるの。だからさあ……」

言葉は要らないとばかりに、大鎌を振り上げる。

ゆっくりと、その刃へ魔力が灯され、そして。

「とつととおつ死ねッ！」

「やめっ　　！」

ざしゅっ、と味気ない音と共に肉を抉り絶った刃は、少女の手に

よって完全にコントロールされ、床にぶつかることなく静止した。後に残ったのは、頭から股の下までをすっぱりと真っ二つに絶たれた男の残骸。

興味なさげにそれを蹴り飛ばすと、少女は自分よりも大きな鎌を何処かへとしまい込む。チラリと見えた刃に付いていた血は、明らかに少なかったが。

それから数分して、栗色の髪を短く切った少女が吹き飛ばされた裏口を通ってやってきた。

「お疲れ様です、レヴィ」

「あ、シュテル！ 全く、僕らを呼びつけておいてこれっぽちなんで、どういうことだろうね？」

「手の空いている人がいなかったのですから、仕方ありません。フランス観光でもして来なさいと、お金も頂けましたから、ディアと一緒に美味しいものでも食べていきましようか」

「ほんとっ！？ やったーっ！」

レヴィと呼ばれた水色の髪の少女が喜ぶのを温かな目で見ていたシュテルは、まるで今気づいたように男の残骸へと目をやると、無造作に転移魔法を行使して何処かへと飛ばした。

血だまりだけになったそこから、二人は後処理もせず歩き出す。丁度屋敷の外に出た辺りで、空中からまた一人の少女が降りてきた。

髪は茶色と銀色を織り混ぜたような、更に言うならそこに灰色を振りかけたような不思議な色のショートカット。背中には飛行用の概念兵装【力の翼】グレイト・フリューゲルが取り付けられ、長時間の飛行を可能としていたのだが、その可愛らしいはずの顔には青筋が浮かんでいた。

「おーい、貴様らぁ……？」

「ああ、ディア。丁度いいところに来ました。このままフランス観

光ですよ」

「私を転送陣から押し退けたのは貴様だろう、シユテル！」

「ふふ、人聞きの悪いことを。あの魔法陣はもともと二人用だったんです」

「このっ……！ ああいいとも、今すぐ貴様を塵芥に変えてやる！」

「ちょ、やめてよ二人とも！ せっかく美味しいものを食べようつてところで！ ディア、それは私も謝るから！」

出会って早々喧嘩というには些か規模の広い模擬戦殺し合いを始めようとする二人の間に割ってはいるレヴィ。

ディアと呼ばれた少女は、吊り上っていた目尻を下げてレヴィを見ると、ふわりと微笑む。

「ああ、安心しろ？ 直ぐに片付けて、お姉ちゃんと美味しいものを食べに行こうな」

「ふん、ギャグにしては随分とつまらないですね？ ああなんと可哀想なのでしょう、貴女には力量差と言うものが分からないのですね」

「ふははははは！ 貴様こそただの砲撃バカがモデルの癖に、何を言うか！」

「なんですか、広域殲滅しか能の無いあんぼんたんがモデルの癖に！」

「なんだとっ!？」

「なんですか!？」

「やんやんや、ぎゃーぎゃーわーわー」。

まさしくそんな擬音がびったりな具合に、二人の口論は火に油を注ぎガスボンベを投下するかのごとく激化していく。

そんな二人を前に、散々溜まっていたイライラが爆発する者が、約一名。

「だから、やめろっつってんでしょうがあああああああ！！」

「痛っ！？」

「ぐぬっ！？」

目にも留まらぬスピードで二人の頭をぶん殴ったレヴィは、目尻に涙を溜めながら叫ぶ。

「誰が元になったとか、そういうこと言うのはダメだって、おねーちゃんもおかーさんも言ってたでしょっ！？　なのにどうしてそんなこと言うの！？」

「そ、それは、その……」

「その、つい、だな……」

「……もう一緒に遊ばないもん」

「なっ！？」

「レ、レヴィ？　まて、分かった、この通りだ済まなかった！（おい何してる、握手だ握手！）」

「（握手ですってっ！？　……くっ、仕方ないですね）ほら、私達は仲良しですよ、レヴィ？　だから、そんなこと言わないで、ね？」

一緒に遊ばない宣言で、二人は大いに焦りに焦った。

喧嘩をしている最中なら絶対にしないであろう握手までしてみせるが、しかしレヴィは目を逸らしたままだ。

生まれてから既に三年近くが経ち、三人は立派に少女として成長してきていた。その過程で、温かな母と姉、沢山の家族に囲まれて来た少女達にとって、最も身近にいたのは互いだっただろう。

喧嘩も多いが、それも仲のいい証拠なのだろう。

そんな、共依存とまでは行かずとも強固な家族の絆で結ばれた三人だったが、如何せん姉的な立場のディアとシュテルはどうにもシスコン気味な部分があった。

シスターコンプレックス、要するに自分の姉妹が大好きなわけだ。しかもそれは、末っ子の立場であるレヴィに向けられていた。

もちろん、レヴィも二人のことは好きだし、離れたくないとも思っているだろう。それはいい。

問題は、そんな二人がレヴィから先の一言を言われればどうなるかと言うことで、とどのつまりそれは現状だった。

(ど、どうするんですかこのお馬鹿！ 大体、貴女が先に言い出さなければこんなことには……)

(し、しし、仕方ないだろう！？ ついいつもの調子で言ってしまったのだ！ ……だが、すまない、今回は私が悪いな……)

(……まあ、今日のところは許してあげます。それよりも今は、レヴィの機嫌をどう直すかです……！)

先ほどまではレヴィに聞こえないように小声で話していたと言うのに、今は最早アイコンタクトで言葉を交わしている。言語と言う概念すら忘れてしまったようだ。

いつの間にか仲直りが成立しているが、残念ながらそれが成立しているのは二人だけ。肝心のレヴィはそのことがわかっていないので、いかんともしがたい。

「……レヴィ、済まなかった。今のはお姉ちゃんたちが悪かった。レヴィの言うとおりだ」

「ディア……。そうですね、レヴィ、ごめんなさい。私も少し我を見失ってしまいました。許してもらえませんか？」

「……私じゃなくて、両方、お互いに謝って。嫌な思いしたのは、一緒にしょ」

むすっとした顔のまま、しかしやや声色を明るく、レヴィはそう言った。

二人は一つ息を吐くと、レヴィの見ている目の前で向き合う。

「ディア、悪かった。不快な思いをさせて」

「いいえ、私も悪かったです。ごめんなさい」

「……もう、喧嘩しない？」

「ああ」

「ええ」

「なら、いいよ」

ぐつと涙を拭い、レヴィは二人に抱きつく。そんなレヴィを、二人もぎゅつと抱きしめた。

それから少しの間、三人はそうしてそこに佇んでいた。

「それじゃあ、ご飯を食べに行きましょうか」

「うん！」

「ああ」

三人は、並んで闇に包まれた街を歩いていく。それが、三人の非日常的な日常だった。

42話 三年後の物語（後書き）

ということ、三年後の始まり始まり。

最後の三人は、わかりますよね？

これよりも前の話を思いついたら、そのうち番外編として出すかもです。

それでは。

43話 れっつごーフェイトちゃん(前書き)

大分遅れました、申し訳ない。

しかも普段より短いです。どうしたんだ俺、頑張れ俺。

そして風邪が治らない。声は違うし鼻詰まるし……、ぐぬぬ。

43話 れつつこーフェイトちゃん

視界を埋めるように射出される魔力弾。その全てをバルディッシュの一振りで消し飛ばし、さらに返しの刃を飛ばして発射源であるスフィアを片っ端から破壊していく。

丁度二二〇個目のスフィアを破壊した瞬間、ブザー音と共に私の目の前に青いウィンドウが開かれる。

「よし、そこまで。テストロッサ訓練生、戻ってこい」

「はいっ」

青いウィンドウから流れ出した音声に敬礼しながら返し、すぐにバルディッシュを待機状態に戻す。

視界の隅に捉えた時計が示していた時間は、今までのタイムよりも三秒ほど短くなっていた。

足取り軽く訓練場から出ていくと、そのまま待機室へと入る。待機室は訓練場を挟んで二か所にあり、模擬戦などの時にはその両方が使用される。

その待機室の中に、厳つい顔をした男性が立っていた。

「ファ、ファーン・コラード校長!? なぜここに!?!」

「なに、人一倍の訓練をこなし、人一倍成果を挙げている教え子の姿を見に来たただだよ。また記録を塗り替えたようだね、テストロッサ訓練生?」

「はっ、ありがとうございます!」

ファーン・コラード校長は、この第四陸士訓練校の校長で、現役時代には三佐にまで上り詰めた元陸士だ。

姿を見たのは入学式以来だけど、まさかこんなところで会うなん

て……。

「この調子なら、あと二カ月でも十分すぎる期間だろう。確か、卒業後は執務官を目指すんだっただね」

「はい。どうしても、しなければいけないことがあるので……」

「そうか。まあ、後二カ月だ、頑張りなさい」

「はい」

気さくに笑った校長は、軽く頷いて待機室から出て行った。本当に私のことを見に来ただけらしく、私はそのまま待機室から出て行くことにした。

「バルディツシユ、今何時？」

「一八時三二分です」

座学の授業の終了時刻が一八時四〇分だから、もう間に合わないだろう。今日の分の座学の内容は全部履修済みだから、特に困ることとは無いんだけど。あんまり遅くなるとスーパーの特売を逃すことになるし。

うーん……、どうしようか。

「お疲れ様、フェイト」

「あ、ルカ。授業は？」

「もう終わったわよ。それよし、記録見たわよ。また更新したみたいね」

「ありがとう、ルカ。でも、まだまだ上を目指せるから。ここで止まるつもりはないよ」

「すごいわね、フェイトは」

そう言って、彼女は当然のように私の頭を撫でる。それがとても

当たり前のようにやられてしまったので、何をされたのが気付いた私はあつという間に真っ赤になった。

きつと、今の私の顔はよく熟れたトマトのようになっていていることだろう。相変わらず、誰かから頭を撫でられたりというのは、なんだか慣れない。

「る、ルカ！ 頭撫でるのはやめてって！」

「嫌なの？」

「嫌！ じゃない、けど……」

「じゃあいいじゃない」

語尾を弾ませるようにして、なおも私の頭を撫でてくるルカ。恥ずかしいやら嬉しいやらで、なんだか変な気分だ。

姉さんが背伸びをして私の頭を撫でようとしたときは、なんだか小動物を眺めているような微笑ましい気分になったのに、ぜんぜん違う。

ルカ、本名はエレイルカ・マドラック。ビリジアンの髪を肩辺りまで伸ばした、私より一つ年上の一三歳。だけど、年齢よりずっと年上みたいな感じがする。あ、年をとってるとってわけじゃなくて、大人のお姉さんのな、何だろう、そんな感じ。

一般過程の方に二人、特別仲のいい友達がいるけれど、そのうちの一人とは姉妹のように仲がいいからそのせいかもしれない。ルカはどちらかというとお姉さんみたいなタイプだから。

「今日、一緒にご飯でも行かない？」

「ごめん、今日は七時から特売だから。タイムセールスもあるし」

「あ、そっか、わかった」

申し訳なさそうに微笑んで、それから後ろ手にごそごそとポケットから何かを取り出すルカ。

もうちょっと生活に余裕が出てきたら、外で一緒にご飯とかもしたいんだけどな……。

「それで、ちょっとこれを見て欲しいんだけど」

ルカの手の平に乗せられていたのは、数々の壊れた部品だった。焼ききれた回路に崩壊した結晶体、捻じ曲がった金属部品。かなり酷い状態だけど……。

「ん、何かの部品……、ううん、これデバイスだ。大分壊れてるけど」

「直せそう?」

「ん……、ちょっとまって。今見てみる。イクイッパー、コアの診断よろしく」

「Yes, sir」

こっちに来るときに母さんから渡された、デバイス診断用のデバイス。最近は使わなかったけど、地球にいるときにはよくバルディッシュの調整のために使っていた。まあ、大体は母さんがやっちゃうから、やるのは母さんがどうしても手が離せない時だけだったけど。

集音マイクのような細長い筒型の先端をコアに向け、約一分。大體のコアはこれで診断が済む。簡単な修理なら私でも出来るけど、それ以上となると破壊の度合いによる。

「ダメージは軽微。フレームを新しいものと交換すれば、内部を調整して使用できます」

「AIは生きてる?」

「言語機能に障害があります。内部の発声パーツを取り換えるか、初期化することで正常化できます」

「ほかにダメージは？」
「ダメージ無しです」

とすると、フレームと発声用のパーツを取り換えれば使えるってことかな。これぐらいならできそうだな。

デバイスコアの発声機構は、そこまで難しいものじゃない。専用の機材があれば内部構造を展開して修理できるし、その機材も行きつけのデバイスパーツ店に確かあったはず。

これなら大丈夫かな。

イクイッパーを待機状態の細い腕輪に戻して、コアをルカに渡してから口を開く。

「これなら、フレームと発声パーツを取り換えれば使えるようになるみたい」

「本当に！？ あの、修理を頼めない？」

「別にいいけど……、これどうしたの？」

「確か、本局に行く方の転送ポートだったかしら。この前あの近くを通った時に、本局に戻る局員が捨てて行ったの」

「本局なら、これぐらいのダメージはタダで直せるはずなのに……。新しいデバイスが手に入ったからとか、なのかな」

もしそうなのなら、それはずいぶん悲しいことだ。デバイスは魔導師にとって家族と同じなのに、そんなに簡単に捨ててしまっている。

それに、地上ではまずデバイス自体が高い。支給されるものの性能はかなり低いから、能力のある人はパーツをバラ買いして自分で組んだりもしている。整備に出しても、整備班だつてやるのが山ほどある上に、毎度毎度仕事が増えるおかげでローテーションを組んでも回りきらないこともあると、以前教官に聞いたことがある。

要するに、地上部隊の人間は誰だつて、デバイスの応急処置の方

法くらいは知っているし出来るのだ。そうじゃなければ整備班の人たちは過労が祟って死んでしまうことだろう。「冗談抜きで。」

「とりあえず、設備のある場所に行かないと直せないから、一日預かってもいいかな。明日には直せると思うから」

「ええ、もちろん。ありがとうフェイト」

「お礼は直ってからね」

小さくはにかんでそう返し、ちらりと廊下に表示されている時計を見る。と、その瞬間に時計が四〇分へ変わり、校内にチャイムが響いた。

「あ、終わったみたい」

「うーん、なんだか廊下でチャイムを聞くと、肩身が狭い思いしな
い？」

「それはわかるかも」

小学校の頃、委員会の仕事で授業を抜けていた時に廊下でチャイムを聞いたときとおなじ感じ。

別に悪いことをしてるわけじゃないのに、何となく悪いことをしている気になってしまう。

「それじゃあ、私はルナの方に行くわね」

「うん、それじゃあ。デバイスはお預かりします」

「ふふ、お願いします」

敬語でわざとらしく言うと、ルカも笑いながらそう返してくれた。さて、じゃあまずはスーパーカーかな。

轟ッ！ と風が唸りを上げて押し寄せる。眼下に広がるのは、ただただ白い雲海。

上空一万四千メートル、酸素の薄い超上空で、青年と男、両者は立っていた。

青年はジーンズにTシャツといった出で立ちで、とてもこの場に沿うような姿ではない。むしろ、青年と向き合う黒いローブ姿の男の方が、よほどマシに見える。少なくとも、この場では。

「くそつ、なんなんだテメエ!？」

「アア？ 何ッてお前、イレギュラー異能者だろうが。ツたく、何でオレがこんなことを……。野郎一人始末すのに、何だッてオレが出なくちゃならねえんだよ……」

メンドクセエ、と呟き、青年は頬を吊り上げる。犬歯を剥き出しにして、壮絶なまでの笑みを浮かべ。

青年を見る男の目は、今までにない恐怖に染まっている。男の周囲に男を超える魔術の使い手はいなかった。故に驕り高ぶり墮落したのだ。

ス、と青年が左手の平を前へ翳す。その前の空間が、がりがりと言いようのない悲鳴を上げながら削れていく。ほんの数秒で手の平大にまで空間が削れ、そこにはぽっかりと虚無感の漂う穴のようなものが作り上げられていた。

魔術ではない。少なくとも、男の知る魔術にこんな桁外れなものはない。

幾ら魔術が『現実の理を捻じ曲げる術』だとしても、なんの力も無しに、空間に穴を空けるなど、有り得ない。

「まあいいや、とりあえずサクッと死んどけ」

直後、青年の左手が真横へと薙ぐように振るわれる。

男の体が、突然何かに跳ね飛ばされたかのように、左手の先へと吹き飛んだ。まるで、青年の左手によって薙ぎ払われたようにして。

「がっ……！？」

「ん、潰れなかつたのか。んじゃ、も一発」

気だるそうに青年は左手を真つ直ぐ上へと向け

「ッだらア！」

振り下ろす。見えない何かが男の頭上から凄まじい速度で落下し、あるはずも無いそこに、男は猛烈な勢いで叩きつけられた。

ガンッ！ と硬い何かが鉄板にでも叩きつけられたような音が鳴り響き、更に男の骨が折れる音、内臓や肉の潰れる音が青年の耳に届く。

「ッと、仕事しゅーりょーか。後はー」

コツコツと、鳴る筈の無い音を鳴らし、青年は中空を歩く。

男の元まで歩いていった青年は、臓物の飛び散るそこから何かを無造作に掴み上げ、いつの間にか開いていた何も無い空間へと放り込む。皺だらけの、男の脳だった。

「回収もこれでよし。ッたく、手間あ掛けさせんじゃねえよ」

言いながら、青年は勢いよく目の前の空間を蹴りつける。

ガラスの割れるような音と共に空間が割れ、青年はその割れた空間の中に身を投じた。

それから数分後、ロシアの田舎の村に肉片や臓物が降り注いだという事件が発生したが、それはひそかにオカルト雑誌で取り上げられるだけだった。

43話 れつつこーフェイトちゃん（後書き）

わー、万能フェイトちゃん。イクイッパーは一分くらいで設定作った。

オリキャラはもう二人出てきます。しばらくフェイト中心で行くかも。

裏で伏線もぺたぺた張りつつ、頑張って行きたいですな。

あ、アルフ出てない。

44話 黄衣の王(前書き)

ギリギリアウトで八日ぶりの更新。

44話 黄衣の王

三月の頭、私はとある用事でアメリカを訪れていた。

「お久しぶり、エルフィ」

「うん、久しぶりだねー。来てくれてありがとう」

「……あなた、少し落ち着いた？」

「そうかも。三年も経てばね」

本当に久しぶりに再会した【綾渦の魔女】エルフィは、どこことなく大人の女性に近づいていた。

「ようこそ、ミスカトニック大学へ」

「確か、あなたは考古学科だったわよね」

「うん。奥で教授が待ってるから、どうぞ」

「お邪魔するわ」

そう。エルフィが進学したのは『ミスカトニック大学』の考古学科。最初にこの大学を見つけた時は驚いたけれど、もう慣れっこよ。今日私が呼ばれたのは、とある魔導書のことについてだ。詳しくは会って話すと言われたけれど……。

「やあ、ようこそ【魔女】」

「あなたが、私に用があるって人？」

「ああ。あなたが多くの魔導書を所有していると聞いてね。これを見て欲しい」

研究室に入った私を待っていたのは、結構なお年のご老人だった。しかし背筋はちゃんと伸びているし、それほど歳をとっているとい

う感じはしない。

そんな彼が持ち出してきたのは、一冊の本。

一見すればただの刺繍のようだけど、一目見ただけでその特異性に気づいた。魔力なんてちやちなものじゃない。そんなものを跳び越えた、もつと異様で異常なものを放っている。

「これは……、『The King in Yellow』……。
黄衣の王ですか」

「そうだ。私は中を見ていないが……、その異様な雰囲気からしておそらく本物だろう。こんなものが、町の古本屋で見つかったときには心臓が潰れる様な思いだった」

……それはまた、随分と悪趣味な店だ。こんなものを売れば、買ったものは間違いないく破滅を迎える。幸いなのは『黄の印』がセツトじゃなかったことだ。アレを持っていると、確実にハスターに狙われる。

「これを、あなたに預けたい」

「私に？」

「うむ。人知を超えたこれらへの対策として、本来ならばここに置いて置くべきなのだろうが……」

「……わかったわ。私が預かりましょう」

どうやら本物のようだし、中にも興味がある。なにより、ハスターとなんらかの友好関係が結べれば御の字だ。……そううまくいくわけではないけれどね。

本を預かると、無造作に王の財宝へと放り込む。ゲート・オブ・パレロン旅行のときとかに荷物が少なくないのよね、これ。

ちなみに、原理は時間軸の零地点へこちらから一方的にアクセスし、物質をそこに固定しているだけ。要するに、この世界の始まり

と繋がってるわけよ。私達がいっいたら、ちゃんとした装備じゃない限り圧力に負けてペしゃんこだけど。術者である私が魔力で守っているから潰れないだけで。

それに、生物自体に悪影響がないとは限らない。色々あるから、無機物を放り込むに限るわ。

「それでは教授、これにて」

「ああ。わざわざ遠いところまですまなかつたね」

「いえ、お気になさらないでください」

一礼して部屋を出る。結局、彼の名前は聞かなかつたか。別にいいけど。

「お話は終わったの？」

「ええ。お待たせ、エルフィ」

「別にいいよ。妹ちゃん達が待つてるんでしょ、行ってあげれば？」

「そうするわ。あなたも一緒にどう？」

「そうしたいんだけどねえー……、午後の講義が……」

どんよりと表情を曇らせて言うエルフィ。この様子だとたつぷり溜まってるみたいね。

「アハハ……。まあ、がんばんなさいよ」

「おう。それじゃあね」

ひらひらと手を振りながら歩いていくエルフィを見送った後、私は大学内のカフェテラスへと向かう。

カフェテラスは授業中ということもあって少しばかり人気がなかった。この大学自体、あんまり凄い学校ってわけじゃないしね。

「三人とも、お待たせ」

「姉様！ いいえ、待つてなどいけません」

「そうです、姉上。それに、ここのコーヒーはなかなかのものでした」

「ケーキも美味しかったよ！ それで、これからどうするの？」

声を掛けた途端にこちらへ集まってくる三人の少女達。喋った順にシュテル、ディア、レヴィである。

この三人は元は闇の書の欠片だった。

アルマの中に眠っていたこの三人を呼び起こし、調整しておいたホムンクルスへと、核と魂を定着させたのだ。本人達も闇の書の中にいた頃の事は覚えていられなく、私のことを姉と呼び慕っている。

そして、彼女達を保持していたアルマは母親的な存在で、事実母と呼ばれ、最初は随分当惑していた。今ではそうでもないが。

そして、彼女の記憶で人間だった頃に創り出したブルーベルは姉と言うことになり、彼女のことこの三人は姉と呼んでいる。

煉獄の七姉妹たちも、この子たちの存在は妹が出来たように嬉しいらしく、今でも随分と構っているのだ。

本当に、月村家は暖かい場所になった。

「そうねえ……。日本に戻って、皆でキャンプにでも行きましょうか？ 学校が始まるのはまだまだ先だから」

「ほんとに！？ やったーっ！」

「レヴィ、もっと慎みを持ちなさい」

「いいだろう、シュテル。お前も頬がにやけているぞ」

「なっ……！？」

ディアにそう指摘されて真っ赤になるシュテル。うん、かわいい。ちなみに、シュテルのモデルは高町なのは、ディアは八神はやて

で、レヴィがフェイトだ。……プレシアも親バカっぷりが加速している。空気が読めるようになった分、性質が悪いのだ。

まあともかく、今日も地球は平和だ。表向きは。

訓練校に通い始めてから二ヶ月が経ち、最近では実習でも連携を意識したものをを行うことが多くなってきた。

「今日は、ツーマンセルでの実戦訓練を行ってもらおう。一挙手一投足が審査の対象となるので、全員気を引き締めていくように！」

「はい！」

少なくなつた特別過程履修者が返事をする。その中には、私とルカも混じっていた。

混じっていたと言っても、残っているのは一五人にも満たない。最初は四〇人以上いたけど、結局この二ヶ月の間に半分以上が落ちていった。というか諦めて去っていった。

逆に言うと、ここに今残っているのはそれなりのエリートだ。教官によって天狗の鼻を叩き折られてなお立っていられる、金の卵達。私はちよつと温い感じもしたけど、それはあのぶつ飛んだメンバーに鍛えられていたせいだろう。

「では、一番から七番までの者は掲示板に表示された者とペアを組むように」

そう言ってディスプレイに表示されたのは、一番から七番が八番から一四番までのどれかと線で結ばれた図。ちなみに私は四番だ。

四番と繋がっている番号は、一二番。

「フェイトとペアね。よろしく」

「ルカだったんだ。うん、よろしくね」

ディスプレイに一二番の文字が表示されているルカにそう返すと、軽く腕を回して骨を鳴らす。

今日の訓練はツーマンセルでの対抗戦。ルカの戦闘スタイルは近代ベルカ式の空戦型。と言っても、基本は地上型と大して変わらない。尤も、そう思っていれば痛い目を見るのは相手だけだ。

「バルディッシュ、ちょっと本気だそうか」

「やりすぎは禁物ですよ、Sir」

「わかってるよ」

「……ほんとにわかってる？」

「ちよ、ルカまで言わないでよ！」

「あはは、ごめんなさいね」

バルディッシュとルカが揃って私に言ってきたけど、私だってそのぐらい心得ている。そのために、魔術は極力使わないことにしているし、カートリッジもなるべく使用を控えてるんだ。

それはともかく、私達の訓練は二番目に開始される。全部で七組の戦いが一日掛けて行われるのだから、ちょっとした大会だ。

もちろん水準は酷く低いものだが、それでも今この場にいる者たちはエリートと呼ばれる者たち。その戦い方や拙い点を少しでも頭に叩き込むため、今日は一般過程の者たちもこの訓練を一日見学することになっている。

「それで、作戦は？」

「とりあえず私は空を、ルカは陸を抑えて。後は即時対応」

「オーケー」

作戦と言うより、それは方針だった。が、こんなものいつものことだ。気にしては埒が明かない。大体、作戦なんてかつちり決めたところで破られるのが定石だ。時間がないときにBもCも決めていられない。

カートリッジはとりあえずシリンダー一つ分だけ予備を用意してある。訓練のときに二個も三個も使っていたら、あつという間にシリンダーが空っぽになってしまうから。

カートリッジを作るのは簡単だけど、あんまり使って自分の体に負担をかけるのも嫌だし。

ともかく、そんなことを考えながら私達の出番。

「よし、いこっか」

「オーライ。起きなさい、アルプ・トラウム」

「ja！」

「やるよ、バルディッシュ」

「Yes, Sir」

訓練場前の待機室で、私とルカが相棒を呼び起こす。次の瞬間、私達の体は一瞬で光とバリアジャケットに包まれていた。

魔力の循環を速め、魔法で身体強化を施す。魔法のものとは比べ物にならないほど性能が低いが、それでもないよりはマシだ。

魔法は魔術と違って体そのものに行使することには優れていない。むしろその端末などに対して行うものの方が優れていると言えるだろう。

神秘を具現化したような魔術と、技術の先にある魔法。その二つ

の違いだった。

『次、四番、一二番ペア。並びに六番、八番ペア!』

「はい」

「はいっ」

アナウンスで呼び出され、待機室から訓練場へと続く扉が開く。そこには、簡易型の訓練用仮市街セットが展開されていた。もうちよつといい名前はなかったんだろうか。

ともかく、訓練場に入った時点で訓練開始だ。既に戦闘は始まっている。

「バルディッシュ、探査!」

「二手に分かれています。左右です!」

「位置情報をトラウムにも送って。ルカ、私は左をやる! 合流できるように、中心の広場に追い込んで!」

「あいさー! 行くわよ、トラウム!」

「ja!」

『敵』の位置情報を送信したことを確認すると、私は一気に空へと舞い上がる。相手とはざつと二、三〇〇メートルは離れているだろう。だが、その程度は何の障害にもならない。

さすがにバカス力弾を撃って市外を壊すわけにもいかないから、とりあえず位置情報に従って障壁を展開しつつ移動。……あ、位置情報途切れた。

「うーん……、さすがにディテクト使うわけにもいかないなあ……」

ディテクトは私のもう一つのデバイス。非合法で組んだもので、サーモグラフィーや動体センサー、その他各種センサー類が精密に

組み込まれている、私の自作。自分で作ったものを自分で精密、なんて言っちゃうのはアレなだけだね……。

まあ、非合法に組んだものだからこの場で使うわけにもいかない。形状はモノクルアイに近い、バイザーのようなもの。特殊な周波数を利用した念話傍受も出来ちゃう優れもの。

元々は母さんへのプレゼントに作ってたんだけど、作ってるうちに脱線していつちゃって……。

って、そんなこと今はどうでもいい。それよりも、相手の探査だ。

「……一旦、下行ってみようか」

とりあえず、市街地の窓が見える部分まで降りていく。反応隠される途端にこれだからなあ……。

なんて思っていた瞬間、窓を突き破って無数の魔力弾が飛んできた。ええー、それってありなんですか？

魔力弾は障壁で無力化されたけど、反応はまた直ぐに消えてしまう。ゲリラ戦法で各個撃破を狙うつもりらしい。だったら普通、二対一になるように仕組むものだけ……、気をつけておこう。

「それじゃあ……行こうっ！」

44話 黄衣の王（後書き）

次回かその次あたりで、フェイトが中学入学かな。フェイトがほんと万能さん過ぎて困る。機械弄りはすずかから受け継いだのだろうか。

45話 グランドバザール(前書き)

たいっへん遅れました！

今回はお休みの日のお話。薄いですが。

45話 グランドバザール

今日は休日である。

突然何を言うかと思うかもしれないけれど、まあそういうことである。

「ん、上出来」

いつもと同じくちよつと薄めのお味噌汁の味見を終え、焼き魚をオープンから取り出して皿に盛り付ける。味噌汁も完成。

まさかミッドで味噌が手に入るとは思っていなかったので、つい最近まではスープだったのです。

白いご飯に味噌汁、焼き魚に最近覚えたきゅうりの浅漬け。今朝のメニューは純和風。と言っても、この半分以上は他の世界からの輸入物です。結構安かったけど。

「アルフ、ご飯できたよ」

「はいよー」

既に着替え終わっていたアルフと一緒に食卓に着く。

今日は友達二人と大きなデパートへ買い物に行く予定だ。デバイストリートでは売っていないデバイスやその部品なんかもあるかもしれないから、そこも楽しみ。

「いただきます」

両手を合わせて二人揃って言い、食事に手を付けていく。浅漬けもうまく漬かっているみたいで、結構美味しかった。

大体二〇分ほどで食事を終えると、直ぐに身支度を整える。

食器類の洗い物は日替わりで私とアルフが交互にやっている。他の家事も決まっっていて、洗濯はアルフ、掃除は私だ。

パジャマを脱いで地球で買って来た私服に着替えると、バッグを持って一通りのデバイスを身に付ける。バルディッシュは胸元のペダント、イクイッパーは左手首の腕輪、ディテクトは小型の音楽プレイヤーとして腰につけている。

いつも通学の時にはそこに専用のイヤホンを付けて通っている。音楽プレイヤーは地球のものを参考にしたから、結構性能はいいはず。

「……フェイト、そろそろ黒以外の服も買ったらどうだい？」

「でも、汚れ目立たないし。黒も可愛いよ？」

「そうなんだけどねえ……」

納得いかないとはかりに眉を寄せるアルフ。黒って可愛いと思うんだけどな。

今の服装は、黒のワンピースに黒い布地に白いフリフリをついたスカート。靴は動きやすいようにスニーカーだけ。

ミッドは一年通して気候が温暖だと聞くから、そこまで防寒する必要もないらしい。もうすぐ春だけだね。とりあえず、お金も持ったから準備完了。

「それじゃあ、行ってくるね」

「気をつけて行っておいで」

アルフに手を振りつつ家を出て、集合場所である中央広場まで走る。

しばらく走ったところで、すでに一人が噴水の端に腰かけて待っているのが見えて走る速度を上げる。

「ごめん二人とも！ 遅れちゃった」
「大丈夫よ、私たちが早く来たただけだから」

噴水のところまで着くと、ルカともう一人の友達に軽く手を挙げて挨拶しながら走り寄った。

「うわっ、フェイト可愛い」

「へっ？ あ、ありがと……」

「ふーん、恥ずかしがってる？」

「ち、ちがうよ!？」

そう、別に恥ずかしいわけじゃない。いきなり可愛いなんて褒められても恥ずかしいわけではないし、むしろ嬉しいわけで。……嘘です。やっぱり少し恥ずかしい。

うーん、家族に言われるのとはまた違った感じかも。いや、嬉しいといえば嬉しいんだけど。

「へへー、このまえ新しく買ったんだー。どう？ この服」

「うん、似合ってるよ」

「うへへー」

「ルナ、笑い方が下品よ」

ルカに注意され、ツエルナがうぐつと声を漏らす。

ルナ、フルネームはツエルナ・トイグ。一般過程の私の友人で、近代ベルカ式の使い手だ。魔法を使わない近接戦闘のスパーリング相手になってももらうことも多いくらい格闘センスが高くて、一撃一撃を確実に決めていく私と違ってとにかく乱打が凄い。

ピンク色の髪をサイドテールに結んでいる。あだ名はさっきの通りルナだ。

ルナとルカは家の事情から同棲しているらしく、姉妹のように仲

がいい。

「それで、デパートに行くんだよね。早く行かない？」

「そうね。あんまり遅くなるのも嫌だし。いきましようか」

「デパ地下！ デパ地下！」

ああ、ルナは食べ歩くつもりなんだ、試食コーナー。ミッドチルダにもあるんだね。

「ルナ、あんまりはしゃがないの。それと、デパ地下は一番最後だし、あんまり試食コーナーには寄らないわよ？」

「えー!?!」

「ルナ、本当に食べるの好きなんだね……」

「それに、ご飯一杯食べたら、フェイトの家でご飯食べられなくなっちゃうわよ」

「うっ、そ、それは困る……」

デパートから帰ってきた後は、私の家で食事をする予定。準備はアルフがやってくれてる。

しばらく三人で雑談しつつモノレールを乗り継ぎつつ歩いていくと、目の前に巨大な施設が見えてくる。そこが、首都ミッドチルダにあるデパート、『ブランドバザール』だった。

「うわ、大きい……」

「あれ、フェイトはここに来たことないの？」

「ミッドに来たのは二ヶ月前だし、ほとんど訓練だったから。デバイストリートとか覚えるので精一杯だよ」

「ここは凄いわよ。最新型デバイスや新パーツもあるし」

「どのくらい!?!」

「す、凄い食いつきね……。えっと、大体二〇〇から三〇〇くらい

は……」

「ほ、ほんとっ!? メンテナンス道具とかは!？」

「あるわよ、あるから近い近いっ! フェイトストップ、ストップ!」

ハッ、つい捲くし立ててしまった……。

うーん、最近どうもデバイスに夢中になりやすい。色々弄ったりしているうちにデバイスが面白くなってきちゃって……。自宅でメンテナンスできるようになって簡単なキットは買ったんだけど、やっぱりそれだけだと物足りないし。コアなものはデバイスリートで揃うけど、一般的なものがどんなもののかも見ておきたい。

「ともかく、まずは服から見て回らましょ。ルナ、はぐれないでね」

「うん!」

ルナとルカは同い年で私は二人より一つ下なんだけど、ルナは私よりも幼い印象になってしまっなのはなんでなんだろうか。

そんなことを考えつつ、私たち三人はデパートの中へと入っていた。

「動くんじゃない!」

……なぜ、こんな状況になっているんでしょうか。

事の起こりは数分前。一通り服を見繕い終えた私達は、私の要望でデバイスシヨップへと移動した。その直後に何故か強盗に押し入れられ、私たち三人を含めた店内の客や職員達はもの見事に人質にされてしまったわけです。

私たちは全員拘束魔法で身動きできないようにされ、店の隅に纏めにされている。けど、魔法の構成はあまり強固ではない。数秒あれば全員分のバインドブレイクが可能だろう。

「おい、金はどこだ」

「レ、レジの裏に……」

店員から場所を聞いた男が、仲間を命じて金を取りに行かせる。普通に金銭目的か。周囲のデバイスやパーツにも手をつけていない。転売して足がつかないようにしてるのか？

どちらにしても、リーダー格らしきガタイのいい男はあまり油断していない相手ではなさそうだ。取り巻きの二人はそうでもないけど、それでも拳銃らしきものを所持している。一般人に当たればことだから、あまり動けないか。

「二人とも、いつでもバインドブレイクできるようにしておいて」

「やるのね？」

「うん。さすがに見過ごせないし」

「おっけー、任せといてよ！」

ルカとルナに念話で伝え、魔力探知魔術を起動させる。これで魔力の大きさは大体わかる。

数秒後、私だけが見えるように視覚化された緑の波が私の前にいる三人を飲み込み、私の頭の中に情報が流れ込んでくる。

リーダー格はAランクより少し上、ほかの二人はCランク相当か。拳銃は弾き飛ばして、一気に沈めるか。

そう考えた瞬間、リーダー格がこちらへと銃口を向けた。

「そのガキ、こっちにこい」

「……私？」

「そうだ。下手な真似したら頭ぶち抜くぞ」

「……わかった」

バインドが私だけ解かれるが、さすがにこの状況ではまずい。ここで避けても後ろに当たってしまう。

ゆつくりと男の元に歩いて行く。そこで気付いた。男の銃の安全装置が外れていないことに。

こいつ、銃に慣れていないのか。それなら。

「バルディツシュ！」 『二人とも！』

『オーライ！』

『行つくよー！』

バルディツシュを起動させると同時、後ろのルカとルナがバインドを破壊して人質全員を守るようにバリアを展開する。

「デメエ！」

「無駄だ」

一瞬で魔力弾を形成し、左右で見張っていた男二人の頭部へとぶつけ昏倒させる。追加でもう二、三発叩き込んだ。

男は、こちらへ向けられた黒光りする拳銃の引き金を引く。が、そこから銃弾が吹き出されることはなかった。

「なっ！？」

「それ、安全装置が外れてないよ。武器を扱うならその特性をちゃ

んと学ぶことだね」

バルディッシュの柄で鳩尾を突き、上に跳ね上げるようにして顎を叩き上げる。一瞬だけ浮いた男を、最後は魔力強化した後ろ回し蹴りを叩きこむ。

「ぐげっ!?!」

「ふう……」

どうやら完全に気を失ってしまったらしい男を一瞥した後、全員の拘束を解除する。なんで休日なのにこんなことしてるんだろ……。

「お疲れ、フェイト」

「ありがと。ルナも大丈夫?」

「うん! それにしても、この人たちもタイミング悪かったね……」

近くで倒れていた男の顔をしゃがみ込んで見つつ、男の所持していた拳銃を回収していくルナ。ところで、警備員は何処にいるんだろうか。……通報したほうが早いね。

「バルディッシュ」

「Yes, sir. . . 地上本部へ連絡します」

バルディッシュに地上本部への通報を頼み、三人をバインドで拘束しておく。

「あ、ありがとうございました……」

「災難でしたね。通報はしましたから、あとは局員の方にお任せし

ておきます」

軽く一礼し、直ぐに待っている二人の下に戻る。

……本当に、なんで私達が来てる時にこういうことを起こすのかなあ。

「これからどうする?」

「事情聴取があるだろうし、少し待ってまじょうか。ルナ、デパ地下は無理かもね」

「ええーっ!?!」

「仕方ないよ。また今度行こう?」

「うんー……」

渋々といった様子で頷いたルナ。確かに、私も少し残念ではある。デパ地下は見ているだけでも楽しいし、デバティストリートなんかとはまた違った面白さがある。

それから数分して、ようやく地上勤務の局員が到着した。

「君達が確保したのかい?」

「はい。第四陸士訓練校の訓練生、フェイト・テストロツサです。

こちらは、同じく訓練生のエレイルカ・マドラック、ツエルナ・トイグです」

「どうやら、今年度の生徒は随分と優秀らしいね。質量兵器の方は?」

「あ、ここにありません!」

そう言って、ルナが人の良さそうな青年局員に三丁の拳銃を手渡す。

「ありがとう、君たちの迅速な行動のおかげで被害を出さずに済ん

だよ。無事卒業できることを祈っているよ」

「あの、事情聴取などは……？」

「君たちも今日は休日だったんだろう？ 調書は適当に作っておくさ。事件が多くて一つ一つの調書をまじまじと見る時間なんてないしね」

そうなんだ。でも、確かにそれはあるのかもしれない。

地上部隊は日常的に事件が起こっているせいで常に人員不足に悩まされているのに、一々かつちりした報告書なんて作っていられないのか。

組織としてはアレだけど、回すためにはそれも必要なんだろう。

「では、協力ありがとうございました」

「いえ、お仕事お疲れ様です」

キチツと敬礼する局員に、返事をするようにこちらも敬礼を返す。局員が襲ってきた男達を連れて行った後、私達は静かに溜め息をついた。

「……よし、地下行きましょうか」

「おーっ！」

その日、デバイスを見ていなかったことに気づいたのは、自宅でルカたちと食事を終えた後のことでした。

45話 グランドバザール（後書き）

……フェイトがまだ中学行かない！
多分そのうちいくはず！

作者今年進学なので、色々忙しくなるかも。
更新遅くなっているときは展開が思いつかないのか、リアルで忙しいかのどちらかだと思ってください。

46話 帰省

訓練校入学から早三ヶ月。

私達特別課程を履修している訓練生は、無事卒業となった。

と言つても、残っていたのは六人にも満たなかったけど。最後の
一ヶ月で恐ろしく厳しくなったから、多分そのせいだ。

で、今日から私は陸士部隊預かりの囑託魔導師として行動するこ
とになっている。ほら、中学校とかあるし。

「ただいまー」

「フェイト！ お帰りなさい！」

「……あれ、ん！？」

「どうしたんだいフェイト、突然立ち止まったりして」

久しぶりにアルフとうち（居候しているから家といえるのかどう
かは分からない）に戻ってみると、目の前にどでかいディスプレイ
が表示されていた。

そこにいたのは、私の育ての親とも言える女性。

「り、リニス！？」

「ふふっ、やっぱり驚きましたね？ まあ、私も最初はこんな形で
蘇れるとは思っていませんでしたけど。おかえりなさい、フェイト」

「え、え、なんで！？ あれ！？」

「あらら、混乱するのはあとで。二人とも、まずは中に入りましょ
うか」

なんでリニスがディスプレイの中にいるんだとか、いろいろ聞き
たいことがあつたけど、とりあえず中に入ることにした。異常事態
に慣れ過ぎたとも言える。

まだ事態が飲み込めていないアルフとともに中へ入り、一直線に母さんの部屋へ歩いて行く。先導するのはディスプレイの中のリスだった。なんだかシユールだ。

「プレシア、フェイトとアルフが帰ってきましたよー」

「ほんとに!？」

「うわっ、禁断症状でしたか」

「か、母さん？ ちょ、きゃっ!」

部屋に入った瞬間、ぎゅっと抱きしめられる。ふわりと、何かの花の爽やかな甘い匂いが鼻孔をくすぐった。

「三か月、全然見ない間にすっかりおつきくなって……。おかえりなさい、フェイト。それにアルフも」

「あ、た、ただいま！ 母さん！」

「まったく、親バカも少しは治ったかと思ってたのにねえ。ただいま、プレシア」

ちょっと苦しいけど温かい抱擁が終わり、ようやく一息つく。今度は皆も連れてきたいな。来年の年明けは皆でこっちこっちよう。

「今日は泊まっていくのよね？」

「うん。皆と話したいし」

「アリシアもレヴィたちも喜ぶわよ。皆を集めておくから、挨拶しなきゃいけない」

「それはそうと、この、なんでリニスが？」

ようやく聞きたかったことを切り出す。ちなみに、ミッドに行つて二カ月もしたら母さんともため口で話せるようになった。そりゃあ、三年も一緒に暮らしていたんだからそうもなるけど。

リニスのことを聞いた母さんは、「ふふん」と胸を反らしつつ鼻を鳴らす。胸が揺れた。

「時の庭園に残留していたリニスの魂の欠片をすべて回収して、データ化したあと再構築したのよ！ 理論の構築には二年以上費やしたんだから、ミスはないわ！」

「ふふ、錬金術と科学の粋を集めたって言うてましたからね。この中も居心地いいですよ」

え、それって魂の情報化とかってやつじゃないのかな。何気にすごいことしてると思うんだけど。

「もっと研究が進めば、データ化した魂をもう一度物質として再構成してホムンクルスに収められるのだけど……。まだその段階にまでは至ってないわ」

「データを取り出すところまでは成功したんですけどねえ。やっぱり、リアルとネットの間での相転移のエネルギーに魂が耐えきれないんです。非物質を物質に変換するわけですから」

「そっちの話はなかなか難しいねえ。あたしには何言ってるのかさっぱりになってきたよ」

あはは、私もちょっと分からなくなってきた。

ともかく、リニスも加わって月村家はもっと騒がしくなったとかならないとか。

「そうそう、アリシアも学校に行くのよ。飛び級で中学校から」

「……え？ ちょ、ちょっとまって、姉さんはまだ肉体的には八歳で……」

「その分頭が良いし、実験的に受け入れてもらえるそうよ」

……サプライズがいつぱいだ。うん、一緒に通えるようになるのは嬉しいんだけどね……。姉さん頭いいし。

「部屋はきれいにしてあるから、そこで休みなさいな。夜はみんなでパーティーかしらね」

「うん、わかった。行こうか、アルフ」

「あいよ。それじゃあね」

母さんとリニスと別れ、廊下を進んで行く。

と、突然目の前に青いウィンドウが表示された。

そこに浮かぶのは青い髪をツインテールに伸ばした、やんちゃそうな少女の顔。まあ、私の顔そっくりなんだけども。

『フェイト、お帰り！』

「レヴィ、なんで私が帰ってきてるって知ってるの？」

『お母様が言ってたよ？』

「速いっ！」

思わず突っ込んでしまった。廊下に出てきてから数十秒と経ってないのに。

『ねーね、地下室で模擬戦しよっ！』

「しかも最初のお願いがそれ！？ まあ、いいけどさあ……」

うーん、我が姉妹ながらどうしてこんな好戦的に育ってしまったのだろうか。凄く不思議だ。

……あれ、もしかして私にもそういう気があったりするの？ 戦闘狂みたいな。

ともかくにも、とりあえず模擬戦することになったということ、アルフは他の皆に挨拶に行ってくるらしい。ところで姉さんは

何処にいったんだらうか。

地下室に移動すると、そこには既に戦闘態勢を整え終えたレヴィの姿があった。

「おつそーい！」

「ごめんごめん。バルディッシュ、行けるね」

「Yes, sir」

その音声と共にバルディッシュが起動し、大鎌へと形を変える。支度はすぐに整った。

「それじゃ、行くよッ！」

私の準備が終わったと見るや否や、先手必勝とばかりに飛び出してくるレヴィ。そのスピードは、一瞬で最高速煮まで達していた。大きく振りかぶられ、恐ろしい速度で振り下ろされたおぞましく刺々しい風貌の鎌をなんとか回避する。

ヒュゴウツ！ という音と共に連撃が繰り出され、その悉くを身を動かす単調なステップのみでかわしていく。

「あははっ！ やっぱりフェイトは速いね！ でも……っ！」

笑いながら振るわれる刃の速度が突然上がった。更に今までの単調な攻撃の中にフェイントや更に加速した本命を織り交せて来る。

全身を苛む薄ら寒いこの感覚は、間違いなく殺気だ。学校に通っているときには感じられない、本物の殺気。

それが感じられたことにある種の感謝を抱きつつ、私も殺傷設定へとデバイスを変更して刃を振るい返す。

もちろん、普通の魔術師ならば触れただけで発狂するレベルの呪具であるあの鎌を普通のデバイスで攻撃してもデバイスがおかし

くなるだけだ。でも、今のバルディッシュには魔道具としての側面もある。

ガギンツ！

音高くお互いの鎌がぶつかり合い、大きく魔力を散らせる。

「バルディッシュユツ！」

「バルニフィカスツ！」

お互いがお互いの相棒の名を叫んだ直後、互いの鎌から異色な光が放たれる。

『傷』の名を持つ呪具『バルニフィカス』からは青白い魔力光が、私のバルディッシュからは金色の魔力光が。

直後、互いの刃が接触している部分が高まり続ける魔力に耐え切れず、爆発した。

「バルディッシュ、大丈夫!？」

「No problemです、sir」

「そう、よかった……」

模擬戦でデバイスが損傷するなど、笑い話にもならない。ともかく、一気に攻め落とすツ！

一瞬でスフィアを十数个単位で出現させ、その全てから一気に魔力弾を辺り一面くまなく一斉掃射。

「……やったk」

「その発言はやってないフラグだと、以前アリシアが言っていましたよ」

「……大丈夫、まだ最後まで発音してない」

「けどフラグはばっちり回収済みだよん！ うおらア！」

女の子が出すような声とは程遠い音声と共に、煙の中から飛び出してきたレヴィが大きく鎌を振るう。

真空すらも作り出すその一閃は、しかし私には届かず。寸前の中空を切り裂くに止まっている。が、その一瞬が次の大きな一撃への布石であるうことは容易に想像がついた。

「オテトアンヨヲ ブチヌイテ、ツイデニセボネ 聖釘により貫かれた四肢の衝撃をその一点へ！」
「っ！？」

ステップで何かを回避しようとした直後、背中に大きな衝撃が走る。それは、レヴィが真っ直ぐ縦に振り下ろした鎌の先が床を叩くのと同時だった。

血反吐を吐きかけるのを堪え、何とか鎌を構え直す。

詠唱型の魔術を、幾つかのキーワードに関連付けさせて起動しているのか。器用なことを。

レヴィは私と違って魔術の素養が高い。リンカーコアもあるにはあるけど、それは体の維持やらなんやらに使っていて、いざというときにしか使わないらしい。

「レヴィ、これは幾らなんでもやりすぎじゃないかなッ！」

「あははー、つついテンション上がっちゃってさッ！」

更に距離を詰め、まるで演舞でも踊るかのようにくるくると回りながら刃を打ち合わせ合う。同じ鎌だけあって、攻撃の癖は分かる。ただ、その速度は尋常じゃない。

打ち合い、一瞬の間すら置かずに更に攻める。そうしてもまだお互いにて数が足りず、千日手になっていた。

どれほど打ち合っただろうか。いつしか、私達は一心不乱に相手の行動の先を読み、最適な場所に刃を振るうことだけを行っていた。そこに、手加減も一部の容赦もない。

と、その瞬間。

「ほりゃ」

「えいつ」

「んぎゅい!？」

「きゃあっ!」

突然浴びせられた冷水に、私とレヴィの動きが止まる。

何事かと周囲を見渡すと、入り口のところに見覚えのある二人が立っていた。

「幾ら呼んでもこないから何をしているかと思えば……。入れ込みすぎだぞ、レヴィ」

「ディア!」

「フェイト、久しぶりに帰ってきたのに模擬戦三昧って、ちょっと悲しくない?」

「ブルーベル!？」

はやてとよく似た、しかしその灰色というか銀色というか、その中間色のような髪の少女は、その手に魔導書を開いたまま乗せていた。ああ、水はあれか。あとブルーベルの仕業か。

中間色のような髪の少女はディア。彼女も月村家の一員だ。

それにしても、ブルーベルは随分と久しぶりに見た気がする。

「とりあえず二人ともシャワー浴びてきなさいな。風邪引いちゃうから」

「やった本人が言う台詞!？」

「あんたたち三〇分以上も戦ってたじゃない。いいから行きなさい」

そんな呆れた風に言われても……。

実際に全力出してたわけでもないんだし、そこまで言わなくてもいいと思うんだ。

「はい。いこつ、フェイト」

「う、うん。それじゃ二人とも、また後でね」

レヴィに手を引かれ、二人と別れた私はシャワールームへと入っていく。

ん、まあ、ただいまってことかな。

46話 帰省（後書き）

ギリギリ、二週間に間に合った……！

難産な上に短いですが、楽しんでいただけましたでしょうか。

これから物語はシリアスへと突っ走っていくつもりです。

私自身何処までかけるか分かりませんが、どうあがいても原作どおりに行くわけがないとだけ申し上げましょう。

47話 動き出す金色の物語

囑託魔導師となつてからはや数カ月。

私の所属する陸士部隊の今日の任務は、首都航空隊との合同任務だった。

「首都航空隊第二部隊隊長、ティード・ランスター一等空尉です。今日はよろしくお願いします」

「陸士105部隊隊長、アーバンド・グラス一等陸尉です。こちらこそよろしく」

任務は、逃走中の違法魔導師の逮捕。少なくとも五件以上の傷害罪で立件されていて、早急に捕えてほしいそうだ。

任務は簡単。私たち陸戦が地上から、ランスター隊長たち空戦が空から攻めていくだけ。

いざというときには私の飛行許可も取つてあるから、何とかなるだろう。

「では、午前二二〇〇より開始しましょう。一〇分後に」

「了解です。では、細かいプランニングを」

「わかりました。第二部隊、指示あるまで待機！」

「105部隊も同様にだ！」

「了解！」

隊長の言葉に敬礼で返し、姿勢を崩して近くの椅子に座り込む。

ちなみに、今いる場所は地上本部の作戦待機室。任務に出る前の局員が待機して作戦を詰めたり最後の確認を行ったりする場所だ。

ちなみに、合同任務は初めてだったりする。

「バルディツシュ、調子はどう？」

「問題ありません」

「そっか。がんばろうね」

「はい」

持っているデバイスは全部で四つ。

待機状態をネックレスタイプに加工したバルディツシュに右腕にあるイクイッパー、左耳にピアス状態で待機させてあるディテクト。それと、非常用とにかく頑丈に作ったストレージデバイスがベルトに取り付けられている。待機状態は鍵だ。

とりあえずこれだけあれば大体のことには対応できるだろう。コア・エネルギー回復薬も持ってきているし。

時間まで、脳内で作戦をもう一度復唱しておく。

作戦の概要は、105部隊が陸路を封鎖、退路を断つたところで航空隊が空を抑える。包囲した後は選抜された人員で魔導師を捕縛して終了。

ただ、逃げ込んだのが市街地のため、下手をすれば市民が巻き添えになる危険性も孕んでいる。そうなる前に捕まえるのが私たちの仕事だ。

「よし、105部隊出動！ 捕縛メンバー以外は大通りと裏路地の封鎖だ！」

「了解！」

隊長の号令で、私を含む捕縛メンバーが乗用車に、それ以外のメンバーが装甲車に乗り込んで市街地へと走り出していく。

ここで気をつけておくべきは、犯人が市民にまぎれて逃走を始めること。これをやられれば特定は特に難しくなる。聞き込みに張り込み、とにかく足を駆使して探すしかなくなるから、陸士としてはここで捕まえておきたい。

やるのは他の部隊だと言っても、同じ陸士なんだから。

「よし、俺たちも行くぞ」

「了解」

市街地が封鎖され始めてから十数分後、私たちは分隊長の号令で一斉に車から降りて駆けていく。

「ディテクト」

「Yes・My master」

走っている途中でピアス状だったディテクトを展開、サーモグラフィとコア・エネルギー波形探査を実行する。

このディテクトには今回の部隊に参加する全ての魔導師のコア・エネルギーが登録されている。逆に言えば、これと合致しない波形は犯人のものである可能性があるということ。

「条件不一致を確認。マップに位置情報を掲示します」

「分隊長、不審人物発見。位置情報を転送します」

「ここは……、噴水広場？ わかった、全員散開して詰めるぞ」

「……了解」

言い忘れていたけど、今回の選抜メンバーは分隊長含めて五人。囑託扱いになっていて私がここに入れてもらえているということとは、それなりに実力を評価してくれているということなのだろう。サーモグラフィで確かめると、広場にいるのは二人のようだった。これが幻術だとしたら、体温まで再現できているのだからすさまじい使い手だ。そうでない可能性のほうがよっぽど高いが。

「隊長からゴーサインが出た。行くぞ、三、二、一……、GOO！」

一気に飛び出し、二人へ向けてバルディッシュを構える。それと同時に他の人がバインドを掛け、身動きを封じた。

「時空管理局だ！ 大人しく投降しろ！」

「誰がするかよっ！ んおらア！」

片方の男が吼えたかと思つた次の瞬間、二人にかけられていたリングバインドが悉く破壊される。

凄い、強引だけど力量はある……。

なんて感心していた直後、男達二人は空へと飛び立っていく。ちよ、誰も動けてない！？

「まずっ……！ 分隊長、追います！」

「許可する！ 頼むぞ！」

一気に地を蹴り放ち、空へと向かう。

男達の上昇スピードはそれほどでもなかったが、空で待機していた局員達を巧みに巻いていく。……首都航空隊って、あんまり凄くなかったりする？

ともかく男達の真後ろに着くと、幾つかスフィアを形成しつつ投降を呼びかけてみる。

「待ちなさい！」

「ちっ、まだいやがったか。なら、叩くだけだぜ！ アクセルシューター！」

空を飛びながらこちらへ飛んできた魔力弾を、スフィアから打ち出した魔力弾で相殺していく。この程度なら魔法を使うまでもない。と、着々と距離を詰めていたところで男のうちの一人が上からの

魔力弾に打ちのめされ、大地へと落下していく。

「まずは一人！ 抗うなら武力で制圧させてもらっぞ！」

「なっ！？ テメエ！」

「スキアリツ！」

こちらへ注意を向けていた男が、更に上空へと注意を逸らしたのを皮切りに、私は更に加速を掛けて男の襟を掴む。そのまま後ろへ引き飛ばすと、振り返り様に鳩尾へとバルディッシュの柄を叩き込んだ。

「ふう……、まさか空戦だったとは。君、大丈夫かい？」

「はいっ！ つて、ティード・ランスター一尉！？」

「あれ、分からなかったか。ごめんごめん。それに、俺の手助けはいらなかったかな」

さっきの上から降ってきた魔力弾はどうやら航空隊の隊長さんのものだったらしい。なるほど、隊長だけあって他の人たちとは違うつてことか。

それにしても、拳銃型デバイスか。珍しいものを使うね。

「あ、いえ、おかげですぐ片付きました。ありがとうございます」
「……うん、とりあえず降りようか。僕らだけで置いてけぼりにしてるし」

空中でお辞儀を済ませると、私はランスター部隊長と地上へ降りる。

地上では魔力で作った網に雁字搦めにされている男が昏倒して倒れていた。ちなみに、さっき私がオトした男の方はランスター部隊長が捕まえている。

まあ、とりあえずこれで事件は解決。随分速かったなあ……。

事件はほんの数分で片付いた。が、これからが地獄だ。

上の納得いく資料を作らなきゃいけないし、ほかにも作る資料は山ほどある。

多分これは航空隊も一緒だろうから、事後処理までは部隊間での連携が続くことだろう。というかそうしないと多分終わらない。仕事多すぎるから。

「ランスター部隊長、さっきはありがとうございました。ああいう戦闘には慣れていなくて」

「いや、こちらこそ。俺の負担が減ってありがたかったよ。ありがとう、テストロツサ二等陸士」

「いえいえ、こちらこそ」

……無限ループになりそうだからここで止めることにしておこう。ところで、だ。今は事件から数時間経っている。つまり、若干暇が出来ているのだ。コーヒープレイクタイムといってもいい。息抜き時間だ。

「ランスター部隊長、そのデバイス見せていただいてもいいですか？」

「ん？ ああ、別に構わないよ」
「ありがとうございます！」

許可が下りたので、実際に手にとって見てみる。

機構は実際の銃とは大分違うものらしい。どちらかって言うとS
F兵器に近い構造かな。

弾薬を飛ばすんじゃなく、そこに魔力を溜めて、その魔力を弾状
に整形して発射するタイプ。ちなみに、ここで言う魔力は当たり前
だけどコア・エネルギーです。

でも、だとするとちよつと扱いづらいかもしれない。銃身はもう
ちよつと細身にして、発射に必要な魔力を削れそうだ。

そのことをランスター部隊長に話すと、彼は面白そうだと言わん
ばかりの笑みを浮かべた。

「それ、やつてもらえないかな？」

「え、でも、大事なデバイスでは？」

「俺も自分で改造するには限度があるんだ。噂の秀才少女の腕も見
てみたいしね？」

それ、もしかしなくても私のことですか。一体誰がそんなこと流
してるのやら。

人より少しだけ基盤が出来ているだけなのにそういうことを言わ
れるのは、あまり好きじゃない。なんだかズルをしているみたいで
でも、こうしてやつてもいいと許可が下りているんだから……。

「……では、やらせていただきます。ただ、準備などがあるのでま
た後日お話し合いを」

「ああ、もちろん。助かるよ」

銃は一応弄ったことあるけど、銃型のデバイスは弄ったことない

から。今から楽しみだ。

「ところで、テストロツサさんは将来何処にいくつもりなんだい？」
「私は、執務官を目指しているんです。目的があって……。ランスター部隊長は？」

「俺も同じだよ、執務官さ。と言っても、妹に楽しませたいから給料のいいところに行きたいだけなんだけどね。ああ、それと俺のことは部隊長要らないから」

「お言葉ですが、今日会っただけの私になぜ？」

「ん、なんでだろう。俺も良く分からないんだけど、君と話していると気持ちが楽になる気がするんだ。いや、初対面で何言ってるんだって言う気持ちは分かるけど」

別に变だとか言うつもりはないのだけど。

でも、私も同じようなことは感じていた。この人と話すときには、普段ある気負いのようなものがない。

……うん、初めての合同任務で疲れてるんだろう。話題を変えるべき。

「あ、あの、ランスターさんの妹さんってどんな方なんですか？」

「とっても可愛い子でね、今年で九歳になったんだ。写真あるけど、見るかい？」

「はい、ぜひ！」

ランスターさんがネックレスになっているロケットを開いて、中の写真を見せてくれる。

そこには、満面の笑顔を輝かせる小さな少女の顔があった。

それがやけに温かいものに感じて、私も思わず小さく微笑んでしまふ。

「可愛らしい妹さんですね」

「だろ？ 目に入れても痛くない。ティアナって言うんだ」

「ティアナちゃん……」

「そうだ、今度うちに来ないか？ 実を言うと、あいつはあんまり家から出ないんだ。俺の帰りを待ってるのが自分の仕事だからって言うて。だから、あいつの遊び相手になってやってほしいんだ」

「どうかな？ とそう問いかける彼の笑顔は無性に少年染みていて、私はつい首を縦に振っていた。

仕事の空いた週末の予定が埋まったのはいいのだけど。

この後、うちの部長に呼ばれるまで妹の惚気話に付き合わされることになるとは思っても見なかったのです。

47話 動き出す金色の物語（後書き）

だんだん短くなっているのは、急いでいる証拠です。

じゃあ急がなくていいようにちゃんと書けよと言われても、ぶつちやけなかなかけないのが現状。オリジナルって難しいね。

話は変わりますが、感想で「魔女の凄さ、カリスマが伝わらない」という趣旨の感想をいただきました。これからは遺憾なくチートっぷりを弾けさせる方向性で行きたいと思います。

皆チートって書いてあるんだから見たくなくてきてる人もいるよね。いるはず、いてください。

ただし、チートが入るのは第三期、S t S編からなのでオリジナル編はご容赦あれ。

さて、パワーインフレ目星表を作る作業が始まるお……。

48話 金色の日常 翠の日常

「いただきます」

「いただきます！」

「いったただつきまーす！」

我が家に、三人分の声が響く。

声の主は私とアルフ、そしてティードさんの妹さんであるティアナちゃん。

今日は私が定時で帰れたのに対して、ティードさんが残業で本局に行かないといけなかったから、夕飯を家で一緒に食べることにしたのだ。

あの違法魔導師捕縛の作戦から一月ほど経ち、私たちはこうして自宅を行き来するまでに交流を深めていた。ついでに、ランスターさんのこともティードさんと呼ぶようになった。

「どう、美味しい？」

「はい！ とつても美味しいです！」

「よかったあ……。味付け濃くないかなって思ってたんだけど」

にっこりと笑みを浮かべたティアナちゃんに、私も思わず笑みをこぼす。いつだって、自分の作った料理が褒められれば嬉しいものだ。

「そうだ、ティアナちゃん。今度のお誕生日プレゼント、何がいい？」

「え？ い、いいですよ、そんな！」

「遠慮しないでやりなよ。フェイトったら、妹ができたみたいで嬉しいんだろ」

「ア、アルフ！」

「はははっ！ なに焦ってるのさ！」

カラカラと笑うアルフに、ポカンとしながらもくすくすと微笑むティアナちゃん。

そんな二人を見ていて、私もいつの間にか笑い出していた。

「それで、何がいいかな。もし良かったら、ティアナちゃんにデバイスを作ってあげたいんだけど」

「デバイス、ですか？」

「うん。ティアナちゃん、ティーダさんに憧れてるって前に言ってたから。魔法の練習もできるし、普段の生活の役にも立つでしょ？」

「で、でも……」

「あ、その、嫌だったらいんだよ？」

「いえ、嫌じゃないんです！ 嬉しいんですけど、ご迷惑じゃないかと思つて……」

小動物のように縮こまってそう言うティアナちゃんが可愛らしくて、思わず微笑んでしまう。本当に二人目の妹ができたみたいで、なんだかとても温かくなる。

レヴィはどっちかっていうと双子って感覚だから。

「大丈夫、迷惑なんかじゃないよ。今度お休みの日に一緒に考えよつか、どんなのがいいか」

「はい！」

アルフとティアナちゃんと、三人で笑う。こんな日々も、悪くないかもしれない。

それからしばらく時間が経ち、すっかり深夜もいい時間帯まで進んだ頃、部屋のチャイムが鳴らされた。

「はい。あ、ティーダさん。お仕事お疲れ様です」

「ティアナ、まだ起きてるか？」

「ついさつき寝ちゃいました。ティーダさんを出迎えるんだって頑張っていましたけど」

入り口に立っていたティーダさんにそう告げると、なんだか新婚さんの会話のようだと考えてちよつと耳が熱くなった。いや、まだ早い、かな……？

「そっか。悪いな、押し付けたみたいで」

「いえ、私も楽しかったですから。どうぞ、あがってください」
「ああ、おじゃまします」

ティーダさんの中に招き入れると、コーヒーを淹れて専用のマグカップに注ぐ。私の分もついでに淹れたので二人分。ティーダさんはブラック、私はミルクとガムシロップを1：1で入れる。

「はい、どうぞ」

「ありがとう。それにしても、気持ち良さそうに眠ってるね」

「アルフは素体が狼だから、人より体温が高いんです。私も時々寝ぼけて抱き枕状態にしちゃうことがあるんですよ」

「犬とかは抱いて寝ると温かいつて聞くからね。それに、一緒に眠ると安心するんじゃないかな。フェイトちゃんとアルフはお姉ちゃんみたいだって、よく言ってるし」

「ティアナちゃんがそんなことを？」

そっか、そうだったなら嬉しいな。残念ながら私をお姉ちゃんと呼んでくれる人はいないし、ちよつとした憧れだったりする。

二人してちびちびとコーヒーを啜りつつ、一二時近くになりつつ

ある一時をまったりと過ごす。こういった穏やかな時間を、いつかここで母さんたちとも過ごしてみたい。そのためにも、もっと頑張らないと。

「あ、そうだ」

ふと思い出し、音をたてないように部屋の隅にある棚からデバイスの部品やらジャンク品をすべてテーブルに持ってくる。その量は、スーパースーパーの一番大きなビニール袋二つ分といったところか。

脚の長さがちゃぶ台程度しかないテーブルの上にその部品を広げていくと、ティーダさんが驚いたように笑っていた。

「これは、すごいね……」

「知り合いのジャンク屋さんで買ったり、廃品回収に回されているもので使えそうなものをこちらに回してもらったりしてるんです。ティアナちゃんの誕生日祝いに、デバイスを送ろうと思って。それで、ティーダさんと同じ銃型を作ろうと思うんですけど、意見を聞かせてもらいたいです」

「なるほど、そういうことか。わかったよ」

穏やかに微笑んだティーダさんと共に、ガシャガシャとデバイスの部品を弄っていく。

組み合わせればデバイスとして最低限の形にはなるといったようなパーツの山の中から、最適な部品を拾い集めて回路を組み上げていく。

と言っても、銃型のデバイスなんて組んだことないから、とりあえずリンカー・エネルギーを集積、コア・エネルギーへと変換するための機構だけは組み上げておく。これはデバイスの基礎とも言える部分で、これがあるのとないのとでは魔導師の戦闘に大きく違いが出てくることだろう。

「随分詳しいんだね？」

「好きなことですから。っと、あんまりやってると起きちゃいますね」

煩そうに身じろぎしたティアナちゃんが視界の端に入り、動かしていた自分の手を止める。

それと同時にティーダさんも手を止める。あまり得意な分野ではないのか、元々手はほとんど動いていなかったけど。

「うん、このことはまた後にした方がよさそうだ。そろそろお暇するよ」

「わかりました。あの、気をつけて」

「ああ。それじゃあ、今日はありがとう。フェイトちゃん」

ティアナちゃんをそっと背負い、ティーダさんはそう言い残して自宅へと帰っていった。

……気のせいかな、何処となく胸に穴が空いたような感覚がした。

「医務官、こっちお願いします！」

「それ終わったら、こっちの診察も！」

「はいはい、すぐ行きますよー！」

しつちやかめつちやか。

言葉で言い表すとするならば、きっとそれが的確な言葉なんだろう、と私は思う。

ここは医療の最前線、都立クラナガン大病院。そこになぜ私、シヤマルがいるのかと言うと、知り合いの医師から応援要請が出されていたため、一番近かった私が急遽助っ人に入ることになったのだ。近くで事件があつた後らしく、傷を追つた局員や市民がごそつと流れてくる。しかし、その中に犯人はいない。犯人は大病院ではなく先端技術医療センターに送られるからだ。

事件を早期に解決するため、そこで早急に意識を回復させ取調べを行うための措置、と言う名目ではあるが、度々そのどさくさにまぎれて本局の人間がその手柄を横から掻つ攫つていくと言うこともあるらしい。

「よし、処置完了！ 次の診察入れて！」

「はい！」

まあこんな具合で、時間にして一時間半の激闘の末、私は何とか重傷者二〇人以上、軽傷者含め五〇人前後という団体を捌き切つた。他の医師が奮闘してくれていたというのも大きいだろう。

普通の患者さんに迷惑をかけるわけにも行かないため、迅速且つ正確な対応が求められるこういうケースでは、医師はいればいるほどいい。特に、外科にも対応できる医師がいれば花丸だ。

私もミッドで医師免許は取っているし、医務官としての資格もある。暇があれば向こうの許可を取ってから地球でも医学について勉強している分、ミッドチルダの一般的な医師よりはまともな外科手術ができるという自負もある。

大体、この世界は歪なのだ。魔法で構成されている身で何を言いかと言われるだろうが、この世界で医療といえば魔法を使ったものが一般的だ。外科も人体の内部に魔法を施して治療すると言つた曖

味なものであるため、まともな外科医師はあまりいない。

「ふう……」

しかし、今回のように質量兵器に上げられるような爆薬を用いたテロで傷つく人々には、そう言った魔法での治療は余り役に立たない。体内に鉄片などが入り込んでしまっている場合、外科手術によって一度その部分を開き、取り出さないといけないからだ。

鉄を消滅させる威力の魔法など、体内では使えるはずもない。そのため、外科に対応できる医師は貴重なのだ。

「お疲れ様でした、シャマル先生」

「アルピーノ準陸尉!？」

「突然の応援要請だったのに、迅速に受理していただいたおかげで死者を出さずに済みました。ありがとうございます」

突然話しかけられてテンパってしまった私に対して、紫色の髪を長く伸ばしたメガーヌ・アルピーノ準陸尉は優しく微笑みながらも頭を下げた。

連続した手術が終わり安心していたところに来たせいで、普段よりも少しだけでもり気味に言葉を返す。

「い、いえ、私はそれが仕事ですから……。アルピーノ準陸尉は、お怪我はありませんか？」

「私は大丈夫です。頼りになる相棒もいますしね」

そう言って、彼女は後ろで上司らしき男性と話している青い髪の女性を顎で指し示す。たしか、クイント・ナカジマ準陸尉だったはずだ。

地上でもエース部隊と称される首都防衛隊で、隊長と共にダブル

No.2として知られている彼女に頭を下げられていると考えると、なんとも不思議な気分だった。

いや、私の方が年上ではあるけども、それは考えないようにして私はまだ若いんですから。

「あ、あの、シャマル先生？」

「はっ！？ はい、なんででしょう!？」

「お疲れみたいですすね？」

「あ、いえいえ、少し考えごとを」

それから少しの間、彼女との会話を楽しんだ私は、本来の用事に戻るためにその場を後にした。

今回のことでのボーナスなんかもでるらしく、ある意味嬉しい話ではある。のだが、どうせならそれを地上本部の予算に回せばいいのに、とも思ってしまう。

正直な話、地上の病院で使われている医療機器はほとんどが二世代ほど前の代物だ。確かにそれでも使えるは使えるものの、本局の医療局で使われている機材と比較すると恐ろしいほどの格差がある。

「はあ……。変える力なんて私にはないのよね」

『守護騎士』だなんて謳っていても、結局は個人だ。管理局全体を変え、歪みを正す力なんてない。

一員にはなれても、ただ一人にはなれやしないのだから。

とりあえず、今はそれよりも毎週買っている『週間Medical』の最新号を買わなければ。

『週間Medical』にはその時々で各医療界の若手からベテランまでの名医が毎週特集を組まれ、よく話題に出るような手術、薬などの解説、読者からの医療関係や次号の医師への質問の回答などが載せられている。要するに知る人ぞ知るコアな雑誌ということ

だ。

「どうも、シャマル先生。新刊ありますよ」

「一冊くださいな」

「あい、毎度あり」

本屋に入り、すっかり顔見知りとなった店主と二、三言葉を交わして代金を支払う。週一で発刊されるこれの代金は、日本円に換算すると二八〇円程度だ。普通の収入から生活費と食費、その他諸々を引いても懐に優しい代金ということもあって、コアな雑誌の中でもその人気は比較的上位に位置している。

「いつもありがとう」

「うちは本屋ですからね。本を置くのは当然です」

「ふふっ、それもそうね」

それじゃあ、と別れの挨拶にもならない挨拶を交わすと、本を片手に外へ出る。と、ポツポツと雨が降り出していた。

「朝の予報じゃやってなかったのに……」

まあこんな日もあるかと思いついてみたものの、それで本が濡れるのではあまりいい気分はしない。

……激しくなる前に、自宅に帰ることにした。皆が待っている家に。

48話 金色の日常 翠の日常（後書き）

遅れてしまいましたが、日常パートでございます。

ちよっとシヤマル先生も出してみたり。

本編まではまだまだ掛かりそうでございます、はい。

49話 裏事情(前書き)

おかしいな シリアスだったはずなのに。

久住 こころの俳句

49話 裏事情

「バカな……！」

時空管理局地上本部。その心臓部とも言える一室で、彼はあらゆる力の力で机に拳を叩きつけた。

レジアス・ゲイズ。管理局中将にして、地上の守護者である。

その彼の前にあるのは、一枚の報告書。管理外世界にて違法犯罪者と交わされた戦いの顛末が記されていた。

「……すまない。俺がもつと早く着いていれば……！」

「いや、お前のせいではない……。しかし、どうということだ？ 魔法以外の不可解な能力を使ったというのは……！」

「魔術だろうね。それもかなり高位の魔術師のようだ」

「以前言っていたものか……。だが、それは地球にしかないのではなかったか？」

「人は生きるためならどんな方法だって編み出してみせる生き物さ。魔術に似た技術があってもおかしい話じゃない」

レジアスの前にいるのは二人の男。

一人は茶色の髪と顔に深く刻まれた皺が特徴の男。ゼスト・グラングイツー等陸尉。

もう一人は、薄い緑色の髪を後ろで長く結び、フレイムの細い丸眼鏡をかけた柔和な印象を与える青年。ユーノ・スクライア司書長。地上での肩書きを、『特別一等陸尉』という。

「とにかく、僕は書庫に入って検索をかけてみよう。まだ未開拓の部分があるから、そこに情報があるかもしれない」

「頼むぞ。ゼスト、お前の方は今回の事件の細部を探ってくれ、私

はジェイルへ連絡を取る」

「奴なら何か判る可能性がある、か。わかった、気をつけるよ」

三人はそれぞれに頷くと、ゼストとユーノが部屋から出て行く。残されたのは、レジアスのみ。

正史であれば死しているはずの男がまだ生きているのには、正史で出会うはずのなかった青年が関わっていた。

ゼスト隊が広域次元犯罪者のアジトへ調査の手を伸ばそうとしたその日、偶然にも地上本部へ来ていたユーノが手渡した『お守り』が彼らを守り、それどころかレジアスとジェイルの間にあった淀んだパイプを正常化させ、地上本部は大きく力を増すこととなったのだが……。

そのことは、またいつか語られることだろう。

レジアスは端末を操作すると、隠匿された回線呼び出してコールする。二、三度コールされてから、相手側が回線を繋ぐ。

『やあ、君から連絡とは珍しいね。一体どうしたんだい？』

「少し調べてもらいたいことがある。管理外世界で魔法以外に別の技術が発達しているところを知らないか？」

『ん、いやーわからないね。具体的にどういう技術か言ってくれれば……、いやだめか。全てを網羅するには、管理外世界は広すぎるからね』

「そうか……。わかった」

レジアスはそういって、トントンと机を叩く指を止めて顎へと持っていく。

その様子を見て、向こうの人間は面白そうに唇をゆがめ笑った。

『ふむ、その様子だと何かあったね？ 私のほうでも調べてみようか？』

「いや、今は力を蓄える時期だ。そのときが来るまでは道化を演じてやるうではないか」

『くつくつく、いいね、わかったよ。それじゃ』

「ああ」

通信が途切れ、部屋の中には静寂が訪れる。

彼との縁もなんとも不思議なものだと溜め息をつき、報告書に目を落した。

『第二三一管理外世界で発生した未確認技術による局員殺害事件』

総勢一五〇人の本局部隊からのSOS信号によって、応援要請のあったゼストたちがそこに向かったときには、既に本局部隊は皆殺しにされていた。

デバイスから取り出した記録映像で分かったことといえば、相手は一人で一五〇人の部隊を残らず殺し尽くしたことで、魔法とは違う謎の技術によってそれを行ったということだけ。

長引きそうだというレジアスの溜め息は、虚空に消えた。

それから数時間後、無限書庫へと戻ったユーノを出迎えたのは、茶髪の少女だった。

「司書長、おかえりなさい」

「ただいま、副長。早速だけど仕事だ、未開拓区域の整理と平行して、管理外世界に存在する魔法以外の未確認技術があるかどうか洗い出す」

「地上からの依頼ですか？」

「ああ。君にも手伝ってもらおうよ、オルタ」

「はいっ。司書長の仰るとおりに」

頬を上気させ、目を潤ませて頷くとすぐに青いディスプレイを呼

び出す。そこからキーボードを引き出すと、いくつかのキーを叩いて更にモニターを三つ増やした。

彼女が隣を見れば、ユーノは既に七つものモニターを開いて猛然とキーボードを叩いている。その彼の姿を見て、オルタは熱い吐息を漏らした。

オルタ・ユンクは、彼女の本当の名ではない。本当の名はクアツトク、つまりジェイル・スカリエッティによって作られた戦闘機人である。

しかし、本来ならば敵対する立場でも、ジェイルとレジアスが協力関係にある今では友好的な立場だった。尤も、当初の彼女はやはり元来の残虐性を抑えられずに反発的だったのだが。

それを抑えつけたのは、一年前に騒ぎを起こした彼女を完膚なきまでに叩きのめしたユーノだった。

策謀を好む彼女の性質は、知恵を張り巡らせて相手を陥れ、自らの足りない部分を補うユーノとある種似通っていた。それに加えて彼女の気を惹いたのは、ユーノ自身が【魔女】の元で鍛え学び手に入れた容赦のなさであった。

（はぁ……、あの子のあの言葉、今思い出してもゾクゾクしますわぁ……！）

ぱっと見ではしっかり仕事をしているように見えても、彼女の頭の中はそのときの回想が何度も何度も流されていた。

それは、ジェイルとレジアスが協力関係になってから一年後、現在から一年前のこと。

人間と協力するということに我慢ならなかったクアットロは、その残虐性を発揮したトラップと共にミッドへと密かに潜入した。

そのまま重要な場所にかなり威力の高い質量兵器の爆弾を仕掛け、地上本部までたどり着く。が、彼女は時期が悪かった。

意気揚々と爆弾のボタンを押したが、一向に起爆する様子がない。気が付くと、周りには全く人の気配がなかった。

「な、なにが……！？」

「爆弾なら全部回収して解体させて貰ったよ。空間ごと圧縮してしまえば爆弾も何も関係ないけどね」

「……誰ですか、貴方？」

「特別一等陸尉、ユーノ・スクライア。あ、あと無限書庫司書長って肩書きもあるかな」

彼女の前に姿を見せたのはユーノだった。その手には、豆粒ほどに小さくなつた爆弾たちが握られている。

そのことに、彼女は何よりも驚いた。魔法ではアレほどに圧縮することも、赤外線での信号を遮断することも出来ない。つまり、魔法以外の方法で、例えば腕力で、あそこまでに小さく圧縮させたということだ。

そこで彼女は思い出す。ユーノが「空間ごと圧縮」と言っていたことを。

咄嗟にユーノについてのデータを引っ張り出し、同時に彼自身を探る。が、何も出てこない。出てくるはずがなかった。

彼女にとって初めての未知との遭遇に、彼女はあろうつことか戦慄していた。

感情を抱いてみるはずだ。少なくとも、クアットロの思っている『人間』とはそういうものだった。

だが、彼は違う。何も感じていない、その視線から何かを感じ取ることが出来ないのだ。

見下すような目線すらない。いわば、そこらの石ころにでも向けるかのような。地獄の冷たさすら感じられないもの。

彼女は途端に恐ろしくなった。自分は今まで人間を虫けらのように見てきたが、それだって侮蔑という感情があったのに。

「最後のチャンスだ、僕の元で働け。YESなら一度、NOなら二度腕を動かせ」

その言葉が、彼女には天からの助けにも思えた。このときならば信じてすらいらない神に精一杯感謝できていただろう。それほどに、彼の提案は魅力的に思えたのだから。

クアットロは死に物狂いで腕を一度だけ動かすと、それきり力尽きたようにぐったりと地面に寄りかかるようにして身じろぎ一つ出来なくなった。

その後彼女はジェイルの元へと送られ治療を受けた後、もう一度ユーノの元へと訪れ、彼の右腕として働くことになったのである。

(……………うふふ、今思い出してもウツトリしてしまいますわ)

いつの間にか作業の手が止まっているのにも気づかず、オルタは夢想到耽っていた。傍から見ればただの危ない人ではあるのだが。そのうちに、はっと気づいた彼女は再びキーボードを叩き始める。彼女自身、なぜ彼に恋焦がれ身も心も捧げたいと願ったのかは分からない。だが、何がきっかけで恋に落ちるか分からないというのもまた納得できる理由ではないのだろうか。

彼女の場合は『ユーのからもらえるものであればなんでも貰う』というある種おめでたいスタンスであるので、どんな苦痛でも喜んで受け止めてしまう。要するに半分以上ドMである。

「……だめか。整理を度外視して検索したんだけど」

「こっちもだめです、見つかりません。すいません……」

「いや、いいよ。どうせダメ元だったんだし」

柔らかな笑みを浮かべて言ったユーノに、オルタは内心「キヤー、笑った、笑ったーッ！」みたいな状態だったが、顔は何とか平静を装っておく。検索に要した時間の半分以上を夢想到うつつを抜かして無駄にしていたことは、心の最奥にしまっておくことにしたらいい。

「これは、仕事が増えそうだ」

「頑張りましょうねっ」

「あはは、君は仕事が好きかい？」

「司書長と一緒になら何でも好きですよ」

「それは嬉しいね」

半ば告白のような言葉でも、彼はさらりと流してしまふ。人生経験というか、生の対人経験がユーノとオルタでは違いすぎるのだ。

だが、彼女はそれでも良かった。ずっととは言わない。一日の二%でも共有できれば、それでいいのだから。

半ばどろじょうもない変態の域に足を踏み入れつつも、彼女は今日も元気にときめいていた。

49話 裏事情（後書き）

思わぬところで原作ブレイク。やや強引ですがご承知くださいませ。ほんとはシリラスになる予定だったんです。ただの変態紹介になりましたが。

読んでから理解できた方、そうです！ もうこれ三期と嘯くオリジナル編突入ルート確定しました！ やばいね。

あ、そういえばあんまり感想がもらえずに寂しいです。

「一言物申す」的なものでもいいので、気が向いたら書いていつてくださいますし。できればクアット口あらためオルタへの突込みとか。

50話 近況（前書き）

大変遅くなりました……。

一応テスト期間が終わったので、ガリガリと頑張りましたが、
書けない……！ そろそろ超展開はあるかもしれません。

50話 近況

早朝、ベッドから跳ね起きたフェイトは、シャワーを浴びて寝汗を流すとすぐに私服に着替える。

こうしてミッドチルダに居を構えているものの、もちろん地球の中学校には行っているし、仕事だってこなしている。地球とミッドの間では時差があるらしく、やや忙しい日々ではあるが出席日数だつて問題なく、成績も大丈夫。

これでも優等生ですから、とフェイトは鼻を鳴らしつつ朝食の支度を始める。

今日はティアナの誕生日ということで、フェイトとアルフ、それにティータとティアナの四人で一緒に出かけることになっていた。遠出することも考え、朝ごはんは軽めにトーストとコーヒー、それとスクランブルエッグとなった。

朝食を作り終わると、更に沢山の食事を作るために一時間ほど費やすことに。

作ったものはサンドイッチに小さくなるようにと心がけた沢山のおかずたち。今まで作ってきたおかずの中でもかなりいい出来だと自負してみるフェイトだった。

「ふわあつ……。おはよう、フェイト」

「おはようアルフ。ご飯できてるからシャワー浴びてくれば？」

「そうするよー」

アルフが風呂場に入るのを見送ってから、今期末のテストの復習のためにいつも持ち歩いている学習用ノートを開く。中には術式の設定式やら学校で覚えた公式やらが乱雑に書き連ねられている。ごちゃごちゃとしたその中から使う公式だけを抜き出して隣のページへ書き写し、ページの一番上に『一学期末試験対策』と銘打った。

試験が終われば夏休み、つまり長期休暇だ。忙しくなく栞ご謹製の転移魔術陣で移動する必要も無くなるため、なんとしても赤点を叩き出して補習を頂くことだけは避けたいフェイトだった。

カリカリとシャーペンを走らせること十数分、アルフが風呂場からバスローブを纏って出てきたところでその手を止めて机にノートをしまいこむ。

「アルフ、ご飯食べたなら服着てね」
「はいよ、わかってる」

もしかもしかと食事を進め、ほんの数分で食事を終える。

「ご馳走様でした」
「ご馳走さまー」

アルフが服を着ているのを目の端で眺めつつ、肩から提げるタイプのバッグに二つの紺色の指輪ケースを入れた。取っておきのプレゼントを。

その後大きめのバスケットを手にとってイスから立ち上がる。

「それじゃ、いこっか」
「おう」

そんな気の抜けたアルフの返事を聞きながら、フェイトたち二人は家を出た。

「ティードさん、ティアナちゃん！」
「あ、フェイトさん、アルフさん！」
「やあ、おはようフェイトちゃん。アルフさんも」
「おはよう。なんだかさん付けてるのは慣れないねえ」

からからと笑うアルフと共に噴水広場にやってきたフェイトは、既に待っていたティードとティアナに一礼してからとことごと近づいていく。

肩にかけた黒い色のバッグと動きやすそうな私服、そして逆の手に持った薄茶色のバスケットがなんとミスマツチだったが、特に気にせずに噴水の近くまで歩いていく。

「ごめんなさい、待ちましたか？」

「いや、俺たちも今来たところだよ。じゃ、行こうか」

「はい！」

フェイトたち四人が電車に揺られてやってきたのは、郊外にある小さな公園だった。

任務の際に見かけたそこは人も少なく、休日にゆっくりするにはうってつけの美しい場所。

ティアナの誕生日を祝うために予定を取ったその日もやはりその公園に人気は余りなく、ゆっくり出来そうな場所だった。

「綺麗な場所だね」

「任務の途中に見つけたんです。アルフ、レジャーシート敷こうか」

「オッケー」

「あ、私もやります！」

トテトテと駆け寄ってきたティアナと三人でシートを敷くと、バスケットを開けて中身を取り出していく。

今朝作ったばかりのサンドイッチや沢山のおかずが入っていて、四人が食べても食べ切れなさそうな程の量だった。

「凄いね、これを一人で？」

「料理は慣れてますから。といつても、簡単なものですけど」「うっん、とっても美味しそうだ」

ティータはそう言って笑い、試しにと一口手にとって齧ってみる。パリパリとしたレタスの食感が具材とよく合っていた。

そんなティータを微笑ましく眺めながら、フェイトはバッグの中からそつと二つの指輪ケースを取り出す。

「そつだ、ティアナちゃん。お誕生日おめでとう。はい、これ」

「えっ？ あ、ありがとうございます、つて、指輪？」

「いいから、開いてみて」

「あ、はい」

遠慮がちにティアナが開いた其処には、紫と薄い青の宝石が嵌つた二つの指輪。

そつとそれを取り出して手の平に載せると、宝石は静かにその光を湛えていた。

「お誕生日プレゼントのデバイス。紫のがヴィオレットで、青い方がオルタンシアだよ」

「わあ、綺麗……。これ、本当に貰っていいんですか？」

「もちろん。ちなみに、オルタンシアはティータさんの、ヴィオレットは私からのプレゼント」

「まあ、俺は意見を出したただけなんだけどね」

「あ、ありがとうお兄ちゃん、フェイトさん！」

目を輝かせて言ったティアナは、両手の薬指に指輪を嵌めると、それを太陽に翳すようにしてにんまりと笑みを浮かべる。よっぽど嬉しかったのか、その笑みが途絶える様子はない。

「よし、じゃあティアナ！ アタシと追いかけてこた！」

「うん！」

何かを思いついたのか、アルフは唐突にそう言つとティアナをつれて駆け出す。

一度だけフェイト達の方を振り返つたアルフは意味深にウィンクすると、そそくさと青々と芝生の茂つた広場へと走つていった。

「あ、アルフってば、もうっ……………」

「あはは……………。ん、美味しい」

「……………あむっ」

なんとなく目を合わせるのが気恥ずかしくなつたフェイトは、ちらちらとティエダを盗み見つつ、はしゃぐアルフとティアナの声をBGMにしながら自分の作つたサンドイッチを口に運ぶ。

燦々と降り注ぐ太陽光も木陰にいるおかげで大したことはないはずだが、妙に頬が紅潮するのを感じていた。

「……………ぷっ、あっはっはっはっは！」

しばらくの間、二人は何を喋ることもなくはしゃぐアルフとティアナを見ていたが、やがてティエダは堪えきれなくなつたように笑い出した。

「い、いきなりどうしたんですか？」

「いや、ごめんごめん！ フェイトちゃんが妙にしんみりした顔を
してたからさ。つい」

「そ、そんな顔してました!？」

「なんだか考え込んでるみたいだったけど」

「あ、いえ、ちょっとボーっとしてました。なんだかぼかぼかしち
やって」

軽く笑いながら、フェイトはぽりぽりと頬を掻く。

本当は何かを考えていたような感じもしたが、ティータと話して
いるうちにそれも忘れてしまっていた。

「えっと……、わ、私もちょっと混ざってきますね！」

「うん、わかった。ティアナをよろしくね」

「はい！」

妙に高潮した頬を隠すようにして、フェイトはそそくさと駆けて
いく。

春は、まだまだ遠いようだった。

「……であるから、この公式を当てはめると、こうなるわけだ。期
末にも出るからチェックしとくように」

教師の言葉を聞きながら、私は脳内で親友と回線を繋ぐ。

私、アリサ・バニングスは今日も授業中のお喋りに興じることにした。

中学校に進学してからの私は、少しばかり無気力状態にある。授業が分かりすぎてつまらないのだ。

期末どころか中学でやる学習内容は全て暗記して応用も出来るようにしてあるし、魔術の勉強はそれよりも数十倍、数百倍難しい。中学校で躓けるほど、私は勉強をしていないわけじゃなかったから。

『アリサちゃん、また暇なの？』

『だってさあ……』

『んもっ、いくらばれないからって、最近繋ぎすぎだよ』

『むむっ……、そりゃそうだけど！ はあ、早く卒業したいなあ……』

『後二年残ってるけどね』

『……はあ』

念話ですら溜め息をついてしまうほど暇である。もちろん、それを表情には出さないし、指名されればきちんと答えられる程度には思考を裂いてもいるが、やはり暇だ。

思えば騒々しかった三年前と比べて、今は随分と平和だ。

私だって争いを望んでいるわけではないけれど、やはり刺激は足りない。模擬戦などでは到底掴めないあの命と命のぶつかり合いの感覚。時々、ふっとあれが恋しくなってしまうときがある。

全く、まだ成人もしていないというのに。自分で思っているも中々波乱万丈な人生ではないだろうか。

ちなみに、裏では色々と蠢いてはいるものの、最近発足した地球連合としての意思は『異世界人の受け入れは厳正な審査の元に、慎重に慎重を重ねて行う』とやららしい。まあ、有限の世界の中に、

無限に近い世界群の中からぞろぞろやってこられても困っちゃうし。それに、現実的な問題として未知のウイルスや疫病、法律の問題もある。ミッドのように子供でも正規の職員として働くことが認められていたりする場所もあるし、この世界でそんな非常識な行動を取られれば一般人に異世界の存在、魔術師や魔術の存在が知られてしまう危険性もある。だからこそ、こういったことに対しては慎重にならざるをえないだろう。

得てして、人間というのは自分達と違うものを排除したがるものだから。

ちなみに、地球連合の役員には【魔女連盟】の【魔女】達も名を連ねていて、各国の重役以上には魔術や異世界のことなどがきちんと説明されている。どうも、三年前に続いて起こった事件が影響しているとか。

『二人で内緒話?』

『わっ、お師匠様!』

『栞ちゃん、いきなり入るのやめてっていつも言ってるでしょ?』

『あら、ごめんなさいね。私も暇だったから、ついね?』

突然回線に顔を出したのは、私のお師匠様だった。

三年間でまた茶目っ気、というかいたずらっぽさが増した気がするの。は気のせいだろうか。

ちらりと隣を見ると、金髪の親友がノートを書き取りながら時折物憂げな色を瞳に浮かべているのが見えた。……男か? 向こうで出来たのか?

まあそれはともかくとして、最近妙にサタンが絡んでくる。いや、いい意味でなんだけど。

気が付くと周りにいるし、よく気が付くからすごく助かってはいるんだけど、ちょっと違和感があったりして。

どうしたんだろうっねえ。

『あ、そろそろ授業終わるよ』

『あら、そうね』

『おー、お昼休みだー……』

その言葉で早々に回線を切られ、次の瞬間にチャイムが鳴り響く。とりあえず午前中の授業は全部終了したから、後はお昼食べて午後の授業やるだけかな。

まあ、最近はずっとこんな感じ。

大きな事件もなく、大したこともなくといった感じですよ。終わり。

50話 近況（後書き）

ね、ラヴって難しいね！

作者自身デートとか初恋とかないもんですから、もうこればかりは、ね。どうしようもない。

恋愛編は早々に切り上げてしまいかもしれません。

アリサの方はガリガリ書けたのに。早く熱血アリサが書きた、おっ
と。

51話 激変

ティード・ランスターが、殉職した。

その報せを受けたのは、いつもの周辺巡回から戻ったときだった。

「え……？　そ、それ、どういうことですか！？」

「フェイトちゃん？　あ、えーっと、航空隊のランスター隊長が任務中に殉職しちまったって……」

「そ、そんな……！？」

ぐらりと、世界が揺れるような感覚。

気づくと、私はその場にへたり込んでいた。ひんやりとした床の冷たさも、今の私の頭を冷やすには余りに温すぎるようだった。

「フェ、フェイトちゃん！　気をしっかり！」

「うそ、うそです……、ティードさんが、そんな……！」

「誰か、医務官呼んで来てくれ！　テストロツサが倒れた！」

どさり。

重い音と共に、私は意識を失った。

初めての、ことだった。

「心因性のショック症状ね。原因に心当たりは？」

「多分、ティードが殉職したっていうこと聞いたから、じゃないかな……。フェイトは、ティードのこと好きだったみたいだから」

「そう……。とにかく、目が覚めたら帰っても大丈夫よ。体に支障はないから」

「そうかい、ありがとう……」

暗い声音を隠すことも出来ず、呼び出されたアルフはそう返す。

フェイトが医務室に担ぎ込まれてから約一時間、彼女は今だ目覚める様子を見せなかった。

「ただ、原因ばかりは取り除けないわ。やれるかどうかは本人次第ね」

心因性ショック症状、要するに心に大きな負荷がかかったため、それから心を守るために一時的に意識のブレーカーを落としたのだ。そのことから、彼女がどれほど心の裏側でティードを慕っていたかどうかを窺い知ることが出来るだろう。

アルフは今だ苦しそうに眉を顰め眠っているフェイトの軽く撫でると、小さく溜め息をつく。

と、ピクリと眉が動き、フェイトが目を覚ました。

「ア、ルフ……？」

「フェイト、大丈夫かい？」

「あ、れ、私なんで……？」

自分が何故ここにいるのかもわからない様子だったフェイトの顔色が、瞬く間に青白く、そしてさらに土気色へと変わっていく。

手が震え、呼吸が安定しない。

「あ、ああ……！　ちが、そんなっ……！」

「まずいわ、アルフちゃん！　フェイトを抑えて！」

「え？」

「いいから早くっ！」

「わ、わかった！」

ハツハツハツ、と短く息を吐き出し続けだしたフェイトを見て、医務官は慌てて自分のデバイスを起動させつつ、アルフにフェイトを抑えるように言う。

フェイトが暴れだす前に患者を眠らせるための睡眠魔法を掛けると、フェイトは瞬く間に眠りへと堕ちていった。

「……ふう。思ったより根が深いみたいね」

「フェイト……」

「ランスター一等空尉には妹さんがいたわよね？　その子に他に身寄りには？」

「いや、そんな話は聞いてないね……」

「……あなた達、空尉の葬儀が終わったら妹さんを連れて一度地球に戻った方がいいわ。故郷で少し整理をつけたほうがいいと思うの。それに……」

「それに、なんだい？」

言おうか言うまいか迷っていたらしき医務官は、すつとアルフのほうへ眼差しを向けると口を開く。

「もう、空尉が墜ちたことについて随分悪い噂が広まってるわ。空尉が手を抜いたとか、目立とうとして突っ走っただとか」

「なっ　！？　あいつは、そんな奴じゃないっ！」

「わかってる、噂よ噂！　大きな声を出さないで頂戴。そういうのもあるから、妹さんも好奇の目に晒されるよりはマシじゃない？」

「……フェイトが落ち着いたら、ティアナと一緒に話し合ってみるよ」

「そつなさいな」

医務官はそつ一言だけ呟くと、書類の整理を始めた。

山のように積み重なっていた紙の束が瞬く間に消えていくのを見るのは、中々に面白いものだと感じる。

「……この子はさ、やっと自分で歩き出せそうだったんだ」

「」

ポツリポツリと、アルフが言葉を溢す。

「友達が出来て、学校にも行って。自分で働くってことを知って、自分のための幸せを知って。誰かを、好きになるってことを、知って」

言葉と共に、彼女の目には徐々に涙が溢れ出す。

その痛みは、心が繋がっているフェイトのものでもあった。

「やっと、やっとここまで来れたんだ……っ！　なのに、なのになんでえ……！」

蹲るようにして、嗚咽と共に言葉を切ったアルフは、最早言葉を出すことすら出来ずに嗚咽を漏らす。

それは、生み出されてからずっと彼女の事を見てきたアルフだからこそ、言えたことなのだろう。

「……そつ」

そんなアルフの言葉に、医務官はそう呟くしかなかった。

フェイトが帰ってきた。

正確には、死んだ目をしたフェイトと、その手を離さないようにしっかりと握ったアルフと、アルフに背負われた見知らぬ少女が。笑顔で迎えようとしたリニスの表情が凍る。

お母さんが出てきてアルフから事情を聞くと、どうやら相当深刻な状態らしい。

まずは眠っている少女を寝かせるためにアルフが空き部屋に入り、フェイトはお母さんとリニスに連れられて別の部屋へ入っていった。とりあえず、私はアルフから事情を聞こう。ちなみに今は真夜中です。

「で、何があってその子は誰なのさ？」

「この子はティアナ・ランスターって言ってね。ほら、前に話しただろう？ フェイトが好きだって彼。彼の妹なんだよ」

「それが、なんでうちに？」

「……ティードってんだけどね。任務中に、墜ちちまって……」
「まさか……」

言葉が続けられずに口を噤んだ私に、アルフは静かに頷く。

……そっか。それで、こんな時間に戻ってきたのか……。

「それで、これからどうするの？」

「しばらく仕事を休ませるよ。今の状態じゃあフェイトまで消えちまいそう……。それに、この子ももう天涯孤独になっちまったし……」

「そっか、二人きりだって言ってたもんね……」

穏やかに眠っている少女を見ながら、そう呟く。

大切な人が死んで、ようやくうまくいき始めていた生活はボロボロになった。……残酷なもんだね、世界って。

神様つてのがいるなら、どうしてあの子にこんな辛い運命を与えるのか聞いてみたいものだ。そしてぶん殴ってやりたい。そんなの、私が引き受けるのに。

「学校は、どうするのさ？」

「わかんない。フェイトが決めることじゃないかな……。そう言えば、この子にお兄さんのこと話したの？」

「ああ。フェイトが、泣きながらね。この子もフェイトが辛いことわかって、今まで泣かずにいたんだ。強い子だよ……」

「そっか……」

頑張ったんだね、二人とも。

ううん、三人とも、か。アルフだってフェイトと繋がってる、辛いはずなのに。泣きたくて仕方ないはずなのに、こうして我慢してくれてる。……こういう時、他人は何にもしてあげられないんだよね。

「それに、さ。葬儀もやったんだ。やっぱりああいう職場だから、殉職者って多くてさ。それで、葬儀にも出ただけど……」

ぼつぼつとアルフの語った内容は、酷いものだった。

事情を知らない者達は皆口々にティードをけなし、フェイトは思わず掴みかかっていたそうだ。

しかも、言っていたのはほとんど管理局の高官達。

やれ管理局の面汚しだの、犯罪者一人捕まえられない無能だのと、酷く罵ったらしい。

フェイトはそれに激昂し、身動きできなくなるまで痛めつけたとか。ティアナも、その高官を憎憎しげな目で見ていたらしい。

結局やってきた警備員に取り押さえられてしまったそうだけど、アルフの話では地上部隊の間で「よくやった」「隊長の誇りを守った」と絶賛されていたようだ。

それでも、やはり組織としてけじめは必要ということで、しばらくの間謹慎処分が下り、それを利用して地球に来たのだという。

「……よくやったよ、フェイトは。ティアナちゃんも、よく我慢した。どっちも間違っていない」

「ティードは偏見のない奴でね、地上部隊からのウケもよかった。だから、あの時は皆がフェイトやティアナの味方だったよ。でも、立ち直れるかどうか……」

「……大丈夫。あの子は強い子だから。どんなことがあっても、きちんと受け入れて前に進めるよ」

アルフが言うには、フェイトの療養と一緒にティアナをこの家で預かって欲しいそうだ。そしてもし不都合がなくティアナが望むのであれば、養子縁組でお母さんの娘として迎え入れて欲しい、と。もちろん、それはティアナが望んだらの話だけど。

「……ん、んんっ……」

「ティアナ、目え覚めたかい？」

「あれ……、アルフお姉ちゃん……？ こっ、どこお……？」

眠たげに半開きになっている目を擦りながら、上半身だけを起したティアナが呟くように言う。

以前写真を見せてもらったけど、もう少し成長してるみたいだね。

「家を出る前に言っただろう？ フェイトのお母さんが住んでるお家だよ」

「あ、そっか……。あれ、フェイトお姉ちゃん、ちっちゃくなってるよ？」

「あはは、私はフェイトじゃなくてアリシア。フェイトのお姉ちゃんだよ。初めまして、ティアナちゃん」

「あ、えっと、初めまして！ ティアナ・ランスターです！」

「うん、偉い偉い」

おー、いい子だ。……兄を亡くしてすぐだとは、とても思えないほどに。

「それで、フェイトお姉ちゃんは……？」

「今はお母さんのところにいると思うよ。ティアナちゃんも、泣きたいなら泣きなさい。我慢は体に毒なんだから」

「で、でも……」

「いいから。ほら」

眉を寄せて泣くまいと我慢しているティアナちゃんの頭を、ぎゅっと抱きしめる。

しばらくすると、ぐすぐすとすすり泣く声が聞こえてきた。……

ほんと、頑張り屋さんだ。

「……やな世界だね、本当に」

ぼつりと、アルフが零した。

51話 激変（後書き）

だんだん短くなってきている希ガス。

ということ、急展開。よーし、鬱展開入ったぞー。書くぞー。

いや、恋愛より書きやすいんですよ、ほんとに。

だって、デートとかしたことねーもん！ なに、彼女って何！？

彼氏って何！？

ともかくそんな感じ。次回更新は……、どうだろう。今回よりは早いと、いいなあ……。

最近感想も減り気味です。催促するわけじゃありませんよ、ネギまの方が感想来るなあとしみじみ。アレでしょうかね、現在連載中の作品の二次創作の方が皆見るのかな。

ちなみに、更新が遅い理由や今後の更新予定は活動報告に載せてありますので、気になる方おりましたらどうぞ。

52話 何もできないという事実(前書き)

四分の一ほどガールズラブ&えっちな成分が含まれています。
苦手な方はゴージャック、もしくは飛ばして読むことをお勧めします。

52話 何もできないという事実

フェイト達が帰ってきてから二日ほどが経った。

あの日からフェイトは全くといっていいほど眠れず、仮に眠れたとしても悪夢に目を覚まされる夜が続いている。

「フェイト、少しでも食べなよ。体もたないよ……?」

「いい……。食べたくない……」

ベッドの中で蹲り、辛うじてぼそぼそと呟く声が聞こえた。

あの日から、フェイトはずっとこうだった。眠っている間に体調を整える魔術を施し、栄養剤を注射してなんとかもたせてはいるものの、やはりこのままではまずい。せめて食事だけでも摂ってくれば……。

「……ご飯、ここに置いておくから。ちゃんと食べてね……」

「……」

ボタン、と扉が閉まる。

やっぱり、二日程度では立ち直るのは無理そうだ。地道に待つしかない。

「アリシア、どうだった……?」

「ダメ、すっかり閉じ籠ってる。ご飯にも手をつけてないし」

「そうか……」

扉の外で待っていたアルフは落ち込んだ様子でそう言った。

でも、これに関して私たちが出来ることはほとんど何もないといってもいい。結局、フェイトがどう踏ん切りをつけるかどうかなん

だから。

……よし、私まで暗くなってちゃダメだ。私だけでも明るく振舞わなきゃ、フェイトがどんどん沈んでいっちゃう。

「私、ティアナちゃんの所行って来るね」

「うん、頼むよ……」

「アルフ、きついだろうけど、無理してでも笑っておきなよ。笑えばいつか心も晴れる」

「……そうだといけどね」

やっぱり、心が直接リンクしているだけあってそう言った感情もダイレクトに伝わってしまうんだろう。こういったときにはかなりきついはずだ。

アルフにもよく休むように言った後、ティアナが休んでいる部屋へと入る。

すると、そこには見知った後姿があった。

「すずか？ 何してるの？」

「ん？ あ、アリシア。ちよつとお話をね」

「子供にグロチックなお話聞かせてたんじゃないでしょうね？」

「さすがにそれはないよ。魔術のお話をちよつとき。ティアナちゃん、また後でね」

「はい！ ばいばい、すずかお姉ちゃん！」

満面の笑みと共に手を振り、すずかを見送るティアナ。

けれど、その内側はボロボロだ。すぐにでも泣き出しそうになる自分を、強引に押し留めているんだろう。

私はベッドに腰掛けると、ティアナの頭をゆっくりと撫でる。

「ねえ、魔術のお話って何を聞いたの？」

「魔術の基礎を一杯話してくれました。私、このままじゃ嫌だから……」

微笑みながら、ティアナはぼつりと呟く。

私も経験は違えど、何もかも投げ出したくなってしまうことがあった。まあ、お母さんのことなんだけど。

でも、そのときは栞が助けてくれた。私だって、何かしてあげたいんだ。

「あの、アリシアお姉ちゃん！ 私に……、魔術を、教えてください！」

「……ここから先は、もう後戻りできないよ？ 死ぬ危険もあるし、怖いことや痛いことが一杯ある。それに耐えられる？」

「怖いのも痛いのも、嫌です。でも、お兄ちゃんが馬鹿にされたままなんて、私嫌なんです！」

「……わかった。でも私が教えられるのはほんの一部だけだし、それも師匠の許しがなければいけない。だから、それでもいいなら」

「はい。お願いします！」

最後の方は涙声になりながらも、必死に流れそうになるそれを堪えて頭を下げるティアナ。

……よし、私も頭下げるか。半人前だけどさ。

「じゃあ、私は師匠の方に頭下げに行ってくるね。……大丈夫、だと思っけどさ」

「は、はい！」

ティアナの部屋から出て、そのまま栞の部屋へ。

多分今の私たちの会話も分かってるだろうし、待ち構えてるんだろっなあ……。

扉の前まで辿り着くと、コンコンとノックし、反応を待つ。

「どうぞ、入って」

「し、失礼します」

うわっ、緊張してきた。

栞もこの三年で大分変わった。変わったというか、私たちは今まで見た目に騙され過ぎてたって言った方がいいのかも。近すぎて気づかなかっただけで。

立ち振る舞いからなまでに、全部が王者の風格というかなんと言うか。前に立つだけで冷や汗が出る。

普段はそんなでもないけど、こうして意識するとぜんぜん違うものだ。

「話は聞いてたわ。弟子を取るって形に、なるのかしらね」

「……お願いします。あの子の願い、叶えたいんです」

「……じゃあ、試験を出すわ。それに合格できたら、弟子としてとつてもいい。ただし学業はおろそかにしないこと」

「その点は大丈夫！ もう高卒レベルまでは頭に入ってる！」

時間だけはあったから、勉強はみっちりやっておいたのです。

しかし栞、というか栞さん？ 栞様？ 個人的には様付けしたほうがいい気がする。あ、でも嫌がるか。

栞は本当になんというか、背と胸があんまり伸びたり増えたりしてないのに、とっても大きくなった気がする。私は、うん。背は伸びた。フェイトの方が伸びてるけど。

……フェイト、大丈夫かな。

「アリシア、妹を信じてやりなさい」

「栞……」

「私たちに今出来ることは、フェイトが体調を崩さないようにすることと、ただ見守ることだけ。フェイトの中の問題は、フェイトにしか解決できないんだから」

「……うん」

確かに、その通りではあるんだけど。

でもやっぱり、お姉ちゃんとして何か出来ないのかな。私は、このままなのかな。

「じゃあ、試験内容を考えるから今日はこれでおしまい」

「え、今出すんじゃない」

「私だってそう何個も用事を抱えてるわけじゃないわ。それに、最近私が一々手を出すほどスケールの大きな事件はそう幾つもないのよ。とりあえずはティアナとじっくり話をしてあげなさい」

「……わかった。じゃあ」

「ええ、おやすみなさい。良い夢を」

目を細めて笑い、栞は手を振って扉から出て行く私を見送った。

……フェイトも、ティアナも、両方助けてあげたいって思うのは、悪いことかな。

「……しかし、まさかフェイトとティード・ランスターが恋仲だったとはね」

アリシアが部屋から出た後、大きな氷の入ったグラスにブランデーを注いだ私は、小さく嘆息する。

フェイトと親しい男性が居ると聞いた時には転生者を疑ったものだけど、そもそもあの時点で原作なんて影も形もない。いまさら影響力なんてないと高を括っていたのがまずかったか。

けれど、まあ。これも一つの歴史だ。フェイトには乗り越えるだけの力はある。それを自分で見つけ、引き出せるかどうか。

「……一度死んだ身としては、なんとも言えないわよね」

そう言えば、確かにそうだ。言うてから気づく。

私だつて一度死んではいるものの、前世の私の痕跡は全て消してもらった。だからまあ、心も痛まないのだけど。

やっぱり罪悪感はあるわよね。手を出しておけば助けられたかもしれないんだし。

「それで、どうするの？ お姉ちゃん」

言ったのはさすがだった。

パンティーとネグリジエを一枚着ただけの姿で、後ろからしな垂れかかるように私の前で手を交差させる。

すずかには、この三年の間に私が転生者、前世持ちの人間であることを明かしてある。意外とあっさり受け入れられちゃって、その上「それじゃあ栞の方がお姉ちゃんだね」と私のことをお姉ちゃんと呼ぶようになった。

いや、そんなすずかも可愛いんだけど。

「さあ、どうしましょうか」

左肩から顔を覗かせたすずかの首筋に舌を這わせ、指でなぞる。空いていた右手でグラスを掴むと、一口ブランデーを含んですずかに口付けた。

「んっ、ふうっ、んくっ」

「んあっ、あふっ」

ぴちゃぴちゃと舌を絡ませ、お互いの舌の上で液体を転がす。ブランデーと唾液がぐちゃぐちゃに混ざり合い、どこかぼんやりと意識がぼやける。酩酊感がくらくらと頭を揺らし、自分と言つものを見失いそうになって。
ふと、こくりと自分の喉がなる。

「あっ……」

「あ、ごめんなさい。飲んじゃったわ」

「もうっ……」

「ふふ、ごめんなさいったら。ほら」

不満そうにむくれたような声を出すすずかが可愛らしくて思わず微笑んだ私は、自分の歯で舌を傷つけ、じわりと血を浮かせる。

そのまま二度目の口付け。

ぴちゃぴちゃ、というより酷くはしたない音を立てながら、私たちはお互いの舌を貪るように吸う。

すずかもまた自分で自分の舌を傷つけ、お互いがお互いの血を啜り取っていた。

いつしかすずかは私の前に回ってきていた。お互いを抱きしめるような格好になった私たちは、そんな格好を気にすることもなくお互いの舌を求める。

「んっ……くちゅ、ふあ……ちゅっ」

「ふむう……んあふ、んく、ぷあ」

酒が回っているのだろうか、酷く意識が曖昧だった。ぐにやりと歪む視界の中、はつきりしているのは目の前の彼女だけ。

私の全てを奪おうとすらしているように感じる彼女は、嬉しそうに目を蕩けさせるとぺろりと頬を舐める。

ぞわりとした感触と共に私の頬が吊りあがり、口が笑みを形作る。伸ばされたままの下を指先でつまみあげると、痛みを与えないように、けれど決して放さないようにして横から舐め上げた。

「ああっ、ああうっ！」

「んふふ……」

言葉に出来ない喜悦に満たされ、涙目になっている彼女の舌を指先で弄ぶ。

しっかりと引き伸ばし、彼女の口がぽかんと開けっ放しになっているところへ私の舌を挿し入れた。ぐじゅりと、唾液が泡立つ。

それを拡張するように舌を動かすと、そのまま口内を蹂躪するかのようになから上へ、左右へと動かし満遍なく自分の唾液を摺りこんでいく。

ふと、目の前に光るものが見えた。

彼女の眼から落ちてきたそれを見て、ふと私はそれを舌で掬い飲み下す。しょっぱいような、不思議な味がした。

「あえ、うああっ！　　いああ……っ！」

「はああ……」

何かを主張するように見開かれた眼、その白い部分をぺろりと舐め上げると、可愛らしい悲鳴が聞こえた。

いや、悲鳴にすらなっていないだろう声が上がり、私は思わず熱っぽい吐息を吐き出す。

眼から舌が離れると、自然とそれは彼女の口へと戻っていく。スルリと入った舌は私の意志を離れたかのように、彼女の舌の根を絡め取るように蠢く。

ふと、彼女の舌を引き留めていた指を離した。瞬く間に、彼女の口の中に戻っていった。

けれど、そうイニシアチブを返すようなことはしない。彼女の頭を抱え込むように手を後頭部にやると、こちらへ引くようにして手に力を込める。

やっと舌が開放されたと安心した直後に力を入れられ、対抗するための力を込める時間もなかった彼女はぐいっとこちらへ顔をやった。そして、そのままびちゃびちゃと私の舌に口内を攪拌かくはんされ、蹂躪される。酷く興奮し、このままでは治まらないと感じた。

ぴちやり、と鋭くなった聴覚を突く音。目の前の彼女とのこれではなく、もっと下の方から聞こえた音。

彼女の口内を悉く私の味に染め上げながら、彼女に気づかれぬようにそっと手を伸ばしていく。

ゆっくりと、けれど彼女の気をこちらに向けないように丹念に口を弄る。

そして、滾々と湧き出る泉へと指を這わせた。

「んんっ!? ん、んーんーっ!」

ビクツと体を震わせ、頬を高潮させながらトントンと私の胸を叩いてくる彼女。本当に可愛らしく、そしていじらしい。

一度そこから指をどけると、護身術の要領で体を震わせていた彼女をベッドへと押し倒す。そのまま胸をだけさせると同時に両手を右手で拘束し、左手を服の舌へ這わし、舌を臍の穴周辺へ這わせる。

「お、お姉ちゃ、そこ、ひあっ……」

「ん、気持ちいいでしょ」

「気持ち、いい、けどっ、や、こわれっ……!」

「大丈夫、壊れない」

壊すなんて、もったいない。こんな美しいものを、貴女を壊すなんて、ありえない。

壊れる一歩手前で、踏み止まらせてあげるから。

自分から「壊して」と泣いて縋り付いてくるまで、じつくりと。

快楽でいたぶって、私以外見えなくして。

「お、姉ちゃん……っ、あっ、そこ、いいよあっ……!」

彼女の情欲に濡れた声に、私の心がゾクゾクと震える。いや、もしかすると体も震えたかもしれない。

それほどの快楽だ。彼女の艶やかな声は、私にとって何よりの媚薬。

息荒く彼女の臍から、つつーと肌から舌を放さぬようにして谷間を通り、首筋へ。つぶりと、そこへ傷をつけ血を啜る。

「ふあっ……。ね、ねえ、吸わせてえ……。吸わせてよあ……」

「ふふ、なあに？ 欲しいの？」

「欲しい、ほしいの！ おねえちゃんの血、ちょうだい……」

「いやしんぼさんね、いやらしい。ふふ、ほら」

さっき血を絡ませたときよりも激しく、ガリツと舌を傷つけて血を吹き出させる。

そのまま彼女の唇を奪い、口内へと血を注ぎ込む。彼女の唾液と混ざった私の血を飲み干していく彼女の喉が、コクコクと動く。

時折泉を掻き分ける度にビクツ、ビクツと体を震わせていたが、それよりも血の快樂の方が勝っていたのか、それとも両方を享受していたのか。

しばらくして私の舌が自然治癒によって治ってしまったのをきっかけに、口付けをやめる。

赤と銀の橋が、月夜の光に照らされてねっとりとした輝きを放っていた。

「……………朝？」

気が付くと、私は裸ですずかと布団に包まっていた。

隣で気持ちよさそうに寝ているすずかを起こさないようにそつとベッドから出ると、自分が本当に何も着けていないことに思わず頭を抱えそうになる。

ストレス、なのだろうか。少なくとも、昨日ののめり込み方は尋常ではなかった。

だが、気持ちよかった。今まで味わったどの快樂も、霞んでしまいうそなほかに。まるでエデンのリンゴだ。

フェイトを助けられないことが、これほどストレスになっているとは思っていなかったが、他にストレスの要因になるものはない。後は、仕事続きで欲求不満が溜まっていたのも原因の一つなのだろうか。

「お姉ちゃん……」

ドクンッ、と胸が高鳴る。思わず彼女の首筋に舌を這わせそうになり、慌てて自制する。

どうも、暫くはすずかとまともに喋れなさそうだ。

……はあ。

52話 何もできないという事実（後書き）

ティアナちゃん大人びてるとかフェイト頑張れとかそれ以上に。

えっちいの、書きすぎ？

普段はB5用紙に大体4ページぐらいの容量（余白少なめ、文字数多め）で書いてるってのに、5ページ目に入れた上に4ページ目がまるまるえっちシーンってどうなの。というか運営さん、これ大丈夫ですか。

一応直接的表現はないはずだ。ない、よね？

53話 前を向いて

数日後、私は地下室を改造した演習場へとやってきていた。

「アリシア、準備はいい？」

「うん、いつでも」

演習場の向こう側に立っている、ドレス姿のブルーベルにそう返すと、全身に魔力を流し込む。

あの翌日、栞が私に出した試験は『タイマンでブルーベルと戦うこと』。死ななければ合格、だそうだ。……おかしくない？ その条件。

ともかく、これをクリアすればティアナちゃんに魔術を教える上げられる。それだけの技術が身についたって証明になる。

「……勝つよ」

「出来るものならね？ それじゃあ……、開始っ！」

ドパンツ！ と周囲から発生する大量の水を、とりあえずバツクステップで回避。というか本当に躊躇ないといふかなんと言つか、これ私死ぬ？

とにかく、水は蒸発させておこ、あ、だめだ。蒸発させたらそのまま濃度濃くされて気管に入れられる。肺とかだめになる。

まずい、意外と厄介な相手？

「とにかく、まずは接近するっ！ フェアリー・ロウ妖精の法、倍速テンカウント！」

襲い掛かる水から飛び出す水しぶきから次々に速度を奪い、それを一〇倍にして自分に加算していく。

まずは相手に接近しなければ攻撃もままならない。一気に踏み込み、音速の壁を越えた速度でブルーベルへと近づくと、そのまま電撃の鎌を形成して叩き付けた。

が、それはブルーベル本人に届くことなく散らされ、やむなく後退する。

「生半可な電力じゃ、このシールドは破れない。原理はわかるでしょ？」

「純水にすることで限りなく電気の伝導率を低くしてるってことだね。厄介なッ！」

通常、水は電気をよく通す。それは、水の中の不純物が電気を通す媒体になってるためだ。逆に言えば、その不純物を取り除いてしまえば、水はほとんど電気を通さない絶縁体になる。

ブルーベルはその純水の状態を意図的に作り出し、常にシールドとして周囲に展開しているらしい。しかもあの水のシールドは常に流動している。そのせいで表面に付着しているであろうほこりが中へ入らず、結果としてシールドの皮膜部分だけにしか電気が届かない状態を作り出している。

まったくもって厄介だが、まあ方法はないわけじゃない。つまりそれ以上の電力で持って消し飛ばしてしまえば、蒸発させてしまえるわけだ。

相手の手を増やすのはいかなものかとも思っけど、しかしそうしなければ相手にまず攻撃が届かない。

というかね、音速を視認するってどういう動体視力してるの!? さすがユニゾンデバイス、何でもありだね。

「雷閃ッ！」

叫ぶと同時、音速の壁を一つ飛びで飛び越えそうな速度で、雷で

形成された刃がシールドへと叩きつけられる。

半物質化したそれは一瞬でシールドを切り裂いたものの、斬り返そうとした時点でシールドが再構成された。

なにこれきたない。

「なら、雷咆らいほう！」

「おっと、これは」

至近距離で収束させた雷を砲撃のようにして叩きつけると、シールドの向こう側でブルーベルが更に障壁を作り出す。その直後、シールドが一瞬で蒸発し、その向こうの障壁によって阻まれた。

「雷咆なら効くみたいだね？」

「さあ？ ほら、じつとしてると潰れるよっ！」

「やばっ」

攪乱するように様々な場所へと走り、時々後ろを向く。

視界に入るのは、私の走ってきた場所が悉く水圧によって押し潰され、クレーターになっている光景だった。

「ちなみに、魔力で押し縮めた今の水の総量は二〇〇万トン。かすった時点でそこが潰れるよ」

「殺す気い！？」

「まあ、そういう試験だからね。ほら、避けないと死んじゃうよ！」

ドンドンツ、と床にクレーターを作りながら進む水流と追いかけてこする事数分、私はとにかく一撃入れることだけを念頭に置いて攻めることにした。

接近と離脱を繰り返しながらタイミングを見計らい、両腕に魔力を溜めていく。

「まあ、合格かしらね」

私の隣でアリシアお姉ちゃんとブルーベルさんの戦いを見ていた
栞様がぽつりと言った。

初めまして、ティアナ・ランスターです。え、なんで栞様のことを
様付けしているかって？ その、なんというか、威圧感のような
ものが凄くって。

栞様本人はとっても綺麗な人で、なんというか『お嬢様』そのも
のといった感じなんですけど。

今日は私に魔術を教えてくださいると言うアリシアお姉ちゃんの、『
試験』を一緒に見に来たのですが……。

「これが、魔術……」

「そう。怖くなったなら、止めてもいいのよ？」

「……いえ、やらせてください。お兄ちゃんの、ランスターの名前
を守りたいんです」

「全く、こんな健気な子を放っておいて、あの子も塞ぎこんではい
られないんじゃないかしらね」

フェイトお姉ちゃんは、私をこっちに連れてきてくれてからとい
うもの、一度も部屋から出てきていないそうです。

私も少し屋敷の中を歩いただけで、外へは出ていません。……や
っぱり、まだどこか信じられない気持ちはあります。

お兄ちゃんとフェイトお姉ちゃんと、アルフと私がいて、それが
当たり前だったのに。簡単に崩されてしまった。

それは、ある程度私も覚悟していましたが、あの日は特に言い含
められました。「俺がいなくなっても、絶対立ち止まるな」と言わ
れて、最初は何のことか分からなかったけど、こうしているとなん

となく分かる気がします。

お兄ちゃんはその日自分があそこで死んでしまうことを、なんとなく気づいていたんじゃないでしょうか。だから私に、あんなことを言った。そう思うんです。

でも、だからこそ。私は立ち止まれない。歩くためにも魔術を学んで、ミッドへ戻りたい。

「いいこと、ティアナ？　あなたがこれから進む道は、普通の魔導師では到底進めない茨の道。それを進む覚悟はある？」

「はい。あります」

「……私の周りの女の子って、皆こういう子ばかりよね。わかつたわ、アリシアにきちんと教えてもらいなさい。魔術がどれほど不可思議で、危険なものなのか」

にやり、と人の悪そうな笑みを浮かべ、栞様が言った。

確かに、あれは危険な力だ。でも、心強い。あれほどの能力を振るえる技量と、それ以上の想いでそれを統制する心。その二つを、あの二人は確かに持っている。

昔見た魔導師同士の戦いではなく、力と力のぶつかり合い。強化ガラスに更に魔術をかけてコーティングしてあると言うこのガラス越しにも、私の肌を逆立てるほどに伝わってくる。

「ああ、そうそう。ブルーベルは今回本気の一割も出してないわ」「えっ」

一割も出していないと言うことは要するに、姿の見えない敵に対してほとんどお遊びの状態で戦っていたと言うことだ。

アリシアお姉ちゃんだって決して弱くない、というか私じゃ絶対勝てないし、普通の魔導師、むしろエース級と呼ばれる人たちだって無理だろう。それほど強いのに。

底が知れない。

「今回は水で押し潰すくらいしか使ってなかったけど、本当なら相手の気管に水蒸気を入れるなり、相手の血液をコントロールするなり、最悪この部屋全体を水で包んで窒息させたりと。色々倒し方があるのよ。あの子の能力は液体操作だから」

「それは、卑怯臭いと言っかなんというか……」

というか、事実滅茶苦茶卑怯な気がします。

相手の血液を遠隔操作って、それだけで倒せますよね。

「まあ、そういう化け物レベルがこの館にはゴロゴロいるわ。強くなるには絶好の環境よ。精進しなさいな」

「は、はい！ あ、あの……」

ふと気になった。

この人が、どれくらい強いのか。

「栞様は、どれくらい強いんですか？」

「私？ そうねえ……、片手間で世界壊せる、かしら」

「……へっ？」

「というか、私達【魔女】のことは知ってる？」

「あ、はい。アリシアお姉ちゃんが昨日の夜に説明してくれました。栞様もそうだと聞いたんですが」

「そう、私達【魔女】は大体そのレベルよ。怖くなった？」

「い、いえ、そんな！ その、凄いと言っか、むしろ凄すぎて想像つかないっというか……」

「ふふっ、気にしなくていいわ。さあ、アリシアとブルーベルを迎えにいつてあげましょうか」

「はいっ」

につこりと微笑んだ栞様に手を引かれ、私はその部屋を出た。
そう言えば、栞様の笑顔って、見てると安心するなあ……。なん
でだろ？

「そう、ティアナちゃんが……」
「やっと反応を示したわね。ランスターを守るんだって、張り切っ
てたわ」

深夜、私は食事を持ってきてくれた母さんとそんな話をしていた。
ティアナちゃんは凄いな。私なんて、ここで蹲って前に進もうと
すらしていないのに。……こんな、私とは大違いだ。

「ねえ、フエイト？ 少し昔話をしてあげる」
「……」

ベッドに腰掛け、母さんは体育座りしている私の頭を抱きこんで
口を開く。

「母さんがアリシアを産んだ頃のことよ。それまで愛し合っていた
私達夫婦の関係は急に冷めていったわ。何でだと思っ？」

問いかけるような言葉。けれど、母さんは私の言葉を待たずに更

に続ける。

「それはね、あの人は私を愛してはいたけれど、子供を愛してはいなかったの。だから、私が子供に構う時間が増えていくにつれて、だんだん仲は悪くなっていったって、とうとう離婚することになったわ。その時にあの人は言ったの。『君はそのままできて欲しい。僕がどれほど醜くなっても、君は我が子を慈しむ君でいて欲しい。それが我が恨な夫からの最後の頼みだ』って。変なこと言うようなら馬鹿にするなど引っぱたいてやろうと思ってたのに、その言葉が妙に心に残ってたね……」

ぐっ、と母さんが私を抱く手が強くなる。
かすかに、震えているように感じた。

「それから、あの子が一度死んでから、今まで。ずーっとあの人の言葉が私の胸を刺すの。私は我が子を慈しむどころか、多くの我が子を手に掛けたのだから、本当はこんな風に幸せな毎日なんて送っていたらいけないんだって。ずーっと」

「……違う、よ。母さんがいたから、私、こうしてここにいるの」「うん、うん。でもね、母さんはあなたたちの母さんだから、止まってなんかいられないのよ。どれだけ胸が痛くても、あなたたちを守るために、必死になって進むの。あなたにとつて、テイーダさんは、そういう、人じゃなかった？ あの人の残したものを、必死になって、守りたいって。そう、思える人じゃ、なかった？」

母さんが、気づけば泣いていた。

ボロボロと大粒の涙を零して、私の頭を胸に当てて。嗚咽を隠そうともせず。

そんな母さんを見て、なんとなく判った気がした。

母さんは今まで我武者羅に進んできて、一度壊れかけて。けれど、

なんとかここまで歩いてこれた。そんな母さんに、私はまた心配をかけている。ううん、母さんだけじゃない、この屋敷の皆に、家族の皆に、ティアナ。

きつと友達皆も心配してるんだろうな。……ティードさんも、向こうで心配してるのかな。

「……母さん。私、歩いてみる。ちょっとずつしか歩けないけど、歩いてみる。それでいいんだよね」

「うん、そうよ。それでいいの。少しずつ、痛みに、負けないように、一歩、一歩、進んでいけば、いいの」

私を抱いて、母さんが泣いて、それに感化されるように私の目からも涙が零れた。

泣き終えたら、違う私になるう。

痛くても、辛くても、一歩踏み出せる私になって。

それで、ティアナちゃんとか、いろんな人を守る、大切なものを守り通せる自分になるう。

それを目指せる、自分になるう。

そう思った。

そう、願った。

53話 前を向いて（後書き）

フェイト復活。ただし完全復活ではありません。

さーで、これから原作へは大分駆け足です。種を見せないためにティアナの修行シーンとか全カットの勢いでいくので、ご了承ください。

そして栞が栞様へ。

P.S.

大変、原作さんが息してないの……！

54話 三期開始二年前（前書き）

というわけで、ここからは更に四年ほど時間が進み、三期の2年前のスタートとなります。

色々変化が加えられ影も形も残っていないのは世界、どうぞお楽しみくださいませ。

54話 三期開始二年前

「姉貴、姉貴ってば！」

「んー……、なによお、もうちよつと寝かせて……」

「おい姉貴、今日は会議があるから早く起こせて言ったの姉貴だろ！？ ころ、起きろってのー！」

「……ん、あれ、エリオ？」

「やっと起きたか……。今キャラがティア姉とアル姉と一緒に飯作ってるから、早くこいよ」

「んー、わかったー……」

もぞもぞとベッドから這い出し、寝ぼけ眼を擦りながら大きく欠伸をかます。

随分昔の夢を見ていたような気がしなくてもないけど、まあいいか。

皆さんこんにちはは、フエイト・L・テストロッサです。……あれ、皆さんって誰だろうか。

まあそれはともかく、今日も今日とて仕事三昧。朝は会議、昼からは今扱ってる案件の捜査。苦にはならないけど、有給取ろうかと迷ってしまうときもある。

そんなことを考えながらとりあえずリビングへ行くと、香ばしい卵とベーコンの焼ける匂いが。

「おはよう、皆」

「おはようお姉ちゃん！」

「おはよーフエイト」

「姉さんおはよう。顔洗って髪直してきて。ぼそぼそよ」
「んー」

キャロとアルフ、そしてティアがエプロン姿で朝食を作りながら挨拶してくる。

うーん、最年長者としてはもう少し早起きした方がいいのかな……。でも夜寝るの遅いしなあ。お肌荒れるんだ。

ばしやばしやと顔を冷たい水で洗って、ついでに髪をぬらしてから真っ直ぐに梳かす。あとはドライヤーで乾かせばよし、と。

「姉さん、ご飯できたわよ」

「ん、今行くー」

パンパンと頬を叩いて活を入れる。よし、今日も頑張れ私。

洗面所から出てリビングに戻ると、既に皆食卓についていた。私も席に着くと、全員で両手を合わせ、頂きますをして食事スタート。

「ところで、姉さん」

「んー？」

「服替えたら？」

「別に家族だけなんだし固いこと言いつこなしだよ、ティア」

「はあー……。いつからこんな自堕落な人になってしまったのやら

……」

「時は人を変えるんだよ、ティア」

アルフ、それはつまり私が歳を取ることにズボラになっていっていると言っことかな？

まあそれはともかく、今の私の格好は白いYシャツにパンティのみ。寝巻き姿のままです。

エリオも昔は顔真っ赤にしてたのになあ、もうすっかり慣れちゃって。

「掃除洗濯の度に女物の下着ばっか見てたら感覚も狂うだろうよ。

それより、後一〇分だぞー」

「嘘っ！？ やばっ」

呆れたようにいったエリオの言葉でようやく時間がないことに気づいた。というかあの一〇分ってことは、その時間で会議室まで到達しろと！？

慌てて朝食を胃に流し込むと、部屋で服をすぐさま着替える。このぐらいは朝食前だ。もう朝食食べたけど。

「皆、後お願い！ 行ってきます！」

「撥ねられないでねー！？」

「はい！ 皆も遅刻しないようにっ！」

家から飛び出すと、マンションの一五階から一気に跳び降りる。

飛んでいる訳じゃないから法律には引っかからない。というかこの住人は大体私が焦っているところいうことをする人間だってわかってるから問題なし。

さて、全速力で地上本部へと向かっている間に、私の家族について説明しておこう。

ティア、つまりティアナは私より魔術の才能があつたらしく、数年で修行を終わらせてミッドに戻ってきた。

そのまま試験を受けて陸士部隊に配属されたため、今では立派な陸曹だ。ちなみに私は執務官。これで母さんの無実を晴らすという夢が大分現実味を帯びてきているけど、中々証拠は集まらない。頑張ろう。

エリオとキヤロは私が執務官になってから拾った、というか保護した子達で、エリオはプロジェクトFが何処から伝わったらしくそれによって生み出された子。

今ではモンディアルの名を捨てエリオとして生きているやんちゃ坊主だ。引き取った当時は人間不信だったけど、一対一でぶつかっ

ていったら意外と何とかなった。

といつても私のことを慕ってくれているし、根は素直でいい子。まあ、バカ正直なよりずっとマシかな。

「やば、後五分……！」

全行程の四分の三を走破し、後は見えている地上本部の会議室へ飛び込むだけ。頑張れ私。

そうそう、キャラは少数民族『ル・ルシエ』の出身。なんだけど、いわゆる捨て子だ。しかも力を持ちすぎたせいで、強すぎる力は災厄しか呼ばないと言われて追い出されたらしい。まあ、アホらしい因習という奴だ。

キャラも引き取った当時は自分の意思というものがほとんどなくて、どうすればいいかを私に聞いてきたぐらいだ。

でも、その強すぎる力も精々街一つ吹き飛ばす程度にしかならないと聞いた時に、思わず呆れそうになった。高々街一つで何をそんなに怖がっているのやら。私だってそのぐらいなら出来る。……まあ、周りに「世界？ ああ、ちょっと油断した壊れちゃう割れ物でしょ？」みたいな人たちが一杯いると、感覚っておかしくなるわけ。

ともかく、そういつた経緯でキャラも引き取った。どっちも仕事の途中に首突っ込んだだけだから、後は知らないけどね。

「おはようございます、テストロッサ執務官」

「おはようエリー髪切ったのねまあ挨拶してる時間が惜しいからもう行くわごめんなさいね良い一日を！」

入り口の受付を担当しているエリー二等陸士に駆け抜け様挨拶し、そのまま階段で二六階会議室の扉を引きちぎらんばかりの速度で開けてっ！

「……おはようございます、皆さん？」

「ふむ、今日は遅刻しなかったな。三秒セーフだ」

議長席に座ったレジアス中将がにやりと笑い、そう告げた。

よし、セーフ。ぎりぎりセーフ。

空いていた近くのふっかふかの椅子に腰掛けると、会議室に備え付けられている端末を立ち上げる。

「さて、全員揃ったところで会議を始める。議題は第一級指定搜索ロストロギア『レリック』が、最近このミッドチルダ、特にクラナガンで見つかっていることについてだ」

「そのことについて、この案件を預かる執務官として、私から一つ。現在発見されているレリックは四つ、そのうち三つはいずれも爆破し消滅しています。このことから分かるようにレリックは非常に高純度なエネルギー結晶体であり、またなんらかの方法によって起爆することの出来る爆弾としても使用できるのではないかと考えています」

数年前、密輸されていたらしきレリックが空港内で爆発、炎上し空港が大パニックになったときがあった。あの時はまだ地上の装備も整っておらず、動きも後手後手に回ってしまったものの、首都航空隊の働きもあってなんとか被害は抑えることが出来た。

が、あれがもし街中で爆発していれば、被害はとんでもないことになっただろう。

「現在我々は比較的危険度の低い犯罪組織と交渉を行い、裏のルートからレリックの情報を収集しています。彼らによればレリックは非常に貴重なもので、金銭価値にすれば途方もない額をつける者がいるそうです」

「ほう、それはお手柄だ。つまり、レリックを取引している相手は分かったということかね？」

「いいえ、残念ながらその内容を聞き取る前にその犯罪組織は潰されました。それも、三回もです。今までそう言ったケースは見られませんでした」

「誰かが意図的に情報が漏れるのを防いでいると？」

確かオディアス・グレイス少将だったが、小さく唸る。

本局所属でありながらもその性質は陸に近く、また多くの局員をその任務中に救ってきた人。陸の英雄とも呼ばれていた人だ。

この『対レリック陣営』にはそういう人も含まれている。

「恐らくそうかと。今度はそこを重点的に洗ってみるつもりです」
「なるほど……。ご苦労だった、フェイト・L・テスタロッサ執務官」

「ありがとうございます」

「ではマリエル・アテンザ技術官、報告を」

「はい。まず、先ほどテスタロッサ執務官の報告にもあったように、レリックは高エネルギーを常時発生させている高エネルギー結晶体です。これについては端末に配布した資料をご覧ください」

マリエル・アテンザ技術官もまた本局の人間でありながら地上と関わりが深い。その理由としては『研究好き』が高じてのデバイスメンテの超効率化や改良が度重なるにつれ、デバイスを弄る機会が圧倒的に多い地上本部に度々入り浸るようになったからというのがある。

そのおかげで地上のデバイスの性能水準はぐっと上がったし、殉職者もずっと少なくなった。今では地上の柱の一つだ。

「レリックは大き目のアタッシュケース上の箱に収められており、

この状態ではレリックのエネルギーを感知することは出来ません。このことから、アタックシユケースにはレリックのエネルギーを遮断している何かが用いられていると考えられます。ちなみに、仮称としてこのケースのことを『レリックケース』と呼称しておきます」

「レリックケース自体を探查することは出来ないのか？」

「繊維の材質も不明ですし、むやみやたらに探查すれば洋服が片っ端から引っかかります」

「ふむ……、では仕方ないか。わかった、ご苦労だったアテンザ技術官」

一礼して、マリエルが席へ座る。

ちなみに、この会議に出席しているのは私とマリエル、議長のレジアス中将、グランガイツ三等空佐、スクライア司書長が主な面子。……全員知り合いなのは目を瞑って。

「司書長、何かあるか？」

「いや、特にないね。こつちでもレリックのことは調べているけど、文献が少ない。ただ、なんらかの生命体の強化に使用されていた、という文献を目にしたから、そういう線でも調べてみるといいんじゃないかな」

「こつちでも部隊を動かして搜索させているが、やはりそう見つかるものではないな。警備部隊にも通達を出しておくべきか」

「そうだな。そちらは私がやっておこう。では諸君、今回の会議はこれにて終了、仕事に励んでくれ。以上！」

その言葉に全員礼で応え、次々に会議室から出て行く。

今回は進展があまりなかったせいか会議は十数分程度で終わった簡単なものだったけど、普段は一時間から二時間かけて行っているそのぐらい情報量が多いということだ。

さて、お昼まで少し時間が余ったな。どうしようか……。

「ああ、そうだ。テストロッサ執務官は後で部屋に来てくれ。少し話がある」

「は、はい、わかりました」

む、何かお話だろうか。とりあえず怒られるような事はしていない、と思う。

ともかく、ロビーフロアで端末の情報を整理したあと、レジアス中將の執務室へ向かうことにした。

「失礼します、フエイト・テストロッサ執務官です」

「ああ、入ってくれ」

圧縮空気の抜ける音と共に扉が開き、部屋の中へ足を踏み入れる。中には椅子に腰掛けたレジアス中將と、傍に控えているオーリス三佐がいた。

「それで、お話とは？」

「うむ。ここ最近豆狸が動き回っているようだな。何か知らんか？」
「はやてが？ …… ああ、おそらく新しく立ち上げたいと言っていた部隊のことでしょう。なんでも、例のリック爆破事件で空港がやられたときに地上本部の初動が遅かったとかで、迅速に動ける自分の隊を持ちたいとか」

「それはまた、ふざけた理由だな……。まあいい、下手に動かなければ放置、もしこちらに干渉してくるようなら、執務官にも動いてもらうことになる」

はやて、面倒な人を敵に回していることに気づきなさいね！。

ああ、ちなみに今もはやてやなのはとの交友は続いているし、時々遊びにもいつている。だからまあ、部隊にも誘われたんだけど。そのとき気が向いたらと返答しておいた。

「そう言えば、例のあれ。どうなってます？」

「ああ、アテンザ技術官が嬉々として開発に携わってくれているぞ。完成も近いだろうな」

「そうですね。それはよかった」

あれが実用化されれば、地上の取り締まりも少しは楽になるはずだ。

あれが何かは、完成してからののお楽しみですが。

「それで、他に御用は？」

「いや、特にない。下がってくれて構わんぞ」

「それでは、失礼しました。オーリス三佐も」

「ええ、わざわざお疲れ様。お仕事頑張っつね」

「はい」

二人に礼をしてから部屋を出て、自分の執務室まで向かう。さて、今日もお仕事頑張るか！。

54話 三期開始二年前（後書き）

ということ、フェイトが物凄く明るくなってあります。

この理由もまた後々語られることになりますので、しばしお待ちを。エリオとかキャラとかいろいろ増えましたが、その辺もまた後ほど。これから数話は二年前のストーリーが続きますので、お楽しみください。

55話 赤毛の少年の日常

「つたく、やつと行っただか……」

「キャロ、にんじんも残さないで食べなさい」

「うう、苦手なんだけどなあ……」

そんなんだと大きくなれないわよ、というティア姉の言葉を聞いて、眉を顰めながらも何とかにんじんを口に運んでいくキャロ。

アイツ曰く「あれは赤い悪魔です！ 野菜なんて区分じゃありません！」らしい。意味分からん。

っと、説明が遅れたな。俺はエリオ、姉貴 フェイト姉のことだな に養われてるガキンチョだ。

一応俺も管理局で働く身だし、自分の食い扶持ぐらいいは稼いでる。地域の安全にも一役買ってるしな。

「ご飯食べ終わったらお皿片付けちゃってね。洗っちゃうから」

「はい！」

「ああ、アタシも手伝つよ」

「ありがと、アルフ」

うちのお母さんのポジションにいるのがティア姉。本名はティアナ・ランスター。

俺よりも前に姉貴とアルフ姉と住んでいて、魔術もトップクラスでも純粋な戦闘力で言うとなんぱり姉貴の方が強い。なんというか、貫禄がな。すごいんだよ。

俺？ 俺は下から二番目、一番下がキャロだ。その次がアルフ姉で、他二名はさっき言った通り。

ティア姉は陸曹だから、結構偉い。というか一三歳で陸曹ってどうなんだ……？（一四歳で執務官やっている奴が八年前にいました）

それでアルフ姉はいつもうちで家事やったりのんびりしたり、まあ主婦だな。それで俺らも助かってるから別にいいんだけど。キヤロは俺よりも遅くこの家に入った、ある意味末っ子だ。なんかこの家って言うと、ここが駆け込み寺みたいに聞こえるな、やめとこつ。

「アルフ姉、俺とキヤロは今日遅番だから」

「ん、わかったよ。あんまり遅くなるんじゃないよ？」

「わかってるって。ちゃんとすぐ帰ってくるよ。もういい年なんだしな」

おい、まだ八歳だろツつた奴表でろ。

まあいいや、とりあえずそのことはおいておこつ。

俺とキヤロは同じ隊に所属してて、基本的に書類仕事や街中の巡回なんかが主な任務だ。今日は遅番だから夜に帰りなんだよな。早番だと昼頃には終わるんだがなあ……。

ともかく、俺たちはそんな感じで日々安穩と生きているわけだ。

早く独り立ちしたいってのもあるがな。

「うっし、キヤロ！ 仕事行くぞー！」

「あ、うん！ 今行くー！」

そんなわけで、今日もお仕事頑張るとしますかね。

「全く、どうして休日に限ってこんなことを……」

大きな溜め息と共にフォークを置き、ガラスの外を見る。どうやら、地上部隊と犯罪者の追いかけっこが発端で、そこら中に被害が出ているようだ。しかも、たった今犯罪者の男が小さな子供を人質に取っている。全く、もうちょっとスマートに締められないのか。

「店員さん、これで足りませぬよな？」

「あ、は、はあ……」

「それじゃ、お釣りはいらないので」

「え？ あ、ちよつと!？」

近くにいた店員さんに伝票と代金を手渡すと、そのまま足早にレストランから出る。スパゲッティは美味しかったし、他の料理もなかなかだった。鼻屑にさせてもらおう、休みが取れたら。

それにしても、僕のせつかくの休暇だというのに、目の前でドンパチやられたらそりゃあ腹も立つだろう？

『地上部隊の人だね？　ちよつといいかい？』

『っ!？　だ、誰だっ!？』

『おつと失礼、僕はユーノ・スクライア。無限書庫の司書長だよ。キミ達は、あの犯罪者を捕まえるんだろ？』

僕が名乗ると、目の前とはいえ少し離れたところにいる念話の相手は、表情に出さずに驚くと言う器用な真似をしてくれた。あ、ちなみに念話のチャンネルくらいなら見ただけで分かる。普段は意識的に見ないようになっているけど、こういうときには便利さ。

『君たちの手柄をとるつもりはない。が、昼食の途中でドンパチや

られた上に、あんなものを見せられると食事なんて取っていられなくてね。少し手伝わせてもらおうよ?」

「……あなたの腕は聞いています。しかし、相手は人質を……」

「ああ、問題ない。僕はね、勝負をひっくり返すのが大好きなんだ」

念話でそう伝えながら、僕はテクテクと男へ近づいていく。追っていたのは二、三人だったらしい。まあ、地上は広いから仕方ないか。相手の技量もなかなかようだし。

さて、と。それじゃあ検索を掛けようか。

『検索条件を指定』

『Yes, Boss』

『地上本部搜索対象犯罪者、魔力ランクはBからA相当』

『該当五名』

本体から送られてきた念話は、若い女性のものだ。これはまあ、書庫で働くみんなの癒しだね。彼女はとてもよく気が利く。だがまあ、そんなものか。だがまあ、目の前にいるのだからデータさえあればいい。

『データを送ってくれ』

『了解しました』

途端に目の前に現れる緑色のウィンドウ。緑って、普段本部にいと見ないから、ウィンドウだけでもそうしておこうという僕の配慮でもある。青でもよかったんだけど、青だと本局の廊下とかと被っちゃうから。

「えーっと、ビリー・ハウゼンか。かつこいい名前しちゃって」

「て、てめえ、何もんだっ!? 近づくんじゃねえ、この餓鬼ぶっ

殺すぞ！」

「おつと失礼。やあビリー、今日はいいい天気だね」

「ああっ！？ てめえ舐めてんのか！？」

おや、コミュニケーションの基本は挨拶なんだけどね。罵倒で返されてしまった。まあいいか。

『ユ、ユーノ司書長！？ 一体何を！？』

『まあまあ、ここは僕に任せてよ』

念話でそう返すと、静かに周囲の魔力を視認していく。うん、これだけ濃密なら多少弄っても問題ないな。

人質に取られているのはどうやら女の子のようだったが、泣き出すこともせずじっと耐えていた。いやはや、なかなか剛毅なお嬢さんだ。

なら、それ相応の働きをして見せないかね。

「アンファンゲ
始動」

直後、僕の言葉に応じて男の周囲の魔力が歪む。補助型魔術はよ他の系統の魔術の補助に使われるけれど、僕はそれを更に突き詰めることにした。僕は、補助型だけにしか適性が無かったからね。

補助とは、他を補い助けること。ならば補助を補助する魔術ならばどうか。他の魔術を補うのではなく、補うということ自体を攻撃に転用できないか。そうして考えを突き詰めて出来上がったのが

「ブラスチック
爆ぜる」

キンツ、と甲高い音が鳴り響いた直後、男の後頭部付近で爆発が

起きる。これは、魔力自体へ僕自身の魔力を補ってやることで大気ごと膨張させ、結果として空間が暴発するというものだ。ま、普段は効率悪いし威力低いしで使わないんだけど。高々ニンゲン一人を鎮圧する程度なら何の問題も無い。障壁があっても空間ごと捻じ切れる。

もちろん、今回はあの少女にそんなスプラッタな光景を見せるわけに行かないから、気絶する程度まで魔力は抑え、ご丁寧に僕が障壁まで張ってあつただけだね？

「さて、と。これでいいかな。大丈夫だったかい？」

「う、うん……」

「よしよし、よく泣かずに我慢したね。ほら、飴ちゃんでもいるかい？」

「い、いいの……？」

「もちろん。それじゃ、あのおじさんの言うことを良く聞いて、お母さんのところに帰るんだよ？」

「うん！　ありがとうお姉ちゃん！」

「……うん、それじゃあね」

昏倒した男を尻目に、とことこと駆けて行く少女。ほんとにいい子だ。ああいう子が部内に一人でもいると、部の空気は格段によくなるんだ。

……あと、僕は男なんだけどね。これでも鍛えてるんだけど。

「ユーノ司書長、今のは一体……？」

「ん、ああ隊長さんか。なに、ちよつとした手品さ。さ、とつとと捕らえちゃってくれないかな」

「は、はっ！　おい、立てっ！」

ぐいつと男を引っ立てて、手に手錠を掛ける隊長。この手錠は、

最近地上で導入されたAn^{アンチ}ti・Mag^{マジック}illink・Si^{システム}stem
が搭載された高級品じゃないか。実用化テストが始まっていたのか。
情報を更新しておかないと。

しかし、フェイトも頑張ってるんだね。まさかこんなものまで飛び出してくるなんて。

でもまあ確かに、フラグで見る限り地上の魔法犯罪者の質はだんだん上がってきている。にも関わらず、地上には長年決め手となる力が無かった。地上本部でSSランクなんて、一人だっていたら過労死しているだろう。本局の武装隊長クラスは最低でもA以上だが、地上ではBより少し上くらいの人があるのが一般的だ。それほど格差は酷い。

とはいっても、地上本部にだって強い者はいる。今の風潮のせいで生かせていないだけだ。

閑話休題。

このAMS搭載手錠、発案はフェイトだ。リンカー・エネルギーの吸収を阻害するように調整された電磁波を放出する特殊なものだが、最初に発案されたものでは性能が高い代わりとして開発費用も馬鹿にならないものだった。それを、質を下げることで解決したのか。

本来ならそれはあまりいい方法とは言えないけれど、今のうちに早急に必要な場合ではこれがあって正解だろう。本局は『魔導師にとって危険なものだ』として製造を反対、圧力も掛けているらしいけど、最近の地上本部は自重しない。しては仲間が死ぬからね。

「さて、と。僕もちょっと顔を出してこようかな」

歩くのもいいけど、休日の間はことさら速く流れる。そういうことでちよつと現在位置と転移先の座標を入れ替えて簡易転移。これだとせいぜい半径一〇キロまでしか移動できないんだよね。連続使用も出来ないから、ちよつと出かけるかって言うときぐらいにし

が使わない。

「やあ、エリーさん」

「司書長！ エリオ君がお待ちですよ！」

「仕事中なんだから、階級で呼んだらどうだい？」

「あ、そうでした！ んんっ、ユーノ特別一等陸尉、エリオ・モンディアル二等陸士が二階の訓練室にてお待ちです！」

「ああ、ご苦労様。お仕事頑張つて、エリー二等陸士
「はいっ！」

受付嬢をしている快活な女性、エリー二等陸士が僕にそうハキハキと返事を返してくる。

え、僕の階級に聞き覚えが無い？ ああ、まあ仕方ないね。僕が司書長をやっている無限書庫は、知つてのとおり本局にある。そして、本局と地上では折り合いが悪い。要するに、地上では知り得ないことを本局は悠々と調べられるわけだ。結果として、内容不明のロストログアの情報も、地上では分からなくても本局では分かる。そんな状況になつてしまい、末端ではイザコザがより増えてしまつた。

そりゃあ地上の人たちも面白くないだろう。自分達が命がけで回収したものを、自分達の方が情報があるからと言つて持つていかれるんだから。

その状況はいかんともしがたいということ、僕の方から地上の事実上のトップへ掛け合いに行つたというわけだ。今ではいい飲み仲間だけだね。

ま、今はそのことは置いておこう。今はエリオのことだ。

エリオは、違法研究所を検挙したときにフェイトが身元を引き受けた子だ。やさぐれてはいるものの、心根は素直で優しい。しかも、フェイトに救われた恩を返すために、ぶん殴られるのを覚悟でフェイトに頭を下げて局員になつたらしいというのだから驚きだ。もち

るん、ぶん殴られることはぶん殴られたらしいけどね？

「やあ、エリオ。元気そうだね？」

「師匠、何だよこいつら？俺より年上の癖に喧嘩一つまともで
きねえのか？」

二階の訓練室に入って目に飛び込んできたのは、片眉を吊り上げて嘆息している赤毛の少年と、その周囲に倒れている三、四人の少年達。大体一二歳位だろうか。対して赤毛の少年、エリオ・モンディアルは六歳だ。

「また喧嘩かい？」

「ちげーよ、こいつらが撃つて来たんだ。一発だけなら誤射かもしれないってのは有名だが、残念ながら五、六発降ってきたんで殲滅した」

「うん、上出来だ。が、どうして無力化してないんだい？」

「うっ……」

襲われて逆に殲滅したなら、止めを刺すか拘束、またはそれに順ずる行動で無力化するのが当たり前だ。

どうせ喧嘩だからと怠ったんだろうけど。まあ、今はいいか。少なくとも今のエリオの格闘技能は最低Aランク。だがタフネスと
いうわけではないから、紙一重で避けて一撃を極める、もしくはヒットアンドアウェイ戦法になるだろう。

だが、今エリオに教えているのは護身術。そして、どんな魔導師だって努力すれば使えるようになる、デバイスなしでの結界や障壁魔法。この二つだ。

戦闘技術やなんや最低水準を満たすまでフェイトに叩き込まれている上に、世の中の理不尽さや汚さをしっかり知っている。その上さらにこれから幾らでも伸びしろがあるって言うんだから面白く

ないわけがない。

フェイト自身も、彼が逝ってからは随分と伸びたけどね。まあ、一年であそこまで傷にカサブタを作ったのは流石だと言わざるを得ない。伊達に栞と共にいた訳じゃないか。

「まあ、今日のところは見逃すよ。さあ、始めるとしようか」

「こいつらはどうすんだよ？」

そう言っつて、ちょんちょんと倒れている少年をつま先でつつくエリオ。

全く、面倒だ……。

「転移」

一言呟くと、少年達は一瞬で姿を消す。今頃医務室のカレン女医が「全く、また司書長ね……？」とかばやいてる頃だろう。いつも申し訳ない。

「ヒュー、いつ見てもすげーな。フェイト姉さんよりはおせえけど」

「彼女はスピード、僕はガードだ。転移魔術は僕の本業じゃないんだよ」

「まあ、そのうちそれも覚えてやるさ。必須技能なんだろ？」

「そうだね。魔術師を目指すなら、この程度覚えてもらわなきゃ困る。僕にだって片手間で出来ることなんだから」

言葉の通り、エリオはフェイトや僕が魔術師であることを知っている。もっと言うなら、彼も魔術師を目指している。そのための魔術の基礎もしっかりと勉強中だ。そのうち学校に放り込まれると思っただけだね。

「さて、それじゃあ仕切り直していいこうか。何処からでもかかって来い」

「んじゃまー……、最初っから全速力だぜ　　ッ！」

歯を剥き出しに獰猛な笑みを浮かべた直後、エリオの姿が消える。もちろん、それは僕にはしっかりと見えている。今のはただ、第三者視点的な描写を試みただけだ。

僕の真後ろに回り込んだエリオは、音も立てずに体重を乗せた右ストレートを繰り出してくる。が、それはあっさりと僕の障壁によって阻まれた。抑えた銅鑼を打ち鳴らしたような、轟音が鳴り響く。

「ちいつ、あいつかわらず師匠の障壁は異常だなっ！」

「それが僕の本業だからね。それと、喧嘩殺法を使うなど言ってるだろうがッ！」

「んぎゃっ!？」

真後ろで僅かな硬直から抜け出そうとした直後、僕の右ストレートがエリオに向かって打ち下ろされる。もちろん、全力ではないけど、それでも今のエリオでは反応できない速度で。

案の定、奇妙な声と共に地面にめり込んだエリオだったが、それでもなんとか飛び跳ねて起きる。一応僕の手加減した一発に耐えるくらいのスタミナはあるようだけど、まあそれが限度か。

「いってー……!　　ったく、手加減しろよな！」

「してるよ。少なくとも、してなければここは吹き飛ぶんだけどね」
「……はあ。どうしてこう、魔術師ってのは滅茶苦茶なんだ？」

「この程度で滅茶苦茶と言っていたら、地球に行っただときには度肝を抜くだろうね」

「抜かれたくねーよっ!」

ぎゅっと床を靴底で掴んだ刹那、さらにこちらへと仕掛けてくる。
さて、では稽古の時間だ。

ところでエリオ、君は夕方から巡回だったはずだが……、持つの
かな？

55話 赤毛の少年の日常（後書き）

エリオ君魔改造タイム、はっじまるよー。

キャラも地味に強化されますのでお楽しみに。ちなみにフリードは家で留守番です。

後二年でどこまで行くのやら……。ちなみにキャラも「二等陸士」です。原作より出世。

56話 悪夢(前書き)

この話は若干えっちかったりぐるかったりするのですが、その辺過敏な人は避けてください。

56話 悪夢

「すずかー、この間の課題やったー？」

「うん。っていうかあれ提出明日じゃなかった？」

「見せて」

「……少しは勉強に励もうと言う気は」

「もう覚えてることを何でももう一回学ばないといけないのでしょうか！」

「まあ、そうなんだけどね？」

もはや自分の家といってもいい月村家の屋敷の自室で、すずかとそんな会話をしてみる。

こんにちは、アリサ・バニングスよ。今は高校二年生、私立聖祥大付属高校に通ってるわ。

魔術師としてはそれなりに板についてきているんだけど……、まあまだまだひよっこね。普通の魔術師は最低一〇年は研鑽を積んで初めて一人前って認められるそうだし。私はまだ八年ちよつとだもの。

ちなみに、今日はお休み。課題を片付けようかと手をつけたはいものの、全部終わってしまっている範囲なので面倒だ。

やろうとすればすぐ終わるけど、やる気がおきない。そんな感じ。

「はあー……、でもやらないと怒られるのよね……」

「内申響くし、やっておいた方がいいよ」

「はいはい、わかったわ」

「それにしても、気づけば高二か……。なんだか早いね」

「いやー、まさかこういう人生になるとは思っても見なかったわ。

たった八年の間に一回精神崩壊して四回位臨死体験したもんねえ」

「……アリサちゃん、その一回のことは、お姉ちゃんの前では言わ

ないでね。表には出してないけど、すつごく後悔してるから」

まあ、それは知ってるわよ。弟子だし。

あの事件は今でも忘れない。あの犯人、やっぱりまだ見つからないらしい。もし見つけたらズタボロにしてやる。

それはともかく、今日はお師匠様はお出かけた。しかも七姉妹同伴で。家の中が恐ろしく寂しくなっている。

「休み明けに帰ってくるって言ってたから、夜中前じゃないかな。帰ってくるの」

「はあー……、というか私たちに依頼入ってこないわよね、最近。なんで？」

「それだけ世界が安定してきてるってことですよ。ぼやかないぼやかない」

うー、やっぱり暇よ。課題は面倒だけどやるうとすればすぐに片付く。だから後回し。

さてと。じゃあいじくるか。すずかを。

「へん、散々お師匠様とヤッてるくせに」

「アリサもおんなじでしょ？ 最近じゃサタンにまで手を出したとか出さないとか？」

「……どうして私たちは高二でこんなすれた話題を肴にウオツカ飲んでるのかしらね、昼間っから」

「そろそろ経験してもいい年頃だと思うけど、私達中学の時にもうお姉ちゃんとヤッたしね」

「必要事項だったしね」

知ってる？ 魔術ってエロいのよ。

あ、いやそういう意味でなくて。魔術の中に性に関するものが多

分に含まれていたりして、性交渉によって魔力を受け渡したりパスを作ったりするものもあって、そういう意味でエロいってことよ。

だからまあ、私もお師匠様とヤツたし。変な意味じゃないわよ、そういう意味合いでだから。

……その、まあ、すっごい気持ちよくて、なんかいじめられるのもいいかなあ、なんて思っちゃったけど。お師匠様の「ピー」になりますから、もっとして！ とか言っちゃった記憶があるけど。月村家、防音性能高くて助かったわ。

けど、あれよね。天蓋付きベッドで押し倒されて、されるがままにされるって、なんかある意味憧れよね。王子様願望的な。……まあ、男とはヤツたことないけど。

「……あー、考えてたらムラムラしてきた」

「変態さんだねー」

「あははー、素直に傷つくのでやめてくださーい」

「でも事実でしょ、変態」

「……あの、すずかさん？」

「ねえねえアリサ、私もちよっと、シたくなってきた」

あ、やばい。すずかが私のこと呼び捨てにするときは、大体やる気のとこだ。現に何度か食われた。

というかね、ぶっっちゃけてしまうと私たちはそう言った行為に忌避感もなければ自重もしない。だって、それが必要なときに使えないんじゃない意味ないもの。だから別に、嫌ではない。嫌ではないけども、これはまずい。

いや、本当にこの状態のすずかは自重しないの。私がどんなに「苦しい、やめて、助けて、許して」って言っても、それが「嫌よ嫌よも好きのうち」であると看破されるから。ついでに、すずかはドSだ。

お師匠様は、まあ普通にS。苦しんでいるのを見てにやけながら

更に重圧掛けるとか普通にしてくるし、死ぬ一歩手前とか成仏一歩手前の修行は当たり前レベル。まあ、本当に危ないときは助けてくれるけど。

ただ、すずかは別の意味でSなわけで。「ねえ、痛い？ 痛いよね、じゃあこれ舐めて」とか言いながら足差し出してくる子よ？ 普段はおしとやかでお嬢様の中のお嬢様のようにゆったりとしているのに、なんでことに及ぶときはああなのかしら。

「アリサ、こっち向いて？」

はい、現実逃避終わり。まずいわ。

お師匠様は今いないし、誰が止められる？

「す、すずか？」

「ん、なあに？」

「あの、ちよつと、痛っ！？」

「ふふっ、可愛いよアリサ……。ねえ、もっと声を聞かせて？ 気持ちいいでしょ、痛くされるの」

「すずか、やめ、ほんとにやめてよっ！」

まずいますまずい。すずかスイッチ入ってる。

こつなると止めるのは至難の業だ。というかすずか、いきなり前髪引つ張ってそれは、私じゃなければ危ない人よ？ なんてこと言ってる場合じゃ。

「す、すずっ、んんっ！？」

「んふ、んうあ、ふ、んむっ」

ちよ、フレンチキス！？ あ、どうしょ、目潤んできた、涙が…

…。

「ぷふあ……。キスされただけでもうのぼせちゃったの？ 可愛い……」

「あ、やあつ、すずか、やめっ」

「髪引つ張られて無理やり唇奪われて興奮しちゃったんだよね。わかるよ、アリサのことなんでも知ってるから」

「あつ……」

「可愛いアリサ、可愛いかわいいアリサ……。ねえ、もっと見させて？ 邪魔な布剥いであげるから、もっと私に可愛いアリサの綺麗な体、見せて？」

だめだ、もうだめ。

こんな風に扱われると、どうしても抵抗できない。すずかに、勝てない。勝てるわけないじゃない。

だって、すずかはお師匠様とそっくりで、こうしているとお師匠様にいじめられてるみたいで。

でもお師匠様みたいに丁寧じゃなくて、乱暴に扱ってくれて、それが気持ちよくて、どうしようもなく、おかしくておかしくておかしくて、あ、ダメ、これ以上。

「ねえ、舐めて」

「あう……。え……。？」

「私の指。美味しいよ。甘くて甘くて、私しか見れなくしてくれる魔法のお菓子。きつと美味しい。ね？ 食べよ、お口あーんして、食べさせてあげる」

「ああ……。あー……」

「いい子いい子。アリサ、小さい子だもんね。美味しいよね。ほら、パクってしてごらん。甘くて、お口の中幸せだね。変態の癖に」

おかしくなる。止まらない。

甘い、口の中に入れられたすずかの指が、どうしようもなく甘く、私を縛る。体はもうすずかの言いなり、私の意思はそこにはない。意思、なんてあるんだらうか。

私はすずかのお人形になってしまふ。喋れない、動けない。

あれ、そこにいるのはだれ？ 指を食べさせてくれているのは、優しい人？

「ふふつ、可愛い子。少し弄ればすぐにおかしくなっちゃうね」

「えあ……」

「美味しいね、美味しいおいしい。ぴちゃぴちゃ音立てて舐めてみる？ きつと美味しい、ううん、今よりずっと美味しい。幸せになる」

この人が言うなら、そうなんじゃないかな。

むらさきのかみの人が、やわらかな笑みを浮かべてゆびをぬきさしする。舌がこすられて、体がはねる。びくん、びくんって。あたまがぼんやりする。

「可愛いアリサ、可愛いアリサ。アリサ、アリサはアリサ？ 本当にそうかな？」

アリサ？ だれ、だっけ。

わたし、だれ？ おもいだせない、おねえさん、しってる？

「知ってるよ」

おしえて、わたしはだれなのかな。

こわいよ。おなまえ、つけて。わたしに、おなまえ。つけて。

「貴女は私の」

姿が遠のく。

やだ、いかないで。一人はやだ。くらいの、怖いよ。

たすけて、たすけて。おねがい、なんでもするから。いつときく、わがままいわないから。いい子にする、嘘つかない、おねがい、やだ、いかないで。

一人にしないで。

助けて。

いやだよ。

「ッハ……！？ つはあ、はあ……」

飛び起きて、辺りを見渡す。そこは見慣れた私の部屋で、さすがはいない。机の上にはやり終えた課題が残されていて、確かに昨日の晩、そこですずかと下らない話で盛り上がりながら課題を終わらせたことを示している。

だが、ちがう。すずかは確かに少し暴走することもあるけど、私を怖がらせるようなことはしない。あの子は優しいから。

「夢……、か……」

荒い息を整えながら、ふと自分の服装を見る。

パジャマではあるが酷く汗ばんでいて、べたべたと肌に引っ付いてうっとおしい。

全身が風邪を引いたようにガタガタと震えていて、抑えようとしても逆に震えは強くなるばかり。

ここ最近、度々こういうことがある。

酷く淫猥な夢を見たと思ったら、異常なまでの孤独感と不安感、そして絶望感に苛まれ飛び起きることが。

夢の中に出てくる人はいつも違っていた。この前はサタン、その前はプレシア、もっと前は、お師匠様。皆が同じように私のことを弄び、私はだんだんとその人に依存するようになり、そして最後には幼児退行じみた現象と共に夢を追い出される。最悪の気分だった。

「私、泣いてたの……？」

枕元が酷く濡れていた。それに、目元が潤み今にも泣き出しそうになっている。

夢の中の彼女達は、とても精巧に出来ていた。ことに及んでいるとき、私は親しい人から責められるとどうしても感じてしまう。それならばそれでいいかもしれないけれど、夢の中の彼女達はそこだけを重点的に責めてくる。

言葉で責め立て、私から主導権を奪う。いつの間にか体が動かなくなり、やがてだんだんと彼女達に身を委ね、そして名前すら手放してしまう。恐ろしい夢だった。

まだ夜中の三時過ぎだが、眠る気にはとてもなれなかった。どうしても体の震えが止まらず、怖気すら走る。

なぜあんな夢を見てしまうのか、全く分からない。けれど、一つだけわかるのは、これからもあの夢は私を苛み、そして徐々に蝕ん

でいくだろうということだけだ。

あの夢は、最初はとても短かった。名を忘れることもなければ体が動かなくなることもなかったのに、最近はどうとう新しく名をつけてくれとせがむようになった。私はそんなこと望んでいないのに、恐ろしい。あの夢の中で新しく名づけられてしまったら、私はもう前の私に戻れないんじゃないかとすら考えてしまう。

「……お風呂、行く」

こんな汗ばんだ服を着ていたら風邪を引いてしまう。あるいはもう引いているのかも知れないが、とにかく暖かいものに身を浸したかった。そうでなければ、またあの狂った夢が襲ってくるのではないか。そう思っ

て馬鹿げた考えだと一蹴したい。けれど、私にはなぜかそれが出来そうにもなかった。

両腕で自分の体を抱くようにしっかりと掴むと、荒く息を吐き出しながら部屋を出る。廊下は薄暗く、気がなかった。

足が竦む。光がない。膝が震え、歩くことは愚か立っているだけで精一杯だった。

「あ、やあ……！ いやあ……！」

半ば悲鳴を漏らすようにしながら、私はその場へたり込んでしまう。目の前の闇が恐ろしい。

そんな、おかしい。私は闇を恐れない。魔術師である私はそのよくなものよりももっと恐ろしいものをたくさん目にしてきた。なのに、なぜ。

ダメだった。必死に足に言い聞かせても、私の命令を聞こうともしない。

いや、あるいは命令を出しているつもりだけど、本当は出してい

ないのかも知れない。私の体は、私のものじゃないのかも知れない。

「や、ち、違う……っ！」

否定の言葉は酷く弱弱しかったが、言葉を発することで体の自由は何とか戻った。ただ、力が入らない。立ち上がることすら出来ない。

目の前の闇は静かにそこにある。少し這って動けば、近くにはお師匠様の部屋があるはずだった。

けれど、這っていくことすら今の私には難しい。

ふと、恐ろしい考えが頭をよぎった。

動けなければ、私は朝までずっとここにいなければならないのではないか？

今度こそ、正気を失いそうになった。

だめだ、そんなこと考えられない。目の前の闇はゆっくりと近づいてくる。

そこに、何かがいる。まだこちらには気づいていないが、声を聞かせば気づかれる。それほど近くににいるのに、何故私は気づかなかつた？

声を出さなければ。助けを呼ばなければならぬ。けれど、そうすれば闇の中の何かは一直線に私の喉笛に暗い付き、潤沢な赤い命の結晶を残らず啜りとるだろう。

明確な死のイメージが、ゆっくりと形を作っていく。

息がさらに荒くなる。酸素が足りない。頭が回らなくなってくる。その音を、聞かれた。

「ひっ……っ……！」

名状し難い咆哮が私を襲つ。身が竦み動けない。瞬く間に何かは私に近づいて来た。

「や、やだ、助けて！ お師匠様！ すずか！ 誰か！ 誰でもいいから、助けて！ 誰か、誰か！」

助けて、助けて、助けて。

叫ぶ間に、何かはその鋭利な刃物のような牙で持つて右肩から先を食い千切った。

「ひぐつ、ああああああああつ！ ああああああ！ いたい、いたいよおつ！ やだ、食べないで！ やだあつ！ 許して！ お願ひします、なんでもします！ 許して、お願ひい！」

普段の私からすれば考えられないほどの悲鳴を上げ、何とか許しを得ようとする。

逃げられない。この闇に潜む何者かの許しを得なければ、私は生きられないのだ。だから、許されなければならない。

けれど、ダメだった。

満足げに私の右肩全てを食らった何かは、更に両足を巨大な両手で引きちぎる。万力よりも強い力で持つて圧迫された私は一瞬の痛みを感じ、その後その痛みが消えた。そして、音と色もなくなった。

「助けて……、お願ひします、助けてください……、食べるのはいや……。いやなの、助けて……」

ゴトツと無造作に投げ捨てられた私は胴体と顔、そして左肩から先しかなくなつた体で天井を見つめ、虚ろな瞳でそう呟く。

聞き届けられずとも、許しを請うことだけが今私のできることをした。

何かは私の両足を喰らい尽くすと、更に私の左肩を丸ごと喰らう。もう、助けてもらうことなど、考えていなかった。

「へ、えへへ、ひふへはは、いひははふふひひはへへ……」

笑う。

せめて少しでも、その何かが楽しめるように。慈悲を恵んでいた
だけのように。

少しでも自分を矮小なものだと貶めて、救いを求めるように。
救い。喰らって、いただけるように。

左肩を丸呑みしたその方は、その巨大な両手で私を包み込んでく
ださった。そしてゆっくりとその大きな口の中へと押し込み、咀嚼
していく。

バリバリ、ぐちゃぐちゃ。音が鳴る。

美味しいですか。よかった、私。

えへへ、へは、ひ。

ぶつん。

「……きて、起きて！ 起きなさいアリサ！」

「あ、あ……？」

「しっかりなさい、無事ね？ 私がわかる？」

「おししよう、さま」

「そう、貴女の師匠よ。これは何本？」

目の前の人、指を突き出す。ちよき、の、形。

「に、ほん」

「よし。アリサ、自分が今どうなっているか分かる？」

「えう……、あ……？」

「……アリサ、こつちを見て。私の目を見て。そう、いい子ね。私は誰？」

むらさきの人、こつちをみている。

誰、えっと、おししょうさま。おししょうさまって、だれ？

あは、へへ。

「おしよ、さま」

「そうね、そう。いいわ、覚えてるわね？」

「おぼえ、て？」

「ゆっくり思い出して。今から順番に昔に戻って。ゆっくりよ、ゆ
っくり……」

ふらふらと、頭が回される。早くない、ゆったりとした速度で。

ゆらゆら、ゆらゆら。

あ、あの方がみてる。えへえ、美味しい、ですよ。私。

「おいしい、おいしい」

「アリサ、何が美味しいの？」

「わた、し」

「貴女は食べ物じゃない。貴女は人間よ」

「にんげん、たべない？」

「そう、人間は食べ物じゃない。貴女は人間、食べ物じゃないわ」

おかしいよ、あの方はたべてるよ。

「あの方って誰？」

「えあ、う？」

「ゆっくり思い出して、焦らないで」

また回される。くるくる、ゆらゆら。

「あの方、わたし、たべてくれるの」

「あの方なんていない。ここには貴女と私しかいないわ。わかる？」

「いない？」

「そう、いない。私と、貴女。この二人だけ。それ以外、ここにいない」

いないんだ。食べてくれないの？

おいしいよ、わたし。

ぐちゃぐちゃ、ぼりぼり、ばきばき、ぐちゅぐちゅ。いっぱいおとして、たのしいよ。

「もっと戻って、ゆっくり。戻りましょう」

「あう……」

もどつて、戻って？

いたい、いたいいたい、痛い。

いたい痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！

やだ、助けて、痛い、ごめんなさい、助けて、ゆるして、ゆるして、許して許して許して！

「が、あああああああ！ あ、ぎひっ、がはあっ、い、たい、痛い！」

「アリサ、落ち着きなさい！ 痛くない、痛くないわ！ 誰も触れてない、貴女はここにいて、誰も痛くしてない！」

「痛いよ、助けてえ！ おししようさま、たすけて、たべないで！ ごめんなさい、やだ、やだあ！」

「大丈夫だから！ 痛くない、私はここにいてるわ！ アリサ！」
「たず、げで……え……、やだ、よお……。食べないで、足、持つて行かないで……」

「誰も持つていけない、誰も貴女を食べたりしない。大丈夫、大丈夫よ」

痛いのが、ゆっくり薄れる。

代わりに、体が暖かい。ぼかぼかして、いい気持ち。

お師匠様、抱きしめてくれてる。あつたかいな。

「大丈夫、さあ戻りましょう。悪夢はおしまい、幸せな夢を見ましよう」

ゆらゆら、ゆらゆら。

お師匠様の手で、私が揺れる。揺れて、揺れて、元の場所に戻っていく。

「痛いのは終わり、あの方なんていない。貴女は人間、食べ物じゃない」

「いたいの、おわり？ ほんと？」

「ほんとよ。だからお休みなさい、今度は楽しい夢を見て、次に日が上がるまでゆっくりと……」

元の場所に戻ったら、私はベッドの中。

暖かい布団と、お師匠様の暖かい手が、私を守ってくれて。
怖いのが、終わったよ。

「…………お休みなさい、アリサ」

安らかな寝息を立てて眠った彼女を見て、なんとなかったと一息つく。

私が叩き起こされたのは、アリサの悲鳴を聞きつけたからだ。部屋で研究資料の整理をしていると、突然獣のような悲鳴が聞こえたため、慌ててアリサの部屋に飛び込んで、そして驚いた。

アリサの体が独りでにベッドの上で跳ね踊り、絶叫していたのだから。

とにかくアリサに必死に呼びかけていると、今度は糸が切れたように大人しくなったが、目は開いたままで何も写さない虚ろな色をしていて、口は半開き、端からは涎が垂れていた。しかも、顔は更に鼻水と涙でぐしゃぐしゃになっていた。

何とか彼女の精神は元に戻せたが、この悪夢の原因はいかんともし難い代物だ。

ルルイエ。つまりクトウルフの夢が世界中に飛び散り、無差別に人間の精神を襲っている。誰かがルルイエを引き上げようとしているのかもしれない。

まさかアリサがここまでダメージを受けるとは思っていなかったけど…………。

「……どちらにしても、辛かったわね」

魔術師といえど神クラスの精神攻撃を受けてこれで済んだのは幸이었다。そうでなければ精神は壊れていた。文字通り、再起不能に陥っていただろう。

本当に、よく頑張った。

とすれば今度は、私の仕事か。

またもや、面倒なことが起きていそうな気がしてならない夜だった。

56話 悪夢（後書き）

書いてるときは壊れたシーンが一番楽しかった。
こつこつ壊れたの書くの好きなんだな、私は。外道め。

57話 非常事態といつもの日常

「……な、なんですって？」

『あー、まあ信じられんのは分かる。というか俺も信じたくねえ、が。事実だ』

通信回線の向こうで、道楽の顔が苦笑交じりに歪む。

正直、今の話は信じがたい、というか信じられないというか、むしろ信じたくないレベルだ。

しかしまあ、こうして真夜中に秘匿通信が入ったということは、事実なんだろう。

「ルルイエが消失、ねえ……」

『今俺の弟子にも調べさせてるが、影も形もなくなってる。こりゃあ、誰かが大陸ごとどっか別の世界に飛ばしたって考えてもよさそうだぜ』

「犯人の目星はついてるの？ つーかついてるわよね？」

あの狂気の水中都市を丸々持ち出すなんて、【魔女】認定される者でも一人じゃ無理よ。精神攻撃が激しすぎて魔術はろくに使えないわ、魔術抵抗がやたらと高いから普通の転移魔術じゃあまず自分を転移させることすら出来ないわ。一回ブルーベルとユニゾンしてもぐったことがあるけど、一歩間違えたら死んでいたわ。我ながらよく生きて戻ったと言わざるを得ない。

ともかく。そんな滅茶苦茶なものを別の世界に飛ばすなんて無茶もいいところだ。

それほどの手合いなら間違はなく名の知れた魔術師のはず。引つかからない方がおかしいのだけど。

『それがな、さっぱりだ。尻尾もつかめねえ』

「……きな臭いわね。本当に何にも手がかりなし？」

『ああ、なーんもねえ。それどころか、最初は無くなってること自体気づかなかつたぐらいだからな』

これは、なんとも。面倒な事態になった。

数日前のアリサの悪夢はおそらくそれが原因か。強制的に引き上げたせいでクトウルフの夢が漏れたんだろう。

「なにか手がかりが入ったら教えて頂戴。先日、うちの弟子が被害に遭ってるのよ」

『夢か？』

「そう。だからよろしくね」

『了解。ああ、そうだ。お前の交友関係でクトウルフがどこにいるのか調べられないか？』

「次に会えるのは二〇年後よ」

『あー、そう。なら仕方ない』

こつちだつて星の位置がきちんと揃わなければそつ言った連中とは会えないのだ。無理を言うなど。

ともかく、これから忙しくなりそうだ。

「」「」「かんぱーい！」「」「」

ここはミッドのとある居酒屋。

そこで、私達は久しぶりに打ち上げを行っていた。

「いやー、さすがフェイトね！ あの手錠、かなりいい成果をあげてるみたいよ」

「そんなことないよ。使うのは現場の人間だし、そっちの腕がいいんだ」

「姉さんは相変わらずねー」

「だからそんなことないって」

メンバーはオーリス三佐に私ことフェイト、そしてティア。

ティアにはちよつと早いかもしれないけど、皆でビールとつまみで打ち上げ中だ。

というのも、つい先日大きな違法取引の現場を抑え、麻薬密売を行っていた次元犯罪組織を摘発することに成功したのだ。

もう少し小規模にやっているならまあ目を瞑ったかもしれないけど、あれはただ場を乱すだけで利益だけしか頭のない愚か者の集団だったから潰すことになっていた。

こつちだつて見境なく潰してるわけじゃなくて、ある程度小さな犯罪を抑制できるような、統率され規律のある組織とは取引を行うことで犯罪を止め、小さな犯罪を行わせない抑止力として動いてもらっている。取引って大事。

「それにしても、こんな店よく知ってたね？」

「昔同僚とよく来たのよ。さあ、ティアちゃんもガンガン飲んで」

「はいはい、妹に飲酒を勧めないでね。ティア、別の飲みたかったら頼んでいいからね」

「飲み慣れてるから、別にいいわよ。でもウイスキーとかウォッカの方がよかつたかも」

ビール飲み慣れてる一三歳か……、私もそのぐらいには飲んでたか。ワインだったけど。

「そう言えば姉さん、今噂になってるのがあるんだけど」「噂?」

「そ。何でも、本局のエースが部隊作るって躍起になって、しかも部隊員に地上の連中を使うらしいわよ」「ああ、なのは達か」

私は結構街中を駆け回っているからあんまり話は聞かないけど、やっぱり本気で作る気なんだ。

「いい迷惑よね、こっちは本局の遊び相手になってる余裕はないっていうのに。ただでさえ人員が少ない中で命令系統をどうすればいいか、物資は足りてるか、毎日うんうん唸ってるのにさ」

「現実を知らないんだ、なのは達は。仕方ないよ」

「ほんと、貴女が味方でよかったわ。あなたの回りの部隊、より一層士気も上がってるし、モラルも向上してるって評判よ」

「姉さん、地球の軍隊の訓練受けてたから、そのせいじゃない?」

あー、まあ規律と上司の命令は絶対遵守って叩き込まれたしなあ……。そのあと魔術師の修行もしたから柔軟性増してる? とりあえず規律には厳しくなってるかな。

「ところで、ドゥーエはこなかったの?」

「誘ったんだけど、仕事残ってるからってこなかったわ。あの子も仕事熱心だから」

「大変なのね、上も色々」

「そ、大変なのよ。あ、店員さん、砂肝と皮追加で」

「私生追加、ジヨツキで！」

通りがかった店員さんにそれぞれ追加オーダーを入れてから、ジヨツキに入っていた残りのビールを一気に呷る。

あー、そう言えばお酒飲んだの久しぶりかもしれない。最近お仕事ばっかりだったし。

「ところで、二人とも。一つお願いがあるのだけど」

「なに、オーリス？ もったいぶって」

「さつき話が出た、部隊の話。もし結成ってことになったら、中から調査してくれないかしら」

「私と、姉さんで？」

「そう。何か黒いのを見つければよし、見つけれなくても、出切るだけ地上と連携が可能な状態に持ってきてほしいの。じゃないと、こっちの領分で好き勝手やられても困るわ」

なるほど、まあ確かにそのとおりか。

「……私はいいよ。オーリスにはいつも助けられてるもの」

「姉さんがいいなら、私もいいわ」

「ありがと、二人とも。私もできる限り支援するわ」

お仕事だしね、治安維持も。

さて、飲もう。打ち上げだし。

注文した砂肝と皮、ジヨツキがついたところで食事再開。おかずと明日の朝ごはん用に、ちょっと多めにお持ち帰りさせてもらおうと。

「姉さん、ほら着いたわよ」

「ふえ、あー、おめんね、ひあー」

「べろんべろんで舌回ってないじゃない……。オーリス三佐も飲ませすぎよ、全くもう……」

「あはは、らいらいようらいりよう、酔ってないはらー」

「はいはい、酔ってる人は皆そうなのよー。エリオ、キャロ、アルフ！ ただいまー！」

なんとか姉さんを家に上げて、とりあえず一息つく。

「こんにちは、ティアナよ。打ち上げはいいけど、三佐の勢いに飲まれてフェイト姉さんが飲みすぎちゃって……」。

「とりあえず肩貸しながら家まで辿り着いたと言っわけ。こんなにお酒に弱かったかな、姉さん。」

「おかえり、ティア姉。って、姉貴どうしたんだ？」

「酔っ払ってるのよ。今日はこのまま寝かせちゃうから。ご飯まだでしょ、焼き鳥買ってきたわ」

「おー、そりゃいい。今飯の支度するから、寝かせるついでにアルフ姉呼んで来てくれ。今キャロと風呂入ってる」

「りょーかい」

「あー、たらいまえりおー」

「はいはい、おかえり姉貴。うわ、酒くっせ……」

「はっはっは、私はそれを耐えてきたのよ。いや、私も多少なりとも酒臭いけど。」

というか、うちって皆未成年よね。見た目姉さんとアルフが大人だけ。

まあ、別に不自由なことはないんだけど。

「ほら姉さん、こっちよ」

「はい……」

「ちょ、姉さん！？ やっ、胸揉まないでっ、ちょ！？」

「わー、ふわふわぶっ！？」

「……姉さん、悪ふざけしてると本気で殴るわよ」

「殴ってから言うのは、反則だと思いまふ……」

まったく、姉さんったら……。

……でも、珍しいな。姉さんがこんな悪ふざけするなんて。いや、胸揉むのはセクハラだし許さないけど。

とりあえず姉さんを担ぎ直して、姉さんの部屋まで連れて行くことにした。

なんだか、姉さんが泣きそうな顔をしていたから。あれは多分、痛いからじゃない。

「はい、姉さん。着いたわよ」

「んー……」

「ほら上着脱いで、ちゃんと布団掛けて」

「んー……、ティアあ？」

「……なあに、姉さん」

「ティアはあ、今、楽しい？」

普段とは違う、甘えるような声。

布団の中に引き込もつと、ぐいぐいと手を引っ張ってくる。けれど、その力は普段の何倍も弱かった。

「……楽しいよ、姉さん」

「そっかぁ……、楽しんで、くれてるんだねえー……」

ぐすつ、ぐすつ。姉さんが泣いていた。

鼻をすすって、流れる涙を止めようとせず、私の手を撫でていた。

「ねえ、ティアぁ……、私、立派にお姉ちゃんやれてるかなあ？」

「……大丈夫。姉さんは、きちんとわたしたちの姉さんよ」

「そっかぁ……」

姉さんの手が震える。

普段は頼りになる、綺麗な姉さん。ただ今は、ちよっぴりセンチメンタルになっているらしい。

私は姉さんの傍に寄り添うようにベッドに腰掛け、両手で姉さんの手を握り込んだ。

「私ねえ、ティードさんに、約束したんだぁ……。お墓の前で、立派にお姉ちゃんとして、ティアナちゃんの面倒を見ます」って……。分かった、見守ってるよって、言ってくれた気がしたんだぁ……」

「……そう」

「こうして一緒にいるとねえ、夢みたいに感じるんだよぉ……？」

「こんなに幸せな毎日が、続いてていいのかなあってえ」

「……」

酔っ払いによくいる、間延びした声で、姉さんはそんなことを語りだした。

「みーんな、夢なんじゃないかって、怖くなるんだぁ……。目が覚

めたら、ティードさんが死んじゃったあの日から進んでなくて、ずっとお前はここにいるんだって、誰かに言われる気がするんだよね……」

「……姉さんは、ここにいます。私もここにいます。アルフもエリオもキヤロも、皆一緒だから。大丈夫だよ、姉さん」

「えへへえ……、ティアは優しいねえ……」

涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔をくしゃっと歪め、姉さんが笑う。

その顔はどうしても泣いているようにしか見えなくて、だから私は、無理やりにも笑うことにした。

「……姉さん、変な顔」

「あー、ひどいよお、せつかくまじめにしてるのに……」

「変な心配してないで、早く寝なさい。明日も早いんですよ」

「……んー」

そういうと、姉さんはぐすぐす言いながら布団を被る。その様子を見届けて、私が部屋を出ようとすると、そこに声を掛けられた。

「ねえ、ティアあ？」

「なに？ 姉さん」

「……おやすみなさい」

「……うん、お休みなさい」

後ろで猫のように笑ったような気配がして、苦笑した。

……お休み、お姉ちゃん。

57話 非常事態といつもの日常（後書き）

さて、この辺りで必要な伏線は張り終えたかな。次回からはお待ちかね、第三期へと突入します。ただし、まともな展開にはならないかも……？

58話 機動六課、開幕（前書き）

昨日投稿予定だったのに、書いていた内容が雷で消滅……！

結論、保存はこまめにね！

あとオリキャラでまーす。注意。

追伸：まさかのタイトル誤字。ご指摘ありがとうございます、修正しました。

58話 機動六課、開幕

おっす、エリオだ。

いきなり何かって言うとな、まあ簡潔に言おう。

海の新規部隊に徴兵された。正確には、徴兵されかけたところを姉貴の伝で地上から配属って形にして守ってもらったって所だけど、ついでに任務も貰ってるしな、きちんとこなさねーと。

この新規部隊、姉貴の古い知り合いが作ったらしい。姉貴は「夢ばかり見ているつまらない部隊」って言ってたな。まあ、あの姉貴だし手は抜かないだろうけど。

「しっかし、陸と戦争でもする気か？ 陸のど真ん中に隊舎立てるって、喧嘩売ってるようなもんだろ」

「海の間人は陸を軽んじることが多いから。どれだけ公平な人でも、長くいれば思考に染まっちゃうんだよ」

「お、キャロ。便所はいいのか？」

「少しは女性に対して気遣おうね、エリオ」

「なら俺の前素っ裸で歩くなっつ」

「え、別に家族だしいいでしょ？」

いつのまにか俺の横に来ていたピンク髪の少女、家族でもあるキャロが言う。

いや、だってお前、もう女の全裸体程度で興奮するほど純情じゃねーぞ、俺は。原因は家族だが。

「よかねーよ。まあ、今はそれはおいといて、だ。確か迎えが来るとかつつたけどよ、なんてつたっけか？」

「シグナム二等空尉だよ。もうそろそろ来るはずだけど」

「む、お前達が今日着任の新人か？ シグナム二等空尉だ。そちら

は、エリオ・モンディアル二等陸士、キャロ・ル・ルシエ二等陸士だな」

「ハッ、出迎えありがとうございます、シグナム二等空尉！」

「ああ。とにかく移動するぞ。車に乗ってくれ」

「了解」

敬語はきつちりと。いや、俺も習ったわけじゃねーけど、相手を不快にさせなけりやそれでいい。ただし、はじめはきつちりと。あくまでここは軍だからな。

で、大した会話もなくシグナム二等空尉と共に隊舎へ到着。……

おい、絶対うちのところより綺麗だろ。新築とかふざけんな、予算回せ。

「着いたぞ。一〇時から課長の挨拶がある、それまでは待機。いいな」

「了解」

軽い敬礼と共にどこかへ消えていくシグナム二等空尉を見送ると、近くの椅子へ腰掛ける。

しっかし内装も随分と綺麗だな……。新品の綺麗さって奴だな。

「少しくらいこっちに予算回せてんだよ。こんなんに使わないで」「まあまあ、だんだん予算も増えてきてるって言ってたし、気長にガンバろ」

いや、まあそうなんだけどよ……。

ちなみに、姉貴が部隊長、ティア姉は特別指導教官として配属されてる。地上からの一押しもあって、理由としては『最も軍事的行動、規律に厳しく、新人達の風紀の乱れを正してくれるだろう』とか。ちなみにこれ、レジアス中將の意見な。

いやあ、一回会って話したんだが、ありゃ娘バカのおっさんだな。結構怖いイメージあったんだが……。

「こんにちは。えっと、部隊の人かしら」

「ん？ あ、ああ。エリオ・モンディアル二等陸士です。家名はいらるので、エリオと」

「同じく、キャロ・ル・ルシエ二等陸士です。キャロと呼んでください。そちらは？」

「あ、ごめんなさい。私はシャミル・アンダーソン一等陸士よ。シヤミルと呼んでちょうだい」

「私はスバル・ナカジマ一等陸士、よろしくね！」

突然声を掛けられ、何事かと振り向けば同僚だった。

シヤミルと名乗った方の女は、大体ティア姉と同じ年ぐらいで、真っ赤な髪を長く伸ばしてるのが特徴だな。

で、スバルってのは、ああ。ナカジマ三等陸佐の娘さんか。あの人もあ世話になったな。

「そっちはスターズ隊の？」

「ええ、スターズ03よ。こっちがスターズ04。バカだけど戦闘に関しては親父さんに叩き込まれてるそうだから、そこは心配要らないわ」

「へえ、あの親父さんにか。そりゃ楽しみだ。俺はライトニング03、キャロが04だ。俺としちゃ、縮めてライトの方がいいんだがな。コードネーム長くしてどうすんだ」

「ふふ、そりゃそうね。実用的ならそれでいい、分かってるじゃない」

「ほほー、こいつはまた、面白そうな奴が降って湧いたもんだな。」

「まあこいつも色々背負ってそうだが……、他人の事情に首は突っ

込まない。野次馬じゃあるめえし。人にはそれぞれ、事情があるさ。しかしいやに平均年齢が低いな。部隊員はこれで全部、バックヤードと部隊長、副部隊長を残すだけって、ちっとまずいんじゃないの？

幾ら迅速に動くための機動部隊つつつても、人数は必要だろ。

「つと、今更だが任務中以外はこういう感じで喋っから。よろしくな」

「ええ、こちらこそ」

「アホな兄ですが、よろしくお願いします」

「兄妹さん？」

「ああ。義理のだけどな」

「へえー。大事にしてやんなさいよ」

わあってるよ、んなことあ。

さて、それじゃあ頑張るとしますかね。

「よう、久しぶりだなティアナ」

「久しぶり、ヴァイス」

「いやー、ほんとに久しぶりだな。最近は仕事が忙しかったからなあ……」

「なら、久しぶりにゆっくり出来そうじゃない。操縦ミスらないでよっ」

久しぶりに会った友人がヘリパイロットだった。

こんにちは、ティアナよ。今日からは特別指導教官として機動六課の面々をしごくことになるわね。

一応再来年辺りには執務官試験も受けようかと思ってるし、経験積むには丁度いいか。監視にも、ね。

「んなへマすつかよ。それより驚いたぜ、お前が教官だって？」

「高町一等空尉の補佐だけどね。あの人、市街戦の心得はあるの？」

「さあ？ 俺の聞いた限りじゃ、殲滅戦やなんかのでかい戦闘ばかり駆り出されてるって話だぜ？ まあ、Sオーバーの魔導師を一々の連中が陸に回すかつつたら、あれだしな」

陸には、Sオーバーの魔導師が少ない。それは誰しもが知っていることだ。

海が『未開の未管理世界の発見と早急な管理による安全』をうたい文句にして、次々に使える人間を奪っていくからだ。そんなことをしているくせにいつも人も人が足りないかと喚きたてる。それなら世界の管理なんてやめればいいのに。どうせいずれこの体制は崩壊するのだ。私達が手を下さずとも、ゆがみは時によって大きくなる。

ともかく、そういうことでSオーバーの魔導師は大体色々な世界を飛び回っている。勤務環境はおそらく圧倒的に陸のがました。海と違って明確な力関係がなく、階級によって上下関係がはっきりしている。ただし、きちんと貢献できる、そういう頭の回ったり意志の強かったりするものは自ずと好まれる。まあ、姑息な手段を使おうとした奴もいないわけじゃなかったけど。

私は、陸の方が好きだ。さっぱりとして人付き合いも淡泊じゃない。俗に言う下町の良さと言うやつだ。

そんな彼女が陸の戦闘を行えるのか……、そういう点の検査やフ

オローのために私が回された。

まあ、何事もなく終わってくれるといいんだけど……、最近きな臭いのよね。色々。

「銃は、まだ……？」

「……ああ。手が震えちまってな」

「そう……。まあ、気長にやんなさいな。人生長いし、何とかなるわよ」

「ははっ、俺より年下だろうがてめえは。まあ、そうだな、そんなもんだよな」

通路でそんなことを話しながら、当面の仕事場になるであろうオフィスへ向かう。

そう言えば、プレシアさんからの荷物が届いてるって言ってたっけ。まったく、過保護なんだから……。

「っと、私はちょっと新人いびつて来るわ。それじゃね」

「あいよ。あんま虐めてやんなよ？」

「わかってるわよ」

ヴァイスと別れ、廊下を進んでいく。

ちなみにヴァイスとは陸曹に上がってからは友人、そして兄を通じた古い知り合いでもある。

昔は兄の部下だったらしいけど、とある事件がきっかけで武装隊を辞め、もう一つの夢だったヘリパイロットに転向したらしい。……まあ、事情は人それぞれあるからね。

オフィスでは、それぞれの机で早速仕事用にアレンジを加え始めている部隊員たちの姿があった。

さて、前世のちびっ子達は……、っと。いたいた。

「エリオ、キャロ、わざわざお疲れ様。そしてスバル、シャミル。久しぶりね」

「おっす、ティア姉」

「まあ、お仕事だから」

「お、おお、おはようございます、教官！」

「おはようございます、ランスター教官」

スバルとシャミルは、私が一時期訓練を担当した子達。と言って
も、同世代なただけ。

まあ結構しごいたし、スバルは私に苦手意識があるみたいね。

シャミルの方は、まあ普通かな。でも、シャミルの執念は未恐ろしいものがある。昔の私や姉さんを髣髴とさせるような何かが。

「ライトニングの二人はいいとして、スバル、シャミル！」

「はいいつ!？」

「は、はい！」

「陸戦Bランク突破、おめでとう。よくやったわね」

「……お叱りの言葉では、なく？」

「スバル？ 私のことなんだと思ってる？」

「も、申し訳ありません教官！」

顔を髪と同じような色にして頭を下げるスバル。まあでも、いろいろきついことも言ったし仕方ないか。

「ありがとうございます、教官」

「ただし、これから慢心なく精進なさい。もし少しでも驕るようなら、しばき倒す。分かっているな？」

「はい。感謝します、教官」

「ちなみに奢る方はいつでも歓迎中だから」

「……はあ」

シャルルはやや真面目さんだけど、その分きちんと作戦を理解し、更に応用まで利かせられる。参謀としては言うことなし。

まあ、彼女の方も私がフレンドリーに接しているところが珍しいようだけど。私だって、仕事じゃなければこんなものよ。

「それじゃあ、もうじき式が始まるでしょうから、全員準備。遅れるなよ」

「「「「はい！」「」「」」

うむ、いい敬礼ね。

式の前に知り合いに顔を見せておこうと思い、後輩のいるデバイスルームへと足を運んだ私は、機材に埋もれて幸せそうに作業をしている眼鏡っ子を発見した。

「シャリオ一等陸士、お久しぶりー。楽しそうだね」

「フェ、フェイト執務官！ お久しぶりです！ その節ではお世話になりました！」

「そう言えば、AMSってうちにも導入されるの？」

「それが、上のほうが大層渋ったみたいで……。入る予定、ないそうです」

「そっか。じゃあ執務官権限で譲渡しとくね。最近の市街戦はあれ

ないときついよ」

椅子に座り直してそうばやいてみる。

A M S、アンチマギリンクシステム。私の考案した、対魔導師用システム武装だ。

それ専用のデバイスや弾丸、他の精密機械なんかに組み込んで起動してやると、魔力の結合を阻害する電磁波を放出して片っ端から魔法を解除していく代物。もっぱら、地上部隊が飛んでいる犯人相手にそれを組み込んだ弾丸を撃ち込んで落とす、っていうのが定番の使われ方になってきている。

弾丸自体が頑丈に出来ている上に人体へダメージを与えることなく、頑丈さゆえに内部のシステムは破壊されない。よって使い回しも可能な便利な道具。人体に埋め込んでしまえば、強化魔法ですら解除できてしまう。

どうやら本局の上層部はそれがわかっていないらしい。最近ではこれに対抗するために魔力ランクの高い用心棒を雇ってる奴も出てきているのに。

魔力の結合解除速度を上回る速度で魔力を結合させられれば問題ないわけだから、声が掛かるのも当然かもしれないね。

「本当ですかっ!？ まさか、『黄金の女神』お手製のA M Sがお目にかかれるなんて……! 私、もう死んでもいいかも……!」

「こらこら。それになに、そのこっぱずかしい名前?」

「あれ、知らないんですか? 第四陸士訓練校の六年前の卒業生の中でも、一際有名な名前ですよ?」

「それ、私?」

「……ほんとに知らないんですね。『緑紅の双騎士』ツエルナ・トイグとエレイルカ・マドラックのタッグは?」

あの二人、やっぱりコンビ組んでたんだ。最近連絡とってなかつ

たなあ……。

そっか、もう数年したら一〇年、同窓会とかやるのかな。

「二人とも凄いあだ名だね……」

「あだ名、と言うより称号ですね。なんでも、この二人が入った任務は必ず成功、死傷者ゼロだそうですね？」

「おお、それは凄い。あの二人も頑張ってるんだ。あと、その恥ずかしい名前で私を呼ぶのはやめてね？」

「えー、カッコいいじゃないですか？」

「ほんとおねがい」

まさか魔導師の世界でそんな中二病染みた名前聞くとは思わなかった……。

地球だと普通なのに、何でだろうか。

「と、とにかく！ AMSはなんとかこっちで入れるから、シャリオはデバイスメンテお願いね。構築は私がやるから」

と言っても、構築するのはサブデバイスなだけだ。

あ、サブデバイスって言うのは、所謂スピア。カッターの替え刃みたいに、あってよかったと思えるようなもの。

武装は軽く、そして多く。選択肢は出来るだけ多いほうがいいからね。

さて、どんなものを作るっか。

58話 機動六課、開幕（後書き）

さて、登場したシャミルとは何者なのか。

まあそれもおいおい明かしますので、お楽しみに。

え、はやてやなのははどうしたって？ ぶっちやけにがt

59話 訓練（前書き）

訓練と言っても最初の方だけです。

59話 訓練

機動六課始動初日、ティアナはいち早く訓練場で部隊員四名の訓練に入っていた。

「いいか新人共！ 貴様らの役目はロストロギアをいち早く回収し、市民をその脅威から遠ざけることだ！」

「『サー！ イエツサー！』」

「まずはロストロギア搜索時に、このミッドチルダで遭遇することになるであろう『ガジェット』の対策から始める。奴らは単体でAMFを発生させ、数が多ければ多いほどその効果は強力になる。と言つても、貴様らは既に現場で幾度か遭遇しているだろう。奴らは一般人には決して手を出さないが、偶然ロストロギアの起動を誘発することがあるため、見つけたら即排除しろ」

そこまでで一度言葉を切ると、外でプログラムを担当するシャリオへとメッセージを送る。

その直後、四人の目の前には四体のガジェットが姿を現していた。この訓練場は高町なのは一等空尉が完全監修した陸戦空間シミュレータであり、しかも質量がある。攻撃されればもちろん痛みも感じ、ダメージも生じる。よくよく本局の資産力が滲み出ている部分だった。

問題は陸戦をろくにこなしたことのないのはが監修したこれが使い物になるかどうかだが……、さすがに訓練初日からまともに訓練が行えないと言う最悪の状況はなかったらしい。

「機動は不規則だが、相手は常に浮力を発生させている。その上相手からの攻撃には過敏であるため、攻撃を命中させるのも新人では難しいだろう、が。貴様らは新人とはいえ一度や二度は死線を潜っ

たはずだ、この程度一蹴して見せる」

「『『『サー！ イエツサー！』』』」

「では、訓練を始める！ 対象はガジェット四機、まずは同じ分隊での連携を確かめ、二体ずつ破壊せよ！ 周辺への被害は最小に抑え、迅速にこなせ！ 訓練開始！」

四人はその言葉を聞くが早いか、お互いに距離をとって眼前のガジェットへと標的を定める。

「まずはこつちからやらせてもらおうわ。スバル、先回りしてこつちに追い込みなさい！」

「りょーかい！」

その場でナカジマ家固有の魔法、ウイングロードを発動すると上空を一気に飛び越えて逃げ出したガジェットの前へと降り立つ。

進路を塞がれたガジェットはそのまま進路を反転し後退、シャミルへと向かっていく。

前方のその動きを見たシャミルは、薄く笑みを浮かべるとデバイスを引き抜く。それは黒と白の質量兵器たる拳銃を模した銃型デバイスだった。

手元を見ずにそのままカートリッジをロード。数発の弾丸をそのデバイスへと送り込む。

「シャミル！」

「この程度、一瞬でケリをつける！」

ガチツ、とシャミルが双銃の引き金を引いた直後、その銃口から圧縮された魔力弾が射出、猛然とガジェットに向けて突き進んでいく。そのまま直撃するかと思われたが、寸でのところでガジェットのAMFが干渉を強めたのか、魔力弾が掻き消される。

本来ならばこれはあくまでシミュレータ、AMFは使用できないのだが、それを再現するために各員のデバイスにはあらかじめ各々の了承を得てそれをシミュレータ内でのみ再現するプログラムが組み込まれていた。

もちろん、シャミルとてそんなことは知っている。魔力弾が消されただけでは、その攻撃は止まらない。

魔力弾が消失した刹那、ガジェットは黒煙をあげたかと思いきや二機同時に爆発した。

「弾丸サイズの杭での攻撃か……。えげつねえ」

「あら、見えたの？」

「あのくらいなら余裕だ。見つからねえようにしろよ」

隣で様子を見ていたエリオが、呆れ気味にそう声を上げた。

シャミルが撃ち出したのはただの魔力弾ではなく、それをブーストに使用した小型の杭。もちろん普通に考えれば質量兵器としてアウトだが、現在進行形でガジェットの脅威に晒されている陸の現状を鑑みれば、おのずと許可は出た。むしろこれの許可を申し出たときには「質量兵器、復活しないかな」などと上司がばやいたほどなのだから。

ともあれ、そういう面倒な武器を使うと知ったエリオへ向け、シャミルは意味有りげに頬を吊り上げ笑みを送った。

「さ、次はそちらの番よ？」

「へーへー。準備はいいな、キャラ」

「一〇秒いららないよね？」

「つたりまえだ」

無邪気に微笑むキャラを尻目に、エリオは静かに槍を脇に、突撃の構えを取る。

「起きて、アルカディア。ブーストアンドエンチャント、マツハ」
「Good morning my master. Boost
Up Acceleration & amp; Enchant
Field Invade」

キャロの指示で手袋に装着されていた待機状態のデバイスが魔法を発動させる。

その間、エリオは身じろぎ一つせず、眼前を自由気ままに動き回るガジェットへと槍の穂先で狙いを合わせていた。

「Boost completion. Get set ready?」

「ゴウツ！」

姿が掻き消え、エリオが一瞬で道の末端まで辿り着くと同時、道中に存在した二体のガジェットは一瞬で粉々に破壊された。爆破する間もなく一瞬で。

エリオは道の向こう側からまたキャロたちの方へ一瞬で戻ってくると、溜め息をついて首を鳴らした。

「うっし、掃除終了。詠唱含めて六秒ってトコか」

「速いじゃない、さすがね」

「伊達にこの歳で仕事入ってねえよ。教官、対象の破壊、完了しましたー！」

「ご苦労。やはりこの程度では温いようだな」

そういつと、ティアナはにやりと頬を吊り上げた。

「次は一〇倍、四名全員が連携すれば大した数ではないはずだ。始

めっ!」

ブオン、という音と共に大量のガジェットが出現する。
四人の訓練は、まだまだ始まったばかりだった。

「やってるみたいだね、皆」

「ティアナも張り切っていましたし、相当しごかれていることですよ」

「なら、尚更早く仕上げてください」

「はい」

デバイスルームの中で、私は機械類に埋もれながら久しぶりにデバイス作りに精を出していた。

といっても、全員分ではない。エリオとキャラはまだしも、スバルとシャミルの分は書類で確認したスキルに合わせた補助用のプログラムを組むぐらいしか出来ていないのだし。

今も模擬戦の様子をモニターしているけど、一応の戦闘スタイルすら中々掴めない。どうやら、予想以上に彼女達の戦闘スキルが高いようだ。まあ、ティアが担当したわけだし、あんまり戦闘スキルが低くても困る。

「エリオは視覚強化用、キャラは支援、コアエネルギー変換用、と。後の二人は戻ってきてから要望を聞かないといけないか」

このまま作っても私の独りよがりな代物になってしまつから。でもこのままいくと、スバルは格闘戦に関連したものになりそうだし、シャミルはカートリッジ、少なくとも銃関連にはなりそうだとすると、まずはこっちのプログラムから書き出した方がいいかな。

ああ、ちなみに今日の分の書類はすでに片付けた。のだけど、新人四名はなのはの話だと大分訓練漬けにされるらしい。書類書く時間はあるんだろうか。

まずそうなら私から言つて時間を考えてもらつ必要も有りそうかな。

しかし、なのはも随分と、その、脳筋な気がする。頭使つて事件解くつてことをしてきたのかな？ ……してない、だろうなあ。

そう言えば、最近ユーノとも会ってないな。後で顔を出しに行こう。

さて、それでは始めますか……。

「ドクター、まだ起きていらしたのですか？」

「やあウーノ。いやいや、中々面白い現象が山盛りだね。寝るには惜しい」

「そんな子供のようなことを言つて……。いつぞや倒れたときのトーレの慌てぶりを見たでしょうに」

一人の男が、まるで本当の子供のような笑みを浮かべてディスプレイに文字を打ち込んでいるのを見て、ウーノと呼ばれた女性は思わず溜め息を吐いた。

ターゲットネットクのセーターと黒のミニスカートに白衣を纏った女性性は、額に手をやりながらかぶりを振る。

「それに、例の計画もあります。あまり無理なされると、また倒れますよ」

「はっはっは、安心したまえ。今はちゃんと携帯食料と栄養ドリンクを取っている」

「大丈夫ではありません。とにかく、ちゃんと寝てください。いいですね」

「わかったわかった」

絶対分かってない、とウーノは若干頬を膨らませるも、仕方なしとまたもや溜め息を吐いてから部屋から出ることにした。

と、しばらく歩いたところで突然通信が入る。それは、普段からメールのやり取りをしている相手からだった。

From: persia@mail.com

To: 元気?

本文:

覚えてるかしら、一〇年ほど前に貴方に探してもらった、次元間移動に関する論文。

研究成果がやっと出せそうよ。ありがとう。

P.S.

今度会えたら一緒に食事でもしましょう。一〇年越しのオフ会、

どうかしら。

端末に映し出されていたのは、長年メールのやり取りをしてきた、見知らぬ友人。

度々子育ての相談なども受けたが、作ってきたキャラクターではさすがに詳しいところまではアドバイスすることも出来ずに、役に立ったかはわからない。

そもそも、彼女との出会いは一〇年前。私用と任務を兼ねて地球まで行っていた時にたまたま、ネットワークの裏世界とでも言うべきところのことだった。

ある論文を探していた彼女と意気投合したウーノは、その情報処理能力を駆使して様々な論文を探し当てては彼女に送っていた。そしてその関係は、ウーノが元の世界に戻ってからもずっと続いていたのである。

「オフ会、ね……。こっちから招待しましょうか」

たまには気を抜いてもいいだろう、とウーノは彼女らしからぬ思考を見つけ苦笑する。自分は存外気疲れしていたのかもしれない。

From: dummy | neet@mail.com

To: ok!

本文:

ok ok、それじゃあどこで待ち合わせする？

個人的には次の日曜がいいなー、なんて思ったり？

素早く内容を入力すると、送信ボタンを押す。

さて、いつ返信がくるかと思いきや、それは存外に速くやってき

た。

From: persia@mail.com

To: ありがとう

本文:

じゃあ、東京の八千公前でどうかしら。

一度行ってみたかったのよね。あ、時間は一二時丁度でどう？

「八千公前って、待ち合わせに便利だって言うあそこね。ふふ、ぴたりじゃない」

あとで予定を空けておこうと脳内のカレンダーに印をつけると、ウーノは了承の返答をメールで送る。

すると、あちらからも了解の意を示すメールが返ってきたのを見て、ウーノは小さく笑みを漏らす。

「……これって、向こうからするとデートだったりするのかしら」

だとすれば、ちょっと驚かしてやるのも面白そうだ。

そんなことを考えつつ、私は向こうの時間での次の日曜日に思いを馳せることにした。

59話 訓練（後書き）

ということで、訓練の様子はとにかくガジェットへの対策。もちろんそれ以外もやっています。

前回も言いましたが、原作を身ながらの進行なので更新は今まで以上に遅れます。ご了承くださいませ。

60話 シュートイベーション

「はい、せいれーっ！」

高町隊長の声が響き、私達は横一列に並ぶ。こんにちは、シャミルよ。

今日の訓練は高町隊長の担当だったが、普段の訓練とは違いやたらと四人の連携を推してきた。

確かに連携は必要だろうが、部隊わけがある以上常に一緒と言うわけにはいかない。それに、あの人の戦闘方法は市街地ではあまり役には立たないだろうと言うのが私たち三人の見解だ。残る一人であるスバルは、一応高町隊長を信じてはいるらしい。

それでも、頭を使って行動しようとしている辺り、このバカも出会った頃とは変わってきていることを実感させられる。……こんなことを思っているが私はまだ一五だ、ランスター教官と同一年だぞ。うん。

「じゃあ、本日の早朝訓練、ラスト一本。皆、まだ頑張れる？」

「……………はい！……………」

そこはもう少し威厳を持たないものなのか、高町隊長。

ちなみにこのシーン、ランスター教官に置き換えるのであれば「よし、これで早朝訓練の締めとする。全員這いずってでもついて来い！」とまあ、細部は違うがこのような感じである。

もっとも、あの厳しさが良かったのか、陸の治安は安定している。上の命令には絶対服従というのは原則だが、向こうも自分達のことを考えてくれていると言うのがきちんと伝わるようになってきているからだ。

「じゃあ、シュートイベーションやるよ。レイジングハート」
「All right. Axel Shooter」

高町隊長のインテリジェントデバイスが応答し、無数の魔力弾を精製する。

「私の攻撃を五分間、被弾無しで回避しきるか、私にクリーンヒットを入れればクリア。誰か一人でも被弾したら、最初からやり直しだよ。頑張っていこう！」

「……はい！」「」「」

とは言ったものの、これはなんとも……。

あの魔力弾の数は洒落にならないし、息切れしていないとは言えどやはり疲労は蓄積する。ここは一撃を決めるしかないか。

「この状態で五分間あの弾丸の雨を捌くのは面倒。一撃入れて終わらせる。異論は？」

「なし！」

「右に同じです」

「ああ」

各々が臨戦態勢を取り、いつでも開始できるように足に力を込める。

さて、と。念話に切り替えて奇襲で行きますか。

『エリオ、作戦の要はあなたよ。最速で決めて』

『了解だ。どういつプランでいく？』

『私とスバルで隙をこじ開けるから、それまでにキャロはエリオにありったけ支援を掛けて』

『了解です』

『スバルは私と隊長の気を惹くわよ』
『オツケー!』

プランは立った。後は動くだけだ。

「準備はオツケーだね。それじゃ……、レディー、ゴー!」

高町隊長の声と共に魔力弾が一斉に降り注ぐ。

私とスバルは前方に、キャロとエリオは後方に回避すると、私はスバルの肩に乗ってウィングロードを滑走する。

「スバル、隠密で行きなさい。いいわね」
「了解」

スバルは何かと攻撃の時に雄叫びを上げる癖があるため、それを抑えるときにはこうして指示を出す。

向こうもそれは分かっているから、そう聞いた時には一層真面目な顔つきになる。いつもそうしてくれていれば、私も疲れずに済むんだけどね。

ちなみに、その癖はランスター教官から散々直せと罵倒されたものでもある。直らなかつたけど。

さて、私に特別な技能は無い。けどね、あそこで磨いた射撃の腕は、この程度じゃあ鈍らない……!

「ふっ……!」

引き金を数度引き、追ってきていた弾丸を撃ち落とす。魔力弾だったから、普通に魔力だけの弾丸を打ち出した。ここで杭を使うのは回収が面倒だ。

スバルの右肩を叩き、右へ曲がれと知らせる。

ウィングロードは右へと曲がり、その上を私たちが走っていく。

「あなたはここで高町隊長にスパイダーウェブを仕掛けて。私がフオーするわ」

「エリオたちは？」

「向こうの判断で突っ込む。こっちで指示を出したら、気づかれるかもしれないし」

「オツケー、行ってくる！」

ウィングロードが高町隊長に向けて直進し、寸前で直上へと進路が切り替わる。

壁のようになったそれが目隠しとなって、走ってくるスバルを隠している。

ギリギリまで無音に近い音量で近づいたスバルは、一気に加速すると同時にウィングロードを消し、加速したままの勢いで空へと飛び出した。

「ふんっ！」

「おっと」

しかし、それは防がれる。けど、あらかじめその下にも張り巡らされたウィングロードに着地し、ビルの谷間へと姿を消す。

市街地戦でスバルのウィングロードは無類の強さを発揮する。遮蔽物、進路、あらゆる方法で活用できるそれは、その有用性の割りに消費魔力が格段に少ないため、スバルが最も多用する魔法でもある。

そして、そのウィングロードによって編み出された市街地専用戦闘技法、スパイダーウェブ。

クモの巣のように上下左右にとウィングロードを仕掛け、その中心に相手の魔導師を閉じ込める。あとは辺りのビルや地上から魔導

師めがけ魔法を叩きつけながら、スバルが縦横無尽に相手を殴り飛ばす戦法。

さて、海のエースの実力、試させて貰おうかしら。

靴同士を二度叩き付け合うと、靴底から出てくるローラー。このスパイダーウェブのためだけに実費で作ったローラーシューズだ。

私の役目は遊撃、留まっついてはいいなのだから。

大きく息を吸い込むと、ウィングロードに足を掛けると共に叫ぶ。

「ランページッ！」

直後、スバルの速度が数倍に跳ね上がる。クモの巣は簡単に獲物を逃さない。

その速度に乗るようにして私もローラーを始動させ、同等の速度で駆け回りながら魔力弾をそこかしこから打ち込んでゆく。

スピードに慣れてしまえば、照準は立っているときと同じように行える。後は弾丸を打ち出し、隙をこじ開けるだけでいい。

そして、その弾丸の隙間を埋めるようにして、加速したスバルが拳を叩きつけてくる。バリアと拳がぶつかる衝撃がこちらにまで響き渡り、皮膚をびりびりと痺れさせる。

やがて徐々に高町隊長がこちらの動きに慣れ始め、反撃を始めてきた頃。

その一閃が高町隊長を貫いた。

「スピーアアングリフ、決まったな」

「スバル、ストップ。高町隊長、大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ。出来ればもう少し部隊間で連携が出来ると良かったけど、とりあえず合格だね。ほら、バリアジャケットにも攻撃が通ってる」

そう言って、空中で停止した高町隊長が見せたのは、自身の白いバリアジャケットの胸元にすすがついているところ。さすが固定砲台、頑丈さだけは一級品って訳か。

ともかく、これで訓練は終わりだ。

「エリオ、お疲れ」

「そっちこそな。お疲れさん。キャロ、戻ってこいよ」

「はいはい。お疲れ様でした、シャミルさん、スバルさん」

「呼び捨てでいいわよ」

口々に互いを称え合う。訓練後のお約束のようなもので、どうせ教官から駄目だしされるのだから仲間内では褒め合いましょう、といったところだ。

まあ、この教官が人を叱れるのかすら分からないわけだが。

「じゃあ、今朝はここまで！ 一旦集合しよう」

「……はい！」「……」

四人が集まったところで、高町隊長がバリアジャケットを解除して前に立つ。

「さて、皆もだいぶチーム戦に慣れてきたね」

「……ありがとうございます！」「……」

まあ、ここにくる前からチーム戦はやっていましたからね。と言ってしまうとなんだか高町隊長がいたたまれないような気がしたのでやめておく。

「……あれ、スバル。なんか焦げ臭いんだけど」

「え？ ……あ、ローラーが煙を」

それどころかなんだかバチバチ言っているローラーを見て、私は思わず頭を抱えてしまった。

やっぱり、あのスパイダーウェブランページについていけるほどの耐久性は残っていなかったらしい。あれやった翌日は必ず事務仕事入れてもらって、何とかやってきてたからよかったけど、ここではそうは行かない。ローラーもそろそろ取り替えないとまずいな。

ローラーブーツはスバルの自作だけど、私の意見なんかも色々入っているし、大きく取り替えるときには私が行っている。無論、整備はスバルがやっているわけだけど。

しかし、私のローラーブーツもそろそろ新しいものに変えたいな。加速性能が私の動体視力に追いつかなくなってきたている。

「シャミルの銃は大丈夫なの？」

「私のは大丈夫よ。ちよつとやさつとじゃ壊れないわ」

むしろ、これが壊れる環境では私は生きていけないだろう。それほど頑丈に作ったのだから。

「皆、訓練にも慣れてきたし……、そろそろ新デバイスが必要かなあ」

「新デバイス、ですか」

……まさか、主戦力が変わるわけじゃないわよね？

「ふーっ、きんもちいー!」

「スバル、あんまり煩くしないでね」

「あはは……」

訓練が終わってから、私達は一度宿舎に戻ってシャワーを浴びていました。

こんにちは、キャロです。

高町隊長の訓練ははつきり言ってしまうえば温いわけですが、まあ少しの休暇期間という事で楽しませてもらうことにしました。あ、これはオフレコですよ？

エリオは男の子なので男性用のシャワー室の方で一人でシャワーを浴びています。

粗暴な振りをしてるけど、結構紳士なんです。エリオは。

「それにしても、新デバイスねえ……。スバルのローラーはともかく、私のは別にいいんだけど……」

「そのことなら多分大丈夫ですよ。渡されるのはほとんどがスペアデバイスのはずです」

「ん、何で知ってるの?」

「あれ、言っていますんでしたっけ。私とエリオ、それにティアお姉ちゃんはフェイトお姉ちゃんと実質的な家族なんです。宿舎に入るまでは一緒に住んで一緒に生活してましたから」

「ああ、なるほど。それで、ほとんどってのはどういうこと?」

「スバルのローラーシューズは、さすがに新しいものになると思います。その設計はフェイトお姉ちゃんじゃなくてシャリオ一等陸士だと思えますけど」

さっきの訓練の時に呼び捨てでいいと言われたので、こうして呼

び捨てにしてみる。

違和感は少しあるけど、呼んでいるうちに消えるかな。

「ってことは、ライト隊はほとんど身内ってこと？」

「そうなりますけど、下手な部隊より厳しいと思いますよ。フェイトお姉ちゃんは、仕事には厳しい人ですから」

「……まあ、あのランスター教官の姉というぐらいだから、ねえ……」

「まあそういうことで、あんまり心配しなくても大丈夫ですよ」

「そう、ありがとうねキャロ」

「いえいえ」

でもまあ、この人たちとなら巧くやっついていけるかな。
頑張ろう。

「…………おせえ」

宿舎の階段で、俺はフリードと共に女子勢を待っていた。

大体、女子ってのは風呂と買い物にどうしてあんなに時間を掛けるのか…………。

「お前もそうおもわねーか？」

「キユクウ？」

「……だめかあ」

横にいたフリードに話しかけてみたが、まあそついう返事だった。
……なげえなあ。

60話 シュートイベーション(後書き)

次回、ファーストアラート。

61話 リニアレール奪還作戦（前書き）

原作とはちょっと事件発生のにずれが生じています。

61話 リニアレール奪還作戦

呼び出しである。

もっというなら出動である。

レッドアラート、要するに出動命令、デバイスルームに向かつていた俺たちは、進路を変更してヘリポートへと駆けていた。

「来たな！ 隊長は乗り込んで、急げ！」

「了解！」「」「」

ヘリパイロットであるグラントニック陸曹に急かされ、すぐに輸送ヘリへと乗り込む。

中には既に姉貴と高町隊長、リイン曹長が待機していた。ついでに銀色のスーツケースのようなものも積まれているのが見える。

全員が待機したことを姉貴が陸曹に知らせると、ヘリはすぐさまその場から飛び立っていく。

「では任務を伝える」

ピリピリという空気を纏った姉貴の言葉が、ヘリの中に響き渡る。普段はのほほんとしている高町隊長が……、何故か困惑していた。いや、いつもこんな感じじゃないのか？

「我々はこれより、山岳リニアレールに積載されたレリックの回収に向かう。ただし、リニアレールはガジェットに襲われており、予断を許さない状況だ。ガジェットに制御を奪われたリニアレールの奪還とレリックの回収、それに伴ったガジェットの全機破壊が今回の任務だ、質問があれば先に済ませる」

「ちなみに、私は現場に降りて管制とリニアレールの制御奪取を行

います」

普段の穏やかな笑みはなりを潜め、姉貴は隊長としての威厳と風格を持つて言う。ライン曹長も若干ビビッているらしく、言葉遣いは堅かった。

訓練ではない、死の危険のある任務を言い渡された俺たち四人は、その場の空気に飲まれないようにしながら心を落ち着ける。実戦はこれが初めてでなし、緊張する理由などなかった。

「リニアレールは何両編成ですか？」

「一二両編成だ。レリックは事前の申告から七両目の重要貨物室に保管されていることが分かっている。ほかには？」

「いえ、ありません」

「こちらと同じくです」

シャミルとキャラが答え、各々戦闘準備へと取り掛かる。

と、そこで姉貴がおもむろにスーツケースを開くと、中からブーツを取り出した。スバルの使っているローラーブーツにそっくりなそれを、姉貴はスバルへと投げ渡す。

「ナカジマー等陸士、先にこれを渡しておく。そのローラーブーツでは戦闘に支障が出るだろうからな。今日渡す予定だった新型だが」
「あ、ありがとうございます隊長！」

「ただし、デバイスはデバイス、戦うのは自分達だ。手足のように思うのはいいが、もがれることのない様にしろ」

「は、はいっ！」

「うわっ、こえー……」。

普段の任務よりも怖いぞ姉貴。気合入ってるな……」。

「陸曹、現着まで後どれくらいだ」

「三分かかりませんよ」

「各員、バリアジャケット展開。ライトニングは最後部から、スタ
ーズは最前部から七両目へ移動、くれぐれも単独先行は慎むこと。
高町隊長、そちらは頼みます」

「う、うん！ まかせて！ 皆、ちよつとハードな初任務だけど、
ズバツとやっつけてすぐに終わらせちゃおう！」

「了解です」

「はあ」

「はいっ！」

堅い挨拶は俺とシャミル、間の抜けた声はキャロ、最後の気合が
入った声がスバルだ。

「ってーか、遠足の引率じゃねーんだから、もうちよつと緊張感持
ってもらってもいいと思うんだけどなあ……。
考え方の違いって奴かね。」

「そろそろ現場です！」

「後部ハッチ開いて。先に空から降りて、着陸ルートを確保する」
「了解っす！」

グラントニック陸曹がその言葉を返し、輸送ヘリの後部ハッチを
開く。

「ごあつ！ と凄まじい風がヘリの中へと舞い込んできた。

「四人とも、油断だけはするな。互いのカバーを忘れずに動け。エ
リオ、キャロ、万が一の場合は力を惜しむな、命を惜しめ。いいな」
「了解！」「了解！」

「では、先にいく。バルディッシュー！」

「Yes sir」

バリアジャケットを展開し、戦闘準備を整えた姉貴はそのまま空へと身を投げ、次の瞬間には視界から消え去った。相変わらずのスピードである。まったく。

それを追いかけるように高町隊長が後部ハッチから飛び降りたが、バリアジャケットは展開されていなかった。と思いきや、空中でバリアジャケットの展開を済ませる隊長。……危険すぎるだろ。

バリアジャケットの展開中だって無敵になるわけじゃない。むしろ無防備になって一番危険なときだ。

それを敵の刃が届く空中で行うとは……、一体何を考えているやら。

「よし、まずは最後部からか。ライティング隊、準備はいいか!？」

「はい!」

「大丈夫です!」

「うっし、んじゃ行ってこい!」

「くれぐれも気をつけてくださいねー!」

陸曹&曹長の掛け声と共に、バリアジャケットの展開を済ませた俺たちは出来うる限り接近している車両へと飛び移る。

かなりのスピードで走っている、と言うか暴走しているリニアレールは、ぎりぎり飛び移れるレベルでの走行を続けているようだ。脱線するのも時間の問題だろう。

ちなみに、バリアジャケットは戦闘の邪魔にならないように最低限の布と防御用のフィールドになっている。黄色と黒を基調にしたものだ。キャロも同じだが、若干布の部分は多い。

「よつと。んで、屋根はぶっ壊してもいいんだよな?」

「そうじゃないと入れないでしょ。フリード、プラスチックフレアで屋根を破って」

「キユクルー！」

キャロの指示で、足元の屋根へと炎弾を放つフリードリヒ。炎を受けた屋根は容易に融解し、俺たちが通るに十分すぎる穴となった。そこから車内へと侵入した俺たちは、目の前でたむろするガジエットの姿を確認する。

訓練の時に出てきたあれと同じ形、縦に引き伸ばされた楕円形の機械たちは、揃ってこちらを見つけたかと思うと、うじゃうじゃと群がってくる。

「こりやすげえ。くず鉄の風呂が作れるぜ」

「飛び込んだらきつと湯船が血で満たされるね」

「で、分担は？」

「フリードで迎撃するから、一掃よろしく」

「へいへい」

片手で自分のデバイスである『キリングランス』をくるくると回しながらその声を返す。

俺たちはある意味一対だ。キャロが守り、俺を支援し、そして俺が敵を殲滅する。フリードは、遊撃か？ まあいいや、そういう関係でもある。

キャロも既に『アルカディア』を両手に備え、いつでもいいとばかりに戦闘開始の合図を待っていた。

「うし、んじゃ」

「

黒と赤で彩られた細身の槍を構え、突撃姿勢をとる。

「開幕だ」

直後、俺は黒き風となつてガジェットたち目掛け跳んだ。

ライトニング隊の二人が跳んだ後、私達スターズ隊もヘリの中でゴーサインを待っていた。

それにしても、何故副隊長はでてこないのだろうか。人員少ないんだからケチってる場合じゃないでしょうに。

というかこの部隊に入つてからずっと思っていたけど、たった四人しかいない分隊って意味ある？ どうして複合した一つの分隊にしなかつたんだろうか。

「よし、そろそろだぞ。準備はいいか!？」

「はいっ」

「オツケーです!」

突然響いた陸曹の声に、体へ緊張を走らせる。

ぼさつとするな、油断は死だ。死神と友達になるのは少なくとも七〇過ぎてからにしたいんだから。

一度閉じた後部ハッチが再度開き、私たちの眼下にはリニアレールの前方部が露わとなった。

「リイン曹長、現場管制お願いします」

「はい。二人とも、あまり無茶はしないようにしてくださいね」

「了解です」

「はいっ！」

小さな姿のライン曹長と共に、できるだけ近づいたりニアレールの前方部へと飛び降りた私たちは、その場でデバイスを構える。どうやら外にガジェットは出ていないらしく、敵影は確認できなかった。

「ライトニング03、04、聞こえますか？」

『あいあい、聞こえてます！』

『こつちも大丈夫です！』

「こつちでモニターして管制を勤めます！ できる限り迅速にガジェットを殲滅して、レリックを確保してください！」

『了解』』

手早く指示を飛ばしたライン曹長は、そのままこちらへと向き直る。

「二人はここから下に入って、ガジェットの殲滅をお願いします！」

私はその間に先頭端末から内部のシステムを掌握します！」

「了解しました！」

「気をつけてくださいね、ライン曹長！」

「自分の身は自分で守れるですよ！ では、作戦開始です！」

小さな体に似合わぬ大きな勢いを持って、ライン曹長はそう宣言する。

次の瞬間、スバルが拳を屋根へと叩きつけ、下にいたガジェットごと屋根を吹き飛ばす。それで開いたどでかい穴を通り、私達は下へと降りた。

「とつとつと殲滅するわよ、スバル！」

「了解！」

さて、初仕事だしうまくやりましたか！

「斬る……っ！」

加速した斬撃によってガジェットを斬り裂き、一息つく。

こつちに来ていたガジェットはこれですべてだろう。なのはがうまくやってくれているれば、後はリニアールとレリックを奪還するだけだ。

ただ、レリックが吹き飛ばなければいいが。

「バルディッシュ、マップ」

バルディッシュに命じてリニアールの内部構造図を開く。

空を飛び、リニアールに近づきながら、私はそれを綿密に眺める。

今回の作戦、単純に中央へ詰めていくだけ、と言うわけにはいかないだろう。あまり時間を掛けてしまえば暴走した車両が脱線する危険性もあるし、もっと言えばガジェットに反応してレリックがこちら一体を吹き飛ばしてしまう危険性もある。

迅速且つ確実にガジェットを破壊し、車両のコントロールを奪取、レリックを回収しなければならぬ。

新人四人は、既に新人とは呼べない状況判断能力と戦闘力を持っているから、殲滅は問題ないだろう。コントロール奪取も、リインフォース？曹長なら十分すぎる。

残りのレリックは時間との勝負だ。気合を入れていかないか。

そう考えていると、突然別の方角から爆音が響く。……なのはか破壊するのはいいけど、あんまり飛び回ってしまつと回収するときに手間がかかる。それをあの子は分かっているんだろうか。

小言を、というか愚痴を言われるのは私なのだけど。近しい人物的な意味で。

「さて、とつとと加勢に行きましょうか」

バルディッシュを構え直し、モノクル型デバイスでサーマルセンサーを起動させる。

さて、行きますか。

61話 リニアレール奪還作戦（後書き）

活躍の舞台を増やしたかったり、強い人間を遊ばせておかないために分隊を二つにしたんでしょうが、ならもうちよっと人員増やせよ、と。4人しかいない分隊二つだけが唯一の実働部隊ってまじいんじゃないですかね。

62話 リニアレール戦(前書き)

夏休みも明けて、更新スピードは激遅に戻ります！
申し訳ない！

62話 リニアレール戦

「これで……、最後っ」

爆音を響かせ、楕円形のガジェットが爆散する。二両目制圧完了だ。

焼け跡に残った鉄杭を回収すると、普段から持ち歩いている小型のポーチにそれを放り込む。

使用した弾丸の中で、損傷したものは後でデバイスルームに送って修復してもらうことになっている。もちろん費用は経費だ。

「結構倒したね」

「油断しないでよ。気づいたらあの世逝きなんてシャレにならないんだから」

「わかってるー」

互いに軽口を叩き合いながらも、周囲への警戒は緩めない。人の気配はもちろんしないが、ガジェットの駆動音も途絶えてはいなかった。

マガジンを抜き出し、予備のマガジンを抜き出すと再び銃へ収める。装弾数は一五発、替えのマガジンは片手三本。今ので半分近く消費したから、残りは替えマガジン含めて五二発。両手合わせて約一〇〇発前後だ。

少々心許ないが、細かい拳動を必要とする車内では重武装することとは命取りとなることもある。

「よし、次行くわよ」

「オツケイ」

数秒の息抜きの後、再び意識を戦闘用に切り替えると、頭から三両目へと突入する。

突入した直後、気味の悪い黄色のカバーに覆われたカメラを光らせた、楕円形のガジェットが揃ってこちらを見る。うじゃうじゃいるから余計に気味が悪かった。

生理的嫌悪すら漂わせるそれへ向けて、挑発するように一発撃ち込む。ガシャン、とカバーごとカメラが叩き割られ、直後に爆散した。

「スバル！」

「おう！ ウィングロード！」

向こうが攻勢に出る前に押し切るべく、スバルに指示を出す。

スバルは地面にデバイスを装備している方の腕を叩きつけると、青色の帯のような道を空中へと走らせる。その途中にいたガジェット数体は、AMFを発生させる間もなくウィングロードによって押し潰された。

同胞を破壊されたからなのか、それとも緊急の対策マニュアルが何かに沿って行動したのか、ガジェットは一斉にAMFを発生させてウィングロードを消滅させる。相変わらず出鱈目な出力だ。足しているのではなく相乗しているんだろうか。

ガジェット相手に市街戦は何度か経験しているが、こんな閉所での経験はない。注意していかなければ。

「突っ込みなさい、援護するから」

「りょーかいっ」

いつも通りの指示を出し、スバルもそれを了解する。

スバルの頑丈さは私が一番よくわかっているし、相手の戦力を見てもダメージは出ないだろう。相手に増援が来れば話は別だが、そ

の時はその時で対処する。

キャロのブーストがあれば楽になっただろうが、無いものねだりをしても仕方ない。

スバルを横から襲おうと触手を伸ばすがジェットに銃弾を叩き込みながら、周囲を警戒しつつスバルの後に続く。

スバルの通った後はもの見事に機械の残骸が晒されている。これでは解析は無理だろうというレベルに破壊されてしまっている。

ものの数分で車両を制圧した私たちは、周囲を警戒しながらも弾丸を回収、次の戦闘に備える。

マガジンを一本ずつ使ってしまったから、すでに七〇発とちよつとまで弾丸が減ってしまっている。強力なジェットが出てきたりすればかなり危ないだろう。

そんなことを考えながら、通信回線を開いて作業中のリイン曹長へ連絡する。

「リイン曹長、三両目まで制圧完了しました」

『お疲れ様です。こっちはようやく半分セキュリティを突破したところですよ。もう半分を突破すれば後はちよちよいのちよいなので、リニアレールの進行については心配いりませんよー』

「了解しました。では、引き続き七両目を目指します」

『はい、怪我しないように気を付けてくださいねー！』

三両目を制圧したことをリイン曹長に報告すると、リイン曹長はそんな声を返してきた。さすがユニゾンデバイス、電子機器に対しては恐ろしい強さだ。

「スバル、いける？」

「もちろん！ まだまだ平気だよー！」

リボルバーナックルを付けている方の手をぐっと突き出して言う

スバル。この分なら大丈夫そうか。

しかし気を抜けば終わる。何が起きるかわからないんだから。

「……よし。いくわよスバル」

「おう！」

とつとと終わらせたいわね。

「そおりゃあつ！」

キリングランスを一閃、前方のガジェットをまとめて破壊する。
若干壁が切れたが、その辺は勘弁してくれよな。

とりあえず、これでケツから五両目までを突破したわけだ。レリ
ツクはもう目と鼻の先。

「エリオ、大丈夫？」

「ああ、この位じゃへましねえよ。そっちこそへばんなよ？」

「もちろん」

なーんて喋ってると出てくるんだな、これが。

上空からいきなり何かが屋根を突き破って、轟音立てて降ってきたかと思いきや、いきなりこっちに太いコードの束のようなものを叩きつけてくる。急すぎだろ！？

「っ、フリードリヒ解放！ ブラストフレア！」
「キユクルー！」

咄嗟のキャロの指示に従って、フリードはそのちっこい体を変化させ、元のでかいワイバーンの状態に戻って炎の球を煙の中の何かに吐き出す。

この状態がフリードの通常状態。普段のフリードは周囲に被害を出さないためと省エネのためにちっこくなっているわけだ。

まあそれはいい。どうやらフリードの炎は表面に当たっただけが、すべるように弾かれた。どうやったんだこいつ……。

「フリード、風を起こして粉塵を外に！」
「きゅくー！」

キャロの指示でフリードがばさばさと羽を動かすと、その風圧で粉塵が天井の穴から外へと吐き出されていった。

それにしてもフリード、お前やっぱり声変わらないんだな。

「って、丸……？」

「新型かな。CP、聞こえますか？」

『はい、こっちのモニターでも確認しました！ 以後、その機体はガジェット？型と呼称します。機能は不明、十分注意して戦闘を行ってください』

「了解です」

CP、コマンドポスト。要するに指揮所だ。この場合はオペレーターシヨルムだ。

話していたのはおそらくシャリオ一等陸士だろう。なるほど、新型か。

「AMFはあるみたいだけど」

「関係ねえな。ぶち抜きゃぶっ壊れんだろ」

キリングランスを構え、突撃姿勢をとる。

向こうはこちらへ触手状のコードの束を伸ばしてくるが、全てフリードのブラストフレアで叩き落されていた。

「アルカディア、さっきと同じで」

「Yes sir」

直後、さっきまでかかっていた強化魔法一式が俺にかかる。装甲はそれほど厚くない、一撃でぶち抜ける。

そもそも、この程度の相手に梃子搦っていたら、また姉貴にしかかれるからな。

ぐっ、と足に能力を込め、一息。

「ハッ！」

裂帛の気合と共に吐き出し、その一撃をまん丸の？型へと叩きつけ、そして捻じ込んだ。

ガギヤ、ガギギツ、と金属同士の擦れ、捻りねじ切れる音が響き渡り、不意にそれが止む。

その刹那、バックステップした俺の目の前で、まん丸が盛大に爆発していた。

「……よし、いくか」

「被害報告増えたね」

う、うるせえ！ わざとじゃねえよ！？

上空から大き目の爆発を確認した私は、そのまま車両と並走を続けながら周囲を警戒する。

今のはおそらくエリオだろう。フリードがあればほど大きな爆発を起こすのはここでは有り得ないし、キャロもやらないだろうし。大方ガジェットに攻撃したときに起きたんだろう。

……いやな感じだ。何か、迫ってきているような。

「みいつけた……」

ぞわりと、背筋が怖気立つ。

全身を舌で舐め上げられたような不快感が襲い、即座に臨戦態勢へと切り替えた。

その視線の先には、全身を黒いコートで覆った何者かが、浮かんでいた。感覚で分かる、魔術師だ。この粘つくような魔力は好きになれそうにないが。

「【奇学】のトコのおちこぼれ、魔導師ってアンタよね？」

「魔術師が何の用だ？」

「いやあ、お仕事よお仕事　レリックって宝石を回収するんだけど……、ついでにちよっかい出してきていいらしいからさ。遊ばない？」

「……生憎と、レリックは我々が回収する手筈になっている。貴様

のような危険な者に渡すわけには行かない」

話の途中から、魔力が膨れ上がった。

これは、戦いは避けられないらしい。

「そっかあ。じゃあ……、おつチネ人間ッ！」

言葉と共に繰り出された風の刃を横にずれることで回避すると、静かに魔力を循環させる。

この程度の魔術なら十分対処範囲内だ。だが、油断するな、相手は魔術師。奇策も鬼策も相手が本業だ。

「おや、避けた？ 凄い凄い、不可視の刃を避けられるんだね！」

無邪気に喜ぶ黒いコートの女。声からして女性だろうが、年齢は不明だ。声の感覚が聞く度に変わってうっとおしいといったらない。なんだか無性に人のイライラ感を逆撫でする奴だ、ぶん殴りたくなってくる。

……よし、落ち着け私。今はちょっとまズいだろう。なんかこう、キャラ的に。私そっというキャラじゃないから。

「でもとりあえず殴らせろ」

「にやっ！？ は、速いねおねーちゃん！」

「な、避けた！？」

「速さ勝負？ なら負けないよ！」

加速魔術で呼吸の死角に紛れて接近したと言っのに、その私の拳を回避した……。

……これ、かなり面倒な相手に目を付けられたみたいね。ガジエツトが湧いてこないことを祈る他無いか。

62話 リニアレール戦(後書き)

哀れ?型。そして新たな敵さん出現。

63話 作戦終了(前書き)

大変遅れました。

うーん、やっぱりISの方が早く進んでしまっ……。

63話 作戦終了

時空管理局、無限書庫。

その中で、一人の青年が溜息をついていた。

「いや、来るのはいいんですけどね……。どうせ僕の家泊まるんでしょ？」

ユーノ・スクライア、若くして無限書庫の司書長となり、そこに収められている膨大なデータを完全に把握しきっている、若き天才。何事にも動じず、不敵に笑って事件を解決してきた彼が、諦めの境地に至ったような溜息を吐きだしているのを、司書たちは信じられないような目で見ていた。

「……え、それはマジの話ですか？ ……わかりました。じゃあ準備はしておきますから。ええ」

怪訝な表情を浮かべたユーノだったが、通信相手の言葉を聞いて真剣な顔つきに戻ると、小さくうなづいて通信を切断した。

近くの椅子に座りこむと、また小さく溜息を吐きだす。

「あー、副長。お茶を汲んできてくれないか？」

「はい、只今」

いつの間にかそばにいたオルタに声をかけると、彼女は礼儀正しくお辞儀をしてから給湯室へと入っていく。

それを見送りながら、彼は巨大な嵐が刻一刻と近づいていることを感じていた。

眉間を揉んでいる彼に、一人の司書が尋ねる。

「あの、司書長。さっきの通信相手の方は一体……？」
「ああ、僕の師匠だよ。今度こっちにくるらしいんだ」
「それで、なぜそんなに疲れたような……？」
「……いろいろすごい人だからね、うん」

疲れきったような様子のユーノに、司書はそれ以上声をかけられず。

結局、無限書庫の稼働率はその日初めて、八〇%を下回ったという。

「僕は、連絡係じゃあないんだけどねえ……」

肌を走る風の靡きを感じながら、数ミリのところでカマイタチを避けていく。

戦闘が始まってから二分強、交わされた刃の数は三〇〇を優に超えているにも拘らず、互いの肌にも服にも切り傷一つついていなかった。

そのことが頭に浮かび、振り払うように再び鎌を振るう。ブオン、と『魔力』で形成された刃が音速など軽く超える速度で目の前の女へと走り飛んでいく。

「おほほ、速いはやーい！」

「避けてんじやねえよクソがッ！」

口調が荒いのは勘弁して欲しい。とにかくふわふわと避けられる上に、こっちはあまりおっぴらに魔術を使えないのでイライラするのだ。

足止めならそれでもいいが、生憎コイツがこのまま列車に突っ込んでいけば被害が出るのは免れない。少なくとも手負いにして追いつ返すくらいはしておきたいところだった。

「おちこぼれって聞いてたけど、それなりにできるんじゃない。もうちょっと遊ぼうか！」

「こっちはとつとと切り上げたいんだけど？」

「アハハ、ごめんねー！ それ無理だしっ！」

三つのカマイタチが発生し、一瞬でこちらへ接近する。肉薄したそれを寸前で全て回避すると、お返しとばかりに斬り込む。が、それは当然のように避けられた。くそつたれ。

それにしても、この目的が分からない。魔術師なんて大体そんなようなものだが、はて。

ともかく、考えている暇はなさそうだ。早急に片をつけねば。

「カマイタチ、一〇爪！」

考えていると、突然今までは違う魔力がこちらを襲う。

咄嗟にジグザグに宙を飛びつつ半分を避け、もう半分を叩き落とすと、再度声のした方へと目を向ける。

そこには、ハイテンション女と同じく黒いローブを纏った何者が浮かんでいた。

「何を遊んでいる」

「いやあ、あの落ちこぼれちゃんにちよっかい掛けたんだけど、意外と強くてさあ」

「最初から殺せばよかっただろうに。とっととレリックを回収するぞ」

「はいはい」

私を無視してべらべらと……、いい度胸だなこいつら。

しかし力はある。二対一では勝つのは厳しいだろう。どうするか……。

「あなた達は誰ですか!？」

「っ、高町隊長!？」

突然聞こえた声のほうに視線を移すと、あの二人の向こう側になのが浮かんでいた。

な、なんでなのはここに!？ 担当区域は向こうだったはず!

「ああ？ あー、あの高町かあ」

「殺すなよ。面倒だ」

「わかってるよう」

「その二人、武装を解いて投降してください!」

あのバカ、現状がわかってないのか?!

あの二人はただでさえ強いことはよくわかる、なのはでは勝ち目がない。

とっととレリックを回収して帰還しなければ……!

『全隊に通達！ 至急レリックを回収してそこから脱出しろ！ 空で緊急事態が発生した!』

分隊全員に連絡を飛ばし、それから鎌を構え直す。
ヘリには今ので伝わっただろうから、全員の離脱が完了するまで
ここで粘ればそれでいい。

「というところで、お前たちは足止めさせてもらう」

「……面倒だな。私はレリックを手に入れてくる。お前はこの二人
を止めておけ」

「はいはい、わかったよう」

「ま、待ちなさいっ！」

直後、後から来たやつが突然大量の魔力を開放する。

右手を突き出し、上へ。魔力が徐々にその開いた掌へと集まって
いく。

まさか、撃つ気が！？

「この程度ならば爆発はしまい。悪いが、周囲だけ消し飛ばさせて
もらうぞ」

「貴様アアア！」

「おっと、君らの相手はあたしだよん　　ツシャア！」

加速して突っ込んでいった私と、留まっているなのは目がけて放
たれたカマイタチだったが、その量も質も、今までのものとはまる
で違うものだった。

かろうじてバルディッシュの刃でそれをいなしながら、魔力を溜
めている黒ローブ目がけ魔力で編んだ刃を振りぬく。

風を切って突き進むそれは、あろうことかやつに当たる前に何か
に阻まれて霧散した。

「障壁………！」

「では、行くぞ」

その言葉とともに、やつがその手をリアールの方へと向け。

そしてそれは、朱色の砲撃によって相殺されることとなった。

「誰だっ」

「あれって……、まさか……!!」

「咎人、クレア・アンダーソン。ならばにシュガ。ようやく見つけましたよ」

なのはにどこか似た顔に声、そして凜としたその雰囲気。

その腕に嵌められている黒曜石のような色をしたバングルが、独特の光を放つ。

「何者だ？」

「シュテルと申します。以後お見知りおきを。フェイト、無事ですか？」

「ど、どうして貴女が!？」

「仕事です。ユーノを通じて地上本部には話通っていますから」

目に見えるほどの魔力の高まりを感じてか、クレア、シュガと呼ばれた二人の体がやや強張る。

強い。シュテルはもっと強くなっている。一体どれほどの苦行を積みめば、これほどの境地に達せられるのかというほどに。

「さて、それでは早々に片をつけてしましましょう」

「ちっ、こいつ相手では分が悪い。シュガ、引くぞ」

「ええーっ!?!? ちょ、まってまってーっ!」

さらに魔力を膨れ上がらせたシュテルを見て、クレアは即決するとシュガを引き連れて姿を消してしまった。

……助かった、のかな。

『全隊へ通達、こちらの危機は何かあった。各自、落ち着いてレリックを回収、帰投せよ』

とりあえず連絡を送ってから、シュテルへと近づく。すると、シュテルはぎゅっと私のことを抱きしめてきた。

「久しぶりですね、フェイト」

「うん、久しぶり。っと、話したいこともたくさんあるけど、今は作戦行動中。事情も聴きたいから、一緒に来てもらえる？」

「わかりました。フェイト達に伝えるためのメッセンジャーでもありますから、願ったり叶ったりですね」

頷いた彼女と軽くハイタッチ。

ちなみに、なのははほとんど茫然としていた。

「なんだ、さつきから通信が多いな」

「あの魔力源二つは消えたけど、別の魔力源が出てきたみたい」

一体何があったってんだ？

ともかく、レリックはもうチョイで確保できるからとつとつとさせるか。

残っていたガジェットをまとめてぶち抜くと、その勢いそのままレリックのある部屋の扉をぶっ壊す。

それと同時に、部屋の向こう側の扉も開いて、シャミルとスバルが入ってくる。

「エリオ、キャロ！」

「そっちも無事みたいだな。とつとと確保しちまおう」

「私はライン曹長に連絡入れるね。スバルは周囲の警戒をお願いします」

「りょうかい」

それぞれ役目を確認すると、俺とシャミルがレリックの回収に当たる。

周囲を警戒しながらレリックケースを開封すると、中にはきちんと赤いレリックが保存されていた。

「ビンゴ」

「回収完了ね」

「列車のコントロール奪取、完了したみたいですよー！」

よし、これで仕事は完了だな。

レリックケースの蓋を閉じてきちんとロックすると、片手で持ち上げてから全員で部屋を出た。

五両目まで戻ると、丁度ガジェット？型がぶっ壊した屋根から上に飛び上がり、天井からへりへと飛び乗る。

「ご苦労だった。全員、怪我はないか？」

「はい、ありません！」

「よろしい。陸曹、帰還だ！」
「了解！」

ぐらり、と揺れてから隊舎へ向けてへりが進む。

あの、ところでここで座っている、高町部隊長に似た方は一体誰
でございませうか？

という疑問は、この静寂の中ではしてはいけない気がした。

63話 作戦終了（後書き）

まさかのシユテル登場。

次回から物語は原作から早くも乖離をはじめます。

64話 個別訓練(前書き)

何とか書き上がったので、とりあえず投稿します。

ISが完結するまではこういう風に非常に更新が遅れてしまいましたが、ご容赦のほどよろしくお願い致します。

64話 個別訓練

任務から帰還した一行のうち、ライトニング隊と一部の人間だけを集めたフェイトは、全員が集まったところで小さく頷く。

小さめの会議室に簡単な魔術結界を構築してから、中央に座るなのはに似た女性、シュテルが口火を切った。

「それは私から説明しましょう。私はシュテル、地球でフェイトと修行をしていた仲で、家族ぐるみの付き合いもあります。まあ、今回は仕事の話でやってきたのですが」

「向こうで何があったの？」

「率直に伝えましょう。二年前、ルルイエが消失したのは知っていますね？」

その言葉にフェイトが頷く。

二年前、狂気の海中都市ルルイエが消失した。誰に気づかれることもなく忽然と。

最重要警戒指定がされていたあのルルイエに忍び込むならまだしも、都市一つを丸ごと奪うなど正気の沙汰ではない。当時は頭を抱えたものだったが、それから二年が経った今になっても、まだ行方は掴めていない。

シュテルは、ややためらうような顔になり、それから仕方なしと言ふ風に息を吐き出して言った。

「つい先日、ここミッドチルダのどこかにルルイエが運び込まれていることが判明しました」

「なっ……！？ それは、本当のこと！？」

「彼の【終極の魔女】直々に調査して出た結論です、間違いはないでしょう」

シュテルの言葉に、フェイトは思わずうめいて頭を抱えそうになる。

しかし、シュテルもまた同じ心境ではあった。なにしろ、何が起きるかはまったく予測がつかないのだから。

「なので、私はミッドチルダを調査するために時空管理局のミッドチルダ地上本部に協力を要請しに来たのです」

「でも、シュテルってそんな地位にいたの？」

「正確には私がこうして交渉への道を作る役目を負っているのです。実際の交渉人はその後に来ます」

「誰が？」

「……【終極】と【獄熱】のお二人です」

今度こそ、フェイトは頭を抱えて呻く。

出てきた名は【魔女】のワンツ、自分など足元にも及ばない超VIPである。そんな相手がここに来るとは、むしろ恐ろしささえ感じる。

ちなみに、シュテルがこのミッドチルダへ転移したことが問題にならないのかと言えば、ならない。

何しろ、ミッドチルダを統括しているのは時空管理局であり、管理局は世界間での転移を個人で行える人間などいるわけがないと考えているらしく、そういった関連の法律は作られていないのだ。

尤も、普通に考えれば団体であっても人力で世界間転移など馬鹿げている。それだけ大仰なことだが、【魔女】によって送られれば問題なく辿り着けるのである。

「……はあ」

「溜め息は止して下さい。それで、フェイト。貴女確か、地上の事実上のトップとつながりがありましたよね？」

「はいはい、ちゃんと都合つけるから。それに、ルルイエなんて放置してられないしね……」

「隊長、俺たちが置いてけぼりですが」

「後で話す。キャラも」

ちびっ子二人が返事を返す。とにかく、頭痛薬の欲しくなったフエイトだった。

「……私は聞いてるだけねー」

ティアナ、出番なし。

「ちゆうことで、民間協力者のシュテルさんや。皆、仲ようしてな」

「シュテルです。至らぬことも多いと存じますが、よろしくお願い致します」

翌日。

シュテルの扱いをどうするべきかと考えた一行は、一応『魔法』も使えるシュテルを、民間協力者として戦力に組み込むことにした。もちろん魔術は秘匿されているため、シュテルの身の上は個人のプライバシーの名目で秘密となっている。そうしておけば、下手につついたときに故郷がどうか、親がどうかと言って煙に撒ける

からだ。

紹介を終えたシュテルはその後、新人四人の個別スキル訓練を見学することとした。

魔導師の戦力がどの程度のものなのか、今のうちに把握したいのだと言っ。

「で、ここにきたと？」

「はい。久しぶりですね。ヴィータ。背は……」

制服姿で『グラーフアイゼン』を担いでいるヴィータを見下ろして、小さく溜め息を吐くシュテル。

ああ、残念だね、見たいな感じで。

「オイコラ、何だ今の溜め息」

「いえ、残念な子だなあ、と」

「正直に吐露してくれてありがとう、潰すぞコラ？　っつーか私らはある程度自由に変えられるからいいんだよ！」

そう言つと、突然ヴィータを魔法陣が包む。

それが晴れると、そこにはシュテルと同じくらいの背になって赤い髪を伸ばしたヴィータがいた。

そもそも魔法によって構成されている彼女たちは主の承認があれば体のある程度自由に変更できる。

さすがにパーソナルデータの細部に絡む髪の色や目の色などの根本的なものは変えられないが、普通の人間が成長によって変化する身長体重などは変更できるのだ。

しかもおまけとばかりに胸が大きくなっている。シュテルよりも大きいことに気づくと、シュテルは拳をヴィータの眼前で寸止めした。

「その胸、挑発のつもりでしょうか？」

微笑んで言うてはいるものの、シュテルの表情は硬い。

対するヴィータは、あらかじめ寸止めすることが分かっていたようにニヤニヤと笑っていた。

「まだでかくなるぜ？」

「乳牛」

「凡乳」

「……やりますか？ いいですよ？」

「ハッ、グラーファイゼンの染みにしてやるうふっ!？」

「きゃっ!？」

「なにしとるんやあんたら……。スバルが困つとるやる!」

微妙な口論から物理的にスプラッタな痴話喧嘩に発展しそうになった二人をひっぱいたいたのは、遠くから姿を見ていたはやてだった。傍にはアインストツヴァイが控えているものの、どちらもどうするべきかわからずにおろおろと戸惑っている。

「けどよ、はやて!」

「邪魔しないでください。これはこの乳牛との女の戦いなのです」

「それ言うたらうちはどうなるん!？ その乳八割寄越さんかい!？」

逆ギレ気味に、というか逆ギレして詰め寄るはやて。そこに、揺れるものはない。

多少なりとも揺れるシュテルとボンキュッポンのヴィータは、その断崖絶壁に圧倒されていた。

主に「可哀想な子だな」という一点で。

「……うん、ごめん」

「……すみませんでした」

「……わかってくれたら、ええねん。うん、わかってくれたんなら、うん。……ええねん……」

はやての言葉には圧倒的なまでに覇気が足りない。

倒れ掛かってフラフラになっているはやてを、アインスが慌てて支えた。自虐は時と場合を選んで行わなければ、諸刃の剣を自分の『胸』に突き立てることになるという典型だろう。

真っ白になって去っていくはやての後ろで、アインスが軽く会釈し、掌サイズのツヴァイがお辞儀する。

「……よし、スバル。やるぞ」

「は、はいっ！」

しまらない訓練開始の様子を眺めながら、シュテルは次の場所へ向かうことにした。

ちなみに、ヴィータはなんとなくいたたまれなくなつて姿を元に戻している。スバルとしても、非常に違和感のある見た目だっただろう。

次にシュテルが向かったのはフェイトのところ。

既に訓練を行っていたのか、レモン色と金色、そして桃色の魔力光が入り乱れている。と言っても、大体はレモン色と金色で埋められているが。

「遅い、もっと早く！」

「はいっ！」

「キヤロは全体をしつかり視野に入れる！」

「はいっ！」

厳しくフェイトの檄が飛ぶが、当の本人はそこらじゅうを飛び回っているせいで視覚を強化しなければろくに見ることもままならない。

と言つても、別に口を出すわけではないのでポーッと見つめていることにした。

「高速移動は私たちのようなタイプにとって戦闘の要、そこに甘んじず技術を磨け！ キャロは、どんなときにも補助できるよう準備！」

「はい！」

「もたつくな！ 殺されたいか！」

(……うわあ)

あの優しいフェイトがここまで成長するとは、正直言つて思わなかった。

そんなことを思いながら、シュテルは次へ移ることにした。

なんとなく、蚊帳の外な感じがしたので。疎外感とも言つ。

そして、所変わつてなのはとシャミルの訓練では。

「このポイントで待ち伏せしたらこつちから撃たれません？」

「でも、ここ以外って言つたらこことここでしょ？ リスク計算したらこのポイントが一番じゃない？」

「ですけど、それは2Dで計算した場合じゃありませんか。3Dマップで表示すると、このポイントって上下からも撃たれやすいんですよ」

なんかスナイパーみたいなことを口走っていた。

なんだこいつら、と思つたシュテルだったが、あえて口には出さずも少し観察してみることにする。

「うーん……、じゃあ回避訓練やってみる？」

「回避訓練？」

「そう。シャミルはスナイパータイプじゃないし、私みたいに砲撃撃つタイプでもない。シャミルのスタイルでセンターガードをこなすなら、相手の攻撃を掻い潜って指示を飛ばすくらい出来ないか、厳しいかもしれないね」

「望むところです。よろしくお願いします、一等空尉」

なんだかとおつても朗らかな雰囲気の話し込んでいた。

その様子が、なんともしュテルにとっては感慨深い。なにせ、魔法一本に傾倒していると聞いていた高町なのはが、ああして他人に魔法以外のことを教え導いている。

たとえ直接の関わりがなくても、自分の元になった人物だ。少しくらい、評価を上方修正しても許されるだろう。

そんなことを思いながら、シュテルは隠れて二人の訓練を見つめていた。

64話 個別訓練（後書き）

まさかのなのは頭脳派。いえ、脳筋ですけどね。

とりあえずポジションに縛られず、適正に合わせて訓練メニューを組むことは出来るようになりました。

原作でのティアナも、明らかに立ち止まって攻撃したりするタイプじゃないもんなあ……。

ちなみに、ヴォルケンリッターの身体情報変更はオリ設定のはずで
す。

原作にはそういう設定はない、はず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1155n/>

魔法少女リリカルなのは 月村の魔女 ~ 転生者の宴 ~

2011年12月29日01時34分発行